昭和六年二月十日印刷
昭和六年二月十五日發行

國譯一切經 密教部 二

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝｛二一一六番 三〇一四〇番

製本所　兩角製本所

索　　引

（頁數は通頁を表す）

— 密教部二索引終 —

き已つて、大了悟を得、諸の供養を作し、勝園林の寂靜方所に於て自ら安住す。若し諸の成就を求むる者は如上の說によつて、飲食衣服及び諸の法具を以て淸淨莊嚴し、常に禮敬を修し、悉く如來廣大成就を獲よ。

爾の時金剛藏菩薩、灌頂の四種伽陀を說いて曰く、

善い哉金剛阿闍梨、　普く諸學をして攝受せしむ、　大金剛大妙鈴を執し、　金剛大壇界に安住せり、　我が祕密を以て諸の頂に灌ぐ。　灌頂に由るが故に心所持は、　佛菩提大導師の如し、　無邊の眞法子を成就す、　哀愍せよ、哀愍せよ、大薩埵、　極哀愍の故に、供養を受く、　善巧無邊の色相中、　其の意樂に隨つて皆圓滿す、　金剛輪圍は虛空の若し、　諸の塵染を離し、　水體淸淨なり。　是を慈父の解脫門と稱す、　斯の大智中少分を希ふ。

加持金剛蓮華眞言に曰く、

[二] 唵引鉢訥摩二合蘇珂引馱引囉摩訶引囉引誐蘇麤捺捺拶䚢囉引喃捺娑引摩葛尾說吽引吽引歌哩也酤嚕薩嚩二合彌唵引嚩惹囉二合摩訶引按奴回切沙拶䚢囉引難捺拏引野各渴誐目鎧葛囉素引那引他吽引吽引歌引哩閣二合酤囉薩嚩二合彌尸囉細唵引歌引嚂緊拶梨計二合阿引歌犖力角切

[三] 復伽陀に說いて曰く、

若し空智を知らずば、　超勝諸儀軌に、　染欲心を希求す、　世間の輪轉に順じ、　彼彼部出生して、　諸色相隨現す、　是の故に瑜伽者は、　供養し悉く明了し、　親近の一切の若く、　彼は吉祥を成就し、　大深心に廻向し、　自他俱に利樂す。

大悲空智金剛大敎王儀軌經（終）

【二】Oṃ padma. sukhādhara mahārāgha. Sukhandha daṣa durānanda svāhā. gabi-śva(?) hūṃ hūṃ garyaṃ kuruṣvami.
oṃ vajra mahādveṣca durānanda dāsakaḥ kha ga mak-hiṃ(?) karonitha. hūṃ hūṃ hūṃ gārya kuruṣvami.
oṃ āḥ hūṃ.

【三】 復伽陀以下西藏譯欠。

衆生・輪廻及び佛・彼岸は體無二の故に。復次に我が所說を聽け、祕密乘に於て行相を出生す、謂ゆる信愛の眼は卽ち大悲の所生、身黑色は慈心の所現、四足は四攝事の所生、八面は八解脫の所生、一十六臂は一十六空の所顯、五印は卽ち五如來の所生、忿怒相は摧伏諸難調者の所起。乃至皮・骨・脂・肉・血脈等の相は卽ち四明妃、七等覺支及び四眞諦の[四]所生なる諸の八部眞言に曰く。

[五]唵引阿吽引發吒半音薩嚩引二合賀

[一]持念品第十九

復次に、金剛薩埵、諸法律儀を說き境界を持念す。我今開示す、禁止法は乳汁を用ひ水精を以て念珠となし。信愛法は瑿拏摩藥を用ひ、赤栴檀を以て念珠と爲す。二種の降伏法は並びに、悉羅訶香を用ひ、木槵子、或は水牛の角を以て念珠と爲す。忿怒法は白米飯を用ひて、眞珠を以て念珠と爲す。鉤召法は四種の妙香を用ひて、未囉多木を以て念珠と爲す。發遣は麝香を用ふるか、自ら出入息を止め碼碯を以て念珠と爲す。又求兩法及び忿怒法は並びに眞珠を念珠となす。

[一]俱生義品第二十

復次に、此の薩埵部中に安住す、是れ謂ゆる八輻輪なり。或は般若波羅蜜多梵夾に成就を求めん者は、無名指節を九鈷杵の如くす。黑色相は阿閦如來部に於て本尊と爲す。手は輪相の如し、大白色は毘盧遮那如來部に於て本尊となす、蓮華文の如し、紅色相は無量壽如來部に於て本尊となす。寶劍相の如し。大綠色は不空成就如來部に於て本尊と爲す。妙寶珠の如し、金色相は寶生如來部に於て本尊となす。淡黃色は金剛薩埵部に於て本尊となす、瑜伽を修する者、或は是の相なきものは、大知見を具し、慈心相應して悔慢を生ぜず。卽ち諸の如來の建立する所なり。時に無我菩薩是の說を聞

【四】 西藏譯(348a7—350a3)。漢譯欠。
【五】 Oṃ ā hūṃ phaṭ svāhā.

【一】 持念品第十九。(Tib.) kyeḥi-rdo-rjeḥi-so-bzlas-paḥi-leḥu.

【一】 俱生義品第二十。(Tib.) kyeḥi-rdo-rje-las-lhan-cig-skyes-baḥi-sbyor-ba-don-gyi-leḥu.

をなすべし。

教授品第十八[一]

復次に世俗相に於ける擇法弟子を我今當に說くべし。身は狹長ならず、亦矬陋ならず、白からず、黑からず、蓮華の敷ける如き諸相好を具す。或は出入息は青蓮香の如く、身・腋の汗は微妙の栴檀・沈水・悉離訶等及び妙華香の出ずる如し、智者如實に善く觀察すべし。又復尊重して戲笑を樂はず。出言は慈愛、意慮は寂靜なり。髮は紺殊妙にして諸相を具足せり。是の如き法器に於て速かに成就を獲べし。時に無我菩薩問ふて曰く、俱生喜及び自らの本誓に於て云何に奉行すべきや、佛言はく、謂ゆる常行三昧は諸の過失なし、金剛空智及び自師尊に敬禮せば、大悲憐愍は勝族中に生ずべし。金剛鈴を執つて深法を誦持し給ふ。

復次に、無我菩薩重ねて佛に白して言さく、是の惡人輩、多くの諸弊惡を云何に教授すべきや。佛言はく、先づ[二]布薩・淨住律儀をすべし、經法・瑜伽・觀行・大毘婆沙及び中論等を教授し、一切の眞言理趣を如實に知り已つて、然る後、爲めに、吉祥金剛空智を說け。

[三]復次に降伏法を作さんと欲する者は佛如來及び自師尊に向ふて、先づ已を白して、其は極惡衆生と見らるゝ如く、佛の形像を毀し聖教を破滅し、意樂を生ず、彼の觀想を作す、頂踵顚倒せり。是の人は首飾速かに顫動を生じ、道路を行く中、火聚に入ると思ふ。心に火種子應にその時現行すべし。是の如く見已つて、刹那降伏をなす。この大儀軌は護摩及び印縛法に須ふべからず。三昧呪句は念ずるに隨つて成就す。又此の所說は淸淨最上最勝祕密なり。その成就に於て應に分別せざれば大罪咎を得。猶大光明聚の如し。此に通達、或は未通達、及び不相應は悉く愛樂を生ず。若し三寶功德に於て世の五欲に著せば、是れ不淸淨なり。譬へば淨甘露を得て毒藥と轉成せる如し。

【一】教授品第十八。(Tib.) kyeḥi-rdo-rje-las-ḥdul-baḥi-leḥu.

【二】布薩(uposatha.)。(Tib.) gso-sbyoṅ. 半月毎に僧を集めて戒經を說き比丘をして、淨く戒中に安住せしめ能く善法を長養せしめ、在家法は六齋日に戒を持して善法を增長するを云ふ。

【三】復次に以下西藏譯は Kyeḥi-rdo-rje-pas-sṅags-btu-baḥi-leḥu. (喜金剛攝眞言品)

を遠離せるの故に、五佛の印を以て常に身に印せらる所は是れ則ち清淨なり。復次に空智金剛畫像儀式を我當に開示すべし、成就を求むるものは三昧耶戒を受くべし、彼の工畫師も亦三昧を受くべし、畫像・繒帛は清淨細密、髮毛を擇去す。蓮華器を以て五彩色を成し、像の幢下に自師尊を畫け、或は先づ絲線を以て加持供養す、其の大小の如く織つて幢樣と作す。復廣大三昧耶を以て相應加持す、黑月分十四日、或は空寂舍中、日分時に勇悍心を起し上味法食を以て、妙繒綵を服す、解脫を爲す故に、衆寶を嚴飾す。是の三昧に住する者は、設へ飲食し已つても、塵穢を漱滌すべからず。故に淨相となす。然る後、一具相童子を求む、性行調柔にして衆の愛敬する所、左邊に住し、妙香華を散じ、成就者と爲る。

飲食品第十七[一]

復次に書寫・愛持、我今當に說くべし。[二]樺の皮葉等を用ふ。長さ十二指、此の經を書す者も亦三昧耶戒を受けしむ。最上[三]香墨を用ひ、或は復血を刺し、骨を以て筆となす。又此の經及び前の幢像を、或は三昧戒を受けざるもの及び餘の惡人に、若し見せし者は成就する能はず。乃至他世諸の惡趣に墮す。又此の經法をして常に頂戴し、或は餘部大乘經中に密かに護持せしむ。復次に飲食を我今當に說くべし。或は眼目修廣せる是の如き人、曼拏羅に來たり、上法味を以て供養せる所の者、諸義利に於て成就を獲、或は塚壙間・清涼山林・衆の住ぜる處、及び大海岸、是の如きは飲食なり。布座九位、虎皮或は寒林衣を以て座となす。中位に空智金剛諸瑜儗尼等を分布す。隨つて（前の如く）方隅を知るべし。虎皮座に安じて、三昧耶食、或は王者の饌を供し一心に供養すべし。されば眷屬・曼拏羅に廣大成就す、又復一蓮華を用つて、滿して中に酪を盛り、蓮華印契を手に作し、自師尊に奉り、大禮敬を作す。已の自食を取つて大福報を獲、成就を求むる者は當に是の如く恭敬

【一】飲食品第十七。(Tib.) kyeḥi-rdo-rje-las-bzaḥ-baḥi-leḥu.
【二】樺の皮葉。(tib.) gro-ga.
【三】香墨。(Tib.)snag-tsha.

一切圓滿廣說せる眞實の曼拏羅儀軌の如し。當に是の如く知るべし、是の曼拏羅て入るものは、[六]八種の大明を觀想せよ、十二或は十六童子の相の如く、瓔珞・妙繒殊勝に嚴飾せり、謂ゆる、[七]若那末佐哩訥哂多末佐尼摩摩寫末哩耶摩覩末佐尼、是れを八種大明と名く、瑜伽を修する者は先づ龍腦水を以て散灑し、供養し已つて是の八種に於て速かに成就を獲べし。

復次に曼拏羅中に、上妙法食及び妙衣服を以て解脱のための故に、金剛蓮華歌詠・舞戯を以て、而して之を供養せば如實に相應す、然る後、中夜分に、諸の弟子を引いて火壇中に入れ、面衣を除去して曼拏羅を視せしむ。華所隨處爲めに灌頂を作す。爾の時灌頂阿闍梨、其の如く、別別の行相の稱讃供養を說く、亦是を說くを牟尼如來清淨學者と爲す。是の如く、貪等の邊際を遠離し、眞實を顯示す。諸の儀軌を少分開示せり。復次に、無我菩薩問ふて言はく、彼の金剛相應供養作し已つて一刹那頃、云何が是の如きを說いて本尊と名くや。偈を以て答へて曰く、

是の法は三世にあらず、輪廻涅槃にあらず。自なく、亦他なく、斯れ最上の大樂なり。
如し人自ら手を擧げ、拇指及び無名(指)の、二指を竪てて、相捻ず。二報斯れ決定す。本是れ相なき如し。云何が有想生ずるや。設へば後智生ずる時、啞の夢を受くる所の如し。此の最勝邊際は、貪を遠離するに由る故に、空實際中に依つて、是れ卽ち空智と名く。

[八]金剛空智熾盛拏吉尼畫像儀式品第十六

復次に五印を我今當に說くべし。謂ゆる頂相寶輪は唯だ常に教授阿闍梨及び自師尊に敬禮するなり。耳寶鐶は說を聞くを樂はず、金剛者及び自師尊は一切過失麁惡語を持する故に、頸寶鬘は唯だ常に大明呪を持する故に、手の寶釧は乃至蠕動・諸の衆生を殺さざるの故に、腰の寶帶は一切の欲邪行

【六】八種大明。(Tib.) rig-ma-bde-chen-brgyad-po.
【七】西藏譯に依れば次の如し。
(イ)ma (skt janani)。
(ロ)srin-mo(skt.bhagini)。
(ハ)bu-mo(skt. dhuhitā)。
(ニ)sriṅ-moḥ -bu-mo (skt. svasriyā)。
(ホ)ṣaṅ-boḥi-chuṅ-ma(skt. mātulā oroli)。
(ヘ)ma-yi-spun(skt.so.lari, sodariyā, sodaryā)。
(ト)sgyug-mo (skt.svasā or śvaśvū)。
(チ)pha-yi-sriṅ-mo (skt. pitṛ-svasā)。
以上八種大明の名西藏譯より梵語に還元せるなり。
【八】金剛空智熾盛拏吉尼畫像儀式品第十六 (Tib.)kyeḥi-rdo-rje-las bris-sku-cho-gaḥi-leḥu.

是の妙樂輪は、諸佛菩薩に、我は餘處に及んでは妄りに開示せず、若如實に金剛薩埵等あり、是の眞言を少しも悋惜することなし。是の如く慇懃に當に汝の爲めに說くべし、先づ熾盛の華鬘を以て周遍間錯す、曼拏羅を粉畫し已つて、金剛藏に灌頂を授けるために、上妙黑色の脂麻を用ひ、聲を厲まして加持し、發吒一萬遍を念す、空智金剛相應に於て、即ち一切を鉤召し得、十萬遍念すれば、是の人は諸の所作を有し、瑜伽相應に於て、諸の疑惑を離る、即ち眞言に說いて曰く、

[一]唵引尾捺引喃引阿引顛戴嚩引哩馱二合賛涅哩二合訥普始珖鉢室左引二合捺瑟吒引二合那那引曳底氷卑孕切吳哩馱二合計設末哩多二合摩泥拶覩哩吻二合下尾顯切設底泥怛囉引二合野怛弩嚓數疵尼轄切設普惹引野訖哩二合瑟拏二合齊仁際切牟怛嚩補熾引葛播引羅摩引賴引歌馱引哩尼阿馱摩二合怛骨嚕二合引囉唧多引野阿哩提引二合耨能瑟致哩二合尼摩引囉野摩引囉野歌引囉野歌引囉野怛哩惹二合野戍引沙野戍引沙野薩鉢多二合娑引誐囉引那滿馱滿馱那引誐引瑟吒二合歌那屹哩二合恨拏二合屹哩二合恨拏二合設咄嚕二合那喝訶引唎醯引虎呼引奚引孩胡[illegible]引憾引憾郝發吒半音薩嚩二合訶

復次に無我菩薩、是の智所を聞き、至る處相應し、適悅の意を起して、是の最上堅固祕密妙曼拏羅を問ふ。爾の時大智調御師大歡喜を生じ、三摩呬多に住し、金剛蓮華大相應門を以て、而して自ら其の曼拏羅を粉畫す、一重四門・四峯樓閣・五色界道・金剛智線、正等に相應す、周遍せる光明種種に嚴飾せり。八大賢瓶を次の如く粉畫す、寶末或は五粉末・寒林の塼炭末を以て、中位に八葉蓮を畫き橐籥中に白色の三分せる葛波羅相を畫き、[二]伊舍那方に師子を畫き、[三]火天方に苾芻像、[四]乃哩底方に輪を畫き、[五]風天方に金剛杵、東門に寶刀、南門に奎樓鼓、西門に龜を畫き、北門に龍を畫く、明妃の色相は已に前に說ける如し、是れを八種幖幟と名く、中位に白色善巧の金剛杵を畫く、別に一瓶を置く。最勝と名く、頸に妙繒を繫く、鉢羅嚩、吉祥樹の枝を揷む、五寶末及び、五穀等を入る、

【一】西藏譯と相違せり。

【二】伊舍那(iṣāṇaḥ)、(Tib.) dbaṅ-ldan. 東北隅を司る神である。

【三】火天(vaiśvānaraḥ)。(Tib.) me. 東南隅を司る神。

【四】乃哩底(nairṛtiḥ)。(Tib.) bden-bral. 南西隅を主宰せる死神、

【五】風天(vāyuḥ)。(Tib.) rluṅ. 北西隅を司る。

我空智心を知る、身は幻よりの化有、大悲を斷たざる者、是の如き意を作す勿れ。
時に空智大金剛王、復吽阿字の種智より大金剛身、柔軟智相を出現す。莊嚴殊妙にして勇猛の勢を作す、忿怒微笑して大無畏を得、内に悲愍を懷き、寂靜あるを希ふ。勝味理趣九種の無戲を現ず。左右一十六臂、各々一大蓮華器を持す。所謂る、地・水・火・風・日・月・多聞・天王及び焔摩・天主・象・馬・渇羅・牛馲駝意・生師子・猫兒なり、足は地上を履み期剋を作す。天・阿修羅の勢をなす。遨哩明妃は右手に[九]寶刀を握り、左手に[一〇]摩竭魚を持す、阪哩明妃は右手に奎樓鼓を持し、左手に[一一]嚩囉賀を持す。尾多哩明妃は右手に[一二]龜を掌り、左手に[一三]蓮華器を執る。渇三摩哩明妃は右手に[一四]蟨龍を持し、左手に蓮華器を執る。卜葛西明妃は右手に[一五]師子、左手に[一六]鉞斧を執る。設嚩哩明妃は右手に比丘像を掌り、左手[一七]錫杖を持つ。贊拏哩明妃は右手八輻輪を持し、左手[一八]梨具を執る。努彌尼明妃は右手に金剛杵を執り、左手を期剋の印と作す。

卷の第五

金剛王出現品第十五之餘

復次に金剛藏菩薩よ、是の諸明妃は右半跏趺して舞勢の如く立つ、一臂三目忿怒の髻を竪つ。皆前の如く互印を用つて莊嚴す。遨哩明妃は黑色、阪哩明妃は紅色、尾多哩明妃は黃赤色、渇三摩哩明妃は綠色、卜葛西明妃は帝靑珠色、設嚩哩明妃は珂月色、贊拏哩明妃は虛空靑色、努彌尼明妃は種種の色を具す。又諸の明妃は足に八魔を履む、謂ゆる梵・釋・那羅延・大自在・吠濕嚩多・尾怛那・乃哩底・毘摩質多羅天等なり。各々最上の供具を以て、金剛部に適悅心を生じ尊重供養す。
復次に無我菩薩問ふて言はく、是れ大祕密及び信愛法なり。諸の龍・天・阿蘇羅を鉤召す、何等の眞言・期剋を以て諸の難調者を摧伏するや。時に金剛王答へて是の如く言はく、汝我が說を聽け、

【九】寶刀。(Tib.) gri-gug.
【一〇】摩竭魚。一說に鯨と傳へらる。卽ち、兩目は日の如く、口は嵎谷の如く、舟を呑み、光を出し、濆流すること潮の如く、その長さ二百里可かりなりと云へり。
【一一】嚩囉賀(varāha.)。(Tib.) phag-pa. 西藏譯は豚なり。
【一二】龜。(Tib.) ru.
【一三】蓮華器。(Tib.) padmahi-rnod.
【一四】蟨龍、(Tib.) sbrul-ba.
【一五】師子。(Tib.) seṅ-ge.
【一六】鉞斧。(Tib.) sta.
【一七】錫杖(khakkhara.)。
【一八】梨具(kapila.)。(Tib.) gsil-byed. thod-ṛa. 蓮華器なり。

にして灰を以て身に塗る、口に吽發吒字を誦す、寂靜に入樂し、煩惱の縛を離れ妙三摩地に相應す。正面は大黑色、右面は白色、[三]倶那華、左面は紅色大忿怒相の如し、上面は笑容、餘の四面は並びに青黑色、共に二十四目あり、是の如く相續し復嬉戲三摩地に入樂す。鑁字門より遨哩明妃を出生す、東門に住す。復、[四]滿他那に入つて三摩地に相應す。尊字門より阨哩明妃を出生す。南門に住す。護門者となる、復金剛蓮華に入つて三摩地に相應す。鑁字門より、尾多哩明妃出生す。西門に住す。復大煩惱を破つて三摩地に入る。紺字門より渇三摩哩明妃を出生す。北門に住す。壞魔者と爲る。奔字門より卜葛西明妃を出生す。[五]伊舍那方に住す。復、滿他那に入つて三摩地に相應す。商字門より設嚩哩明妃を出生す、[六]火天方に住す。贊字門より贊拏哩明妃を出生す。[七]羅刹方に住す。農字門より努彌尼明妃を出生す、[八]風天方に住す、忿怒者たるを樂ふ。

爾の時空智大金剛王、復虛空性三昧忽然と現はれず。彼の四大種明妃種々の金剛を以て、歌詠供養す。

地大遨哩明妃曰く、

善い哉金剛王、　速かに大悲意を起したまへ、　諸の衆生を護らんと欲す。　空性に住するに應ぜず。

水大設嚩哩明妃曰く、

空より起きたる空智主、　空に住するは利樂に非ず、　成就を求めんとなす者、　應に空性に住すべからず。

火大贊拏梨明妃曰く、

云何が空性に住して、　方所を見ずや、　我大悲尊に請ふ、　速かに諸の利樂を成ぜしめ給へ。

風大拏彌尼明妃曰く、

【三】倶那華(kundaṃ)。君荅、擢離花、素馨花の一種なり。

【四】滿他那(manthāna.)。(Tib.) srub. 打杁(?)。

【五】伊舍那方(iśāna.)。(Tib.) dbon-ldan 東北隅なり。

【六】火天方(vaiśvānara.)。(Tib.) me. 東南隅なり。

【七】羅刹方とは本經の他所には洒哩底方(nairṛiti.)。(Tib.) bden-bral と說き南西隅なり。

【八】風天方(vāyu.)。(Tib.) rluṅ-lha 北西隅なり。

引噜引牟抗薩哩嚩二合達哩摩引二合 拏摩寧也切 身那瘦二合怛牟二合那怛嚩二合多唵引阿引吽引發吒半音 薩嚩引二合 賀引

是の如き末憐大供養明を善く解し、瑜伽者一切部多等を供養せば大吉祥を得、若信愛を求めて世の諸を護らば、大歡喜を生ず。若降伏を作さば、速かに寃敵を破せん。若息災・增益を作さば、大富樂を得て相續不斷なり。復次に金剛藏言はく、如來先づ地行・空行明妃を說けり、我今當さに何部の主なるを知らず。佛言はく、身・語・意の三密輪中、我が住處及び無我菩薩を以て、上中下に住すとす。此の中、部に三あり、三種・五種を開示す、或は六種に開く、卽ち五如來は彼の貪・瞋・愚癡・兩舌・嫉妬の對治をなす。又五種に於ては、其の次第に隨つて、觀想・出生・金剛薩埵・淸淨・妙樂なり。又三種とは卽ち如來部・蓮華部・金剛部なり。彼の貪瞋癡等の對治を爲す。又復一部とは、謂ゆる阿閦如來金剛威德忿怒相を現じ、瞋法を對治するなり。

金剛王出現品第十五

爾の時空智大金剛王、一切の本尊、一切の自性身曼拏羅を開示して、極妙樂金剛心の種子に住す。一切自性より出生せる曼拏羅王は、一十六臂・八面・四足・髑髏鬘を帶び忿怒相を現す。五印を執持して、大無畏を得、時に無我明妃、是の如く白して言さく、我、先きに是の曼拏羅の一十五位を知らず、眷愛種智、願くば我がために說きたまへ。

時に金剛王是の如く、嗟咨して、葛波羅を持し、金剛杵を擲げて魔を摧伏し已つて、是の如く前の曼拏羅輪を說く、四隅・四門及び金剛線・珠纓・半纓・無量の雜寶間飾莊嚴す。我吽阿字の種智を以て、靑色熾盛の光焰を放つ、八面一十六臂を出生し、足は四魔を踏み忿怒相を現ず、髑髏・鬘及び妙瓔珞を帶びて大無畏を得、日輪中に住し、立つこと舞勢の如し、善巧の金剛杵を頂戴し、黑色忿怒

eṭa gāda. oṃ akāromn khaṃ sarva dharmānāṃ ātyāunt panna tātā oṃ āḥ hūṃ phaṭ svāhā.

【二四】地行明妃(bhūcari.)° (Tib.) sa-spyod-ma.
【二五】空行明妃(khacari.)° (Tib.) mkhaḥ-spyod-ma.

【一】金剛王出現品第十五。(Tib.) kyeḥi-rdo-rje-las-kyeḥi-rdo-rje mṅon-par-ḥbyuṅ-baśes-bya-baḥi-leḥu.
【二】無我明妃(nairātmā yoginī)° (Tib.) bdag-med-rnal-ḥbyor-ma.

み知覺する所なり。時に無我明妃夢の如く聞きて、地より起つて世尊に白して言さく、是の如き衆生云何が諸垢染の爲に覆藏せらるや、能く是等を除けるを正覺者と名く。世尊よ、是の如き眞實は虛妄あるなし、佛言はく、無智の人の如きは栰囉拏藥を飲んで、極めて惛醉を生ず。若癡愛を離るれば是れ卽ち解脫なり。若人、金剛空智を信樂多聞し、出離方便を了知して、無明の縛を斷じ、執取を生ぜず、天人・阿修羅・地獄・餓鬼・畜生に大覺悟を生ず、衆生相當に正覺を成ずるなく、又糞穢諸蟲常に自體を樂んで、尙ほ天人等の樂あるを知らず。此の覺性は心に隨つて所現す。餘の世界正覺を成じ得るにあらず。設へば旃陀羅諸の殺業者、是の人は無智・愚夫執著、是の行を知らず、爲めに極めて癡冥なり。六趣中に於て[一一]行・[一二]取・[一三]有支を發して輪轉す、若金剛空智に於て是の方便を得ば、我慢習を除き、清淨境界に無上道を得、此の勝行に無疑を成就す。[一四]卜葛西明妃と說くは是れ卽ち地界、彼の堅硬體是れ卽ち癡の義なり。佛言はく、身は心に依つて出生す、若し餘處に於ては定んで得べからず。是の故に毘盧遮那如來部を[一五]設嚩哩明妃、是れ卽ち水界と說く、彼の濕潤性は本尊の理趣なり。佛言はく、身は心に依つて出生す。若餘の處に應に現起せず、是の故に阿閦如來部を[一六]賛拏哩明妃、是れ卽ち火界と說く、卽ち貪は理趣なり。佛言はく、貪愛の火は赤色を以て自相と爲すと說く、貪に由つて兩舌起るが故に、寶生如來部を[一七]努彌尼明妃、是れ風界と說く。本尊の理趣なり。佛言はく、貪に由つて嫉妬起るが故に、不空成就如來部、是の如く[一八]邀哩明妃・[一九]陬哩明妃・[二〇]尾多哩明妃・[二一]渇三摩哩明妃も亦上說の如く、金剛空智に於て是の如く三摩鉢底を住持す。

復次に無我菩薩平等相に於て、衆生に利をなす。末憐大供養眞言句を請問す。時に金剛薩埵諸の衆生をして他命を護らしめ、作障者一切の[二二]頻那夜迦の爲めに、末憐大供養明を說いて曰く、

[二三]唵印捺野摩惹刹普嚩嚩喝尼二合 嚩引喩囉刹賛捺蘇惹摩捺嚩鉢多羅鉢多引梨遏吒薩鉢伊喃末隣蓬
惹伽補澁波二合 度引波莽引娑引尾鉦喃二合 盎喝歌引煮薩嚩娑引達侃底枯尼讋痆栰引捺唵引遏歌

【一一】行。過去世の煩惱に依て作りし善惡の行業を云ふ。
【一二】取。成人已後愛欲愈盛にして諸境に馳騁して所欲を取求する位を云ふ。
【一三】有、愛取の煩惱に依て種々の作業を作り當來の果を定むる位を云ふ。
【一四】卜葛西明妃(nukasi.)。
【一五】設嚩哩明妃(pavari)。(Tib.) ri-khrod.
【一六】賛拏哩明妃(caṇḍālī)。(Tib.) gdol-ba-mo.
【一七】努彌尼明妃。(Tib.) gyuṅ-mo.
【一八】邀哩明妃(gauri)。(Tib.) dkar-mo.
【一九】陬哩明妃(cauri)。(Tib.) chom-rkun.
【二〇】尾多梨明妃(Vetari)。(Tib.) ro-laṅs-ma.
【二一】渇三摩哩(ghasmari.)。
【二二】頻那夜迦(vināyaka.)。(Tib.) log-ḥdren. 頻那は豬頭。夜迦は象鼻なり、歡喜天の梵名にして常に障を作す故に又常隨魔の稱あり。
【二三】oṃ inda yama jala jakka. bhuda vahnivanakṣa caṇja sujja māda pātāla pātāla aṭṭh sppa svāhā. idaṃ vali bhuñja jim(?) gbaphulla-dhuyamāṃ sapingia(?) aṃbha sarva kajja sppa sāla khanti khuṇi ph-

生の次第應に遠離すべからず。蓮華器或は白螺貝を以て甘露となす。是の如き正理は大力能有り。卽ち無我明妃なり。大印曼拏羅は臍輪中に住す。阿字音より自性及び彼の提字(生出す)是れ勝惠・出生・相應の次第と說く。長・短・方圓に非ずして、倶生喜是の如く出生す。受用・妙樂及び大印との成就を得、彼の色・聲・香・味・觸・法界の自性も亦智慧・方便及び大妙樂にして卽ち彼の輪壇なり。

[八]五智自性とは謂ゆる、大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智・清淨法界なり。此れ無我明妃、法界の本性なり。我曼拏羅王等と爲る如く、異あるなし。

復次に金剛藏言はく、輪壇觀想道に於て、そは諸佛聖賢を出生する如し。唯だ佛世尊は先づ我等が爲めに是の戒相を說きたまふ。佛言はく。先づ身中に阿字門住す。金剛蓮華大印・方便學處此の內外入戒を我今開示す。阿字を以て理趣[九]、祕密の三摩鉢底とし、煩惱の縛をして外に現起せしめず。法・報・化の三身輪及び大樂輪の義と了知す。是の如く心・意・喉・頂に住し。無量の諸佛聖賢を出生す。彼の化身輪は上座部律に依つて、變化身を出す。法身輪は一切有部律に依つて法を宣說するが故に、報身輪は正量部律に依つて一切の飲食味受用せらる故に、大樂輪は大衆部律に依つて、妙樂に住するが故に、世尊は四種不動果等を分別す。勝慧の業を以て教誡を作す。是の法輪は其の受用の如く無所動にして大果を得ると說く、妙樂輪に大力能を具し士夫の用あり。相應は清淨の果報を出生す。是れ等の義類を說いて聖胎と名け遊止處となす。若人心貪等を離るれば設へば胎藏に處し法服を被る如し、所生の母を卽ち諸佛母と觀ず。慈愍訓育、躬を曲して禮敬すること親教師の如し、猶、我、往昔に順じ、世間に生れたるごとし、阿字輪より放字を出生し、圓頂・潔膚・苾芻相の若し、又十日の始め地上に生る。我爾の時には十地の行を滿たしたる大自在位の故に、阿字門は衆生を積集し佛の如く無疑なり。彌の時無我明妃等[一〇]佛語を聞き已つて心に疑惑を生じ、大恐怖を得て悶絕躄地す。時に會見し已つて金剛明妃等に語つて言はく、是れ地・水・火・風・空此の五大種は唯だ佛の

【八】五智(第八品參照)。大圓鏡智(ādarśajñāna)。(Tib.) me-loṅ-lta-buḥi-ye-śes.
平等性智(samatājñāna.)。(Tib.) mñam-pa-ñid-kyi-ye-śes.
妙觀察智(pratyavekṣaṇā-jñāna. (Tib.) so-sor-rtog-paḥi-ye-śes.
成所作智 (kṛtyānuṣṭhāna-jñāna. (Tib.) bya-ba-nan-tan-du-grub-paḥi-ye-śes.
清淨法界(法界體性智)(Dharmadhātuviśuddhi.)。(Tib.) chos-kyi-dbyiṅs-rnam-par-dag-pa.

【九】理趣。(Tib.) bdaḥi-bde-baphyag-rgya-che.(譯)金剛の大樂印。

【一〇】等。西藏譯には明妃の名を擧ぐ。ḥdi-lta-ste spyan daṅ/ māmaki daṅ/ gos-dkar-mo daṅ/ sgrol-ma daṅ/ khro-gñer-can daṅ/ tsundā daṅ/ parṇri-khrod-ma daṅ/ ḥog-śal-ma daṅ/

てが瞋等の作用を說く、又[三]眞言品に說く、無我明妃の種子とは云何、種子は何より生ずるや。[四]金剛部品に三十二血脈の相を說き彼の淸淨を談ず。唯だ願くば世尊よ、我ために疑を除きたまへ。

佛言はく、金剛歌舞とは、謂ゆる

酤引羅以哩胝阿日引羅引蒙母抳哩哥引酤引羅引佉吉畢吒斛引末惹伊葛惹尼吉阿伊路引羅引怛哂左羅渴惹伊誐引遲摩野拏引畢惹阿伊喝隷歌引陵惹囉鉢抳阿伊訥努嚕末嚕阿伊捞烏三摩葛朅哩悉羅歌引二合 葛卜嚕羅引伊阿伊摩引羅伊馱拏娑隷怛哂婆嚕呵引壹阿伊畢陵二合渴拏契吒葛陵諦戍馱戍馱拏惹抳阿伊抳嚫戍盎桁左拏引尾阿伊耽哂嚩薩囉引嚩阿尾鉢抳阿伊末隷野嚩翁拏末嚕吒伊顛抳末多馨末惹阿伊哩

金剛舞とは哂[五]嚕迦の相を應に忘失する勿れ。心は愛樂を生じ、觀想を相續す、又金剛明妃及び瑜伽尼等は諸佛母の如く、是れ金剛歌舞にして常に眞實なり。自身及び餘の眷屬を護持す。此の諸の世間は誦處を所持し、能く信愛を生ず。是の故に此に極めて尊重を生ず。月の如き愛相復疑惑する勿れ。[六]時に金剛藏佛に白して言さく、世尊よ是れ倶生喜の自性なり。何等を棄捨して能く一切相應出生するや。譬へば虛空の窮盡有るなきが若きや。佛言はく、是の如し、是の如し、汝の所說の如し。金剛藏言はく、云何が菩提心方便を出生せるや。佛言はく、此の輪壇自威力を以て加持する次第を謂ふ。菩提心は方便を出生すと名く。世・非世俗の二相あり。[七]倶那花の白月影に處す如し、世間の妙樂も亦復是の如し。謂ゆる佛・菩薩是の如く任持す。輪廻を信解すれば、復た涅槃なし、所說の色等は是れ輪廻なり。受等是れ輪廻なり、根等是れ輪廻なり。瞋等是れ輪廻なり。卽ち是の法を以て涅槃と名く。謂ゆる無癡は是れ涅槃、無迷亂是れ涅槃、淸淨是れ涅槃、若し世俗に非ざれば菩提心なり。具相童子を以て是れ上種族とす。性行調柔にして、殊妙に莊嚴す、悉羅訶香を以て龍腦に和合し、及び妙飮食を隨分に供養し、自他身に義利を成就す。又金剛蓮華に相應を作す。出

【三】眞言品。第一巻拏吉尼熾盛威儀眞言品第二。
【四】金剛部品。第一巻金剛序品。
【五】哂嚕迦(heruka.)。
【六】西藏譯 335b1–336a5 漢譯缺。
【七】倶那花云々。(Tib.)bud-med-kukkoḥ-bde-ba can/ evaṃ rnam-paḥi raṅ-bźin-du/ bde-ba-sruṅ-ba-ñid-kyi-phyir/ bde-ba-can śes-rab-tu-bsgrags/ (譯)女の蓮華を持樂(といふは)evaṃ(男)の自性に於て樂を護るものなる故に持樂といはる。

ち去來の義と說く如し。阿薩多婆羅喃を卽ち珠寶の義と說く如し。曼拏嚕を卽ち鼓音の義と說く如し。努囉努囉を卽ち薄德の人と說く如し。歌陵惹囉を卽ち福善人と說く如し。賴捉馞を卽ち無觸の義と說く如し。葛波羅を卽ち蓮華器と說く如し。底望鉢多を卽ち飮食の義と說く如し。摩羅頂を卽ち菜食の義と說く如し。兀探を卽ち四平等の義と說く如し。母多羅を卽ち妙香の義と說く如し。悉羅紺を卽ち自然生の義と說く如し。輸葛囉を卽ち造作の義と說く如し。末娑を卽ち白色の義と說く如し。瑜を卽ち相應の義と說く如し。[六]謨羅紺を卽ち金剛の義と說く如し。[七]酤羅紺を卽ち蓮華の義と說く如し。酤覽を卽ち部類の義と說く如し。嚩囉拏を卽ち有分別・無分別の義と說く如し。

佛の五部に於ても亦是の如く說く。

[八]拏彌を卽ち金剛部と說く如し。[九]那胝を卽ち蓮華部[一〇]賛拏梨を卽ち是れ寶部と說く如し。[一一]採惹多を卽ち如來部と說く、[一二]辣惹計を卽ち羯磨部と說く如し。[一三]母陀羅を卽ち妙成就の義と說く如し。

又修觀者は金剛水を得て成就す。供養を作し已つて自ら服行す。佛金剛大薩埵に言さく、我汝がために說く。彼の一切を但だ尊重して之を攝受するに非ず。此の金剛空智に於ける、灌頂の大眞實句三昧方便を、妄りに宣說す勿れ。大罪咎を得ること疑なし。或は鬼魅・怨賊・侵嬈・瘧病・蠱毒のために、乃至是の人速かに命終に趣く(こと疑なし。)設へ復人あつて、此の三昧に於て、世の醫王及び佛導師の如く、是の方便に於て亦說をなすなかれ。彼の不動使者及び四大明明妃・大忿怒を發す。是れ一切儀軌中の義と名く。

[一]集一切儀軌部品第十四

爾の時金剛藏上首と爲る、一切金剛拏吉尼と心に疑惑を生じ大憂惱を得て、佛に白して言さく、世尊、[二]前の行品中、金剛歌舞成就者と說ける云何が歌舞、云何が本尊灌頂となす。何等の印に於

【六】謨羅紺を卽ち金剛の義と說く如し。(Tib.) rdo-rje bola ṣes-bśad-de/ (譯)金剛を bola (男根に喩ふ)と說く。

【七】酤羅紺を卽ち蓮華の義と說く如し。(Tib.) padma kakkola ṣes-zer/ (譯)蓮華を kakkola. (女根に喩ふ) と說く。

【八】拏彌。(Tib.)gyuṅ-ma.

【九】那胝。(Tib.) gar-ma.

【一〇】賛拏梨。(Tib.) raṅ-hchod-ma.

【一一】採惹多。(Tib.) skyes-gñis.

【一二】辣惹計。(Tib.)chos-ma.

【一三】母陀羅。(Tib.) phyag-rgya.

【一】集一切儀軌部品第十四。(Tib.)kyeḥi-rdo-rje-las-rgyud tlams-cad-kyi-phyag-rgya-bdus-paḥi-don-ṣes-bya-baḥi-leḥu.

【二】前の行品。第二卷、行品第六。

卷の第四　同卷第五

説方便品第十三之餘[一]

爾の時無我明妃上首となつて、一切の金剛拏吉尼等と倶に五甘露相應を持して、世尊・金剛薩埵を供養し已つて、金剛甘露味を飲む、大威神を現じ歡喜心を發して、汝金剛拏吉尼等に語る、我が此の眞實は極めて祕密となす。一切の佛を供養禮敬し已つて、金剛本性を我今開示せんとす。時に諸の明妃大歡喜を得て、右の膝を地に著け合掌恭敬して佛の所説を聽く。

佛言はく、飲食を得たる如く、美・不美に厭離を生ずる勿れ、塵穢を澡浴して、淨想を起すなく、設一復禪定を修せず、呪句を誦へず、睡眠を捨せず、根門を護らず。五淨食を平等に服行す。一切眷屬心に、愛著なく、怨親想なく、木石の塑像に禮事を行ぜず。世間法を悉く能く遠離す、又[二]刹帝利・婆羅門・吠舍・戍陀羅等に親近を樂はず。穢行旃陀羅、皮を厠となす人等とも亦遠離せず。或は摩粘及び藿香葉・毒・竦藥等の酸・鹹・苦淡及び香・美味・殘觸の飲食を菩提心は不二智の故を以て、世間少分も食せざるものなし。又自然生の[三]酤蘇摩華を得て、蓮華器中に置き、[四]尸利沙及び星伽拏藥を入れて甘露となす。寒林の灰を以て、身に塗り雜色の弊衣を著けて、畢利多華・結鬘を嚴飾す。

復次に金剛藏言はく、六根清淨なるが故に、即ち一切境界は廣大清淨なり。世尊豈に此の諸根清淨なりと説かざらんや、是れ大勇健身の甲冑せる所なり。

金剛藏佛に白して言さく、諸の聲聞人は是の大三昧耶を知る能はざる所、佛語決定す。刹那頃諸の煩惱を離る如し。如來は四種の教理に於て是の説を作さず。

云何が方便説と名く。佛、金剛藏に言はく、汝一心に聽け、我今大心と爲すは、方便を以て大三昧耶を説く、[五]摩粘を即ち果實の義と説く如し、彌羅を即ち鉤召の義と説く如し。珂吒畢利珂喃を即

【一】　説方便品第十三之餘。西藏譯は品を改めず。

【二】　印度の四姓（catvāro varṇa.）。刹帝利（kṣatriya.）、王種なり。(Tib.) rgyal-rigs. 婆羅門（brāhmaṇa.）。(Tib.) bram-ze. 淨行卽ち僧族なり。吠舍（vaiśya.）。(Tib.) rje-hu-rigs. 商估なり。戍陀羅（śudra.）。(Tib.) dmaṅs rig. 農人なり。旃陀羅（caṇḍala.）。屠種を云ふ。

【三】　酤蘇摩（kusuma.）。(Tib.) me-tog. 譯して花といふ。

【四】　尸利沙（śleṣa(?)）。(Tib.) lud-pa. 卽ち合昏樹にして俗に夜合樹と云ふ。この樹に二種ありて尸利沙と云へる時は葉、果大なるを云ひ、尸利駛といへる時は葉果の小なるを云ふ。

【五】　摩粘（madya(?)）。(Tib.) chaṅ-ba. 酒と譯す。

を持して諸の含識[三]を利す。又弟子のために大悲智は一切に安住するを說く、是の身は身に非ず、二相有るなし、動植等を皆幻化相と觀る、輪壇・方便は畢竟無疑なり。諸の同學者は已の眷屬の如し。時に金剛藏佛に白して言さく、世尊よ云何が諸佛身最上輪壇と名くや、其の次第の如く我が爲めに疑を除きたまへ。佛言はく、是れ曼拏羅とは堅固菩提心を大施會となす。虛空輪淸淨境界の如し、[四]應に是を金剛瑜伽蓮華部の義と名くと知るべし。

時に金剛藏復佛に白して言さく、世尊よ、何等の戒を持し、何の三昧に住すべきか。佛言はく、一には應に衆生を殺害すべからず。當に共に一心に已の有を護る如くすべし。二は與へざるなきに他人の翫好を取る。三は邪行を欲することなし。本性空と知るが故に。四は虛空語なく、世・出世間最上願を發す。

時に諸の瑜伽者、佛世尊に是の如き言を作さく。

云何が根境と名け、　云何が十二處、　何等をか蘊界と名け、　復何をか自性となすや。

佛言はく根に六あり、　謂ゆる眼・耳・鼻根と、　身・舌・意等と、　內外根の癡は俱に、　金剛を以て解脫す。　又境に六塵あり、　謂ゆる色・聲・香・味と、　及び觸の境界と、　幷びに法界の自性とを、　是れ名けて六境となす。　卽ち前根境の二を、　翻じて十二處と名く。五蘊は謂ゆる色等、　及び大悲行性、　是の如き根・境・識を、　說いて十八界と名く。　是の故に瑜伽者は、　此を能く悟了し　彼の自性は不生なり、　眞實は妄失なし、　一切を盡く知解すれば。　猶水中の月の如し、　又箭・手を撚る如く　云何が火相を生ず　是の火、箭より生ずるにあらず。　亦人手を撚ずるにあらず、　諸相盡く度量せば、　俱時に無所得なり。又此の火の生ぜらるは、　假にあらず亦實にあらず。　是の故に諸法中　應に是の如く作意すべし。

【三】含識。心識を有するもの、卽ち有情を云ふ。

【四】應に是を云々。(Tib.) boh-kakkoh sbyor-bas / de-yi-bde-ba-śes-par-bgyur /
(譯)金剛・蓮華瑜伽を妙樂と知る。

是の勝喜中是の如き部を得。

說方便品第十三[一]

復次に一切金剛儀軌瑜伽尼方便灌頂戒を宣說す。謂ゆる刹那・飲食・喜等なり、[二]諸佛・如來に鑁字に安住す。正に一相に等しく、灌頂を得て成就す。復次に金剛薩埵佛に白して言さく、世尊よ。是の如き鑁字云何が說いて拏吉尼と爲す。如來、調御師となりて我がために其の次第の如く說き給へ。

佛言はく、是の中、鑁字は唯だ一體性最上莊嚴なり。阿賴耶は諸佛の寶藏となす、初めの喜等に於て刹那を分別して妙樂智住す。謂ゆる莊嚴・果報・作觀・離相なり。瑜伽を修する者は四刹那に於て正行を當に是の如く知るべし。莊嚴とは、即ち初喜中の方便を、種種の理・事と說く(謂ひなり)。果報とは、即ち勝喜の妙樂觸の謂ひなり。作觀とは、即ち離喜我が受用する所を說いて尋伺と爲すを謂ふ。離相とは、即ち俱生喜、三種の貪と無貪と及び彼の中間を遠離するなり。復次に灌頂阿闍梨、四種の祕密觀想の次第を以て清淨心を發して、熙怡顧視して福慧を具し、煩惱を滅除し、諸の衆生に因緣成熟すと知り、爲めに四種澡沐灌頂を說く。二手を以て金剛鈴杵を執り、其の灌頂者、面目熙怡、色相莊嚴す。大拇指と無名指とを以て種種の供養を施設し已つて、爲めに說いて大印を攝受す、彼の弟子是の大種族を知つて。瞋恚及び我慢習を遠離す。調御敎誨し、金剛杵を執つて、其の本尊に隨つて灌頂作用相應契印とを說く。自らの師尊を見て恭敬供養す。佛世尊の如く寂靜を具す。此の瑜金剛伽印法を出生 成就して分別せず、又應に我の如く大威を以て、生死泥に沈溺するを拔濟し大歸救を作す。爾の時弟子金剛杵を執つて、盡世の甘美廣大の飲食・燒香・塗香・幢幡・寶鐸及び妙華鬘是れ等の供養を以て、種々の勝喜・妙樂・刹那・遠離乃至菩提の最後邊際に於て、金剛杵

【一】說方便品第十三。(Tib.) kyeḥi-rdo-rje-mkhaḥ-ḥgro-ma-dra-baḥi-sdom-pa-las-rgyud-thams-cad-kyi-gleṅ-gsi-dañ-gsaṅ-baḥi-skad-ces-bya-baḥi-leḥu.

【二】諸佛如來云々。(Tib.) saṅs-rgyas-kun-gyi-s lom-pa-ni/ evaṃ rnam-par-rab-tu-gnas/ evaṃrnam-paḥi bde-chen-po/
(譯)諸佛の戒は、evaṃ. に安住す、evaṃ. とは大樂者なり。

所を說く、能觀・所觀は華に香あるが如く、華性、若無くば香得べからず、身相妙樂も亦復是の如し、性に於て性なきは佛の知覺の如し。癡暗・無知及び餘の怯弱、悉く能く破壞す。彼の[七]金剛喩沙三摩地は極めて妙樂行なり。唯だ一體相を佛の實藏となす。我が所說の法を聞かば、自ら功德信順す、世・出世間の調御者たる者、喜・倶生喜等を離れたる卽ち我自性は燈明を以て諸の黑暗を破る如く、三十二相八十種好、[八]皆樂輪の所に安住す。彼の相若無くんば是の義有るに非ず。諸の聖天に於て應に棄捨せず、是の故に覺は性あるにあらず、色亦性なし。諸相は相にあらず、皆、勝妙樂なり、又諸の世間、自他色相悉く倶生の故に、心相清淨は卽ち還滅と[九]名く、若本尊に於て、相應出生せる、威儀・色相及び安住處に、彈指頃も執著せる者の如きは、譬へば少毒藥の能く多命を害するが如し。彼の毒を知つて已に還つて能く毒を壞し、又分別して强いて分別し、清淨有を以て煩惱有を破る、風病人の[一〇]摩沙豆を食する如し、病愈ゑ風を發す、顚倒藥と名く、相決定をして常に尋伺し、而して一切法性を分別なす、譬へば人あつて少水耳に入つて還つて水を以て取り、又諸の衆生貪火に燒かる如し、諸の惡業の纒縛する所となる、我は方便を以て、爲めに貪火を說いて解脫せしむ、人有つて火を燒烙す、若還つて炙るに火を以てせば、卽ち是れ貪を以て貪縛を斷しむなり。而して是を知る能はざる顚倒せる觀想者、是の人を名けて佛法中の外道となす、[一一]又蓮華部と相應分別せる此の五大種、觸堅硬性の執著を生ず、癡法を對治す、是れ卽ち地界毘盧遮那如來、菩提心の容受する所なり、色身業用是れ卽ち水界阿閦如來、水地相搖れ、熱、觸れて火を生ず、貪熾を對治す。是れ卽ち火界無量壽如來、餘部を思惟する動轉相あり。嫉妬を對治す、是れ卽ち風界不空成就如來、此の妙樂に於て愛樂を生ず。卽ち虛空は兩舌を相對治す。是れ卽ち空界寶生如來、此の五大種を剎那頃に心は能く了知して一味と等同なり。是の故に勝喜中に於て貪等の五火を分別し大妙樂と同一本性たり。十殑伽沙數の如來衆あり是の一部と同じく、是の一部に復百萬無數大倶胝部あり、

【七】金剛喩沙三摩地。(Tib.) rdo-rje-btsun-mohi bhaga.

【八】樂輪。(Tib.) btsun-mohi-bhaga.

【九】還滅。滅に還るをいふ。滅とは涅槃なり。道を修し、涅槃を證するを云ふ。

【一〇】摩沙豆(māṣa.)。(Tib.) mon-sran-sde-hu. 印度豆なり。

【一一】又蓮華部(第十品參照)すべし。

に於て常に現前す、成就を求むる者は是の如き煩惱に迷醉し、憂悲・病苦熾然の三毒、刹那頃に如實に相應すと說くも、五無間處に墮せざるを得、設へば屠膾・卑賤・醜陋身、具足せざるありて、惡業を造る者成就を思求し、應に十善を修し愛樂を尊重し、根門を密護すべし、是の人は決定して瞋慢の習を離れて、三摩呬多を成就し得べし。設へ此の時分、祕密行乃至法印に於て、未だ成就を得ざるも、自然、是を得、持明智者、或は瑜儗尼、而して來つて爲めに某印を攝受すと說く、金剛杵を執つて、衆生を利益し、或は廣大莊嚴具相童子を得、[二]悉囉訶香を以て[三]龍腦に和合し、菩提心を以て加持して之に散じ、應に當に一心に彼の聖像を觀ずべし。彼或は爲めに十善等の法を知ること實に明了なりと說く。彼の成就を得て復疑惑なし、或は[四]勝那哩・及び自眷屬も亦應に觀想すべし。邪思・若くは天、若くは[五]阿修羅・[六]緊那羅・夜叉等彼亦自ら所行・行を領解し、當に信敬を生ずべし。瞋怒・色想を起す勿れ、

復次に金剛藏言はく、世尊よ、無我の理に於て、已に說を具足せり。復何の印所・印處の二種を成就すべきや、

佛言はく、如來大悲は隨所に應に具相の明妃を現ずべし。蓮華族に住し、幻化の相を捨す。而して能く勝惠・方便の二種の生滅を照解す。是の二邊際は非生・非滅卽ち眞實性なり。又此の滅の處、處は性あるなし。滅は無盡の故に。瑜伽の生滅の次第是の如し。又修觀者は戲論より生じ、夢の所作の如し、了して幻覺の如くば、實に戲論なし。是の中、所說は曼拏羅の如く、諸の色相を現ず、和合して灌頂の大印及び大妙樂を出生し、是の如く唯だ、大威力の靑・黃・赤・綠及び黑白色・行・非行等を了知す。勝惠方便の二種は相因なり。金剛薩埵に妙樂性ありと說く、曼拏羅に於ては餘の作用なし。時に金剛藏佛に白して言さく、世尊よ、是れ大妙樂は自所相應出生の次第なり。若、性あるに非されば復何の所用ぞ。佛の言はく、快なる哉、大士、信を以て疑を除け。我は世間身妙樂する

【二】悉囉訶（sihlaka）。乳香なり。

【三】龍腦（羯布羅karpūra.）。雲母の如くにして、日く鹿射香なりと傳ふ。現今樟腦の類にあらざるか。

【四】勝那哩。(Tib.)mchog-thob-pa-yi-bud-med.

【五】阿修羅（asura, 非天）その果報勝れ天に似たるも天に非ず、常に帝釋と戰鬪を事とせる神なり。

【六】緊那羅(kinnara)人非人)歌神・樂神の名なり。

酤嚕薩嚩二合彌

獻閼伽水眞言に曰く、

[15]唵引弱吽引鍐斛龕覽

淨水眞言に曰く、

[16]唵引梨引梨引吽引恪、

獻食眞言に曰く、

[17]唵引探探

[1]熾盛拏吉尼所說成就品第十二

復次に、金剛藏言さく、世尊よ諸の法海に於て、云何が成就を求むる者となすや、略して是の如き本尊の色相を說きたまへ。佛言はく、無我明妃、或は吉祥呬嚕迦とをなす。一刹那頃に彼の安住を知る、及び廣大淸淨儀軌に於て、若くは時、若くは處の最初修習を是の故に略して說くべし。

復次に眞言を持する者は、一心に三摩呬多を成就すべし、己の住舍に於て、或は夜時分、勤勇心を發し勝慧相を以て、應に吉祥呬嚕迦の像を觀想すべし、塵穢を澡浴し新淨衣を著、旃檀香を手足に塗瑩し、荳蔻齒木及び妙香果を嚼み非時食なし。佛、世尊の如く想を出離するを求め、智者に親近し行人を觀想す、刹那頃に於て忽ち異相起らば、所持明に於て、心調柔し難し、爾の時行者應に止息せず、決定精勤して成就を趣求せよ。

佛、金剛藏に告げて言はく、我禪定心は能く煩惱毒を壞すると說く、成就を求むる者は極めて善く籌量せよ。一月分に於て心に聖像を存すれば諸の攀緣を離る、或は一日中相續して觀想せば、其の所辨に隨つて大果利を得、所有輪轉・自他二利、餘の方便に非ず、速かに能く修習せば、所持明

khehi rdo-rje kdros-mchod-pahi/ lha-mo-khyod ni-dbaṅ-du-ḥgyur/ che-ge-bdag-ni dkyil-ḥkhor ḥdri/ likhimitvātha?cevaparārtha? cesādhitaṃ gacchu havyabhu ka-āgamisya si yathākale sarva siddhi kuru śvame.

【一五】 oṃ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ khaṃ raṃ.

【一六】 oṃ ri ri hūṃ khah.

【一七】 oṃ dhvaṃ dhvaṃ(?)

【一】熾盛拏吉尼所說成就品第十二。(Tib.)kyeḥi-rdo-rjem khaḥgro-ma-dra-ḥabi-sdom-pa-las-dṅos-grub-gtan-la dbab-Pa śes-bya-baḥi-leḥu.

四臂手弓箭を執り、[五]優鉢羅華及び蓮華鉤を持す。是の如く觀想することは、三界を信愛すとなす。[六]刹帝利眞言十萬遍を誦し、宰官一百遍を誦し、世間・衆生一萬遍を誦す、諸天二十萬遍を誦し、阿修羅七十萬遍、藥叉傍生一俱胝誦す、三の所說の如く清淨相に住す。[七]諸佛世尊の金剛堅固の身を、普く能く攝受し、曼拏羅及び護摩を作す時、彼の晨朝に於て佛像に承事し、加持を作し已つて、諸佛、虛空に遍滿すと觀想す。本尊に隨屬して已の心內に入る、眞言行を應に善く解すべし、種種の供養皆吽字より出生す。彼の眞言に曰く、

[八]唵引嚩日囉二合補瑟閉二合阿引吽引薩嚩二合訶

[九]唵引嚩日囉二合度閉引阿引吽引薩嚩二合訶

[一〇]唵引嚩日囉二合禰引閉引阿引吽引薩嚩二合訶

[一一]唵引嚩日囉二合吽提阿引吽引薩嚩二合訶

[一二]唵引嚩日囉二合迺尾儞引阿引吽引薩嚩二合訶

阿伽水を獻ずる儀軌の次第、前の如く已に說けり。我今復護摩法を成就するを說く、息災は圓爐、白色、廣さ一肘半、深さ等半。增益は四方、黃色、廣さ二肘、深さ一肘。降伏は三角、黑色、廣さ十指、深さ五指。信愛は紅色。鉤召は信愛の如く同じ、忿怒は降伏と同じ、息災は肘麻を用ひ、增益は酪を用ひ、降伏は[一三]羯諸迦木を用ひ、忿怒も棘木を用ひ、信愛・鉤召並びに紅優鉢羅を用ふ。

[一四]火天歡喜眞言に曰く、

唵引阿枿那二合曳摩訶引帝惹薩哩嚩二合歌引摩鉢囉二合娑引馱各歌引嚕拏也二合訖哩二合多薩埵引囉他二合遏悉銘二合散儞呬都婆嚩枿那也三合嚩引喝那怛鑁二合儞尾索引叱部引多引梟呬嚩日囉二合鮎引馱布引儞底那引那引囉怛那二合馱哩引馱引哩引二合阿母鮎引欲曼拏朗栗契多莎哩覃二合摻嚩鉢囉二合哩覃二合摻娑引提耽枿搽賀畔部葛阿引枿彌奢悉野他引歌引梨薩哩嚩二合悉提

【五】優鉢羅。青蓮華を云ふ。

【六】刹帝利(kṣatriya)。王種なり。

【七】諸佛世尊以下。(Tib.) kyeḥi-rdo-rje-mkhaḥ-gro-ma dra-baḥi-sdom-pa-las-brtag-pa-gñis-pa-rab-gnas-kyi-leḥu.

【八】oṃ vajra puṣpe āḥ hūṃ svāhā.

【九】oṃ vajra dhūpe āḥ hūṃ svāhā.

【一〇】Oṃ vajra dīpe āḥ hūṃ svāhā.

【一一】oṃ vajra gandhe āḥ hūṃ svāhā.

【一二】oṃ vajra naivedya āḥ hūṃ svāhā.

【一三】羯諸迦(kaṇṭaka.)。(Tib.) tsher-ma.棘木を云ふ。

【一四】火天歡喜眞言。agni-saṃtoṣa-mantra. この眞言は西藏譯本は眞言の中央の部を西藏語を以て表し、漢滿蒙藏四體合璧大藏全呪にはこの西藏譯本の西藏語の部分を「以上七句、漢經俱係呪語、番經係取呪意譯文、今遵漢經仍照語對音記入」と註記してゐる、今は西藏譯本による。

oṃ agnaye mahātejaḥ sarva kāma prasādhakaḥ kir-upi kṛta satvārtha samina sannihitobhavāḥ ma-ma-rin-chen sna-tshogs bdsin/

身諸色想悉く所動なし。金剛藏佛に白して言さく、世尊よ、云何が五大種。[一六]佛言はく、是れ菩提心の所容受・觸堅硬法即ち是れ地大なり、彼の濕潤性は即ち是れ水大、彼の溫熱性は即ち是れ火大・彼の動轉性は即ち是れ風大、妙樂性即ち是れ空大と說く、此の五大種は能く繫縛と爲る、若し妙樂に於て俱生喜發すれば、是れを自性と說く、一切の所作は是れ即ち持戒なり、以て大悲方便の相應する所なり。設へば護摩・粉布・輪壇あらずして、猶色相に於て心心平等のごとし。

卷の第三

[一]金剛藏菩薩現證儀軌王品第十一

佛、金剛藏に告げて言はく、顰眉顧視を忿怒眼と名づく、二目左に顧視を向くるを信愛眼と名づく、右に顧視を向け、或は二目仰視するを並びに鉤召眼といふ。二目平視、或は[二]鼻準上を視、出息或は屏氣を觀ずるを並びに信愛といふ。入息を觀ずるを鉤召用、鬼宿日を說き、乳木樹を觀ずるを信愛用と名く、金剛杵を以て、草木の動ずるを止め、並びに息災は鉤召用なり。六月分に於て修習相應して成就無礙なり、佛、神力不思議を以ての故に、成就を得已つて、諸衆生をして、佛知見に入らしむ、應に降伏して、損惱事を作すべからず。又此の三昧を應に分別せず、大罪咎を得るも、諸の所作事、乃至語言は畢竟利益す。若し衆生に於て少分も損害せば、是の如き法印は成就し能はず。三昧藥を服するもの、歌詠舞戲・三摩呬多に住す。是れ所對治なり。自他の飲食は五甘露の如し。又是の相を說いて七日中に於て、應に離喜・過失を成就すと知るべし、或は妙殊言音眼目あつて、淨身を修し妙香を出す。影長七步の大身人來る。是の相を見已つて、即ち聖賢と知る、瑜伽を修するもの彼に少分も觸るれば、刹那頃に持明仙と作るを得、我今十二廣大儀軌中に於て略して、[三]酤羅菩薩を諸の衆生に說く、速疾に信愛の法を成就すべし、[四]紇字從り本尊を觀想す。紅色にして

---

cig-skyes-pas-gsan-skyes-pa/ lhan-cig-skyes-par-de-brjod-bya/ rnn-bsin-lhan-cig-skyes-śes-brjod/ (譯)金剛・蓮華相應(結ぶ)によつて、觸堅硬法により。地は生ず。菩提の濕潤性より。水界生ず。火處より溫熱生じ、動轉するにより風といふ。妙樂は空界なり。(この)五(大種)はよく廻る、何の故に妙樂性なくして、大生(種)を妙樂といふや、俱生によつて生ぜるを、俱生といはる(故に)自性を俱生といふ。

【一】 金剛藏菩薩現證儀軌王品第十一。(Tib.)kyeḥi-rdo-rje-mkhar-gro-ma-dra-baḥi-sdom-pa-lus-rdo-rje-sñin-ḥom-non-par-byaṅ-chub-pa-śes-bya-ba-rtag-paḥi rgyal-po.

【二】 鼻準上。(Tib.) sna-yi-rtse-mo. 西藏語の譯は鼻の上なり。

【三】 酤羅菩薩 (Tib.)kurukulleḥi-sgrub-thabs.(酤羅菩薩の儀軌)。

【四】 紇字。(Tib.) ḥrīḥ.

羅是の如き諸の自性あるものは悉く幻化相なり。時に會聽者金剛藏及び一切如來の前に於て、歡喜・踊躍して、是の唱言を作さく、我、喜・最上喜・離喜に於て、是の如き三種世間の色相は悉く無所得なり。及び俱生喜復疑惑なし。時に金剛藏讃じて言はく、善い哉、善い哉、是の中、貪にあらず、離にあらず、及び彼の中間は皆不可得なり。是の如く俱生喜は三種を遠離す、說いて正覺と名づく、佛金剛藏に言さく、知喜等の三種遠離は、現なる浮雲の如く、猶幻化と成る如し、俱生喜に於ては睡夢を覺たる如く、一切の相を破して、無分別を得、瑜伽・印契は悉く能く成就す。我四方の曼拏羅を以て、熾盛光明を放ちて、四門の樓閣[11]に調御す。珠・瓔・半瓔・雜色交映して無量間錯し、八柱を莊嚴す。[12]金剛線を以て平等に相應し、種々の妙華・燒香・塗香及び妙燈明は八大賢瓶を殊妙に莊嚴し、彼の瓶中に波羅葉・吉祥樹枝を挿む、五寶末を入る、上妙繒䰉(その)瓶項に繫覆す、自らの本尊隨つて第九賢瓶を作る、殊妙相前の如く嚴飾すべし、線及び智線應に善く抨量すべし、輪檀に於て誦する所、一洛叉及び阿瘦多數、誦する所の眞言は前の如し已に說けり。又瑜伽者は先づ淨地を擇んで、諸の飮食を施し、已の身を護ることを作せ、その所見の如く處行を觀想し、自壇中に灌頂法を示し、供養祈請皆上の說の如し、內外兩重を善巧安布す、遨哩明妃を次の如く紛畫す、東方に寶刀を紛畫し、南・西・北方・四維・上下も亦復是の如し。時に金剛薩埵身を清淨澡浴し妙香を塗り。華鬘・珠寶・極めて勝れたる莊嚴をなし、勇猛決定して[13]茶歩を引離して、阿闍梨の大曼拏羅に入る、[14]兩吽字を稱して勇猛勢を作す。復[15]呬呬字を誦へて怖を辟除し畢る、二臂と空智金剛と相應す。然る後眞實を說いて平等淸　淨智相となす、他敎を壞せず。輪轉を息除す、所觀なきに於ては、能觀者なし、取なく、不取なく。二相を離るゝ故に、又瑜伽者は諸の飮食あつて復淨穢なし、癡厭を生ぜず、三毒・兩舌・嫉妬・慢・過慢等あるなし、若しは寃、若しは親心に動かさるなく、何かんが意の中に於て、我相生じ得るや、自性淸淨本然の故に爾り。彼の金剛拏吉尼等是の妙樂を與ふ。

【三】　三指量(trayāṅgustha.)。(Tib.) the-boṅ-gsum.
【四】　我(ātmā)。(Tib.)bdag.
【五】　人(poṣa)。(Tib.)gso-ba.
【六】　衆生(sattva)。(Tib.) sems-can.
【七】　受者(vedaka.)。(Tib.) tsor-ba-po.
【八】命者(jīva)。(Tib.) srog-pa.
【九】　士夫(puruṣa.)。(Tib.) skes-bu.
【一〇】　補特伽羅 (pudgala.)。(Tib.) gaṅ-zag.
【一一】　樓閣。(Tib.) rta-bbas.
【一二】　金剛線。(Tib.) rdo-rje-srad-bu.
【一三】　茶歩(tapa.)。
【一四】　兩吽字hūṃ. hūṃ。
【一五】　呬呬字hi. hi。
【一六】　佛言はく云々。
Bola kakkola spyor-bas/ reg-pa-sra-baḥi-chos-kyis-ni/ sa-ni-de-las-skye-bar-ḥgyur/ byaṅ-sems-khu-baḥi-rnam-pa-las/ chu-yi-khams-ni ḥbyuṅ-baḥi-ḥgyur/ bsgyod-Pa-las-ni hrod-skye-ste/ ḥgro-bas-rluṅ-du-rab-du-grags/ bde-ba-nam-khaḥi-ñid-kyi-khams/ lhn-po-rnams-kyis yoṅs-su-bskor/ gan-phir-ḥbyuṅ-ba-che-bde-ba/ de-phir-bde-ba-de-ñid-min/ lhan-

淨なり。下方は地行明妃、即ち觸境清淨なり。上方は空行明妃、即ち法境清淨なり。又地行・空行の二種の明妃は、是の輪回・涅槃從りの所出生なり。外の[8]第二重四隅の清淨を成就せる者は、謂ゆる伊舍那方に卜葛西明妃、即ち地大清淨なり。火天方に設嚩哩明妃、即ち水大清淨なり。酒哩底方に賛拏哩明妃、即ち火大清淨なり。風天方に努彌尼明妃、即ち風大清淨なり。一十六臂は即ち[9]一十六空清淨なり。四足は即ち四魔清淨なり、八面は即ち八[10]解脫清淨なり。三目は即ち三金剛清淨なり。說いて(曰く)金剛空智は即ち瞋清淨なり。嚩哩明妃は即ち貪清淨なり。金剛拏吉尼明妃は即ち嫉妬清淨なり。遨哩明妃は即ち兩舌清淨なり。金剛明妃は即ち癡清淨なり。是の如きは蘊等の淸淨出生の次第なり。彼れ是の法を棄捨し眞實を成就し能ふなくば、則ち蘊等の纒縛する所となす。若し世間の礙闇・眞實を了知せば、即ち是の縛より解脫を得、是の故に非色・非聲・非香・非味・非觸・非法・亦非世間・心淸淨の故に即ち一切淸淨なり。

灌頂品第十[1]

佛、金剛藏に告げて言はく、復次に弟子灌頂曼拏羅法を、其の次第の如く我今當に說くべし。瑜伽を修する者は、先づ淸淨地、或は殊妙園林の菩薩・聖賢の得道の處を、吽字儀軌を以て警覺を作し已つて、然る後、殿閣中に於て、五寶末或は米粉末を以て、最上大曼拏羅を粉畫し、其の壇を[2]三肘三指量と作す、[3]或は四指量に增す。明者は入り五部を出生す。乃至童子も亦應に是の輪壇中に親近す。先づ弟子をして帛を以て面を覆はしめ、及び爲めに此の親近し得難き希有の相を說く、是の如き平等・作用・境界・自他領納悉く能く棄捨す、有無性に於て、塵染等を遠離して虛空の若し、智慧・方便・染・無染等を以て、衆生緣力・最上文字諸れ一切の觀照安住する所なり、又彼の世間の有性・無性の建立せらる所なり。及び餘の所有ゆる[4]我・[5]人・衆生・色者・[7]受者・[8]命者・[9]士夫・[10]補特伽

閻魔方＝南方
水天方＝西方
酤尾羅天方＝北方
(第八品註釋參照)

【八】外の第二重四隅とは
伊舍那方＝東北方
火天方＝東南方
酒哩底方＝南西方
風天方＝北西方
(第八品註釋參照)

【九】一十六空とは、內空・外空・內外空・空空・大空・勝義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無際空・散空・本性空・自性空・一切法空・無性空・無性自性空の十六なり。

【一〇】八解脫とは、舊譯に八背捨といふ。
一、內有色想觀外色解脫
二、內無色想觀外色解脫
三、淨解脫身作證具足住
四、空無邊處解脫
五、識無邊處解脫
六、無所有處解脫
七、非想非非處解脫
八、滅受想定身作證具住
の八をいふ。

【一】灌頂品第十。(Tib.)dbaṅ-gi-leḥu.
【二】三肘(tri hasta)。(Tib.)khru-grum.

し、如來所說の彼の妙樂は一刹那に降伏を得、自境界に於て悉く能く棄捨す。諸の了悟智及び語言道・加持の次第は唯だ趣向を用ふ、一切智智、自他了知、地水火風及び餘の空等は刹那頃に悉く能く破壞す、天上[二三]・人間・地際[二四]は刹那頃に於て皆同一相となる。諸の分別を離れ自他の所を侵撓爲さず。持明、諸の業用等を成就す、設へ復生死の中に於て、常に清淨にして、譬へば河流亦は燈炷の如く。晝夜の中に於ても眞實は斷ぜず。彼の無智なる者は是の儀軌に於て、徒らに疲勞を設け、此世、他世能く成就することなし。

清淨品第九[一]

佛金剛藏菩薩に告げて言はく、清淨品我今當に說くべし。

是の清淨を說くに由つて、一切は疑惑なし、一一の賢聖位を、後當に分別して說くべし。五蘊[二]・五大種[三]、六根[四]及び六處[五]、無知煩惱の闇も、自性は悉く清淨なり、謂ゆる自身領納[六]及び餘他の所作、妙樂・相應すと說く、境界等は清淨なり。故に佛善巧(を以て)一切性清淨と說き給ふ。

時に金剛藏菩薩、佛に白して言さく、世尊何等をか清淨となすや。佛言はく、色等の境を觀想して能取・所取を遠離す。所謂眼は色を取り、耳は聲を取り、鼻は香を取り、舌は味を取り、身は觸を取り、意は妙樂を取る、應に是等無餘の親近是れ即ち清淨と知るべし。說いて(曰く)、金剛明妃は即ち色蘊清淨なり。遨哩明妃は即ち受蘊清淨なり。縛哩明妃は即ち想蘊清淨なり。金剛峯吉尼明妃は即ち行蘊清淨なり。無我明妃は即ち識蘊清淨なり。外の第二重四方[七]・上下の清淨を成就する者は、謂ゆる帝釋方に遨哩明妃、即ち色境清淨なり。燄魔方に阪哩明妃、即ち聲境清淨なり。水天方に尾多梨明妃、即ち香境清淨なり。酤尾羅天方に渴三摩哩明妃、即ち味境清

(Tib.) sñoms-ḥzug. 慧苑音義上卷に「等至といふ謂ゆる加行に由つて沈掉力を伏し其の定に至り身心安和なり」と云へり。

【一八】喜。(Tib.) dgaḥ-ba.

【一九】勝喜。(Tib.) mchog-tu-dgaḥ-ba.

【二〇】妙樂。(Tib.) śin-tu-bde-dgaḥ.

【二一】離喜。(Tib.) dgaḥ-bral-dgaḥ-ba.

【二二】俱生喜。(Tib.) lhan-cig-skyes-dgaḥ.

【二三】天上(mtho-ris)。西藏語の譯は忉利天なり。

【二四】地際(rkaṅ-ḥog)。西藏語の譯は足下なりこれ地獄を指せり。

【一】清淨品第九。(Tib.) rnam-par-dag-paḥi leḥu.

【二】五蘊。色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊をいふ。

【三】五大種。地・水・火・風・空をいふ。

【四】六根。眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根をいふ。

【五】六處。色境・聲境・香境・味境・觸境・法境なり。

【六】領納。吾身心に領受し納得するをいふ。

【七】外の第二重四方とは。帝釋方＝東方

五青色、第六白色(を觀想せよ)、然して六分に於て觀想・相應亦復厭離す。謂ゆる出生次第・非出生次第なり。此の二種は平等に依止す、是れ金剛部は其の生滅に隨ふが所説の法なるが故なり。是の空界を蓮華種智、觀想を[27]三摩鉢底及び妙樂輪と説く、是の如き次第を自ら領納なし、菩提心より是の如き觀想は聖賢を出生す。是の二種輪は悉く倶生の故に、所説の勝惠は出生の義の故に、所説の方便は士夫の用の故に、後、勝義・世俗の二種に分別す。彼の二種輪とは勝惠輪と説く、妙樂輪の如き故に、是の中無量の義を分別して四つあり。是の四種卽ち倶生にして、分れて出生する次第は、一は喜[28]、此を先行と謂ふ、少分妙樂にして進求ある故なり。二は勝喜[29]、此を相應と謂ふ、漸く增勝して[30]妙樂と説く故なり。三は離喜[31]、此に於て妙樂なり、諸根の息除・貪染を厭離す。衆生喜愛すべきが故に、四は[32]倶生喜、一切平等眞實觀想の故に、又此の妙樂は諸の方便を具す、唯だ勝喜中、如實・遠離餘は復説かず。非有の中に於て得べきことなきの故に、他の了知に小て身の所有福・尊重・稱歎・方便・附近の諸の薄德の人、彼の少睡眠、若くは飲、若くは食・境・思念及び餘の一切は其の所見の如く、上中下に於て平等一味の眞實觀想なり。下劣品に於ても少しも句義を略すること勿れ、最上品に於ける觀想をなせ。中品に於ては此の二種を離る、是の如き六根は諸れ動息あり、淨盡して餘すなく、共に所修作は、彼の一味に等しく、彼の妙樂輪は等同に眞實の觀想を開示す。是の如き所説は、三有及び諸世間を出生す、我が所見一切を觀照する如し、是の故に三摩呬多を畢竟修習す。此の成就に於て、復疑惑なし、設へば大印に於て畢竟進求する如し、世間を觀想する諸の所作意は悉く觀想に非ず、諸法智を觀ずるも亦觀想にあらず。諸の所動の植物の枝葉曼草及び自他身の一切色相は、是の大妙樂の悉く有性にあらず。自らの所得に於て觀想を成就す、所生の業用は王者尊の如し、自らの取捨に隨つて一切無礙なり。貪・瞋・嫉妬及び我慢等の諸の所愛樂は、乃至十六分中其の一に及はず、智慧・方便・自性を以て出生せる諸法及び彼の三世は虛空の如

---

rnal-ḥbyor-ma.

【一六】遨哩明妃、帝釋方(東方)に安ず。

【一七】陬哩明妃、焔魔方(南方)に安ず。

【一八】尾多哩明妃、水天方(西方)に安ず。

【一九】渴三縢明妃、酤尾羅天方(北方)に安ず。

【二〇】卜葛西明妃、伊舍那天方(東北隅)に安ず。

【二一】設嚩哩明妃、火天方(東南隅)に安ず。

【二二】替拏哩明妃、酒哩底方(南西隅)に安ず。

【二三】聲弭尼明妃、風天方(北西隅)に安ず。この帝釋、焔摩、水天、酤尾羅、伊舍那、火天、酒哩底、風天等は胎藏界曼荼羅外金剛部院ある天部にして八方天と稱せらるものにしてこれに各々明妃を配せるものと知るべし。(第三、第九品參照)

【二四】空行明妃(khacari)。(Tib.)mkhaḥ-spyod-ma.

【二五】地居明妃(bhūcari)。(Tib.)sa-spyod-ma.

【二六】五印と五佛。輪は阿閦如來、環は無量壽如來、寶鬘は寶生如來、寶釧は大毘盧遮那如來、寶帶は不空成就如來を表するなり。(第六品參照)

【二七】三摩鉢底(Samāpatti)。

び日時分とに住し、一種相應するを以て、遊哩は善く稱讚す、月は大圓照智[二]、及び[三]餘は平等性[四]、或は・標幟・本尊及び種子・法位を、說いて妙觀察と名く[五]、唯だ諸の作用中を、[六]成所作智、及び清淨法性[七]と名く、彼の五智の次第、觀想を是の如く說く、又瑜伽を修する者は、日月時分、及び金剛薩埵を、悉く平等と繫念す。文字は身を出生し、吽[八]發吒の義に住す。彼の薩埵の影像と等しき眞實出生して、作意して觀想すること、前の標幟輪の如し、摩尼[九]の妙光を以て、惠・方便・自性、一切速かに成就す。

爾の時、佛、金剛藏菩薩に言さく、彼の日月・時分とは、勝惠を以て能く揀擇するを謂ふ。最初の遊哩明妃とは、色相を分別して各ゝ異あり。中に於て五位は五明妃に安ず。卽ち五蘊の自性なり。瑜伽を修する者は當に是の如く觀ずべし。初めに[一〇]帝釋の方に金剛明妃に安じ、次に[一一]燄魔の方に最初の遊哩明妃に安じ、[一二]水天の方に[一三]嚩哩明妃を安じ、[一四]酤尾羅の方に金剛拏吉尼に安じ、中に方に[一五]無我明妃を安ず。次に外院には八明妃を安ず。所謂ゆる、[一六]遊哩明妃・[一七]賑哩明妃・[一八]尾多哩明妃・[一九]渴[二〇]三摩明妃・[二一]卜葛西明妃・[二二]設嚩哩明妃・[二三]贊拏哩明妃・弩弭尼明妃・上下方には[二四]空行明妃及び[二五]地居明妃を安ず。大悲空智輪に住するものは、悉く三有に於て、自觀想の所より變現す、此の諸の明妃の皆黑色大忿怒の相は、前の五印を用つて莊嚴す、各一面あり、面は三目を安ず、左右二臂は寶刀及び葛波羅器を執持す。前の[二六]五印とは卽ち是れ輪・鐶・寶釧・寶鬘・寶帶等なり、五佛清淨を以ての故に、五印淸淨なり。此の諸明妃は已に上に說ける如く、無我明妃も右寶刀を執ち、左葛波羅器及び金剛渴椿識杖を持つ。虎衣を衣、蓮華の上に立ち、足は舞勢の如し、智光熾盛にして大火聚の如し、髮髻は金色にして忿怒相を徵し、寶刀を執るは一切の慢・過慢等を斷つが爲なり、葛波羅器は四魔を破して善く成就せしめんが爲なり、金剛渴椿識杖は卽ち空智性及び諸の方便なり。此の儀軌に於て輪法を觀想して成就するものは、最初に黑色を觀想し、第二赤色、第三黃色、第四綠色、第

【二】大圓照智(Tib.)me-loṅ-ye-śes. 卽ち大圓鏡智ādarśa-jñāna なり。
【三】餘 (Tib.) bdun-gyi-bdun-pa. 日のことである。
【四】平等性 (Tib.) mñam-ñid 卽ち平等性智 samatā-jñāna なり。
【五】妙觀察 (Tib.) so-sor-rtog-pa 卽ち妙觀察智Pratyavekṣaṇā-jñāna なり。
【六】成所作智(kṛtyānuṣṭhāna-jñāna. (Tib.) nan-dan-ñid.
【七】清淨法性(Tib.)rdsogs-pa-chos-dbyiṅs 卽ち法界體性智dharma-dhātu-svabhāva-jñāna なり。
【八】吽發吒(hūṃ phaṭ)。
【九】摩尼の妙光。(Tib.) zla-ba chu-śel-nor-buḥi hod.
【一〇】帝釋(Indra)。(Tib.) dbaṅ-po. 東方を司る。
【一一】燄魔(yama)。(Tib.) gśin-rje. 南方を司る。
【一二】水天(varuṇa)。(Tib.) chu-lha. 西方を司る。
【一三】嚩哩明妃 (vāliyogini)。(Tib.) chuhi-rnal-hbyor-ma.
【一四】酤尾羅(kuvera)。(Tib.) lus-ṅan. 北方を司る。
【一五】無我明妃(nairātmā-yogini)。(Tib.) bdag-me-

いてゐる）九は聲羅嚩城廣大聚落、十は[二八]善行城・[二九]憍薩羅城・[三〇]泯陀城・[三一]倶摩羅布哩城・十一は衆所樂處或は大海邊、十二は華果園清淨池沼なり。

佛金剛藏に告げて言はく、我今廣く諸の衆生を利益なさんが故に、瑜伽者の爲めに金剛空智儀軌に於て、日月時分を我今當さに說くべし。[三二]黑月分を取りて第八日或は十四日に、曼拏羅を建て、諸の幢旛を以て寶伎を莊嚴し、七日中に妙飲食を施すべし。大悲心を起して恭敬供養せば、設へ惡來者も倍して憐愍を生ず。復彼の下劣想を生ずる勿れ、魔をして便ち成就すること能はざらしむ、是の故に此に常勤・悲念せよ、諸有所作畢竟成就す、應に是の如く晝夜分に知るべし。慧の決擇を以て復た餘事なく、非時食することなく、邪思を起さず。他の善惡に於て宣傳を樂ふ勿れ。他身を觀察すること己を護る如く、瑜伽を修する者は應に善く籌量すべし、乃至身分・飲食に雜亂を出さず、所有眞言印契、皆[三三]吉祥唄嚕歌の義に住す。[三四]吉祥とは不二智の謂ひの故に、唄とは空性本因の故に、嚕とは染を離れたる勝莊嚴の故に、歌とは無所住の故、是の如く瑜伽を修する者、設へ復戒を毀すも、然かも彼の衆生亦常に信敬す。智あるを以ての故に、金剛葛波羅に悉く相應するが故なり。

[一]大相應輪品第八

復次に相應輪を　我今當に廣說す、　最も先に空界中に、　是の如き觀想を作せ、　其の次に輪壇內に、　諸聖賢出生す、　又輪の圍角に　大風輪を觀想せよ、　水輪も其の次の火輪の如く亦復爾かり、　正法輪を出生して、　清淨にして病惱なし、　八葉は臺蘂を具し、　三角壇の相の如し、　曠　寂なる一心中に、　諸賢聖の位を布く、　彼の淨月輪の如く是の中に種智を安ず、　後から日を以て之を覆ひ、　二種の大樂を集む、　月色の相と、　及

【二二】訶梨國(hari.)?
【二三】藍婆國(lampāka.)。
【二四】鹹海(lavana-sāgara.)。
【二五】迦陵迦(kalinga.)。
【二六】彌佉羅(mikara.(?))。
【二七】矜羯那(kokaṡa.)。
【二八】西藏譯亦七・八を闕く。
【二九】善行城(cāritra.)。
【三〇】憍薩羅(kośala.)。
【三一】泯陀城(vindhya.)。
【三二】倶摩羅布哩(komārapura.)。
【三二】黑月(kṛṣṇapakṣa)。大陰曆の下半月を云ふ。
【三三】吉祥唄嚕歌(Tib.)he-ruka-dpal.
【三四】吉祥とは……無所住の故に。(Tib.) śri-ni-gñis-med-ye-śes-te/ he-ni-rgyu-sogs-stoṅ-pa-ñid/ ru-ni-tshogs-daṅ-bral-ba-ñid/ ka-ni-goṅ-dukaṅ-mi-gnas-paho/
【一】大相應輪品第八。(Tib.) rnal-ḥbyor-maḥi-ḥkhor-lo-sogs-bya-ba-ḥdu-baḥi-leḥu,

を得。決定して彼の勝[一六]天㸑迦羅主と同じく、師子王の如く、彼の處々に於て怖畏を生ぜず。設へ飯食に於て愛樂を生ずるも、瑜伽を修する者は迷亂ぜず、而して常に悲愍心を發す、是に因つて諸の衆生を利樂する故なり。

[一]說密印品第七

佛金剛藏に言はく、祕密印品我今當に說くべし。瑜伽を修習せんと爲すものは恭敬して問訊すべし。勝解を生じ得ば、復疑を感ずることなし、謂ゆる、一指を印と爲し、二指を印と爲すを示めす、或は左[二]大拇を以て[三]無名指を捻じて印と爲す。[四]小拇指を捻じて印と爲す、[五]中指を捻じて印と爲す、方所を示して印と爲す、無名指を示して印と爲す、[六]頸所を示して印と爲す、所著の衣を示して印と爲す。三戟叉を示して印と爲す、[七]胸臆を示して印となす、[八]髮際を示して印と爲す。[九]地を示して印と爲す、[一〇]輪を示して印と爲す、顰眉を示して印と爲す。解脫學處を示して印と爲す。額を示して印と爲す、頸後を示して印と爲す、[一一]足心を示して印と爲す、金剛喜戲を示して印と爲す、我瑜伽を修する者、對治を爲す時說かん。印所印處に善く大悲空智を解し能ふ。獻華手を示す者は、卽ち延て義を請ひ及び三昧耶戒に住す。餘の積集に於て應に遠離せずして、常に最上境界に依止す、是の故に瑜伽を修する者は一切の所作を應に密印と知るべし。

復次に金剛藏佛に白して言さく、世尊よ、何等かの處に於てか、成就を求むや、佛言はく、當に十二處あるべし、魔事を遠離するを尊重する所と爲す。餘は復說かず。何等をか十二、一は[一二]惹藍駄覽國・[一三]歌摩嚕國・或は酤羅山淸淨園林、二は[一四]摩羅鏤國、或は[一五]信度河城、三は[一六]蒙牟尼國、[一七]倶摩羅鉢吒國及び[一八]天后城、四は[一九]酤羅城・[二〇]阿哩母城・虞那哩河及び咽末河、五は[二一]訶梨國・藍婆國・部國・金色城或は[二三]鹹海中、六は[二四]迦陵迦國・洲子國・[二五]彌伝羅國・[二六]矜羯那國[二七](七と八は梵本元と闕

【一六】㸑迦羅主とは因陀羅なり、天主とす。
【一】說密印品第七。(Tib.) bcdn-daṅ gnas-gtan-la bab-pahi-lehu.
【二】大拇(Aṅguṣṭhaṃ)。(Tib.) mthe-boṅ.
【三】無名指(anāmikā a)。(Tib.) srin-lag.
【四】小拇指(kaninika.)。(Tib.) theḥu-chuṅ.
【五】中指(madyāṅguli.)。(Tib.) mdsub-mo.
【六】頸處。(Tib.) mgrin-pa.
【七】胸臆(stana.)。(Tib.) nu-ma.(乳房)。
【八】髮際。(Tib.) mtshams.
【九】地。(Tib.) so(齒)、
【一〇】輪。(Tib.) kha-ba(口)。
【一一】足心。(Tib.) rkaṅ-mthil(足の裏)。
【一二】惹藍駄嚕(jālaṃdhara.)。
【一三】歌摩嚕(Kāmarūpa.)。
【一四】摩羅鏤(Molava.)。
【一五】信度河城(Sindhu.)。
【一六】蒙牟尼(Mumuni.)。
【一七】倶摩羅鉢吒(Kumārap-ātaka(?))。
【一八】天后城(devi-koṭa.)。
【一九】酤羅城(Kulupa.)。
【二〇】阿哩母城(Arbuta(?))。

むべし。是の如き行を攝受するに隨つて、彼の阿闍梨開悟を作さんと爲す。金剛部に於ては、本尊を觀想して部主と作し、設へ復別部中に於ても菩提種智を出生す。亦た安住を其の攝受に隨つて爲すあらしむ、謂ゆる金剛・歌舞・事業等しく歡喜を生ぜしむ、喜歡を生ぜしめ已つて、金剛嬉戲是れに因つて解脫す。舞を作すに由るの故に金剛步を引いて能く三摩呬多[七]を隨證す。[八]輪は阿閦如來を表し、鐶は無量壽如來を、頸上の鬘は寶生如來を、手の寶釧は大毘盧遮那如來を、腰の寶帶は不空成就如來を表す。是の色相に於て忿佉を生ず。金剛渴椿識杖は勝慧相を表し、[九]奎樓鼓は卽ち善方便の故に、瑜伽行者は瞋恚淸淨なり。金剛歌詠は眞言淸淨に住す。又復利養を求むることを爲すべからず、是れを金剛・歌舞・事業と作す。この故に瑜伽行者は當に是の如く行ずべし。飯食醫藥に隨つて服行を樂び。常に眞實護持すれば、老死の逼惱する所と爲さず。又瑜伽者は髮を[一〇]髻冠と作し、吽字の儀軌を以て、五佛の葛波羅を持す。或は五量指の葛波羅器を作り已つて、雙寶帶を以て、髮冠中に繫ぐ、卽ち是れ勝惠・方便・自性なり、又瑜伽行者は灰を髮線に塗り、腋衣を作つて絡し、奎樓鼓の聲を以て念誦を作す。金剛渴椿識杖を觀想して勝惠と爲し、金剛葛波羅に於て觀想念誦し、[一一]貪・瞋・癡を極めて畏るべきと知るが故に、戲論に於ける事は悉く能く遠離す、設へ復、睡眠速かに應に勤策すとも、所行・所に於て疑惑を懷く勿れ、是の身を捨し已つて、平等觀を修せ、福・非福に於て如實に尋伺す。是の故に非施亦受けざる者、又諸の飯食其の所得の如くに自ら受用し、[一二]美・[一三]不美に於て堅く執取することなし。亦此の應食者・不應食者を分別することなし、是の如く伺察す。又同行の阿闍梨所に於て、是に可往者・不可往者の分別を起さず、有學の弟子を說いて正智と爲し、成就を得せしむ、自師尊に常に禮敬を行ふ。是に因らしめなくば成就を退失し、[一四]無間獄に墮す。及ひ慚恧のことも亦復是の如し、諸の有自性は悉く是れ大悲相應の行なり。[一五]護魔等の事妄りに施設することを勿れ、眞言・靜慮常に修し、諸の三昧門を出離し解脫を求む所作行悉く妙相應して現前する

【七】三摩呬多。等引又は等持と云ひ、止言心止息の定をいふなり。

【八】輪・環・鬘・寶釧・寶帶を五印と稱す、卽ち空智明王の身を莊嚴せる具なり。(第八品參照)。

【九】奎樓鼓 (damaru.)。(Tib.) cañ-te-hu. 乞僧等の讀經の時用ふる小鼓を云ふ。

【一〇】髻冠。(Tib.) cod-pan.

【一一】貪・瞋・痴。三毒と名く。貪 rāga 引取の心をいふ、卽ち迷心を以て順情の境に對し引取して厭くなき心なり、瞋 pratigha. 恚忿の心をいふ。痴 moha. 迷闇の心をいふ。

【一二】美。(Tib.) yid-hoṅ 心に好めるものをいふ。

【一三】不美。(Tib.)(yid)-mi-hoṅ 心に好まざるをいふ。

【一四】無間獄。梵名を阿鼻 avīci と云ひ、八熱地獄の一にして苦を受くること間なしと云へり。

【一五】護魔(homa.)。(Tib.) sbyin-sreg. 又は護摩、焚燒と譯す。

是の如き妙樂を獲え、自ら常に受用することに於て、生老門を淨盡するを說いて安樂定と名づく、

tshaṅs-ba.
【一五】尾瑟拏(Vṣṇu)。(Tib.)khyab-ḥjug.(偏人の義)
【一六】大自在(maheśvara)。(Tib.) śi-ba.

【一七】薄伽梵(bhagavān)。(Tib.)bcom-ldan-ḥdas. 世尊と譯す。
【一八】大智母。(Tib.) śes-rab-ma. 即ち般若菩薩(Prajñāpāramitā)なり。
【一九】有性。(Tib.)skye-ḥgro-ba. 出離解脫の性ある者をいふ。即ち三乘の性である。佛性なきは無性と云ふ。圭峯の略疏下には「有性者三乘性也、無性者闡提性也、非レ爲ニ他日廻心一、現已齊成ニ佛道一」と云へり。
【二〇】曼拏羅(maṇḍala)。(Tib.)ḍkhil-ḥkhor. 輪圓具足と譯す。曼拏羅に三義あり、即ち輪圓の義、發生の義、聚集の義なり。こゝに說く曼拏羅は本經所說の五明妃、八明妃、及び地居、空行明妃等を四方四隅上下に措けるを云ふ。(第八品參照)。

卷の第二　第三同卷

[一]行品第六

爾の時佛金剛藏菩薩に告げて言はく、我今復最上到彼岸行を說くべし。此に於ける先行・畢竟・成辦是れに由つて金剛空智を成辦す、彼の修觀者は當に是の如く行ずべし。謂ゆる頂には寶輪を想ひ、耳には寶鐶を帶び、手には[二]寶釧を串し、腰には寶帶を垂れ、足には[三]寶鐸、及び[四]妙臂釧を繫ぐ、頸には寶鬘を嚴り、虎皮衣を衣、[五]甘露を嘗む、又修觀者は空智に於て相應を作すと爲す故に、此の五色の相は平等和合にして亦無分別なり。無量の相は即ち一色相なるを以て、是の故に分別するを得べからず、一樹下或は塚壙間、乃至夜分、[六]空寂舍中に於て、淸淨安住して觀想を作せ、佛智慧に隨つて悟入することあり。是の如き勝行を乃ち爲めに說くべし。又若し是の如き行を樂求成就せんとするが故に、應に廣大莊嚴を以て阿闍梨に詣で、極めて悲愍爲し、灌頂法を求

【一】行品第六。(Tib.) spyod-paḥi-leḥu.
【二】寶釧。(Tib.)lag-gdub.(腕環)。
【三】寶鐸。(Tib.) rkaṅ-gdub.(足環)。
【四】妙臂釧。(Tib.)dpuṅ-rgyan.(肩の飾)。
【五】五甘露。(Tib.) bzaḥ-ba-mi-hchi-bcu-phyed.(半十の不死の食物)。
【六】空寂舍。梵名を阿練若といひ、村落を去る一俱盧舍にして修行に適する地をいふ。

を分別せざる如し、當に親近に勤策すべし、若し祕密にせざる者は、常に[六]畔拏賊中に墮し、猛火の地上を履む、是の如き苦を獲べし、此の五部の印・呪を、說いて解脫の因と爲し、而して復此の印を說いて、金剛祕密と名づく、謂ゆる[七]金剛・蓮華、事業・如來・寶なり、是の如き五部を說いて、最上の大悲と爲す、金剛は拏彌の印、蓮華舞も亦然り、事業を染師と爲し、如來は清淨女、寶部は贊拏哩なり。此に五印を決定すべし。如來部も亦然り、總略によつて分別せば、去は卽ち如來行、來は卽ち吉祥座、

勝慧相應するを以て是れ如來の所說とす。開說して六種となし、總略によれば唯五部、後に復三事あり、謂ゆる身・語・意業なり、又此の五部を、卽ち五[八]蘊の自性と說く、是の如く出生せる身、是れを說いて此の部と爲す。所觀の聖像も無く、亦能觀の者も無く、眞言・住處も無し、五種の自性より、大[九]毘盧遮那、及び[一〇]阿閦如來、[一一]不空成就佛、[一二]寶生・[一三]無量壽、[一四]梵天・[一五]尾瑟拏及び[一六]大自在と、一切の眷屬等を成す。故に眞實を開示す。梵王は正覺を成じ、尾瑟拏は信愛、大自在は吉祥、一切は常に安住し、廣大眞常樂を、開悟し愛樂せしむ、是の如く身中より、諸の賢聖を出生す、是の人は福智あり、[一七]猶薄伽梵の如し。自在熾盛等の六種の德を具足す。又佛世尊の如く、諸の煩惱魔を破す、亦[一八]大智母の如く、諸の[一九]有性を出生す、勝慧の諸の姉妹、能く分別顯現す。復染師女の如く、歌詠・舞戲を作す、彼は染師の如く、諸の衆生に親近するを念ず、彼は女人の如く、諸功德を出生すと說く、歌詠・勝慧の如く、旋轉して大悲を成ず、努弭明妃と說く故に諸觸を受けず、彼の諸聖賢に於て、

多種の稱贊を說く、[二〇]當に曼拏羅を畫くべし、行相は前說の如し、其れ指を縛するを以て、或は印を掣開と作す如し、彼の靜なる思惟に於て、應に觀行を成するに隨つて、

ze-mo.

【六】畔拏(vyāḍa)。(Tib.) chom-rkun. 盜賊と譯す。

【七】金剛 蓮華・事業・如來・寶とは金剛界五部の蓮華部・金剛部・佛部・寶部・羯磨部に各相應するものである。

【八】五蘊。舊譯には五陰と譯し、新譯には五蘊と譯す、卽一、色蘊(rūpaskandha)、五根・五境等の有形の物質の總核。二、受蘊(vedanāskandha)。境に對し事物を受け込む心の作用。三、想蘊(saṃjñāskandha)。境に對し事物を想像する心の作用。四、行蘊(Saṃskāraskandha)。境に對し善惡に關する一切の心の作用。五、識蘊(Vijñānaskandha)。境に對し事物を了別識知する心の本體。

【九】毘盧遮那(vairocana)。(Tib.) rnam-snaṅ.

【一〇】阿閦(akṣobhya)。(Tib.) mi-bskyod.

【一一】不空成就(amoghasiddhi)。(Tib.) don-yod.

【一二】寶生(ratnasaṃbhava)。(Tib.) rin-chen.

【一三】無量壽(amit'āyus)。(Tib.) dpag-me.

【一四】梵天(brahma)。(Tib.)

於て、三界の事を成辨す。

[二六] 葛波羅(kapāla)。(Tib.)thod-pa. 人頭蓋にて作れる器なり。[二七] 竭椿誐(khaṭvāṅga)。人頭幢なり。[二八] 寒林(śītavana)。玄應音義七に屍陀林、正言二尸多婆那一。此名二寒林一。其林幽邃而寒、因以名也。在二王舍城側一。死人多送二其中一。今總指二棄屍之處一爲二屍陀林一者取二彼名一之也と。卽ち林葬のところを云ひ、ある林を墓所と定めて屍をこゝに捨て禽獸を飼ふところを云ふ。西藏には dur-khrod と譯す。[二九] 阿修羅(asura)。舊譯には無端正と譯し、新譯には非天と譯す、その果すぐれて天に似たれども天に非らざるの義なり、常に惡心を懷きて帝釋と戰へりと云ふ。

[三〇] 三戟叉(triśūla)。(Tib.) rtse-gsum.

[三一] 金剛星伽羅。(Tib.) rdo-rje-lu-gu-ma.

[三四] 手釧。(Tib.)lag-gdub.

[三五] 帶。(Tib.)ska-rags.

賢聖灌頂部品第四[一]

先づ自心及び自種子に於て、黑色熾然光焰出生し、左手に鉤を執り、右手期剋[二]にす。佛、三界中に住する如く八大明妃を鉤召す。其の本尊を供養するに隨つて、先づ唵字を以て、一切如來の灌頂を得、卽ち彼の佛を以て空智明王[三]の相を成じ、五甘露を持して五如來の賢瓶を成辨し五種の灌頂を作す。當に灌頂する時にあたり、衆名華[四]及び欝金香[五]を散じ、鼓を擊ち詠を歌ふ、金剛部の佛眼母等を供養し、而して能く空智三界を成辨し、四威儀[六]に加持す、彼の聖賢の如きも當に是の如きと知るべし。

大眞實品第五[一]

一切法自性は悉く皆無なり。色にあらず、聲にあらず、卽ち聞なく、見なく、及び香・味・觸にあらず、亦能觸等無きを謂ふなり。善く瑜伽を解する者は、心にあらず、所緣にあらず、諸母姉妹は亦常に供養すべし。彼の努弭明妃は、那底[二]・染師[三]の如く、贊拏哩明妃[四]は、猶淨行女[五]の如し、勝慧方便中の供養儀軌に依つて其

[一] 賢聖灌頂部品第四。(Tib.)dbaṅ-gi-leḥu.

[二] 期剋。(Tib.) sdigs-mdzub. 脅威を示す印契なり。

[三] 空智明王(heruka)。

[四] 衆名華。(Tib.) me-tog-gi-car(花の雨)。

[五] 欝金香(kuṅkuma)。(Tib.) gur-gum.

[六] 四威儀。行住坐臥各々儀則ありて威德を損せざるをいふ。

[一] 大眞實品第五。(Tib.) de-kho-na-ñid-kyi-leḥu.

[二] 那底(naṭī)。(Tib.) gar-ma. 舞女なり。

[三] 染師。(Tib.) tshos-ma.

[四] 贊拏哩明妃(caṇḍālī)。(Tib.)gdol-ma.

[五] 淨行女。(Tib.)bram-

て吽字を觀ず、惠・方便・自性　青色大忿怒　金剛[10]吽歌囉、內心眞實なるを以て、猶金剛杵の若し、又復吽字を觀ず、忿怒の相を出生す、謂ゆる大悲金剛なり、猶青蓮色の如し、此の大悲金剛は　或は日暉色の如し、彼の虛空の若く見ゆ、當に是の如く信解すべし。諸の莊嚴具を持す、供養の八明妃は、[11]遨哩、[12]鹿郎蹉、[13]陬哩は摩尼の器、[14]尾多梨は水、[15]渴三摩哩は藥、[16]卜葛西は獻杵、[17]設嚩哩は六味、[18]賛拏哩は音樂、本尊に供養し奉る、[19]拏弭哩の歌舞は、彼の妙樂・大樂なり。日月晝夜に隨つて、是の種子中に住す、是の如きを有情と說く、勝歡喜の自性は、大神通と轉現し、廣く虛空壇を覆ひ、漸く一心中に略す、悉く忿怒の相と成る、青色の日輪中、眼は[20]紅き曼度迦なり、髮は金色の髻を纒ひ、五印を用つて莊嚴す、[21]輪・[22]環及び[23]瓔珞、[24]手釧・金色の[25]帶は、五佛の清淨を表はす、此を印契と名づくと說く、彼の忿怒の相の、十六童女の形を見よ、左手に金剛、及び彼の[26]葛波羅を持す、[27]揭椿誐も亦然り　右手に青色杵(を持し)　應に寒林中に詣でて、本所尊を成就す。口に吽迦囉を誦し、八明妃に圍遶され、其の方便に隨つて說く、自身は卽ち[28]寒林なり、四臂は四魔を調ひ、降伏して清淨ならしむ、應に吽字を誦せ、色相前說の如く、彼の左の第一臂　手に葛波羅を執る。[29]以て天・阿修羅は、甘露を盛つて充滿す、次に右の第一臂、手に金剛杵を執る、次に左の第二臂、及び右の第二手、般若蜜多敎、或は卽ち佛形像。次に三面六臂、左手に甘露を持し、右手或は日・月、彼の最初の青色の、臂相は前說の如し、都て是の相あることとなし、清淨なる波羅蜜　彼の左の第一臂、手に[30]三戟叉を執り、次に右の第一臂手に金剛杵を執る、左の第二臂鈴、右の第二刀を執り、餘の左右二臂は、[31]金剛星伽羅なり。以て二種和合す、佛像・般若敎、或は復左右手の、刀及び葛波羅、應に空寂處に

字を表はし、金輪時處軌に「阿字は菩提心なり」と云へり。この阿字を一切の太原とせり。

【七】囉字(Ra)。塵垢不可得の義にして、火の物を燒き淨むる如く除障の德を表するとせり。

【八】吽字(Hūṃ)。摧破の義にして、金剛界の智德を表すとなし、一切の最終の意味となす。

【九】沒哩多(Amṛta)。(Tib.) ro. 甘露をいふ。

【一〇】吽歌囉(Hūṃ kāra)。

【一一】遨哩(Gauri)。(Tib.) dkar-mo

【一二】鹿郎蹉(Mṛgalāsca?)

【一三】陬哩(Cauri)。(Tib.) chom-rkun.

【一四】尾多梨(Vetālī)。(Tib.) ro-laṅs.

【一五】渴三摩哩(Ghasmari)。

【一六】卜葛西(Pukasī)。

【一七】設嚩哩(Śavari)。(Tib.) ri-khrod.

【一八】賛拏哩 (Caṇḍālī)。(Tib.)gdol-ba-mo.

【一九】拏弭哩。(Tib.) gyuṅ-mo. (Skt.)ḍomvinī?

【二〇】曼度迦(Vandhūka)。赤き花の名、美果を生ず。

【二一】輪。(Tib.)ḥkhor-lo.

【二二】環。(Tib.)rna-cha. (耳飾)。

【二三】瓔珞。(Tib.)nor-bu.

眞言を以て加持すれば、卽時に應現し乃ち三世の事を問ふ、時に彼の童女、問ひに隨ふて說を爲す。

眞言を誦して、

[六五]唵引一那誐囉引二合那誐囉引二合

又成就法

[六六]尾盧野引尾盧野引

此の眞言を誦すれば、時に象卽ち犇走す。

[六七]曼摩引曼摩引

此の呪を誦すれば、時に虎卽ち犇走す。

[六八]底梨野引底梨野引

此の呪を誦すれば、時に蛇卽ち犇走す。

佛、金剛藏菩薩に告げたまはく、我往昔も亦是の法を以て、護藏醉象を調伏し悉く犇走せしむ。

此の遨哩明妃・設轉哩明妃・金剛拏吉尼は卽ち無我の義なり、彼の地行・空行・鉤召・發遣悉く相應する故なり。

一切如來身語心聖賢品第三[一]

最初慈[二]を觀ぜよ。次に卽ち悲[三]を觀ぜよ、第三に當に喜[四]を觀ずべし、一切處に捨[五]を學せ。初めは空性菩提[六]、第二は種子を集め、三に形像を成辦し、後當に字義を觀ずべし。現前に囉[七]字を觀ず、熾盛日輪と成る、彼の日輪中に、吽[八]字は金剛業なり。又復杵形を觀ず、牆網悉く周遍せり。先づ沒哩多[九]を觀ず、法界智者となる。行人其の上に坐す、自體は卽ち空智なり。自心に囉字を想ふ、輝曜の日輪となる、中に於

(Tib.) sa-lu. 野生米と云へるものなり。

【六三】 oṃ ajra arka maṇḍala maṇḍala tiṣṭha tiṣṭha he vajraya hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ svāhā.

【六四】 金剛喩沙多成就法。これ密敎にて阿尾捨(Avesa)法と稱する一種の方術を云ふに相當せり。

【六五】 oṃ nagrā nagrā.

【六六】 vetuya vetuya.

【六七】 marmā marmā.

【六八】 tilliyā tilliyā.

【一】 一切如來身語心聖賢品第三。(Tib.) lhaḥi-lehu-byams-pa.

【二】 慈 (maitrī)。(Tib.) byams-pa.

【三】 悲(karuṇa)。(Tib.) sñiṅ-rje.

【四】 喜(muditā)。(Tib.) dgaḥ-ba.

【五】 捨(upekṣā)。(Tib.) btaṅ-sñoms.

【六】 空性菩提。(Tib.) stoṅ-paḥi-byaṅ-chub. 卽ち空は阿

此の眞言を一百萬遍誦すれば、即ち一切の聖賢を成就するを得、尙ほ違越せず、何に況や焰摩羅界を破壞するおや。

復次に成就法、若し諸の瘧病と作さんと欲せば[五二]阿哩迦樹の葉上に於て、[五三]唧多迦毒辣藥を用つて、彼の[五四]設覩嚕の名字を書き、[五五]稻糠火中に棄擲し此の眞言を誦して曰く、

[五六]唵引一 呬引嚩惹囉二合二 入嚩二合 囉入嚩二合 囉三 設咄籠二合四 勃籠二合五 吽引六 吽引七 吽引八 發吒莎賀

此の眞言一阿庾多誦すれば即ち成就を得。

若し[五七]摩黏を開きて、法を成就せんと欲せば、自らの臍輪に於て是の觀想を作し、或ひは腹上に於て觀想成辨す、然る後乃ち摩黏を見れば開く。若し信愛法を作さんと欲せば、月の八日分に於て[五八]無憂樹下に脂で、赤色の衣を著け、[五九]未捺那果を食し、[六〇]肝摩歌樂汁を以て額上に塗り、此の眞言を誦して曰く、

[六一]唵引一 阿目計引弭二 紇哩引二合 嚩施引三 婆鏤覩四 娑引賀引五

此の眞言一阿庾多誦し間斷なからしめば即ち成就するを得。

若し日月を制止せんと欲せば、[六二]阿闍梨飯を用つて日月狀と作し、金剛水中に置き、此の眞言を誦して曰く、

[六三]唵引一 嚩惹囉二合 哩葛引二 摩引左羅三 摩引左羅四 底瑟吒二合五 底瑟吒二合六 呬嚩惹囉引二合七 野吽引八 吽引九 吽引十 發吒十一 莎賀十二、

此の眞言七百萬遍誦すれば、即ち日月を制止するを得、彼の晝夜を能く分別することとなし。

[六四]又金剛喩沙多成就法は、日の後分に於て、一具相童女をして諸の香華供養を以て、此の眞言一百八遍を念ず、然る後ち、油を用つて沐浴し、多羅樹汁を取つて、童女の大拇指上に塗り、及び此の

【四九】 曼度迦(vandhuka)。又は末度迦と云ひ、美果を生ずる樹ならんか。

【五〇】 阿閦毘(akṣobha?)。

【五一】 oṃ vajra kuṭhāra pāṭaya pāṭaya hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ svāhā.

【五二】 阿哩迦(arka)。又阿羅歌といひ葉は大にして密教の儀式に用ふ。日華と云へる樹なり。白華といふは誤なり。

【五三】 唧多迦(citraka)。

【五四】 設覩嚕(śaṃtro)。:翻譯名義集第五に「怨家と云ふ」と云へり。(Tib.)dgra-po.

【五五】 稻糠火。(Tib.)ḥbras-phub-kyi-me.

【五六】 oṃ he vajra jvāra jvāra śatruṃ hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ svāhā.

【五七】 摩黏(madya)。(Tib.)chaṅ. 又末陀酒とも云ひ、蒲桃酒といへるもならん。

【五八】 無憂樹。これ阿輸柯と云ひ菩提樹の謂なり。

【五九】 未捺那(madana)。又は末達那と云ひ、檳榔樹の如くその果は大きく、之を食へば醉悶をなす。故醉人果と譯し、又藥用に供せらると云ふ。

【六〇】 肝摩唧歌樂(kaṅkāmacilaka?)。

【六一】 oṃ amukaṃ me hriḥ vasibhatu svāhā.

【六二】 阿闍梨飯 (śali)。

る黑色の花に沐浴し、次に龍華樹の汁を以て之に塗る、或以二白蒿此一代レ之復[三八]象膠を以て、龍王の頂上に塗る、黑月十四日に黑牛の乳を取つて器中に盛滿し、[三九]黑色の童女をして靑色線を合せしめ、壇の[四〇]西北隅に一小池を開き、阿難陀龍王を以て彼の池中に安ず。然る後[四一]阿闍梨法に依つて、聲を厲まし、無間に此の請雨眞言を誦して曰く、

[四二]唵引苦嚕苦嚕二渴泥女轄下間同渴泥三末娑末娑四渴吒渴吒五枯吒野枯吒野六阿難多七閼婆葛囉引野八那引誐引提鉢多曳九咽咽嚕嚕紺十薩鉢多二合播引多引羅誐耽引十一那引誐引那引歌引哩沙二合野十二末哩沙二合野十三誐哩惹二合野十四扑十五扑十六扑十七扑十八扑十九扑二十扑二十一扑二十二吽引二十三吽引二十四吽二十五莎賀二十六

此の眞言を誦し、若し時に雨らずば卽ち當に倒に此の呪を誦すべし、大雨降霔す、又若し雨らずば彼の龍王の頭をして、七分に破し蘭香梢の如くせよ、若し雨を止めんと欲せば、[四三]寒林衣を取つて坐下に置き、此の眞言を誦せば、卽ち能く雨止む、止雨眞言に曰く、

[四四]唵引一阿哩也二合二設摩二合舍引那畢哩二合夜引野三吽引四吽引五吽引六發吒半音七

復次に成就法とは、他軍を降伏し速かに破壞せしむる謂ひなり。[四五]當に畫石を用つて末と爲し、五甘露に入れ、斷鐵草を以て和合して丸と爲し、加持して此の眞言を誦して曰く、

[四六]唵引一嚩惹囉二合葛哩多二合哩二咽嚩惹囉引二合野三吽引四吽引五吽引六發吒半音七

應に先づ此の眞言一十萬遍、或ひは一百萬遍誦し成就を得已つて、卽ち前の藥丸を用ひ、鉼器の頂を畫き、悉く周匝して斷絶せしむことなくば、卽ち他軍速かに皆破壞するを得。

若し[四七]底羅紺法を成就せんと欲せば、當に[四八]末羅摩子、白色[四九]曼度迦華、及び斷鐵草、[五〇]阿閦毘藥を用つて、日蝕時に於て和合して鉞斧形に作し、兩足下に踏み、此の眞言を誦して曰く、

[五一]唵引一嚩惹囉二合黠吒引囉二播引吒野播引吒野三吒吒四吽引五吽引六吽引七發吒莎賀八

【三八】象膠。(Tib.) glaṅ-po-chehi-chud(?)

【三九】黑色の童女。(Tib.) gson-nu-ma-nag-mo.

【四〇】西北隅。(Tib.) rlaṅ-gi-phogs. 西藏譯には風天といへり。卽ち風天は曼陀羅中外金剛部院にありて八方天の一として西北隅にあり。

【四一】阿闍梨(Ācārya)。又は阿祇利、阿遮利夜といひ、軌範と云ふ卽ち善法を敎授し知らしむる者に名く。

【四二】oṃ ghuru ghuru ghuṭu-ghuṭu mana mana ghaṭu ; ghotāya ghotāya anantakgo-bhakarāya nagādhi-pataye he he ru ru kaṃ saptu pāta lagatānnā gānā-karṣa-ya vargaya garjja tarjjaya phuḥ phuḥ phuḥ phuḥ phuḥ phuḥ phuḥ phuḥ hūṃ hūṃ hūṃ svāhā.

【四三】寒林衣。(Tib.) dur-khod-kyi ras.

【四四】oṃ ārya smaśāna priyāya hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ svāhā.

【四五】畫石(Khaṭika ?.

【四六】oṃ vajra kartari he vajraya hūṃ hūṃ phaṭ.

【四七】底羅紺(trilaka)。

【四八】末羅摩子(brahma-bija)。(Tib.)tshaṅs-bahi-sa-bon.

二〇 唵引一 拏叉切上呂角下同 拏叉二 拏叉 吽引三 吽引四 吽引五 發吒半音 莎賀六

二一 禁止眞言に曰く、

二二 唵引一 吽引二 莎賀三

二三 發遣眞言に曰く、

二四 唵引一 龕二 莎賀三

二五 忿怒眞言に曰く、

二六 唵引一 紇陵二合引三 莎賀三

二七 降伏眞言に曰く、

二八 唵引一 吽引二 莎賀三

二九 鉤召眞言に曰く、

三〇 唵引一 枯二 莎賀三

三一 又降伏眞言に曰く、

三二 唵引一 捫二 莎賀三

三三 信愛眞言に曰く、

三四 唵引一 酤嚕梨引二 紇哩二合引三 莎賀四

佛言く、若し天旱せし時、雨を請はんと欲せし者は、先づ曼荼羅を建て、三五寒林を線を用つて、量つて界道を絣ぎ、壇の中心に、寒林中の五色の粉——骨を白粉に作り、炭を黒粉に作り、甎を赤粉に作り、三六雄黄を黄粉に作り、三七陬羅葉を綠粉に作り以二石碌一代レ之——を以て、空智金剛大明王を畫け、八面・四足・一十六臂にして、面各々三目あり、忿怒の相を作し、阿難陀龍王を踏む、復香泥を以て、阿難陀龍王像を揑造し、其の龍王及び妃の種子の字は並びに朴堊を用ふ。五甘露を以て、散ぜ

【一八】 oṃ āḥ hūṃ.
【一九】 淨地眞言° (Tib) sa-spyaṅs-paḥi-sṅags.
【二〇】 oṃ rakṣa rakṣa hūṃ hūṃ hūṃ phat svāhā.
【二一】 禁止眞言° (Tib.)raṅs-par-byeh-paḥi-sṅags(?)
【二二】 oṃ hūṃ svāhā.
【二三】 發遣眞言° (Tib.) skrad-par-byed-paḥi-sṅags.
【二四】 oṃ khaṃ svāhā.
【二五】 忿怒眞言° (Tib.)sṅaṅ-par-byed-paḥi-sṅags.
【二六】 oṃ jriṃ svāhā.
【二七】 降伏眞言°(Tib.)mṅon-spyod-kyi-sṅags(?)
【二八】 oṃ hūṃ svāhā.
【二九】 鉤召眞言°(Tib.)ḥgug-par-byed-paḥi-sṅags.
【三〇】 oṃ ghūṃ svāhā.
【三一】 降伏眞言° (Tib.)gsod-par-byed-paḥi-sṅags.
【三二】 oṃ vūṃ svāhā.
【三三】 眞愛信言° (Tib)kuru-kullehi-sṅags.
【三四】 oṃ kuru kulle hriḥ svāhā.
【三五】 寒林°(Tib.)dur-khrod. 墓地を云ふ。
【三六】 雄黄(Manaḥśila)° (Tib).ldoṅ-ros.
【三七】 陬羅葉° (Tib.) rkun-maḥi-lo-ma.

[2]施一切地上飮食眞言に曰く、

[3]唵引一 阿吽引二 發吒半音 莎賀引下同四

佛言はく、唵阿とは一切法の出生門と作す故なり。五如來種子とは謂ゆる。

[4]捫一 盎二 嚩陵二合引三 龕四 吽五引

[5]空智金剛心眞言に曰く、

[6]唵引一 嚩日囉二合 吽引三 吽引四 吽引五 發吒半音 莎賀六

（上行の正しい読み）[6]唵引一 禰嚩畢祖二 嚩惹囉二合 吽引三 吽引四 吽引五 發吒半音 莎賀六

佛言はく、一切眞言の句首に、當に唵字を安じ、次に吽發吒字を置き、後に莎賀字を用ふと、

[7]阿閦如來眞言に曰く、

[8]唵引一 遏二 葛三 拶四 吒五 多六 波七 野設莎賀八

佛言はく、一切の瑜儗尼[9]種子の字は

[10]遏一 阿引二 壹三 翳引四 嗢五 汚引六 哩七 梨八 嚕九 盧十 伊十一 愛引十二 鄔十三 奧引十四 唔十五 惡十六

[11]二臂明王眞言に曰く、

[12]唵引 怛懶二合 路引 歌引二 吒波各引三 吽引四 吽引五 吽引六 發吒半音 莎賀七

[13]四臂明王眞言に曰く、

[14]唵引 入嚩二合 囉二 入嚩二合 囉毘喩二合引三 吽引四 吽引五 吽引六 發吒半音 莎賀七

[15]六臂明王眞言に曰く、

[16]唵引一 吉胝吉胝二 嚩惹囉二合 吽引三 吽引四 吽引五 發吒半音 莎賀六

[17]加持眞言に曰く

[18]唵引一 阿引二 吽引三

[19]淨地眞言に曰く、

【二】 施一切地上飮食眞言°(Tib.) ḥbyuṅ-po-tham-cad-khyi-gtor-mahi-sṅags.

【三】 Oṃ āḥ hūṃ phat svāhā.

【四】 Vruṃ aṃ jriṃ khaṃ hūṃ.

【五】 空智金剛心眞言°(Tib.) kye-rdo-rje-sñiṅ-po.

【六】 Oṃ deva picu vajra hūṃ hūṃ hūṃ phat svāhā.

【七】 阿閦如來眞言°(Tib.) groṅ-khyer-dkrug-pahi-sṅags.

【八】 Oṃ a ka ca ṭata pa ya śa svāhā.

【九】 瑜儗尼種子°(Tib.) rnal-ḥbyor-ma rnam-skyi-sa-bon.

【一〇】 a ā i ī u ū ṛ ṝ ḷ ḹ e ai o au aṃ aḥ.

【一一】 二臂明王眞言°(Tib.) phyag-gñis-pahi-sṅags.

【一二】 oṃ trai lokya kṣepa hūṃ hūṃ hūṃ phat svāhā.

【一三】 四臂明王眞言°(Tib.) phyag-bẓi-pahi-sṅags.

【一四】 oṃ jvala jvalabhyo hūṃ hūṃ hūṃ phat svāhā.

【一五】 六臂明王眞言°(Tib.) phyag-drug-pahi-sṅags.

【一六】 oṃ kiṭi kiṭi vajra hūṃ hūṃ hūṃ phat svāhā.

【一七】加持眞言°(Tib.)byin-gyis-brlab-pahi-sṅags.

は[五六]多羅菩薩なり。又復法身輪は八輻相を具し、報身輪は十六輻を具し、化身輪は蓮華相六十四葉を具し、大樂輪は三十二輻を具す。此の輪を建つる是の如き次第に四刹那あり、謂ゆる莊嚴と果報と作觀と離相となり。四聖諦に依れば、謂ゆる苦・集・滅・道なり。四眞實に依れば、謂ゆる身眞實・智眞實・持明眞實・聖賢眞實なり。四歡喜あり、謂ゆる[五七]喜・[五八]勝喜・[五九]離喜・[六〇]俱生喜等なり。四種律に依れば、謂ゆる[六一]上座部・[六二]大衆部・[六三]正量部・[六四]一切有部なり。日月・時分・晝夜增減は、謂ゆる八時に於て十六分・三十二點・六十四刻あり。是の如く一切四種の最初は[六五]贊・拏梨明妃なり。彼の臍輪より大智の火を發して五蘊を焚棄し、佛眼母を以て諸の漏を焚燼し、妄因緣を除く故に。

【三〇】 阿尾吒 (avighā)° (Tib.) hjug-ma.
【三一】 本母(mātrā)° (Tib.) ma-mo.
【三二】 設哩嚩梨 (svari)° (Tib.) mkhan-mo.
【三三】 清凉° (Tib.) bsil-sbyin-ma.
【三四】 熘熾(ūşmā)° (Tib.) tsha-ba-ma.
【三五】 量(pramānikā)°(Tib.) gol-ma.

【三六】 青色(kṛṣṇavarṇa)° (Tib.) reṅs-ma(?)
【三七】 平等(sāmānya)°(Tib.) spyi-ma.
【三八】 因(hetu)°(Tib.)rgyu-sbyin-ma.
【三九】 相應(viyoga)° (Tib.) sbyor-ḥbrel.
【四〇】 喜(preman)° (Tib.) sdu-gu-ma.
【四一】 成就(siddha)° (Tib.) grub-ma.
【四二】煐(pāvaki)°(Tib.)ḥtshed-ma.
【四三】 蘇末他 (sumaṇa)° (Tib.) yid-bzaṅ-ma.
【四四】 轉(vṛtta)° (Tib.).
【四五】 欲(kāmini-geha)° (Tib.) ḥdod-ma.
【四六】 忿怒(caṇḍikā)°(Tib.) gtum-ma.
【四七】 迦多演尼(mārad ārika)° (Tib.) bdud-dral-ma.
【四八】 童子(kumāra)°(Tib.) khyim-ma.
【四九】 施設(dāyikā)°(Tib.) śin-tu-gzugs-can-ma(?)
【五〇】 諸佛 賢聖° (Tib.) āli, kāli.
【五一】 三身—法身 (dharma-kāya)° (Tib.) chos-kyi-sku. 報身(saṃbhogakāya)°(Tib.) loṅ-spyod-rdsogs-paḥi-sku. 應身(nirmāṇakāya)° (Tib.) sprul-paḥi-sku.
【五二】 伊鑁摩野°(Tib)Evam-ma-yā.
【五三】佛眼母菩薩(locanādevi)° (Tib.) rnam-pa-lhamo-spyan.
【五四】 摩摩枳菩薩(māmaki)° (Tib.) rnam-pa-bdag-ma.
【五五】 白衣菩薩(paṇḍaravāsinī)° (Tib.)lha-mo-gos-dkar-mo.
【五六】 多羅菩薩 (tārani)° (Tib.)rnam-pas-sgrol-ma.
【五七】 喜° (Tib.) dgaḥ-ba.
【五八】 勝喜° (Tib.)mcog-tu-dgaḥ-ba.
【五九】 離喜 (dgaḥ-bral-gyi-dgaḥ.
【六〇】俱生喜 (lhan-cig-skyes-baḥi-dgaḥ-ba.
【六一】 上座部(sthāvira)° (Tib.)gnas-brtan-pa.
【六二】 大衆部 (mahāsaṃghikā)° (Tib.)dge-ḥdun-phal-chen-pa.
【六三】 正量部(saṃmatyā)° (Tib.)kun-gyis-bkur-ba.
【六四】 一切有部(sarvāsti-vādā)° (Tib.) thams-cad-yod-par-smra-ba.
【六五】 贊拏梨明妃(caṇḍāli)° (Tib.)gtum-mo.

拏吉尼熾盛威儀眞言品第二

【一】 拏吉尼熾盛眞言品第二° (Tib.) sṅags-kyi-leḥu.

軍及び[13]瑜儗尼を却け、其の正理・生・住・因緣の如く、識・智・成辨を以て、其の如く諸佛・聖賢を出現す。是れを空智最初出生の行相とす。又復た大悲性に於て、是の如く解脫すれば、則ち縛性に縛せらる、そを遍く能く了知し、悉く皆解脫すべし。所以は何ん、彼の勝慧性及び所知性は悉く性に非ざるの故に、彼の空智性も亦た性に非ざる故なり。本然智を以て諸疑網を決す、諸法を照解せば本然起らず。

時に金剛藏菩薩重ねて、佛に白して言さく、世尊よ、是の如き空智に云何が[14]血脈の相有るや。佛金剛藏菩薩に告げ給はく、彼の血脈の相は三十二種あり。是れを三十二菩提心と名づく、又この漏は大樂處に於て總じて三種あり、謂ゆる[15]羅羅拏、[16]辣娑拏、[17]阿嚩底なり。羅羅拏とは卽ち勝慧自性なり辣娑拏とは謂ゆる善方便なり。阿嚩底とは是れ中說なり、能取・所取を離る。又此の三種は卽ち[18]不動・[19]清淨・[20]智月に住持す。彼の三十二種血脈とは、謂ゆる。一に[21]不可破壞、二に[22]微妙色相、三に[23]天、四に[24]左邊際、五に[25]短、六に[26]酤摩惹、七に[27]性、八に[28]施迦、九に[29]過失、十に[30]阿尾吒、十一に[31]本母、十二に[32]設哩嚩梨、十三に[33]清涼、十四に[34]焰熾、十五に羅羅拏、十六に辣娑拏、十七に阿嚩底、十八に[35]量、十九に[36]青色、二十に[37]平等、二十一に[38]因、二十二に[39]相應、二十三に[40]喜、二十四に[41]成就、二十五に[42]煗、二十六に[43]蘇末他、二十七に[44]轉、二十八に[45]欲、二十九に[46]忿怒、三十に[47]迦多演尼、三十一に[48]童子、三十二に[49]施設、是れを三十二種血脈の相と名づく。

復次に金剛藏菩薩佛に白して言さく、世尊よ、此れ何の因緣によつて是の如きの相あるや。

佛金剛藏菩薩に告げ給はく、謂ゆる三有を成熟せんと欲し、一切の能取・所取を遠離し、諸の方便を以て性相を了別し、持戒者の爲めに分別解說す。[50]諸佛・賢聖とは智慧・方便なり。[51]三身とは三業なり。及び[52]伊鑁摩野とは、謂ゆる伊は[53]佛眼母菩薩、鑁は[54]摩摩枳菩薩、摩は[55]白衣菩薩、野

【一二】空智と謂ふは卽ち大悲空智°('Tib.)he-ru-ka-ston-pa-ñid.

【一三】瑜儗尼(yogini.)° ('Tib.) rnal-ḥbyor-ma.

【一四】血脈(deha.)°

【一五】羅羅拏(lalanā)°('Tib.) brkyaṅ-ma.

【一六】辣娑拏 (rasanā)° ('Tib.) ro-ma.

【一七】阿嚩底(avadhūtī)° ('Tib.) kun-ḥdar-ma.

【一八】不動°('Tib.)mi-bskyod.

【一九】清淨° ('Tib.)de-bźin-khrug.

【二〇】智月('Tib. Śes-rab-zla-ba.

【二一】不可破壞(abhedyā)° ('Tib.) mi-phyed-ma.

【二二】微妙色(sūkṣma-rūpa)° ('Tib.)phra-gzugs-ma.

【二三】天(divyā)°('Tib.)rtsa-ba-ma.

【二四】左邊際(vāmā?)° ('Tib.) gyon-pa-ma.

【二五】短(vāmanā?)° ('Tib.) thuṅ-ṅu-ma.

【二六】酤摩惹 (kūrmajā)° ('Tib.) ru-sbal.

【二七】性(bhāvakī)° ('Tib.) sgom-pa-ma.

【二八】施迦 (sekā)° ('Tib.) dbaṅ-ma.

【二九】過失 (doṣā)° ('Tib.) skyon-ma.

〔一〕大悲空智金剛大教王儀軌經

宋西天三藏銀青光祿大夫試光祿卿
普明慈覺傳梵大師法護奉　詔譯

卷の第一

〔二〕金剛部序品第一

是の如く我れ聞きき、〔三〕一切如來の身・語・心金剛喩施婆倪に住しまして、祕密中の祕密より妙三摩地を出生せり。時に彼の世尊は是の三摩地より起ちて、讃じて言ふ。善い哉、善い哉、〔四〕金剛藏菩薩摩訶薩。奇しき哉、〔五〕金剛薩埵、〔六〕大薩埵、〔七〕三昧耶薩埵は、悉く大悲空智金剛大菩提心の所より開示せり。

爾の時、金剛藏菩薩、是の語を聞き已つて、佛に白して言さく、世尊、云何が金剛薩埵、云何が大薩埵、云何が三昧耶薩埵、唯だ願くば、世尊よ、我が爲めに解說し給へ。

佛、金剛藏菩薩に告げ給はく、金剛とは破壞すべからざるを謂ひ、薩埵とは〔九〕三有一性を謂ふなり。勝慧相應是れを金剛薩埵と名づく。謂ゆる〔一〇〕大智勝味充滿するを大薩埵と名づく。〔一一〕常行三昧是れを三昧耶薩埵と名づく。

時に金剛藏菩薩重ねて佛に白して言さく、世尊空智金剛とは、是の如き名に於て、云何が攝受し、云何が空智と名づけ、何等をか金剛と名づく。

佛金剛藏菩薩に告げ給はく、〔一二〕空智と謂ふは卽ち大悲空智、金剛とは體卽ち勝慧なり。勝慧方便を以て儀軌を成就す。彼の見聞に於て大力有りて、能く種種成辨せるを、降伏・禁止と謂ふ。或は他

【一】(Skt.)(he vajra tantra.)° (Tib.) kyeḥi-rdo-rje gses-bya-ba rgyud-kyi-rgyal-po. (ナルタン祕密部Ka. pa306 b 6–352 a 1)
【二】金剛部序品第一 (Tib.) rdo-rje-rigs-kyi-leḥu.
【三】住一切如來身語心金剛喩施婆倪數 (sarvatathāgata kāyā vāk citta vajra yagirbhageṣu.)°(Tib.)de-bsin-gśegs-pa thams-cad-kyi sku dań gsuṅ dań thugs-kyi-sñiṅ-po rdo-rje-btsun-moḥi-bhaga-la-bsugs-so.
【四】金剛藏(Vajragarbha.)°(Tib.)rdo-rje sñiṅ-po.
【五】金剛薩埵(vajra-sattva.)°(tib.) rdo-rje-sems-dpaḥ.
【六】大薩埵(mahā-sattva.)°(Tib.) sems-dpaḥ-chen-po.
【七】三昧耶薩埵 (samaya-sattva.)°(Tib.) dam-tshig-sems-dpaḥ.
【八】空智金剛 (hevajra.)(Tib.) kye-rdo-rje.
【九】三有一性 (tribhavā-syaikabhā.)°(Tib.)srid-pa-gsum-gcig-pa.
【一〇】大智勝味(mahā jñāna rasa.)° (Tib.) ye-śes-chen-poḥi-ro.
【一一】常行三昧(nityaṁ samaya.)(Tib.) rtag-tu dam-tshig-la-spyod-pa.

其等の道程を通つて來て始めてこの空智金剛の教を授くべきであると説いてゐる。

倶生義品第二十、第十五品に於て色を以て諸明妃を表はしたるに對して、これに又如來部を配當してゐる、卽ち、黒色相を阿閦如來部、大白色相を毘盧遮那如來部、紅色相を無量壽如來部、大綠色相を不空成就如來部、金色相を寶生如來部、淡黃色相を金剛薩埵部なりといふてゐるこれら總て行者自身が明妃を觀想して明妃と同體となり、その境より如來の身と同體となるべきを說き、最易の解脱法なりと說くにあり。

結語

かく通觀し來たるとき、本經の中には純密教の一脈の思想の横はつてゐることが自ら解せられる。この思想は勿論その發達は純密教の後であり、空行女の觀想を以て最上最易解脱法とせるのである。西藏に於てはこの種の經典は密教中最上の位置に置かれてゐる。こゝに本經の種類に屬する經典の主なるもの二三擧げれば、

[一]No. 8. Dpal saṅs-rgyas thams-cad-daṅ mñam-par sbyor-ba mkhaḥ-ḥgro-ma sgyu-ma bde-baḥi mchog ces-bya-baḥi rgyud-bla-ma.

No. 20. Dpal-bde-mchog ḥbyuṅ-ba ṣes-bya-baḥi rgyud,-kyi rgyal-po-chen-po.

No. 59. Dpalb de-mchog nammkhaḥ daṅ mñam-paḥi rgyud-kyi rgyal-po ṣes-bya-ba. (西藏新派の依經)。

No. 81.[二] De-bṣin-gśigs-pa thams-cad-kyi sku gsuṅ thugs-kyi gsaṅ-chen gsaṅ-ba ḥdus-pa ṣes-bya-ba brtag-paḥi rgyal-po-chen-po.

No. 87.[三] Gñis-su-med-pa mñam-pa-ṅid rnam-par rgyal-ba ṣes-bya-baḥi rtog-paḥi rgyal-po-chen-po.

等がある。

註[一] 西藏大藏經甘珠爾勘同目錄（大谷大學）。

[二] 漢譯、佛說一切如來金剛三業最上祕密大教王經（大正八八五）。

[三] 漢譯、佛說無二平等最上瑜伽大教王經（大正八八七）

終りに臨んで、河口慧海先生の御指導を仰ぎたること、殊に清水亮昇君の甚大なる援助に對して玆に深謝す。

本經は難讀のものとせられ、且つ時日を幾ばくもなく誤譯の多かるべきことは諸氏の寛大なる御仁宥を希ふ次第である。

昭和六年一月五日　譯者　神林隆淨　識

方（南西隅）にあり。農字門より拏彌尼明妃（Domvini,（Tib.）Gyuṅ-mo.）を出生して風天方（北西隅）にありと、これらの字門は各々の明妃の種子（Bija,（Tib.）sa-bon.）を示めしたのである。そして彼の八明妃の各々の手に持せるものは、

明妃	右手	左手
遨哩明妃（Gauri.）	寶刀（Tib, Khri-gu.）	嚩囉賀（Varāka,（Tib.）phag-pa.）
陬哩明妃（Cauri.）	奎樓鼓（Tib, Caṅ-teḥu.）	磨竭魚（Rohita?）
尾多哩明妃（Vettāli.）	龜（Tib, Ru.）	蓮華器（Tib, Padmaḥi-snod.）
渴三摩哩明妃（Ghasmari.）	蟗龍（Tib, Sbrul-ba.）	蓮華器（Tib, padmaḥi-snod.）
卜葛西明妃（Pukkasi.）	師子（Simha,（Tib,）Seṅ-ge.）	鉞斧（Kṣurapra,（Tib.）Sta.）
設嚩哩明妃（Savari.）	比丘像（Pratikṛti?）	錫杖（Khakkara,（Tib.）Gsiḥ-byed.）
賛拏哩明妃（Caṇḍali.）	八輻輪（Tib, Hkhor-lo-rgyad.）	梨具（Kapāla,（Tib.）Thod-pa.）
拏彌尼明妃（Domvini.）	金剛杵（Vajra,（Tib.）Rdo-rje.）	期剋（Tib, Bsdigs-mdsub.）

であるとしてある。そしてこれらの諸明妃は右半跏趺をなし舞勢をなしてゐる。又空智大金剛王は忿怒相を現じてゐるが、內心は悲愍を懐けるなりと。

金剛王出現品第十五之餘、 色を以てこの明妃を表はせば、黑色は遨哩明妃、紅色は陬哩明妃、黃赤色は尾多梨明妃、綠色は渴三摩哩明妃、卜葛西明妃は帝靑珠色、設嚩哩明妃は珂目色、賛拏哩明妃は虛空色、拏彌尼明妃は種々色であると、次に佛に無我菩薩が最上堅固祕密妙曼荼羅を畫く法を問へるとき、佛は次のやうに答へられたとある、これが三昧耶曼荼羅（Samaya-maṇḍala.）を說いたものである、曰く、中位には八葉蓮華の臺蕊中に白色の葛波羅を畫き、伊舍那方（東北隅）に師子を、火天方（東南隅）に苾芻像を、乃哩底方（南西隅）に輪を、風天方（北西隅）に金剛杵を、東門に寶刀を、南門に奎樓鼓を、西門に龜を、北門に龍を、畫くことを說いてゐる、これを八種幖幟と名づくといふてゐる。これらは前第十五品と合せ考へれば三昧耶業の標示たることが自ら解らう。なほ西藏譯に依れば、かく說かれたる曼拏羅（Maṇḍala.（Tib.）Dkyil-ḥkhor.）中に於て、飲酒・餔食・脫衣・接吻・歌舞・金剛蓮華相應せるは解脫のためなりとせり。

金剛空智熾盛拏吉尼畫像儀式品第十六、 五印を說く、再說の要を認めない。

飲食品第十七、 解說を略す。

教授品第十八； 本品は已に述べたやうに眞言品第二は西藏譯はこの品の後半と內容を同一にしてゐるから、漢譯にてはその後半を除いて、前半のみの譯である。

その前半即ちこの第十八品にはいかにこの空智金剛の意を教授すべきかといふにある。

この空智金剛の憑つて立つ所は純密教を基礎として想像せられたのである。しかも純密教が通佛教に依つて立ち、別途な發展でないのであるから、この教へも

いやうに妙樂も吾人の肉身あつて始めて生ずるものであるといふのである。

そしてこの最勝妙樂は世間の諸相を生ずるものであるが、この妙樂は倶生の故に自性はなく、この倶生より生じたる諸相の心相は淸淨なりと、觀ずる淸淨觀より覺に趣くを還滅といはるゝのである。

說方便品第十三、　諸佛如來は鑁(Vaṃ)字中に住せるものである、この鑁(Vaṃ.)こそ拏吉尼天を標せるものであるとしてゐる、これは純密敎に鑁字を金剛界大毘盧遮那如來の種子(Bīja.)であるとし、この大毘盧遮那如來は諸佛の心地であり、この佛を普門の尊(Samantamukha-pradāna.)と稱へて、中央に安住せられてあるところから、森羅萬象の根本をなせる勝妙樂の相をとれる拏吉尼を以てかく傳へたのではなからうか。

說方便品第十三之餘、　上來說き明かしたる上に、なほ多くの語を以て標せる義を示してゐる。卽ち摩黏(Madya,(Tib.)chan, or, Bdud-rtsi.)を果實の義、葛波羅(Kapāla,(Tib.)Thod-pa.)を蓮華器の義、又瑜を相應の義、謨羅紺(Bola.)を金剛の義、酤羅紺(Kakkola.)を蓮華の義といふてゐる。又五部については、拏彌(Doṃbī,(Tib.)Gyuṅ-mo.)を金剛部、那胝(Naṭī,(Tib.)gar-ma.)を蓮華部、賛拏哩(Caṇḍalinī,(TibRaṅ-ḥchod-ma)を寶部、捘若多(Tib. Skye-gñis.)を如來部、辣若計(Tib. chos-ma.)を羯磨部であるとしてゐる、卽眞言密敎の名稱を說明するに、かゝる通俗的語句を以て明示したのであらう。

集一切儀軌部品第十四、　本品の解說は略す。

金剛王出現品第十五、　この品、再び八明妃の種子(Bīja.)及び三昧耶(Samaya.)について說明してゐる。然しその中央空智金剛(Heruka.)の相については、「阿吽(a hūṃ.)の種子より生出せる空智金剛は八面十六臂の忿怒相を現じてゐる。その八面とは正面は大黑色、右面は白色倶那華、左面は紅色、上面は笑容であり、餘の四面は凡て靑黑色である」としてゐる。又この四方四隅に住せる八明妃の種子及び三昧耶を說いて、嚩字門より遨哩明妃(Gaurī,(Tib.)Dkar-mo.)を出生して東門にあり。尊字門より阪哩明妃(Caurī.(Tib.)chom-rkum.)を出生して南門にあり。鑁字門より尾多哩明妃(Vettālī,(Tib.)Ro-laṅs-ma.)を出生して西門にあり。紺字門より渴三摩哩明妃(Ghasmarī.)を出生して北門にあり、奔字門より卜葛西明妃(Pukkasī.)を出生して伊舍那方(東北隅)にあり。商字門より設嚩哩明妃(Śavarī,(Tib,)Ri-khrod-ma.)を出生して火天方(東南隅)にあり、賛字門より賛拏哩明妃(Caṇḍālī.(Tib.)Gdol-ba-ma.)を出生して羅刹

とある。即ち、この本文の漢譯に西藏譯を以ておぎなふて見よう。Bola kakkola spyor-pas. の一句は漢譯に見あたらない。即ち、「金剛(男根)、蓮華(女根)相應によつて」と漢譯に添へるならば、他の句の自らなる廻轉を見るのである。金剛、蓮華相應によつて生ずる觸堅硬法を地大となし。これより濕潤性(水大)を生じ、溫熱性(火大)を生じ、動轉によつて生ずるは風大にして、妙樂の空大ありと說く、この五大種の廻動(Tib, Bskor.)によつて生ずる大樂は、その自性なく、俱生による故に、自性を俱生といふのであると。

金剛藏菩薩現證儀軌王品第十一、 護摩法の教理的方面の如何を問はず、この經の護摩法に關して說けるは、息災は圓爐を用ひ、增益は四角、降伏は三角、信愛(敬愛と同じ)及び鈎召となし、鈎召は信愛と同樣であると說いてあるが、その形を共に表はしてゐない。これは護摩の作法の時の爐の形を說いたのである、又それぞれ色の標幟を以てせば、白・黃・黑・紅となし、その作法に用ふ材料は、脂麻・酪羯諾迦木(西藏語にては Tsher-ma. 譯して棘木といふ)及び紅優鉢羅(Utpala.)を用ふると示してゐる。

護摩(Homa (Tib. Byin-sreg.) とは焚燒の義である。もと印度婆羅門教徒の行へる式法にて佛教に入り、壇木、乳木等の種々の供物を辨備し、之を爐火の中に投じて火天(Agni, (Tib.) Me.) に供養し、祭祠するを外護摩といひ、又心・佛・衆生無差別の觀に住し、觀智の火を以て無明煩惱を燒き盡くすを內護摩といふやうになつたのである。

熾盛拏吉尼所說成就品第十二、 前述の如く、五印を五佛に配し、五智を說き、而して五明妃、八明妃、上下二明妃(大相應輪品第八參照)を以て曼拏羅を說き明してゐる。これらの曼荼羅は、西藏に於ては最上無上相應部(前述西藏に於ける本經の位置參照)中に、又母密乘、父密乘、中密乘の三つに分類されてゐて、その中これは母密乘に於て最も尊ばれてゐるのである。かく曼荼羅、六根、六境等を各々大樂思想に依つて說明してゐるが、佛相については未だ說き明かしてゐない。その佛相は本品に說くところである。本品に依ると、「唯だ一體相を佛の實藏なり」と說き、金剛喩沙三摩地(Tib, Rdo-rje-btsun-mohi-bhaga.) より妙樂が生じ。これより佛相も生づるのである。三十二相、八十種好の如き勝れたる相もすべてこの妙樂輪に具はつてゐるのであり、この妙樂あるから覺もあるが若し妙樂がなかつたならば、覺の生ずることもないのである、然らば妙樂とは恰も華の香の如きものであつて、香は華あつて生ずるのであり、華なくば最早香も生じな

(Caurī, (Tib.) chom-rkun.) 尾多哩明妃 (Vettālī, (Tib.) Ro-laṅs-ma.) 渴三摩明妃 (Ghasmarī.) 卜葛西明妃 (Pukkasī.) 設嚩哩明妃 (Saurī, (Tib.) Ri-khrod-ma.) 賛拏哩明妃 (Caṇḍalinī, (Tib.) Gdol-ba-ma.) 努弭尼明妃 (Ḍombinī, (Tib.) Gyuṅ-mo.) を配し、更にその上下方には、空行明妃 (Khacarī. (Tib.) (Mkhaḥ-spyod-ma.) 地居明妃(Bhucarī, (Tib.) Sa-spyod-ma.) の二明妃があるとして、こゝに明瞭に前品(第五品)の觀想が表はれて來てゐる。しかもこれらの諸明妃は黑色大忿怒相を現じてゐるが、總て五印(輪・鐶・寶釧・寶鬘・寶帶)を以て莊嚴されて、一面に三目あり、左右二臂は寶刀及び葛波羅器 (Kapāla. (Tib.) thod-pa.) を持してゐる相である。併乍ら五佛は清淨であり。この故に五印清淨であり、五印清淨より諸明妃、進んで一切は清淨であると說くのである。

かく觀想し來るを妙樂輪と云ひこの觀想より聖賢等一切を出生するのである。かくの如きこの無量の出生の義は少分妙樂にして、更に進求する先行の喜より、勝喜相應し妙樂は增勝し、離喜に至つて貪染を厭離せる衆生喜愛の想より一切平等眞實の觀想なる俱生喜妙樂輪を開示するのである。

清淨品第九、諸かくの如く一切の自性清淨にして五蘊、五大種、六根、及び無知煩惱に至るまでその自性は清淨なりと說くにある。もしこの大樂の思想に表はれたる六根・六境の關係を示せば、眼根(Cakṣuindriya.) 耳根 (Śrotreudriya.)、鼻根 (Ghrāṇendriya.) 舌根(Jihvendriya.) 身根(Kāyendriya.) の諸根は各々色(Rūpa)、聲(Śabda.)、香(Gaudha.)、味(Rāsa.)、觸(Spraṣṭvya.) の諸境を對照するは一般と變りはないが、第六根意根 (Manaindriya)は妙樂をその對照とせるのである。若し又これを前品の諸明妃に按ぜば、五明妃は五蘊清淨。六境清淨なりといふについては遨哩明妃・隖哩明妃・尾多梨明妃・渴三摩哩明妃・地行明妃・空行明妃を配し、五大種清淨なるには伊舍那方(Īśāna 東北隅)にある卜葛西明妃を地大 (Pṛthivīdhātu.) 清淨とし、火天方(Vaiśvānara 東南隅)に住せる設嚩哩明妃は水大 (Abdhātu.) 清淨とし、涅哩底 (Nairiti. 南西隅)の賛・拏哩明妃を火大 (Tejodhātu.)清淨とし、風天(Vāyu. 北西隅) の拏彌尼明妃を風大(Vāyadhātu.) 清淨としてゐる。

これ等清淨觀は吾等還滅に至る道であると。

灌頂品第十、本品は灌頂の儀を說けるものである。又五大種について述べてゐる。

金剛藏世尊に五大種は如何なるものであるかを問へるに、佛世尊はかく答へた

するところ、或は印度に行はれたる「あること」の標幟を採り入れたものではあるまいかと思はるるものが多い。

即ち「一指を印となし、二指を印となし……更に、頸處を示して印となす。」とか、又は「胸臆を示して印となす、地を示して印となす、輪を示して印となす、顰眉を示して印となす。」とか「頸後、足心等を示すを印とする」と。この中胸臆とは藏譯には Nu-ma 即ち乳であるとし、地は So. 即ち齒であり、輪は Kha 即ち口であり、頸後は Rgyab 即ち脊であり、足心は Rkañ-mthil 即ち足の裏を示すことを以て印とするのである。これらの印は一種卑猥なる俗間の標幟ではなからうか、又これらの印を成就される處を示し十二の地名を擧げてある。この十二の地名については、解し難いのであるが、梵本にも第七、第八の地名を欠いてゐるやうである、西藏譯に於てもこの第七、第八の地名を欠いてゐることを附言しておく。

大相應輪品第八、 曠寂なる吾人の一心中に淨月輪の如く彼の諸の賢聖の位を觀相なし、その中央の月輪の上方に種智を觀じ、しかもこの月輪の後方より日は映えて、この日月相應して、大樂を生ずるのである。この所に五智の思想と融合し、月 (tib. zla.) は大圓照智(即ち大圓鏡智 (Ādarśa-jñāna, (Tib.) Me-loṅ-ye-śes.) 日、 (Tib,) Bdun-gyr bdun-pa.) は平等性 (即ち平等性智 Samatā-jñāna, (Tib,) Mñām-ñid.) 標幟、本尊、種子、法位等を說くを妙觀察(即ち妙觀察智 Pratyavekṣaṇā-jñāna, (Tib.) So-sor-rtog-pa.)、その作用中にある智を成所作智 (Kṛtyānusthāna-jñāna, (Tib,) Nan-dan-ñid.) 又は清淨法性(即ち法界體性智 Dharmadhatu-svabhāva-jñāna, (Tib.) chos-dbyiṅs-dag.) であると說いてゐる。この中清淨法性は五佛の思想を完全に顯してゐるに拘らず、まだこの時は獨立の作用を有せず、成所作智 (Kṛtyānusthāna jñān-a.) の屬性となつて顯はされてゐる。眞言密敎にてはこの五智は當然五佛と結ばるゝものである。然るに本經にはこの五佛の五位に代ふるに五明妃の五位を配置してゐる。即ち、帝釋 (Indra.) 談魔 (Yama.) 水天 (Varuṇā.) 酤尾羅 (Kuvera.) の方位及び中央に各々金剛明妃 (Vajrī, (Tib.) Rdo-rje-dkar-mo.) 遬哩明妃 (Gaurī, (Tib.) Dkar-mo.) 嚩哩明妃 (Valiyoginī (Tib.)Chu-yi rnal-ḥbyor-ma.) 金剛拏吉尼 (Vajraḍākiṇī (Tib.) Rdo-rje ḥkhaḥgro-ma.) 無我明妃 (Nairātmāyoginī, (Tib.) Bdag-med-Rnal-ḥbyor-ma.) の五明妃を配し、この四方四隅には八明妃、即ち、遬哩明妃 (Gaurī (Tib.) Dkar-mo.) 隙哩明妃

この八明妃を藏譯には、梵音そのまゝに傳へるあり、又その譯語を擧げてゐるなどは、漢譯とその傳譯を異にしてゐる。なほ後品に於てこの八明妃が、曼拏羅の構成について、各々その位置を占めてゐる。

寶聖灌頂部品第四、 一切如來の金剛界灌頂を得て空智明王（Heruka）の相を成じ、五甘露を以て、五如來を灌頂するのである。然るに漢譯に於ては、この灌頂を行ふに際し、眞言を誦して行ふのであるが、その眞言を闕いてゐる。然るに藏譯にては　Oṃ　abhisiñcantu　māṃ sarvatathāgate.　の眞言を誦して灌頂することになつてゐる。

大眞實品第五、 この品に於ては、眞言密教の五部の思想を取入れその五部に本經の五部を配當してゐるのである、こゝにその五部を示せば、

蓮華（padma）　舞（Naṭi,（Tib.）kar-ma)（無量壽）、
金剛（Rdo-rjə）　努弭（Doṃbi,（Tib.)gyuṅ-mo)（阿閦）、
如來（De-bsin-gśegs-pa.）　淸淨女（Brahmi,（Tib.）bram-ze）（大毘盧遮那）。
寶（Rin-chen.）　贊拏哩（Caṇḍali,（Tib.）gdol-ma)（寶生）。
事業（Las.）　染師（Tib. Tshos-ma.（不空成就）。

この五部の思惟觀行を成じ、妙樂を得るに至るといふのである、その妙樂の境を安樂定と名づくと說いてゐる。

行品第六、 先行、畢竟、成辦の修觀に依つて、金剛空智（Heruka.）の相を又成就するのである、この修觀行を最上到彼岸行といふと說くのであるが。その金剛空智なるものゝ現相を說いて、頂に寶輪を冠し、耳に寶鐶をつけ、手に寶釧を串し、腰には寶帶を垂れ、足は寶鐸を、妙臂釧をつけ、頸には髮を嚴り虎皮衣を著たる相であると、而してこの中、輪は阿閦如來、鐶は無量壽如來、頸上の髮は寶生如來、寶釧は大毘盧遮那如來、寶帶は不空成就如來を表せるものであるとし、この五を五印と名づけ、この五印を一樹下空寂舍中に於て觀想せる時勝慧相應して、三摩呬多（Samāhitā.）を成じ、遂に解脫の果を得るのであり、この勝慧は空智明王（Heruka.）の持せる金剛渴樁誐杖（Vajra-khaṭvāṅga?）（譯人頭幢）はこれを表し、又奎樓鼓（Damaru?(Tib.)Can-teḥu.）は善方便を表してゐるのである。今こゝに擧げた五印と前品の五部とを比較するとき、前品の五部の思想が變遷して、空智明王の一相に攝せられて來たことを知るのである。併ら本品の五印はたゞ空智明王の相について、輪、寶鐶等を五印と名づけこれに五佛を配當せるのであるが。

說密印品第七、 に示めされたる印を想像

第二品(Tib.) Sṅags-Kyi-leḥu	(Tib.)Kyeḥi-rdo-rje-pas sṅags-btu-baḥi-leḥu. (漢譯第十八品後半 闕)
(1) 施一切地上飲食眞言(Tib.) Rbyuṅ-po tham-cad-kyi-gtor-maḥi sṅags.	有
(2) 五如來種子 (Tib.) De-bṣin-gśegs-pa-rnam-kyi sa-bon.	欠
(3) 空智金剛心眞言(Tib.)Kye-rdo-rjeḥi sñin-po.	有
(4) 阿閦如來眞言(Tib.) Groṅ-khyer-dkrug-paḥi sṅags,	有
(5) 一切瑜伽尼種子(Tib.)Rnal-ḥbyor-ma-rnam-kyi sa-bon.)	欠
(6) 二臂明王眞言(Tib.) Phyag-gñis-pa.	有
(7) 四臂明王眞言(Tib.)Phyag-bṣi-pa.	有
(8) 六臂明王眞言(Tib.)Phyag-drug-pa.	有
(9) 加持眞言 (Tib.Byin-gyis-brlabs-paḥi sṅags.	有
(10) 淨地眞言(Tib.)Sa-spyoṅs-paḥi-sṅags.	有
(11) 禁止眞言 (Tib.)Reṅs-par-byed-pa.	有
(12) 欠(Tib.)Dbaṅ-du-byed-pa.	有
(13) 發遣眞言 (Tib.)Skrad-par-byed-pa.	有
(14) 忿怒眞言 (Tib.)Sdaṅ-par-byed-pa.	有
(15) 降伏眞言 (Tib.)Mṅon-spyod-kyiḥo.	有
(16) 鉤召眞言 (Tib.)Ḥgug-parbyed-pa.	有
(17) 降伏眞言 (Tib.)Gsod-par-byed-pa.	有
(18) 信愛眞言 (Tib.)Ku-ru kulleḥi sṅags.	有
以下作法を說く。	品終り。

右の如く、第二品中にある眞言を、西藏譯第十八品の後半にては、殆んど全部眞言の構成的説明に過ぎないのである。更に第二品後半に說ける諸作法は、外道密教に流行せし魔術的作法に類似し、謂ふ所は極めて、佛教以前の印度の密教なるものが覗はるのである。

一切如來身語心聖賢品第三、觀想して行人、大悲空智金剛の忿怒相を出生するを說き、しかもその空智金剛の形態を說くのである。かく觀想を成就せる時、八明妃の供養せるを說く、その八明妃とは、

(1)	遨哩(明妃)	Gaurī,	(Tib.) Dkar-mo.
(2)	除哩(明妃)	Caurī,or Śārī.	(Tib). Chom-rkun.
(3)	尾多梨(明妃)	Vettalī.	(Tib.) Ro-laṅs-ma.
(4)	渇三摩(明妃)	Ghasmarī.	(Tib.) Ghasmarī.
(5)	卜葛哩(明妃)	Pukkasī.	(Tib.) Pukksī.
(6)	設嚩哩(明妃)	Savarī.	(Tib.) Ri-khrod-ma.
(7)	贊拏哩(明妃)	Caṇḍālī. or Caṇḍālinī.	(Tib.) Gdol-ba-mo.
(8)	努弭哩(明妃)	Ḍombī.	(Tib.) Gyuṅ-mo

集一切儀軌部品第十四	Kyeḥi-rdo-rje-las rgyud-tham-cad-kyi phag-rgya-bsdus-baḥi-don ges-bya-baḥileḥu ste bẓi-paḥo/—341a, 4.
金剛王出現品第十五 金剛王出現品第十五之餘	Kyeḥi-rdo-rje-las kyeḥi-rdo-rje mṅon-par-ḥbyuṅ-ba ges-bya-baḥileḥu ste lṅa-baḥo/—345a, 4.
金剛空智儀軌拏吉尼密儀式品第十六	Kyeḥi-rdo-rje-las bris-sku clo-gaḥileḥu ste drug-paḥo/—345b, 7.
飲食品第十七	Kyeḥi-rdo-rje-las bzaḥ-paḥileḥu rte bdun-paḥo/—346b, 5.
教授品第十八（正藏 600, c27 マデ）	Kyeḥi-rdo-rje-las ḥdul-paḥileḥu ste brgyad-paḥo/—347b, 2.
闕	Kyeḥi-rdo-rje pasṅags-btu-baḥileḥu ste dgu-raḥo/—350a, 4.
念持第十九	Kyeḥi-rdo-rjeḥi so-bzlas-paḥi-leḥu ste bcu-paḥo/—350b, 1.
倶生儀品第二十	Kyeḥi-rdo-rje-las lhan-cig-skyes paḥi spyor-ba don-gyileḥu ges-bya-ba bcu-gcig-paḥo/—351a,7.
復說伽陀日一	闕、

前表の如く漢藏兩譯に於いて、その品數の分ち方の相異あり、且つ藏譯に於ては、漢譯の教授品第十八に於いて一品多いのである。猶ほ藏譯中の品を通覽すると、五十萬偈あつた中の抄と見らるゝのは半より品の數の變つてゐる點にあると思はるのである。各品の內容については次に述べる所である。

二、各品の內容

金剛序品第一、薄伽梵(Bagavan)、一切如來の身語心金剛喩施婆倪（Vajra-yogirbhaga,（Tib.）Rdo-rjeḥi-btsun-moḥi-bhaga.譯、金剛明妃の陰門形法生中の宮殿)に、住して妙三摩地(Samādhi.)を出生せる所に所說の根本を置き、この三摩地より起ちて、空智金剛大菩提心(He vajra)の開示せる金剛薩埵(Vajra-sattva,（Tib.）Rdo-rje-sems-dpaḥ）大薩埵　（Mahā-sattava,（Tib.）Sems-dpaḥ-chen-po）三昧耶薩埵（Samaya-sattava,（Tib.）Dam-tshig-sems-dpaḥ）を以て起說し、空智金剛（He vajra（Tib.）Kye-rdo-rje）の三十二血脈相を說くのである。なほこの血脈は、羅々拏（Lalanā（Tib.）Brkyaṅ-ma.）辣娑拏（Rasanā（Tib.）Ro-ma.）阿縛底 Ava-dhhavakī（Tib.）Kun-ḥdar-ma）の三相に攝せられると說き、三身、四刹那、四聖諦、四眞實、四歡喜、四種律等總てこの品は本經の全方向を說ける品であり、各品順次に開說するのである。

拏吉尼燄威儀眞言品第二、前述の漢藏品の比較に於て示せる如く、教授品第十八品の後半は漢譯はこれを闕く、併ら第二品の前半に說ける多くの眞言は第十八品後半に於て、それを構成的に說けるに過ぎぬのである。この重復的語句を彼れ法護（Dharma-rakṣa）は略したのであらう。

次に文の比較の繁雜を避けて、單に第二品の眞言名を擧げ、且つ第十八品にその眞言を說けるものと比較を擧げよう。

らるところは說明的に用ひられたのであり、弘法大師もその著、祕藏記等には說明的語として用ひられてゐる。かく支那、日本に於て用ひられ來る思想及び、立川流として傳はれるものと西藏の左道密教とは本邦所傳の思想は說明的であり、西藏のそれはその思想そのまゝが涅槃に趣く最速疾の道なりとせるに相違するのである。

翻譯については、今こゝに譯せる漢譯の大悲空智金剛大教王經は、中印より宋景德元年（1004.A.D）に支那に梵篋を齎せる法護(Dharma-rakṣa)に依つて譯されたのである。彼はこの他數多の大乘經典を翻譯し普明慈覺傳梵大師の號を賜ひ九十六歲の高齡を以て、嘉祐三年（1058.A.D.）に寂した。更に西藏譯は始め親教師伽耶陀羅(Ghayadhara)及び Ḥbrog-mi(ブータン人)能智(Śakya-ye-śes)の譯したるを、更に德童（Bẓon-nu-dpal）の校正せしものである。

（5） 漢藏兩譯の品名の比較

金剛部序品第一	Rdo-rje-rigs-kyi leḥu ste daṅ-poḥo /306b, 6-309a, 1.
拏吉尼熾盛威儀眞言品第二	Sṅags-kyileḥu ste gñis-paḥo/—311a, 7.
一切如來身語心聖賢品第三	Lbaḥi-leḥu ste gsum-paḥo/—312b, 4.
賢聖灌頂部品第四	Dbaṅ-giyeḥu ste bṣi-paḥo/—313a, 3.
大眞實品第五	De-kho-na-ñid-kyileḥu ste lṅa-paḥo/—314a, 7.
第一卷終	
行品第六	Spyod-paḥileḥu ste drug-paḥo/—315b, 7.
說密印品第七	Brda-daṅ-gnas-gdan-la bab-paḥi leḥu ste bdun-paḥo/—317b, 2,
大相應輪品第八	Rnal-ḥbyor-maḥi ḥkhor-lo ṣes-bya-ba ḥdu-laḥileḥu ste brgyad-paḥo/—320b, 5.
清淨品第九	Rnam-par-dag-paḥileḥu dgu-paḥo/—322a, 2.
灌頂品第十	Dbaṅgileḥu ṣes-bya-ba ste bcu-paḥo /—324b, 3.
第二卷終	
金剛藏菩薩現證儀軌品第十一（正藏 p593. c22. 住清淨相マデ）	Kyeḥi-rdo-rje-mkhaḥgro-ma dra-baḥi-sdom-pa-las rdo-rje-sñiṅ-po mṅon-par byaṅ-chub-pa ṣes-bya-ba rtag-paḥi-rgyal-po rdsogs-so/—325b, 2.
住清淨相——第十一品終マデ	Kyeḥi-rdo-rje-mkhaḥgro-ma dra-baḥi-sdom-pa-las brtag-pa gñis-pa rab-gnas-kyileḥu ste daṅ-poḥo/—326a, 7.
熾盛拏吉尼所說成就品第十二	Kyeḥi-rdo-rje-mkhaḥgro-ma dra-baḥi-sdom-pa-las dṅos-grub-gtan la dbab-pa ṣes-bya-baḥi leḥu ste gñis-paḥo /—330a, 3.
說方便品第十三（正藏p596c, 7マデ） 第三卷終	Kyeḥi-rdo-rje-mkhaḥgro-ma dra-baḥi-sdom-pa-las rgyud tham-cad-kyi gleṅgṣi daṅ-gsaṅ baḥi skad ces-bya-baḥileḥu ste gsum paḥo/—334b, 4.
說方便品第十三之餘	

思想より地方化され、俗化されて發達したのであるから、本經の底基には純密敎の思想が多分に然かもその思想が淫靡的に彩色されたにせよ、根本思想の沒脚されてはゐないのである即ち、

復次無我菩薩、重白佛言、是惡人輩諸弊惡云何教授、佛言應先布薩淨住律儀教授經法瑜伽觀行、大毘婆娑及中論等一切眞言理趣如實知已然後爲說吉祥金剛空(本經卷第五教授品第十八)。

この文は明かに本經思想の發達變遷を示めせるものである、これによつて見てもかゝる思想の佛敎中に生じたのは新しく、密教學者が地方色を枳托尼天女を密敎經典に取り入れ、密教弘通に努力したのであらう。

(4) 漢藏兩譯、並びに譯者

兩譯の詳細なことは、各品内密について、或は本經の各所に於て述べるとして、漢譯をこゝに國譯(?)とするにあたつて、傍ら机上に備へておいたナルタン版西藏大藏經祕密部中の Hye rdo-rje-rgyud-kyi rgyal-po. 即ち本經の西藏譯と大體に於て比較して見た、そしてなほ大正大藏經の梵本と半ば比較してある部分は、その梵語とも比較をして梵語をそのまゝ依用し大正大藏經の後半梵本と比較してない部分の梵語を擧げてあるのは西藏語よりの推定である。もし誤謬があれば御指示を願ふ。こゝに梵本を手にしないから、孰れが梵本の眞意を傳へてゐるかは論斷し難いが、兩譯の上から概括的にいふて見るならば、漢譯は散文と、偈を以て譯されてゐるに反し、藏譯は極めて少しの語句を除く外、總て七言を一句とせる偈にて譯してある。かくその譯文に於て已に相異してゐるものゝ、傳ふる意味に於ては殆んど同一である。然し漢譯は譯者の意に出たるか、西藏文のあるに拘らず、漢譯は極めて露骨なる文を闕いてゐる、それらの詳細は後節にゆずるとして、世尊が金剛明妃の陰門形法生の中なる宮殿(Vajra-yogirbhaga, (Tib.)Rdo-rje-btsun-moḥi-bhaga.)に於て、說かれた拏吉尼(Dakni)の諸法とは、金剛頂十八會中第九會一切佛集會拏吉尼戒網瑜伽眞言宮殿にて說かれたるにあたり、五明妃、八明妃、上下二明妃によつて四種曼荼羅を說明せるものである。この拏吉尼女天を說ける。この經が西藏に傳はつて西藏古派の依用する所となり、しかもこの法を以て直ちに涅槃に趣く速疾なるものとして重視せられてゐるのである。

前述の如く左道密教の思想の發達は純密教の發達以後と見らるのである。然し本邦に傳はつた眞言密教中にこの左道密教の思想が皆無といふことは出來ない。眞言密教にて理趣經その他大日經疏等にも散見せらるのである。然しこれらに見

を以て貪縛を斷ぜしむ」といふ如く烏仗那(Udyāna) に流行せる密教は、自然この地方の淫風に化せられたのである。けれども密教の眞生命を失ふことはなく、この地方的色彩(Local colour)に醇化して、密教の眞生命を傳へんとした努力らに外ならなかつたと思ふ。

西藏の密教は、この烏仗那(Udyāna)國に流行した密教を、そのまゝに蓮花生(Padmasaṃbhāva) によつて、西暦七四七年彼の入藏以來紹介せられたものである。こゝに自と西藏に傳へられたる密教と、支那に傳へられ、本邦に一宗を開かれた眞言密教とは、その思想に系統を異にせることが解る。

註【一】 正藏五一・八八二b.
【二】 河口慧海師著、西藏傳印度佛教歷史上卷一九四・一九五・二六七・二六八頁參照。
【三】 De-bžin-gśegs-pa thams-cad-kyi sku-gsuṅ-thugs-kyi gsaṅ-chen-gsaṅ-ba ḥdus-pa ses-bya-ba brtag-paḥi rgyal-po chen-po.
【四】 摩沙豆、西藏語は、Mon-sran-sde-hu. 梵語 Maṣa. 譯は Indian pea. この豆を食へば熱を發すといふ。

（3） 西藏に於ける本經の位置

かく西藏密教は烏仗那(Udyāna)國より傳へられた密教と雖ども、西藏の祕密教の中には、本邦所傳の純眞言密教も傳はつてゐるのである。

西藏密教に於ける本經の位置を述べるに就いて西藏佛教中の祕密部經典の高下判釋を大體述べておこう。

西藏にては密教經典を四部に別けて「祕密部の四」((Tib) Rgyud-sde-bźi, (skt) chatṛ-tantra) といふてゐる。即ち、眞言・印相を主として說ける作祕經((Tib.)Bya-rgyud, (skt.)Krya-tantra)を初めとして第二修祕經 ((Tib.)Spyod-rgyud, (skt.) Chārya-tantra) にして、この部に大日經等が屬してゐるのである。第三相應祕經 ((Tib.) Rnal-ḥbyor-rgyud, (skt.) yōga-tantra) であり。第四に相應無上祕經 ((Tib.) Rnal-ḥbyor-bla-med-rgyud, (skt.) Yōga-anutara-tantra) であつて、本經はこの部に屬し四部の祕經中最も成佛の頓速なる法の說かれたるものとしてゐる。かく本經の成佛覺知の最速なる法を、世尊は金剛王妃の陰門形法王中なる宮殿(Vajra-yogirbhaga (Tib.)Rdo-rje-btsun-moḥi bhaga) に住して、金剛藏 (Vajra-garbha (Tib.) Rdo-rje-sñiṅ-po) のために、瑜吉尼(Yogini (Tib.)Rnal-ḥbyor-ma) の法五十萬偈說かれたものである。然しこの五十萬偈中現存せるは、後に示めせる如くである。(漢藏兩譯品名比較表を參照)

こゝに瑜伽行女・瑜伽行者の法を說くといふても、密教の根本教理に立脚して、善巧方便を以て通俗的に說けるのであつて、密教が大乘佛教を依處として、大乘佛教の雰圍氣の中に育まれ、その密教

なる中に育くまれたる那爛陀（Nālanda）寺の浄化されたる密教思想に對して極めて淫靡なる密教思想が如何にして發達したであらうか、その概觀を述べて見よう。

幾多純眞言密教の思想の源泉地についての説があるに拘はらず余は前述の如く思ふのであるが、又先きにも述べたる如く地方色によつて、思想の色づけらるゝことは、止むを得ないことと思ふのである。

唐の貞觀三年（629A.D）長安を發して、西域の阿耆尼（Agni）國を始め瞿薩旦那（Kustana, or Gostana,（Tib）sa-nu-ma）國に至る、親ら践むもの一百三十八國、同十九年正月長安に届いた玄奘三藏は西域記卷三に

「烏仗那（Udyāna）國、……土産ニ金鐵一宜ニ欝金香一、林樹蓊欝、花果茂盛、寒暑和暢、風雨順レ序、人性怯懦　風情譎詭、好レ學而不レ功　禁呪爲ニ藝業一多衣ニ白氈一少有ニ餘服一語言雖レ異大同ニ印度一文字禮儀頗相參預、崇ニ重佛法一敬ニ信大乘一

と、烏仗那（Udyāna）國の風俗、宗教を記してゐる、この北印烏仗那國に密教が行はれ、又大乘佛教が行はれてゐたことは明かである。この花果茂盛寒暑和暢人性怯懦なる地方の密教は如何であつたらうか　西藏傳の説に從へば「榜迦[二]に行くと雖ども我は空を行くなりと言はれしを以て見れば、此の時直ちに神通力にて托枳尼天の浄土、烏仗那國に行かれて、因陀羅菩提大王のために、祕密王集經集[三]を説かれたり」と、卽ち烏仗那（Udyāna）國は托枳尼の浄土といはるゝほどの國であるから、その淫風の駘蕩として流れてゐたことが察せらる。

かく托枳尼（Dākinī）多く、淫風の盛んなる地に於てはその思想の淫猥に落ち入るは言ふを要せぬのであらう。されどこの地方の密教思想は單獨にこの地方に發生し、他と如何なる關係もなく發達したのではなく、法顯の傳ふる如く、勿論那爛陀（Nālanda）寺との交渉も盛んであり、交通も多く行はれたものと思ふ。然しこの那爛陀（Nālanda）寺の思想といへどもこの地方に至つては、その淫風に乘じて、大乘佛教の宣傳となつたものであらう。換言すれば彼等貪欲に對して、貪欲をして貪欲の清淨なるを知らしめて、この清淨なる觀想を以て還滅に趣かしめんとした努力に出たものであらう。更にその證として、本經幟盛拏吉尼所說成就品第十二に「清淨の有を以て煩惱の有を破る、風病人の摩沙豆[四]を食する如し、病愈ゆ風を發す、顚倒藥と名づく、譬へば人あつて少水耳に入つて、還つて水を以て取り、……我は方便を以てために貪火を說いて解脫せしむ、卽ち是れ貪

大悲空智金剛大教王儀軌經解題

解説

密教中大悲空智金剛大教王儀軌經は、淫祠邪教を說く根本的經典なるものゝやうにせられてゐるが、本經は單なる性の崇拜觀念の表はれと見ることは出來ない。併しながら性の神祕に對しての思想より生じてゐることは勿論なるが、佛教の一思潮としての密教中に、かゝる積極的思想が表はれ一組織を立てゝゐることは性の避けがたきが爲めでもあらうか、以下その梗概を述べて見よう。

一、大悲空智金剛大教王儀軌經序説

（1）經題について

大悲空智金剛大教王儀軌經は、梵名は[一]叱拔喇雜單特羅(He vajra tantra)と傳へ、藏名は[二] Hye rdo-rje ṡes-bya-ba rgyud-kyi-rgyal-po といふ。[三]空智者謂大悲空智といはれ、この空智金剛から悉く出生するの義を說くを本旨としてゐる。又如來大藏經目錄には[四]喜金剛本續王なる題を附してゐる。

註【一】至元法寶勘同總錄卷第六。
【二】ナルタン版西藏大藏經祕密部 Ka-Pa 三〇六 b。
【三】本經卷第一、金剛部序品第一。
【四】昭和法寶勘同總錄第二卷、一〇四〇 b。

（2）密教思想の發祥地

千有餘百年の昔、弘法大師は入唐し初めて本邦に傳へられたる眞言密教は、こゝに言ふ密教とはその趣きを異にせるものである。

眞言密教が印度に起り、支那に成熟せるは人の皆知るところであるが、一概にこれを密教思想といふも、印度に於ても時代の相異あり、又地方色(Localcolour)の異るもあり。もし時代の相異といへば、印度に於て佛教の起る遙か以前、攘災與樂の法を修し、現世利益を以て主眼とせる婆羅門思想より、密教的思想は佛教中に融合し、次第に醇化され幾多先進の努力を俟ちその思想は成熟、發達して、遂に佛教中の一大思潮となり、傳授に傳授を重ねて、唐代の盛んなるを見るに至つたが一宗派としての鞏固なる基礎を組織するに至らなかつた、然るに大師に至つて一時期を劃して支那にその思想の亡びたにかゝはらず、我國にその思想は今日まで流れてゐる。かゝる密教思想は印度文化の中心、摩揭陀(Magadha)國の那爛陀(Nalanda)寺に於ける、幾多の諸師の宣揚せる思想の流れであらうと思はれる、然らばかゝる唯識・中觀思想の盛ん

て、惡人を善道に導いて、其の終極の目的たる精神的解脱を得さしめやうと云ふ觀念を以て、之をなさなければ、却つて禍が行者自身に及ぶと云ふことになつてゐる。不動明王・降三世明王が忿怒の形相を示して、剛强難化の衆生を攝伏するのも、皆慈悲心から起つた降伏である。

【一〇一】器杖等。利劔を云ふ。

【一〇二】見礬。膽礬卽ち硫酸銅のこと。

【一〇三】嚕地羅(Rudhira)。譯して血と云ふ。

【一〇四】尾沙(Viṣa)、譯して毒といふ。

【一〇五】鎭熒惑云云。鎭は鎭星(Śanaiścara. 土星)。熒惑(Aṅgāraga 火星)。參は參宿(Ārdra)。柳宿(Aśleṣa)。

【一〇六】阿闍梨(Ācārya)。

【一〇七】洛叉(Lakṣa. 億)。

【一〇八】以下は好相の六十三種、皆是れ成就の相。

【一〇九】以下は不成就の相、一十六種。

【一一〇】以下は不祥の相を消滅することを明す。

【一一一】以下は喫食の法を示す。

【一一二】倶胝(Koṭi)。印度數目の一。これに大凡そ四種、卽ち十萬と百萬と千萬と萬々とがある。中に就て一千萬とする說は、印度で通常行はれた計算法と一致す。

建立曼荼羅護摩儀軌(終)

不祥の諸の惡夢には、百遍部母の明をなせ、二二 凡そ喫食せんと欲する時には、明を持して本尊に奉り、部主の明眞言を以て、食を加持して食せよ、護摩敬法の如くして、微細に明かに之を解け、少分も相應せざれば、衆惡皆來集せん、二三 三倶胝數滿たば、常に本尊を見ることを得、心解脫門に通じて、智慧測る可からず、世出世間の願、所求皆滿足せん。

子。地とは師の左の小指。彼の空とは弟子の右の大指。師、右の手に杵を執り、左の拳の小指を以て、弟子の右の大指に鉤して、火天に食を施さしむ。

【八六】 東南方位。火天の本位は胎藏界曼荼羅外金剛部院の東南の維であるからかく云ふ。

以上で最初の火天段畢る。

【八七】 以下は第二の曜宿段を明す。

【八八】 以下は第三の本尊段を明す。

【八九】 所供云々。小野には之を混沌供と名づけ、廣譯には雜和供と云ふ。

【九〇】 羅惹(Rājā)。譯して王と云ふ。五佛頂經五に火食供養の六種をあぐ。卽ち一、國王・王族。二、大臣・僚佐。三、過現一切の師僧・父母。四、業道冥官。五、十方施主。六、十方法界・六道四生・三途八難、一切有情。今も此の如く各三度護せよ。

第四の滅惡趣を明す段である。

【九一】 八方天。四方・四維の八方を守護する諸天。東方帝釋天(Śakra)・南方焔摩天(Yama)・西方水天(Varuṇa)・北方毘沙門天(Vaiśravaṇa)・東北方伊舍那天(Īśāna)・東南方火天(Agni)・西南方羅刹天(Rākṣasa)・西北方風天(Vāyu)・これである。

以下は最後の第五世天段を明す。

【九二】 以下增益護摩を示す。

【九三】 布瑟置迦(Pauṣṭika 增益)。

【九四】 七珍の資具。七財(Sapta-dhanāni)を云ふ。道果を資成する出世間の法財に、七種を分つたもの。又、七聖財・七德財とも云ふ。卽ち一、信財(Śraddhā-dhana)。二、戒財(Śīla-dh.)。三、慚財(Hrī-dh.)。四、愧財(Apatrāpya-dh.)。五、聞財(Śruta-dh.)。六、捨財(Tyāga-dh.)。七、慧財(Prajñā-dh.)。一、信財とは、信心にして如來の正法に淨信を生じて、成佛の資を成ずる故である。二、戒財とは、戒は如來の禁戒で、能く三業の非を防止し、善根を保ち、解脫の資とする故に。三、慚は羞恥の義で、已が非を羞恥するを云ひ、愧と對稱して、次での如く、或は天に恥ぢ、人に恥づとも云ひ、或は自に恥ぢ、他に恥づとも云ふ。既によく慚愧心あれば、敢て更に諸の業を造作することなく、遂に成佛すべき資となる故である。法數は慚愧を一合して出す。四、前に準ず。五、聞財とは、聞は聽聞の義で、能く正法を聞き、以て妙解を發し、如說修行して得脫の資を成ずる故である。六、捨財とは、捨は捨施の意で、心を平等に持し、憎愛慳惜の念なく、所求に隨つて給施し、以て得道の資とする故である。七、慧財とは、智慧諸法を照了し、諸の邪見を破して正見を成就し、以て佛道の資とする故である。

【九五】 以下は敬愛護摩を示す。

【九六】 縛施迦羅(Vaśīkaraṇa 敬愛)。

【九七】 極喜地。菩薩十地の中、初地の名。歡喜地(Pramuditā)に同じ。始めて凡を捨て、聖位を得、大に自利々他することを得て、大慶喜あるが故に云ふ。

【九八】 以下は降伏護摩を明す。

【九九】 阿毘遮嚕迦(Abhicāraka 調伏)。

【一〇〇】 內に慈悲心云々。降伏護摩の目的とする所は、怨敵惡人を單に惡んで降伏するのでなく、其の人を苦しめるから、其の人の惡業は永く罪業を除いて、永世安樂を與へんとする慈悲心から、此の法を修するのであると觀想することが、肝要となつてゐるからかく云ふ。換言せば、此の降伏護摩は、悲愍の心を起し

の如き等の事、之を制して憍慢すること勿れ、大教の[一〇六]阿闍梨、深行の巧慧者、大悉地を求めんと欲せば、須く頻に護摩すべし、[一〇七]三洛叉を滿ずる毎に、一度火供養せよ、

復た次に護摩の相は、赤焰或は金色にして、牛蘇の如く潤澤なり、香氣あつて焰聲無し、焰の上に重焰を生じ、分散して傘蓋の形の如し、加持する所の物、暖煙及び光明の中に於て大聲を發し、梵音師子吼して、雷の如くに鳴り微妙の響あつて、鐃・鼓・雅樂の聲あるは、應に知るべし成就の相なり、若し其の火氣冷に、色光潤無くんば、大星を迸出すとも、或は臭焰煙の如く、爐に却し起つて地に入らば、當に知るべし内外の障なり、初法の息災を修せよ、此れは降伏と與に成ず、[一〇八]或は佛菩薩、金剛或は諸王、部主眞言主、明王或は三寶、婆羅門居士を夢みて、自身明句を持して、新妙の白衣を著し、身に諸の瓔珞を帶す、美女妙瓶を以て嚴り、懐妊の者或は童子、香華・瓶蓋を持して、或は恭敬供養し、圍遶して行道し、粳米・酪飯、甘露・乳・果・華を食す、茂林若くは山に登り、塔及び樓閣を履む、或は車・馬・象に乘ず、師子・牛・鹿等、白鶴・孔雀王、金翅鳥と舟を與にして、海清淨の水に泛ぶ、或は空に騰ること自在に、光焰身に遍し、聽法座の中に在つて、或は衆に處して說法し、珠珍妙寶、商佉・輪・劍・杵を得、善言を以て慰喩し、慶雲幷に閃電、微風天華を雨らす、薰香及び沐浴、此れは皆成就の應なり、覺め已らば復た眠ること勿れ、[一〇九]若し魁膾の人、猪・驢・駱・駝・狗、或は觸れ或は近くに在るを夢む、死屍も亦復た然なり、惡鬼怖畏の徒、身に弊破衣を著し、女人醜惡の形、諸物不吉祥なるは、是れ障あつて成就せず、[一一〇]或は妄念起る有つて、三昧耶を違闕す、地水の内に縛と爲し、火輪二風に遶らして、前に合して大輪を習せよ、三七にして障皆銷ゆ、睡眠には部母を以て護せよ、部主を以て住處を護せよ、

之を布いて、最吉祥の正覺を成じ給ふが故に、吉祥草と名づくと云ふ。

【七二】慧羽の空云々。三股印を結ぶを云ふ。

【七三】鑪は云々。以下は別壇護摩の出處である。

【七四】半鑪に云々。檀木を置かずに炭火を以て護摩す。

【七五】軍荼(Kuṇḍa)。譯して火爐と云ふ。

【七六】燧火。燧木(Araṇi)から得た火を云ふ。

【七七】火光尊。火天(Agni)を云ふ。

【七八】茅草云々。茅草束を以て水を灑ぐ證文である。

【七九】定の羽云々。左に珠杵を持する本文である。

【八〇】粳飯。ウルイネである。

【八一】稻穀華。糯籾のハゼである。

【八二】熏陸(Kunduru)。此の香は天に通ずるから、之を供ずれば、天の護法の力があると云ふ。

【八三】白芥子(Sarṣapa)。芥とは辛子を云ふ。故に白芥子とは辛子である。堅辛の性があるから、摧破の義に相應す。龍猛大士は七粒を以て鐵塔を打ち開く。

【八四】蘇合香。梵に Turuṣka 俗に反魂香と云ふ。

【八五】行人云云、行人とは頭

日輪に同す、熾盛輿に曦しきもの無く、發輝すること劫焰の如し、眞言は猛勵に稱へよ、傍の人聽く可き如り、護尊は寂靜意もて、卽ち忿怒尊を觀ぜよ、身の諸の毛孔に遍じて、[一〇一]器杖雲を流出し、盡虛空の、一切の忿怒尊に供養するに、諸の器杖を雨らして、彼の上所居に落つ、火爐は三角に作れ、獨股杵を中に置き、量は縛施迦に同じ、壇地は赤黑に塗り、刺樹坐・赤華、黑華の香氣無きを、散じて以て供養に充てよ、飯食は石榴の汁を以て染めよ、鐵汁・[一〇二]皂礬水、黑華・芥子・柏を、各少し閼伽に置け、燒香には安悉を用ゐよ、芥子の油を炷と爲し、牛脂・[一〇三]嚕地羅を、燈と爲す 聖尊に供養して、忿怒遍く加護せよ、眞言に曰く、

吽吉理吉理縛日囉二合吽吽吽泮吒吽吒泮吒

次第に軍荼を遶つて、臭惡の刺草を鋪き、苦參を爐中に炷し、火著き淨水を灑がば、囉字火天と成り、赤黑にして烱焰を遍ず、請召は前に準ぜよ、牛脂・嚕地羅血、蘇・乳・蜜・麻・油を、[一〇四]尾沙と共に相合せよ、三七軍荼に投げて、或は頭の酢を用ゐよ、骨と髮と惡木の柴と、刺棘と參と尾沙とを、嚕地の油に揾れ、遍く沃いで眞言を誦せよ、本方位を指示して、[一〇五]鎭・熒惑と、參星と柳宿とを啓請し、發願の歌讚を詠ぜよ、大天忿怒威神力、能く衆生の滅怨敵を滿たす、今敵を破り怨讎を滅せんことを求めたり、諸天に稽首して本宮に歸し奉る、後に誠を至して哀請すること有るの時、唯願くば來降して供養を受け玉へ、

奉送の眞言に曰く、

布爾都徒麼野薄底也一合 蘖蹉阿佗寧二合 娑縛娑縛南補曩羅馳識麼引那野娑嚩一合 賀

解界は儀則の如し、政しく尊の前に對して、頻申し支節を動かし、滿唾及び鳴聲、是

味を明す。三三味は三三摩耶・三等持と云ひ、また三空とも云ふ。空三味(Śūnyatā)・無相三味(Nirākāram)・無願三味(Apraṇihitam 無作)の稱。空・無相・無願と觀ずるが爲に住する定である。空とは、萬有の上に於て、人又は法の空なるを觀じ、無相とは、空なるが故に差別の相狀なきを觀じ、無願とは、無相なるが故に願求すべきことなしと觀ずるを云ふ。而して此の三三味は有漏・無漏に通じ、其の無漏なるは、涅槃解脫に入る門戶として、空解脫門・無相解脫門・無願解脫門の三解脫門と稱せらる。

【六九】 一搩(Vitasti)。印度で用ふる尺量の稱。我國の七寸餘に相當す。一張手又は一搭手に作る。搩は張申の義で、頭指と中指とを張開して、兩指端の間に於ける尺度を云ふ。一肘の半で十二指の長さである。

【七〇】 階。爐の最上の高い處。

【七一】 茅草(Darbha)。茅草は清淨な物であるから之を用ふ。神道でも之を淨物となす。之を吉祥草と名づくることは、如來成正覺の時、吉安童子之を捧ぐ。如來之を敷いて正覺を成じ給ふ。吉安之を奉るが故に、吉祥と名づく。又如來

榮友・意宿等（前の印）　所供は前儀に準ぜよ、[九五]若し歡愛法を求むるは、[九六]縛施迦羅と名づく、喜怒の心と相應す、　十六より二十三までにせよ、　人及び天龍、　鬼神非人の類を召し、一切に敬愛せらる、　家國及び眷屬、　怨敵諸の朋友、　和順して歡喜す、　及び妙辯才を求むるに、　天龍八部衆、　諸佛及び菩薩、　聲聞・因緣覺、　一切處を護念す、　所求の願滿たば、　面を西にして半跏坐し、　增長を求むるを上ぶこと同じ、　某甲と與に某を攝し、明を持するに歡喜の心を以てせよ、　護尊は寂と忿との相なり、　金剛鉤は攝召なり、　鉤雲法界に供ず、　次に三惡趣を召け、　人天に安置せよ、　（衆鉤俱の心に入り召來すと想へ、）　歡喜華箭の雲、　二乘の厭離、　憎恚三重の障を射る、　及び怨害の心を除いて、　極喜地に至らしむ、（五處を射よ、額と兩乳と心と下分となり、）　爐は八葉の蓮の如く、　開敷して臺蘂を具す、　量一肘深さ半にせよ、　底に紅蓮華を安じ、　兩重の緣は四指にせよ、　（白色にして高さ一指なり、）　所服は紅白黃なり、空を押して風輪を擧げ、　方毎に各一點せば、　即ち大界を結することを成じて、　吽字遍く加護せん、　（寶物を以て供養せよ。）　丁香・蘇合を燒き、　燃燈には菓油を以てせよ、　乳と刺と果と木柴と、　赤華とを以て供養を爲せ、　焰中は赧鬼囉のごとく　紅色にして紺青の髮あり、梵子太白天と、　成と胎と親との宿等を、　遍く護して歡喜を乞ふ、　[九八]若し降伏の法を作さば、　[九九]阿毘遮嚕迦なり、　二十四より月盡までにせよ、　鬼神惡人、　正法眼を破壞し、　及び諸の惡毒龍の、　非時に暴雨を降らし、　霜雹苗稼を損じ、　水旱以て時ならず、　鬼魅遍く流行し、　處處に變怪を現じて、　人衆安寧ならず、　所在横に惱亂し、　及び不忠孝を行ふを制す、　此の法能く制除せば、　世間を安樂ならしめん故に、　此の大方便を設けて、　兼ねて彼を利益す、[一〇〇]　內に慈悲心を起して、　外に大忿怒を示す、　左の足の指、右を押し、　南に面して坐は蹲居にせよ、　諸色のうち青黑を上ぶ、　心中の圓明の觀、　變じて大

平等なりと云ふ觀に住して、諸の事業を作すべきを示す。此の觀は護摩一部の至要であつて、行法中は一念一刹那も離るべからざるものである。若し刹那も此の觀を離れたならば、彼の事火婆羅門の邪火法に墮在するのである。故に事護摩が此の三平等の理護摩の觀と相應しなかつたならば、決して斷惑證理は望まれぬのである。

【六四】外に由つて。元來外護摩は其の修法は易く、其の願望は世間的で何人の心をも惹き易く且つ、其の目的は三種四種等に概括し得る所から、之を巧に利用して各自の願望を成就さすのに、即事而眞の觀念を以てさせ、遂には純粹に精神的解脫を目的とする內護摩に、引入する緣と作さんが爲の方便施設であるからかく云ふ。

【六五】扇底迦。梵に Śāntika (息災)と云ふ。以下の四種法は恒と異なる。

【六六】五星。一、Aṅgāraga 火。二、Budha 水星。三、Bṛhaspati 木星。四、Śukra 金星。五、Śanaiścara 土星。

【六七】七曜。前の五星に日(Āditya)と月(Soma)とを加へたもの之である。

【六八】三解脫觀。已下は三三

各、本眞言を以て請じて、一一に供養せよ、或は當部幷に眷屬、　誠心に而も供養せよ、　專注して聖衆に於て、　廣大の雲、
飯食・幢幡蓋を流出し、　微塵の刹に遍じて、　聖天衆に奉獻せよ、　光明の照觸する所、
三惡の諸の有情、　苦を息めて身心樂し、　乃し護世天に至る、　三遍護摩し訖らば、
[八九]所供の香・華・食、　總て皆相和して、　[九〇]羅惹の爲に護摩せよ、　眷屬幷に百官と、　法の諸
衆生と、　自身とに各三たび護せよ、　滅惡趣眞言を以て三五七遍す、金剛頂經に出づ、　最後には爐の四面の、
飲食と諸の果子とを、　加持して護摩せよ、　師出でゝ手を洗ひ已つて、　又復た淨處に於
て、　[九一]八方天を祀れ、　一一に諸天等に供ずること、並に別文の如し、復た飯食を取り、小盆中に置いて、四方の鬼神等に施せ、　還り來つて再び火を
祀れ、　及び宿曜等皆三遍祀れ、　歡喜して諸天に獻せ、　大天自在威神力、　能く衆生の無量願を滿
たし、　所求者の願を皆成ぜしむ、　榮及び富饒を求めしめ、愛敬を求めしむ、願皆成ず、　諸天に稽首して本宮に歸し
奉る、　後に誠を至して哀請すること有るの時、　唯願くは此に來つて供養を受け玉へ、　眞
言に曰く、

吉理吉理縛日囉二合目婆縛二合賀

[九二]若し增長を求めば、　[九三]布瑟置迦と名づく、　喜悅の心と相應せよ、　月の九より十五に至る、
五通と及び寶藏と、　劍と輪と杵と財物と、　藥丸と眼藥と倶に、　遷榮と壽命を增すと、
福智と及び名聞と、　職任と王宮に依ると、　吉祥勝安樂なり、　面を東にして結跏趺し、
衣服皆黃色、　眞言の句を增減すること、　前の如く復た殊なり無し、　供養の雲を專注し
て、　十方界に周遍し、　及び諸の有情を照して、　皆榮盛、　富貴及び延壽を獲せしむ、
即ち此の光明の雲、　彼の所住の處に於て、　[九四]七珍の資具を雨らし、　復た天の甘露を雨
らして、　行人の心に灌注す、　爐は方にして一肘量、　周圍の深さは半肘にせよ、　底に三
股杵を安じ、量は前に準ぜよ　塗るに欝金を用ゐよ、　白檀は燒香と爲し、油麻は油燈とせよ。　光音及び歲星、

喜怒相和して寂然たる智を表し、能く一切に遍じて、攝召と息災と倶に成ず。
【五六】第六の忿怒火。忿怒調伏の意を表す。
【五七】第七溫腹。內諍智を表したもので、極忿怒を意味す。
【五八】第八費耗。除遣の義で、一切の業垢等を燒除して、殘餘あらしめぬ智を表す。
【五九】第九意生火。自在の智慧で、意に依つて生ずる萬事を皆成就せしむる智を表す。
【六〇】十羯羅尾。又は劫徵と云ひ、煩惱の飯穀等を呑滅する智を表す。
【六一】十二譲賀娜。能く一切の事を成就せしむる智、即ち所作已辦し、寂滅道場に處して魔を伏する義である。又他人の惡心を止遏する意を表す。
以上の十二種の諸火は皆精神的智火を示したもので、第一の智火は他の總體たる初の菩提心阿字門に配し、他の諸火は其の智火の作用に種々あることを更に別示したものである。
【六二】次に。已下外護摩の衆緣支分を示す。
【六三】本尊と眞言と印と。本尊・爐 行者の三と、本尊・眞言・印の三と、及び身 口・意の三業との各三者が、互に他の三者を具有して、同一體無差別

護摩の諸の支分は、備に右邊に在け、二杓と空器の物と、蘇・蜜・油・柴・等とは、其の左に安じ在け、當に護摩の儀を以て、兩手を雙膝に在き、右旋して順に轉ぜよ、[七九]定の羽に珠杵を持せよ、風を舒べて大杓を幷せ、金剛拳にせよ、小をば慧手に持し、三度名蘇を取つて、其の大杓に灌いで滿たし、慧、小を捨てゝ大を執り、句の終りに火上に沃いで、火大の口に投げよ、油と蜜と乳酪と、乳粥と五穀の粥と、[八〇]粳飯と[八一]稻穀華と、次第に皆三たび獻ぜよ、甘果・李子木、薔薇・乳樹等、沈・檀・柏・楓の構、量の長さ一磔手にせよ、或は十指、或は四指量、或は頭指の如くせよ、兩の頭皆蘇に搵して、軍荼の中に投げよ、三遍或は廿一遍、或は一百八遍、丁香・白檀・沈、[八二]薫陸・龍腦香、荳蔻・[八三]白芥子、及以び[八四]蘇合香、半は末とし、半は丸と爲し、丸には蘇蜜を以て和せよ、前に準じて火に投じ、三度皆此の如くせよ、或は一百八遍、或は廿一遍、又小杓を以て廿一遍火に沃け、眞言に曰く、

阿仡曩二合曳賀尾野賀尾野嚩引賀曩野地比野地比野扇底、增益には布瑟置。 倶嚕婆嚩二合賀

賀字其の聲を引いて、却つて聲を按じて齊しく果れ、[八五]行人其の左に在り、師、慧を以て杵を執り、地、彼の空輪を鉤して、火、天に食を施さしむ。

寂災の護摩眞言に曰く、

曩莫三曼多沒馱引喃一 阿去 摩賀引 扇底櫱多二 扇底迦羅三 鉢羅睒摩達儞儞入 惹多四 阿婆嚩娑嚩二合婆嚩五 達摩三摩多鉢羅二合鉢多二合 嚩二合賀

火天を請じて爐より出し、[八六]東南方位に就けしめよ、[八七]次に香爐を執つて、本宮曜、及び命業胎の宿を請ずべし、拳印にして風火鉤せよ、供じて以て本位に歸し奉る、[八八]次に本尊を請ぜよ、兩手に時華を捧げて、去垢し及び光澤せよ、或は部主加持 即ち當に爐を隔てゝ擲ぐべし、華諸座に遍ずると想へ、前の如く再び火を淨め、尊を請じて爐中に入れよ、

【五二】智火。菩提心の慧光で、無始以來の無明の薪を燒盡して遺餘あることなく、一切如來の功德自然に成就す。而して此の智火は毘盧遮那如來の別名で、菩提心阿字門に配す。又息災護摩と相應す。

※寂三摩地。三摩地(Samādhi)は譯して等持と云ふ。心を一境に住せしめて散亂せざるを云ふ。

【五二】第二の行滿火。大悲を根とし、菩提心を種子とした、心性圓明清淨の義で、此の妙行を以て垢心戲論の薪を焚き、深法に於て猶豫を生じて、決定して信ぜざる障を淨除す。又息災護摩に適す。

猶預(Vicikitsā)。疑つて決定せざるを云ふ。

【五三】第三摩嚕。行人が初めて菩提心を發して、進行せんと欲するも、而も無始已來の妄惑煩惱の根本を未だ除くことが出來ず、數々來つて觀心を牽破して暗蔽を加へるから、此の火を用ゐて法を作すので ある。恰も世間の風が能く重雲を壞る如く、此の不住の火も亦能く諸障を散壞す。されば降伏護摩に適す。

【五四】第四盧酤多。日の暉の如き赤い火で、智慧の銳利なることを表ず。

【五五】沒栗拏。和合の義で、

せんに、此の印明に由るが故に、淨居の諸の天子、常に其の處に來り、觀照して速に驗あらしめん、[七三]鑪は曼荼羅に對して、外に相望めて別に作れ、所供は大壇の如し、[七四]半鑪に炭を燒いて充てよ、樹の中の所出の枝、乳木・乾柴等、[七五]軍茶の中に擲げ、[七六]燃火を以てし舊を以てすること勿れ、扇を用ゐよ口を以て吹くに非ず、卽ち香水を灑淨し、鑪に燃して後の明を誦ぜよ。

唵步入嚩ニ合攞吽

火旣に光焰を發し、忿怒王を以て去垢し、契明を以て遍く物を加し、觸るゝ每に皆明を稱へよ、（前の枳哩の眞言なり、四輪の背相叉へ、旋轉して[illegible]を定に加ふ、）便ち火焰中に於て、囉字有りと想へ、變じて[七七]火光尊と成る、身色赤く髮黃なり、三目にして四臂を具せり、身に遍じて火焰光あり、智者右の手を展べ、空輪を屈して掌に入れ、押すに地水火を以てし、風を曲鈎て呼召せよ、我れ今稽首して請じ奉る、火天上首の尊、天中の大仙、梵行崇敬せらる、唯願くば此に降臨して、護摩供を納受し玉へ、奉請の眞言に曰く、

唵翳係曳ニ合呬摩賀步多捉去嚩哩使ニ合㨖尾ニ合惹娑多摩仡哩ニ合呬怛嚩ニ合護底摩賀引嚧摩阿悉弭ニ合散儞呬覩婆嚩阿仡曩ニ合曳賀尾野迦尾野嚩賀曩引野娑嚩ニ合賀

火天來赴して坐せば、印を以て火を灑淨せよ、（[七八]茅草を以て小束に作れ、或は三股の印、水を爐中に灑いで火を淨めよ。）眞言に曰く、

唵阿蜜哩ニ合帝賀曩賀曩吽泮吒

華を軍荼に散じて、閼伽香水を獻ぜよ、金剛拳にして風を舒べ、用て閼伽水を攪し、右に轉じて爐中に灑ぎ、火天の口を漱ぐと想へ、吉祥の眞言に曰く、

唵嚩囉娜嚩日囉ニ合曇

上に現じ、初禪天以下は悉くこの火災のために燒かる。

【四五】三處同一體。己身に本尊の三密と爐の三密と行者の三密とを具するは、一性にして而も三を具することになる。此の三平等不二なるを三處同一體と云ふ。

【四六】大壇卽ち護摩。二壇別なるも、而も一なることを明す。此の三平等觀、安流は酥油の時、合杓の觀を作す、他流は別に之を觀ず。

【四七】阿字門。五輪成身觀の中、先づ阿字輪を觀ずるを明す。

【四八】祕密內護摩。上に示す如く、三者三平等なりと觀じ、心・佛・衆生・三無差別の觀に住して、此の觀智の火を以て、隔歷不融を執する無明煩惱を燒き盡す心內觀心の內護摩を云ふ。

【四九】我れ成菩提の後。大日經護摩品に依れば、大日如來、往昔梵志たりし時、梵天來つて種々の火を問ひしに對して、外道四十四種の火を說き給ふ。次で成菩提の後に、如來の火相を說き給ふ。これ世間の邪護摩と出世の正護摩とを對辨して、行者の用心を示さんがためである。

【五〇】十二種。大日經護摩品と大に同じ。

無く、須臾の頃に心を澄し、一切の見を滅除せよ、空執を除かんが爲に、無相三昧に入つて、彼の一切の相を離れよ、次に無願三昧、彼の眞如智に於ては、相を離れ本空寂にして、亦願求する所無し、三摩地より起つて、諦かに想へ心臆の間に、圓明一肘なるべし、即ち菩提心なり、猶し秋の月の光のごとし、澄明にして仰いで心に在り、次に本尊の口の、所持の祕密の句を觀ぜよ、分明に字道を成じて、瑜岐の口に入れよ、文字右に旋布して、心月輪に列なり、字字皆金色にして、大光明を流出す、身心散動せずして、阿字門に入らば、則ち一一の字に於て、實相義を思惟せよ、此れを三昧の念と名づく、先づ歸命を幷べ誦じ、三七して乃ち之を除け、唵より起して初めと爲し、某甲が與に禍を除けと、娑嚩賀は最後なり、本に無くんば事に臨んで加へよ、念誦は小聲を以て、當に寂靜の意を須ふべし、護尊は忿怒の相なり、若し火壇を作らば、圓に其の鑪形を穿れ、或は方[69]量一肘深さは半にせよ、爐の底に泥を以て輪を作れ、其の輪は八輻を具せり、一搩は是れ其の量なり、高さ一指四節を周界と爲す、壇を塗るには純白色にせよ、餘香は準ぜよ[70]階の上には祥[71]茅草をしき、日に隨つて右に旋布せよ、本を以て其の苗を覆へ、或は衆の彩色を布け、形輝極めて嚴麗にせよ、一切續いて事成ぜよ、沈香・蘇燈を燒け、鮮妙の諸の華果、飮食を供養と爲せ、月の初めより八日に至る、三餘時に護摩せよ、慈心にして歡喜を生じ、一切を顧視せよ、是れ略護摩の處なり、當に辦事の明を持すべし、或は不動吉理明王を以て、結護して諸物を加せよ、[72]慧羽の空地を押し、餘の波羅蜜を舒べ、遍く灑ぐに香水を以てせよ、眞言に曰く、

唵吉哩吉哩嚩日羅二合吽泮吒

諸の事業を作さんと欲せば、結壇の法を成就せよ、身及び弟子を護り、諸の障難を辟除

淨なものと考へられ、祭壇には必ず之を塗つて清淨ならしむると云ふ風習があつた。密教に於ても此の風を受け、修法を行ふべき壇場を淨むるに牛糞を以て塗拭することと、又、護摩の時供物の一として壇中に投ずることとがある。今は其の中、前者を指す。

【四〇】甘露の明。甘露王三昧に住して說き給ふ呪であるからしかいふ。

【四一】行者在佛室。行者の坐處は一佛二明王の中間である。若し胎藏に約すれば、般若佛母の位を坐處とす。現圖並に所傳、俱に第一重の持明院に在つて、現圖には降三世と大威德との中間、阿闍梨所傳には不動と降三世との中間になつてある。若し金剛界に約すれば、金剛波羅蜜の坐位がそれである。眞言の行者は其の座に坐して、密行を修することになつてゐる。

【四二】以上で大壇の建立を明し已つたから、以下正しく護摩を明すを云ふ。

【四三】金鑁。有情(Sattva)を指す。

【四四】劫燒の火。單に劫燒或は劫火とも云ふ。世界の壞滅する時に起る三災の一、即ち壞劫の時に起る大火災であつて、此の時には七箇の日輪天

赤く右は黄なり、座左は方に三角なり、定には刀、慧には梓を持せり、能く二種の事を成ず、攝召と息災と倶なり、[五六]第六の忿怒火は、尊の形色焔の如し、一目を閉ぢて大叫し、狗牙上下に現ぜり、蓬頭の髮上ざまに聳えたり、二事火と風と倶なり、[五七]第七をば濕腹と名づく、卽ち大般涅槃なり、迅疾和忿怒にして、惡字五色を具す、[五八]第八をば費耗と名づく、色衆電を集めたるが如く、極めて瞻覩す可きこと難し、金剛輪の中に坐して、能く重障、及び頂行眷屬を除遣す、[五九]第九の意生火、此の尊は意に隨つて成ず、普門種種の身、大力自在慧なり、[六〇]十をば羯攞尾と名づく、其の尊右の手を側てゝ、淨行の唵の印と聲となり、第十一梵本に名を闕く。[六一]第十二の謨賀娜は、尊形劫災の火なり、道場にて魔を降伏す、若し諸の有情類、惡を造つて止む可からず、勸導すれば轉た更に増せず、此の火能く淨除す、方便して以て制伏し、迷惑して知るなからしめ、意密なり、漸次に道に引入す、[六二]次に四微密、儀軌を陳べん當に修習すべし、[六三]本尊と眞言と印と、身・口・意と相應せよ、三位正しく和合し、而して諸の事業を作す、[六四]外に由つて内に引入するに、義理差別無し、息災は初夜に起めよ、增益は初日の分にし、中には猛利降伏をせよ、鉤召は一切時になせ、夜に於て敬愛を作せ、[六五]扇底迦寂災は、聰明及び長壽、幷に障難を除く法なり、[六六]五星陵逼せらるゝと、種種の諸の災難と、口舌と及び鬪諍と、王宮に逼迫せらるゝと、内外和順せざると、[六七]七曜常の度に乖くと、風雨時を以てせざると、疫病と及び荒儉と、鬼魅の諸の不祥と、是の如くの災起らん時に、面を北にして髀〻交へて居し、膝を竪てゝ右の髀を先めよ、衣服は當に潔白にすべし、食飲・香華・地、燈燭も亦復た然なり、月輪に眞言を布け、文字も亦宜しく白にすべし、[六八]三解脫觀に住して、空三摩地に入り、運心して法界に周し、豁然として一法

と深祕との釋あるは、前に準じて知れ。

【二九】母捺囉(mudra)。譯して印契と云ふ。今は卽ち劍印慈救咒を指す。

【三〇】禪・智・進・力、禪は右手の大指。智は左手の大指。進は右手の頭指。力はた手の頭指。

【三一】瑟瑟。綠寶。青黑色にして瑠璃(Vaiḍūrya)に似る。

【三二】赤箭(Viṣa)。藥店には天麻と云ふ。

【三三】菉豆。梵に Mudga と云ふ。

【三四】沈香。梵に Kṛṣṇāgaru と云ふ。

【三五】檀(栴檀)。梵に Candana と云ふ。

【三六】丁香。梵に Lavaṅga と云ふ。

【三七】欝金。梵に Kuṅkuma と云ふ。二類あつて、一は黃色で染色に用ふ。惡臭の爲め、香に用ふるに堪へぬからである。一は同じく黃色で金に似、欝勃として香が甚しいから、香具とするに足る。

【三八】龍腦香。梵に Karpūra と云ひ、又、樟腦と譯す。

【三九】瞿夷。詳しくは瞿摩夷(Gomaya)と云ふ。牛糞の梵語。印度では吠陀時代から牛を神聖な動物としてゐたから、其の牛糞幷に牛尿も亦共に清

異なり無し、三身を具足して、量法界に周遍す、不生亦不滅にして、言を離れ言相を離れたり、生と無生と、大日尊に非ざること無し、[四七]阿字門を觀ぜよ、本不生の義、即ち是れ菩提心なり、今顯見せんと欲するに、何の方便を以て之を見ることを得ん。惑障に覆蔽せられたり、猛利智に入り、周匝して光焰と成り、劫火の熾盛なるが如し、刀及び羂索を持し、業煩惱と、無明の株杌等とを焚燒して、復た遺餘有らず、次に菩提心を觀ぜよ、沐するに大悲水を以て、當に身中に遍ずと想ふべし、白甘露を流注し、十方刹の、熱惱の諸の衆生に灑いで、菩提の芽を滋長し、次第に諸字を生ず、即ち是れ五輪の字を以て佛身を成ず、即ち此れを法身の、[四八]祕密內護摩と名づく、復た次に世尊言く、[四九]我れ成菩提の後に、[五〇]十二種を演說す、[五一]智火を最も初めと爲す、大因陀羅と名づく、即ち金輪の別名なり、金剛杵の形と作る、即ち方座なり、但し四角壇中に本尊有りと觀ぜよ。即ち金剛座を表す。菩提心の慧光は、形方にして黃金の色なり、其の尊極めて端嚴にして、焰鬘をもて圍遶せられ、*寂三摩地に住せり、此れ即ち是れ毘盧遮那なり、亦內火法身の義なり、下皆準ぜよ、觀じ以て密言を誦じて、能く一切事を成す、順世の方壇爐と、所供と服と皆黃なり、[五二]第二の行滿火は、像形秋の月の如し、光暉普く周遍し、身衣潔白の色にして、月輪曼陀羅に、珠及び軍持を持す、水火虫霜、自他の身の疾病、種種の惡災禍、*猶預不定の心を除き、此の火能く淨除す、[五三]第三をば摩嚕と名づく、形色極めて黑燥にして、塗灰等の如し、降伏の火なり。風輪半月の壇なり、帛を執つて風の吹く勢なり、謂く彼の修行者、疑心數進退し、無始の妄惑、煩惱の根未だ除かざる爲に、常に違つて纏縛せられ、以て暗障蔽を加す、數此れに依つて燒除し、散壞して重雲を去れ、[五四]第四の盧醯多は、身の形相端滿なり、三角にして光焰鬘あり、色赤きこと初日の暉のごとく、刀を執つて微しく怒相なり、第五の[五五]沒栗拏は、燄形淺黃の色なり、身上に髭鬘髮あり、頂に大威光あり、目左は怒り右は笑み、色左は

用ふる尺量の稱。古來之を佛本行集經は貳尺、毗曇の說には壹尺五寸、資持記は壹尺八寸、不空羂索經には拾六指等と記す。一指(Aṅgula)とは指の幅を云ひ、一肘とは肘節より中指の端に至る長さをいふのであるから、人に依つて異なるのは當然である。但し通途に約すれば、周尺の一尺八寸である。周の一尺は曲尺の八寸であるから、我國の一尺五寸餘(英國の一呎八吋)に相當す。

【三八】以下は正しく擇地造壇の法を示す。凡そ印度の風習では、アーシュワラーヤナ家庭經(Āśvalāyana-gṛhya-sūtra)・ゴービラ家庭經(Gobhila g. s.)に依れば、家屋を建てんとする時、土地を吟味するに、先づ地を擇び、之を掘つて荊棘・瓦石等を除去し、其の坑を膝に達する深さに迄掘下げ、其の掘出した土を元の坑に埋むる際に、其の上に殘餘があれば最上地とし、平均せば中庸地とし、若し充たざれば不吉として、之を破棄することになつてある。これを以てしても、彼等の生命である祭祀の式場の中心たる火壇を造る場合に、如何に嚴密に且つ用意周到に行はれたかゞ想像される。之に淺略

白檀を以て尊位を塗り、辦事の明千遍せよ、次に慈悲眼を以て、諸の衆生を觀念して、[四〇]甘露の明を習へ、想へ其の自心の位、導師所住の處に、八葉意より生ずる、蓮華極めて嚴麗なり、圓滿月輪の中、無垢なること猶し淨鏡のごとし、彼に於て常に安住し玉ふ。眞言救世尊、金色にして光燄を具し、毒を害して三昧に住し玉ふこと、日の瞻覩し難きが如し、諸の仁者も亦然なり、其の圓鏡の中に於て、自ら其の身相を見るに、佛身に等同なりと、此の觀を作すには、先づ外緣を觀じて後に己身に引入せよ [四一]行者佛室に在つて、頂髻の百光明を以て、遍く無邊刹を照せ、善く心氣を調へて、阿字の明を連誦せよ、一息より乃ち三に至り、力を盡して當に念誦すべし、覺觸して心相應し、一切の分別を離れ、淨法界の體より、曼荼羅を建立せよ、世尊、及び般若佛母を頂禮し、次に綵色を調へて、護するに無能害を以てせよ、諸聖尊を運布して、而も畫いて身を莊嚴せよ、[四二]次に護摩の、微密成就の法を陳べん、即ち新淨の室に於て、道場を建立せよ、妙香華を陳設して、虔誠にして供養せよ、法に依つて以て結淨せよ、息災と增榮と、敬愛と降伏と等なり、威神能く測ること莫し、能く天地の心を廻し、功用涯際なし、巨に[四三]含靈の福を展ぶ、其の祀火の諸の壇、加臨して頗る衆し、類に隨ひ諸願を求むるに、各各にして差別なり、護摩に略して二種あり、謂く即ち內と及び外となり、內護摩と言ふは、彼の諸の衆生は、皆業より生ずる所なるを以て、業を淨除せば、即ち是れ解脫を得、能く故業を燒くは、所謂る菩提心なり、名づけて內護摩といふ、彼の世間の火の如きは、物を燒いて灰燼と成す、今は此れ則ち然らず、己が猛利の智の爲に、一切の煩惱を燒くに、[四四]劫燒の火の、遺燼有ること無きが如く、[四五]三處同一體なり、[四六]大壇即ち護摩、護摩即ち己身、己身即ち火天、火天即ち大日、身・口・意・和合して、三平等にして

業と口業と意業とを云ふ。諸佛諸尊の側では、三密（Tri-guhya)即ち身密(Kāya-guhya)口密(Vāgguhya)、意密(Manoguhya)と稱せらるゝのであるが、我等凡夫の側では、秘密深玄の義が無いから三業である。

【三〇】定、左手。金剛杵(Vajra 跋折羅)。三股を指す。

【三一】慧。右手。五輪は五指。

【三二】八部。佛法の守護に從事する大力の諸神。また天龍八部・龍神八部とも云ふ。即ち天、(Deva)・龍(Nāga)・夜叉(Yakṣa)・阿修羅(Asura)・迦樓羅(Garuḍa)・乾闥婆(Gandharva)・緊那羅(Kiṃnara)・摩睺羅伽(Mahoraga)是れである。

【三三】靈祇。護法善神を云ふ。

【三四】持明藏教。通途に約せば、五法藏の中の陀羅尼藏(Dhāraṇī-piṭaka)であるが、今は廣く十萬頌の廣本及び諸經軌に通ず。

【三五】如意珠。單に寶珠、又は詳しく如意寶珠と云ふ。梵語震多末尼(Cintā-maṇi)の譯で、珠玉の總名である。

【三六】頓方。蘇悉地の三には、頓方四角とあり、明本には須方といふ。明本然るべきか。頓とは方正四角を云ふ。

【三七】一肘(Hasta)。印度で

鬼神をして、詐つて誑惑を現ぜしむること勿れ、若し障難無くんば、願くば吉祥の境を見んと、寂默として以て安坐して、本眞言明を持すること、一千一百等せば、當に諸の思想を離るべし、數畢已つて安に眠れ、菩提心に專注し、月輪の[二五]如意珠、內外極めて明徹にせよ、成就不成就、悉く心鏡に於て現ず、不善なるに強て作さば、恐らくは自損を招かんことを、先相善くんば建立せよ、壇處の當中に置いて、[二六]頓方に各一[二七]肘せよ、[二八]之を掘つて瓦石を去り、却つて塡めて築いて平正にして、其の虛實の相を驗せよ、若し建立に堪ふれば、不動の[二九]母捺囉二合を以て、百八して其の地を護せよ、然して後に總じて掘るべし、鍬印は金剛縛して、[三〇]禪・智・進・力・竪てよ、眞言に曰く二十一

唵儞佉那嚩蘇上提娑嚩二合賀引

諸の穢惡の、堪へざるを揀び去つて淨土を替へよ、重重に香水を灑いで、平實にして淨鏡の如くせよ、心壇に五寶を置け、謂く金・銀・眞珠、[三二]瑟瑟・頗梨寶なり、靈藥は謂く[三一]赤箭と、人參と伏苓と、昌蒲と天門冬となり、稻穀と大小の麥と、[三三]菉豆と胡麻等なり、[三四]沈香と[三五]檀と[三六]丁香と、[三七]鬱金と[三八]龍惱香となり、金銀の器に盛つて、地天以て結護せよ、一百八香水を[三九]瞿夷に和して、無能勝を以て加持せよ。或は馬頭明王

塗地の眞言に曰く、

高北の隅より右に旋つて塗拭せよ、蓮子・華萄・葵米・茅香・鹽土・相和して、法の如く淨く揩磨して光淨ならしめよ。

唵迦囉引黎摩訶迦囉引黎娑嚩二合賀

掃地の眞言に曰く、再び香水を灑淨せよ

唵賀囉賀囉祖仡囉二合賀拏野娑嚩二合賀

【一五】身の支分。以下は布字觀(Yantra)を明す。ヤントラとは文字を行者の身體の各部分に觀ずることであるが、その文字は諸尊の種子(bija)である。諸尊の種子を行者(Yogi)の身體の各部分に觀ずることは、身體を以て諸尊の坐處と見做すことに由來してゐる。諸尊の坐處は曼荼羅であるから、行者の身體が曼荼羅であるといふ思想も自らこゝに生ず。

【一六】良日時分。一義に云く、天竺の外道好んで日を擇び時を定む、故に外道の計に順じて之を用ふと。又一義に云く、卽事而眞の宗意であるから、世間の吉祥卽ち出世の吉祥であると。此の二義は只淺略に約す。若し深祕に約すれば、則ち心地の良日辰を擇ぶのみ。

【一七】驚發地神の偈。長跪して之を作す。世尊成道の時、觸地の印を作し給ふや、地神涌出し、長跪して花を獻じ、如來の三祇劫の積功累德を證明す。今、行者地神の威儀に住して此の作法を作す。地を按ずるは、地神は地を以て體とするから、卽ち地神を按ずるに同じ。

【一八】地神持次第の眞言。淨土變の眞言である。

【一九】三業(Tri-karma)。身

偈を説くべし、梵文は胎藏の如し 汝天は親護者なり、諸佛導師に於て、殊勝の行を修行し、地波羅蜜を淨む、摩軍の衆を破せし、釋師子救世の如く、我も亦魔を降伏す、我れ曼荼羅を畫くべし、地を按じて頻に偈を誦ぜよ、塗香華等を以て、佛菩薩、長跪して右の手を舒べ、及び地神眷屬に供養せよ、灑ぐに淨香水を以てし、然して復た其の地を治せよ、[一八]地神持次第の、眞言に曰く、唵部引入欠、金剛縛して掌を開け、仰け按じて習すること三七、覆せ按ずることも亦復た然せよ、即ち堅牢の地と成る、掃灑し及び塗拭せよ、先づ七日前 日暮に香華を持して、獨り壇を置く處に入れ、面を東にして香爐を執り、地を啓請する偈を誦ぜよ、諸佛は有情を慈愍す、唯願くは我等を存念したまへ、我れ今諸賢聖に請白す、堅牢地天幷に眷屬、一切如來及び佛子、悲願を捨てずして悉く降臨したまへ、我れ此の地を授つて成就を求めん、證明を作さん爲に我を加護したまへ、三遍、慇懃に奉請し已んなば・聖衆皆く雲集す、大日清淨の身、法界に周遍し、十方の佛も亦然なり、[一九]三業至誠にして禮せよ、雙膝を長跪して、[二〇]定に金剛杵を持し、心に當て丶直く之を竪てよ、[二一]慧の手五輪を舒べ、掌を平にして地を按ぜよ、前の如く地神を驚せよ、誦じ已る毎に按じて、本眞言を習せよ、一百八遍 至誠に啓告すべし、仰いで諸の如來、諸大菩薩衆、聲聞及び緣覺、天龍幷に八部、[二二]此の處の[二三]靈祇等に啓すらく、我れ某甲て之を告白せよ 求むる事に隨つ[二四]持明藏教に依り、某の尊の眞言を持して、無上道を求めんが爲に、此の地中に於て、曼荼羅を建立して、念誦を精修せんと欲す、願くば尊、本誓を憶して、我が此の建立を許し、我を護助して、天魔惡鬼神をして、惱亂して障難を作さしむること勿れ、釋迦道樹に坐して、衆の魔怨を降伏し玉へり、我れ今亦復た然す、若し諸の障難有らば、願くば諸佛菩薩、當に我に先相を示すべし、

曼荼羅の稱を樹つ。

【四】如來性。法界體にして、即ち阿字である。是れ初日の作法である。

【五】第二日。第二日に白點を以て聖位を定む、之を白壇曼荼羅といふ。

【六】薄伽梵(Bhagavan)。世尊と翻す。

【七】密跡大忿怒、又は密迹力士と云ひ、執金剛神の異稱である。

【八】瑜祇。一本に瑜伽(Yoga)に作る。眞言密教の妙行の眼目となつて居る。

【九】悉地(Siddhi)。成就と翻す。

【一〇】器世間。三種世間の一で、山河・大地・草木・城宅等の如き、衆生に受用せらる丶世間を云ふ。依報と同じ。又器界とも云ふ。器は衆生に受用せらる丶もの丶意。

【一一】薩埵(Sattva 有情)。眞言密教(Mantra-yāna-vāda)では、金剛薩埵(Vajrasattva)の略稱とす。

【一二】頗梨。水精を云ふ。

【一三】羯磨(Karma 作業)。行・住・坐・臥、取・捨・屈・伸等の活動を意味す。

【一四】大眞言王(Mahā-mantra-rāja)。眞言密教の教主大日如來(Mahā-vairocana-tathāgata)を指す。

建立[一]曼荼羅護摩[二]儀軌

法全

[三]初日には[四]如來性を以て自身を加持し、及び地神を供養し驚せよ。地中の諸の惡物を擇び、築いて堅實ならしめよ。[五]第二日には壇の內に於て一肘を堀つて、不動の明を以て五寶等を加持し、聖尊の位を定めよ。五佛四菩薩より白檀を以て位に點ぜよ。第三日には瓶を置いて不動の明をもて加持すること一百八遍、第四日の暮には次に香水を以て眞言すること一百八遍し、然して後に灑淨せよ。第五日には護身供養せよ。不動或は降三世を以てして一百八遍せよ。次には持地の明、第六日の夜には師弟子沐浴し、淨衣にして壇に詣り如法に供養し、印と相應して手を以て中胎を按ぜよ。第七日には次に弟子に教明を持すること一遍、一たび按じて乃至七遍せよ。諸尊の位も亦準ぜよ。第七日には次に弟子に教へて、三歸懺悔して菩提心を發さしむ。

一切の[六]薄伽梵、及び法、諸の菩薩、[七]密跡大忿怒に、稽首し歸命して禮し奉れ、[八]瑜祇を修するものを利せんが爲に、速に大[九]柔地を成じ、諸の過を遠離して、曼荼羅を建立し、幷に護摩の法を陳べよ、善住瑜伽者、先づ淨法界を以て、[一〇]器世間を安立せよ、妙菩提心を觀じて、身[一一]薩埵に同ぜよ、色碧[一二]頗梨の如し、[一三]羯磨輪に住せよ、[一四]大眞言王を以て、[一五]身の支分に遍滿せよ、暗字頂に在り、欠暗をば左右の耳にせよ、額に住くを名づけて惡となし、糝索をば兩肩に在け、唅鶴をば咽心に作し、嚂嗾をば臍腰となし、鑁嚩を髀足となし、三處にせよ弟師壇、法の如く以て加持して、普遍く焰鬘を成ず、[一六]良日時分の、宿曜悉く相應するに遇つて、食前に吉祥の相あらば、當に地を揀擇して、諸の過惡を除去すべし、先づ諸の如來を禮し、[一七]地神を驚發して、應に是の如くの

【一】曼荼羅（Maṇḍala. 輪圓具足）。曼荼羅には輪圓の義、發生の義、聚集の義の三義がある。輪圓とは衆德を圓備する意であり、發生とは諸佛を發生する意であり、聚集とは十方三世の諸聖を一所に聚集する意である。舊譯では之を壇と翻して居る。壇とは修法壇のことで、其の相狀に就、譯したのである。

【二】儀軌。梵語 Kalpa の譯である。祕密壇場に於ける密印・供養・三昧耶・曼荼羅・念誦等一切の軌則儀式を云ひ、又儀軌の行法を記述せる祕密經典の一部をも稱す。具には祕密瑜伽觀行儀軌（Guhya-yoga-dhyāna-carya-kalpa）と云ひ、略して修行法（Carya-kalpa）と云ふ。念誦儀軌、又は念誦法（Dhyāna-kalpa）と云ひ、祕密儀軌・祕密法・又は密軌（Guhya-kalpa）と云ひ、三摩地儀軌・又は三摩地法（Samādhi-kalpa）と云へるは、皆此の儀軌の具名と言ふことが出來る。今は卽ち、護摩修法の軌則儀式を說示するのであるから、護摩儀軌と云ふ。

【三】初日等の文。此れは初に七日作壇の法を說く。謂く先づ大壇を建立し、然して別に護摩を行ず。之を離壇の作法と云ふ。建立壇に就て建立

摩をなす時、建立護摩軌によつて三股杵を持し、廣澤・隨心院流は、瑜伽護摩軌によつて獨股杵を持することになつてゐる東寺一家では多く瑜伽の軌に依るけれ共、又、餘の二軌をも兼用して之を修す。

中に就て建立軌に依れば、護摩爐は大壇の外に設けることになつてゐる。故に此の軌に、「鑪對二曼荼羅一外相望別作、所供如二大壇一」と示してある。かく大壇と爐とを別に設けて供養するのを、古來から離壇或は別壇護摩と云ひ、此の軌を以て其の出據としてゐる。之に反して、金剛頂瑜伽護摩儀軌には、別に護摩壇を起立せずに、本尊の供養法を修する壇に於て、直に護摩を修行すべきことが說いてある。故に之を合壇或は卽壇護摩と言ふ。然し斯樣に離合二種の護摩があるが、これは便宜上なしたものであつて、其の實何れにても勝劣のあるべき筈はない。合壇の作法を主とする東寺一家に於て、禁裏の御修法の大法、並に灌頂の護摩は、皆別壇によつて之を修するに徵して明かである。これを密教の標幟思想から見れば、合壇は理智不二を表し、離壇は理智而二を表すと言ふべきである。又、教理上から言へば、勿論大壇卽護摩壇で、全く一つのものであるべきである。故に建立儀軌には、「大壇卽護摩　護摩卽己身　己身卽火天　火天卽大日　身口意和合　三平等無ㇾ異」と說いてある程である。

三、本儀軌の內容

本儀軌は法全阿闍梨（ācārya）の撰にかゝり、圓仁（794-864 A. D.）請來す。法全阿闍梨は青龍寺儀軌・玄法寺儀軌の著者で、支那の惠果阿闍梨（746-805 A. D.）以後にあつては、最も秀でた人である。生年・寂年・享壽を闕くけれども、唐代の敬宗・宣宗（825-875 A. D.）頃の人であることは確かである。本儀軌は前にも一言した通り、離壇護摩の出據となつてゐるのであるから、先づ最初に七日作壇の法が說き示してある。斯樣に大壇を建立して、別に爐を設けて護摩を行ずるから、建立曼荼羅護摩と言つたのである。詳細に大壇の建立を明し畢り、次に正しく護摩を明す。護摩に二種ある中、初に內護摩と十二種の智火とを擧げ、以下に外護摩の衆緣支分を示す。後者は先づ三平等觀、次に息災護摩（Śāntika）、これを火天・曜宿・本尊・滅惡趣・世天の五段に分つて說き明し、次に增益護摩（Pauṣṭika）、次に敬愛護摩（Aaśīkaraṇa）次に降伏護摩（Vbhicāraka）が示してあるが、此の四種法は、櫁木を置かずに炭火を以て護摩する等、常とは異なつてゐる。次に火相と夢相とによる成就の相六十三種、不成就の相一十六種、不祥相を消滅する法、喫食法を述べ、最後に護摩修法上の注意と功德とを說いて結尾としてある。龜井君の勞を謝す。

昭和六年一月五日

譯者　神林隆淨識

（3）護摩種類

- 内護摩
  - 息災—息災
  - 増益—増益・敬愛・求財（鉤召）
  - 調伏（降伏）—調伏（降伏）
- 外護摩—初期
  - 息災—息災—息災—息災—息災—息災・延命
  - 増益—増益—増益—増益—増益—増益・延命
  - 増益—敬愛—攝召（鉤召）—鉤召—鉤召・降伏
  - 敬愛—敬愛—敬愛—敬愛・降伏
  - 調伏（降伏）—調伏（降伏）—調伏（降伏）—調伏（降伏）—調伏—調伏（降伏）

二、護摩の本軌に就て

護摩の本軌に凡そ三本ある。一には金剛頂瑜伽護摩儀軌（正藏、一八・九一六。同、九二〇、）二には火吽供養儀軌（正藏、一八、九三四、）三には建立曼荼羅護摩儀軌（正藏、一八、九二九、）である。一體、護摩を示す經と儀軌とを檢するに、八世紀以前の譯經中には、護摩に關する儀軌(Kalpa)は見えない。然るに八世紀以後になると、雜部密教・純部密教共に、儀軌或は儀軌經の類が甚だ多い。これ卽ち、護摩の行はれた最初に於ては、經に其の修法を簡略に示してゐたが、該思想の發達と相待つて、其の修法が益ゝ盛んに行はるゝにつれ、修法儀式に種々複雜な秩序を附ける樣になり、遂に玆に儀軌を生ずるに至つたのである。されば前述の諸儀軌は、其の名によつても思想內容を窺ひ知らるゝ譯である。

右三軌の中、台密は多く建立護摩軌を用ひ、東密は多く瑜伽護摩軌の意に依つて作法す。又、東密は金剛界立に修し、台密は胎藏界立に行ふ。而して小野流は護

(1)分類概表
雜部密教
三種（息災・増益・調伏（降伏））—五佛頂三昧陀羅尼經・一字頂輪王經・大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經等（八世紀前半——十世紀）
四種（息災・増益・敬愛・降伏）—佛說七俱胝佛母准提大明陀羅尼經・佛說大摩里支菩薩經等（八世紀前半——十世紀）
純部密教
初期—一字奇特佛頂經・金剛薩埵說頻那夜迦天成就儀軌經等（八世紀——十世紀）
三種（同上）—蘇悉地羯羅經・蕤呬耶經（八世紀）
佛說持明藏瑜伽大教尊那菩薩大明成就儀軌經（十世紀）
四種（同上）—火吽供養儀軌・陀羅門諸部要目等（八世紀）
佛說無二平等最上瑜伽大教王經等（十世紀）
（息災・増益・降伏・攝召）—慈氏菩薩略修愈誐念誦法（八世紀）
五種（息災・増益・敬愛・調伏・鉤召）—金剛頂瑜伽護摩儀軌（八世紀）
（息災・増益・敬愛・調伏・降伏）—一切如來大祕密王未曾有最上微妙大曼拏羅經第三（十世紀）
二種
内護摩
外護摩
息災
増益
降伏
大日經（八世紀前半）
(2)分類系統
世間的—初期
息災—息災—息災—息災—息災
増益—増益—増益—増益—増益
敬愛
敬愛
攝召（鉤召）—鉤召
降伏
調伏（降伏）—調伏（降伏）—調伏（降伏）—調伏（降伏）—調伏
外護摩
出世間的
内護摩

とは、敢て贅言を待つまでもあるまい。而して內護摩の思想の發達の過程は、前述の外護摩の思想のそれと全く關聯して考へ得ると信ずる。然らば、此の兩者は如何なる關係を有してゐるかと云ふに、こは常の護摩修法の三平等觀の上に能くあらはれて居る。此の觀は護摩一部の至要であつて、行法中は一念一刹那も離るべからざるものである。若し刹那も此の觀を離れたならば、彼の事火婆羅門の邪火法に墮在するのである。故に事護摩が、此の三平等の理護摩の觀と相應せぬ時は、決して斷惑證理は望まれぬのである。三平等觀とは、爐と本尊と行者との三相は、差別がある樣であるが、六大の體性は圓融無礙であるから、全く平等平等である。而して爐に身・口・意の三密があり、本尊に身・口・意の三密があり、行者に亦身・口・意の三密がある。斯樣な三密に於て、凡聖・因果・麁細等の差別がないではないが、能造の六大は無礙常瑜伽で、凡聖・因果等の別がないから、爐と本尊と行者との三密、卽ち三々平等であると觀ずるのである。此の觀念に住するから、事卽理であつて、世出世間の願望を成就するのである。又內護摩に種類を分けて居るのは、之を修する人によつて、各々性能が異なつてゐるから、其の性能に適する種類を撰んで、解脫の目的を達せしむるためであると云ふ理由の外に、外護摩は其の修法は易く、其の願望は世間的で、何人の心をも惹き易く、且つ其の目的は三種・四種等に概括し得るから、彼等を度せんが爲に、巧に之を利用して、各自の願望を成就さすのに、此の卽事而眞の觀念を以てさせ、遂には純粹に精神的解脫を目的とする、內護摩に引入する緣と作さんが爲の方便からであると解される。不動明王（Acalanātha）と火天との關係も、亦此の觀念を以て解釋しなければならぬ。以上の說明に依つて、外護摩は必ず內護摩と相應一致して修さなければ、何等の效果をも奏せぬことを知ることが出來た。之を要するに、內護摩の方面から一層外護摩の作法を複雜にし、又、外護摩の作法から一層內護摩の思想內容を豐富にしたことが、推測せられ得るのである。故に此の兩種の關係から、護摩は一層の發達をなしたものと思はれる。

因に、護摩目的の分類概表並に其の分類系統、及び護摩種類の發達を概括し圖表せば、次の如くなる。

初期——大吉義神咒經・十一面觀世音神咒經・如來方便善巧咒經・陀羅尼集經・佛說守護大千國土經・其他多數（五世紀後半——十世紀）

始的密教護摩であると信ずる。而して密教の此の原始的護摩法が、佛教哲學の爲に漸次に精選せられ、且つ統一せられて、其の儀式等に佛教的解釋を附ける様になり、遂に其の思想內容の發達した大日經に示す如き、秩序系統ある純部密教護摩の思想に達したものと思はれる。

凡そ護摩の種類を大別すれば、外護摩と內護摩とである。事火婆羅門の作す所、本朝山伏の柴燈護摩、及び神道護摩等は世俗の外護摩である。又佛法の中に於て、內外の別がある。壇木・乳木等の種々の供物を辨備し、之を爐火の中に投じて火天に供養し祭祠するを、外護摩或は事護摩と云ふ。次に內護摩は如何んと云ふに、最初に內護摩の本質を示すと、外護摩が種々の支具を調へて焚燒する事作法の護摩で、其の目的とする所は、世間の願望を成就するを以て主とするのに反して、內護摩は其等の支具を悉く精神的のものと見て修する觀想的修法で、其の目的とする所も前者とは異なつて、心內の煩惱を燒き盡し、以て精神上解脫の位置に達せんことを希求するにあるのである。換言せば、吾々の迷妄は妄想分別の心に依つて生ずるから、能く其の根本たる末那(Manas)卽ち意識(Mano-vijñāna)を了知して、客觀的現象に對して生ずる主觀的意識の迷妄を、眞實な智火を以て燒き盡し、一切の煩悶を解脫した白淨の心に到達するのが、內護摩の內護摩たる所以である。尙、護摩の火に就ても、亦此の本質が現はれて居る。內護摩では、其の火を智火と見るのである。大日經には、婆羅門教の四十四種の火に對して、出世外護摩に十二種の火があることが說いてある。此の十二種の諸火は、皆精神的智火を示したもので、第一の智火は、他の總體たる初の菩提心阿字門に配し、他の諸火は、其の智火の作用に種々あることを更に別示したものである。次に內護摩の生起に就て述べて見ると、此の內護摩が奧義書に於て旣に說き明されてあることは、殊に注意すべき事實であると信ずる。卽ち、カウシータキ・ウパニシヤット(Kauṣītaki-upaniṣad)二、五、に、「內部の祭火(Antara-agnihotram)」と云ふ語があるが、內部の祭火とは、外部に表現された祭火に對する言葉で、所謂內護摩に當るのである。內護摩と云ふ言葉は同一であつても、其の內容を異にしてゐることは勿論であるが、兎に角、後に發達すべき思想の萌芽が、旣に古奧義書時代に存在してゐた事は、頗る興味あることゝ思はれる。これによつて、密教の內護摩が外護摩と同樣に、婆羅門教護摩の影響を受けて起つたものであると云ふことは、疑ふ可からざる事實とせねばならぬ。されどこれが爲め、密教護摩が其の價値を決して低減するものでないこ

せしむるものであると云ふ考へから、之をするやうになつたものと思はれる。斯樣に人類が諸神の保護を得るには、是非共祭火に賴らねばならぬと云ふ信仰から、遂に祭火其のものが神格視せられて、火天と云ふ神を生ずるに至り、又火天は諸天の口即ち天口(Devānām mukha)、或は祀僧(Hotṛi)と呼ばるゝことゝなつたのである。而も阿耆尼の崇拜は、蘇摩に於ける如く、已に印度波斯兩民族未分時代、即ち印伊時代にあつたことから推察すれば、婆羅門教の護摩法の萠芽も、亦此の時代の宗教的儀式中に發してゐたものと斷言することが出來る。然らば佛陀在世時に於ては如何んと云ふに、當時にも護摩思想が根强く民間信仰に喰込んで居り、又實際に其の法が修行されてゐたことは、南北兩傳共に明記する所である。これに對して佛陀は常に包容主義を以て、彼等の事相は所謂世俗の法であつて、何人の心も惹き易く、又容易に了解し得らるゝ所から、引入の方便として、當時一般に行はれてゐた婆羅門教の護摩の事相を襲踏されたのであるが、而も彼等を對治せんがために、必ず其の擴大された人格を通して表現されて居つたのである。

次に密教護摩の起源に關して一言して見よう。吾人の研究の結果によれば、密教護摩中、最も原始的な樣式を示してゐる經は、天竺三藏耶舍崛多(Yaśagupta. 571-577 A. D.)譯の佛說十一面觀世音神呪經(正藏、二〇、一四九、)である。されば密教護摩の起つたのは、此の經の譯時並に其の內容から推察するに、遲くも紀元五世紀中であつたと見て差支なからうと信ずる。而して元魏の釋曇曜(462 A. D.)の譯した大吉義神呪經(正藏、二一、五六八、)に示す護摩は、密教護摩の起る先驅をなしたもので、密教護摩の勃興する思想の傾向を窺ひ知ることが出來る。此の先驅に依つて、遂に前者に示す密教護摩の思想が、正しく實現したものと言ふべきである。かゝる思想が勃興するに至つた動機は、全く當時の物欲的穢災的な宗教心を滿足さす爲であつたと推測される。詳言すれば、中印度のグプタ(Gupta.320-480 A. D.)王家が起るや、專ら印度古代の宗教の復興に力め、所謂婆羅門教復興時代を構成することになつた。それにつれて、佛教は稍ゝ衰頽に傾くと共に、同教との接觸に依つて、其の思想系統中に當時の民俗信仰を雜然と取り集め、以てそれを巧に利用して、大乘佛教の特質である對他的態度を採つて、一般の人士を佛教の信仰に導き込まんとした時、其の雜然と集められた神祕的材料中の婆羅門教護摩の思想が、佛教の神祕思想と結びついた儘で、未だ何等の統一なく表現されたのが、今の經に示す原

時代（Indu-Iranian period. 2000-1500 B. C.）の宗教的儀式中に發生してゐたことが解る。續いてアーリヤン（Āryan）民族が五河（Panjāb）地方に殖して、其處を印度文明の發祥地とした、天然神話時代（1500-1000 B. C.）の代表的聖典である梨俱吠陀（Ṛg veda）中にも、亦其の思想が窺はれることは言ふまでもない。次で印度思想の特質を發揮して、婆羅門教の全盛を極めた、俱留地方（Kurukṣetra）に於ける婆羅門教成立時代（1000-500 B. C.）の夜柔吠陀（Yajur veda）や、百段梵書（Śatapatha brāhmaṇa）に至れば、三種の火壇を設けて盛んに護摩を修するを示し、降つて諸教派興起時代（500-250 B. C.）の家庭經（Gṛhya sūtra）には、種々複雜な護摩を說いてゐる。故に大日經疏第十九護摩品第二十七には、「外典淨行圍陀論中、有二火祠之法一」（正藏、三九、七七九、）と示し、大日經所說の外道の四十四種の火を說明してゐる。

翻つて、宗教的信仰の方面から此の起源を見ると、婆羅門教に於ける宗教的儀式は、諸神格に對して種々の供養をなし、以て現世の幸福、死後の生天を祈ることにあつた。この供養を重要視することは、此の教の古今に通じた思想であつて、殊に吠陀時代にあつては、神に對する供養を除いては宗教なく、宗教卽ち供養であると言つても過言でない位である。然も其の供養の儀式は、主に供物を火中に投じて供養するのである。されば、吠陀時代の諸神格中、重要の位置を占めたものは、雷神たる因陀羅（Indra）、火神たる阿耆尼（Agni）、酒神たる蘇摩（Soma）の三神で、其の中でも火神は最も多く祭壇に重んぜられてゐる。梨俱吠陀に於て、獨立に二百有餘の讚歌を占有してゐるものは、インドラの外獨りこのアグニだけであるのを見ても、如何に其の勢力が偉大であり、又如何に重んぜられたかを推知するに足ると信ずる。然らば、何故に斯く重んぜらるゝに至つたかと云ふに、火天は神人二者の間を往來する使者であり、又、祀僧神仙であると云ふ信仰が、彼等の間に存してゐたからである。火天がこれらの性格を有してゐることによつて、供物を火中に投じて供養する意味が大方推量される。卽ち、吠陀時代にあつては、天界或は空界の諸神の保護を得んには、豫め供物を捧げることになつてゐたが、單に祭壇で供物を供養したのみでは、天に居る神格に達することが疎いやうな考へから、供物が祭壇の火爐中に投ぜらるゝ時は、聖火に燒かれて焰烟となり、天地間を往來して、神と人との媒介の役をする火（火天）の助けに依つて、上昇して諸神の口に達入し、諸神は此の供物を攝食して大に力を得、諸の魔神と鬪つて彼等を降伏し、以て人類の安寧福祉を增進

建立曼荼羅護摩儀軌解題

一、護摩に就て

護摩(Homa)とは梵語(Saṃskṛta)であつて、其の語根 √hu(供物を火に投ずる意)なる語から轉じて Homa となつたもので、火中に供物を投じて供養する意である。大日經疏卷第十五には、「護摩是燒義也」(正藏、三九、七三四、)と示してあるが、單に物を燒く意でなく、其の本意は燒食供養の意を說かれたものである。又、一切經音義卷第四十一(縮藏、爲九、五五左、)にも、護摩とは火祭祀法であると示して、供物を火中に焚燒し、以て賢聖に饗する意味であることが述べてある。これは何れも此の語の本來の意義であつて、古來から婆羅門敎が用ゐて居つた語が、佛敎へ移つて來たものである。

所が大日經疏卷第二十には之を解釋して「凡護摩義者、謂、以二慧火一燒二煩惱薪一令二盡無レ餘之義也」(正藏、三九、七八二)と云ひ、尊勝佛頂眞言修瑜伽軌儀卷下には、「護摩者、此方爲二火天一、火能燒二艸木卉林一無レ有レ餘者、天者智也、智火能燒二一切無明株杌一無レ不二盡燒一」(正藏、一九、三八一)と解釋してある。これ即ち佛敎の根本趣意に合せしめた解釋であつて、本來の意義を轉じたものと言はねばならぬ。殊に後者の儀軌の如きは、婆羅門敎で火の神格を火天(Agni)と言つてゐるのを、佛敎の本旨から巧に解釋したもので、何れも護摩思想の大に發達した點を現はして居る。かく護摩の名義の解釋が異なつてゐるのは、結局、其の內容の異なつてゐることを證明するものである。前者の如く單に供養の意味に用ゐたものは、婆羅門敎や雜部密敎に多く見るのである。從つて其の護摩の內容も、本尊に對する火食供養に過ぎない。然るに純部密敎に至ると、佛菩薩に供養する本來の意義を有すると共に、更に進步した意義を含めて、爐中に投ずる供物を精神的に解釋して煩惱となし、之を燒盡して白淨なる菩提心の萌芽を發生せしむる意味で護摩を修するのである。されば密敎の護摩法は、一面からは單に供養であるが、他面からは自己修養法であつて、自力的に向上解脫の目的を以て之をなし、進んで自他の罪障をも燒盡する效果を現はさんとするのである。

前にも一言した通り、其の內部に潛んでゐる意味に於ては、天地霄壤の差があるが、外見上の護摩の事相は決して密敎獨特のものではない。吾人の研究の結果に依れば、護摩思想の萌芽は、既に印伊

即ち自ら高聲に、十六金剛菩薩の一百八名を歌讃し、力の堪能に隨ひて種種に供養せよ。

爾時に行者、金剛の一百八名を歌讃して、至心に金剛縛の印を頂戴し、諸佛菩薩を送る眞言を誦ひて曰く、

[二八]唵　縛去日囉二合　謎引吉沙二合　牟上

眞言を持し已りて、即時に印を解け。行者、自ら想へ。然も今、此の法は、大慈毘盧遮那如來、但だ鈍根の人を利益せんが爲の故に、大智慧海の中にて、祕密の法を略し出し玉ふと。

時に行者、是の法を作し已りて、[二九]廻向し發願せよ。此の功德に依りて、第一には國王、第二には父母、第三には施主、第四には法界の一切衆生、悉く皆速に無上菩提を證せんと。

爾時に金剛手菩薩摩訶薩、諸の大衆に告げて言く、廣大の法は、我が境界に非ず、是れ佛の境界なり。我れ今、佛の大威神力を承け、略して諸佛境界瑜伽祕密眞實の妙法大金剛界道場の法を說き已んぬ。我れ曾て、過去の百千劫の中に諸の願海を修し、乃し大慈毘盧遮那如來に遇ひ奉るまで、第一の會の中に是の法を聞くことを得、第八地を超えて等覺の位を證しき。此の祕密法は得難く、遇ひ難し、設使ひ遇ふことを得るも、信心生じ難し。汝等大衆は無量劫に於て、功を積み德を累ねて、今、是の法を得たり。若し是の法に遇はば、久しからずして當に菩提樹下の金剛寶座に坐して、諸の魔軍を摧き、無明の[三〇]㲉を破し、煩惱の河を竭し、永く生死を斷じて、無等等の阿耨多羅三藐三菩提を證すべし。諸の衆生の爲に大悲願を起し、在在處處に廣く宣べ流布して、衆生を利益し、法をして久しく住せしめ、[三一]六趣を引導して菩提を證せしめよ。是の時に海會の一切の大衆、佛の所說を聞きて、皆大に歡喜し、禮を作して去りき。

諸佛境界攝眞實經(終)

【二八】 Oṁ vajra-mokṣa muḥ.

【二九】 廻向發願。四恩の廻向を說く。即ち、國王・父母・施主・法界の一切衆生である。

【三〇】 㲉。(1)たまご・から。(2)已に孵化した卵。

【三一】 六趣。一、地獄(Naraka) 二、餓鬼(Preta) 三、畜生(Tiryagyoni) 四、修羅(Asura) 五、人間(Manuṣya) 六、天上(Deva)。

哆吽縛二合翳穩　嚩去日羅二合　波寫

此の眞言を持し已りて、即ち兩眼を開き、弟子に告げて言く、金剛薩埵大菩薩摩訶薩、今日より自來、汝が與に眼を開く、但し汝が肉眼を開くのみに非ず、已に[二四]五眼及び最大の金剛眼を開く。汝善男子、今のところは道場なり。是の時に金剛阿闍梨、一一に道場の中の事を教示せよ。便ち一切如來の加持を得、時に應じて本尊心中に入り玉ふ。或は種種の天上の宮殿を見、或は種種の光明を見、或は種種の神通を見、諸〻如來の加持力に依るが故に、金剛手菩薩、玄に其の前に現立して、所求の事を問ひ、願に隨ひて便ち與へ、乃至、大金剛智と一切種智と及び一切智とを授與し玉ふ。

[二五]復た次に阿闍梨、諸の事を教へ已りて、闕伽唐云圓滿瓶水を取り、右の手に之を盛りて、灌頂の眞言を習はしめ、弟子に告げて曰く、金剛手菩薩、今日汝に最勝の灌頂を與へ玉ふと。此の語を作し已りて、水を頂上に灑げ。即時に阿闍梨、金剛合掌の印を作り、弟子の兩手に授與して、告げて言く、一切如來灌頂を與へ玉ふこと竟んぬと。是の語を作し已りて、阿闍梨、弟子の名の上に、金剛の字を加へて之を呼べ。五股金剛を以て、兩手の掌中に安じて、弟子に告げて言ふべし。此れは是れ一切如來の大智金剛なり、我れ今持して以て汝が兩手に授く、妙悉地を成就せしめんが爲の故にと。是の時に瑜伽行者、諸佛を送りて各〻本土に還し奉る眞言を習ひて曰く、

[二六]唵　倶嚕二合帝平嚩去大摩　薩嚕嚩二合　薩怛嚩去嚕吒二合下字反舌　悉地
嚕怛二合　陀引　阿努反舌　多羅誐室者二合急呼
覩嗜沒馱毘沙浮呼　野補那　羅引誐摩那引野遮

瑜伽行者、眞言を習ひ已りて、[二七]金剛鈴を振ること三遍せよ。

【二四】五眼。一、肉眼二、天眼三、慧眼四、法眼五、佛眼。

【二五】復た次に。以下は灌頂(Abhiṣeka)と金剛名(Vajra-nāma)と五股金剛(Vajra)とを授與し竟つて、奉還の眞言を習はしむることを明す。

【二六】Oṁ kṛtvaṃ sarvasattvārtha siddhir tathā anuttarangacchatu māṃ buddhaviṣaya punar āgamanāya ca.

【二七】金剛鈴を振る。後鈴の本説である。

く、刀杖・毒薬・夜叉・悪獣・永く害すること能はず、一切の如來當に護念を加ふべく、一切の悉地速疾に現前して、未曾有の安樂の事を得べし。或は弟子の種種の三昧を得る有り、或は種種の陀羅尼門を獲る有り、或は一切の所願皆圓滿することを得る有り、或は當に無上菩提を證すべき有り。

爾時に金剛阿闍梨、弟子の頂上の金剛拳を去けて、弟子の心上を印し、弟子に教へて言く、當に願くば、金剛堅く心中に住して、動ぜず搖せざること猶し山王の如く、三世の中に於て常に我を捨てず、我が念心を加護し、及以び我に一切の悉地を施し玉へと。是の願を作し已り、〔一八〕眞言を習ひて曰く、

〔一九〕吽大聲長呼　唅大聲無呼　訶大聲　縛平　訶急呼　醫

眞言を持し已りて、阿闍梨、復 弟子に教へて、眞言を習はしめて曰く、

〔二〇〕鉢羅二合 底丁以反　室奢二合下字平呼　縛去日羅二合　醫

眞言を持し已りて、時に阿闍梨、弟子の手を執り、道場の中に於て、〔二一〕諸の花を散ぜしめよ。花の落つる處に隨ひて、卽ち是れ本尊なり。此の花を捧げ取り、眞言を習ひて曰く、

〔二二〕唵　鉢羅二合底　疑嚧二合翳穏那上二合反舌呼　怛嚩去二合　弭摩唅　摩訶嚩平囉

眞言を持し已りて、卽便ち本尊の頂に繫け、其の花鬘を以て、本尊に安じ已んなば、金剛薩埵、當に花鬘を受けて速に悉地を獲しむべし。

復た次に阿闍梨、開眼の眞言を習はしめよ。曰く、

〔二三〕唵一　嚩去日囉二合薩怛嚩去二合　娑嚩二合婆　浮呼儞多二合
膩耶耆吉芻二合　馱誐二合吒　反古那
多怛摩二合囉急呼　孟馱誐引二合　吒呼反舌　野
底薩嚀嚩二合吉史二合　嚩去日囉二合　耆吉芻二合囉怒

〔一八〕眞言。金剛堅住心中の眞言である。

〔一九〕Hūṁ haṁ ha va ha he.

〔二〇〕Praticcha-vajra he.

〔二一〕諸の花を散ぜしめよ云々。これを投華得佛と云ふ。

〔二二〕Oṁ pratigrahṇa tvam māṁ mahābāla.

〔二三〕Oṁ vajra-sattva svayaṁ tadya cakṣûdghāṭa n tanmātrodghāṭayati sarvâkṣi-vajracakṣur anuttaraṁ he vajra-pāśa.

安じて、告げて言へ。此れは是れ三摩耶なり、若し汝、未だ灌頂を受けざる人の爲に此の法を說かば、金剛薩埵、當に汝が頭を破るべしと。此の語を告げ已りて、金剛合掌の印を結べ。祕密の眞言に曰く、

[一三] 唵　嚩去日囉二合　那迦吒反舌呼

此の眞言を以て水を加持し已りて、弟子の頂に與へ、爲に持念祕密の深義を說け。汝、此の水を以て、金剛薩埵、汝が身中に入り玉へと願へ。復た次に金剛阿闍梨、弟子に告げて言へ。今より以往、汝、我を見ること、金剛手菩薩の如くにして異ること無かれ、我が言に違すること莫れ、我を輕慢すること勿れ。若し汝、我に違せば、命終の後に[一四]阿鼻獄に入らんと。

是の如く告げ已りて、阿闍梨、當に發願して言ふべし。一切如來、無礙力を以て大曼陀囉を加護し、能く金剛薩埵をして、速疾に弟子の身中に來入せしめよと。是の願を發し已りて、此の召入本尊の眞言を習ひて曰く、

[一五] 唵　嚩去日囉二合　謎奢訶大呼

眞言を持し已んなば、金剛阿闍梨、速疾に金剛薩埵の印を結び、此の偈を說きて言く、

此れは是れ金剛三摩耶なり、　金剛大薩埵と名づく、　一刹那の頂に於て不退を證す、　最勝堅牢智の金剛なり。

此の偈を說き已りて、金剛阿闍梨、先に結ぶ所の金剛薩埵の印を以て、左の手の拳印を弟子の頂に安じて、瞋怒の眼を作し、弟子を視て、想を作して入と言ふべし。卽ち前の眞言を習はしめよ。此れは是れ莊嚴出現大乘對法の三摩耶金剛の語言なり。其の阿闍梨、此の眞言を習はしむるに、三十七尊の、此の弟子に於て、昔に緣ある者は、當に卽ち降臨すべし。其の一尊に隨ひて、心に入り已訖んなば、當に[一六]五通を獲、三世を了知し、[一七]不退地を得、諸の難事を作せども障礙有ること無

【一三】 Oṁ vajrodaka ṭhaḥ.

【一四】 阿鼻獄(Avici)。無間地獄のこと。

【一五】 Oṁ vajra-veśa ha.

【一六】 五通。五神變・五神通とも云ふ。一、天眼通、二、天耳通、三、他心通、四、宿命通、五、如意通(神境通・神足通)。

【一七】 不退地。不退とは梵音に阿鞞跋致(Avaivartika)と云ふ、功德善根、愈々增進して退失退轉することなき意である。而して不退に三種・四種の別があり、又、諸宗に依つて位次が不同であるけれども、常には菩薩初地以上の位、或は八地以上の位を云ふ。

復た次に金剛阿闍梨、彼の弟子の爲に、此の眞言の所詮の義を說け。我れ今、身を以て一切の佛に施して、爲に種種の供養の事を作すが故にと。金剛阿闍梨、次に弟子に教へて 眞言を習はしめよ。曰く、

一〇 薩魯嚩二合　怛他引蘗多　嚩去日羅二合　迦盧摩二合　倶魯稔引

復た次に阿闍梨、彼の弟子の爲に、眞言の義を說け。願くば、一切如來、我を加護して、我に金剛の事業を教へよ。金剛手菩薩の如く、平等にして異ること無く、乃し、未だ大菩提の道を證せざる其の中間に於て、三寶に歸依せんと。此の願を發し已りて、赤衣を著けしめ、緋帛を以て眼を覆ふて、腦後に繫けよ。時に彼の弟子、金剛手の印を結べ。十指の頭を以て更互に相叉へ、皆掌の中に内れて、右を以て左を押せ。此の印を結び已りて、金剛阿闍梨、當に弟子をして此の心中心の眞言を習はしむべし。曰く、

一一 娑摩耶　薩覩婆儞四合

復た次に阿闍梨、弟子に教へて手印を結ばしめよ。前の金剛手の印を改めて、左右の中指を竪てよ。花鬘を繫け、弟子を引導して、道場の門に到り、教へて入道場の眞言を習はしめよ。曰く、

一二 娑摩野吽長引

此の眞言を持し已る時に、阿闍梨、弟子の手を執りて、道場に引入せよ。道場に入り已んなば、便ち當に告げて言ふべし。汝今、一切如來の種族の中に入ることを得、我れ當に汝が心中に金剛の智を生ぜしむべし。此の智を獲るが故に、一切如來の法身を證得す、何に況や世間の一切の悉地をや。善男子、汝未だ道場に入らざる行者の爲に、此の法を說くこと莫れ、若し此の法を說かば、即ち三摩耶を破せんと。

是の如く告げ已りて、阿闍梨、金剛薩埵の印を結べ。其の兩拳を舒べ、並べ仰けて弟子の頂上に

【九】眞言。金剛事業の眞言である。次に、覆眼・金剛手の印・心中心の眞言の順序を經、かくて弟子を引導して、道場の門に到るのである。
【一〇】Sarva-tathāgata vajrakarmam kuru mām.
【一一】Samaya sattvam.
【一二】Samaya hūṃ.

[三] 唵一　薩嚕嚩二合　倶奢羅　謨羅儞二合　波利那反舌呼　摩野弭

此れは是れ迴向發願の眞言なり。

[四] 爾時に灌頂阿闍梨、弟子に告げて言く、汝若し此の祕法を修せずんば、三摩耶を破して、生生世世に佛種を斷滅せん。設ひ惡人有りて、十方界の一切の諸佛・諸大菩薩・佛眼血肉を殺すも、此の罪は尙ほ輕し。汝が罪は彼の五逆の衆生に過ぎたり。地獄に墮落するも尙ほ出期有り。若し人、三摩耶の法を破壞せば、地獄に入りて出期有ること無し。云何んが名づけて三摩耶の法と爲るや。謂く大瑜伽眞實敎王なり。云何んが名づけて破三摩耶と爲るや。謂く凡夫有り、[五]唯だ能く受くること有りて、修行すること能はざるなり。若し法を求むる人にして、五種の灌頂の法を受けざる者には、此の瑜伽の法を與授すべからず。若し阿闍梨、灌頂を與授せん時は、先づ須く三月其の心を觀察し、然して後に灌頂の法を授與すべし。若し善心有りて深く慚愧を懷き、調柔にして疾無きを呼んで法子と爲し、然して後に傳授せよ。世間の父子は一生を繼嗣す。今、法子と爲して能く佛種を紹がせ、未だ成佛せざるより來た慈念を斷ぜず、父の子を愛するが如く、子の父を敬ふが如くせよ。是の如きを名づけて三摩耶の法と爲す。金剛阿闍梨、卽ち弟子の爲に眞言を說きて曰く、

[六] 唵一　阿那　三摩耶　賦賀羅　謎毘阿二合大呼　吽大呼　發吒反舌大呼

復た次に金剛阿闍梨、弟子の爲に此の眞言の深義を說け。若し人三摩耶の法を破せば、是の因緣に由りて、其の身破壞して碎ること微塵の如くならん。彼の人の福德自然に滅盡すること、猶し朽樹の枝葉を生せざるが如くならんと。若し金剛阿闍梨、弟子の爲に灌頂を受けんと欲する時は、當に先づ敎へて[七]此の眞言を習はしむべし。曰く、

[八] 唵一　薩嚕嚩二合　怛他引蘖多　補惹迦魯摩二合　那上反舌呼　阿引都摩引二合　難　儞哩野引二合
多耶引弭

【三】 Oṁ sarva-kuśala mūlāni pariṇāmayāmi.
【四】 爾時に灌頂阿闍梨。以下は灌頂(Abhiṣeka)の說段である。
【五】 唯だ能く受くると有りて云々。行者、修行せんと欲して法門を受け、惰弱に依って終に之を修することを廢止せば、必ず破三摩耶の罪に墮す。又、未來弘通の爲に法を受けて、弘通せざる者は、最後に斷種は免れない。
【六】 Oṁ a'asamayādihāra mebhyaḥ hūṁ phaṭ.
【七】 此の眞言。施身の眞言である。
【八】 Oṁ sarva-tathāgata pūjākarmaṇa ātmanaṁ niryātayāmi.

を流出し、瑩淨圓滿にして、西方の月輪の中に坐して、結跏趺坐せり、衆生見んことを憙ふ。自ら此の想を作せ。十方世界の一切の菩薩、三千世界の微塵等の數の如く、百億の寶・無數の瓔珞・無量の天衣・種種の寶物を以て、其の身を莊嚴すること、猶し無比天女の形狀の如し。悉く我が身に入りて、能く國王・大臣・一切衆生の見る者をして、悉く皆歡喜せしむと。

復た次に、若し增益の護摩の法を作さば、當に北方の不空成就如來を觀ずべし。其の身中より五色の光を流出し、瑩淨圓滿にして、北方の月輪の中に坐し、結跏趺坐して其の身を莊嚴せり、衆生見んことを憙ふ。十方世界の諸佛菩薩、三千大千世界の微塵等の數の如く、五色の光を放つて我が身中に入り、能く一切の事業をして通達せずと云ふこと無からしむ。

是の如くの所說の內護摩の法は、過去の諸佛已に說き、未來の諸佛當に說くべし。現在十方の一切世尊、現に今、演說し玉ふ。若し觀行者、常に是の如くの護摩の法を作さば、三昧・善法・福德・智慧・日夜に增長し、一切の諸佛、行者に親近して、摩頂し護念し玉ふ。若し瑜伽行者、能く是の如くの內護摩の法を作さば、現身に一一の佛刹微塵等の數の諸佛世尊を見奉ることを得、是の諸の如來、行者を哀愍して、一切の悉地を成就することを得しめ玉ふ。諸天の宮殿・寶閣・金臺、諸天の甘露寶器に盈滿せる、乃至阿修羅宮にても、皆心に隨つて行者の前に現ずることを得ること、譬へば、摩尼寶珠の虛空の中に懸りて、能く一切衆生の愛樂の物を雨らすが如し。此の妙瑜伽最勝教主も、亦復た是の如し。能く行者をして、一切の世出世の願を圓滿せしむ。瑜伽行者、常に想願すべし。我れ無始より已來、作る所の一切種種の善根を以て、悉く皆十方無量の世界の一切の地獄・餓鬼・傍生[二]・修羅・八難の受苦の衆生に迴施し、所有る罪障を願くば皆消滅して、如意の樂を得しめん。此の諸の衆生の所有る衆罪を以て、諸苦を受くべきをも、我れ此の身を以て、願くば當に代りて受くべし。一切衆生の罪業既に除かれて、悉く當に成佛すべしと。眞言を持して曰く、

【二】傍生(Tiryagyoni)。舊に畜生と云ふを新に傍生と云ふ。傍行の生類である。

ち諸聖人に同じて定んで異ること無し。

護摩品第九[一]

爾時に金剛手菩薩摩訶薩、佛の威神を承けて、一切の瑜伽を修する行者の爲に、眞實內護摩の法を演說し玉ふ。永く煩惱の賊と、及び一切の鬼神とを、調伏し滅せんが爲の故に、是の護摩を作して、三昧を增長せよ。各々本尊幷に本方の色を觀ずべし。若し佛部の成就の護摩を作さば、瑜伽行者、諦かに毘盧遮那如來を觀じて、我は卽ち是れ金剛薩埵なり、其の身中より白光を流出すること、淨琉璃の如く內外明徹せり、月輪の中に於て結跏趺坐せり、我が身中より光焰湧出して、卽ち圓光と成り、自身を莊嚴すること最勝第一にして、一切衆生悉く皆憙見すと想へ。十方の諸佛皆悉く白色にして、猶し三千大千世界の微塵數の量の如くに、我が身中に入ると想へ。是を寂靜護摩の法と名づく。

復た次に、若し調伏の護摩の法を作さば、當に東方の阿閦如來を觀ずべし。其の身中より青光を流出して、衆德圓滿し、東方の月輪の中に坐して、結跏趺坐せり。圓光巍巍として、自身を莊嚴すること、十方世界に最勝第一なり。一切の菩薩、金剛怒と作りて、我が身中に入ると想へ。煩惱と諸の惡鬼神とを摧滅するが故に。

若し求財の護摩の法を作さば、當に南方の寶生如來を觀ずべし。一切の菩薩、皆悉く歡喜して我が身中に入り、自身の中より金色の光を流出し、瑩淨圓滿にして、南方の月輪の中に坐し、結跏趺坐して其の身を莊嚴せり、衆生見んことを憙ひ、一切の煩惱をして、心を亂ること能はざらしめ、一切の惡鬼敢て親近せずと想へ。

復た次に、若し愛敬の護摩を作さば、行者、當に西方の無量壽佛を觀ずべし。其の身中より紅光

【一】此の一品は、初めより終りに至るまで、未傳法の者を除く。當品には、五部の内護摩(Homa)を説き玉ふ。即ち、息災(Śāntika)中・大日・白色光、調伏(Abhicāraka)東・大日・青色光、求財南・寶生・黄色光、敬愛(Vaśīkaraṇa)西・彌陀・赤色光、・增益(Pauṣṭika)北・不空・五色光、である。

て修持せよ。

復た次に、念珠を挍量するに五部の差別あり。若し佛部を持せば、菩提子を用ゐよ。若し金剛部を持せば、金剛子を用ゐよ。若し寶部を持せば、金・銀・頗梨・種種の諸寶を用ゐよ。若し蓮花部を持せば、蓮花子を用ゐよ。[二]若し迦嚕摩部を持せば、種種間錯の雜色の寶珠を用ゐよ。

復た次に、佛部の持念を作すには、右の拇指・頭指を以て念珠を執持し、餘の指は普く舒べよ。若し金剛部の持念には、右の拇指・中指を以て念珠を持せよ。若し寶部の持念には、右の拇指・無名指を以て念珠を執持せよ。若し蓮花部の持念には、大拇指・無名指・小指を以て念珠を執持せよ。若し迦嚕摩部の持念には、上の四種を用ゐて執持すること皆得。

復た次に、所獲の功德を挍量せん。若し香木等の珠を以てすれば、一分の福を得、若し鍮石・銅鐵を用ゐば、二分の福を得、若し水精・眞珠を用ゐば、一倶胝分の福を得、若し蓮子・金剛子の珠を以てすれば、二倶胝分の福を得、若し種種の諸寶を間錯すると及び菩提子とを用ゐば、無量無邊不可說不可說部の福を得。即ち是れ過去の無量恒河沙の諸佛の所說なり。一百八數を念珠の量と爲すべし。

復た次に行者、金剛縛の印を結び、胸の前に當て、心を鼻端に繫けよ。眞言を持して曰く、

[三]唵一　謨計娑摩三合　嚩去　日囉二合

瑜伽行者、此の眞言を持して、自ら此の想を作せ。我が心の中に一切智有り、洞達して無礙なりと。

復た次に、若し行者貧乏にして、本尊の形像を圖畫することを辨ぜずんば、但だ隨つて一の佛像、或は菩薩の像を取り、佛塔の前に對して、心を繫けて住し、佛像を想念するに、心散亂せずして、常に寂然なれば、即ち賢聖と異ること無し。若し心を鼻に繫ぐることを得るを、最上品と爲す。便

【二】迦嚕摩部(Karma 作業)。羯磨(業)部のこと。

【三】Oṁ mokṣa vajra.

つて此の想を作せ。我れ今、道場を建立して、十方の一切の諸佛菩薩を供養し、誠を至して供養し奉る。勝負心無く、國王と作らんことを求めず、名利を求めず　生天殊勝の妙樂を求めず、自身の種種の利益を求めずして、當に至誠に發願すべし。我れ今力に隨つて建つる所の道場に於て、或は見る者あり、或は聞く者あり、或は覺する者あり、或は知る者あるをば、皆殊勝の妙果を獲得せしめ、一切の所願、心に隨はずと云ふこと無けん。願くば、我が此の身生生世世に、譬へば、如意珠の能く衆寶を雨すが如く、所有る愛樂する財・法の二寶、一切衆生に充足して、乏しき所無からしめ、乃し速に無上菩提を證するに至らんと。

持念品第八[一]

爾時に金剛手菩薩摩訶薩、大會の衆に告げて言く、瑜伽行者、一切如來の三昧、及び一切智智を成就することを得んと欲せば、當に是の曼荼羅の成佛の法を修習すべし。此の法を修する時は、先づ金剛降伏の半跏趺坐を作すべし。端身正念にして、右足を以て左足を押せ。眞言を持する時は、心を住め凝寂にして、口に眞言を習へよ。唯し自らの耳に聞きて、他をして解せしむること勿れ。心中に一一の梵字を觀想するに、了了分明にして錯謬せしむること無れ。持習の時は、遲からず速からざれ。是を即ち名づけて金剛語言と爲す。

復た次に、持習の法に多種有りと雖も、今、當に略說すべし。祕密の門の持習の要に、其の三種あり。一には數、二には時、三には形像なり。云何んが數と名づくるや。謂く、眞言を習ふ一十・一百・千・萬等の數なり。云何んが時と名づくるや。謂ゆる七日・一月・一年、或は復た一生より乃し成佛に至るまでなり。云何んが形像なるや。謂く、觀行を習つて光明を放たんことを求め、若し光を放たざれば、即ち休息せざるなり。是の如くの三事、行者の意に隨ひ、其の所願の如く法に依り

【一】當品には、三種の修行門と、五部の念珠の法と、念珠を執持するに五部の差別あると、念珠の差品に依つて功德に輕重あると、本尊を用ゐずして念誦する法等を說き玉ふ。

馱嚕摩二合　薩縛二合　婆縛　戍度吽二合大呼

復た次に瑜伽行者、道場を建てんと欲せば、先づ四方の界を立てよ。若し多人持念せば、即ち四門を用ゐよ。若し少人持念せば、意の量る所に隨へ。門外の左右に各〻一の柱を立て、一一の柱の上に五の明鏡を安じて、滿月輪の如くせよ。左右に種種の瓔珞及以び花鬘を安置し、七寶の香爐・金銀の燈燭を以て種種に莊嚴し、恒に欝金・白檀・龍腦・沈水等の香を燒き、麝香を用ふること勿れ。又、白拂・孔雀の翠羽を以て、各〻寶鈴を安じて左右に分列せよ。種種の床榻、種種の裀褥、種種の音聲、種種の歌舞、種種の飲食を以て、至誠に供養せよ。道場の中に於て、毘盧遮那佛の像を安じ、其の佛前に於て、舍利を安置せよ。此の曼荼羅を金剛界と名づく。復た次に建立すること既に畢らば、瑜伽行者、當に金剛縛の印を結び、五輪を地に著け、方每に四たび拜すべし。第一に西方を禮拜し、第二に北方を禮拜し、第三に東方を禮拜し、第四に南方を禮拜せよ。四方を禮すること已らば、却つて本位に就き、金剛合掌の印を結び、身の四處を印ぜよ。一には頂、二には口、三には額、四には心なり。四處を印じ已りて、當に此の想を作すべし。我れ今身を以て、十方三世の諸佛諸大菩薩に布施し奉る、今日より始めて、乃し未來に至るまで、永く僮僕と作りて、生生世世に常に三寶に依り、終に天魔・外道等の法に歸依せじ、我れ無始の生死より以來、作る所の五逆及び無間の罪を、今、十方三世の諸佛諸菩薩、一切の賢聖、諸の衆生の前に對つて、心を至して懇切に發露懺悔して、敢て覆藏せず、未來の罪を更に敢て造らじ。普く願くば、十方の諸佛菩薩、我が懺悔を受けて、速に最勝の悉地を獲得せしめ玉へと。

建立道場發願品第七

爾時に金剛手菩薩摩訶薩、諸の大衆に告げて言く、瑜伽行者、金剛合掌を作り、諦かに衆聖を想

【二二】欝金。梵に Kuṅkuma と云ふ。二類あつて、一は黃色で染色に用ふ。惡臭の爲め、香に用ふるに堪へぬからである。一は同じく黃色で金に似、欝勃として香が甚しいから、香具とするに足る。

【二三】龍腦。梵に Karpūra と云ひ、又、樟腦と譯す。

【二三】沈水。梵に Kṛṣṇāgaru と云ふ。

【二四】床榻。ゆか。榻は、こしかけ・ゆか・ねだい・しとね。

【二五】裀褥。しとね。しきもの。

【一】此の品には、道場を建立して作法するには、名聞利養を離れて、無上菩提の爲にせよ、と說き玉ふ。

一〇倶 謎半音 羅引 野 娑婆 訶毘沙門眞言

一一伊 舎引 娜 耶 娑婆 訶大自在天眞言

一二阿 膩 底也二合 野 娑婆 訶日天子眞言

一三捨 儞二合 陀羅二合 野 娑婆 訶月天子眞言

一四捺 羅 那反舌 夜二合 娑婆 訶地天眞言

一五麼 囉二合 阿急呼 摩二合 寧半音反 娑婆 訶梵天王眞言

一六復た次に瑜伽行者、道場の地を求めんには、一七塚間・沙石・瓦礫・鹹鹵・荊棘・穢濁の地と、及以び虎狼の諸の悪難処とを遠離せよ。是の如くの地を吉祥と名づけず。若し白鶴・孔雀・鸚鵡・舎利・鳧・雁・鴛鴦・蓮花水池に有らば、是の如く等の地は道場を立つるに堪へたり。右の手の中の三指を以て少し屈し、大拇指を以て頭指の中指を捻じ、小指を以て無名指の中節を捻じ、水を盛り加持して、四方に散灑せよ。眞言を持して曰く、

一八唵一 嚩日嚕 駄迦吒反舌大呼

一九復た次に行者、水を加持し已らば、浄地に灑ぎて、便ち道場を立てよ。釋迦如來、曼荼羅道場儀軌を説き玉ふに、廣狹大小三千 五百有り。第一の道場は一千由旬、是れ金輪聖王の持念の儀軌なり。次に五百・一百・五十・二十なる有り。是の如く漸く小にして、乃し掌の中・爪甲の量に至るまで、道場を建立するに皆悉地を獲。若し第一の道場を建立せんと欲せば、金剛縛の印を結び、次に縛印を改めて、左右の中指を立て、少し屈して更互に二中指の端を相捻じ、眞言を以て加持せよ。一切処に於て皆通用することを得、或時には行者洗浴するに及ばずとも、此の法印を以て加持し眞言すれば、即ち清浄なることを得。其の眞言に曰く、

二〇唵引一 娑嚩二合 婆引去 嚩 輪駄大呼 薩嚩

【七】 Nṛtye svāhā.
【八】 Varuṇāya svāhā.
【九】 Vāyave svāhā.
【一〇】 Kuberāya svāhā.
【一一】 Īśānāya svāhā.
【一二】 Ādityāya svāhā.
【一三】 Candrāya svāhā.
【一四】 Dharaṇāya svāhā.
【一五】 Brahmaṇe svāhā.
【一六】 復た次に。以下は道場を建立すべき地を擇び、次に水を盛り加持して四方に散灑し、以て其の地を淨むべきを說き玉ふ。
【一七】 塚間・墓地(Śmaśāna)のこと。
【一八】 Oṁ vajra'aka ṭhaḥ.
【一九】 復た次に。以下は建立道場法を說き玉ふ。
【二〇】 Oṁ svabhāva śuddha. s.rvadharma svabhāva śud-dho hūṁ.

囀陀羅尼を證して、記別を受くることを得、無量百千萬億の天人、遠塵離垢して[三七]法眼淨を得たりき。

修行儀軌品第六

爾時に金剛手菩薩摩訶薩、佛の廣大の自在神力を承けて、眞實瑜伽の甚深祕密を說き玉ふ。行者、當に目を閉ぢ寂然にして諦かに想ふべし。眞實祕密教主の最勝最尊にして大自在を得玉へる、大慈大悲毘盧遮那如來は、須彌頂の寶法堂の中に在し、十六俱胝那瘐多等の菩薩・眷屬と與に、具足し圓滿せり。頂上の天冠に五佛端坐し玉ひ、一切の瓔珞を以て佛身を莊嚴せり。五種の相あり。一には寂靜の相、二には瞋怒の相、三には歡喜の相、四には淸涼の相、五には種種の相なり。[一]五方の如來は其の色各ゝ異なり。第一は白色、第二は青色、第三は金色、第四は紅色、第五は雜色なり。[二]東方の門首は帝釋の坐位、南方は琰摩羅王の坐位、西方は水天の坐位、北方は毘沙門天王の坐位、東北の角は大自在天の坐位、東南の角は火王の坐位、西南の角は羅刹天の坐位、西北の角は風天の坐位、上方は大梵天の坐位、下方は堅牢地神の坐位なり。我れ今已に坐位の次第を說きつ。[三]後に當に一一に眞言を說くべし。曰く、

[四]因　陀羅　野　娑婆　訶 帝釋眞言

[五]阿　祇那二合　曳　娑婆　訶 火天眞言

[六]夜　摩　野　娑婆　訶 琰魔羅王眞言

[七]儞哩　啼　娑婆　訶 羅刹天眞言

[八]嚩　嚕　娜反舌呼　耶　娑婆　訶 水天眞言

[九]嚩去　野　謎半音　娑婆　訶 風天眞言

置くこと）を授與するを云ふ。

[三五] 極歡喜地(Pramuditā)。十地の第一地。菩薩一大阿僧祇劫の修行を經て、初めて斷惑證理の一分を僞し、大に歡喜する位である。今は長時を要することなく、父母所生の肉身に於て、直に此の位を證得することを示す。

[三六] 道果。道は菩提(Bodhi)果は涅槃(Nirvāṇa)である。涅槃は菩提の道に由つて證せらるゝものであるから果と云ふ。

[三七] 法眼淨。分明に眞諦を見るを云ふ。大小乘に通ず。小乘は初果に四眞諦（苦・集・滅・道）の理を見るを云ひ、大乘は初地に無生法忍（無生無滅の理に安住して動かざること）を得るを云ふ。

[一] 五方の如來。以下は五佛の色相を說き玉ふ。

[二] 東方の門首。以下は十天の方位を說き玉ふ。

[三] 後に當に。以下は十二天の眞言を說き玉ふ。

[四] Indrāya svāhā.

[五] Agnaye svāhā.

[六] Yamāya svāhā.

復た次に行者、此の三昧より起ちて、當に正東方の[28]金剛鈴菩薩の觀門を觀ずべし。自ら此の想を作せ。我は是れ金剛鈴なりと。此の想を作し已りて、當に金剛鈴の印を結ぶべし。左右の指の頭を以て、右を以て左を押し、皆各ゝ相叉ふること、猶し鈴の狀の如くせよ。纔に此の印を結べば、即ち諸佛菩薩の愛念を得。眞言を持して曰く、

[29]唵一　嚩日囉二合　誐儞二合　吒反舌呼三

爾時に毘盧遮那如來、此の三十七尊の眞實の契印と祕密の法とを說き已りて、金剛手等の諸の菩薩に告げて言く、若し國土・城邑・聚落あらんに、一りの淨信の男子・女人ありて、大悲心を起し、[30]四恩を報ぜんが爲に、道場を建立して、是の法を修せば、其の國中に於て、[31]七難有ること無く、國王王子、日夜に廣大の福聚を增長す。所以は何んとなれば、是の道場の地より金剛際に至り、乃し微塵に至るまで、國王に屬するが故に。譬へば、寶珠を宅中に安ずれば、災難を辟除し、七寶現前するが如く、此の妙經典も亦復た是の如し。若し法式に依りて此の祕密を修すれば、所在の國土安穩豐樂なり。若し善男子・善女人有りて、六神通力を得、一念の頃に於て、普く十方の無量の佛の所に詣り、衆中に來集して上首と爲りて、諸佛に正法輪を轉じ玉へと勸請し、諸の衆生の爲に導師と作らんと欲せば、[32]初夜・後夜に道場の中に入りて、當に念を所歸の本尊に繫け、法に依りて觀行すべし。現身に必ず廣大の福智を得、衆生を利益するに等比あること無けん。萬億劫を經とも惡道に入らず、恒に善友に遇ひて常に退轉せず、[33]彌勒の會中に佛の[34]授記を得て、速に阿耨多羅三藐三菩提を證す。善男子。若し衆生有りて、此の祕法に遇ひ、空間に住して說の如く修行せば、現身に[35]極歡喜地を證得す。何に況や世間の福德果報をや。若し菩薩有りて、是の法を修せずして佛果を證すと言はば、必ず是の處り無し。是の法をば名づけて頓に菩提を證する眞實の正路と爲す。爾時に大會の無量の天人、佛の所說を聽きて、悉く[36]道果を證す。大梵天王・忉利天王、不退

難・天地亢陽難・四方賊來難、[仁王經受持品]。人衆疾疫難・他國侵逼難・自界叛逆難・星宿變怪難・日月薄蝕難・非時風雨難・過時不雨難、[藥師本願經下]。異說多く一々遑擧し難い。

【三二】 初夜・後夜。晝夜六時の中の二である。六時とは、晨朝(卯の時)・日中(正午)・日沒(酉の時)・初夜(戌の時、今の午後八時頃)・中夜(子丑の二刻、凡そ今の十時より二時まで)・後夜(寅の時、凡そ今の午前四時頃)を云ふ。

【三三】 彌勒(Maitreya)。慈氏と譯す。その慈悲及び智慧、餘人の及ぶところでないから、かく名づくと云ふ。而して釋迦如來の佛位を紹ぐ補處(Pratibaddha)の菩薩とされてある。即ち、今現に兜率天の內院に居たまひ、釋尊の入滅に後るゝこと五十六億七千萬歲にして、人界に下生し、華林園の龍華樹の下に正覺を成じ玉ふとす。今、文に彌勒の會中と云ふは、かくて三會に說法し玉ふ會座に侍ることを指すのである。

【三四】 授記(Vyākaraṇa)。十二部經(分教)の一。佛、發心の衆生に對して、當來必當作佛の記莂(未來世に於て、受くべき其の人の果報を豫言し

二〇 唵一　嚩去　日囉二合　俄儞泥二合下字半音三

二一 復た次に行者、此の三昧より起ち、正南方の 二二金剛鉤菩薩の觀門に入りて、自ら此の想を作せ。我は是れ諸佛菩薩の方便智慧の大金剛鉤なりと。此の想を作し已りて、兩手を金剛拳に結び、左右の頭指を舒べて少し屈して相鉤し、又左右の小指を舒べて少し屈し、其の二小指の兩つの頭相向け、三遍一切の諸天及び鬼神等を鉤召して、道場に入らしむ。纔に此の印を結ばば、能く行者をして大勢力を得、一切の諸天神等を驅使して、衆事を營辦せしむ。眞言を持して曰く、

二三 唵一　嚩去　日囉二合　倶奢三

復た次に行者、此の三昧より起ちて、當に正西方の 二四金剛索菩薩の觀門を觀ずべし。自ら此の想を作せ。我は是れ金剛索なり、在先に鉤召せる、一切の諸天及び鬼神等、其の未だ來らざる者をして道場に入らしめ、我れ今、此の大金剛索を以て、堅く縛して放たずと。此の想を作し已りて、即ち前の印を以て、前の金剛鉤の印の、頭指・中指・無名の三指を改めて、用て拳に作り、左右の大指を以て更互に相鉤し、左右の小指を少し屈して相向へよ。是を堅縛諸衆生の印と名づく。眞言を持して曰く、

二五 唵一　嚩去　日囉二合　波奢

復た次に行者、此の三昧より起ちて、當に正北方の 二六金剛鎖菩薩の觀門を觀ずべし。自ら此の想を作せ。我は是れ金剛鎖なりと。此の想を作し已りて、便ち手印を結べ。先づ左右の母指・頭指を以て、更互に相鉤すること、猶し鐵鎖の如くし、左右の餘の指を皆以て拳に作れ。是れ金剛鎖の印なり。纔に此の印を結ばば、能く行者をして、善く教習の法を與へしむ。眞言を持して曰く、

二七 唵一　嚩日囉二合　娑普二合　吒三

【二〇】 Oṁ vajra-gandhe.

【二一】 復た次に。最後に大日如來が四攝菩薩を出生して、一切衆生を佛の境界に引入れ玉ふことを明す。五解脫輪の諸尊及び八供養菩薩は自證である。此等の尊の化他の德を四攝と云ふ。即ち四門に出で衆生を利益する意である。

【二二】 金剛鉤菩薩 (Vajrāṅkuśa)。鉤を以て衆生界を菩提道場に召入すること。

【二三】 Oṁ vajrāṅkuśa.

【二四】金剛索菩薩(Vajrapāśa)。次に金剛索を以て、堅く縛すること。

【二五】 Oṁ vajra-pāśa.

【二六】 金剛鎖菩薩 (Vajra-sphoṭa)。次に鎖に繫ぐこと。

【二七】 Oṁ vajra-sphoṭa.

【二八】 金剛鈴菩薩 (Vajra-ghaṇṭā)。かくて生界に流轉せざらしむるから歡喜す。即ち鈴である。

【二九】 Oṁ vajra-ghaṇṭā.

【三〇】 四恩。父母・國王・三寶(佛・法・僧)・一切衆生、〔心地觀經報恩品〕。父母・師長・國王・施主、〔釋氏要覽中〕。

【三一】 七難。火難・水難・羅刹難・王難(刀杖難)・鬼難・枷鎖難・怨賊難、〔法華經普門品〕、日月薄蝕難・衆星改變難・諸火焚燒難・時候改變難・大風數起

舒べ出して、即ち是の想を作せ。無量の香雲、印より上に出づと。即ち金剛燒香の印と名づく。此の印を結ばば、即ち能く内外の所有る一切の煩惱を燒滅して、清　淨心を得。其の眞言に曰く、

[一四] 唵一　嚩去　日囉二二合　怒引　閉半音三

復た次に、東南の角の[一五]金剛妙華菩薩の觀門に入りて、行者想を作せ。我は是れ金剛花なり、我れ今、十方の無量無邊の世界の、所有る無主の一切の妙花を採取して、十方の諸佛菩薩に供養し奉ると。是の想を作し已りて、金剛拳を結びて二拳を相並べ、仰けて上に舒べ出せよ。是れ金剛花の印なり。此の印を結ぶに何の利益かある。一切の重障を摧滅せんと欲するが爲なり。其の眞言に曰く、

[一六] 唵一　嚩去　日囉二二合　補澁閉二合下字半音三

復た次に、西南の角の[一七]金剛燃燈菩薩を觀ぜよ。行者想を作せ。我は是れ金剛燈なり、我れ今、無盡の燈を燃し、十方無量の世界の虚空の中に充滿して、十方の不可說不可說の無量無邊の諸佛菩薩を供養し奉ると。此の想を作し已りて、金剛拳を結び、兩拳を相合して心の前に近づけよ。即ち金剛燈の印と名づく。此の燈印を結ぶに何の利益かある。現身に如來の五眼を成就す。其の眞言に曰く、

[一八] 唵一　嚩去　日囉二二合　膩上引　閉半音三

復た次に、西北の角の[一九]金剛塗香菩薩を觀ぜよ。行者想を作せ。我は是れ金剛塗香なり、我れ今、最上の白檀の塗香を以て、十方無量の世界の太虚空の中に充滿すること、猶し大雲の世界に遍滿するが如くに、十方の諸佛菩薩を供養し奉ると。此の想を作し已りて、兩つの金剛拳を以て、左右の頸乃至胸腹を摩せよ。即ち是の念を作せ。我れ今、此の牛頭栴檀の最上の塗香を持して、十方の諸佛菩薩及び衆生の身に塗り奉ると。其の眞言に曰く

香を以て供養す。

【一四】 Oṁ vajra-dhūpe.

【一五】 金剛妙華菩薩（Vajra-puṣpā）。南方寶生如來は、福德聚門即ち修行門の尊であるから、萬行の華を以て供養す。

【一六】 Oṁ vajra-puṣpe.

【一七】 金剛燃燈菩薩（Vajra-dīpā）。西方阿彌陀如來は、智慧門即ち菩提門の尊であるから、智慧の燈明を以て供養す。

【一八】 Oṁ vajra-dīpe.

【一九】 金剛塗香菩薩（Vajra-gandhā）。北方不空成就如來は、穢土に出現して衆生を利益するから、かりそめにも染汚せらるゝことがある。故に塗香を以て穢濁を清めて、供養し奉る。

四唵一　嚩去　日囉二合　羅洗長引半音三

復た次に、東南の角の五金剛鬘菩薩を觀ぜよ。行者想を作せ。我は是れ金剛鬘なり、我れ今、此の一切の花鬘を持して、六十方の諸佛菩薩を供養すと。是の想を作し已りて、金剛拳を結び、並べて額の上に著け、復た兩拳を分つて引いて腦の後に至り、兩拳を更互に相輪らすこと兩遍、輪らす每に一遍相結が想を作して、自ら此の想を作せ。花鬘を繫縛すと。是を金剛鬘の印と名づく。其の眞言に曰く、

七唵一　嚩去　日囉二合　麼引　嚟半引三

復た次に、西南の角の八金剛歌菩薩を觀ぜよ。行者、想を作せ。我は是れ金剛歌なり、我れ今、十方三世の諸佛菩薩を歌讃し奉るに、微妙の聲を發し、口中より出でて十方無量の世界に充滿すと。此の想を作し已りて、金剛拳を結びて口の上に安じ、漸漸に引出すべし。即ち是れ歌讃音聲の印なり。其の眞言に曰く、

九唵一　嚩去　日囉二合　霓愚以反　底半音三

復た次に、西北の角の一〇金剛舞菩薩を觀ぜよ。行者想を作せ。我は是れ金剛舞なり、我は金剛舞を作して、十方無量の世界の三世の諸佛と一切の菩薩とを供養すと。是の想を作し已りて、金剛拳を結び、兩臂もて舞を作せ。即ち是れ金剛舞の印なり。此の舞印を作さば、諸佛菩薩、即ち大に歡喜し、一切の願を與へて行者の身を護り玉ふ。其の眞言に曰く、

一一唵一　嚩去　日囉二合　儞嚧二合　底曳三

一二復た次に、行者、此の金剛舞の觀門より起ち、東北の角の一三金剛燒香菩薩の觀門に入りて、自ら是の想を作せ。我は是れ金剛燒香雲なり、十方無量の世界に充滿して、虛空の中に於て、十方の諸佛菩薩に供養すと。此の想を作し已りて、金剛拳を結びて二拳を相並べ、拳の面を下に向け、兩拳を

【四】 Oṁ vajra-lāse.
【五】 金剛鬘菩薩（Vajra-mālā）。南方寶生如來（Ratna-sambhava）は、福德門の尊であるから、花鬘を以て供養す。
【六】 十方の諸佛云々。四佛を供ずるを爾か云ふ。以下も之に準ず。開けば即ち十方、合すれば則ち四佛である。
【七】 Oṁ vajra-māle.
【八】 金剛歌菩薩（Vajra-gītā）。西方阿彌陀如來（Amitābha）は智慧門の尊で、説法談義を主るから、歌を以て供養す。
【九】 Oṁ vajra-gīte.
【一〇】 金剛舞菩薩（Vajra-nṛtī）。北方不空成就如來（Amoghasiddhi）は、羯磨部の尊として、事業の德を司るから、舞を以て供養す。
【一一】 Oṁ vajra-nṛtiye.
【一二】 復た次に。次に四如來は此の供養に答へる爲に、外の四供養の四菩薩を出生して、大日如來に供養し奉ることを明す。能供養の尊、金剛輪の外に住するから、外の四供と云ふ。
【一三】 金剛燒香菩薩（Vajra-dhūpā）。阿閦如來は供養するに香を以てす。東方は初發心して三摩耶戒（Samaya-śīla）を受得する方であるから、戒

を摧滅す、我が身は五色なり、諸佛菩薩と、一切衆生と十方世界も、また皆五色なりと。此の想を作し已りて、金剛拳の印を結べ。左右の小指を相鉤して口に著け、二頭指を舒べて左右の頬に安ぜよ。是れ二牙の相なり。眞言を持して曰く、

[三三]唵一　嚩去日囉二合二　夜吉叉二合三

復た次に、[三四]金剛拳菩薩を觀ぜよ。行者、想を作せ。我は是れ金剛拳なり、我れ能く諸の衆生の前に示現す。我は是れ能く金剛の繫縛を解脱する者なり、我が身の色と、諸佛菩薩と。一切衆生と、十方世界と、亦皆五色なりと。此の想を作し已りて、眞金剛拳の印を結べ。左右の小指を更互に相鉤して、二拳の面を合せ、堅く握りて緩くすること莫れ。是れ眞金剛拳の印なり。眞言を持して曰く、

[三五]唵一　嚩去日囉二合二　散尼去三

卷の下

金剛界外供養品第五[一]

爾時に世尊、金剛手菩薩摩訶薩に告げて言く、我れ今已に五佛如來・四波羅蜜・四方十六大菩薩の觀門の、二十五の契印・眞言・法則を說きつ。次に當に金剛嬉等の十二の菩薩の外院の供養を演說すべし。佛道を求むる者を利益し安樂にして、現に悉地を獲しめ、當に菩提を證せしむべし。

[二]復た次に瑜伽行者、此の北方の金剛拳菩薩の觀門より起ち、東北の角の[三]金剛嬉戲菩薩の觀門に入りて、自ら此の想を作せ。我は是れ金剛嬉戲なり、我れ今、能く十方世界の諸佛・菩薩・衆生に喜樂を與ふと。此の想を作し已りて、金剛拳を仰けて兩膝の上に安じ、目を閉ぢ迴轉して、遍く十方の諸佛菩薩を禮せよ。是の印を名づけて金剛嬉戲と爲す。其の眞言に曰く、

【三三】 Oṁ vajra-yakṣa.

【三四】 金剛拳菩薩(Vajra-saṁdhi)。かく前十五菩薩の地位を經て、發心・修行・菩提・涅槃の無盡の萬德を、一身に拳つて執持するを、拳菩薩と云ふ。

【三五】 Oṁ vajra-saṁdhi.

【一】 當品には十二供養の印言を說き玉ふ。

【二】 復た次に。先づ內の四供養菩薩を明す。卽ち大日如來、四如來を供養せんがために現ずるのである。而して金剛輪內に住するから內と云ふ。

【三】 金剛嬉戲菩薩（Vajra-lāsī）。東方阿閦如來（Akṣobhya）は堅固の菩提心を體とす。故に適悅歡喜の形を以て供養す。

方の不空成就如來の四大菩薩を觀ぜよ。其の名を〔二八〕金剛羯磨菩薩、金剛護菩薩、金剛藥叉菩薩、金剛金菩薩と曰ふ。行者想を作せ。我は是れ金剛羯磨なり、我は是れ金剛不空（心定して果を得るは是れ不空の義なり。）なり、我は是れ種種の事業を能く成就す、我は是れ能く一切處に到る、我は是れ能く種種の事を作す、我は是れ能く妙事業を成就す、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・河池・草木・叢林と、皆悉く五色なりと。是の想を作し已りて、拳剛拳を結びて舞を作すこと三遍せよ。是を種種事業の印と名づく。所以は何ん。謂く、能く種種の事業を成就す。眞言を持して曰く、

〔二九〕唵一　嚩去日囉二合　羯唫磨

復た次に、〔三〇〕金剛護菩薩を觀ぜよ。行者想を作せ。我は是れ金剛護なり、我は是れ金剛甲なり、堅實牢固にして破壞す可からず、我は是れ金剛精進なり、我は是れ十方無量の一切衆生を守護して無怖畏を施す、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・泉源・草木・叢林と、悉く皆五色なりと。此の想を作し已りて、金剛拳を結び、兩の頭指を舒べて臍の上に安じ、拳を兩邊に分つて背の上に到らしめ、復た背の上より還りて臍輪に到らしめ、兩の頭指の端、相輪らすこと一遍して、自ら此の想を作せ。是れ繫縛の義なりと。次に二頭指を前の如くして心に當て、引きて背に到らしめ、却き還りて胸に至り、二指の端を以て相輪らすこと一遍して、自ら此の想を作せ。亦た繫縛の義なりと。次に叉頸に至ることも亦復た是の如くして、自ら此の想を作せ。亦た繫縛するが如しと。眞言を持して曰く、

〔三一〕唵一　嚩去日囉二合　囉吉叉二合三

復た次に、〔三二〕金剛藥叉菩薩を觀ぜよ。行者、想を作せ。我は是れ金剛藥叉なり、所謂る諸佛の大方便力神通變化なり、我が口中に金剛の利牙あり、一切の見る者、大恐怖を懷き、善能く一切の魔怨

〔二八〕金剛羯磨(Vajra-karma)。以上の如く、自證化他の事業を滿足するを、羯磨卽ち業と云ふ。

〔二九〕Oṃ vajra-karma.

〔三〇〕金剛護菩薩(Vajra-rakṣa)。自證化他の事業を滿足し、大慈大悲の甲冑を著けて、衆生界を保護するを、護菩薩と云ふ。

〔三一〕Oṃ vajra-rakṣa.

〔三二〕金剛藥叉菩薩(Vajra-yakṣa)。佛地の一障を噉食して餘すことなく、根本無明(Mūlāvidyā)を怖畏せしむるを、藥叉卽ち牙菩薩と云ふ。牙は金剛の智牙である。

に入らしむ。眞言を持して曰く、

〔二〇〕唵一　嚩去日囉二二合　駄嚕摩三二合

復た次に、〔二一〕金剛利文殊菩薩を觀ぜよ。行者、自ら想へ。我は是れ眞の金剛利なり。我れ能く一切衆生の貪瞋癡等を斷除す、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・河池・草木・叢林と、皆紅蓮華色なりと。此の觀を作し已りて、右の拳を舒べ出して、即ち是の想を作せ。我れ今、右の手に大利劍を執りて、能く衆生の一切の煩惱を斷ずと。眞言を持して曰く、

〔二二〕唵一　嚩去日囉二二合　底丁以反引瑟那三二合

復た次に、〔二三〕金剛因菩薩を觀ぜよ。行者、想を作せ。我は是れ金剛因なり、我は是れ世間の醍醐甘露なり、我は是れ金剛大敎法輪なり、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・河池・草木・叢林と、皆紅蓮色なりと。此の念を作し已りて、金剛拳を結び、二拳の面を以て並べて心上に安じ、兩拳の中指の中節を相著け、左右に更互に輪轉すること三遍して、即ち是の想を作せ。我れ今、三たび金剛法輪を十方界に轉ずと。眞言を持して曰く、

〔二四〕唵一　嚩去日囉二二合　醯視引三

復た次に、〔二五〕金剛語言菩薩を觀ぜよ。行者、想を作せ。我は是れ金剛語言なり、我れ今、能く一切衆生に〔二六〕蘇悉地の法を與ふ、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・河池・草木・叢林と、皆紅蓮色なりと。此の想を作し已りて、金剛拳を作り、口の左右に安じて、往來の相を作すこと、猶し語言の如くせよ。此の印をは結ば、能く一切衆生の語言に達す。眞言を持して曰く、

〔二七〕唵一　嚩去日囉二二合　麼引沙上聲呼三

復た次に、西方の金剛語言菩薩の觀より起ちて、當に北方の金剛羯磨の觀門に入るべし。謂く北

【二〇】Oṁ v jra-dharma.

【二一】金剛利菩薩（Vajra-tīkṣṇa）已に一切法本來清淨の眞理に通達するから、これを示す爲には、煩惱繫縛を斷じなくてはならない。故に、次に智慧の利劍を振つて、衆生の繫縛を斷ず。これを利菩薩と云ふ。即ち文殊菩薩（Mañjuśrī）である。

【二二】Oṁ vajra-tīkṣṇa.

【二三】金剛因菩薩（Vajra-hetu）已に衆生の煩惱を斫つて、成佛の障礙を斷つから、自心の菩提を悟らしめることが出來る。自心の實相を覺悟させるには、佛の說法の因を待たなくてはならない。因菩薩とは即ち彌勒菩薩（Maitreya）である。

【二四】Oṁ vajra-hetu.

【二五】金剛語言菩薩（Vajra-bhāṣa）。正しく衆生の爲に說法敎化して、涅槃（Nirvāṇa）に入らしむ。これを語菩薩と云ふ。即ち祕密語（Guhya-bhāṣa）である。

【二六】蘇悉地（Susiddhi）。妙成就と譯す。

【二七】Oṁ vajra-bhāṣa.

[一四] 唵一　嚩去日雑二合　提惹三

復た次に、[一五]金剛幢菩薩を觀ぜよ。行者、自ら想へ。我が身は是れ金剛幢なり、一切衆生の所愛樂の物を我が身邊に雨らし、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・草木と、皆黄金色なりと。此の觀を作し已りて、次に契印を結べ。先づ兩手を以て金剛拳に作り、其の拳の面を以て行者の面に向け、左右の二拳を直く空中に立てよ。金剛幢の印と名づく。一切衆生所愛の物を能く圓滿するが故に、此の契印を結び、眞言を持して曰く、

[一六] 唵一　嚩去日囉二合　鷄覩三

復た次に、[一七]金剛笑菩薩を觀ぜよ。行者、自ら想へ。我が身は是れ金剛笑なり、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・草木と、皆黄金色なりと。此の觀を作し已りて、次に契印を結べ。其の兩手を以て金剛拳に作り、口の左右に安じて、三遍微笑せよ。先づ拳の面を以て口の左右に安じて微笑し、次に拳の背を以て口の左右に安じて微笑し、後に拳の面を以て口の左右に安じて微笑せよ。是の如くすれば能く十方の衆生をして、皆怡悦を獲しめ大安樂を受けしむ。此の契印を結び眞言を持して曰く、

[一八] 唵一　嚩一日囉二　訶引急大聲佐上三

復た次に、南方の金剛笑菩薩の觀門より起ちて、當に西方の金剛法の觀門に入るべし。謂く西方の無量壽佛は、面を東方に向け玉ふと觀ぜよ。四大菩薩も亦復た是の如し。行者、自ら想へ。我は是れ[一九]金剛法菩薩(觀音)なり、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・草木と、皆紅蓮色なりと。此の想を作し已りて、次に契印を結べ。其の兩手を以て仰で金剛拳にし、先づ右拳を以て左拳の上に安じて、右轉すること一遍、次に左拳を以て右拳の上に安じて、また轉ずること一遍せよ。是れ金剛蓮華の印なり。能く衆生をして世間を厭離し、出世の法を欣ひて、甘露の城

【一四】Oṁ vajra-teja.

【一五】金剛幢菩薩(Vajra-ketu) 萬行の寶珠を高く幢上に安じ、世間・出世間の寶物を雨らして、博く衆生を賑はすを幢菩薩と云ふ。

【一六】Oṁ vajra-ketu.

【一七】金剛笑菩薩(Vajra-hāsa)。已に萬善萬寶を衆生に與へて滿足せしむるから、衆生も悦んで笑ひ、菩薩も亦笑ふ。これを笑菩薩と云ふ。是れ大歡喜の相である。

【一八】Oṁ vajra-hāsa.

【一九】金剛法(Vajra-dharma)。前の喜悦の心に乘じ、萬有諸法本性清淨の眞理を開いて、自心成佛の理に通達せしむるを、法菩薩と云ふ。法は本性清淨の法で、觀音(Avalokiteśvara)を指す。

び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・河池・草木・叢林、皆悉く青色なりと。此の觀を作し已りて、次に契印を結べ。其の兩手を以て金剛拳に作り、先づ左の拳を以て右の臆の上に安じ、後に右の拳を以て左の臆の上に安ぜよ。〔九〕定慧の二は是れ法なり。金剛拳を以て臂を交へて心に束するは是れ精進力なり。即ち左右の拇指と頭指とを舒べて、三遍彈指せよ。是れ歡喜の相なり。若し此の印を結ばば、即ち無明の城を出離することを得るが故に。此の契印を結び、眞言を持して曰く、

〔一〇〕唵一　嚩去日囉二合　娑努三

復た次に、東方の金剛善哉菩薩の觀より起ちて、當に南方の金剛寶の觀門に入るべし。謂く、南方の寶生如來の四大菩薩を觀ぜよ。其の名を金剛寶菩薩・金剛威德菩薩・金剛幢菩薩・金剛笑菩薩と曰ふ。南方の寶生如來は、面を北方に向け玉ふ。四大菩薩も亦復た是の如し。行者自ら想へ。我は是れ〔一一〕金剛寶なり、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・草木と、皆黃金色なりと。此の觀を作し已りて、次に印契を結べ。其の兩手を以て金剛拳に作り、二拳の面を以て兩肩の上に安じて、復た是の想を作せ。今、我れ諸佛・菩薩・衆生の與に灌頂すと。此の契印を結び眞言を持して曰く、

〔一二〕唵一　嚩去日囉二合　囉怛那二合三

復た次に、〔一三〕金剛威德菩薩を觀ぜよ。行者、自ら想へ。我が身は是れ日光天子なり、刹那の頃に於て、悉く能く一切衆生の內外の黑闇を滅盡す、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・河池・草木・叢林と、皆黃金色なりと。是の想を作し已りて、次に契印を結べ。其の兩手を以て金剛拳に作り、此の兩拳を以て竝べて心の上に安じ、左右の兩拳を更互に輪轉すること、日の右轉するが如くせよ。是の如く三轉すれば、當に日天の光明輪と成るべきが故に。此の契印を結び、眞言を持して曰く、

〔九〕定慧の二。以下數字は亂脫で、恐らく「二つの金剛拳は是れ定慧の法なり、臂を交へて云々」が正しからう。〔諸儀軌稟承錄第十二（三十二右）參照〕。

〔一〇〕Oṁ vajra-sādhu.

〔一一〕金剛寶（Vajra-ratna）。菩提心を發して後、其の目的を達する爲に、萬行を修す。而して萬行から諸の功德を生ずるを以て、萬行は如意寶珠である。大悲萬行の寶を寶菩薩と云ふ。

〔一二〕Oṁ vajra-ratna.

〔一三〕金剛威德菩薩、常には金剛光菩薩（Vajra-teja）と云ふ。萬行の寶珠の光明、遍く照して貧窮の暗を破するを、光菩薩と稱す。

に作り、大拇指を以て其の掌中に入れ、餘の四指を以て堅く拇指を握りて、當心に安置し、次に左の手を以て金剛拳に作りて、左腰の上に安ぜよ。此れを金剛不退轉の印と名づく。此の手印を結びて、是の如くの想を作せ。我れ今、未だ成佛を得ざるより已來常に退轉せずして、毘盧遮那如來を恭敬し供養すれば、卽ち是れ金剛不壞不退の三昧を獲得すと。不退轉の印を結び、眞言を持して曰く、

[三]唵一　嚩日囉二合　娑怛嚩二合三

復た次に、[四]金剛王菩薩を觀ぜよ。瑜伽行者、自ら想へ。我は是れ金剛王なり、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・土地・草木・河池、皆悉く青色なりと。此の觀を作し已りて、次に手印を結べ。其の兩手を以て金剛拳に作り、二頭指を舒べて、屈鉤の狀に成じ、上に仰けて並べ立て、其の兩拳の中指及び無名指・小指を以て、指の背を相著け、立てゝ心の上に安じて、當に此の念を作すべし。諸佛菩薩を鉤を以て引き來たすと。是れを卽ち名づけて金剛鉤王と爲す。此の契印を結び、眞言を持して曰く、

[五]唵一　嚩日囉二合　囉引惹三

復た次に、[六]金剛愛菩薩を觀ぜよ。瑜伽行者、自ら想へ。我は是れ金剛愛なり、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・河池・土地・草木、皆悉く青色なりと。此の觀を作し已りて次に契印を結べ。其の二手を以て金剛拳に作り、左の拳に弓を把り、右の拳に箭を執り、慈悲の眼を以て、一切の魔・貪瞋癡等の一切の煩惱を射ると想へ。是の印を名づけて滅瞋恚の印と爲す。何の因緣を以てか、金剛愛と名づくるや。謂く此の菩薩能く行者の所愛樂を施すが故に。此の契印を結び、眞言を持して曰く、

[七]唵一　嚩日囉二合　囉引誐三

復た次に、[八]金剛善哉菩薩を觀ぜよ。行者、自ら想へ。我は是れ金剛善哉なり、我が身の色と、及

【三】 Oṁ vajra-sattva.

【四】 金剛王菩薩（Vajra-rāja)。王は自在の義で、已に菩提心を發し、自行化他に自在であるから、王菩薩と云ふ。

【五】 Oṁ vajra-rājā.

【六】 金剛愛菩薩（Vajra-rāga)。自在を得るから、博く衆生を愛して化益す。これを愛菩薩と云ふ。

【七】 Oṁ vajra-rāga.

【八】 金剛善哉菩薩、普通には金剛喜菩薩（Vajra-sādhu）と云ふ。博く衆生を愛することが出來るから、自他共に喜悅す。菩薩は所願を滿足して咲悅し、衆生は解脱の樂を得て喜悅す。これ喜菩薩である。

【六七】五種の三昧。一、刹那心とは、初心の位に於て心月輪を見るに、一刹那相應して暫く現ずるけれども、即滅すること電光の如くなる位を云ふ。二、徹塵心或は流注心とは、念念に薫修の功力を加へて相續し、絶えざること水の流れ注ぐが如くなる位を云ふ。三、白縷心或は漸現心・甜美心とは、功を積んで已むことなければ、虚然として身心輕安なるを得て、道を甑味する位を云ふ。道とは心月輪で、自心の菩提を指す。四、隱顯心或は起伏心・摧散心とは、時に忽に精勵し、時に忽に休廢して、其の心一定することなく、動もすれば摧け散つて、道に違ふ心起る位を云ふ。五、安住心或は明鏡心とは、即に隱顯心を離れて、心月圓明無著なる位を云ふ。

金剛外界品第四

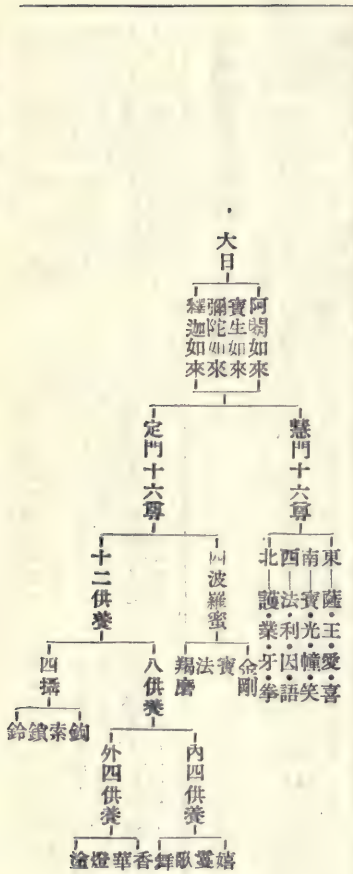
爾時に金剛手菩薩、佛に白して言さく、世尊唯だ、願くば之を說き玉へ、唯だ願くば、之を說き玉へ。我れ深く渴仰し願樂して聞かんと欲す。佛言く、善男子然も其の印法に差別の名あり。五方の如來と四波羅蜜と十六菩薩とは、皆印の名を得、餘の諸の契法は、印の名を得と雖も義に差別あり。云何んが差別なる。謂く五方の佛と四波羅蜜と十六菩薩とを、名づけて眞印と爲し、金剛嬉等を影相の印と名づく、金剛燒香等を親近の印と名づけ、金剛鉤等を名づけて智印と爲す。是の義を以ての故に、差別の名あり。瑜伽行者、身語意の印契眞言を以て、本尊毘盧遮那如來を供養すれば、諸の供養の中に最も第一たり。

復た次に、西北の角の羯磨波羅蜜の三昧より起ちて、當に東方の不動如來の四大菩薩を觀ずべし。金剛薩埵の三昧の正觀なり。其の名を金剛薩埵菩薩、金剛王菩薩、金剛愛菩薩、金剛善哉菩薩、と曰ふ。其の毘盧遮那如來は、中に當りて坐して、面を東方に向け玉ひ、東方の不動如來は、面を西方に向け玉ふ。四大菩薩も亦復た是の如し。

復た次に、正しく金剛薩埵菩薩を觀ぜよ。瑜伽行者自ら我が身は是れ金剛薩埵なり、我が語も是れ金剛なり、我が心も是れ金剛なり、我が身の色と、及び諸佛菩薩と、一切衆生と、十方世界の山川・河池・草木・叢林と、悉く皆青色なりと觀ぜよ。此の觀を作し已りて、即ち右の手を以て金剛拳

【一】復た次に。以下は四方四佛の四親近十六大菩薩（薩埵・王・愛・善哉、寶・威德・幢・笑・法（觀音）・利（文殊）・因・語言・羯磨・護・藥叉・拳、）の形像並に契明を說き玉ふ。其の印法に差別の名がある。眞印（五佛・四波羅蜜・十六大菩薩）と、影相印（嬉・鬘・歌・舞）と、親近印（香・花・燈・塗）と、智印（鉤・索・鏁・鈴）とである。而して身語意の印言を以て、本尊毘盧遮那如來を供養すれば、諸供の中に最も第一と爲す、とは文の如くである。

【二】金剛薩埵菩薩（Vajrasattva）。菩提心堅固の體であるから、金剛薩埵と云ふ。

燒香・塗香・花鬘・園林・城邑・聚落・河海・雪山・黑山・日・月・星宿・國王・大臣・比丘・比丘尼・善友・眷屬・乃至十地の菩薩・聲聞・緣覺、四攝・十善・六波羅蜜、是の如く等の數の一切の相狀、乃至微塵をも悉く皆空寂なりと想へ。若し夢中に是の如くの相狀を見るも、また歡喜すること勿く、設ひ十方の諸佛菩薩を見るに、其の前に現ずと雖も、また歡喜すること勿く、唯だ自ら一心に佛果を成ぜんことを求め、無分別觀の堅立不動なること須彌山の如くして、一切の妄想分別を遠離せよ、若し瑜伽行者、未だ悉地を獲されば、[六四]三十七尊の相狀を觀ずべし。若し悉地を證せば、相狀を取らずして、無上大菩提心に安立せよ。若し菩提心の相を觀ぜんとせば、猶し月輪と水精と乳色との如くすべし。此等の諸相は、皆是れ凡夫の所觀の境なり。若し凡夫の人、此の觀門を修せば、五逆[六五]、一闡提[六六]等の極重の惡業を造ると雖も、皆悉く消滅し、時に應じて便ち[六七]五種の三昧を獲。一には刹那三昧、二には微塵三昧、三には白縷三昧、四には隱顯三昧、五には安住三昧なり。汝金剛手、我れ今、已に五方の如來と四波羅蜜との眞言印法を說きつ、亦、各別に金剛薩埵等の眞言及び印を說かん。當に汝が爲に坐位の次第を說くべし。

【五八】 次に。以下は四波羅蜜菩薩の印契(Mudrā)及び眞言(Mantra)を說く。四波羅蜜菩薩とは、金剛界大日如來の四親近の女菩薩である。是れ皆大日より流出して、四方四佛の能生の母となるのであるから、中臺に居す。

【五九】 Om sattva-vajri.

【六〇】 Om ratna-vajri.

【六一】 Om dharma-vajri.

【六二】 羯磨(Karma)。作業の義。

【六三】 Om karma-vajri.

【六四】 三十七尊。金剛界曼荼羅の主腦である。第一根本成身會に一千六十一尊ある中、重要のものを提擧して三十七尊と云ふ。今圖示せば左の如くである。

【六五】 五逆。殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出佛身血。逆とは天理に違逆する義。この五罪は、決定して無間地獄に墮する因であるから、五無間業或は五無間罪とも云ふ。

【六六】 一闡提。梵語 Icchāntika の音寫。信不具足と義譯す。佛法を輕賤誹謗し、因果の理法を信ぜざる人を云ふ。信不具であるから、一切の善根を焚燒し、永く生死界に流轉して出期がない。

るが如く、亦、衆生の無量無盡なるが如く、亦、煩惱の無量無盡なるが如し。是の如く瑜伽行者の三昧の大樂も、亦復た無量無盡なり。是の如く四義具足し圓滿せり。是の故に北方の不空成就如來は行者に告げて言く、善男子・善女人、汝怖畏すること勿れと。是の義に由るが故に、無怖畏の印と名づく。

爾時に毘盧遮那如來、金剛手菩薩に告げて言く、我れ今、已に五佛の印契及以び印言を說きつ、五八次に四波羅蜜天の印契及以び眞言を說かん。

復た次に、東北の角の金剛波羅蜜天は阿閦如來に屬し、印契・想觀・皆阿閦如來に同じ。行者、印を結び眞言を持して曰く、

五九唵一　薩怛婆二合二　縛去日哩二合三

復た次に、東南の角の寶波羅蜜天は寶生如來に屬し、印契・想觀・皆寶生如來の如し。行者、印を結び眞言を持して曰く、

六〇唵一　囉駄那二合二　縛去日哩二合三

復た次に、西南の角の法波羅蜜天は、無量壽如來に屬し、印契・想觀・皆無量壽如來の如し。行者、印を結び眞言を持して曰く、

六一唵一　駄嚕摩二合二　縛去日哩二合三

復た次に、西北の角の六二羯磨波羅蜜天は、不空成就如來に屬し、印契・想觀・皆不空成就如來の如し。行者、眞を結び持言を持して曰く、

六三唵一　迦嚕摩二合二　縛去日哩二合三

復た次に、金剛手、我れ今、已に內供養の法を說きつ、皆是れ有相月輪等の觀なり。次に當に無相の妙觀を演說すべし。瑜伽行者は端坐し正觀して、諦かに月輪を想へ。諸の契印を結びて、歌舞・

五佛の三昧を說く。最初に智拳印を結んで大日の三昧(Samādhi)に入り、種子等悉く皆白色なりと觀ず。

【五二】破魔の印。阿閦(Akṣobhya)の觸地の印である。東方・青色。

【五三】施顧願の印。寶生尊(Ratnasaṃbhava)の與願の印である。南方・黃金色。

【五四】如意珠(Cintāmaṇi)。寶珠(Maṇi)より種種の所求を出すこと、意の如くであるから如意と名く。龍王(Nāgarāja)或は摩竭魚(Makara)の腦中より出づと云ひ、成は佛の舍利(Śarīra)變じて成ると云ふ。而して密敎では、寶珠形を金剛界の半形と胎藏界の半形との和合形とす。

【五五】除散亂心の印。阿彌陀(Amitābha)の定印である、西方・紅蓮華色。

【五六】無怖畏の印。不空成就(Amoghasiddhi)の施無畏の印である。北方・五色。

【五七】般若波羅蜜(Prajñāpāramitā)。六波羅蜜・十波羅蜜中の第六波羅蜜である。般若を智慧と譯し波羅蜜を度又は到彼岸と譯す。實相(Tathatā)を照了する智慧は、生死の此岸を度つて涅槃(Nirvāṇa)の彼岸に到る船筏であるから、之を波羅蜜と云ふ。

那夜迦及び諸惡魔鬼神の印と名づく。

第三に[五三]施諸願の印を結べ。左の手は前に同じく、右の五指を舒べて掌を仰け、南方寶生如來の三昧に入りて、當に惹字の色と、及び我が身と、盡南方世界及以び九方の無量の世界の諸佛菩薩と一切衆生と、卉木山川と、皆黃金色なりと觀ずべし。卽ち是の想を作せ。五指の間より[五四]如意珠を雨らすと。此の如意珠は天の衣服・天の妙甘露・天の妙音樂・天の寶宮殿を雨らして、乃し衆生の一切の所樂をして、皆圓滿せしむるに至る。是の印を名づけて能令圓滿一切衆生所愛樂の印と爲す。能く衆生の一切の願を滿ずるが故に。

第四に[五五]除散亂心の印を結べ。先づ左の五指を舒べて、臍輪の前に安じ、次に右の五指を舒べて、左の掌の上に安ぜよ。此の印を結び已りて、西方の無量壽如來の三昧に入り、當に纈字の色と、及び我が身と、盡西方界幷與に九方の無量の世界の諸佛菩薩と、一切衆生と、山川草木と、悉く紅蓮華色と作ると觀ずべし。能く行者と及び諸の衆生をして、散亂の心を除きて三昧に入らしむるが故に。

第五に[五六]無怖畏の印を結べ。左の手は前の如く、次に右の五指を舒べて、掌の面を以て外に向けよ。北方不空成就如來の三昧に入り、當に佐字の色と、及び我が身と、盡北方界幷與に九方の無量の世界の諸佛菩薩と、一切衆生と、山河大地と、草木叢林と、悉く皆五色なりと觀ずべし。何の因緣を以てか無怖畏と名づくるや。謂く、四義を備ふるを無怖畏と稱す。一には中方の毘盧遮那如來は、能く無明の黑暗を滅して、[五七]般若波羅蜜等の盡虛空界の洞達の光明を出生す。二には東方の不動如來は、能く一切の頻那夜迦・惡魔・鬼神等を摧きて、悉く動ぜざらしむ。三には南方の寶生如來は、能く貧乏を除き、天の宮殿・天の飲食・天の衣服・天の音樂を施して、悉く皆圓滿せしめ玉ふ。四には西方の無量壽如來は、能く行者に三昧の大樂を與へ玉ふ。譬へば、十方の虛空の無量無盡な

あるから、之を大日如來(Mahā-vairocana-tathāgata)に望むるときは大日を以て自性輪身(Svabhāva-cakra-kāya)とし、金剛薩埵を以て正法輪身(Saddharma-cakra-kāya)とし、降三世を以て敎令印身(Ādeśanā-cakra-kāya)とす。故に薩埵の正法輪身を大日の自性輪身に歸すると、降三世は大日の忿怒身となる。

【四三】無等等寂靜法界。大日法身の實相の智體を云ふ。

【四四】復た次に。以下は金剛縛卽ち降三世(Trailokya-vijaya)の印を結んで、三身並に三密の堅固常住なることを觀ずべきを明す。

【四五】Oṁ sarva-tathāgata bhiṣaṁ rgja vajra tiṣṭha.

【四六】復た次に。以下は圓滿印卽ち閼伽(Argha)の印を結んで、我が身金剛の如しと觀ずべきことを明す。

【四七】Oṁ vajrodakaṭhaḥ.

【四八】復た次に瑜伽行者。以下は大日尊の印言を說く。

【四九】堅牢金剛拳。是は智拳印である。亦は菩提引導第一の智印と名づけ、亦は能滅無明黑闇の印と名づく。

【五〇】唵・吽・惹・纈・佐此の五字は全く守護經卷第二と同じく、胎金交入の五佛の種子(Bīja)である。

【五一】第一に菩提印。以下は

[四八]復た次に瑜伽行者、毘盧遮那の三昧に入り、端身正坐して動搖せしむること勿れ。舌を以て上の齶を拄へ、心を鼻端に繋けて、自ら想へ。頂に五寶の天冠ありて、天冠の中に五の化佛いまし、結跏趺坐し玉ふと。此の觀を作し已りて、即ち堅牢金剛拳の印を結べ。先づ左右の大拇指を以て、各〻左右の手の掌の內に入れ、又左右の餘の四指を以て、堅く指を握りて拳に作れ、即ち是れ[四九]堅牢金剛拳の印なり。次に左の頭指を竪立して、其の左の拳の背を當心の上に安じ、其の掌の面を轉じて左邊に向け、即ち右の拳の小指を以て、左の拳の頭指の一節に握り著けよ。又右の拳の頭指の頭を以て、右の拳の拇指の一節に拄へ著けて、亦心前に安ぜよ。是を菩提引導第一の智印と名づけ、亦、能滅無明黑闇の印と名づく。此の印の加持に縁りて、諸佛は行者の與に、無上菩提最勝決定の記を授け玉ふ。即ち是れ毘盧遮那如來の大妙智印なり。瑜伽行者、此の印を結び已りて、心を運じて想を作せ。一切衆生同じく此の印を結ばゞ、十方世界に三惡道八難の苦果なく、悉く皆第一義の樂を受用すと。眞言を持して曰く、

[五〇]唵一　吽二　惹三大聲　弱上四　佐五

復た次に瑜伽行者、此の眞言を持して、一一に五字の色相を觀察せよ。

[五一]第一に菩提印を結び、毘盧遮那如來の三昧に入りて、當に唵字の色と、及び我が身と十方の世界と、悉く皆白色なりと觀ずべし。若し瑜伽行者、此の觀門を修するの時は、自身と及與び一切衆生との、所有る無明煩惱惡業、自然に消滅して、行者及び一切衆生、速に成佛を得るが故に。

第二に[五二]破魔の印を結べ。右の手は五指を舒べて以て地を按じ、左の手の五指を以て衣の角を執持して、東方不動如來の三昧に入り、當に吽字の色と、及び我が身と、盡東方界及以び九方の無量の世界の諸佛菩薩と、一切衆生と、山川草木と、咸く皆靑色なりと觀ずべし。右の手の掌の面を以て、用て地を按ぜよ。此の印能く諸魔鬼神一切の煩惱をして、悉く皆動ぜざらしむ。是を能滅毘

機は、此の觀に依つて入密して、眞言の初地に證入し、直往の正機は、從顯入密の機を引接する方便に供へる爲に之を行ず。

【三〇】Oṁ yatiā sarva-tathāgata tathī Lūṅ.

【三一】三眞實。三密（Triguhya）のこと。

【三二】三身。法身（Dharma-kāya）報身（Sambhoga-kāya）・應身（Nirmāṇa-kāya）。

【三三】復た次に。以下は報身觀並に眞言である。

【三四】Oṁ svabhāva-śuddha haṁ.

【三五】復た次に。以下は化身觀並に眞言である。

【三六】Oṁ sarva-samohūṁ.

【三七】覩史多天。卷上〔三一〕參照。

【三八】六根。眼根（Cakṣurindriya）・耳根（Śrotrendriya）・鼻根（Ghrāṇendriya）・舌根（Jihvendriya）・意根（Mana-indriya）。

【三九】四種の魔軍。煩惱魔・蘊魔・死魔・自在天魔、

【四〇】忉利天宮、卷上〔九〕參照。

【四一】魔醯首羅天。卷上〔一七〕參照。

【四二】金剛怒菩薩。降三世（Trailokya-vijaya）は金剛薩埵（Vajra-sattva）の忿怒身で

曼陀羅を變化し、或は教化し已畢りて、[四三]無等等寂靜法界に入ると。瑜伽行者も亦復た是の如く、自身を觀ずべし。是の想を作し已りて此の眞言を持せよ。

[四四]復た次に瑜伽行者、金剛縛の印を結びて、當に此の想を作すべし。譬へば十方世界の虛空の無盡なるが如く、我れ三身及び三眞實を觀ずるに、堅固常住なることも亦復た是の如し。一切衆生を利益し安樂せんが爲の故に、日夜に常に是く如くの妙觀を作せよ。是の觀を作し已りて、眞言を持して曰く、

[四五]唵一　薩嚩嚩二合夫二　怛他引誐多引三　毘薩儞二合滿怛盧二合陀四　嚩日囉二合五　底瑟吒二合六

[四六]復た次に瑜伽行者、圓滿印を結べ。掌を仰けて、右手の大拇指を以て小指の上を押し、餘の三指を竪立せよ。掌を以て水を盛り、加持すること七遍し、先づ一分を以て頂上に洒ぎ、次に一分を以て之を飲み、後に一分を以て四方に散ぜよ。散じ已りて、當に是の想を作すべし。我が身堅固なること猶し金剛の如し、一切衆生も亦長壽を獲と。若し此の印眞言を以て水を加持して、一切供養等の物に灑がば、悉く吉祥最勝の淸淨を得、毘那夜迦諸の惡鬼神、汚穢すること能はず、亦便を得ず。其の眞言に曰く、

[四七]唵一　縛去日嚕二合引二　駄重聲迦吒反舌呼三

瑜伽行者、是の如く是の如く、日夜に觀察せば、何の利益をか得るや。謂く是の如く是の如くの觀察に依りて、速疾に一切諸佛の祕密の境界に入ることを得。若し瑜伽行者、此の觀を修する時は、諸佛菩薩常に衞護を加へ、心に諸の願あらば、皆圓滿することを得。諸佛菩薩來り就き、前の如く彈指して告げて言く、善い哉善い哉、善男子・善女人・勤めて功力を加へて此の法門を修せば、一切世間の最上勝果は、求めざるに自ら得、當來世に於て速に菩提を證すべしと。

觀とは、漸く自心の三昧耶身を廣めて、法界に周遍せりと觀じ、息をして法界に遍遍せしむるを云ひ、斂金剛の觀とは、漸く之を斂めて、自身の方寸に收むるを云ふ。是れ卽ち入我々入の觀である。

【三六】 Oṃ tiṣṭha-vajra.

【三七】 如金剛の眞言。證金剛身の眞言である。證金剛身とは、行者の自身卽ち本尊の三昧耶身と成ると觀ずる位である。心と身とは本來不二である。故に第三心の位に、自心五股金剛杵等の三昧耶と成れば、自ら此の身も亦三昧耶身と成る。今は此の旨を示すもので、自身卽ち金剛薩埵(Vajra-sattva)なりと觀じ顯はすのである。

【三八】 Oṃ vajr-ātmaka hūṃ.

【三九】 五方の諸佛菩薩以下。第五佛身圓滿の契明を示す。また法身(Dharmakāya)の契明と名づく。故に文に三世諸佛に同ずる眞言と云ふ。佛身圓滿とは、自巳の五股金剛の三昧耶身變じて、相好具足の本尊の羯磨身(Karmakāya)と成ると觀ずる位である、行者自身本尊の羯磨身と成。から、諸佛加持し圍繞して曼荼羅(Maṇḍala)を成じ、不二平等の義を示す。從顯入密の正

[三三]唵一　婆縛引二合　娑去縛去三　戍度四憾去五

[三四]爾時に菩薩、前に依りて之を觀じて、白して言さく、我れ今、已に見る。佛言く、云何んが之を見る。答へて言く、法と非法と本性清淨なること、譬へば蓮華の泥中に生ずと雖も、而も塵に染せられざるが如し。我れ今此れを觀ずれば、卽ち是れ報身なり。彼の菩薩の報身觀を作せし如く、瑜伽行者も亦復た是の如し。安心端坐して金剛縛の印を結び、當に此の想を作すべし。法と非法と本來清淨なること、猶し蓮華の泥中に生ずと雖も、塵の染すること能はざるが如し。諸佛の報身、及び我が報身も亦復た是の如し。衣服・飮食・諸天の音樂を受用するに似たりと雖も、心染著せずと。是の想を作し已りて、其の眞言を習へ。

[三五]復た次に瑜伽行者、化身觀を作せよ。諸の化佛の菩薩に告げて言ふが如く、善男子、化身の眞言あり。曰く、

[三六]唵一　薩嚕縛二合二　婆讃引三　吽四

爾時に菩薩、前に依りて之を觀じて、諸佛に白して言さく、我れ今、已に見る。佛言く、云何んが之を見る。答へて言く、種種の相狀あて人聖道を具せり。或は一一の衆生の爲に、各〻身を變化し、或は一切有情各〻一佛と成ると觀ず、我れ今此れを觀ずるに卽ち是れ化身なり。爾時に菩薩、是の眞言を聞き、時に應じて三身の妙果を證獲す。彼の菩薩の化身觀を作すが如く、瑜伽行者も亦復た是の如し。端坐し正念にして、金剛縛の印を結びて、是の想を作せ。我れ今、自らに種種の名號と種種の色相と有り、或は[三七]覩史多天より降りて母胎に入り、或は壽命成就して[三八]六根圓滿し、或は日月の出現するが如く、或は菩提樹下に坐し、或は[三九]四種の魔軍を降し、或は梵天王の請を受けて、法輪を轉じて諸の衆生を度し、或時は論議して諸の外道を摧き、或は[四〇]忉利天宮より三道の寶階を下し、或は[四一]魔醯首羅天及び諸の惡鬼神を降伏せんが爲の故に、[四二]金剛怒菩薩の勝於三界大

【三二】淨識。阿賴耶識の別名で、無垢識（Amala-vijñāna. 阿摩羅識）と稱するのが常である。第八阿賴耶が、我見の永く起らざる位に至ると、賴耶の名を捨てゝ、別に清淨の稱を受く。卽ち阿摩羅識である。されば體性は最極清淨で、諸の無漏法の依止する所であるから、此の名は唯だ如來地にのみ在りとす。

【三三】六度。六波羅蜜（Pāramitā）のこと。布施（Dāna）・持戒（Śīla）忍辱（Kṣānti）・精進（Vīrya）・禪定（Dhyāna）・智慧（Prajñā）の六である。菩薩はこれらの六法を修し、生死海を越えて涅槃（Nirvāṇa）の彼岸に到るから、波羅蜜をまた到彼岸とも譯す。

【三四】客塵。煩惱（Kleśa）を形容したもの。煩惱は心性固有のものでなく、理に迷つて起るものであるから之を客と名づけ、而も心性を汚す邊について塵と云ふ。

【三五】堅固菩提心の眞言。成金剛心の眞言である。成金剛心とは、前の修菩提心の位に觀ずる阿字、轉じて五股杵（Vajra）等の本尊の三昧耶身（Samaya-kāya）と成ると觀じ、自心卽ち五股金剛等と成ると觀ずるを云ふ。此の位に廣斂の二觀がある。廣金剛の

伽行者も亦復た是の如し。目を閉ぢ端坐して是の想を作さく、我が身は即ち是れ金剛薩埵なり、頂に寶冠あり、寶冠の中に五方の化佛結跏趺坐し玉へり。右の手に金剛杵を把りて、右の臆の下に當つ、若し此の杵を擧ぐれば、即ち能く一切衆生、及び自身の中の所有る一切の重障煩惱を摧破すと。此の觀を作し已りて、金剛縛の印を結びて此の眞言を持せよ。

復た次に瑜伽行者、次に[二九]五方の諸佛菩薩及び其の眷屬、自身の中に入ると觀ぜよ。諸の化佛が菩薩に告げて言ふ如く、善男子、三世の諸佛に同ずる眞言あり。曰く、

[三〇]唵上野他引二　薩嚩二合去三　怛他引蘗多四　婆怛二合他五　吽去大聲六

爾時に菩薩、前に依りて之を觀じて、白して言さく、已に見る。云何んが之を見る。答へて言く、三世の諸佛及び其の眷屬、微塵の菩薩、無數の天龍、十方界より我が身に入出し玉ふこと、五方の色の如く。靑・黃・赤・白及以び雜色なり。是の五方の佛、我が身中に入り、[二八]三眞實を具して總て我が體と成る。諸佛の所證は唯だ此の法身なり。彼の菩薩の諸佛等の身中に入り玉ふことを觀ずるが如く、瑜伽行者も亦復た是の如し。目を閉ぢて端坐し、金剛縛の印を結びて、是の想を作せ。五方の諸佛・一切の菩薩、各各に自ら無數の眷屬、及び天の音樂を將ゐて、我が身中に入り玉ふ。其の諸佛の身、第一は白色、第二は靑色、第三は金色、第四は紅色、第五は雜色なりと。又此の想を作せ。[三一]三身の妙果並に三眞實、我が身の中に皆圓滿なることを得と。是の如く念念に常に觀せよ。此の觀を作し已りて、彼の眞言を習へ。復た是の念を作さく、斯の如くの觀門は是れ佛の境界なり、我れ今始めて心の淸淨なることを覺知す、身を見れば佛と作りぬ、衆相圓滿して菩提を成ずることを得、其の定中に於て遍く諸佛を禮し奉る、願くば加護を垂れて法身を證せしめ玉へと。

[三二]復た次に瑜伽行者、報身觀を作せよ。諸の化佛の菩薩に告げて言ふが如く、善男子、報身の眞言あり。曰く、

して大乘の菩薩は、初めから福智の二業を兼修するから、三大阿僧祇劫の外に別に百劫の修福を要しない。

【二八】　大菩提心の眞言。修菩提心の眞言である。修菩提心とは、體現する實際的信仰の修養に名づけ、息は淸淨にして滿月の如く、諸の煩惱(Kleśa)の垢染、遍計所執（Parikalpita)等を離れたりと觀じて(離垢淨)、本有の菩提心を修顯するを云ふ。即ち出纏修生菩提心である。

【二九】　Oṁ bodhicittam utpādayāmi.

【三〇】　種子(Bījn)。有爲法の正因で、四緣中の因緣の實體である。阿賴耶識（Ālaya vijñāna）中に在つて一切有漏(Sāsrāva)・無漏（Anāsrāva）の有爲法を生ずる功能を指す。

【三一】　阿賴耶（Ālaya)。八識の中の第八。藏又は無沒と譯す。藏識と名づけるのは、藏に能藏（この心識の中に、萬有の種子を貯藏す）と、所藏(前七識の爲に萬有の種子を薰じ藏めらる)と、執藏(第七識の爲に我なりと執せらる）との三義があるからである。抑、阿賴耶識は有情根本の心識で、一切萬有の種子を含藏し、外緣に應じてこれを展開し、以て依正二報を緣起す。

が與めに本たり　[二三]六度熏習するが故に　彼の心大心と爲る　藏識は本より染に非ず
清淨にして瑕穢なし　無始より福智を修すること　猶し淨滿月の如し　體も無く亦用
も無し　即ち月にして亦月にも非ず　福智を具するに由るが故に　滿月自心の如し
菩薩は心歡喜して　復た諸佛に白して言さく　我れ已に心相を見るに　清淨にして月
輪の如し　諸の煩惱の垢　能執所執等を離れたり　諸佛咸く告げて言く　汝が心は本
より是の如くなれども　[二四]客塵の爲に翳されて　菩提心を悟らず　汝、淨月輪を觀じて
念念に觀照し　能く智をして明顯ならしめて　菩提心を悟ることを得べし

復た次に瑜伽行者、金剛縛の印を結びて、前に依りて觀察し、并に眞言を習せよ。前の化佛が菩薩に告げて言ふ如く、善男子、復た[二五]堅固菩提心の眞言あり。曰く、

[二六] 唵一　賦瑟陀二合二　轉日囉二合三

爾時に菩薩、前に依りて觀照して、佛に白して言さく、我れ今、已に見る。佛言く、云何なるをか見たるや。菩薩答へて言く、滿月の中の五股金剛を見るに、一切の煩惱を悉く皆摧碎すること、黃金を銷すが如く、其の色煥然たり。此の如くの智慧は最も第一たり。即ち是れ諸佛の不生不滅の金剛の身なり。彼の菩薩の月輪を觀ずるが如く、瑜伽行者も亦復た是の如し。

復た次に瑜伽行者、自ら我が身は金剛薩埵なりと觀じ、并に復た印を結んで眞言を持念せよ。（金剛薩埵は即ち是れ毘盧遮那如來の變化身なり。）諸の化佛が菩薩に告げて言ふ如く、善男子、復た[二七]如金剛の眞言あり。曰く、

[二八] 唵一　轉去日囉二合二　陀摩二合虞三　吽去大聲四

爾時に菩薩、前に依りて之を觀じて、諸佛に白して言さく、我れ今、已に見る。佛言く、云何んが已に見る。白して言さく、我が身已に金剛薩埵と成りぬ。頭上の寶冠に五の化佛あり、手に金剛を執り以て法主と爲りて、一切衆生を利益し安樂し玉ふと。彼の菩薩の金剛薩埵を觀ずるが如く、瑜

即ち一切法皆空の觀で、金剛頂經の謂ゆる阿娑頗那伽三摩地觀（Āsvāsa-apānaka-samādhi-bhāvanā? 無識心三昧）に當り、眞如實際の空理に住して、自ら成佛せりと思ふを云ふ。諸佛如來は、未だ金剛喩三昧と一切智々とを證知することなく、只管無相の空理に保著して自ら足れりとなす彼の行者を彈指警覺し、かくて五相成身の觀を授けて入證せしめ給ふ。

【三七】　三阿僧祇一百劫。阿僧祇（Asaṃkhya 又は Asaṃkhyeya）は無數或は無央數と譯す。而して三阿僧祇劫（Asaṃkhyeya-kalpa）は菩薩成佛の年時を云ふ。菩薩の階位に五十位あつて之を三期の無數の長時に區別す。即ち十信・十住・十行・十廻向の四十位を第一阿僧祇劫とし、初地より第七地までを第二阿僧祇劫とし、八地より十地までを第三阿僧祇劫とす。

次に劫は劫簸（Kalpa）の略。大時分・分別時節と譯す。百劫とは、小乘の菩薩は三大阿僧祇劫の行を終へて等覺の位に至り、此の位に於てなほ百大劫の間、佛果に至るまで、三十二相を感ずべき福業を種うるを云ふ。されば菩薩修行の年時を三祇百大劫と云ふ。而

示し玉へ　諸佛同音に告げ玉はく　汝應に自心を觀ずべし　既に是の語を聞き已りて教の如くに觀察し　久しく住して諦かに思惟するに　[一六]自心の相を見ず　復た佛足を禮すと想ふて　白して言さく最勝尊　我れ自心を見ず　此の心を以て何なる相とかせん　諸佛咸く告請し玉はく　心相は測量し難し　汝に心眞言を授く　理の如く諦かに觀察せよ。

復た次に瑜伽行者、金剛縛の印を結びて、菩提心の相狀の觀を作し、幷に眞言を習ふべし。是の諸の化佛、菩薩に告げて言く、善男子、應に無上大菩提心を發すべし。菩薩問ふて言く、云何なるをか名づけて大菩提心と爲すや。諸佛告げて言く、無量の智慧は猶し微塵の如し、[一七]三阿僧祇一百劫の中に、精進修習して成就する所にして、一切煩惱の過失を遠離し、福智を成就すること猶し虛空の如し。能く是の如くの最勝の妙果を生ず。卽ち是れ無上大菩提心なり。譬へば人身の心を第一と爲るが如く、大菩提心も亦復た是の如し。三千界の中に最も第一たり。何の義を以ての故に名づけて第一と爲るや。謂く、一切の佛及び諸の菩薩は、菩提心より出生することを得。菩薩問ふて言く、大菩提心は其の相云何ん。諸佛告げて言く、譬へば五十由旬の圓滿の月輪の清涼皎潔にして諸の雲翳無きが如し。當に知るべし、此れは是れ菩提心の相なり。是の語を作し已りて、無量の諸佛異口同音に、[一八]大菩提心の眞言を說きて曰く、

[一九]唵一　讃尼上二　室多三　牟賦婆二合　駄四　野　弭五

彼の菩薩の菩提心を觀ずるが如く、瑜伽行者も亦復た是の如くすべし。

爾時に如來、偈を說きて曰く、

一念に淨心を見るに　圓滿なること秋の月の如し　復た是の思惟を作さく　是の心をば何なる物とかせん　煩惱習の[二〇]種子　善惡皆心に由れり　心を[二一]阿賴耶と爲す　[二二]淨識

散空・性空・自相空・諸法空・不可得空・無法空・有法空・無法有法空。〔智度論二十・三十一・四十六、大乘義章四、法界次第下〕。

【一二】我我所。我とは自身を云ひ、我所とは身外の事物を云ふ。是れ我が所有であるからである。

【一三】補特伽羅(Pudgala)。衆數者・人・衆生・數取趣などと譯す。數とは有情の惑を起し業を造り、能く五趣(地獄・餓鬼・畜生・人・天)を取つて輪廻する義である。

【一四】結加趺坐(N. agilat paryaṅkam abhujya)。圓滿安坐の義で、身體疲倦せず、精神また安穩、魔王も佛弟子のこれを行ふを見ては怖畏すと云ふ。足の表を趺と云ひ、裏を跏と稱す。右足を以て左脛上に安じ、左足を以て右脛上に安ずる坐相を全跏坐・如來坐・吉祥坐と云ひ、右足を以て左脛上に安ずるのみなるを半跏坐・半坐・菩薩坐と云ふ。

【一五】行者月輪を想ふて。行者が己の質多心(Citta. 慮知心)を圓明の月輪と觀ずるを云ふ。其の徑僅か一肘量(二尺・一尺五寸)である。月輪の圓明は本有の菩提心の自性清淨を標す。

【一六】自心の相を見ず。これ

しと。恒沙の諸佛異口同音に、[四]法身求心眞言を說きて曰く、

[五]唵一　室多二　鉢羅二合合底丁以反三　駄爾二合四　迦嚕五　弭六

爾時に菩薩、是の法を聞き已りて、金剛縛の印を結ぶ。二手相叉へて拳に作り、之を安じて心に當に一心に眞言の義趣を觀察して諸佛に白して言さく、我れ是の法を得たりと。時に佛、問ふて曰く、何等の法をか得たるやと。菩薩答へて言く、心は是れ菩提なり。我れ是の法を得たりと。諸佛告げて言く、更に復た微細に觀察し分別せよ。菩薩白して言さく、[六]心・意・識の法は、諸の煩惱に入るや、共に相和合して、分別すべからず。然も諸法の中に、[七]心心所を求むるに、悉く不可得なり。[八]五蘊の法の中に求むるに不可得なり。[九]十二處の中にも亦不可得なり。[一〇]十八界の中にも亦不可得なり。乃至[一一]十八空の中にも亦不可得なり。蘊・處・界の法の一一に分別するに、一切法の體は[一二]我我所なし。[一三]補特伽羅も我我所なし。心心所の法は本來無生なり。亦滅處もなし。諸の世間の一切の心の中に於ても、亦見るべからず。內にも無く外にも無く、中間にも亦無し。過去の心も不可得なり。現在の心も不可得なり。未來の心も不可得なり。猶し幻化の如くにして、差別あること無し。我が今自ら證すること皆悉く是の如し。世尊よ、我が解するが如くんば、心心所の法は本來空寂なり。何等の法に依つてか佛道を成ぜんことを求めんや。諸佛告げて言く。心心所法の和合するの時、自ら苦樂を覺るを、自ら心を悟るㇳ名づく。唯だ自ら能く覺りて他の悟らざる所なり。此の心に依止して菩提心を立つと。

復た次に瑜伽行者、彼の菩薩の如く、心を觀察し已り。[一四]結加趺坐して、金剛縛の印を作り、之を當心に安じ、兩目を閉ぢて、諦かに自心を觀じ、口に求心の眞言を習ひ、意に祕密の義を想へ。爾時に世尊、偈を說きて言く、

[一五]行者月輪を想ふて　定中に普く足を禮し奉る　唯だ願くば諸の如來　我れに所行の處を

【四】法身求心眞言。通達菩提心の眞言である。通達菩提心とは、本有の佛性に對する自覺に名づけたもので、初心の行者、阿闍梨(Ācarya)の開示を蒙つて、始めて性德の菩提心(Bodhi-citta)に通入し、心月輪の觀法を修する位である。卽ち自心は輕霧の中に住する月輪の如しと觀ず。輕霧は無明(Avidyā)に喩へたもので、在纏本有を顯す。

【五】Oṃ citta prativedhaṃ karomi.

【六】心・意・識。心は集起の義、意は思量の義、識は了別の義。唯識論には其の名は互に通ずるを許すも、其の實體は各別であるとして、次第の如く第八識と第七識と餘の六識とに配す。而して倶舍論はこれを一體の異名となす。

【七】心心所。心とは身識(Kāyavijñāna)等の心王を云ひ、心所とは心王に附隨相應する精神活動を云ふ。

【八】五蘊。色・受・想・行・識。

【九】十二處。六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)・六境(色・聲・香・味・觸・法)。

【一〇】十八界。六根・六境・六識(眼・耳・鼻・舌・身・意)。

【一一】十八空。內空・外空・內外空・空空・大空・第一義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無始空・

纔に此の眞言を持すれば、一切の諸佛・菩薩・聖衆降臨し玉ふ。

復た次に瑜伽行者、〔二二〕集會の印を作せ。先づ兩手を以て金剛拳を結び、次に左の拳を以て右の膝の上に安じ、次に右の拳を以て、臆の上にて臂を交へ心に束ねて、即ち是の想を作せ。一切の如來・菩薩・聖衆、皆悉く集會し玉ふと。此の觀を作し已りて、眞言を持して曰く、

〔二三〕唵一 縛去 日羅二合 沙摩惹引三

此の眞言を持し已りて、即ち是の想を作せ。諸佛・菩薩既に集會し玉ひ已れりと。歡喜の心を發し、兩臂を搖がさず、唯だ左右の拇指・頭指を以て三遍彈指せよ。爾時に如來偈を說きて言く、

〔二四〕定慧の二翼金剛拳にして、　臂を交へて心に束ねて精進の力を以て、　彈指して聲を發して法界に遍ず、　諦かに觀じて普く諸の如來を請じ奉る。と。

卷の中

金剛界大道場品之餘

〔一〕復た次に瑜伽行者、是の如くの想を作せ。諸佛菩薩、今當に降臨して、威德大神通力を示現し玉ふべしと。此の想を作し已りて、復た應に釋迦如來の成道の法を觀察すべし。釋迦菩薩の如きは、菩提樹に近きこと〔二〕由旬の內にして、諸の苦行を修し、六年を滿足して、佛道を成ぜんことを願ひ、菩提樹に趣き、金剛座に坐して〔三〕金剛定に入り玉ふ。爾時に毘盧遮那如來、是を觀見し已りて、菩提樹の金剛道場に至り、無數の化佛を示現し、虛空に遍滿し玉へること、猶し微塵の如くにして、各共に同聲に菩薩に告げて言く、善男子、云何んぞ成佛の法を求めざるや。菩薩聞き已りて虔恭し合掌して、佛に白して言さく、我れ今、成佛の法を知らず。唯だ願くは慈悲をもて菩提の路を示し玉へ。時に諸の化佛、菩薩に告げて言く。善男子、心は是れ菩提なり。當に自心を求むべ

〔一九〕 Hūṁ.

〔二〇〕 金剛鉤の印。四攝の中の鉤の印である。

〔二一〕 Oṁ vajrāṅkuśa jaḥ.

〔二二〕 集會の印。金剛王の印である。後の二印言は倶に召請に用ふ。

〔二三〕 Oṁ vajra samaja.

〔二四〕 定慧の二翼。定翼は左手、慧翼は右手。

〔一〕 復た次に。以下は五相成身觀を明す。

〔二〕 由旬。由旬那(Yojana)の略。距離を計量する名稱で、帝王一日行軍の里程である。或は四十里（唐の里法六町を一里となす）と云ひ、或は三十里、或は十六里と云ふ。異說多く定め難い。

〔三〕 金剛定。菩薩の最後位に最も微細の煩惱(Kleśa)を斷ずる禪定(Dhyāna)の名。其の智用の堅利なるを金剛(Vajra)に喩ふ。

指すること一遍せよ。是の如くすること三たびに至れ。時に行者、眞言を持し已りて想を作せ。我が身及び諸の衆生の身中の所有る一切の煩惱、悉く皆除滅し、内外淸淨なること、猶し虛空の如くにして、諸佛菩薩の住處と爲るに堪へたり。一切の毘那夜迦・諸鬼神等、悉く皆遠離し、[13]四攝・[14]十善・[15]十波羅蜜のごとき一切の善業、皆隨ひて圓滿すること、猶し衆流の大海に入るが如し。是の想を作し已りて、

復た次に瑜伽行者、將に道場に入らんとするには、雙膝を地に著け、合掌し禮拜して、[16]覺起の印を結べ。先づ金剛拳を結び、次に左右の小指を以て更互に相鉤せよ、右を以て左を鉤す、次に左右の頭指を舒べ、其の頭相拄へて、是の想を作せ。如今毘盧遮那如來、十方世界の微塵沙數の諸佛菩薩及び賢聖衆に勅して、一切の三昧說法等の事を止め、道場に來集して行者を觀察し、同共に攝受して衆生を利益せしめ玉ふと。此の觀を作し已りて、印を仰ぎて外に向け、眞言を持して曰く、

[17]唵一　縛去　日盧二二合　底　瑟吒三二合

復た次に瑜伽行者、[18]金剛拳の印を結べ。先づ左の拳を以て心の上に安じ、次に右の拳を以て外邊に出し、次に左の拳の頭指を舒べ、又右の拳の頭指を舒べて外に向けよ。眞言を持して曰く、

[19]吽

此の眞言を持すること一遍して、卽ち此の想を作せ。我が身中、幷に道場内の所有る毘那夜迦・一切の惡鬼神等を逐ふと。行者、此の眞言を持する時、右の拳の頭指を外に向けて搖動せよ。是れ驅逐の相なり。卽ち遣出魔と名づくる等已りて、

復た次に瑜伽行者、[20]金剛鉤の印を結べ。先づ金剛縛の印を作り、次に右手の頭指を舒べて少しく屈せよ。鉤印を作して、諸佛・菩薩・一切の聖衆を請ずと想へ。眞言を持して曰く、

[21]唵一　縛去　日羅二二合　虞遮惹三入聲

【一三】　四攝。菩薩は衆生を化導せんと欲するに、必ず四法を以て攝受し、我に依附して後、導くに大乘正道を以てす。其の四法とは、一、布施(Dāna)、二、愛語(Priyavāditā)、三、利行(Arthacaryā)、四、同事(Samānārthatā)を云ふ。

【一四】　十善。不殺生・不偸盜・不邪婬・不妄語・不兩舌・不惡口・不倚語・不貪欲・不瞋恚・不邪見。

【一五】　十波羅蜜(Daśa-pāramitā)。菩薩十地の行法で、十勝行と稱す。施(Dāna)・戒(Śīla)・忍(Kṣānti)・精進(Virya)・靜慮(Dhyāna)・般若(Prajñā)以上六波羅蜜と云ひ、此の中の第六般若波羅蜜を開いて四波羅蜜となし、合せて十波羅蜜を成す。後の四とは、方便(Upāya)・願(Praṇidhāna)・力(Bala)・智(Jñāna)を云ふ。

【一六】　覺起の印。常の金剛起の印である。廣澤では警覺と云ふ。諸佛を警覺して定より起たしむる印契(Mudrā)で、諸佛の出定護念を請ふ爲に之を結ぶ。

【一七】　Oṁ vajra tiṣṭha.

【一八】　金剛拳の印。また遣出魔の印と名づく。此の印は卽ち降三世の辟除結界の印である。

事をか作さん。[六]瑜伽行者、最初に道場に入らんとする時は、先づ[七]滅罪の印を結べ。左右の大母指・頭指を以て更互に相叉へ、左右の中指を以て直く竪て、次に二中指の頭を以て相屈して、更互に拄へ著け、其の左右の無名指・小指は、大拇指・頭指の如く更互に相叉へて、即ち眞言を持せよ。此の如きを名づけて三業の祕密眞言と爲す。曰く、

[八]唵一　薩縛去二合二　婆去　縛三　輸陀四大聲　薩嚕縛去二合五　那　魯磨二合大聲六　薩縛去二合七
婆去　縛八　戍　度九　吽十大聲

一遍を持し已りて、是の如くの想を作せ。一切諸法は本性清淨なり、我れ及び衆生も亦本性清淨なり。是の想を作し已りて、

復た次に瑜伽行者、金剛合掌の印を結べ。先づ二の掌を合せ、次に十指の頭を更互に相叉へ、右を以て左を押せよ。即ち是れ金剛合掌の印なり。一切の印法は皆此れより生ず。眞言を持して曰く、

[九]唵一　縛日囉去二合二　惹　哩三

眞言を持し已りて、身の五處を印ぜよ。一には頂上、二には右肩の上、三には左肩の上、四には心の上、五には喉の上なり。時に行者、此の金剛合掌の印を以て、五處を加持せよ。即時に身上に金剛の甲を被り、行者及び弟子、身心堅固にして悉く安穩なることを得、一切の惡鬼・[一〇]毘那夜迦、其の便を得ず。

復た次に瑜伽行者、金剛縛の印を結べ。其の前の金剛合掌の印を解かずして、左右の十指を更互に相握りて、右の五指を以て堅く左の手を握り、左の五指を以て堅く右の手を握りて、縛著の相の如くせよ。眞言を持して曰く、

[一一]唵一　縛去　日囉二合二　曼陀三　怛喇吒三合反舌半音四

最後の三字、重ねて持すること三遍せよ。三字一遍を習する毎に、左右の中指を直く竪てゝ、[一二]彈

【六】瑜伽行者(Yogin)。眞言祕密の行法、即ち三密の妙行を修する行者を云ふ。
【七】滅罪の印。外縛して二中指を蓮葉の形に作る。
【八】Oṁ svabhāva śuddha sarvadharma svabhāva śuddho hūṁ.
【九】Oṁ vajrāñjali.
【一〇】毘那夜迦(Vināyaka)。常隨魔・障礙神と譯す。人身象鼻で、常に人に隨侍して障難を爲す惡鬼神である。
【一一】Oṁ vajra-bandha traṭ.
【一二】彈指。これに許諾と隨喜と警覺との三義がある。

金剛界大道場品第三

【一】爾時に金剛手菩薩摩訶薩、佛の威神を承けて、十方の無量無邊の塵數の世界の一切衆生を觀察すること、掌中の【二】阿摩勒果を觀るが如し。衆生の爲の故に、大悲心を生じて、卽ち座より起ち、偏に右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著けて、佛に白して言さく、世尊よ、一切世間の諸の有情類には、或は財寶に貪著するもの有り、或は飲食に貪著するもの有り、或は五欲に貪著し三寶を憎嫌するもの有り、或は歌舞を愛樂し情を恣にして遊戲するもの有り。是等の衆生は、未だ曾て眞實の妙法を見聞せずして、邪見外道の法の中に入りて、諸佛の梵行を修習せざれば、彼の諸の衆生は、廣く惡業を造りて地獄の因を作る。一切の餘法は救度すること能はずして、唯だ金剛界大曼陀羅無上の大法のみ有りて、善能く救護す。何を以ての故に、若し衆生有りて種種の罪を造らば、當に地獄・餓鬼・畜生、及び【三】八難處に墮すべし。唯だ此の法のみ有りて而も能く拔濟す。若し衆生有りて一切の最勝の安樂を希望せんには、唯だ此の祕密のみ善能く圓滿す。【四】復た衆生有りて正法を愛樂し、一切如來の【五】淨戒と三昧と智慧との最勝の悉地を願求せんには、此の祕密の法を方便の行と爲し、曾多の佛の所にて種種の行を修し、禪定・解脫等の果を求めよ。是の如くの衆生、此の曼陀羅に入るときは、卽便ち阿耨多羅三藐三菩提を證得し易し。何に況や世間の福樂果報をや。今、世尊、最勝の大慈悲心を發起して、斯等の事の爲に、今、當に陀羅尼の法を演說すべし。

爾時に佛薄伽梵、金剛手菩薩に告げて言く、善い哉善い哉金剛手、是の如く是の如し、汝が所說の如し。汝大悲を起して、未來世の一切衆生の爲に、如實の道を示せ。善男子、諦かに聽き諦かに聽け、善く思ひ之を念ぜよ。我れ今、汝が爲に、次第に廣く此の曼陀羅大道場の法を說かん。善男子、若し諸佛の境界の此の金剛界瑜伽大曼陀羅の法を修學すること有らん者は、最初第一に何等の

【一】以下は灌頂の義を明す中、先づ結緣灌頂である。

【二】阿摩勒果(Āmalaka)。餘甘子と譯す。印度藥果の名である。

【三】八難處。八難とは八箇の障難である。何れも惑業の然らしむるところであるから、その苦樂の報に異別あるべきも、みな佛を見、正法を聞くことを得ざる點は一である。一、地獄、二、餓鬼、三、畜生、四、鬱單越(Uttarakuru. 北倶盧洲)、五、長壽天、六、盲・聾・瘖・啞、七、世智辯聰、八、佛前佛後。

【四】復た衆生有りて。以下は正機の灌頂を明す。

【五】淨戒(Suddha-śila)。淸淨の戒行を云ふ。戒行とは如何なる戒も、身・口・意の三方面に於て、躬行實踐するを旨とするものであるから、然かいふ。

も、　生を利せんが爲の故に生身を現ず、　と。

爾時に普賢大菩薩、毘盧遮那如來の心中より出でて、諸佛の前に對して、月輪の中に坐し、右の手に金剛杵を執りて、掌の内に轉じ玉ふ。是の時に毘盧遮那如來、一切如來金剛不壞智大三摩耶三昧に入り玉ひ、是の三昧力に依りて、普賢菩薩の爲に諸佛の[九]戒・定・慧・解脱・解脱知見蘊の微妙の大法輪を以て、衆生を利益し、大方便力智大三摩耶を以て、一切の盡衆生界を救護し、一切の自在主を以て、一切の大安樂を深心に愛樂し、乃至、一切如來の[一〇]平等性智と、最勝の神通と、大乘の對法との、最勝の悉地を得せしむ。是の如く等の果は、是れ一切如來の悉地なり。[一一]金剛を普賢大菩薩の手に授與せんと欲するが爲の故に、一切如來の[一二]轉輪王の體を授與せんと欲するが爲の故に、一切如來の不可思議の佛の事業を授與せんと欲するが爲の故に、寶冠と白繒との[一三]灌頂を授與せんと欲するが爲の故に、毘盧遮那如來、自らの兩手を以て金剛印を授與し玉ふ。時に一切如來、名字灌頂を與へて金剛手と號す。

爾時に金剛手菩薩摩訶薩、此の金剛を得已りて、右の手に金剛杵を執り、掌中に轉じ、當に心に安置して、偈を說きて言く、

此れは是れ一切の諸の如來の、　最勝なる金剛の大悉地なり、　諸佛我れに授くるに兩手を以てし玉ふ。　無相に相を現ずるは生を利せんが爲なり。　と。

を解脱するを云ふ。即ち涅槃(Nirvāṇa)の德である。解脱知見蘊(Vimuktijñāna darśana skandha)とは、已が實に解脱したことを知るを云ふ。即ち後得智である。

【一〇】平等性智(Samatājñāna)。生佛一如・凡即是佛の妙諦を照見する智を云ふ。

【一一】金剛。金剛杵(Vajra. 五鈷杵)のこと。金剛を授與するのは、菩提(Bodhi. 覺知)の種子(Bīja)に、五智(Pañcajñāna)を加持する意である。

【一二】轉輪王(Cakravartirāja)。此の王身に三十二相を具し、位に即く時天より輪寶を感得し、其の輪寶の旋轉嚮導に依つて四方を降伏するから轉輪王と云ふ。増劫には人壽二萬歳以上に至れば出世し、減劫には人壽無量歳より八萬歳の時までに出世す。而して感得の輪寶に四別あるに隨つて、金輪王・銀輪王・銅輪王・鐵輪王の四種を成す。金輪王は四洲、銀輪王は東西南の三洲、銅輪王は東南の二洲、鐵輪王は南閻浮提の一洲を領す。

【一三】灌頂(Abhiṣeka)。往昔、印度國の諸王が、國事を太子に委するに際し、先づ寶瓶(Ratna-kalaśa)に四大海の灑水を入れ、父王この瓶を執つて、これを其の世子の頂に灌ぐ。眞言密教では、この古例を轉用して眞言行菩薩が、如來の五智を體得して、法王子となる盛儀を示すものとされてゐる。

揷入し、一切の佛法は此の經より出で、是の法を名づけて一切如來眞實境界大乘瑜伽微妙對法と爲す、此れは是れ一切如來の心、金剛眞言最勝祕密なりと。

爾時に諸佛の心より、是の法を出し已りて、卽ち是の時に薄伽梵普賢陀羅尼の此の祕密法、變じて無量無數の圓滿の月輪と成る。此の滿月輪は、能く衆生の大菩提心をして皆清淨なることを得せしむ。此等の無數の圓滿の月輪、一切如來の左右に在りて、此の月輪より、諸の如來の無量無數の大智金剛を現ず。此の大智金剛滿月より出でて、復た毘盧遮那如來の心中に入る。金剛薩埵の三昧の妙堅固力と、及び一切如來の大威德力とに依るが故に、無量無數の智慧金剛、合して一聚と成る。量虛空に等じて、大光鬘を現ず。是の如くの光鬘、卽ち變じて一切如來の妙身語意堅牢智性の五股金剛と成ることを得、諸佛の心より出でて、毘盧遮那如來の兩手の掌中に住す。此の金剛より、種種色の光・金剛の相貌ある無量無數の光明を出し、一切世界に遍滿して、平等無礙なり。此の金剛の光は復た口より出でゝ、十方界の微塵數等の一切如來の無礙の法身の遍法界海に現じ玉ふ。何の因緣を以てか法界に遍滿し玉ふとならば、謂く、諸の如來は平等慧と及び大神通とを得て、現に能く一切衆生を覺悟せしめて、無上大菩提心を發さしめ、善能く普賢の難思の種種の妙行を成就す。一切如來種性力に因りて、善能く親近して恭敬供養せり。大菩提樹に於て、能く一切の【六】惡魔波旬を滅して、大菩提を證し、自ら能く覺悟して能く無上の最妙法輪を轉じ、乃至、能く盡虛空界の一切衆生を護りて、能く一切の利益安樂を作す。一切如來善能く大智と神通との最勝の【七】悉地を成就せり。一切如來善能く種種の神通を示現せり。普賢三昧の體と、及び金剛三昧の微妙の堅牢和合の力に依るが故に、【八】普賢大菩薩の身を出現す。

爾時に普賢菩薩、毘盧遮那如來の心中に立ちて、偈を說きて言く、

善い哉希有なり我れ普賢、　妙體堅固にして眞實の性なり。　堅固力に由りて形相無けれど

【六】　惡魔波旬。波旬は梵音 Pāpiyas 或は Pāpiman 巴利音 Pāpimā の轉訛である。譯して惡・惡愛・障礙善と云ふ。魔王の名。欲界天の頂に住し、大象に乘り百臂を有し、種種奇異の相を現じ、常にその子女を人界に下して、惡人を煽動し聖者を惱亂す。釋尊が菩提樹下で修道の際、障礙を加へた者は、卽ち此の魔王である。

【七】　悉地成就。悉地(Siddhi)は成就と譯す。祕法を修して成就するの意。而して悉地成就と云ふ場合には、悉地は體言で、成就は用言である。

【八】　普賢大菩薩の身を出現す。大日から金剛薩埵(Vajrasattva)を出現する相である。

【九】　戒・定・慧等。無等等五蘊又は無漏五蘊と名づく。謂ゆる五分法身と云ふに同じ。一、戒蘊(Śīlaskandha)とは、如來の身・口・意の三業、一切の過非を離るゝを云ふ。二、定蘊(Samādhiskandha)とは、如來の眞心寂靜にして、一切の妄念を離るゝを云ふ。三、慧蘊(Prajñāskandha)とは、如來の眞智圓明にして、法性を觀達するを云ふ。卽ち根本智(Mūla-jñāna)である。四、解脫蘊(Vimuktiskandha)とは、如來の心身、一切の繫縛

【四三】歡喜地(Pramuditā)以下。法雲地(Dharmamegha)に至るまで、順次に十地を列舉す。菩薩はこの十地に十波羅蜜(Pāramitā)の行を修し、各一品の無明(Avidyā)を斷じて、一分の中道を證す。【四四】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttra-samyak-sambud-dha)。無上正等正覺と譯す。

出生品第二 [一]

爾時に佛薄伽梵大毘盧遮那如來、普賢の心に住し、頂上の寶冠に難思の事を現じ玉ひ、一切の化佛其の中に影現し玉ふ。是の諸の如來は大觀自在にして、大法智波羅蜜多を得、一切如來の[二]毘須羯磨は不空無礙にして、能所作の事に皆善巧を得、一切の心願滿足せざる無し。大神力に依りて、一切の佛體を自心の中に安じて、法身を莊嚴す。

是の時に如來、一切諸佛普賢菩薩の[三]三摩耶より出生せる金剛薩埵の廣大威德三昧に入り玉ひ、定より起ち已りて、自心の中より祕密眞言を出生して曰く、

[四]唵一　縛去日囉二合二　薩怛婆二合三

爾時に毘盧遮那如來、此の諸佛境界眞實瑜伽祕密心地の法を說き玉ふ。時に十方の無量無邊の諸佛の刹土は、[五]六種に震動し、妙高山の頂の三十三天の帝釋宮の中の大摩尼寶最勝樓閣も、亦復た震動して、天より曼陀羅花・摩訶曼陀羅花・曼殊沙花・摩訶曼殊沙花を雨らして、佛の上及び諸の大衆に散ず。時に諸の大衆、此の十方の無量無數恒河沙等の諸佛の刹土の六種に震動するを見、并に妙高山の頂の帝釋宮の中の大摩尼寶最勝樓閣の六變に震動するを見て、是の念を作さく、今、如來、大神變を現じ玉ふ、何の因緣を以てか、此の瑞あると。

爾時に如來、諸の大會の心の所念を知り玉ふて、之に告げて言く、汝等此に於て疑惑を生ずること莫れ、我れ今、已に是の深妙の法を說けり、三世の諸佛の心中の心なり、一切の佛法を此の經に

【一】出生品。此の品には大日如來の心から普賢菩薩を出生し、之に印(Mudrā)・灌頂(Abhiṣeka)・名字(Nāma)を授與して、金剛手(Vajrapāṇi)と號する旨を明す。

【二】毘須羯磨(Viśvakarman)。種種工巧と譯す。

【三】三摩耶(Samaya)。時と譯す。時分と云ふ意。又、平等・本誓・除障・驚覺の諸義がある。

【四】Om vajra-sattva.

【五】六種震動。大地の震動に三種の六動がある。一、六時に動ず。二、六方に動ず。三、六相に動ず。六相とは舊に動・起・涌・震・吼・擊を云ひ、新に動・涌・震・擊・吼・爆を云ふ。今舊に從へば、前三は形に就き、後三は聲に就く。この六種の中の二種を取つて六種震動と呼ぶ。而して六種に各小中大の三相(卽ち動には一、動―横に颭る、是は一國を動ず・二、徧動―四天下を動ず・三、極動―三千大千世界を動ず)があるから、總じて十八相となる。卽ち六種十八相震動である。

の天衣を脫ぎ、手に[三五]衣裓を執り、空中に旋轉して以て佛に供養し奉る。亦た天の[三六]曼陀羅花・摩訶曼陀羅花・[三七]曼殊沙花・摩訶曼殊沙花を以て、諸佛及び諸の大會に供養し奉る。復た諸天の上妙の伎樂百千萬種を以て、虛空の中に於て諸佛に供養し、復た天上の種種の妙花、謂ゆる[三八]瞻蔔迦花・[三九]蘇摩那花・[四〇]阿提目多迦花・[四一]婆利師迦花等を雨らして、佛及び諸の大會に供養し奉る。

爾時に大衆、此の經の名を聞きて、無量の衆生大利益を獲、恒河沙の衆生[四二]無生法忍を得、或は菩薩有りて[四三]歡喜地を得、或は菩薩有りて離垢地を得、或は菩薩有りて發光地を得、或は菩薩有りて焰慧地を得、或は菩薩有りて難勝地を得、或は菩薩有りて現前地を得、或は菩薩有りて遠行地を得、或は菩薩有りて不動地を得、或は菩薩有りて善慧地を得、或は菩薩有りて法雲地を得、復た無量無邊の諸天子等有りて、菩提心を發し、永く[四四]阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず。

上足・妙足・知足・喜足などと譯す。欲界の天處で、夜摩天と樂變化との中間に在つて、下から第四重に當る。この天に在るもの、五欲の境に對して喜事多く、聚集して遊樂す。故に喜樂集とも義譯す。內外の二院に分れて、其の內院を彌勒菩薩の淨土とし、外院を天衆の欲樂處とす。

【三二】樂變化(Nirmāṇaratayaḥ 化樂天)。欲界六天の中、第五重の天である。自の通力を以て、自在に妙樂を變作して娛樂するから斯く名づく。

【三三】自在。他化自在(Paranirmitavaśavartina)のこと。欲界六天の第六、依つて第六天と稱す。此の天快樂を爲すに、自ら樂具を變現する要なく、下天の化作した他の樂事を假り、以て自在に遊戲するからこの名がある。欲界天の主で、色界の主摩醯首羅天(Maheśvara)と共に、正法に害を爲す魔王(Māra-rāja)である。卽ち四魔(煩惱魔・五陰魔・死魔 天魔)の中の天魔これである。

【三四】對法(Abhidharma)。對は對觀對向の義、法は四諦涅槃の法である。無漏聖道の智慧を以て四諦の理を對觀し、涅槃の果に對向するから對法と名づく。又 Abhi(阿毘)は更に・其の上に・餘分にとかの附加する意を有し、Dharma(達磨)は教義・本質等の義であるから、此の場に於ける對法は、三藏中の論藏に當り、教の上に更に附加されたものと解すべきである。但しこゝでは單に佛所說の大乘(Mahāyāna)法門と云ふ程の意である。

【三五】衣裓(衣服)。長方形のきれで、男女多く肩に掛く。手を拭ひ、又は物を盛る。一說には花を飾つて佛に供ふる具とす。これ後に轉じて華籠の稱となる。

【三六】曼陀羅花(Mandārava)。譯して圓華・白團華・適意華・悅意華・柔軟華・天妙華などと云ふ。

【三七】曼殊沙花(Mañjūṣaka)。柔軟華・赤色華・藍華などと譯す。見るものをして剛礦の三業を離れしむと云ふ。

【三八】瞻蔔迦花(Campaka)。金色花と譯す。其の花香氣あつて、遠く熏ずと云ふ。

【三九】蘇摩那花(Sumanā)。善稱意と譯す。黃白色で香が甚しいと云ふ。

【四〇】阿提目多迦花(Atimuktaka)。善思華・眞勝子・龍祇華などと譯す。赤華青葉で、香となすに堪ふ。

【四一】婆利師迦花(Vārṣikī)。夏生華・雨生華などと譯す。其の花要ず雨時(夏時)に至つて生ずるから此の名がある。

【四二】無生法忍、略して無生忍と云ふ。無生法とは常住不變にして、生滅を遠離せる眞如實相(Tathatā-bhūta)の理體を指す。忍とは認知・認可の義で、眞如の正理を覺知するを云ふ。されば、眞智此の理に安住して動かざるを無生法忍と云ひ、初地以上の菩薩は、此の力を有するから、無生忍位と稱す。

入り玉ふ。三昧に入り已りて、[二六]頂上より白色の光を放ちて、十方無量の世界の一切の佛刹を照すに、周遍せずと云ふこと靡し。前に放つ所の四種の光明、四方より來りて此の光の內に入り、虛空に遍滿す。微塵沙數の諸佛菩薩、無邊の諸天衆、是の光明を見て未曾有なりと歎じて、各〻是の念を作さく、何の因緣を以てか此の瑞相を現ずると。

爾時に佛薄伽梵、無始無終にして寂靜なる大聖主は、衆生を護念し玉ひ、最勝なる大仙は、世界を擁護し、有情を利益し、能く父母と爲りて生死の苦を拔き、大方便をもつて最勝安樂ならしめ玉ふ。大慈大悲あて[二七]他心智を具し玉ふ。大毘盧遮那如來、大衆の心の疑ふ所を觀察して、普く一切大會の諸の菩薩摩訶薩に告げて言く、諦かに聽き諦かに聽け、善く思ひ之を念ぜよ。我れ今、摩訶瑜伽諸佛祕密心地法門諸佛境界攝眞實經を演說して、永らく汝等が所有の疑網を斷ぜん。唯だ此の法を修して佛道を成ずることを得。此の法は善能く一切の菩薩摩訶薩を引導して、菩提樹に坐せしむ。此の法は卽ち是れ諸佛の根本なり。是の法は能く一切の惡業を滅す。是の法は能く一切の所願を滿ず。是の法は能く一切衆生の生・老・病・死・憂・悲の苦海を竭す。是の法は能く生死の曠野を過ぐ。是の法は能く生死の波濤を靜む。此の法は卽ち是れ諸佛の種子なり。此の法は卽ち是れ大法幢を建つ。此の法は卽ち是れ大師子の座なり。此の法は卽ち是れ無上法輪なり。此の法は卽ち是れ能く生死の長夜の黑暗を照す大智慧の炬なり。此の法は卽ち是れ大法螺を吹く。此の法は卽ち是れ大法鼓を擊つ。此の法は卽ち是れ大師子吼なり、能く外道を摧く。

爾時に大會の無量無邊の一切の化佛と、十六倶胝那庾多の諸菩薩摩訶薩と、忉利天の主釋提桓因と、[二八]娑婆世界の主[二九]大梵天王と、[三〇]夜摩天子と、[三一]都史多天子と、[三二]樂變化天子と、[三三]自在天子と、及び他方の無數世界の百千萬億倶胝那庾多の天子、親しく佛前に對して、諸佛境界大瑜伽大乘[三四]對法諸佛祕密攝眞實經名を聞き、歡喜踊躍して未曾有なることを得て、心に愛樂を生じ、各各に身の所著

も有頂天とも名づく。

【二三】 右の肩の上より云々。南方の世界は金色の光明。

【二四】 其の背の上より云々。西方の世界は紅色の光明。

【二五】 左の肩の上より云々。北方の世界は五色の光明。是れ雜色の故に黑色に當る。

【二六】 頂上より云々。十方の世界は白色の光明。

【二七】他心智(Paracittajñāna)。他人の心念を知る智。十智の一で、六通の中では他心通と云ふ。

【二八】 娑婆世界。梵語はSahālokadhātu である。

【二九】大梵天王(Mahābrahmāṇapati)。大梵天は初禪天(一、梵衆天 Brahmakāyika 又は Brahmapāriṣadyā 二、梵輔天 Brahmapurohitā 三、大梵天 Mahābrahmāṇa)の王であるから、大梵天王と名づけるのである。略して大梵王とも梵王とも稱す。蓋し梵とは寂靜清淨の義で、婬欲を離れた色界の十八天に通ずる名であるけれども、初禪梵天の王に就て言ふを常とす。

【三〇】 夜摩(Yāma. 焰摩天)。欲界六天中第三天の名。譯して時分或は善分と云ふ。善く時分を知つて五欲の樂を受けるから斯く名づく。

【三一】 都史多(Tuṣitā.兜卒天)。

一一の毛孔より此の光明を放つ。是の如くの光明合して一色と成りて、南方を照すに周遍せずと云ふこと靡し。彼の諸の世界に無量の化佛ゐまし、彼等諸佛は無邊廣大の佛刹を示現し玉ふ。彼等の佛刹の一一の如來、無量無邊の海會の菩薩大衆に圍遶せられて、此の大法を說き玉ふ。黑闇の世界の日月無き處の一切衆生より、乃し生盲に至るまで、悉く光照を蒙りて、毘盧遮那如來及び化佛を見奉ることを得、衆苦皆除かれて無量の樂を受く。

爾時に如來、定より起ち已りて、復た一切如來の諸法本性清淨蓮華三昧に入り玉ふ。三昧に入り已りて、[二四]其の背の上より紅蓮華色の光を放ちて、西方の無量の世界を照し玉ふ。乃至、一切の毛孔より紅蓮華色の光を放ちて、遍く西方の盡虛空界を照して、合して一色と成りて周遍せざること靡し。彼等世界に無量の化佛ゐまし、彼の諸の化佛不可說の廣大の佛刹を現じ玉ふ。彼等の佛刹の一一の如來、無量無邊の海會の菩薩大衆に圍遶せられて、此の大法を說き玉ふ。黑闇の世界の日月無き處の一切衆生より、乃し生盲に至るまで、悉く光照を蒙りて、毘盧遮那如來及び諸佛を見奉ることを得。永く衆苦を滅して無量の樂を受く。

爾時に如來、此の定より起ちて、復た一切如來摩訶菩提金剛堅牢不空最勝成就種種事業三昧に入り玉ふ。三昧に入り已りて、[二五]左の肩の上より五色の光を放ちて、北方の無量の世界を照し玉ふ。一切の身分乃至毛孔より五色の光を放ちて、北方の盡虛空界に遍滿し、合して一色と成りて周遍せざること靡し。彼の諸の世界に無量の化佛ゐまし、彼の諸の如來は難思の廣大の佛刹を示現し玉ふ。彼等の佛刹の一一の如來、無量無邊の海會の菩薩大衆に圍遶せられて、此の大法を說き玉ふ。黑闇の世界の日月無き處の一切衆生より、乃し生盲に至るまで、悉く光照を蒙りて、毘盧遮那如來及び十方界の一切諸佛を見奉ることを得、是等の衆生、永く衆苦を離れて無量の樂を受く。

爾時に如來、此の定より起ちて、復た遍滿一切極虛空際現諸境智能善調伏難衆生界最勝三昧に

【一六】釋提桓因(Sakro devendra)略して帝釋(Sakra)と稱す。

【一七】摩醯首羅(Mahesvara)。摩醯(Maha)は大、首羅(伊濕伐羅. Īśvara)は自在、即ち大自在。

【一八】閻浮提(Jambudvipa)。新には贍部洲と稱す。須彌山の南方に當れる大洲の名。即ち吾人の住處を云ふ、閻浮(Jambu)は樹の名、提は提鞞波(Dvipa)の略で譯して洲と云ひ、此の洲の中心に閻浮林(Jambuṣaṇḍa)あるを以て洲名とす。又南方に屬するを以て、南閻浮提或は南贍部洲と云ふ。

【一九】以下は如來三昧に入り、光明を放つて、四方の世界を照し玉ふを明す。

【二〇】胸臆の中より云々。東方の世界は青色の光明。

【二一】阿鼻地獄。阿鼻は阿鼻旨(Avici)の略。無間と譯す。現世に上品の惡行を爲したるもの、來世に生れて、苦痛を受くること間斷なき義。而して阿鼻は地下の牢獄なれば地獄と云ひ、八熱地獄の最下にあるものとす。

【二二】阿迦膩吒天(Akaniṣṭha)。此の天は色界十八天の最上天にして、形體を有する天處の究竟である。故に色究竟天と

等の十六菩薩摩訶薩、一一に各ゝ一億那庾多百千の菩薩有りて、以て眷屬たり。復た[一三]四たりの金剛天女有り。其の名を金剛焼香天女・金剛散花天女・金剛然燈天女・金剛塗香天女と曰ふ。是の如く等の金剛天女に、一一に各ゝ一千の金剛天女有りて、眷屬と爲りて倶なりき。復た[一四]四たりの金剛天有り。其の名を金剛鉤天・金剛索天・金剛鎖天・金剛鈴天と曰ふ。是の如く等の金剛天に、一一に各ゝ一千の金剛天有りて、眷屬と爲りて倶なりき。[一五]復た忉利天の主[一六]釋提桓因と、大梵天王と、[一七]摩醯首羅等の諸の大天王と、及び三十三天との無數の天子有りて、無量倶胝那庾多の諸天婇女、種種に歌舞して一心に供養す。復た恒河沙數の無量無邊の一切の化佛有りて、[一八]閻浮提に現じて虚空に遍滿し、一一の如來、無量無數の海衆の菩薩賢聖に圍遶せられて、此の大法を說き玉ふ。

[一九]爾時に毘盧遮那如來、虚空界を盡して、常住不變にして、海會を觀察して、大象王の如くして、一切の虚空に遍滿し、本性を覺悟する智慧希有の金剛三昧に入り玉ふ。三昧に入り已りて、[二〇]胸臆の中より青色の光を放ちて、東方の無量の世界を照し玉ふこと、紺琉璃の如し。其の面門より乃し足の指に至るまで、一一の毛孔より青色の光を發す。此等の光明合して一色と成り、周遍せざること靡く、下は[二一]阿鼻地獄に至り、上は[二二]阿迦膩吒天に至る。彼の諸の世界に、無量の化佛ゐまし、一一の化佛、無邊廣大の佛刹を示現し玉ふ。彼の諸の佛刹の中に、一一の如來、無量無邊の海會の菩薩大衆に圍遶せられて、此の大法を說き玉ふ。黑闇の世界の日月無き處の諸の有情等より、乃し生盲に至るまで、悉く光照を蒙りて、毘盧遮那如來の一切の化佛を見奉ることを得、永く衆苦を盡して無量の樂を受く。

爾時に如來、定より起ち已りて、復た一切虚空極微塵數出生金剛威德大寶三昧に入り玉ふ。三昧に入り已りて、[二三]右の肩の上より金色の光を放ちて、南方の無量の世界を照し、頂より足に至るまで、

す。灌頂佛に就て受くべき故に。

【五】妙觀察智(Pratyaveksapi-jñāna)、佛の攝化利生の智を云ふ。

【六】瑜伽。梵語Yogaの音寫で、相應と譯し、主觀・客觀の融會不二となつた境地に名づく。常には、眞言三密(身・口・意)の妙行を瑜伽と云ふ。

【七】大慈毘盧遮那如來(Mahākaruṇa-vairocana-tathāgata)。大日如來、

【八】三業(Trikarma)。身業・口業・意業。

【九】三十三天帝釋宮。三十三天とは忉利天(Trāyastriṃśat)のことである。欲界の第二天で須彌山の頂上に位す。中央を帝釋天(Sakra)として、四方に各八天があるから、合せて三十三天となる。

【一〇】摩訶摩尼。摩訶(Mahā)は大摩尼(Maṇi)は寶珠と譯す。兜羅(Tūla)綿。草木の花絮を云ふ。

【一一】倶胝(Koṭi)京、(千萬)・那庾多(Nayuta)兆、(百萬)。但し兩者とも一往の說によるのみ。

【一二】金剛藏菩薩の下。一菩薩の名を欠くか。

【一三】四金剛天女。外四供養。

【一四】四金剛天。四攝。

【一五】以下は諸天集會を明す。

諸佛境界攝眞實經

[一]罽賓國三藏沙門般若　詔を奉じて譯す

卷の上

序品第一

[二]是の如く我れ聞き。一時、佛[三]薄伽梵、金剛威德の[四]三摩耶智と種種の希有最勝の功德とを妙善成就し、已に能く一切如來の灌頂寶冠を獲得して、三界を超過し、已に能く一切如來の[五]妙觀察智大[六]瑜伽法に證入し、無礙自在に已に能く一切如來の微妙の智印を成就して、所作の事に於て、善巧に諸の有情類の種種の願求を成就し、其の所樂に隨ひて皆滿足せしむ。[七]大慈毘盧遮那如來は、體性常住にして、始めも無く終りも無く、[八]三業堅固なること、猶し金剛の若し。十方の諸佛、咸く共に尊重し玉ひ、一切の菩薩、恭敬讃歎し玉ふ。

時に薄伽梵、妙高山頂の[九]三十三天帝釋宮の中の[一〇]摩訶摩尼最勝樓閣に住し玉ふ。三世の諸佛の常に說法し玉ふ處なり。柔軟なること兜羅綿の如く、白玉の所成なり。色珂雪を瑩く妙樓閣有りて、七寶をもて莊嚴せり。寶鐸・寶鈴・處處に懸列せられ、微風吹動して微妙の音を出し、繒蓋・幢幡・華鬘・瓔珞・半滿月等を以て而も嚴飾を爲せり。光明照曜して虛空に遍じ、無數の天仙咸く共に稱讃す。大菩薩摩訶薩衆、十六[一一]倶胝那庾多百千の菩薩眷屬と倶なり。其の名を金剛藏菩薩・[一二]金剛弓菩薩・金剛善哉菩薩・金剛胎菩薩・金剛威德菩薩・金剛幢菩薩・金剛笑菩薩・金剛眼菩薩・金剛受持菩薩・金剛輪菩薩・金剛語言菩薩・金剛羯摩菩薩・金剛精進菩薩・金剛摧伏菩薩・金剛拳菩薩と曰ふ。是の如く

【一】罽賓國。罽賓は舊稱にして、新には迦濕彌羅（Kaśmira）と稱す。印度西北境に存す。

【二】金剛頂宗では、釋尊を一切義成就菩薩（Sarvārthasiddha）と稱し、この菩薩が菩提樹下に於て、十方三世の一切如來から、觀察自心三昧の妙法を授與せられこの三昧(Samādhi)を修することに依つて無上正等菩提(Anuttara-samyak-sambodhi)を發得し、かくして智法身(Jñāna-dharmakāya)と成られるのであるが、かく無上菩提を證し、一切如來から灌頂(Abhiṣeka)の聖儀を受けて、智法身と成られる所は、色界頂阿迦尼吒(Akaniṣṭha)天宮であることになつて居り、既に智法身と成られた後に、蘇迷盧(Sumeru)、妙高山)頂に降り、降三世明王(Trailokya-vijaya-rāja)の三昧に住して、欲界(Kāma-dhātu)の大自在天(Maheśvara. 摩醯首羅)等の剛强難化の衆生を降伏せらるゝことになつてゐる。而して今の經は、妙高山頂で說かれたのである。

【三】薄伽梵。Bhagavān(出有・有德)普通には世尊と翻す。

【四】三摩耶智。不空金剛(Amoghavajra)は誓智と譯

羯磨・護・藥叉・拳）の形像並に契明。

（五）金剛界外供養品（下）

八供養（東北嬉戲・東南鬘・西南歌・西北舞・東北燒香・東南妙華・西南燃燈・西北塗香）・四攝（南鉤・西索・北鎖・東鈴）の印明。

（六）修行儀軌品（下）

五佛の色相・十二天眞言・灑水（淨地）・洗浴（清淨）の印明、並に四禮等。

建立道場法は頗る單純で、常の金剛界曼荼羅（Maṇḍala）と大に異なり、且つ會て四曼若くは六曼を說かない。

（七）建立道場發願品（下）

道場を建立して作法するには、名聞利養を離れて、無上菩提Anuttarasambodhiの爲にせよ、と說き給ふ。

（八）持　念　品（下）

三種（數・時・形像）の修行門と、五部の念珠の法と、念珠を執持するに五部の差別あると、念珠の差品に依つて功德に輕重あると、本尊を用ゐずして念誦する法等を說き給ふ。

（九）護　摩　品（下）

五部の內護摩（Homa）（息災・調伏・求財・敬愛・增益）及び除障・灌頂法諸印明（三摩耶・施身・金剛事業「覆眼」・心中心・入道場・祕密・召入本尊・金剛堅住心中・投華・開眼「灌頂・授二金剛名一・與二五股金剛一」・奉還「金剛鈴・一百八名讚」・奉送）を說き給ふ。この解題並に和譯は龜井榮忠君の勞に負ふ所多し、玆に記して謝意を表す。

譯者神林隆淨識

暦七世紀の後半頃、中印度の那爛陀寺(Nālanda Vihāra)で作製されたものと信ずる。言ふまでもなく、兩部大經は、教理並に實修的方面に於て、何れも純密教の粹を網羅した經である。中に於て、其の教理は、龍樹(Nāgārjuna)・提婆(Deva)の空觀思想 (Kha-bhāvanā) と、無著(Asaṅga)・世親(Vasubandhu)の唯識中道觀思想(Vijñānatanmātramadhya-mārgabhāvanā) とで組織されたもので、その外の要素としては、法華經の佛知見の思想、華嚴經の淨菩提心並に融通無礙の思想、涅槃經の佛性の思想等が巧に織込まれ、こゝに燦然たる密教々理が組立てられたのである。この點から考へれば、謂ゆる金胎兩部の大經は、諸大乘經典編纂の後に、而も其等の經典に通曉した學者によつて作製されたものであることが想像される。然らば、兩部の大經は、一人の作であるかと云ふに、否さうではない。且つ又、大日經と金剛頂經とを比較するに、後者が豐富な思想內容を有してゐるのみでなく、それが充分に表現されてゐるから、前者よりも幾分後世に屬する樣に思はれる。

二、本經の內容槪觀

本經は上・中・下の三卷から成り、圓仁(794-864A.D.)・圓行(799-852A.D.)・慧運(798-871A.D.)・宗叡(809-884A.D.)・四家の請來である。

(一)序　品(上)

大日如來(Mahāvairocana-tathāgata)妙高山頂(Śumeru)の帝釋天宮(Śakra)の中の寶樓閣 (Kūṭāgāra)に住し給ふや、十六大菩薩・四金剛女(外四供養)・四金剛天 (四攝)・及び諸天集會す。時に如來、光明を放つて四方の世界(東靑・南金・西紅・北五色・十方白)を照し、此の經を說かんことを告げて、其の功德等を述べ給ふ。

(二)出生品(上)

如來の心から普賢菩薩 (Samantabhadra)を出生し、之に印(Mudrā)・灌頂(Abhiṣeka)・名字(Nāma)を授與して、金剛手(Vajrapāṇi)と號する旨を明す。

(三)金剛界大道場品(上―中)

灌頂の功德、並に淨三業・金剛合掌・金剛縛・金剛拳・金剛鉤・集會の諸印明。(以上卷上)

法身求心・大菩提心・堅固菩提心・觀我身卽薩埵・觀五方佛菩薩入我身・報身觀・化身觀・觀三身堅固常住・觀我身如金剛・五佛三昧 (大日白色・東不動靑・南寶生金色・西彌陀紅、北不空成就五色)・四波羅蜜(東北金剛屬阿閦・東南寶屬寶生・西南法屬彌陀・西北羯磨屬不空成就)(以上卷中)

(四)金剛外界品(中)

十六大菩薩 (薩埵・王・愛・善哉、寶・威德・幢・笑、法(觀音)・利(文殊)・因・語言、

會指歸は、不空三藏(Amoghavajra唐、天寶五大曆六746–771 A.D. 飜譯從事)が十萬頌大本の中の意を取つて、略述されたのである。而して現行流布の金剛界の諸經は、皆大本の中の肝要の分を略出したものであり、或は其の總意を略記、若しくは其の中の少分片端に過ぎないのある。中に就て次に出す三本が主とされてゐる

一、不空譯(唐、天寶三753 A. D.)三卷の金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經(正藏、一八)

第一會たる色究竟天所說、一切如來眞實攝大乘現證大敎王會に、金剛界品・降三世品・徧調伏品・一切義成就品の四大品がある。中に於て、第一金剛界品に六曼荼羅(Maṇḍala 羯・三・微・供・四・一)を說く。現圖九會の中の初の六曼荼羅は、卽ち是れである。此の經は、これらの內容を有する初品の譯で、眞言宗の正所依の經典とされてゐる。

二、施護等譯(Dānapāla? 宋、大中祥符五八 1012–1015 A. D.)三十卷の佛說一切如來眞實攝大乘現證三昧大敎王經(正藏、一八)

此の經は、初會の全分を譯出したものである。梵字三十二字を一頌と爲し、大般若經は二十萬頌の譯本で、六百卷とされてゐる。今の金剛頂大本は、十萬頌であるから、全分は三百卷あるべき筈である。されば、三十卷は唯だ其の十分の一と云ふことになる。

三、金剛智譯(Vjrabodhi 唐、開元二723 A. D.)四卷の金剛頂瑜伽中略出念誦經(正藏、一八)

此の經は、大本の中から、灌頂(Abhiṣeka)等の祕要を略出したものであるから、廣く十萬頌に通じてゐる譯である。

以上三本の外に、不空譯(唐、天寶五—大曆六 746–771 A. D.)一卷の金剛頂蓮華部心念誦儀軌(正藏、一八)と、今の經、卽ち般若譯(Prajña 唐、貞元二—四 786–798 A.D.)三卷の諸佛境界攝眞實經とがある。前者は略出經に本づき、大敎王經と大同少異である。但し初會の金剛界品に五部を說く中、且く蓮華部を以て本と爲すので、此の名がある。この儀軌は、金剛界念誦法の根本儀軌で、其の順序(淨地・淨身・羯磨會・三昧會・供養會・奉送本尊)は常の金剛界念誦法と大差なく、最も重要なるものとされてゐる。後者も亦、金剛頂經初會初品の異出であるが、大村西崖氏が「宛如下綜二合折三衷二本一、且加以三不空譯一卷經(三卷の敎王經と同本である。但し往往文句に增減がある。)所レ說儀則一、又打而洗鍊者上」(密敎發達志卷五、七四一頁)と言つてゐる樣に、金剛智・不空兩譯に同じくない。然し吾人は、大村氏が金剛頂經の製作地を南印度として居られる說に、贊成することが出來ない。吾人は金胎兩部の大經共に、西

諸佛境界攝眞實經解題

一、金剛界の本經軌

金剛界の結集の經は、總じて十萬頌あつて、十二處・十八會の所說とされてゐる。卽ち、

第一會　名一切如來眞實攝大乘現證大敎王
第二會　名一切如來祕密主瑜伽——於色究竟天說
第三會　名一切敎集瑜伽——於法界宮殿說
第四會　名降三世金剛瑜伽——於須彌盧頂說
第五會　名世間出世間金剛瑜伽——於波羅奈國空界中說
第六會　名大安樂不空三昧耶眞實瑜伽——於他化自在天宮說
第七會　名普賢瑜伽——於普賢菩薩宮殿中說
第八會　名勝初瑜伽——於普賢宮殿說
第九會　名一切佛集會拏吉尼戒網瑜伽——於眞言宮殿說
第十會　名大三昧耶瑜伽——於法界宮殿說
第十一會　名大乘現證瑜伽——於阿迦尼吒天說
第十二會　名三昧耶最勝瑜伽——於空界菩提場說
第十三會　名大三昧耶眞實瑜伽——於金剛界曼荼羅道場說
第十四會　名如來三昧耶眞實瑜伽
第十五會　名祕密集會瑜伽——於祕密處說(瑜師婆伽處・般若波羅蜜宮)
第十六會　名無二平等瑜伽——於法界宮說
第十七會　名如虛空瑜伽——住實際宮殿說
第十八會　名金剛寶冠瑜伽——於第四靜慮天說

(金剛頂瑜伽經十八會指歸、正藏、一八、二八四C)

である。今、之に就て見るに、第一會と第十四會との說處が明記されてない。然し、三卷の敎王經第一には、「住阿迦尼吒天王宮(Akaniṣṭha)中大摩尼殿」(正藏、一八、二〇七A)とあるから、第一會が、色究竟天の所說であることは明かであり、又第十四會は恐らく第十三會の金剛界曼荼羅道場で說かれたのであらうか。結局、十二處・十八會の所說となるのである。斯樣に金剛頂大本の中には、總じて十八會の說があるのであるが、十八

通を現ずれば、其の魔の眷屬即ち斯の如くの苦惱を受く。何に況や火三昧に入つて、奮迅神通を現ぜんをや。往より今に至るまで、常に此の修道持眞言の人を護り、及び佛法幷に一切衆生を護るが故に、此の如くの力を得て、魔をして怕懼して正しく我が面を視ることを得ざらしむ。何に況や世間の惡人能く怕れざる者あらんや。若し比丘或は在家の菩薩有つて、能く丈夫の心を發して、佛法僧寶を恭敬し、及び大乘典(祕密藏)、幷に眞言を修持する者を護り、能く國王大臣及び一切の惡人等を制して、毀訾し惡言する者に便を得せしむること勿れ。此等は福を獲、神通威力を得て、共に我れと異なることなけん。一切の魔王怖懼して、其の苦惱を生ぜんこと、前件と別なることなし。當に果報を得て、我が住處に至るべし。汝等天龍・八部・人・非人等、今我が前に於て大誓の莊嚴を發して、衆生の心を護り、幷に法藏を護つて其の力を佐助す。汝善心深厚なるを以ての故に、善い哉善い哉甚だ善し、汝亦久しからずして執金剛の身を獲べし。奮迅自在無礙を得て、魔勞怨を降さんこと、我が若く同等ならん。〔二〕時に執金剛主、蘇婆呼童子に告げ玉はく、汝當に世に於て流行すべし、忘失せしむること勿れ。時に蘇婆呼童子の言く、尊の教へ玉ふ所の如く、展轉流行して敢て忘失せずと。時に會の大衆皆悉く起立す。蘇婆呼童子・人天八部・大梵天王・幷に及び四衆圍遶すること數匝して、頂禮し恭敬し、頭面を地に著けて、各誓願を發さく、願くば我れ及び一切衆生、此の法を聞くことを得、教に依つて修行して、速に是の如くの大威神の身力を獲ん。重ねて執金剛主の足を頂禮し已つて、各本座に乘じて辭退し、宮に還つて忽然として現ぜざりき。

蘇婆呼童子請問經(終)

【二】時に執金剛主。以下は流通分である。

を佐助して、惡人をして其の便を得せしめざるが故に、國王大臣に瞋怒を生ぜしめざるが故に、凡より金剛に至るより已來、此の願曾て退廢せずして、今是の如くの執金剛忿怒自在の身を獲たり。我れ若し左に顧み右に眄み、十方を觀察して、兩目をもて視瞬すれば、一切世間界地六たび震動し、上有頂に至り下水際に至る。中に於て魔宮あり、眷屬光明色を失ふこと、由し聚墨の珂貝の邊に在るが如し。所有る宮殿、碎壞すること由し微塵の如く、修羅の種類四散逃避して自然に殄滅し、魔家の眷屬迷悶し躄地す。或は身體由し火燒の如くなるあり、或は身乾枯する者あり、或は屎尿の中に臥する者あり、或は山に身を壓さるゝ者あり、或は氷山の中に臥す者あり、或は〔一〇〕鐵圍山の中に臥す者あり、須彌の峯に臥して、倒れ垂れて墜んと欲して、恐怖を生ずる者あり、或は大河波の中に臥して、恐怖を生ずる者あり、或は海底に臥して、日月の光を見ざる者あり、或は空中に臥して、日の所炙を被つて苦惱を受くる者あり、或は飢寒の者あり、或は貧窮を受くる者あり、或は地獄の苦を受くる者あり、餓鬼の身を受くる者あり、或は畜生の身を受くる者あり、或は飛鳥の身を受くる者あり、或は毒蛇の身を受くる者あり、或は本身の形生を失する者あり、或は身より火を出だして、自ら燒いて苦を受くる者あり、或は兩目より火を出だして、自ら面を燒く者あり、或は男身の上に女根を生じて、不淨の臭穢を出す者あり、或は女身の上に男根を生じて、羞恥ざる者あり、或は屎尿口より出づる者あり、或は猛獸に食噉せらるゝ者あり、或は蛇に螫されて苦痛を受くる者あり、或は食飯するに、口中に火を出だして舌を燒き齒を焦す者あり、或は手脚墮落する者あり、或は身體洪に爛るゝ者あり、或は病に臥す者あり、或は氣斷ぜんと欲する者あり、或は死する者あり、牟稍の苦を受くる者あり、或は火輪の苦を受くる者あり、或は劍戟の苦を受くる者あり、或は白象に踏まるゝ者あり、或は水牛に觝殺せらるゝ者あり、或は人に殺さるゝ者あり、汝等天人雜類應に知るべし、此等の天魔、常に修道の人を障ふるが故に、我れ今少らく右を顧み左を視る三昧神

【一〇】鐵圍山。鐵圍は梵に斫迦羅(Cakravāḍa)と云ひ、輪圍と譯す。この山は堅牢破壞すべからざる鐵山で、この世界の外海を圍繞するから鐵圍山となづく。

多等の類、此の法を聞き已つて恭敬頂禮し、一時に合掌して是の言を作さん、希有なり尊者、衆生を憐念し玉ふ、希有なり。是の如くの微妙の悲行と、或は尊者を見奉るに、手に赫燿たる大跋折羅を執り、或は堅固の鐵杵を執り、或は猛利の火輪を執り、或は手に不空羂索を執るを見、或は手に三鈷の大叉を執るを見、或は手に大横刀を執るを見、或は手に弓箭を執るを見、或は手に棒を執るを見、或は其の器杖殊異にして、人をして怖畏せしむるを見、或は相好端嚴にして、人をして樂ふべからしむる見、或は尊者の藥叉將と爲るを見奉る。我等大慈悲修行者に歸命し奉る。我等諸天・修羅・人・非人等、恒常に護念し、深心に恭敬し、教に依つて修行して、敢て忘失せず。若し世間閻浮提の內及び四天下に、四衆の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・童男・童女有つて、此の法を聞くことを得ば、現世に苦難を離るゝことを得。若し能く法の如く教に依つて一切の眞言を修行すれば、此の教と相應して、報めて悉地を得ること疑ひ有ること無し。上法を聞くことを得たり、何に況や教に依つて修行して果を獲ざらんや。我等八部の眷屬、常恒に修道の人を護衞するが故に、一切の惡魔・毘那夜迦・藥叉等の類、其の便を得ず。若し貧窮の衆生有つて、此の法教に依つて明眞言を持せば、現世に貧窮の苦惱を遠離し、富貴自在にして人に欽敬せられ、一切の鬼神冥に護衞を加へん。若し進んで勝上の出世の解脫を求めんと欲はば、前件に已に列ぬ、意の樂ふ所に任せて教に依つて修行すべし。勤精して退かざれば、久しからずして持明悉地を獲得し、世間に威耀すること、日の出現して障礙あること無きが如くならん。心に亂動なく、不至心をば除いて日夜に懈らずんば、我等眷屬常に左右を離れずして其の力を助益し、畢に功を成ずることを獲しめん。時に執金剛主告げて言く、汝等天龍八部、能く我が語に隨ひ、眞言及び大乘藏幷に一切衆生を衞護して、修道の者を助成すべし。我も亦往昔に天身龍身と作り、幷に一切大力の身を受けて、彼の身の中に於て威力を以ての故に常に佛法を護り、僧寶及び大乘藏眞言密典に於てし、幷に衆生を愍れみ、修道の人の力

子王の牛群に入るに、顧視し恐懼するの心有ること無きが如し。

復た次に蘇婆呼童子、世間の人等には常に種種の鬼魅の病苦あり。或は天魅、或は龍魅、或は阿修羅魅、或は乾闥婆魅、或は伽嚕荼魅、或は緊那羅魅、或は摩呼羅伽魅、或は藥叉魅、或は【五】羅叉娑魅、或は【六】持明所魅、或は餓鬼魅、或は【七】毘舍遮魅、或は【八】宮槃荼魅なり。

如上の種種の諸の鬼魅等は、祭祀せられんことを求むるが故に。

或は戯弄するが故に、或は殺害するが故に、或は世間に遊行して多く利を求むるが故に、或は常に血肉を噉ふが故に、或は人の過失を伺ひ求むるが故に、或は常に瞋怒するが故に、或は衆生を繋捉するが故に、或は煩惱熾盛なるが故に、或は飢餓の故に、或は衆生を繋して、他人をして亂れしむるが故に、或は歌ひ或は舞ふが故に、或は喜び或は悲しむるが故に、或は愁惱を懷くが故に、或る時は亂語するが故に、

如上の種種の異相は、人をして怪しく笑ひ病ましむる等なり。應に金剛鉤を以てし、或は【九】甘露瓶忿怒金剛等の眞言を以て作法療治すべし。如上の病患の徒、即ち除差することを得。又火神の眞言、風神の眞言、摩醯首羅の眞言、大梵天王の眞言、忉利天王の眞言、那羅延天王の眞言、四天王の眞言、日月天王の眞言、藥叉王の眞言、金翅鳥王の眞言。

彼等の鬼魅、如上の餘の外の天神の眞言を懼れざる者、若し金剛鉤の名號を聞かば、自然に退散すべし。何に況や作法し、眞言を持して療治するに、愈へざる者あらんや。智者は彼の魅鬼の性行、及び療治の法を知つて、然る後に畏るゝこと無し。諸佛菩薩所説の眞言は、如來の加被力を以ての故に、餘の外の天神の眞言は、如上の眞言の者を破壞すること能はず。

又罪を滅せんと欲ふ者は、空閑靜處に於て、應に香泥を以てし、或は江河に近き處を以てして、砂を以て制底を造り、中に緣起法身の偈を安ずべし。梵天・藥叉・持明大仙・迦樓羅・乾闥婆の類・部

【五】羅叉娑魅(Rākṣasagraha)。
【六】持明所魅(Vidyādhara)。
【七】毘舍遮魅(Piśāca)。
【八】宮槃荼魅(Kumbhāṇḍa)。
【九】甘露瓶忿怒。軍荼利明王である。

二には溺つて人の身に著けば、便卽ち毒あり。
三には觸毒、蟲行く時には人に見せしめず、若し人身に觸れば卽便ち毒あり。
四には涎唾、人に著けば卽便ち毒あり。
五には眼毒、其の蟲眼を以て人を視れば、便卽ち毒あり。
六には嚙毒、其の蟲人に著けば、便卽ち毒を得。
眞言を持する者は彼の毒を畏れず。是の如くの諸蟲の上中下品を分別するに、合して數種の毒を成ず。是の故に餘の天神、是の如くの諸蟲を說く。

或は毒惛醉するを以て猛毒を放ち　或は大に瞋るを以て猛毒を放ち
或は恐怖して猛毒を放ち　或は飢餓して猛毒を放ち
或は怨を懷いて猛毒を放ち　或は死時至つて猛毒を放つ。

其の嚙毒に復た四種あり。
一には傷、二には血塗、三には極損、四には命終なり。其の嚙毒とは云何んが知る耶。所嚙の處に一齒の痕あり、其の毒微少なれども、是れを名づけて傷とす。
血塗の毒、其の狀云何ん。二齒の痕有つて血あらしむることを致す、名づけて血塗と曰ふ。
極損の毒に三齒の痕あり、肉を傷らしむるを名づけて極損と曰ふ。命終の毒、其の狀云何ん。所嚙の處に四齒の痕有つて、便ち其の身を纏ふ、是れを命終と名づく。此れ之の一毒は縱使ひ外道の眞言妙藥も、能く治差すること無し。譬へば猛火の身を燒き、或は刀を以て割くが如く、毒を被るの苦も亦復た是の如し。眞言を持する者は、其の毒卽滅す。譬へば大火興盛なるとも、若し雨を以て灑がば、其の火便ち滅するが如く、眞言の毒を攝むることも亦復た是の如し。智者妙に種種の類を解し、印あて大威の眞言を持誦するを以て、諸毒と共に戲するとも、一も怖畏すること無し。師

り、長年にして幻化の法を成し、自ら己身を變じて密跡等となる。

中品を成ずるとは、賤財乃至自在富貴を獲得して、意を擧ぐれば心に從ふ。

下品とは、人をして相憎ましめ、及び能く攝來し、國より去らしめ、乃至枯らしむ。

下中下とは、鬼魅・龍鬼・嬰兒を療せんが爲に、人をして惛沈して睡り多からしめ、兩手或は展べ或は舒べて、攫み拳り縛り抱かしめ、及び耳語し、及び[三]阿引吠設那せしめ、鞭打して去らしめ、乃し損害するに至り、及び衆人をして共に眞言を誦ぜしめ、或は衆人をして脚を以て地を踏ましめ、著ける鬼魅をして悶絶躄地せしめて、四衢道の頭りに置き、白氎を以て蓋ふて來る者に看せしめ、復た一人をして脚より徐く白氎を挽き、起るに隨つて氎盡き、本心に還復せしめ、及び鼠毒を療し、人口を攝め閉ぢて諸龍を呼び召き、衆多の人を縛して動ずることを得ざらしめ、毒を被ることを療治し、及び能く毒を移し、毒を以て人を毒ひ、毒をもて人の眼を成じ、亦復た却つて之を被る人を治し、禁じて引發せざらしめ、毒蛇を遣つて人を傷らしめず、人を作し及び使者を成し、人龍を示現して以て音樂を爲し、著魅の者をして差へしむ。是の如く等の類は皆是れ外法なれば、依行す可からず。

復た毒蛇の類あつて、合して八十あり、其の中に二十あり、頭を擧げて行く、中に於て六種は、住するときに卽ち身を盤まる。

復た十二種あり、人を螫すと雖も毒なし。

數の內に復た十三の蛇あり、蛇中の毒なり。外の地に於て餘は人を螫すと雖も、有る時は毒を被り、有る時は毒なし。復た蝦蟇・辟宮・蜥蜴[四]・蜘蛛等の類及び雜毒の蛇蟲あり。是の如きは分別するに、其の數多しと雖も、然も所行猛烈なる毒は、數六種に過ぎず。

一には其の蟲の尿穢人に溺すれば、便ち毒あり。

【三】阿引吠設那(Āveśana)。攝縛行と翻ず。

【四】蜥蜴。守宮と飜ず。

本眞言を誦じ、誠を至して懺悔して、滅罪の法を作すべし。無始より已來造る所の罪障悉く皆消滅して、此の世に當に現報を成就することを獲べし。

念誦の人は持戒を本と爲し、精進忍辱にして、諸佛の所に於て深心に恭敬し、菩提心を發して退轉せしむること勿れ。恒に須く念誦すべく、懈怠あること莫れ。譬へば國王の七種の法を具して、能く人民を治し、及び自らも安樂なるが如し。持誦の人此の七法を具すれば、即ち諸罪を滅して乃し成就を獲。初めには應に念誦すべく、如法にして闕錯あること勿れ。以次に呼摩せよ、呼摩を以ての故に本尊歡喜して、即便ち如意の果を施與し玉ふ。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人若し喜人を攝する法を成就せんと欲ひ、乃至百　由旬の外を取らんと欲はば、皆是れ藥叉の婦の力なり。愛欲の爲の故に、此の法を成ぜんことを求む。藥叉女とは、假令ひ悉地ある者も還つて藥叉の婦と與にす。譬へば女色を衒賣する者、財を窺ふが爲の故に、男子の欲に共んずるが如し。其の藥叉婦も亦復た是の如し。復た共に居ること一劫すと雖も、終に善意なし。人の其の過を伺ひ、損害し食噉す、愚癡の人餘色を貪するを以ての故に、此の法を行ぜんと欲ふ、成し已つて、直斯の邪行の咎を犯すのみに非ず、亦乃し自ら當に損すること有るべし。諸の念誦の人は法を廢すべからず、他業の相當する有らば、任に此の法を行ずべし。佛法の中に於て心趣向すること有らん者は、此の軌を行ずること勿れ。利益の事に非ず、是れ愚人の法なり。初學の人の爲に示現して之を說く、正道に非ず。

復た次に蘇婆呼童子、諸の菩薩・金剛及び天・龍・藥叉・修羅等あり。佛前及び緣覺・聲聞衆の中に對して、各自ら眞言を說き、世尊我が爲に證明し玉へと云ふ。如來は諸の有情を利益せんが爲の故に、皆悉く證し許し、復慈を以て加被し玉ふ。我れ今眞言を說くに皆三品あり。

上品を成ずるとは、謂く空に昇つて去り、修羅宮に入り、自在に形を變じて藥叉女の夫主者と作

【二】由旬。由旬那(Yojana)の略。また踰繕那・踰延那とも寫す。距離を計量する名稱である。或は四十里(唐の里法六町を一里となす)と算し、或は三十里或は十六里となす。異說多く定めがたい。

を拭ひ、及以び身に灑いで卽ち護聲を作すべし。護聲を作し訖つて、然る後に齒の間の垢穢あて舌中に覺觸せば、或は復た咳嗽涕唾し、更に須く上の如く水を呪して口に吸ふべし。乃至口を拭ひ澡浴し畢已らば、卽ち淨室に往け、中間に餘の外人、或は男・或は女・出家・在家・淨行婆羅門・童男・童女及び黃門等と語り、及與び相觸るゝべからず。若し相觸るゝ者あらば、一ら如前に依つて澡浴し、及び水を飮み口を拭ひ、然る後に人と共に語ること莫れ。卽ち淨室に入つて念誦するに、設使急事ありとも、停休することを得ざれ。要ず須く數を滿すべし。然る後に精舍を出で、亦他の利養を受くること勿れ。乞食し已らば作業せよ、日夜に闕せざれ。是の如くの人には妙眞言神唐然として身に入る。若し成就を求むる者は、念誦の時施主有つて、衣裳・金銀・珍寶・鞍乘・嚴具・塗香・燒香・飮食・臥具を惠施すとも、如上等の物乃至分毫も納受すべからず。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人、大小便利し畢已んなば、應に五聚の土を用ふべし。三聚を以て後を洗ひ、一聚を以て前を洗ひ、其の一聚を以て獨り洗ひ、卽ち惡處を出でゝ淨處に就き、土を分つて十聚にし、先づ三聚を用つて獨り左の手を洗ひ、復た七聚を用て其の兩手を洗ひ已り、後更に三聚を取つて、二手の內外通じて淨く洗ひ淨からしむ。然る後已つて重ねて任に土水を用て、淸淨に之を洗ふべし。譬へば、春の時に風、樹木を揩つて、自然に火出で、功力を省くるを以て遍く草木を燒くが如く、念誦の火を以てし、淨戒の風を用ひ、勤めて相揩るを以て、盡く罪草を燒くことも亦復た是の如し。復た寒霜の日曜けば、卽ち消ゆるが如く、戒日を用ふるを以て、念誦の光曜罪霜を消すことも亦復た是の如し。譬へば、室內に久しきより來た闇あらんも、若し燈を將て入らば、卽便ち闇滅するが如く、念誦の燈を以て罪障の闇を照せば、悉く消滅することを得。眞言を念誦し乃至呼摩すれば、便ち成就を獲。若し此の法成就せずんば、應に江河に近き地上より淨好の砂を取り、十萬の窣堵波を印成して河邊に安置し、香泥を以て塔に塗るべし。是の如くして一一の塔前に、各

雹能く諸物を損すれども、避脱すべきこと無きが如し。眞言の威力衆生の心田に降下して、能く苦惱及び諸の罪障を摧き、碎壞して餘なく、善功德の芽日日に滋茂し、如意寶樹の能く有情の種種の意願を益するが如く、眞言の妙藏も亦復た是の如し。或は菩薩の位地乃至佛果を成就することを與へ、或は明仙の位地を成就することを與へ、或は富樂・色力・長年を與ふ。諸の菩薩有つて諸の有情を觀ずるに、諸の苦難及び餘の怖畏・王難・惡賊・火・雹等の苦に遭へば、卽ち自ら身を變じて眞言主の形と爲り、衆生を救濟して苦難を脫せしめ、安ふして怖れなく、快樂情に恣にして報の壽命を盡さしむ。若し復た人有り、居家に處して諸の欲樂を受くと雖も、佛の說き玉ふ眞言を心を發して持せんと欲はん。設ひ少法を得るとも、行ずるに似て行ぜず、念誦に多く違犯あらん。其の事法を作すに多くは備具ならず。彼の人毎日喜んで念誦せずして、遍數足ると足らざると、中間に卽ち停めて、心に餘部の眞言を貪すれば、法則ち驗なし。却つて舊業に就て其の心を剋し、心に休廢せずして、數當に漸く滿すべし。忽に少驗を覺えて心に歡喜を生じ、歡喜し已つて卽ち發露し、已つて諸の過を首すれば、其の罪卽ち滅して五欲の障を離れ、還つて戒體を具して清淨の身となる。還つて淸室に入り、更に眞言を誦じて十萬遍を滿し已んなば、卽ち須く成就を求むる法を作すべし。久しからずして卽ち意の所樂の如き眞言の悉地を得ん。後に作す所の一切の諸餘の眞言法則に於て、皆成就することを得ん。

復た次に蘇婆呼童子、若し念誦の人正しく澡浴する時は、淨き土を用て水に和して遍く其の身に塗り、然る後に淸淨の大水に入つて、意に隨つて洗ひ已り、　　　　　に向け、面を北にして、手と足とを洗ひ已り、其の兩手を以て膝の內に置いて、水を以て遍く身に灑ぎ、水を吸ふに聲あらしむること勿れ。卽ち右の手を用て水を掬する法を作し、其の手の掌に於て沫あらしむること勿れ。水を呪すること三遍、水を吸ふこと三遍、聲あらしむること勿れ。手の母指を以て兩邊より口

ならずんば、亦當に自ら害すべし。

分別八法分品第十二[一]

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人の所有る成就の法に、總じて八種あり、何等をか八とす。謂く成眞言法と、成金水法と、成長年法と、出伏藏法と、入修羅宮法と、合成金法と、土成金法と、成無價寶法となり、是れを八法と名づく。中に於て三あり。

成眞言法と、入修羅宮法と、得長年法との是の三種の法、是れを上上悉地法と名づく。

成無價寶法と、土成金法と、出伏藏法との此の三種の法、是れを名づけて中とす。

合成金法と、成金水法との此の二法、是れを下法と名づく。

若し衆生有つて、具に戒慧を有して此の法を樂はば、是の如くの人は上上の成就を樂ふべし。

若し衆生の多貪財欲の者あらば、是の如くの人は中成就を樂ふべし。

若し衆生有つて愚癡多きが故に、價を反して利を求むる者、是の如くの人は下成就を得。

上上の人は唯上驗のみを求めて、中下の證を求むべきこと勿れ。

若し窮貧に遭ふ者は、應に中品を求むべし。亦上驗を求むること勿く、亦下證を取ること莫れ。

下下の人は前に依つて之を求めて、亦改易すること勿れ。

若し如上所說の種種の成就を獲得せんと欲せば、應に須く福を修すべし。福を具するの人は、前の八種の樂を求むるに、延命長壽と、威力自在と、端正と、聰慧と、皆成就することを得ん。若し人家業を繼ふて善法を修し、三寶を敬念して常に心に離れず、眞言を憶して念誦に間あらず、是の如くの人は速に成就を得。衆生を救はんと念ずれば、復た能く己身の罪を滅す、幷に彼れ今世及び後世の樂を獲。眞言の外に更に異法の能く衆生に樂を與ふる者なし。譬へば、天火の下降し、及び霜

【一】分別八法分品。此の品に延命長壽等の八法を辨說するから、分別八法分品と云ふ。

復た次に世尊、內に於ても亦勝上の妙寶あり、此れより復た究竟の法寶を流し、中に復た八大丈夫不退衆寶を生ず。是の如くの三寶は世に稱する所なり、是の故に念誦の人、若し罪を滅し、福を生ぜんと欲ひ、速に現前に願を滿つることを得んと希ふ者は、先づ三寶に歸命し奉るべし。

又若し金剛部內の眞言を誦持せんと欲する者は、初めに三寶に歸し已り、次に[八]那施旃荼跋折囉波拏曳摩訶藥叉栖那波多曳を稱し、次に後に卽ち眞言を誦ずべし。蓮花部の內も亦然なり、般支迦部も亦然なり、摩尼部も亦上の法の如し。初めに三寶に歸し、次に部主に歸し、然る後に乃ち眞言を念誦すべし。若し釋敎に歸依せずして、復た聲聞乘・緣覺乘を行ずる者は、信具足せず。內に腐朽を懷いて外に精進を示し、復た慳貪悋を懷く者なり、我が此の跋折囉を執るべからず。

若し[九]苾芻・苾芻尼及び優婆塞迦・優波斯迦有つて、深妙の大乘を毀呰して、此の所說は皆是れ魔敎なりと言ひ、復た愚癡を懷いて言を爲さん、執金剛菩薩は是れ大藥叉なりと。復た諸の大菩薩を敬禮せずして心に輕慢を生じ、利の爲の故に詐り解して是の如くの妙眞言を持誦する者、是の如く等の愚人は、久しからずして當に自ら軀命を損害すべきこと、亦前に說くが如し。佛菩薩は終に人を害し玉はず、然れども部內に於て諸の毒猛の鬼神有つて、彼の癡人の謬つて金剛杵を執る者を見ば、便ち瞋怒を生じて卽ち彼の命を害す。

[一〇]摩醯首羅天十俱胝の眞言を說き。[一一]那羅延天王三萬の眞言を說き。大梵天王六萬の眞言を說き。[一二]日天子三十萬の眞言を說き。[一三]伽路荼王八萬一千の眞言を說き。摩醯首羅大妃八千の眞言を說き。火神王七百の眞言を說き。[一四]摩登伽天王復た三千の眞言を說き。諸の龍王妃五千の眞言を說き。[一五]羅刹大將一萬の眞言を說き。四天大王四十萬の眞言を說き。阿修羅王二十萬の眞言を說き。[一六]忉利天王三十萬の眞言を說き。

各各俱に眞言手印及び曼荼羅を說く、法に依つて受持せよ。若し此の敎を爲すに、眞に非ず、誠

【八】那施—波多曳。金剛部に惣通する歸命の句である。

【九】苾芻・苾芻尼。苾芻は Bhikṣu の音寫。常には比丘と言ひ、淨乞食と譯す。苾芻尼は Bhikṣuṇī の音寫。常には比丘尼と呼び、乞士女・勤事女と譯す。

【一〇】摩醯首羅(Maheśvara)。大自在天。

【一一】那羅延天(Nārāyaṇa)。

【一二】日天子(Āditya)。

【一三】伽路荼(Garuḍa)。

【一四】摩登伽 Mātaṅga)。

【一五】羅刹(Rakṣasa)。

【一六】忉利天(Trayastriṃśa)。

此に馬頭と云ふと曰ひ、此の部の曼荼羅を名づけて[三]儞毘耶二合と曰ふ。

復た七眞言主あり。十二臂を眞言主とす。六臂と上髻と滿如意願と四面と不空羂索と二臂と、出し日光の世間を照耀するが如し。此等の七眞言主は、並に是れ馬頭曼荼羅の所管なり。

復た八明妃あり、[四]目睛と妙白と居白と觀世と獨髻と金顏と名利稱と苾唎倶胝とす。此等は皆是れ蓮花部の中の明妃なり。

復た種種の妙曼荼羅、及び諸の手印を説く。我れ貧窮の衆生を利益し、及び諸の鬼類を摧くが故に、七倶胝の眞言及び曼荼羅を説く。復た十使者・七明妃あり。又六十四嬪あり、又八大心眞言あり、又軍荼利等の無量の忿怒あり、又最勝明等の無量の眞言王あり。

是の故に此の部を名づけて廣大跛折囉と曰ふ。

復た大神あり、名づけて[五]般支迦と曰ひ、二萬の眞言を説く。此の神に妃あり、名けて彌佉羅と曰ひ、一萬の眞言を説く、名づけて般支迦部と曰ふ。

復た大神あり、名づけて[六]摩尼跋陀羅と曰ひ、十萬の眞言を説く、多聞天王三萬の眞言を説く、名づけて摩尼部と曰ふ。

復た諸天及び阿修羅等有つて、世尊の前に於て無量の明及び諸の眞言を説く、其の中に金剛部の内に入る者あり。

亦蓮花部に入る者あり、亦般支迦部に入る者あり、亦摩尼部に入るあり、亦部の所管に非ざる者あり。如上所説の眞言は略して種種の法則を教ふ。[七]五部の中に於て並に應に修行すべし。

復た諸天所説の眞言にして、世尊の印可し許し玉ふ者あり、亦應に修行すべし。是の如くの法則は、若し此の法に乘せば、即ち所願成就することを得。

【三】儞毘耶。未詳。

【四】目睛は多羅菩薩(Tārā)妙白は大妙白身(Gaurī-mahāvidyā)、居白は白衣(Pāṇḍuravāsinī)、觀世は聖觀音(Āryāvalokiteśvara)、獨髻は一髻(Ekajaṭā)、金顏は千手(Sahasrabhujasahasranetra)、名利稱は耶輸陀羅(Yaśodharā)、苾唎倶胝は毘倶胝觀音(Bhṛkuṭī)である。

【五】般支伽(Pāñcika)。彌佉羅(Mekhala)。

【六】摩尼跋陀羅(Maṇibhadra)。

【七】五部、蓮華部と金剛部と般支迦部と摩尼部と非部所管との五を云ふ。

次に東南方の[17]火天仙等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くば供を受くることを垂れよ。
次に南方の[18]閻摩羅法王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くば供を受くることを垂れよ。
次に西南方の[19]泥哩底部多大王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くは供を受くることを垂れよ。
次に西方の[20]嚩嚕拏龍王等を請す、諸の眷屬等と與に道場に來降し、願くば供を受くることを垂れよ。
次に西北方の[21]風神王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くば供を受くることを垂れよ。
次に北方の[22]多聞天王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くば供を受くることを垂れよ。
次に東北方の[23]伊舍羅天王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くば供を受くることを垂れよ。
次に上方の[24]梵天王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くば供を受くることを垂れよ。
次に地居の所有る諸大神王等を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、各本方に住して辦ずる所の供養、願くば納受を垂れよ。復た願くば常時に我を衞護せよ。是の如く諸の鬼神等及び護方の神王を供養すれば、行者諸の難事なふして、意に求願する所皆悉く滿足す。

[1]分別諸部分品第十一

復た次に蘇婆呼童子、世尊未來の一切衆生を利益せんが爲の故に、三倶胝五落叉の眞言及び明を說き玉ふを名づけて持明藏と曰ふ。
又聖觀自在三倶胝五落叉の眞言を說き玉ふ。此の部の中に於て、眞言主を名づけて[2]何耶吉唎婆

【一七】火天(Agni)。
【一八】閻摩羅(Yama)。
【一九】泥哩底(Nirṛti)。
【二〇】嚩嚕拏(Varuṇa)。
【二一】風神(Vāyu)。
【二二】多聞天(Vaiśramaṇa)。
【二三】伊舍羅天(Īśāna)。
【二四】梵天(Brahmā)。
【一】分別諸部分品。此の品下に明す五部の相を辨ずるから、分別諸部分品と云ふ。
【二】何耶吉唎婆(Hayagrīva)。馬頭と譯す。

りて落さしめ、及び手を以て抜くべからず。譬へば、人有つて手に金刀を執るに、若し善く解せずして執持すれば、自ら損害すべきが如し。眞言を持する者、法則に依らず、婬亂熾盛にして三處の毛を除き、女人に呈示して欲想を發生ずるを以て、但眞言成ぜざるのみに非ず、利刀を執つて自ら其の身を害するが如し。念誦の人の縱ひ法則に依らざる者も、其の部主の明王・眞言主等は、皆是れ菩薩なれば、終に人を損害せざれども、左右の侍從は彼の過を見るが故に、即便ち損害す。當に須く謹卓すべく、非違を行じて自ら其の禍を招くこと勿るべし。

復た次に蘇婆呼童子、若し念誦の人、及び成就せんと欲し、并に諸法を作すに、障難あること無く悉地を求めば、諸の飲食を以て諸天・修羅・藥叉・龍等・伽路羅・共命鳥等・[一二]羯吒布單那・乾闥婆・[一三]部多・諸鬼魅等の、或は地に居し、或は虚空に在つて行く者を祭祀すべし。右の膝を地に著け啓請して言して曰く、妙高山に居する天の諸の部多と、歡喜園及び餘の天宮に居すると、日月宮に居すると、或は河海の所に居すると、或は陂澤・泉水に居すると、或は村落及び諸の神廟に居すると、或は空室に居すると、或は天室に居すると、或は伽藍・制底に住すると、或は外道の草庵に居すると、或は象室に居すると、或は庫藏に居すると、或は街巷に住すると、或は四衢道の邊に居すると、或は獨樹に依ると、或は大路に在ると、或は塚間に住すると、或は屍陀林に居すると、或は大樹林に寄ると、或は師子大蟲遊戲の處に居すると、或は大砂磧の中に住すると、或は諸洲の上妙の處所に居するとを皆諸つて啓請す。諸の眷屬と與に降臨して此に來り、我が營辦する所の花鬘・塗香・燒香・飲食及び妙燈明、願くば[一四]歆饗を垂れて、我が所求の事において其の果を滿足せしめ玉へと。以て諸の鬼神を供養し已り、後に應に別日に護方の諸神を供養すべし。前の如く供を辦じ、胡跪合掌して即ち應に召請すべし。

[一五]謹んで東方の[一六]憍尸迦天を請す、諸の眷屬と與に道場に來降し、願くば供を受くることを垂れよ。

【一二】羯吒布單那(Kaṭapūtana)。體臭者・奇臭鬼・極臭鬼と翻ず。
【一三】部多(Bhūta)。鬼と譯す。
【一四】歆饗。鬼神の氣をうくるを云ふ。
【一五】謹んで東方等。以下は十天等を請召して、所求を祈るを明す。
【一六】憍尸迦(Kauśika)。帝釋。

是の如く日月停めず、或は七日・三七・四七・五七・六七・七七日、或は一月、或は百日、或は百二十日すれば其の驗證現はる。

若し上の如く作法すとも、成ずることを得ずんば、年を以て期と爲せよ。三年・六年、或は十年・十二年作すこと不退ならば、畢に大悉地を得ん。必ず須く如法に呼摩すべし。正しく燒火の法の時には、應に火の色を觀ずべし。其の爐中に於て、火色炮焰の聲あらば成ずべし、成ぜずんば自ら相貌現はるゝことあらんのみ。其の火煙なく、焰金色の如くにして、右に旋つて婉轉し焰峯熾多なり。其の色或は白或は紅色の如く、或は焰極めて赤きこと由し珊瑚の色の如く、滋潤して其の焰上に衝き、復た流れて下に廣く、或は日月の光の如く、其の焰の形狀、瓶・幢・傘蓋・吉祥の字形・螺貝・蓮花のごとく、或は呼摩の酥の杓等の形の如く、或は三鈷・五鈷・金剛杵の形に似たり。或は橫刀の如く、草束の形の如く、或は車の形に似たり。或は蠅の拂ふ聲の如く、笛・箪篥等を吹く聲のごとく、或は螺の聲の如くならん。如上の種種の音聲を得、其の氣由し酥を燒くの香の如く、復た炮烈なし。其の火扇がざるに自然に著かん。斯の如くの相現ずることを得ば、必ず當に廣大の悉地を獲得すべし。又燒火を觀るに不成就の相貌の法とは、正しく燒火の時、或は煙を起すこと多く、亦復た炮烈して其の焰發り難く、假令ひ發る時も亦增盛せず。後時に頓に滅すること由し火なきが若し。焰色憔悴して黑きこと闇雲の如く、波羅賒の形の如し。由し一鈷の叉の如く、又簸箕・男根・牛角の形の如し。其の火聲を出すの狀、驢の鳴くが如し。又復た火を迸らしめて念誦の人を燒き、爐の內の香煙死人を燒くの氣の如くならん。斯の如く相を現じ已んぬる時は、念誦の人悉地得難し。行者斯の不祥の相を見ば、卽ち應に [九] 赤身明王或は [一〇] 吉利吉羅を以てし、或は不淨忿怒等の明王の眞言を以て、而も呼摩を作さば、其の不吉の相卽ち當に消滅すべし。必ず須く如法なるべく、是れ輕爾に非ざるなり。念誦の人愼んで [一一] 三處の毛を剃除すること勿れ、亦火をもて燒き、復た藥を塗

【八】吉祥の字形。卍字のこと。

【九】赤身明王。馬頭觀音(Hayagrīva-avalokiteśvara)。

【一〇】吉利吉羅(Kelikila)。軍荼利(Kuṇḍali)のこと。

【一一】三處の毛。腋の下と大小便道とを云ふ。

に居して一心に念誦し、或は一年の中に安居を除いての外、春秋の二時、意に隨つて山林・河邊・泉池・空室とに遊行し、心を專らにして念誦すべし。譬へば、比丘の[三]夏の月に安居するが如く、念誦の人も亦復た是の如し。行人念誦の遍數を滿すと雖も、正夏は安居して成就の法を作すこと勿れ、作法せずと雖も、念誦間斷することを得ざれ、夏を解き已つて後に如法に護身し、方に成就の法を作すべし、愼しんで法の外に事を行ずること勿れ。

復た次に蘇婆呼童子、今念誦の人の爲に、呼摩法の爐を置く差別の法を說かん。此の法或は團圓に作り、或は三角に作り、或は四方に作り、或は蓮花の形の如くすべし、並に須く基あるべし。爐の口に唇を安き、泥をもて拭つて細滑にし、外邊の[四]基階並に須く牢固にすべく。

若し善事を作し及び錢財を求め、他をして敬念せしめんとして息災の法を作さば、其の爐は須く圓なるべく。

[五]若し一切の諸事を成就せんことを求め、或は女人及び童子女等を求めば、其の爐は須く蓮花の形なるべく。

若し[六]阿毘者嚕の法を作し、或は走等の事を爲さば、其の爐は須く三角に作るべし。

[七]若し諸龍及び餘の鬼類を調伏し、或は火に燒けしめ、或は苦しましめんと欲せば、其の爐は須く方なるべし。基唇及び爐は瞿摩を以て塗り、復た茅草を用て基の上に布き、及び基の下に安じ、所塗の處に塗花香等辦ずる所の物に隨つて、三寶及び本部主、幷に諸明王本眞言主等に供養せよ。爐の中に火を生ずに、口を以て吹くべからず、扇を以て火を扇ぎ、然して後に稻穀花を取つて酥に和し、或は胡麻を酥に和し、本部の明王の眞言を以て念誦して、呼摩を作すこと七遍、或は八、或は十、乃至二十一遍して明王を供養すべし。其の作法の人は、面を東に向けて坐せよ。酥・蜜・酪等を取り、共に一器の中に和して、呼摩木を取り、器中に向けて兩頭を搵し、爐內に擲げて之を燒け。

【三】夏の月に安居。印度の季節、四月から七月に至る九十日は、毎年霖雨が烈しくて、行旅遊方に適しない。そこで釋尊在世の當時、この季節を以て所在の窟等に蟄居し、專ら各自の修養に勤めしめて、化他の勞を避けしむ。これを雨安居、或は夏安居、また略して單に夏とも稱す。蓋し、安居(Varṣa)とは安穩靜居の意。

【四】基階。爐の緣、卽ち本尊を安置すべき處を云ふ。

【五】若し一切云々。敬愛の爐形を示す。

【六】阿毘者嚕(Abhicāruka)。降伏と譯す。

【七】若し云々。增益(Pauṣṭika)の爐形を示す。

分別道分品第十[一]

復た次に蘇婆呼童子、我れ今念誦の人の爲に八聖道の法を說かん。正見・正分別・正語・正業・正命・正勤・正定・正念とす。此れは是れ諸佛所行の道なり。念誦の人此の道を行ぜば、眞言乃ち成じ、此の報盡くるに於て、復た人天勝上の妙處に生ぜん。過去の諸佛此の道を行ずるが故に等正覺を成ず。現在未來の諸佛も亦復た是の如し。身・口・意業に修する所の功德、常に正教に依つて疲倦を生ぜず。是の如く修行せんと欲するを、乃ち正業と名づく。飲食・衣服・臥具及び湯藥を受くるに、常に知足を懷いて染著を生ぜず、是れを正命と名づく。己身を讃めず、他人を毀らず、諸過を遠離すること、火坑及以び猛獸を避くるが如くし、常に寂靜を樂ふ、是れを正語と名づく。吉凶男女等の事を占相すると、天文・地理・調・鷹・調馬、及以び調象・射藝・書算・世間の言論・無益の典とを學ばず、斯の過を遠離する、是れを正分別と名づく。象の鬪ひ、馬の鬪ひ、牛・羊・雞・犬等の鬪ひと、男女の相扠撲とを觀ず、亦往いて觀ず、上の如きの戲を離る、是れを正念と名づく。王臣・盜賊・鬪戰・相殺・婬女の論、及以び謎語を說き、往昔の事を說かず、念誦の人乃至未だ成就せざるより、中間に城・村落・邑里及び生緣・伽藍・制底の處と、外道神祀所居の處とに入るべからず、若くは園林池河、此の如く等の處並に往くべからず。

若し前の如く[二]七德の事業を作さずして、常に山林・高峻・崖峯・四絕の頂に居し、晝夜に懈らず眞言を念誦すれば、果を獲ざることなし、是れを正勤と名く。

復た次に蘇婆呼童子、若し念誦の人前の如き上妙の勝處を獲ざれば、應に空閑の神廟に居すべし。或は樹下に居し、或は河邊に住し、或は山の側に居し、或は泉池林間、或は無人の處、或は空室

【一】分別道分品。此の品最初に八正道を辯ずるから、分別道分品と云ふ。

【二】七德の事業。七正に非ざる事業のこと。

狸・羖羊を畜ひ、鸚鵡及び諸の鳥類を籠禁すること勿れ。是の如くの人は、今世後世に眞言を念誦すとも亦成就せず。是の故に世尊に供養するの物を受用すべからず。所供養の食も亦踐むべからず。脚をもて踏み、地に墮するの食は供養物に堪へざれば、頂戴すべからず。亦大自在天及び日月天・火天・那羅延天を禮拜すべからず。假令苦に遭ふとも亦禮すべからず、彼が所設の敎も誦ずべからず、亦供養すべからず。人有つて彼の天を持誦せば、持誦の人にも亦瞋を生ずること莫れ。但し隨喜すること莫れ。當に怜愍を邪見に墮する人に加ふべし。亦彼の眞言を誦じて彼の德を讃歎すること勿れ。設ひ若し財有つて供養すとも、慈悲を以て願を至せ、一切衆生當に正見に住すべしと、是の如くの願を發すべし。凡そ所作の業あらば、先づ當に一切の諸佛及び所居の處を禮拜し、次に一切の金剛護法善神の衆を禮すべし。譬へば、初月の未だ圓滿ならずと雖も、然も諸人等しく敬を致して禮拜するが如し。念誦の人は常に須く菩薩・緣覺・金剛・及び聲聞衆を尊敬すべし。未だ覺滿せずと雖も、漸漸に當に菩提の滿月を成ずべし。是の故に當に須く敬を致して、諸の菩薩と一切の聖衆とを禮拜すべし。彼等の菩薩は、能く一切衆生を荷負して救濟するを以ての故に、大慈悲を發し、已に淳熟するが故に神力思議すべからず。大精進を具して、直言祕藏此れより而も出づ。愚癡下劣の衆有つて、若し拜せずんば、直に眞言を成ぜざるのみに非ず、亦諸佛を毀謗す。譬へば、花より乃ち果實を成ずるが如し。花は菩薩の如く、果をば菩提に喩ふ。是の故に應に須く佛・法・僧寶を頂禮し歸依すべし。菩薩復た欲を行ずる者には、欲を行ずることを示現し、剛强の者に於ては剛强を示現し、柔軟の者に於ては柔軟慈悲を示現すと雖も、然も彼の菩薩には憎愛なし。云何んが彼等の菩薩を禮せざらん、種種の眞言法則を行ずるを以て、類に隨つて能く諸の衆生の願を滿ずるが故に。復た能く一切の業果を了知せり、是の故に應に尊師を禮すべし。

得べし。善心なき者は虚しく詐功を費すとも、唯し地獄の苦楚のみ能く此等の類を迴す。

復た次に蘇婆呼童子、若し念誦の人は、先づ三寶の處に於て恭敬の心を起し、謙下卑順して前に向ひ、胡跪し合掌して尊者に白して言さく、我れ今懺悔す、一切の罪障願くば悉く消滅せん、今より已後更に重ねて造らじ、願くば尊慈悲をもて攝受し玉へ。我等佛法の中に於て無上菩提を發さば、佛を得るに至るより已來、惡魔の我が菩提眞實の見を壞するに値ふこと勿らん。願くば尊證知し玉へ。今より向去更に餘の邪魔外道惡人に歸せじ。亦雜類の諸の天神等を禮拜せじ。唯し佛菩提及び三寶の所にのみ心を繫け、念を一らにして誓つて移易せじと。常に是の如く等の願を發さば、其の所作の念誦の事法速に悉地を得、亦衆生を救攝することを得て、代つて苦惱を受け、衆の須むる所の物、我れ薄福なりと雖も、其の力に隨つて辦じて悉く充足せしめん。我れ菩提心を發し、眞言を念誦する威力を以て、我れをして猛害毒惡の人類を摧伏せしめ害を爲すこと能はずして自然に消滅せしめん。一切衆生をして悉く畏懼なからしめん。我れ今眞心をもて念誦するを以て、諸天善神護するが故に、眞言の威力思議すべからず。一切の衆靈欽敬し恐怖す。何に況や凡夫の惡人として、摧滅せざる者あらんや。行者、凡そ眞言を持する者は、故に手を以て草木を斷ち、脚を以て蓮花及び諸の壇地、幷に契印等を践踏することなかれ。亦復た諸の藥等の類をも禮拜せよ。亦鬼神を供養し及び祭祀するの食を喫し、或は地に棄著する所の食を喫すること勿れ。婦人と共に語り、及び畜生等と淸淨の處に於て、爲に非法の事を行ずること勿れ。明及び藥を以て諸の蛇類を捉へ、或は象に乘り、或及くは生驢を走らしめんと欲するが故に、杖を以て之を打ち、病難を致し及び苦難に遭ふ人の處に、慈悲の念を發さざらん。是の如くの人は、眞言を念誦すとも、亦成就し難し、智人と名づけず。譬へば、虛空の終に量るべからざるが如く、三寶及び衆人の處に於て、益及び損を行じて、善惡の報を獲ることも亦復た是の如し。又網羅羂索及び諸の方便を作して、衆生を傷害し、及び猫・

し、惡言をもて謗毀して其の長短を求めんと欲し、火を持して伽藍精舍を燒き、尊客及び僧房等を毀壞す。此等の罪をもて、斯の人の報盡き命終して、當に十方一切の阿鼻地獄等に墮して、皆千劫を受くべし。然して後に餓鬼の中に墮し、鬼身畢已つて、復た傍生に墮す。傍生畢已つて、最後に人身を獲得せば、【八】六根不具にして、常に下賤の家に生れ、乞丐して而も活す。設ひ身力を使ふとも、恒に死屍を客擔するを以て、財を求めて活命しければ、食飲其の口に充たず。恒に飢餓を受くれば、食飲を擇ばずして、或は狗・猪・猫・鼠等の肉を噉ひ、以て其の命に充つ。若し善友に逢へば、卽ち菩提を發すも、若し闡提愚痴等の人に値へば、還つて惡業を造り、復た地獄に墮して還た數劫を經。世尊の說き玉ふ所は、諸佛如來すら還つて如來を供養し玉ふ。何を以ての故に、福を求め玉ふが故にと。何に況や凡夫として、專ら頑愚を事として福を求めざらんや耶。菩薩は衆生を怜愍して佛身を得、一切衆生を捨てざれば、見る者、觀視し敬念して厭足あることなし。菩薩は衆生の一生の命をも害せず、何に況や多の命をや。害せざるを以ての故に、諸の病苦無きことを得、身具足することを得て、得佛の後に復た壽命を增す。食を施すことも亦爾なり、壽命長きことを得。衆生佛の影の中に遇へば、皆安樂を得て身命を保全す。菩薩は常に衆生に謙下して、承接し供養す。若し須むる所あれば、前意に違はずして皆悉く之を給す。若し前人法を解せば、身を以て床座として其の上に坐せしむ。妙法を聽くを以て、得て以て奉行し、退轉を生ぜずして佛の常身を求む。何に況や、凡夫一も所解なく、福は毫分も無ふして一切を輕慢し、而も高心を事とし、智者に遇はずして【九】檀果の業を行ずるをや。今罪福の二を說くこと等し、粗略して言はば、罪ある人は先づ識悔を求め、對首して其の過を發露し、一一具に述ぶべし。覆藏して述べざれば、罪も亦滅し難し。然して後に好き明師を尋ねて、遵承し、供養し、珍重し、看仰して、三昧耶に入る法を請ひ求め、許を蒙つて壇に入ることを得已らば、後に於て漸漸に眞言の法則を諮問し得已つて、修行して當に悉地を

【八】六根。六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）の所依となつて、六識を起し、對境を認識するもの、卽ち眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根をいふ。

【九】檀果の業。擅に惡業を行ずるを云ふ。

と七遍或は三遍すべし。即便ち捨て去らん。智者善く是の如くの妙法を解し、復た能く一一に法の如く修行すべし。久しく勞苦せずして而も成就を獲ん。

分別遮難分品第九

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人有つて、過去に阿羅漢を殺し、今世に父母に反逆し、幷に和合僧を破し、瞋心を懷くを以て佛身より血を出し、惡習氣の故に今生に人の自心を過つを求め、事に觸れて閑はざれども、詐つて解する相を作す。是の如く等の人、善友に値はず、善友も惡しとするが故に反つて邪見を生じ、又(二)窣覩波を破り、及び(三)畢定の菩薩を殺し、自ら羅漢母を汚し、人に敎へて殺さしめ、或は僧の財物を盜むこと、或は多或は少ならん。世尊は是れを(四)五逆無間の罪人なりと說き玉ふ。若し犯すこと一罪なれば一倍を增す。若し具に五逆を犯さば、轉た五倍を增し、命終して當に(五)無間地獄に入り、十大劫の苦を受くべし。復た現身に罪を造ること邊際を知らず、癡心高慢にして過を懺首せず、轉た我見を生ず。而も眞言祕藏を誦持せんと欲して、假使勤苦して眞言を念誦すとも、終に亦悉地を獲ず。障重きを以ての故に、未だ對首して其の罪を懺謝せざるが故に、未だ佛物・法物・僧物・及び一切の衆の知識等の物を償はず、凶突頑愚にして、曾て未だ一毛頭の分をも改悔せざるが故に。何ぞ能く眞言を持誦して、悉地の果を求獲せん耶。(六)四趣長遠にして一たび中に墮せば、何れの時にか當に出離解脫を得べき。此等の苦類の一切衆生、惡道の業を受けずんば、世尊(七)一闡提及び地獄等の苦ありとは說き玉ふべからず。何の解あつてか、須く解脫を得んことを求めて、心を苦しめ體を毀つて而も悉地を求むべきぞ。

又諸佛所說の微妙の經典を瞋心もて損壞し、或は火を放つて焚燒し、或は水中に棄て、或は不淨の厠の中に棄て、或は法身を謗り、或は持戒の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を殺し、或は打罵欺陵

【一】分別遮難分。此の品眞言の悉地を得る遮難を分別し明す故に斯く云ふ。

【二】窣覩波(Stūpa)。大聚・方墳・圓塚・高顯等と譯す。佛舍利を安置する所であるから、或は佛舍利處とも云ひ、また靈廟ともいふ。

【三】畢定の菩薩。畢定は究竟と同じ。故に等覺の菩薩のこと歟。

【四】五逆無間。殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出佛身血、これを五逆又は五逆罪といふ。この五罪は、決定して無間地獄に墮する因であるから、五無間業或は五無間罪とも云ふ。

【五】無間地獄。無間は梵語阿鼻(Avīci)の譯。八大地獄中の第八の最重苦處で、墮獄の罪人痛苦を受け、休息の間斷がないから無間地獄と云ふ。

【六】四趣。六趣の內、人・天の二趣を除き、地獄・餓鬼・畜生・修羅の四迷界をいふ。趣は趣向の義。有情が惑を起し業を造つて、當來に趣き向ふ處であるから趣となづく。

【七】一闡提(Icchāntika)。信不具と譯す。佛法を誹謗し、因果の理を信ぜざるものである。信不具であるから、一切の善根を燒失し、永く生死界に流轉して出期なし。

男を得ば、白月八日、或は十四日、或は十五日に於て、澡浴清淨にして新淨衣を著し、香花・然燈塗香・燒香を以て八戒を與受し、其の日斷食させ、其れをして前の曼荼羅の内に坐せしめよ。次に卽ち香花・然燈・塗香・燒香・種種の飮食を以て本尊を供養し、八方を護る大神及び阿修羅と諸餘とに一一皆須く供養すべし。又妙花を以て彼の童子の身上に散らし、及び香をもて身に塗れ。然して後に念誦の人、手に香爐を執り、本尊を頂禮して眞言を念誦すべし。先づ吽字を中間に置いて、應に揭唎忻拏の句を呼ぶべし。又阿毘舍遍入の字と云ふを呼び、又乞灑鉢羅二合速と云ふを呼べ。私那下り已つて、卽ち此の相現ずること有る時、爲し眼目歡悅して物を視るに瞬かず、出入の息無くんば、卽ち當に私那已に下ると知るべし。卽ち遏伽水及び燒香を取つて供養し、心に最勝[八]明王の眞言を念じて、卽ち應に敬問すべし。尊者は是れ何れの類の神なるぞ。自他疑惑する所あらば、卽ち應に速に問ふべし。彼れ自ら當に三世の事の利を求め利を失ひ、及び苦樂等を說くべし。所聞の敎宜しく速に受持すべし。疑惑を生ずること勿れ。所聞の事畢らば卽ち速に發遣すべし。若し此の法を具すれば、私那速に下る。若し法に依らずんば、卽ち成就を得ずして人の爲に笑はれん。復た次に私那自ら下るとは、彼の童子等の面貌熙怡し、容顏滋潤し、眼目廣長にして、黑睛を遶つて外に微し赤色あり、精神意氣大人の相有つて出入の息なく、眼も亦瞬かずんば、卽ち當に知るべし、是れ眞の私那なり。若し魔等下らば、卽ち別に相貌あらん。眼赤く復た圓にして、人の瞋つて視るが如く、眼睛轉ぜずして、口を張つて恐怖し、亦出入の息なく、眼も亦瞬かずんば、卽ち當に夜叉等下ると知るべし。卽ち須く發遣すべし。若し肯ひ去らずんば、卽ち應に便ち妙吉祥の偈を誦じ、或は不淨[九]忿怒金剛の眞言を誦じ、或は大集陀羅尼經を讀むべし。上の如く讀誦しても、若し去らずんば、卽ち應に師子座の眞言を以て遏伽水を用ひ、或は波羅賖木と酥と相和して、呼摩すること百八遍、或は胡麻を以てし、或は稻穀花を酥蜜に相和して、呼摩すること百遍、最後に軍茶利の眞言を以て、呼摩すること

【八】最勝明王。無能勝明王(Aprājita)を云ふ。

【九】不淨忿怒。烏蒭沙摩明王(Uochugmun)のこと。

摩せる灰を以て、鏡を揩つて淨からしめ、或は七八遍乃至十遍して、曼荼羅の上に置いて仰け著すれば、鏡中に卽ち世間の事を現出すべし。

又横刀の中に於て事法を看ることも、亦同じく鏡の如くせよ。

若し手の指の面の上に於て吉凶を看んと欲せば、先づ [三]紫礦水を以て其の指を清淨にし、後に香油を以て之に塗れ。卽ち諸の吉凶の事を現ぜん。

若し水中に於て看んと欲せば、其の水を淨漉して瓶の中或は甕の中に置き、然る後に一りの童子を遣はして、中に於て之を看せしめよ。卽ち皆一切の吉凶を見ん。

又寶等に下るを見せしめ、及び眞珠の中に看んと欲せば、卽ち淨水を以て寶等及び珠の上に灑ぎ、端心淨住にして眞言百八遍を念誦せよ。卽ち一切の相貌を現ぜん。

又若し尊像をして下らしめんと欲せば、花を以て供養すべし。卽ち自ら之を現ず。燈の中も亦前の法の如し。乃至夢中に爲に諸事を說くことは、上の所說の如し。下私那の法を具に悉く修行するも、若し下らずんば、卽ち應に一日斷食し、具に八戒を持して大慈悲を發すべし。或は制底[四]に於て、或は端嚴の像の前に於て、部母の眞言を取り、或は部主の眞言を取つて作すこと是の如し。復た念誦の法には極めて專心を須ゐよ。身を搖がし及び眠ることを得ざれ。茅草に坐し、前の部母と部主との眞言等を持して、任に [五]一道を誦じ、數落叉或は二落叉に滿たば、意に將に足りぬとせよ。此の法の若きは我が [六]唵字を呼ぶ。枯木にも尙ほ其の中に入つて下語せしめん。何に況や人をや。

又若し童子の所に下さんと欲せば、卽ち [七]十箇を簡び取れ。或は八、或は七、或は六、或は五、或は四、或は三、或は二、或は年十二、或は八歲の者の身分の血脈及び諸の骨節悉く皆現れず、圓滿し具足し、眼目端正にして青白明に分り、手指纖く長く、脚掌齊しく平かにして、八處の表裏圓滿し、身相具足し、鬚髮青黑にして、人の見る所の者、心に愛樂を生ぜん。若し是の如く等の童

【二】鉢私那。未詳。阿毗舍法の如き歟。阿毗舍は梵語、正しくは Āveśa こゝに入と譯す。阿毗舍法とは、具さには摩醯首羅、阿毗舍法と云ひ、天部・鬼神等を勸請して、これを童男・童女に寄り入らしめ、人事・吉凶・三世・善惡の諸事を說き出さしむる法である。

【三】紫礦水。麒麟竭である。虫の泡を出して、極めて赤色な大樹に在る物である。

【四】制底(Caitya)。佛堂のこと。或は支提・支帝・支徵・制多に作り、積集・福聚を義とす。又、方墳・廟・滅惡生善處等の譯を用ふることもある。

【五】一道。一種と云ふ意、卽ち眞言一種のこと。

【六】唵字。歸命の義。

【七】十箇。人數である。

願の果を求むべし。卽ち自ら陳說せよ。彼の尊の所言く、善い哉佛子、汝が求め願ふ所豈に小なるのみにあらざらんや。若し衆生有つて、發心して菩薩の行を修せば、佛身すら上ほ獲、何の處にか此の願の汝に隨はざらんことを慮らん。今より以去、汝が所欲を恣にすとも、終に違はざらん。汝が願を得るに因んで、一切衆生も亦復た是の如くならんと。速に菩提を發して早く解脫を求むべし。旣に願を得已らば、歡喜して深心に頂禮し、胡跪して讚歎し、復た遏伽を以て如法に供養し、所持の眞言、彼の尊の前に對して之を誦ぜ。然る後卽ち應に如法に發遣すべし。一切の持眞言者の法皆是の如し。錯誤して功夫を枉棄せしむること勿れ。

下[一]鉢私那分品第八

復た次に蘇婆呼童子、若し念誦の人[二]鉢私那を問ひ下さんとならば、當に如法に請召すべし。所謂、手指或は銅鏡、及び淸水・橫刀・燈焰・寶等、虛空・尊像・童子・眞珠・火聚・石等是の如くの處に於て、鉢私那を下すとは、請召して來り已んなば、當に卽ち自ら天上人間、及び過去・未來・現在、超越三世の善惡等の事を說くべし。一一に具に說くべし。法若し闕すること有り、眞言を持するに字數或は加減有り、或は經て誦せず、正信を具せず亦供養せず、不淨の地に於き天晴明ならず、童子の身分或は賸り或は少けん。斯の過等有らば私那下らず。若し請じ下さんと欲せば、初に應に私那の眞言を持誦すべし。持誦の功畢つて、卽ち白月八日、或は十四日、或は十五日に於て、是の日食せずに、瞿摩を以て地に塗るに牛皮の形の如くし、卽ち童子を將ゐて淸淨に澡浴せしめ、新白衣を著して其の上に坐せしめ、花香等を以て供養を爲し、自らも亦內に於て面を其の東に向けて茅草に坐せよ。

又若し彼をして、鏡中に相貌を現ぜしめんと欲せば、則ち先づ其の鏡を取り、梵行の婆羅門の呼

欲(貪愛、貪取、慳貪)・瞋恚(嫉妬、恚害)・邪見(愚癡)を云ふ。

【三四】十一切入。或は十一切處と稱し、新譯にては十遍處定と云ふ。六大・四顯色の一々を採つて、是れ一切處に偏滿すと觀ずる十種の觀法である。地遍處定(Prithivi-kṛtsnā-yatana)・水遍處定(Ap-k.)・火遍處定(Tejas-k.)・風遍處定(Vāyu-k.)・青遍處定(Nīla-k.)・黃遍處定(Pīta-k.)・赤遍處定(Lohita-k.)・白遍處定(Avadāta-k.)・空遍處定(Ākāśa-k.)・識遍處定(Vijñāna-k.)、大小乘に通じた名目であるけれども、其の名稱・順序等は一樣ではない。

【三五】若し心內。上の温・烟・火光の悉地の相は心外に現る。これに對して以下は心內の相を明す。

【三六】心內の悉地。一十三種の相を說く。

【三七】遏伽。閼伽は供養の通稱。

【三八】胡跪。胡國の座法であるから胡跪と云ふ。卽ち兩足互に跪くことである。

【一】下鉢私那分。鉢私那(Paśina?)を下して、三世・吉凶・禍福・善惡等の事を知ることを說く。故に下鉢私那分品と云ふ。

と作つて、四大の軀に變じて清淨微細の身を求む。[一四]龍天八部も見ること能はざる所なり。何に況や人をや。若し身を見せんと欲せば、意に隨つて自在に天人の座に處して衆の爲に說法すべし。或は[一五]一小劫、或は一大劫、或は無量劫、諸法絕えず衆生を利益す。是の如くの辯才を盡し求むべからず。菩薩の位を紹がんと欲ふが故に。譬へば人死して冷觸身に遍じ、却つて中陰身中に來入することを得、却つて[一六]酥活を得て壽命百年なるが如し。又日光の以て火珠を照せば、便ち其の火を出すが如し。亦此の如く等は、後に於て是の如く等の上上の人有つて、能く勤苦し念誦し精進して解らずんば、眞言の悉地成就を獲。[一七]菩提心の光を以て無明の闇を照さば、慧珠便ち出で丶[一八]四辯倶に發し、[一九]三明を證得して三毒永く滅し、八苦倶に無ふして[二〇]八聖道を得、[二一]九惱休息して[二二]九次第定を得、[二三]十惡を屏け除いて[二四]十一切入を得、諸力具足して金剛菩薩の如く、神通自在にして障礙有ること無し。當に金剛不壞の身を獲べし。是れ火光悉地を得と名づくる者是れなり。是れを成就の法と名づく。[二五]若し心內成就の事を論ぜば、其の相若し現れぬれば即便ち悉地す。云何んが[二六]心內の悉地なる。

或は佛像の頂上に於て花鬘の動くを見。或は尊容の眉の動くを見、或は嚴身の諸の瓔珞の動くを見、或は空中に種種の天花を雨らすを見、或は空中に於て微し香風有つて諸の林中に動き、或は細微の香氣の雨を下し、或は地動を覺え、或は空中に聲有つて是の如くの言を作して、汝が求むる所のもの、今當に之を說くべしと云ふを聞かん。或は燈焰明盛にして、其の色潤澤に曜くこと金光の如く、增長して高さ一丈に餘るを見、或は油盡くれども燈光轉た盛なるを見、或は自身の毫毛頻頻として悚竪すれども、心に歡喜を生ずるを覺え、或は空中の天樂の聲を聞き、或は空中に本尊及び其の眷屬圍遶して下來するを見ん。若し上の如き斯等の相貌を見ば、報んで自身必ず悉地を獲と知つて疑なし。即ち應に速に香花を辦ずべし。淨器の中に於て香水を盛滿し、復た五寶を安ずる是れを[二七]遏伽とす。珍重奉獻し、即ち深心を以て恭敬し[二八]胡跪して頭を叩き、本の功夫を量つて應に

苦行・孫陀利謗・木槍・馬麥・流離王殺釋種・乞食空鉢・旃茶女謗・調達推山・寒風索衣の九種を擧ぐ。また、大智度論卷九には、佛も九罪報を受け給ふを示す。前者に九種を數ふると少異がある。尙、小乘經の中、興起行經には、佛の惱事に就て十種を擧げて、一一其等の因緣を說く。是れ即ち千佛が衆生化益の爲に、宿業の脫する能はざることを示現し、善惡報應の理を信受せしむるものとなす。

【二二】九次第定。次第を經て間隔なく進み入る九種の禪定。初禪次第定・二禪次第定・三禪次第定・四禪次第定・虛空處次第定・識處次第定・無所有處次第定・非想非非想處次第定・滅受想次第定を云ふ。又鍊禪の稱がある。諸の佛弟子、心に無漏を樂ひ、先づ諸の味禪を得、今其の滓穢を除かんと欲し、無漏禪を以て之を鍊り、皆清淨で鍊金の法の如くであるから斯く名づく。

【二三】十惡。身・口・意の三業に起す十種の非理損耄の業。十善の對稱、即ち殺生・偸盜(不與取、刧盜)・邪婬(欲邪行、婬泆、邪欲)・妄語(虛誑語、虛妄)・兩舌(離間語、破語)・惡口(麁惡語、惡罵)・綺語(雜穢語、非應語、散語、無義語)・貪

の地を得、細瞿摩を用て地に塗つて淨め已り、次に香等を塗り、尊像を安置し、及び彼の尊容に香花・飲食及び[四]遏迦水を供養し訖已つて、便卽ち十方の佛菩薩を讃歎し供養すべし。次に復た本部の主を供養し、次に復た[五]自部の明王を供養すべし。然る後に供養する所は、[六]本所持の尊なり。次に復た重ねて妙菩提心を發し、廣大なる慈悲の願を興すべし。一切衆生の常に[七]四趣に溺るゝを出ることを得せしめんが爲の故に、又應に大乘明經、或は[八]吉祥偈、或は法輪經、或は如來祕密經、或は大燈經を讀むべし。中に於て任隨に一部を讀み、然る後に卽ち須く八方界を結し、幷に虛空及び地界等を結し、又眞言を以て自身被甲すべし。如上所說の諸の曼荼羅は、淨彩色を以て意に隨つて一を作れ。[九]八方を護する神、要ず須く彼等を安置して、能く諸の障難を摧くべし。

復た次に蘇婆呼童子、應に師子座明王を以て、[一〇]其の茅座を眞言して、曼荼羅の內に安ずべし。先づ其の身を護し、所成就の物を壇上に安じ、持誦の人彼の物の上に於て、須臾の間に復た香水を灑ぎ、相應の法を以て呼摩すること一千遍、先づ三箇の[一一]阿說他葉を取り、所成就に擬する物を葉の上に置き、白淨の氎布を以て其の上を覆ひ、卽ち應に如法に專心に念誦すべし。乃至當に三種の相を現じ已るを、卽ち成就と名づくべし。何等か三相なる。溫と烟と火光と是れを瑞相と名づけ、卽ち三種悉地成就と名づく。其の三種の相現ずる時、一時に頓に現ず可からず。瑞に下と中と上と有ればなり。何を以てか是の如くなるや。一人有つて世間に名利を求覓し、富貴自在にして、去る處に他人をして敬念せしめんことを得んと欲す。如上の一文、是れ第一に溫氣の悉地を得る者是れなり。第二の中人有り、世間の八苦に惱まさるゝを厭離し、自ら己身は久住處の法に非ずと觀じて、罪を造ること彌多くして、[一二]三塗に墮落せんことを恐畏す。所以に形を轉じて、其の身影を滅することを得んと欲して、[一三]中壽の身を得。世間の人は得可からず、烟の悉地の者是れなり。一人有り、下中の生處を欲せず、直に三界を出でんと擬し、永く諸苦を離るゝことを得んと欲して、持明仙王

を增し、以て人壽八萬四千歲に至る。かく一增一減するを一小劫となし、この一小劫を二十倍するを一中劫となす。而して世界の成立から破壞に至るまでに、成・住・壞・空の四劫がある。これをなづけて一大劫とす。

【六】酥活。酥は甦に同じ。

【七】菩提心の光。初地淨菩提心の智光を云ふ。

【八】四辯。佛の有する四無礙辯の略。一、法無礙辯・二、義無礙辯・三、辭無礙辯・四、樂說無礙辯。

【九】三明。過去世に於ける因緣・行業を知ること(六通の中の宿命通に當る)、未來に於ける相を知ること(六通の中の天眼通に當る)、煩惱を斷絕して、更にまた生死せざるを知ること(六通の中の漏盡通に當る)、これである。

【一〇】八聖道。正道修行上の分類である。一、正見・二、正語・三、正思惟・四、正業・五、正命・六、正精進・七、正念・八、正定。以上の八は、よく涅槃に到らしむる故に、八正道或は八聖道と云ふ。

【一一】九惱。又、九難・九橫・九罪報とも云ふ。印度出現の釋迦佛が、受け給はれた九種の惱事を云ふ。大明三藏法數卷三十三に六年

我れ眞言の悉地に近しと知るべし。卽ち應に成就の法事を備ふべし。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人起首して悉地を求めば、應に八戒を具すべし。或は二三日亦は須く斷食すべし。然して後に成就の法を作すべし。

爾時に蘇婆呼童子、執金剛菩薩に白して言さく、尊者先には食に由るが故に、清淨なることを獲得すと說き玉へり。今云何んが應に須く斷食すべしと言ふや。世尊亦說き玉はく、食することは、車に膏して牛の氣力を省けば、車卽ち牽かるゝが如し。衆生を利することも亦爾なり。若し食飮せずんば身命全ふし難し。何に況や修道に前進んで、果實を求望せんや。身力の爲の故に、我れ今未だ斷食の意義前後同じからざるを知らず。唯し尊大悲をもて、我が爲に略して少分を決し玉へ。時に執金剛菩薩、蘇婆呼童子に告げて言く、我れ今汝及び未來の衆生の爲に疑惑を除去せん。諦かに聽き善く之を思念して、疑慮を生ずること勿れ。汝が問ふ所は、先には食に由るが故に清淨なることを獲得すと說き、今復た云何んが而も斷食せしむるやと。汝が言ふこと是の如し。深心にして諦かに聽くべし。童子の言さく、善い哉唯然なり、敎を忝く願樂して聞かんと欲ふと。我が出す所の語は、心を淨からしめんが爲の故に、敎へて斷食せしむ。但し諸の衆生は、皮を以て血・肉・髓・腦・肝・膽・腸・胃・心・腎・脾・肺を纏縛し、脂・膩・痰膜・屎尿・種種の穢物常に流れて停らず。是の如くの身は地・水・火・風・假に合して成立す。四の毒蛇之を一篋に置くが如し。彼等をして屎尿・涕唾の臭穢を出さしめざらんと欲するが故に、爲に斷食せしむ。道を妨ぐるが爲に、而も斷ぜしむるには非ざるのみ。若し持眞言者、心に婬想を生ぜば、上の所說の如く、不淨の身を慧を以て觀察せよ。所起の欲心卽便ち消滅す。身と命と財とに於ても亦戀著せざれ。持眞言者、斯の觀門を具すること有らば、此等の人の類は、念誦の法速疾に證驗あらん。卽ち自身悉地を去ること遠からずと知るべし。自心知り已んなば、應に白月の八日、或は十四日、或は十五日を取るべし。一ら如前に依つて好上

【八】 吉祥偈、吉慶の讃。

【九】 八方を護する神。卽ち帝釋等の八方天を云ふ。

【一〇】 其の茅座を眞言して。卽ち加持するを眞言してと云ふ。

【一一】 卽ち師子座の眞言を以て、茅草の座を加持すること。

【一二】 阿說他葉。柳木の葉のこと。

【一三】 三塗。地獄・餓鬼・畜生の三惡道をいふ。

【一三】 中壽。中壽、詳しくは中陰の壽命に就き、最少時限を一念時なりとし、最長時限を七日なりとす。中有若し七日で生處を得なかつたならば、前の陰身滅し已つて更に中陰をうく。かくて中陰中に生滅し、極長七七日までには必ず生處を得と云ふ。

【一四】 龍天八部。天(Deva)・龍(Nāga)・藥叉(Yakṣa.勇健)・乾闥婆(Gandharva.尋香)・阿修羅(Asura.非天)迦樓羅(Garuḍa.金翅鳥)・緊那羅(Kiṃnara.人非人)・摩睺羅伽(Mahoraga.大腹行)。

【一五】 一小劫或は一大劫。劫は梵語、劫簸(Kalpa)の略。大時分、又は分別時節と譯す。これに小・中・大の三別がある。人壽八萬四千歲から、百歲を經る每に壽一歲を減じ、以て人壽十歲に至り、更に人壽十歲から百歲を經る每に壽一歲

還(Anāgāmi. この世に來らざるもの。)欲界の修惑の九品を斷盡した聖者。阿羅漢(Arhan. 怨賊を殺するもの。)。

【一五】 優婆塞(Upāsaka. 優婆索迦)。後の優婆夷と共に七衆の一。在家であつて、佛道修行の男子に名づく。近事男・近善男・近住男と譯す。諸の佛法に親近承事するからである。又單に清信士とも呼ぶ。無分優婆塞(唯三歸戒のみを受けた人)・少分優婆塞(唯一戒のみの人)・多分優婆塞(二、三、四戒の人)・滿分優婆塞(五戒を具する人)の種類がある。

【一六】 優婆夷(Upāsikā. 優波斯迦) 近事女・近善女と譯す。諸佛の法を承事し、これに親近する在家の女をいふ。また戒を受け、これを行じて、よく僧に近住するに堪へるから、近住女ともいふ。一般に女性の佛教徒を概稱し、單に清信女とも呼ぶ。

【一七】 四洲(Catvāro dvīpā)。四大洲の略。東勝身洲(Pūrva videha)、他界の身より勝れてゐるから勝身と云ふ。南贍部洲(Jambudvīpa)、贍部樹があるのでこの名を有す。西牛貨洲(Avaragodānīya)、原始時代に、この洲に一寶牛があつて、人これを以て貿易す。故にこの名がある。北倶盧洲(Uttarakuru)、譯して勝所といふ。四洲中最勝であるからである。

【一八】 須彌山。梵音に蘇迷盧・須彌樓(Sumeru. 妙高)といふ。

悉地相分品第七

復た次に蘇婆呼童子、我れ今轉た悉地に近き法を成就することを說かん。其れ念誦の人は、當に愛樂の心を生發すべし。雜染の境を攀緣することを得ざれ、亦飢・渴・寒・熱等の苦を辭せざれ、諸の違法外相の境に於て心を動搖せざれ、境に逢つて亂れざれ。一切の蚊・虻及び蛇等の諸の惡毒蟲も皆敢て害せず、毘舍闍鬼及び諸の餓鬼・富單那等の諸餘の鬼類、敢て念誦の人の影の中を近づき過ぎず、何に況や身に觸れんや。出す所の言教人皆信受し、轉た如聰明にして善く文章を綴り、諸の書算に於て轉た巧妙なることを成ず。善法を樂ふを以て勤めて淨行を行ず。復た地中の伏藏を見、身に病苦及び污垢膩なし。身に香氣有つて、若し人の見及び已に名を聞くこと有らば、悉く敬念を生じ、一切の諸の貴媚女自ら來つて呼召す。心淨なるを以ての故に、虛空の中に於て諸天の語を聞き、復た彼の形及び乾闥婆・夜叉の類を見る。其れ持誦者、斯の勝妙なる好相を見已んなば、卽ち應に自ら

【一】 悉地相分。妙臂童子の請問に對して、溫氣と烟相と火光との三種悉地の相等を明す故に、悉地相分品と云ふ。

【二】 毘舍闍鬼(Piśāca)。食肉(食血肉鬼)と翻す。

【三】 富單那(Pūtana)。臭者(臭鬼)と翻す。

【四】 遏迦水(Argha)。常には閼伽水と書す。功德水・清淨水等の譯がある。神佛に奉るべき、清淨芳甘なる水を云ふ。

【五】 自部の明王。本部の結界の尊のこと。

【六】 本所持の尊。本尊のこと。

【七】 四趣。地獄(Naraka)・餓鬼(Preta)・畜生(Tiryag youi)・修羅(Asura)。

は孔雀の尾の扇、或は金の瓔珞を得、或は寶珠[一二]商佉を得、或は端正の美女を得、或は己身の父母に遇ひ、或は金寶嚴身の具を得、或は牙床に臥して覆ふに白衣を以てすることを得、或は自身大海に汎び過ぐるを見、或は江河・龍池・陂沼を度り、或は飮酪を得、或は血を以て自身を澡浴すと見、或は自身寺塔・僧房に入ると見、或は如來、座に處して人天八部の爲に法を說き玉ひ、身も亦會に就て、佛の說法を聽くと見、或は緣覺爲に[一三]十二因緣の法を說くと見、或は聖僧爲に[一四]四果の證法を說くと見、或は菩薩爲に六波羅蜜の法を說くと見、或は大力の諸の天王、爲に天上快樂の法を說くと見、或は[一五]優婆塞厭離世俗の法を說くと見、或は[一六]優婆夷厭離女人の法を說くと見、或は國王を見、或は大力の阿修羅衆を見、或は大淨行の婆羅門を見、或は英俊の丈夫を見、或は端正の婦人を見、或は大富正直善心の長者を見、或は己親の眷屬一處に聚會するを見、或は苦行の仙人を見、或は持明の諸仙を見、或は妙なる持誦の人を見、或は日月を吞納すと見、或は身大海に臥して海中の衆生腹中に流入すと見、或は[一七]四洲の海水を飮むと見、或は龍に乘り水を灑いで四洲を潤ふすと見、或は自身空に飛ぶと見、或は身却つて[一八]須彌山に坐し、四洲の龍王皆來つて頂禮すと見、或は自身屎坑に墮すと見、或は自ら人の精を飮むと見、或は人の肉血を喫ふと見、或は大火聚に入ると見、或は女人隱れて己身に入ると見る。

復た次に蘇婆呼童子、凡そ持眞言者功行畢らんと欲して、是の如く等の殊特の夢を見已んなば、應に知るべし、一月及び半月にして、當に大悉地を獲べし。若し持誦の眞言夢相の境界を論ずれば、說き盡す可からず。略粗知んぬべき耳。精進不退にして卽ち是の如くの上上の境界を獲べし。

あるから之を除いた殘餘を行蘊と云ふ。識蘊(Vijñānaskandha)とは心王の一法のこと。これらの四蘊前の色蘊(Rūpaskandha)と共に、卽ち五蘊の法も因緣所成の法であるから、如幻假有であつて實に存することなしとす。之を大乘の法說空のとす。

【九】復次に。以下夢證卽ち夢中の悉地の好相を明す。七十五種之を說く。

【一〇】舍利。舍利は梵語、又室利羅・設利羅(Śarīra)と云ひ、骨身或は靈骨と譯す。釋尊の入滅して、遺したまひし骨分を、通稱して佛舍利といふ。

【一一】白拂。白い拂子(Vāraṇa)のこと。拂子は、また拂塵とも云ふ。白旄の毛を束ねて、これに柄を付したるもの。僧の蚊蠅を拂ふがために用ゐる。

【一二】商佉(Śaṅkha)。介殼と譯す。

【一三】十二因緣。無明(Avidyā)・行(Saṃskāra)・識(Vijñāna)名色(Nāmarūpa)・六入(Ṣaḍāyatana)・觸(Sparśa)・受(Vedanā)・愛(Tṛṣṇā)・取(Upādāna)・有(Bhava)・生(Jāti)・老死(Jarāmaraṇa)の十二に就て三世に亙り、兩重に迷の因果を明すを十二因緣と云ふ。

【一四】四果。預流(Srotāpanna、聖流に入れるもの、)欲界の見惑を斷盡した聖者。一來(Sakṛdāgāmi. なほ一度だけ此の世に來るもの、)欲界の修惑の六品を斷盡した聖者。不

に隨つて、卽ち心定まることを得。其の心定まるに隨つて、卽ち念誦の心に於て疑慮なく、其の念誦に隨つて卽便ち罪滅す。其の罪滅するに隨つて、卽ち心清淨なり。心清淨なるが故に卽ち成就を得。是の故に如來是の如くの說を作し玉ふ。一切の諸法は心を以て本とす。心清淨なるに由つて人天殊勝の快樂を獲得し、心雜染なるに由つて便ち地獄乃至[五]傍生貧窮の苦に墮す。心極めて淨なるに由つて、乃し地・水・火・風・生・老・病・死を遠離することを證し、[六]二邊に著せずして寂滅解脫す。少淨の眞言に由つても亦成ず。當に無常敗壞の樂を離るべし。是の故に諸法は皆心より生ず。自然に現ずるに非ず。亦時に由らず、復た自在天の作にも非ず、因緣なきにも非ず、亦我より能く諸法を生ずるにあらず。但し無明に由つて生死に流轉し、[七]四大和合するを假に名づけて色と爲す。色は是れ我に非ず、我は是れ色に非ず、色は我所に非ず、我は色所に非ず。是の如く[八]四蘊は應に知るべし、是れ空なり、色は是れ無常なり、由し聚沫の如し。受は浮泡の如く、想は陽焰の如く、行は芭蕉の如く、識は幻化の如し。是の如くの見を名づけて正見と爲す。若し異なる見ならば名づけて邪見と爲す。

[九]復た次に蘇婆呼童子、若し眞言を持する者の念誦の數足りなば、卽ち自身悉地に近からんと欲すと知るべし。何を以てか知ることを得る、眠臥の時に當つて夢中に好相あるべし。

或は自身高き樓閣に登ると見、或は大樹に昇り、或は師子に騎り、或は白馬に乘り、或は大白虎に騎り、或は大高山に昇り、或は犀牛に騎り、或は白象に乘り、或は空中に於て大なる雷の聲を聞き、或は白牛に乘り、或は黃牛に騎り、或は錢財を得、或は花鬘を得、或は好淨の五綵の衣を得、或は酒肉を得、或は水類の果を得、或は白・靑・紅・赤色の蓮花を得、或は如來の尊容を得、或は如來[一〇]の舍利を得、或は大乘經藏を得、或は身大會に處し佛・菩薩・衆僧と共に同座して食し、或は駱駝を得、或は犢子を得、或は車に滿てる載物を得、或は[一一]白拂を得、或は鞋履を得、或は橫刀を得、或

る過・不及の兩端を云ふ。是れを主觀的に顯せば二見とせらる。之に就て龍樹の中論卷四には有・無の二邊若くば常・無常の二邊、又世親の攝大乘論釋(玄奘譯)卷一には增益・損減の二邊、又摩訶止觀輔行卷三の二には空・假の二邊を立つ。

【七】四大和合。地・水・火・風の四は、萬物に周遍して至らざる所なく、一切萬有の四大原素である。

【八】四蘊。常には色・受・想・行・識の五を五蘊と云ふ。蘊は梵語塞健陀(Skandha)の譯で、舊譯には陰・衆・聚とす。積集の義によつて蘊と云ふ。卽ち何れも過去・未來・現在の三世・內外・麁細・勝劣・遠近等の別あるものを、類につて一聚に積集したるものであるから蘊と名づく。而して受・想・行・識は心法、卽ち精神上の分類である。

受蘊(Vedanāskandha)とは境を領納する受の心所のこと。想蘊(Saṃjñāskandha)とは境の像を取る想の心所のこと。行蘊(Saṃskāraskandha)とは受想の二を除いた餘の四十四の心所及び十四の不相應法のこと。行は造作・遷流の義で、餘の四蘊にも亦造作・遷流の義があるけれ共、各々別名が

音聲とを聞く。若し人間、河澗及以び大海に住せば、即ち寒熱等しからざること有り、因つて即ち病ありて苦惱身に逼り、又猛獸の大惡聲を發し、或は相害せんと欲するに値つて、人をして驚怕せしめ、或は海邊に住しては海潮の波を見、及び大聲を聞き、行者をして恐怖せしめ、若くば、江・河・池・沼に住せば、即ち蚖[七]・蛇・蝮・蝎・毒蟲の類繞し、皆是れ眞言を持する人の障礙の處なり。是の如くの種種の障礙の緣等は、當に須く遠離すべし。好勝の處を覓め、勤加して心を勞し意を固くせよ。境に逢つて心即ち散亂し、不定ならしむること勿れ。一念も退心あらば、還つて初始より善く方便を行じて、時を覓め節を覩じ、以て愚を執すること勿れ。惡人惡魔其の便を得ん耶。癡人をして罪苦の果を獲せしむること莫れ。

念誦眞言軌則觀像印等夢證分品第六[一]

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人[二]太だ緩なるべからず、太だ急なるべからず、聲も亦此の如く大ならず、小ならず、間斷すべからず。人と共に語り、心をして異境を緣ぜしむること勿れ。名と某と字體と訛錯すべからず。譬へば大河の日夜に流注して恒に休息なきが如く、持誦の人の修する所の福報・供養・禮拜・讃歎の一切の功德、日夜に增流することも亦復た是の如し。[三]念誦の人、心若し雜染の境を攀緣[四]し、或は懈怠を起し或は欲想を生ぜば、應に速に心を廻らして、眞言の字句を觀ずべし。或は本尊を觀じ、或は手印を觀ずべし。譬へば觀行の人、心を眉間に置いて散亂せざらしむれば、後時には境に對すれども心即ち動ぜず、彼の人をば即ち觀行成就と名づくるが如し。念誦の人も亦復た是の如し。所緣の心處若し搖動せざれば、即ち持誦の眞言成就することを得。是の故に行者悉地を求めんと欲はば、當に須く心を一境に攝すべし。其の心を調伏すれば、即ち歡喜を生ず。其の歡喜するに隨つて、即ち身輕安なり。身の輕安なるに隨つて、即ち身安樂なり。身の安樂なる

【七】蚖、イモリ。蝎、スクモムシ。

【一】此の品は、眞言を念誦する軌則と、行人の心散亂せば、本尊の像、及び手印を觀ずる等の法と、夢の好相とを明す。換言せば、此の品は、行者修行の精要を擧げ、以て教の如く修すれば、必ず悉地成就することを說く。

【二】太だ緩。以下念誦の軌則を明す。

【三】念誦の人。以下像と印とを觀ずる等を明す。

【四】攀緣。攀取緣慮の義。衆生の妄想は、三界の諸法を緣取して、一切煩惱の根本となるものである。

【五】傍生。畜生(Tiryañca)の意譯。

【六】二邊。中道の正を得ざ

らず。妙曼荼羅を加減して授與すべからず、眞言も亦復た是の如し。彼の法を迴換すべからず、彼の法を迴換せざれ、[一五]阿吠設那すべからず、打縛すべからず、彼れを害せんが爲の故に呼摩すべからず、及び肢節を損し、惡族を摧滅し、他をして癡鈍迷悶ならしむべからず、龍鬼の類を科罰すべからず、亦人をして毒を發して相憎ましめ、及び損し厭し縛すること勿れ、嬰兒の魅を治療すべからず、諸の衆生類を捕網して、損害する所あらしむべからず。

復た次に蘇婆呼童子、[一六]餘の外宗の說かく、十種の法有つて眞言成ずることを得と。所謂、行人と、眞言と、伴侶と、所成就物と、精勤と、處所と、淨地と、時節と、本尊と、財物と、此の十法を具して眞言成ずることを得と。又餘宗の說かく、三種の法を具して眞言成ずることを得と。謂く眞言と行人と伴侶となり。

又餘宗の說かく、四種の法を具して眞言乃ち成ずと。謂く處所と精勤と時節と依法となり。

又餘宗の說かく、五種の法を具して眞言乃ち成ずと。謂く眞言と所成就物と處所と本尊と財物となり。是の如くの諸宗、或は十法を說き、或は八法を說き、或は六を說き、或は四、或は三、或は二、各本法に於て演說すること不同なり。然も此の釋敎には二種の法を具して眞言乃ち就す。一には行人、二には眞言なり。行人具に戒律を行じ、正勤精進して、他の利養に於て貪嫉を起さず、身と命と財とに於て常に戀著なく、眞言の文字を脫錯し加減せしむること勿く、聲相圓滿分明にして、所成就の法皆悉く具足し、佛と菩薩との所居の處に於て、如法に念誦せば、卽便ち當に意樂成就を獲べし。譬へば、師子の飢餓に逼められて、大勢力を以て大象を殺害し、若くば野干及び諸の小獸を殺すに、施す所の勢力、彼の象を殺すと一にして異なる所なきが如し。行者上中下の事を成就するに、發す所の精進も亦復た是の如し。行者若し閙鬧の處に任せば、時に卽ち蚊・虻・蠅・蚤・有つて咬嚙し、種種の音樂の聲を聞き、或は諸人の歌舞吟詠すると、小男・小女・婦人・等の環釧と瓔珞と種種の

【一五】阿吠設那(Āveśana)。攝縛行と翻ず。

【一六】餘の外宗。外宗も餘宗も皆外道を云ふ。

ず。復た更に須く毎日三時に如法に供養すべし。念𠑊の數一十萬遍を滿さば、即ち應に如法に呼摩し供養すべし。當に大麥を以てし、[一三]稻穀花を用ひ、或は油麻を用ひ、或は白芥子を用ふべし。其の一を取るに隨つて酥と相和して、眞言の數四千或は七八千に滿せよ。

或は[四]優曇鉢羅木、或は阿說他木、或は[五]波羅賒木、或は遏迦木、或は龍木、或は無憂木、或は蜜魯婆木、或は[六]尼居陀木、或は[七]奄沒羅木、或は[八]佉陀囉木、或は[九]賒彌迦木、或は[一〇]鉢落叉木、或は[一一]阿波末迦木、或は[一二]未度迦木、或は謀母迦木、

如上所說の諸木の中に隨つて一木を取れ。麁細は指の如く、長短は十指許りなり。酥・蜜・酪に柴の兩頭を搵めて、毎日の呼摩の數は上の所說の如し。闕犯あらば還つて清淨なることを得て、然る後に方に眞言を誦ぜよ。悉地障礙する所なし。

復た次に蘇婆呼童子、行者所持の眞言を、餘の持誦者明王を繫縛し、或は斷じ或は破して成就せざらしめば、即ち須く本尊の形像を作つて、當の各部王の足の下に置き、面を須く相對し、然して結利吉羅等の諸部の明王大威の眞言を以て誦持し、酥蜜を以て本尊を灌浴すべし。是の如くすること十日、此の法を作し已んぬれば、彼の餘明の所縛即ち解脫することを得。

復た次に蘇婆呼童子、眞言の中の所制の諸法に於て、並に皆修行して一として遺闕なけれども、仍ほ成ぜずんば、即ち應に猛毒を以て彼の尊形を作り、結唎吉羅等の諸部の明王の眞言を以て、[一三]其の像の形を截つて段段に片と爲し、白芥子の油に和して毎日三時に呼摩を作すべし。是の如く七日すれば即ち悉地を得。若し成就せずんば、應に夢中に入つて障因を示見すべし。眞言の字に加減あり、或は法具せずと說かん。然も諸の明王自ら此の法を說くべし、[一四]有用の行者、相好を示現すること、山し海潮の終に時を違へざるが如くならん。其の實の眞言は終に相破れしず、亦相斷じ及び繫縛せず。其の眞言の法も亦是の如し。是の故に行者、明呪及び眞言を相破し、乃至繫縛し及以び禁斷すべか

【三】稻穀花。糯糀のハゼのこと。

【四】優曇鉢羅(Udumbara)。瑞應と翻ず。

【五】波羅賒。胡桃のこと。

【六】尼居陀。無節と云ひ、又楊柳と義翻す。

【七】奄沒羅。林檎の一種柰(カラナシ)のこと。

【八】佉陀囉。紫橿のこと。

【九】賒彌迦。枸杞根を云ふ。

【一〇】鉢落叉。赤色のこと。

【一一】阿波末迦。牛膝を云ふ。

【一二】未度迦。甘草のこと。

【一三】其の像の形を截つて。これは治罰本尊法である。

【一四】有用の行者。力用ある行者を云ふ。

纏はるゝと、及び十種の病あると等を利益す。此の曼荼囉を作つて、彼れが與に頂に灌げ、諸の色類の如き悉く皆利を獲、求覓する所の者並に皆滿足し、諸餘の病疾も亦復た能く差へ、又復た能く無量の罪障を消滅するなり。

卷の中

[一]分別成就相分品第五

復た次に蘇婆呼童子、時に彼の行者、諸の障難に於て解脫を得已つて、身心清淨にして諸の垢穢なきこと、譬へば、明月の而も雲に埋もれども、雲除き散滅せば、麗乎として天に光り、虛空の中に於て朗然として顯現するが如し。念誦の人の修する所の種種の功德、毘那夜迦の作す所の障難を除斷して、悉く皆消滅することも亦復た是の如し。所持の眞言悉く成就するを得ること、譬へば、種子の地及び時に因り、并に雨漑灌して潤澤し調順し、好風雨を得て、然して後に芽生じ、乃至成熟するが如し。然も其の種子若し倉の中に在つては、芽尙ほ生ぜず。況や復た枝葉及び花果實をや。眞言を持誦するに法則に依らず、及び供養せざれば、已に清淨ならざるが故に、眞言の字句或は加減あり。[二]聲相正しからずして、廣大の諸の妙悉地を獲ざることも亦復た是の如し。譬へば、雲を興し雨を下すに、衆生の福に隨つて下ること多少あるが如く、持誦の人の施す所の功勞に於て、成就を獲得することも亦復た是の如し。若し行者有つて、清淨の處に於て、時と及び節と所制の法とに依れば、所犯の罪は漸漸に消滅し、福聚圓滿して、能く眞言の霑ひ及び成就を獲、若し罪滅せざれば功德圓ならず。法則に依らざれば眞言成ぜざること、此れに翻じて應に知るべし。

復た次に蘇婆呼童子、其の念誦の人、中間のあらゆる闕犯、或は間斷あつて、本の所誦を棄てゝ別して餘の明を持し、自ら持する所の者をば他人に授與しぬれば、念誦の遍數を滿すと雖も成ぜ

【一】分別成就相分。執金剛主、上の眞言の字句に加減あるが爲か、又歟口不淨なるが爲か、洗淨如法ならざるが爲か、等の問に對して、悉地成就の相を辨說する故に、分別成就相分と云ふ。分別は卽ち辨說の義である。

【二】聲相正しからず。念誦する所の眞言支分を闕するを云ふ。

利忿怒明王の眞言[四〇]辟魔の印等を用て護身を作すべし。如上所說の諸魔の障難、悉く消滅することを得て惱亂すること能はず。若し彼の眞言を念誦する者あれば、諸の毘那夜迦終に便を得ず。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人著障の人を救ひ、解脫せしめんと欲はば、即ち群牛あつて、所居の處、或は一樹の下、或は神廟の中、或は四衢道、或は空閑の室、或は林に於てすべし。如上の諸地を得ては、任に一所を簡び取つて一ら治地の法の如くし、畢已つて即ち牛糞を取り、香水に和して地に塗り、乾き已んなば、復た香水を取つて重ねて其の地に塗り、然る後に五色の土を以て下し、曼荼羅に依つて五色の土を用ひよ。其の壇[四一]頓方量の闊さ三肘にして四門を安立し、中に於て二肘の方量に坑を作り、坑の內に布くに茅草を以てし、坑の外兩肘に各位座を分つて、明王・眞言主等を安置し、八方に於て各本方の大神を畫け。復た四口の新瓶を取れ、黑色の太だ燋げたる或は生なる者を得ざれ。香水を盛り滿ち、及以び五寶并に赤蓮花、諸の雜草の花の香しきをば皆供養に充てよ、果樹・[四二]嫩枝等を皆瓶の內に挿し、五色の線を以て瓶の項に纒ひ繫けて四方に安き、然る後に彼の明王等を請じて諸の供具を以て之を供養すべし。復た酒肉・蘿蔔及以び衆多の[四三]波羅羅食を以て、彼等の八方大神及び一切の毘那夜迦に供養せよ。彼の著障の人を將ゐて坑の中に入れ、面を東に向つて坐せしめ、念誦の人は壇の西面に於て面を東に向けて坐し、眞言一百八遍を誦じ已り、然して後に彼の置く所の四角の瓶水を取り、還つて阿蜜唎囉枳當伽此に亦と云ふ。明王主、及び結唎吉囉明王、并に捺囉弭良蘗明王等の眞言を以て、持誦すること數一百八遍を過ぎ已つて、與に彼の頂に灌げ。是の如く四瓶次第に應に灌ぐべし。此の法を作し已んぬれば、彼の著障の人は即ち解脫を得。此の曼荼囉は獨り能く一切の毘那夜迦を除くのみに非ず、亦能く官事の人と、及び女人の嫁し難きと、與易の人の資利を獲ざると、農を營みて子實を收めざると、魍魎に著かるゝと、及び壯熱を患ふる孩子と、鬼魅に著かるゝと、及び吸精瘧鬼の便を得る者と、夜臥して常に惡夢を見ると、癎病に

【四〇】辟魔の印。軍荼利(Kuṇḍali)三股の印である。

【四一】頓方。壇の四方を云ふか、但し頓の字義未詳。

【四二】嫩枝。嫩は嬬と同じ、好き貌。ワカシと訓ず。

【四三】波羅羅食。一の羅字は衍文。波羅(Piala)は果のこと。

心を退す。

復た毘那夜迦有り、名づけて燈頂と曰ふ。正しく燈火を獻ずる時、法に若し闕することあれば、便を得て身に入り、遂に念誦の人をして種種の病を起さしむ。所謂、心痛し壯熱して心を損す。

復た毘那夜迦有り、名づけて笑香と曰ふ。正しく花を獻ずるの時、法に若し闕することあれば、彼れ卽ち便を得て、遂に念誦の人をして種種の障を起さしむ。所謂、壯熱して鼻塞がり、嚔(三五)、嗽して眼中より涙出で、支骨酸疼し、及び伴侶と相諍つて離散す。復た毘那夜迦有り名づけて嚴髻と曰ふ。正しく念誦の人、法に若し闕することあれば、彼れ卽ち便を得て念誦の人をして諸の病を起すこと有らしむ。所謂、壯熱して便利出でず、諸の毘那夜迦身に入つて卽ち心をして迷惑を生ぜしめ、西を以て東と爲し、南を以て北と爲し、諸の異相を作し、或は卽ち吟詠し、或は緣事なきに遊行することを得んと欲し、心に異想を懷いて決せざる所あれば、便ち邪見を起して是の如くの言を作す。或は大威の眞言あること無く、亦天堂も無く、善惡あること無く、亦纏縛し及び解脫を得ることも無しと說き持誦者は其の功を唐捐すと說いて便ち邪見を生ず。善と相隔して因果を撥無し、手を以て草を斷ち及び土塊を弄び、眠る時に齒を嚙み、或は欲想を起し、及び妻を娶らんと欲するに、自ら愛樂する者は彼れ相愛ぜず、自ら樂はざる者は彼れ卽ち愛樂し、旣に意に順ぜざれば臥せども睡らず、往いて他の婦兒を侵さんと欲して意に慮つて眠らず、設ひ若し睡ることを得るも、夢に大蟲(三六)・師子・虎・狼・猪・狗に趁はるゝと見、駝・驢・猫兒及び鬼・野干・鷲鳥・鵄・鸑鳥(三七)及び、鵂胡(三八)を見る。或時は夢に故き破衣を著たる不淨の人を見、或時は夢に裸形にして禿髮なる黑體の人を見る。或は夢に裸形外道(三九)を見、或は枯池及以び枯井を見る。或は髑髏を見、或は骨聚を見、或は壞棄たる舍屋宅を見、或は石槌を見、或は恐怖すべき惡人の手に、槍刀及び雜器仗を執り來つて相害せんと欲するを見る。當に是の如くの惡相を見ば、卽ち彼等毘那夜迦をして障難を作さしむると知るべし。行者等卽ち軍荼

【三五】噴嚏。鼻より液を出だすを云ふ。

【三六】大蟲。虎のこと。

【三七】鸑。鳳凰の屬。神鳥である。

【三八】鵂胡。梟のこと。

【三九】裸形外道(Digambara)。露形外道とも云ふ、尼乾子外道(Nirgrantha)二分派の一である。空衣派(Digambara)のこと。大空を以て衣服とすべきことを唱へ、都て衣類を廢し、常に裸體で生活す。故に一に無慚外道とも云ふ。

此の難を破せんと。是の故に念誦の人、遍數を滿し已らば、復た更に成就諸事の妙曼荼羅を作るべし。此の法を作し已んぬれば、彼の障難の者、便即ち退散して敢て足を停むることなからん。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人、師の訓を承けずして、眞言を持誦し供養し、及以び呼摩すること法教に依らざれば、彼等の諸魔等いで其の便を得て障難を作し、念誦の人をして心常に[三二]猶預し、念念に疑を生ぜしむ。此の明眞言を誦ずることを爲さんや、彼れを供誦せんや。是の如くの念を發して誦ずる時、彼れ亦便を得ん。即ち多く無義を語り、世俗の事を談じ、或は與易を說き、或は田農を說き、或は名利を論じて、心をして散亂せしむ。譬へば、人有り、水に蕁いて行くに影水中に入り、形と影と相逐つて相捨離せざるが如し。彼の毘那夜迦等、念誦の人の身中に入つて、恒に相離れざることとも亦復た是の如し。

復た毘那夜迦有つて、澡浴の時に便を得て身に入り、或は毘那夜迦有つて、[三三]正しく念誦する時に便を得て身に入り、毘那夜迦有つて、念誦の人正しく眠臥する時に便を得て身に入り、毘那夜迦有つて、正しく供養の時に便を得て身に入ること、譬へば、日光の火珠を照して便ち火出づるが如く、毘那夜迦の行者の身に入ることとも亦復た是の如し。念誦の時心をして散亂し、貪癡無明等の火を增長せしむることとも、亦復た是の如し。復た毘那夜迦なる者有り、名づけて水行と曰ふ。正しく洗浴する時、法に若し闕することあれば、彼れ即ち便を得て遂に身中に入り、念誦の人をして種種の病を起らしむ。所謂、飢渴・咳嗽・懈怠・多睡・四支沈重すると、故無くして瞋多きとなり。復た毘那夜迦有り、名づけて食香と曰ふ。正しく塗香を獻ずる時、法に若し闕することあれば、彼の魔身に入つて、即ち念誦の人をして遂に病起ること有らしむ。所謂、思想して[三四]生緣の處を憶ひ、或は餘處を思ひ、或は寡婦を思ふて懈怠を生じ、或は舊の耽欲の處を思ふて道業を休廢し、或は舊日廣く財寶を用ひ、酒に耽り肉を嗜み、朝廷に伴合して貴賤を分別せしことを思ひ、諸の色境を觀じ、好貪美欲して道

叉神般遮迦(Pañcaka)の子で訶利帝の夫。

【二九】摩尼賢將。摩尼跋陀羅(Maṇibhadra)即ち寶賢のこと。

【三〇】滿賢(Pūrṇabhadra.布嚕那跋陀羅)。寶賢・滿賢共に毗沙門(Vaiśravaṇa)の八兄弟の中の善神である。

【三一】摩尼部。五部中の寶部ではなく、摩尼賢將の部類を云ふ。

【三二】猶預(Vicikitsā)。疑のこと。

【三三】正しく念誦する時。正念誦の語の出處である。

【三四】生緣の處。古郷のこと。

此の四部より無量の毘那夜迦の眷屬を流出すること後に具に列ぬるが如し。

摧壞部の主を名づけて大將と曰ひ、其の部の中に雜類の形狀有り。七[一八]阿僧祇有りて以て眷屬たり。護世[一九]四天王所說の眞言を、人有つて持誦すれば、彼の類恒に障難を作す。

野干部の主を名づけて[二〇]象頭と曰ひ、其の部の中に於ては形狀具に名づく可きこと難し。十八[二一]倶胝有りて以て眷屬たり。[二二]摩醯首羅天王所說の眞言を持誦する者有れば、彼の類恒に障難を作す。

一牙部の主を名づけて嚴髻と曰ひ、其の部の中には種種の身形にして面貌畏る可きあり。一百四十倶胝の眷屬有りて隨從たり。以て大梵天王所說の眞言と、[二三]憍尸迦、日月天王、[二四]那羅延天王、諸風天、所說の眞言とを持誦する者あれば、彼等の雜類恒に障難を作す。

龍象部の主を名づけて頂行と曰ひ、其の部の內に於て種種の形有つて知り名づく可からず。一倶胝[二五]那由他一千の[二六]波頭摩有りて以て眷屬たり。釋敎所說の深妙の眞言を持誦する者あれば、彼恒に障難を作す。

又[二七]呵利帝の兒を名づけて愛子と曰ふ。[二八]般指迦所說の眞言を持誦する者に彼れ障難を作す。

又[二九]摩尼賢將の兒を名づけて[三〇]滿賢と曰ふ。[三一]摩尼部の中の所說の眞言に於て持誦する者あれば、彼れ障難を作す。

是の如くの諸類の毘那夜迦、各各に本部の中に於て障難を作して、修道を樂はず、持眞言者をして成就せしめず、自ら變化して本眞言主と作り、來つて念誦の人の道場の中に就て供養を受く。時に明主來つて是事を見已り、即ち本宮に却き還つて是の如くの念を作す。云何んが如來彼れが誓願を許して、念誦の人を惱亂し、法をして成ぜざらしむるやと。是の如くの障難あれば、假使梵王及び憍尸迦・諸天龍等も、彼の毘那夜迦の障難を破すること能はず。念誦の人は、唯心を堅ふして意を進め、大誓願を發すべし。世尊の所說に大明眞言の敎あり、我れ今法に依つて修行して要ず

【一八】 阿僧祇(Asaṃkhya)。詳しくは阿僧祇耶。阿(a)は無、僧祇耶(saṃkhya)は數の義であるから、數を極むることも知る能はざる大數を阿僧祇耶即ち無數と云ふ。
【一九】 四天王。持國(Dhṛtarāṣṭra)・增長(Virūḍhaka)・廣目(Virūpākṣa)・多聞(Vaiśravaṇa)を云ふ。
【二〇】 象頭。世に所謂歡喜天である。名利を希ふ者、多く歸依奉事す。其の形は象頭、男女和合の姿である。
【二一】 倶胝(Koṭi)。數詞、譯して千萬といふ。
【二二】 摩醯首羅天(Maheśvara)。大自在天と譯す。
【二三】 憍尸迦(Kauśika)。帝釋のこと。
【二四】 那羅延天王(Nārāyaṇa)。譯して勝力或は堅牢と云ふ。印度の神名で、帝釋天の眷屬である。惡を排し善を生ずるを以てその務となし、力量甚だ大である。
【二五】 那由他(Nayuta)。印度數量の目。經中多く量の極めて多數なるを表すに用ゐらる。
【二六】 波頭摩(Padma)。蓮華と譯す。
【二七】 呵利帝(Hiriti)。印度鬼女の名。青色と譯す。鬼子母神はその義譯である。
【二八】 般指迦(Pañcika)。夜

若し意樂の諸欲を成就せんことを求めんと欲はば、白檀木を用て跋折囉を作れ。或は紫檀木を用ひよ。皆之を用ふることを得。

如上所說の諸の色類の金剛杵の法は、一一に皆須く五鈷を作るべし。淨妙端嚴にして缺減せしむること勿れ。行者念誦せんと欲ふ時は、香泥を以て塗り幷に上妙の好花を散じて供養し、大慈心を發して手に金剛杵を執り、眞言を念誦して、法事畢已らば、復た重ねて供養し上り、其の杵を以て本尊の足の下に置くべし。後に念誦の時も亦復た是の如くせよ。若し妙金剛杵を執持せずして、而も念誦を作さば終に成就せず。何を以ての故に、鬼神懼れず善神加被せざるを以てなり。是の故に一切の法事驗を成ずることを得難し。若し金剛杵を造ることを辦ぜずんば、亦須く彼の印を作すべし。然る後に心を一らにして如法に念誦すれば、亦成就することを得。放逸を生じて徒に功夫を喪ふこと勿れ、別に餘業を修せんには如かず。

復た次に蘇婆呼童子、凡そ眞言を念誦して藥法を成就するには、都て十七種の物あり。第一雄黃、第二牛黃、第三雌黃、第四[一七]安善那、第五朱砂、第六咄他香、第七跋折囉、第八牛酥、第九昌蒲、第十茂拏刈哩迦、第十一衣裳、第十二鈷叉、第十三鹿皮、第十四橫刀、第十五羂索、第十六鎧甲、第十七三叉なり。

如上所說の物に皆三種の成就を具す。假使餘の眞言法の中に說く所の成就の諸の物も、皆此の三種を離れず。時に臨んで樂ふ所の事法は意に任せて之を作すに、果を獲剋せざる者なし。

復た次に蘇婆呼童子、世間に諸の障難の毘那耶迦有つて、常に過を覓め求むることを爲すが故に、念誦の人は便ち中に於て好く須く作意すべし。方便と智慧とを以て[illegible]く分別して知るべし。魔黨に合して幾部かある、總じて之を言はば、都て四部あり。何等をか四と爲す。

一には摧壞部　二には野干部　三には一牙部　四には龍象部なり。

【一七】安善那。銀の未だ練らざる物、即ち眼藥のこと。

若し藥叉衆を摧くことを成就せんと欲はば、鐵を以て跋折囉を作るべし。

若し無病及び錢財を求むることを得んと欲はば、失利般尼木或は毘嚌婆木を以て跋折囉を作るべし。

若し一切の病と鬼魅とに著せらるゝを療せんと欲はば、[八]佉他囉木をもて跋折囉を作るべし。

若し藥叉女母姉妹の法を成就せんと欲はば、[九]摩度迦木を用て跋折囉を作るべし。

若し滅罪の法を求めんと欲はば、[一〇]阿說他木を用て跋折囉を作るべし。

若し怨敵の法を摧伏せんと欲はば、[一一]害人木を用て跋折囉を作るべし。

若し極惡怨敵の者を降伏せんと欲はば、人骨を用て跋折囉を作るべし。

若し幻化の法を成就せんと欲はば、水精を用て跋折囉を作るべし。

若し人をして相憎ましむることを成就せんと欲はば、[一二]苦練木を用て跋折囉を作るべし。

若し龍女敬念の法を成就せんと欲はば、[一三]龍木を用て跋折囉を作るべし。

若し鬼類の人をして枯悴し、鬪諍せしむる事法を成就せんと欲はば毘梨勒木を用て跋折囉を作るべし。

若し天龍・藥叉・[一四]乾闥婆・阿修羅の法を成就せんと欲はば、[一五]天木を用て跋折囉を作るべし。

若し變形の法を成就せんと欲はば、泥を用て跋折囉を作るべし。

若し起屍の法を成就せんと欲はば、迦談木を用て跋折囉を作るべし。

若し求財の法を成就せんと欲はば、[一六]遏迦木を用て跋折囉を作れ。或は龍木を用ひ、或は無憂木も皆之を用ふることを得。

若し對敵の法を成就せんと欲はば、失唎般尼木を用て跋折囉を作れ、或は阿沒羅、或は遏順那木、或は柳木皆之を用ふることを得。

法を云ふ。

【六】若し通じて一切云々。三法三金は卽ち三部の色で、三法に相應す。謂く金(黃)、銀(白)、銅(赤)、相合するが故に、一切を成就す。

【七】失利般尼木。法天の本には妙吉祥木と云ふ。

毘嚕婆木。榠樝に似た木で、和名は加良保介である。

【八】佉他囉木。紫檀木のこと。

【九】摩度迦木。甘草のこと。

【一〇】阿說他木。此には無罪と飜ず、卽ち柳木を指す。

【一一】害人木。法天の本には刺木と云ふ。刺ある木のこと。

【一二】苦煉木。白膠の木、卽ち勝軍木のこと。

【一三】龍木。龍花樹の類か。

【一四】乾闥婆(Gandharva)。譯して尋香・食香・嗅香といふ。八部衆の一で、帝釋の樂神である。須彌山の南、金剛窟中に居り、常に香のみを食して、虛空を飛行すといふ。

【一五】天木。法天の本には柏木及び杉木と云ふ。

【一六】遏迦木。樞梓、和名マルメルのこと。

からず。亦一切の殘食を喫はざれ。皆食すべからず。若し此等の食を食するをば、持眞言の人と名づけず、念誦するに驗なし。

復た次に蘇婆呼童子、以て勤めて念誦して晝夜を間てざれ。呼召と發遣と皆須く如法なるべし。若し念誦せんと欲ふ時は、敷くに茅草を以てし、上に於て坐臥せよ。睡らんと欲ふの時は、先づ〔一七〕慈・悲・喜・捨の觀を作し、並に三寶及び舍利塔に於て、深心に恭敬し以て滅罪を求むべし。若し是の如くの觀行を作さずして臥する者をば、念誦の人と名づけず、臥せる死屍の如し。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人は常に〔一八〕三白食を服すべし。或は菜根果・乳酪及び酥・大麥・麵餅・〔一九〕油滓・酪漿を相合して之を食すべし。種種の糜粥も亦爾なり。若し成就せんと欲はば、麻滓を酪漿に和して之を食し、法に依つて作さば必ず證驗を得ん。

分別金剛杵及藥證驗分品第四〔一〕

復た次に蘇婆呼童子、汝が爲め、及び未來の善男子の心を發して、祕密眞言門を念誦する者の爲に〔二〕跋折囉を持することを說かん。汝當に諦かに聽き聞き已つて、廣く人の爲に說くべし。跋折囉を作らんと欲はば、量の長けは〔三〕八指、或は長け十指、或は長け十二指、或は長け十六指、其の量の最極長きは二十指なり。若し大貴自在を成就し、及び持明悉地を求めんと欲はば、即ち金を用て跋折囉を作るべし。

若し富貴を求めば、純ら銀を用て跋折囉を作るべし、若し〔四〕海龍王を求めんと欲は、ば熟銅を以て跋折囉を作るべし。

若し〔五〕修羅宮に入らんと欲せば、妙砂石を用て跋折囉を作るべし。

〔六〕若し通じて一切を成ぜんと欲はば、金・銀・銅を以て和して跋折囉を作るべし。

【一七】慈・悲・喜・捨の觀。四無量觀と云ふ。

【一八】三白食。乳と酪と熟蘇とを和した食である。

【一九】油滓。後の麻滓と共に胡麻の油であると傳ふ。

【一】分別金剛杵云々。上の法を具せざるが爲かの間、又結界如法ならざるが爲か、護身如法ならざるが爲か等の間、又藥味周備せざるが爲か、等の間に對して、執金剛菩薩、金剛杵造作の法、及び相應物の藥分成就の法と、其の證驗等とを明す。故に分別金剛杵及藥證驗分品と云ふ。

【二】跋折囉(Vajra)。此に金剛と云ふ。

【三】八指云々。四寸。五寸。六寸。八寸。一尺。御請來の杵は十六指量(八寸)と云ふ。

【四】海龍王(Sāgara nāgarāja)。龍宮に入るを求む。

【五】修羅宮に入る、延壽の

れ。無上菩提を求むるを以て其の實に喩へ、諸餘の世樂をば莖幹を求めざるに自ら獲るに况喩ふ。世樂とは天上・人中或は二十八天の王、或は人間にして轉輪王と作つて四天下に王たるなり。若し復た人有つて、小利を求めんが爲に詐つて彼に往かんことを請ひ、前人の爲に一切本願を退すべからずと云はん。彼の前人に、是の如くの語を宣べて而も彼に答へよ。我れ長壽の身を獲、及び種種の諸の資具を獲るを待つて、無厭の心を以て、當に衆生を利すべし。所求の種種の願を滿足し已り、然る後に彼に往かん。珍重して我を請じて彼に往かしむべからず。我れ薄福を以て諂辭を說き、他の供養を求めて活命と爲し、眞言密敎に違背して、而も邪命を受くることは、佛に此の敎なければ我れ終に順ぜずと。

復た次に蘇婆呼童子、凡そ眞言を持する者は、當に須く世間の八法を遠離すべし。善を以てすると、翻じて惡名を稱すると、及以び苦と樂と、利を得ると利を失ふと、毀謗と讃譽と、此れ世の八法なり。能く一切の不善の法を生ずるが故に。譬へば、大海の死屍を宿めず、乃至刹那も終に海に住めざるが如し。念誦の人若し、不善の思惟を起さば、速に遠離すべし。乃至一念も心に在らしむること勿れ。譬へば、室內に燈燭を然すが如きは、只風を防ぐが爲にして、風なきを以ての故に燈焰轉た明かなり。眞言を持誦し、復た勤苦を加へて勇猛精進し、善法をして增長せしむることも亦復た是の如し。

復た次に蘇婆呼童子、持誦の者は、四威儀に於て常に須く作意すべし。身心をして調戲躁動して、其の志節を失せしむること勿れ。拍手・音樂・歌舞・婚禮・博戲し、及び往いて觀看することを得ざれ。亦在家を毀謗し及び諂曲の言辭を行じ、人の長短を說かざれ。非時に睡眠し、無義に談話し、文章及び諸の邪法を尋ね學び、瞋恚・忿恨・慳貪・憍慢・放逸・懈怠・皆須く遠離すべし。亦酒を飲み、及以び肉を食はざれ。(一)葱・(二)蒜・(三)韮・(四)韭・胡麻・(五)蘿蔔、幷に步底那（(六)此に驢駒蹄と云ふ）胡麻油等、並に食すべ

(一) 葱。ネギ。
(二) 蒜。ニンニク。
(三) 韮。オホニラ。
(四) 韭。コニラ。
(五) 蘿蔔。大根。
(六) 驢駒蹄、野菜の類か。

動じて定まらず。念誦の人、即ち身心を責めよ。是の身は主なく、業に由つて一切の諸趣に流轉して、依止する所なし。此の身を捨てゝ後に復た餘形を受く。善惡の業因斯れに由つて絕えず。生・老・病・死・憂悲苦惱・愛別離苦・求不得苦・怨憎會苦・五盛陰苦[六]、所至の方に隨つて終に免るゝことを得ず。蚊・虻・蚤・虱・蛇・蠍[七]・辟宮[八]・寒・熱・飢・渴、是の如く等の苦は處處に皆あり。諸天も共に同じふして[九]逃避する路なし。心退轉せんと欲して餘方に向はんと擬せば、斯の觀門を以て將に對治を爲すべし。若し貪恚盛なる者は、白骨觀及び膖脹爛壞の諸の不淨觀を修すべし。若し瞋火盛んならば、慈悲觀を作すべし。無明盛んならば、緣生觀を作すべし。有る時は怨家翻つて善友と爲り、有る時は親友翻つて怨家と爲る。平等心を以て若し往かんと欲はば、平等も復た變じて以て怨家と爲る。此の親友を觀るに皆不定の相なり。智者妄に戀著を起すべからず。中間の心、親友に往かんと欲ふ時は、斯の法門を以て應に須く對治すべし。念誦せんと欲ふ時、及び行・住・臥に、畢に外道・婆羅門・刹利・毘舍・首陀・幷に黃門・童男・童女・處女・寡婦等と共に、相談論することを得ざれ。法事畢已つて、若し語らんと欲はん時は、然る後に伴侶を共にして善法を談論すべし。若し餘の雜語せば、皆是れ魔の便を得て、是れ正論に非ず。若し啼唾する時は、當に須く遠く棄つべし。棄て已らば、便ち應に[一〇]澡豆を以て其の口を漱ぐべし。若し大小便易く、並に須く澡浴すべし。獻ずる所の香花然燈を以て佛を供養し禮拜し、日夜六時に三寶を讃歎して、常に謙下を生ずべし。一切衆生に悲意を興發し、苦を救ふの心を作せ。上の如く精勤し念誦する所修の功德を、皆應に無上菩提に迴向すべし。譬へば、衆流の大海に歸趣し、彼の海に入り已つて便ち一味と爲るが如く、菩提に迴向することも亦復た是の如し。一切の功德合集して共に佛果を成ず。譬へば、人有つて田を耕し稻を種ることとは、唯子實をのみ求めて藁幹を望まず、子實成熟して子を收め獲ること已んぬれば、藁幹は求めざるに而も自然に得るが如し。行者菩提の種子の功德を獲んと欲して、世樂の爲にせざ

【六】五盛陰苦。以上八苦を說く中、これは五取蘊の苦、即ち色・受・想・行・識の苦である。五蘊から盛に苦を受くる故に、五盛陰と云ふ。

【七】蠍。毘蠃のこと。

【八】辟宮。守宮のこと。

【九】逃避する路なし。凡そ人天の苦は、自業自得であるから、逃れ去る可き路がない。

【一〇】澡豆。小豆を粉にして水に和し、其の汁を以て漱ぐを云ふ。

は茅草に坐すべし。若し諸の雜供養を辦ぜずんば、[三〇]以て花水を奉ることも亦得。花香とは、一切の水生及び野澤山間の、種種の雜花の香しき者を皆供養に充つべし。[三一]行・住・坐・立通じて念誦することを許す。一ら通じて礙りなし。唯し臥時を除いて持誦を許さず。念誦し已訖らば、恒に思ふて[三二]六念せよ。彼等の種種の功德を觀察して散亂せしむること勿れ。

除障分品第三[一]

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人、若し一念を起し、貪・瞋・癡・等の一切の煩惱、心と相合する者を名づけて生死煩惱と爲す。若し此の心を除けば、卽ち淸淨なることを得。諸佛常に是の法を讃じて、名づけて解脫と爲す。譬へば、淨水は必ず垢穢無けれども、塵坌を以ての故に、水をして渾濁ならしむるが如し。性は本元より淨なれども、客塵煩惱心を渾し濁らしむるを以て、眞性現れず。若し亂濁せざらしめんと欲はば、當に數珠を取るべし。念誦の人は心を守つて一境ならしむべし。數珠に多種あり。謂く[二]活兒子、蓮華子・[三]阿嚧陀囉阿叉子・水精・赤銅・錫・木槵・琉璃・金銀・鑌鐵・商佉・任に一色を取つて以て數珠と爲せよ。虔心に數珠を執持し已つて念誦すべし。或は右の手或は左の手を用ひて、應に眞言を念ずべし。專心に誦持して錯亂せしむること勿れ。心を本尊に繫け、或は眞言幷に手印等を思ふべし。由し入定の如くにして心を散亂すること勿れ。諸根を調伏して尊の前に端坐し、觀想を成し已つて、微に兩脣を動かして眞言を念持すべし。人心の[四]逸盪なること、由し風電と[五]獼猴との樹を掉ふと、海波と潮浪との如し。諂曲自在にして諸境に耽著す。是の故に應に須く心を攝め、動ぜずして眞言を持誦すべし。若し心疲倦して、惛沈し眠睡し心悶し迷錯せば、應に起つて經行すべし。或は四方を觀じ、或は水を面に灑いで醒悟することを得しめよ。或は經行の次に故なきに本の師僧を憶ひ、或は舊亡の父母を憶ひ、或は同學を憶ひ、或は婬を想はば、心卽ち

【三〇】 以て華水。華水供の典據。

【三一】 行・住・坐・立。四威儀に於て念誦許否の典據。

【三二】 六念。一、念佛(Buddhānusmṛiti)救世大慈父。二、念法(Dharmānusmṛiti) 出離解脫門。三、念僧(Saṃghānusmṛiti)所有良福田。四、念戒(Śīlānusmṛiti)世無上菩提本。五、念施(Tyāgānusmṛiti) 具足波羅蜜。六、念天(Devatānusmṛiti) 讃法利群生。此等を修すれば、心に定を得て涅槃に赴くとす。

【一】 除障分。前の結界如法ならざるが爲か、大供養の魔の爲に便を得らるゝが爲か、等の問に依つて、廣く除障の法を答ふ一段である。

【二】 活兒子。菩提子のこと。

【三】 阿嚧陀囉阿叉子。金剛子を云ふ。

【四】 逸盪。人心散動して靜ならざる貌。

【五】 獼猴。梵に Vānara, Markaṭa, Kapi と云ふ。

逸ならしむること勿れ。女人の色を令くして巧に笑み嬌て言ひ、性矜り粧ることを愛し、行歩艶にして、姿態を以て男子の心を動かし、迷ひ惑亂せしむ。眞言を持する者は、寧ろ[24]火星を以て眼中に流入し、雙目を失して盲ひて見る所なくとも、亂れたる心を以て女色を觀視して、種種の相好美艶なるを分別せざれ。念誦者をして威力なからしめ、緣に隨つて乞食して、住著を生ずること勿れ。正思惟を以て其の心を調伏し、[25]牟尼を以て行じて他の舍に入り、上中貧賤の家を擇ばざれ。又新産の婦ある家に入るべからず。牛・馬・驢・駝・猪・犬・羊の産まで皆往くべからず。及び衆多の人の飲酒の處、婬男・婬女の伴合放逸の處に往くべからず。衆多の小兒戲翫の處も亦觀視せざれ。俗家に於て婚禮の處、惡狗有るの家、及以び伎兒の音樂を作す處、若くは久諳の朋類、詐つて好心なりと稱することと有つて、我れ眞言章句を持すと云へ、未だ曾つて明師に[26]稟承せざれども、強て我れ眞言祕藏を解せりと道ふて、好んで論端を生じ、無智の人の中に於て、我れ曾て聞解せば、汝が與に師と爲るに堪へたりと云ふ。若し智人の所問に逢つては啞羊に如以たり。他の實心の好人を誑し、財物を受けて妻兒を養活す。心中の三毒の煩惱、癡と恚と我慢とは有頂よりも高ふして、道心は一分もなく、詐つて我れ佛法を解すと稱し、三尊を欺慢し、亦一切の長幼士道の類を欺く。此の如く等の人は、過愆無邊なり。略して之を言はば、上の如く等の處には、皆往いて乞食を行ずることを得ざれ。餘の處には任に往くべし。乞ふて食を得ること已んなば、卽ち本處に還り、水を以て足を洗ひ、一ら前件の分食の法に依つて本尊を供養し、[27]『一通無礙』一分をば自ら食し、餘をば過去七代の父母、[28]及び水陸の餓鬼に於てせよ。前に於て已に釋せり、更に名を具にせず。時に依つて食して、過中を犯すこと勿れ。日に三たび澡浴して、時及び節を知り、花と塗香とを獻じて供養すべし。[29]香泥を以て手に揩り、以て讚歎するに三時闕すること莫れ。供養する所の物を汚觸せしむること莫れ。夜の三時には唯燒香をのみ供養すべし。香泥を以て手に揩り、觸手を以て手印を結ぶこと勿れ。念誦の時

【二四】火星を以て眼中に流入し。火星は火曜星を云ふのではない。星の字には別意なし。俗に火玉杯と云ふに同じ。今火について星と云ふは、光を言はんが爲である。

【二五】牟尼云々。牟尼(Muni)とは寂默の義。卽ち寂靜默念として他の舍に入るべきを云ふ。

【二六】稟承。指圖を受くること。

【二七】一通無礙。此の一句は亂脫である。下の通じて念誦を許すの次に廻文す。

【二八】水陸の餓鬼。眞言行人施餓鬼を修すべき典據。

【二九】香泥を以て。塗香を行ずる典據。

惡因果の法を論ぜば、有智も無智も刹利も婆羅門も毘舍も輸達囉も等しふして差別なし。良に世間の妄分別に由るが故に、假に名字を立つ。若し能く善を修せば、當に[二〇]涅槃を證すべし。若し因果を說かずんば、四姓を論ずること莫く、一切の罪を造る者、皆惡道に入つて苦を受く、但四姓のみに非ず。

復た次に蘇婆呼童子、[二一]衆生は無始より已來垢穢の身なることは、食淨なるに由らざればなり。身心淨なるを以ての故に、惡業を斷除して諸の善法を修す。方に身心の清淨なることを獲得すべし。[二二]譬へば、人有つて身に瘡癬を患ひ。但除差のみを念じて、藥を以て之に塗るが如し。行人の食を喫することも亦復た是の如し。但し飢渴を除いて滋悅を樂はざれ。又譬喩に云く、人の父子有つて大砂磧に入らんに、路遙に超遞として、飢渴に逼められ、其の人當に子の肉を食すべきが如し。行者の食を喫することも亦復た是の如し。但し飢病を除くのみ、其の味に著すること勿れ。前の施主の飯を持して來れるを觀る時、心に施物の消し難きことを懼れ慚愧して、當に此の餐を食すること、子の肉を食するが如くに想ふべし。喩へば、物を秤るに重きに隨つて頭下り、其の物若し輕少なれば、便即ち頭高く、物若し均平なれば、其の秤も亦平かなるが如く、念誦の人も亦復た是の如し。量を過ぐることを得ざれ、極少なるべからず。譬へば、朽舍の將に崩倒せんとするに、壞せしめざるが故に、柱を以て支へ持つが如く、行人の食を喫することも亦復た是の如し。但身を存して、實果を求覓するが爲のみにして、世間に久しく身を住せしめんことを貪するが故に、而も食味を悕はざれ。譬へば、車の行くには當に油を塗るを以て增々善となるべきが故に、應に食を須ふべし。是の故に世尊、是の如くの法を說き給ふ。欲界の有情は食に依つて住すと。行者、常に須く觀察すべし。已身は由し芭蕉の如し。喫ふ所の飲食は、其の味を貪すること勿れ。四種の鉢に於て隨つて其の一を取り、前四肘を觀て次第に乞食すべし。世尊の說き玉ふ所は、智慧方便を以て[二三]六根を調伏して、放

【二〇】涅槃(Nirvāṇa)。寂滅・圓寂・滅度・無爲等と譯す。

【二一】衆生は無始より已來云々。無始以來食味に貪し、不淨食を喫ふ故に、垢穢の惡身を受く。此の不淨に就て事理の二がある。事不淨とは酒肉・五辛・殘食・穢物等を云ひ、理不淨とは違理の貪求・不可作事業・盜賊等を云ふ。又常に三毒五欲の食を喫ふから、生々世々に不淨である。

【二二】譬へば人有つて云々。以下に數多の譬喩を擧ぐ、皆是れ信施の食觀の要法である。

【二三】六根。六識(眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識)の所依となつて、六識を起し、對境を認識するもの、卽ち、眼根(Cakṣurindriya)・耳根(Srotrendriya)・鼻根(Ghrāṇendriya)・舌根(Jihvendriya)・身根(Kāyendriya)・意根(Ma-nendriya)をいふ。

を得せしめよ。念誦の人、若し是れ【一四】婆羅門種ならば彼れ此の難を致さん。汝は是れ婆羅門種なり、云何んが釋教の眞言を持誦せんや。汝應に自ら學し、及以び他に教へ、自ら受けて他に施し、自ら天神を祭り、亦他に祭を爲さしむべし。斯の如くの六法は是れ汝が本宗なり。復た應に火及以び是の王に事ふべし。亦須く妻を取り、男を生じて種を續ぐべし。汝此の法を行じて、方に解脱を得べし。云何んが釋教の眞言を持誦せんや。念誦の人、若し是れ【一五】刹利の族種ならば、彼れ此の難を致さん。汝は是れ族姓刹利の種なり、應に須く祭祀し、捨施し、自ら學すべし。斯の如くの三法は是れ汝が本宗なり。復た須く紹繼して、怨敵を摧伏すべし。汝此の法を行じて、方に解脱を得ん。是の如くの眞言ば、汝學すべからず。念誦の人、若し是れ【一六】毘舍の種ならば、彼れ此の難を致さん。汝は是れ毘舍の種及び雜業下賤の類なり。【一七】興易して利を求め、廣く他財を貪り、貴を返して賤を求め、斗秤を翻弄して妄語を業と爲す、是れ汝が本宗なり。云何んが眞言を持誦することを得ることを求めんや。汝、釋教の眞言を學すべからず。

念誦の人、若し是れ【一八】輸達囉の種ならば、彼れ此の難を致さん。汝は是れ輸達囉最下の種なり、應に農田を作るべし、常に淨行の婆羅門を供養すべしと。是の如く等の種種の諸難を以て行者を惱亂して退心せしめんと欲する者あらん。彼等外道惡人は、直に他を損するのみに非ず、亦自らを損するに及ぶ。外道の法は午時を過ぎて食す、聖道を修する行者は彼と同じからず。是の故に外道の家を往過して、而も乞食を行ずべからず。若し五辛酒肉の家有らば、眞言を修行せん者は、假使一劫飢餓の苦を受くとも、亦此に於て而も食すべからず。何を以ての故に、【一九】旃陀羅の居と共にするに異なることなきが故に。亦門首を過往して、彼の人と共に語るべからず。何に況や食せんをや。若し彼れが食を食せば、彼の人と共にすると何ぞ異ならん。淨行と名づけず、亦旃陀羅に同じ。當に須く善く分別すべし。行坐住止を知り、甚だ須く作意し觀察して、然る後に方に往來し去るべし。若し善

【一四】婆羅門種(Brāhmaṇa.) 四姓(Catvāro varṇāḥ)の最上に位す。彼等は凡て梨俱吠陀を誦出した詩聖の後裔で、七聖の系統を引いたものであると信ぜられてゐる。

【一五】刹利(Kṣatriya. 王種)。國王を首領とした一般の武士の階級である。

【一六】毘舍(Vaiśya. 商賈)。所謂平民で、主として農工商に從事する生産的階級である。以上の三姓は所謂再生族(Dvija)と稱せらる。

【一七】興易。貿易即ち買賣である。

【一八】輸達囉(Śūdra. 惡種農人)。奴隷族として全く機械視され、毫も公民權を認められぬ階級である。前の再生族に對して一生族(Ekajāti)と云ひ、宗教的に救はるゝことが出來ぬ賤民とせられて居る。

【一九】旃陀羅(Caṇḍāla. 屠種)。支那にいはゆる魁膾の類であつて、最も嫌はれた一階級である。

る所の衣服は皆須く赤色にすべし。或は白衣及以び草衣を著し、或は樹皮衣・【一〇】芻摩布衣を著すべし。須く四種の【一一】應器を持すべし。木・鐵・瓦・【一二】匏等の【一三】鉢、極めて須く團圓なるべし。細密にして缺くること無く、破漏せしむること勿れ。應に此の器を持して、次第に家家に乞食すべし。食を得ること足り已んなば、清泉の所に近づき、水を以て淨洮せよ。其の飯、若し食せんと欲する時は、先づ鉢の中の飯を出だし、分つて五分と爲せ。一分をば路行に准擬す、飢人來らば即ち是れなり、一分をば水中の衆生に施し、一分をば陸地の衆生に施し、一分をば七世の父母及び餓鬼の衆生に施し、第五分をば足ると足らざると自ら食すべし。正しく食せんと欲する時は、此の鉢の中の飯を觀じて不淨觀を作し、然して後に之を食せよ。但し飢病を療するのみにして、美味を貪すること勿れ。食し訖了已んなば、即ち河・池・泉に向つて、清淨に澡浴し口を漱ぎ、柳木を以て齒を揩り、水を出でて衣を著し、其の精室に入つて佛を禮するに三たび拜し、願を發し畢つて即ち淨室を出で、便即ち經行すること三五十廻し、然して後に大般若波羅蜜多經を讀むべし。所居の處は村邑を去ること遠からず、衆多の人の處に近からず、外道無く及び飲食に豐足なるべし。常に惠施を樂ひ、三寶に歸信する處に安居せよ。外道我慢の人と家に住止すること勿れ。豪族に倚恃すると、無智の人の中と、僧の利を劫め剝ぐと、慈なく悲なきと、口には善を行ずと道へども、心には毒蛇を懷くと、佛僧に依傍して專ら名利を求むると、是の如く等の人には、愼んで親近すること勿れ。深く敬つて此等を遠離すべし。一分の衆生、或は念誦の人を見て、釋教の法を尊崇する時に、此の類の衆生は、心に常に毒を懷いて、瞋恚罵詈し、未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂ひ、多く人の過を求め、常に便を伺ひ覓めて、惱亂の心を興す、冀くば伴合を得ざらんことを。甚だ是れ善い哉、能く善惡を分別し、只時時に相見て方便を以て彼の人を化して、道芽を生ぜしむ可し。未だ見て即ち深妙の義味を說かざれ。善根未熟なるが爲の故に、且く爲に淺近の義を說き、漸く修行して方に大に入ること

花鬘瓔珞及香油塗身(Gandha-mālyavilepanavarṇaka-dhāraṇavirati. 離持香鬘塗彩)。七、不坐高大牀(Uccaśayana-mahāśayanavirati. 離高牀大牀)。八、不非時食(Vikāla-bhojanavirati. 離非時食)、との八戒を持齋すること一日一夜すれば、よく妙果を得るといふ。

【一〇】芻摩布衣(Sāṇaka. 麻衣)。

【一一】應器。具には應量器といふ。これに就て在家の人は四鉢を持つことを許すけれ共、出家の僧は唯鐵鉢に局ると云ふ義と、又此の經文に依つて在家出家通じて四鉢を持つことが出來ると云ふ義とがある。

【一二】匏。フクベ。

【一三】鉢。梵に Pātra と云ふ。

に是の如くの勝處に居住すべし。若し也是の如くの福地に遇はずんば、亦大河の邊に居止すべし。或は小河及び[三]陂沼に近く、名花の滋茂せる地あらば亦得。當に鬧閙を離れ、與に雜居すること勿るべし。其の水清く流れ充滿盈溢して、諸の水族の惡毒蟲なきもの、或は山間閑淨の處の地に、軟草を生じて花果に豐足なるに居すべし。或は山腹及び巖窟の中の、諸の猛畏なる毒獸の類なきに住すべし。是の如く等の處皆深さ[四]一肘量を掘り取つて、あらゆる荊棘・瓦礫・糠・骨・毛髮・灰炭・[五]鹹鹵及び諸の蟲窟を淨除すべし。乃至深く掘れども、もし盡きずんば當に之を棄てゝ、更に餘處を求むべし。得已つて修治すること一ら前の法の如くせよ。所掘の處に塡むるに淨土を以てし、其の地の上に於て精舍を建立すること極めて牢固なるべく、暴風をして室に入ること有らしむること勿れ。壁孔を泥飾し、蚉蟻を舍上に停住すること有らしむること勿れ。好く蓋ふて漏水あらしむること莫れ。四壁に窓を安き、極めて明淨ならしめよ。其の室に門を安くこと東西南北方にせよ。唯し南面を除いて門を置くべからず。營造し成り已んなば、[六]牛糞を用て其の室中に塗り、彼の法事相應の方に隨つて尊像を安置すべし。其の尊容は彩畫し、或は刻成するに銅・金・銀を以てし、力の辦ずる所に任せて、皆供養することを得。其の畫する所の物は、應に[七]白氎を用て細軟密緻にすべし。[八]匠者兩頭を織り成すに、縷を存して割截せしむること勿く、闊幅にして髮無からしめ、未だ曾て用を經ざれ。先づ須く淨洗すべし。復た香水を灑ぎ、畫する所の彩色に膠を和すべからず。新器に置いて牛毛を筆と爲せ。其の像を畫く人は澡浴淸淨にして、應に[九]八戒を受くべし。日日に是の如く爲に八戒を受けよ。法の如くして畫像成し已んなば、應に塗香・燒香・花鬘・飲食・燈明を用て、像の前に安置すべし。讃歎し禮拜して廣く供養し已り、然して後に法を作さば、求むる所速に意の如く成就することを得ん。

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人、若し是れ俗人ならば、亦應に頭を剃り、唯頂髮を留むべし。著す

【三】陂沼。陂はツツミ。

【四】一肘(Hasta)。印度で用ふる尺量の稱。古來之を佛本行集經は貳尺・毗曇の說には壹尺五寸、資持記は壹尺八寸、不空絹索經には拾六指等と記す。一指(Aṅgula)とは指の幅を云ひ、一肘とは肘節より中指の端に至る長さをいふのであるから、人に依つて異るのは當然である。但し通途に約すれば、周尺の一尺八寸である。周の一尺は曲尺の八寸であるから、我國の一尺五寸餘(英國の一呎八吋)に相當す。

【五】鹹鹵。人生を鹹と云ひ、天生を鹵と曰ふ。但しこゝでは鹽土の意。

【六】牛糞。梵に Gomaya (瞿摩夷)と云ふ。

【七】白氎。氎は堅厚細密の織物。

【八】匠者兩頭云々。新しき未だ曾て用ひざる織立の絹には、兩頭に糸の切下を存す。

【九】八戒。八齋戒の略。一、不殺生(Prāṇātipātavirati. 離殺生)。二、不偸盜(Adattādānavirati. 離不與取)。三、不淫欲(Abrahmacaryavirati. 離非梵行)。四、不妄語(Mṛisāvādavirati. 離虛誑語)。五、不飲酒(Madyapānavirati. 離飲諸酒)。六、不著

智慧を具し、淨潔端嚴にして[四一]族姓より生ずる者と、勇健にして怖るゝこと無く、能く諸根を調へて[四二]捨力を樂ふ者と、能く飢・渴・寒・暑・苦惱を忍んで退を生ぜざる者と、樂つて和上闍梨を供養して常に恩義を懷き、三寶の處に於て深心に恭敬するものとを須ひよ。是の如く等の行人は甚だ値遇し難し。若し是の如く等の伴を具せば、或は一・二・三・四・五、唯し多きは更に甚し、眞言を持する者、畢に福を成ずることを獲ん。當に須く是の如く等の伴を覓むべし。

[一]分別處所分品第二

復た次に蘇婆呼童子、念誦の人、若し速に成就せんことを求めば、應に諸佛の曾經て住せられ玉ひし處、或は菩薩の住處、或は緣覺と聲聞との所住の處を覓むべし。是の如く等の地には、諸の天龍等常に供養及以び衛護を爲す。是の故に念誦の人、先づ身と心とを洗ひ、當に[二]律儀を具すべし。常に應

とし玉ふ。

【二七】五部の尊神主。結界の主尊を云ふ。五部は佛部には不動明王、寶部には軍荼利明王、金剛部には降三世明王、蓮華部には馬頭明王或は大威德明王、羯磨部には無能勝或は金剛夜叉を主尊とす。

【二八】精舍(Vihāra. 佛殿)。

これに入るに廣略二法あつて、略法は拳印吽三遍。

【二九】黄門(Paṇḍaka. 半擇迦)。男根を損壞せるもの。又般荼迦・般吒に作り、不男とも譯す。

【三〇】爾時。以下執金剛の答。

【三一】大三昧耶曼荼羅。Mahā-samaya-maṇḍala.(本尊)

【三二】妙曼荼羅。Karma maṇḍala. を指す。(作業)

【三三】灌頂(Abhiṣeka)。往昔、印度國の諸王が、國事を太子に委するに際し、先づ四大海の灑水を寶瓶(Ratna-kalaśa)内に置き、この瓶を執つて、これをその世子の頂に灌ぐ。この古例に倣つて五智(Pañca jñāna)の法水を受者の頂に灌ぐをいふ。故に眞言密教に於ては、眞言行菩薩が、如來の五智を體得して、法王子となる威儀を示すものである。この灌頂に結緣と受明と傳法との三種あつて、眞言行の菩薩は、少くも此の中の一つは是非共受けなければならないことに成つて居る。

【三四】任に一業。一尊法を作すを云ふ。

【三五】毘那夜迦(Vināyaka. 常隨魔)。歡喜天の異名。今は自身所具の根本無明の散亂忘心と解す。

【三六】尸羅(Śīla. 清涼)。戒。

【三七】善逝(Sugata)。釋迦佛を云ふ。

【三八】内に緣起法身の偈。塔中に偈を安ずるを、緣生法身塔と名づけ、亦は法頌舍利と名づく。緣起法身の偈とは、諸法從レ緣生、如來說ニ是因一、是法從レ緣滅、是大沙門說、を云ふ。

【三九】妙音。五韻五調子が呂律法に叶つた音である。

【四〇】先づ須く云々。以下は伴侶に依つて悉地成就するから、必ず善伴を求むべきことを說示す。

【四一】族姓。正種(Abhijāta)即ち貴き生れを云ふ。

【四二】捨力。捨は平等の義。

【一】分別處所分。前の處所を得ざるが爲か、處所不淨なるが爲か、等の問に對して、眞言行者の所住處を明す。蓋し心は境に依つて轉ずるものであるから、必ず住處を擇ぶべきである。

【二】律儀(Saṃvara. 禁戒)。戒法を持して威儀を整ふること。

又諸の使者等の妙曼荼羅に入れ、及び餘の無量の明王妃等も是の如し。普く福聚諸明の所居の住處の曼荼羅に入り已んぬれば、一切の諸魔遙に彼の人を見て、心に大怖を懷き各自ら馳散す。數諸の曼荼羅に入るに由るが故に、聖衆の爲に加被せらるゝが故に、諸魔此の念誦の人を見ること、由し金剛自在奮迅の所居の住處の如く、由し火聚の如し。並に皆馳散して、害を爲すこと能はず。世間の所説、及び出世間の諸の明眞言速に成就することを得。若し此の大曼荼羅に入らざる者は、慈悲及び菩提心を具せず、諸佛を敬はず、外の餘の天に歸して、佛法の眞言を念持せば、卽ち當に自ら害すべし。若し念誦の人、遍く諸の曼荼羅に入ることを辨ぜずんば、中に於て一の三昧耶を辨ずるに隨つて、深心に[三三]灌頂の師主を恭敬し禮拜して灌頂を請乞ひ、灌頂を得已つて、其の部の中に隨つて[三四]任に一業を作すべし。能く一切の藥叉・龍王及び諸の惡魔・[三五]毘那夜迦・猛害の天等をして惱亂すること能はざらしむ。持誦の人、先づ須く持戒すべし。譬へば、芽種の皆地に依つて生ずるが如し。勸めて漑灌するに由つて芽をして生長せしむ。世尊所説の別解脫の法、清淨の[三六]尸羅具に修行すべし。若し是れ浴流ならば、唯僧服を除いて、自餘の律儀は悉皆差ふこと無し。必ず須く諸の雜染の法を遠離して具に[三七]善逝敷演の教門を行ずべし。眞言の法則も亦復た是の如し。念誦の人、若し疲倦を生ぜば、應に大乘經典を讀むべし。

又滅罪を作さんと欲せば、空閑及び清淨の處に向ひ、或は香泥を以てし、或は妙砂を用て塔を印ずること、以て十萬に滿てよ。唯し多きは最も甚し。[三八]內に緣起法身の偈を安ずべし。或は舍利塔及び尊像前に於て、塗香・散花・燒香・然燈を用てし、幢幡蓋を懸け、及び[三九]妙音を以て諸佛を讚歎し供養して、恒に斷絕せざれ。[四〇]先づ須く好き同伴を得べし。若し同伴無ふして成就を得と云はば、是の處り有ること無し。譬へば車乘の其の一輪を闕すれば、假令能善く御する者も亦進むこと能はざるが如し。念誦の伴なきも亦復た是の如し。縱使勤苦して作業すとも終に亦成ぜず。然も彼の伴侶は

當す。月(太陰)の漸次光を失ふ點に就て黑といふ。從つて月の後半(我國の一日から十五日まで)を白月(Śukla-pakṣa)或は白分と云ふ。

【三一】五星。火曜伽或、央羅伽央(Aṅgāraka)・水曜辰星(Budha)・木曜太主、歲星(Bṛhaspati)・金曜太白(Śukra)・土曜鎭星(Śanaiścara)。

【三二】薄食。常には薄蝕に作る。日月の光のうすきとかくると。

【三三】結界(Simābandha)。これに二義あつて、一は戒律の護持上、僧衆をして過失を少なからしむる爲に、作法して一定の地域を區劃し制限するを云ふ。而して其の限定せる地域を界と云ひ、其の內部を界內、外部を界外と云ふ。其の二は、密教で修法に依つて、一定の地域に魔障を入れざるために結護するを云ふ。今は兩者の中、後者に從ふ。

【三四】出入。二便に出入す。

【三五】喫食。梵に Anna と云ふ。

【三六】正食。これに飯・麥豆飯・麨・肉・餅の五種あつて、五正食或は五噉食と云ひ、他の五種の不正食若くば嚼食、卽ち根・莖・葉・華・果に對す。而して佛は律に日午(Madhyāhna)を制して、法食の正時

莊嚴して己が樂を求めず、有情を利益せんとして能く大苦を忍ぶ。是の故に菩薩は、衆生の苦を見ては菩薩も亦苦しみ、衆生の樂を見ては菩薩も亦樂しむ。我れ汝が心を觀ずるに、終に己が爲にせずして、衆生を利せんが故に是の如くの問を發す。汝今一心に思惟して、諦かに我が法を受くべし。吾れ當に汝が爲に分別し解說すべし。若し一切の眞言法を持誦すること有らば、先づ諸佛に於て深く敬心を起し、次に無上菩提の心を發すべし。衆生を度せんが爲に廣く大願を發し、貪・癡・憍・慢・等の業を遠離し、復た三寶に於て深く珍重を生じ、亦應に虔誠に大金剛部を遵崇すべし。當に須く殺盜・邪婬・妄言・綺語・惡口・兩舌を遠離すべし。亦酒を飲み及以び肉を食はざれ。口に念誦すと雖も、心意不善なれば常に邪見を行ず。邪見を以ての故に、變じて不善と爲つて、雜染の果を得ること、譬へば田を營むに時節に依つて作せども、種子若し燋れぬれば、芽を生ぜざるが如し。愚癡・邪見も亦復た是の如し。假使善を行ずとも終に果を獲ず。是の故に當に邪見を遠離し、恒に正見に依つて動搖せざるべく、十善を修行して、甚深微妙の法を增長すべし。若し天龍・阿修羅等及び血肉を食する諸の惡鬼の類、世間に遊行して有情を損害し、持誦の人を惱まし、心をして散亂せしむること有るとも、正しく我が妙眞言の法を持するを見るの時、彼等は卽ち恐怖を生ず。此の法彼と極めて相違するが故に、念誦の人をして菩提を退せしめんとし、彼等をして損傷せざらしめんと欲する者は、應に須く此の[22]大三昧耶曼茶羅に入るべし。諸大聖衆及與び諸天所居の住處なるを以て、是の故に名づけて大曼茶羅と爲す。又復た須く諸の事法を作す[23]妙曼茶羅に入るべし。又能く諸天神及び魔宮等をして調伏せしむる者あり。是の故に重ねて更に須く最勝明王の大曼茶羅に入るべし。

又諸の眞言大曼茶羅に入ること、上の所說の妙三昧耶の者の持誦の人をして罪を滅することを得せしむるが如きの故に、是を以て應に須く數入るべし。

燒等の喜樂を生じ、俱に諸根を資益するものを云ふ。又第六識可愛の境に觸對して喜樂を生じ、諸根を長養するものを云ふ。

【一五】五辛。五種の辛草。亦五葷とも云ふ。或は大葱・革葱・蒜・興渠・蘭葱の五種を擧げ、或は大蒜・革葱・慈葱・蘭葱・興渠の五種となし、或は葱・韮・蒜・薤の四種とす。而して此等の五辛は、肉類と同じく佛弟子の食すべからざるものとしてある。

【一六】呼摩(Homa)。護摩に同じ。焚燒の義で、火中に物を投じて供養するをいふ。

【一七】經行(Caṅkramaṇa)。徐行を以て一定の地を往返すること。これ修道中、其の倦怠を醫する方法である。

【一八】呼摩する時に云々。護摩の時火を煽ぐには常に扇子(Vidhamana)を用ひ、口を以て吹くを禁ずる故にかく云ふ。

【一九】柴。卽ち柴木(Indhana)で、今時の瓊木(或は段木)を指す。

【二〇】黑月。白月。印度では滿月の日から次の滿月の日に至るまでを一ケ月とし、前半卽ち滿月から新月に至るまでを黑月(Kṛiṣṇa-pakṣa) 又は黑分と云ふ。我國の十六日から三十日に至る十五日間に相

爲か、[17]經行せざるが爲か、坐禪せざるが爲か、手脚を洗ふこと不淨なるが爲か、楊枝を嚼まざるが爲か、漱口不淨なるが爲か、洗淨如法ならざるが爲か、花を採ること如法ならざるが爲か、弟子如法ならざるが爲か、弟子と師主と心に異あるが爲か、弟子、法の如く食を辦ぜざるが爲か、持誦の人、觸手にして淨食を汚すが爲か、[18]呼摩する時に口を以て火を吹くが爲か、[19]柴如法ならざるが爲か、殘食を將て佛に供養するが爲か、持誦の人、殘食を喫ふが爲か、持誦の人、二時に讀經せざるが爲か、師僧に違背するが爲か、父母に反逆するが爲か、師主の教勅を受けざるが爲か、持誦の人、多く世事を談ずるが爲か、名利を求むるが爲か、名聞を求むるが爲か、熾然たる世法の業を作すが爲か、白月の作法如法ならざるが爲か、[20]黑月の作法如法ならざるが爲か、[21]五星の度を失ふに作法せざるが爲か、日月の[22]薄食に作法せざるが爲か、[23]結界如法ならざるが爲か、護身如法ならざるが爲か、坐起如法ならざるが爲か、[24]出入如法ならざるが爲か、[25]喫食如法ならざるが爲か、[26]正食の時、[27]五部の尊神主を想はざるが爲か、本部の尊主を想はざるが爲か、大供養の時、一切の諸の食器及び飲食等を結護すること如法ならざるが爲に、魔に便を得らるゝが爲か、[28]精舍に入る時に、開門の法を作さざるが爲か、念誦せんと欲ふ時、[29]黄門に、逢ふことを爲して、共に語るが爲か、是れ處女と寡女と共に語るが爲か、當に地を擇んで坐せざるが爲か。

是の如く等の汚觸犯事、我れ今都て覺知せず、何に況や未來の衆生、此の事を曉悟せんや。唯願くは尊者、大悲心を興し、衆生を救護して、念誦の法門兼て呼摩を作す儀則を指授せられ、三種の悉地速に證し、効驗あつて、未來の衆生をして、一一に此れに依つて行じ、咸解脱に昇らしめ玉へ。

[30]爾時に執金剛菩薩大藥叉將、當に蘇婆呼童子の是の如くの問を聞き已つて、須臾にして自ら言さく、善い哉、善い哉、童子諸の衆生を愍念し、慈悲遍く覆ふこと、由し月光の普く世間を照すが如し。汝が此の心極めて大悲なるに緣るが故に、已に大切の諸の大菩薩の菩提心に超えたり。法門を

その悟了するところは覺者(Buddha. 佛)に等しいから等覺となす。

【一〇】　無明(Avidyā)。無相平等絶待の眞如中道の法體に迷つて相待の觀念に陷入り、常に我他彼此を隔てゝ相手を認むる煩惱を云ふ。斯様に絶待の理に暗い煩惱であるから、また不了一法界の惑と名づく。又一切の煩惱は皆これから生ずるといふ意で、この無明を根本無明と名づけ、更にこの無明煩惱は、親しく眞如絶待の中道に附して起る煩惱であるから、附體の惑・同體の惑・體上の惑とも呼ぶ。

【一一】　放逸(Pramāda)。心が散慢で諸の善法を修せぬこと。

【一二】　惛沈(Styāna)。心が眞闇となつて沈み入る心作用。

【一三】　金剛(Vajra)。明王を云ふ。

【一四】　觸食(Sparśahāra)。九食の一。九食とは段食・觸食・思食・識食・禪悦食・法喜食・願食・念食・解脱食の九種をいふ。其の前四食を世間の食といひ、後の五食を出世間の食といふ。食には長養資益の義があつて、世間の四食は生死の色身を長養し、出世間の五食は法身の慧命を資益す。中に就て今の觸食とは觸は觸對、六識の觸對する色等諸塵の柔軟細滑冷

からざるなり、若し須く依る可からずんば、先に以て行說すとも、一も證効無し。世尊教を設け玉はく、若し能く眞言を持誦すれば、即ち智慧を得、[一〇]無明を離るゝことを得。無明斷ぜらるゝが故に、即ち寂滅解脱すと。若し此の如くならば、何が故に悉地し願を果すことを得ざる。眞言を乘つべくんば、當に無明に順ずべし。何ぞ須く勤苦して、眞言を持誦し悉地を求むべき。一切の聖人は教を妄に施さず。衆生は心を興し、念を動かし、意を擧て求むる者なり。菩薩は他心智を得て、衆生の願を滿し、第一の樂を與ふ。何が故ぞ、衆生求むるに願を滿さしめず、苦む者に樂果を獲せしめず、無量の衆生をして疑謗の中に墮せしむるや。我れ聞く一切の聖人は皆妄語せず、施す所の言教をば、衆生の聞く者、法に依つて修行すれば、即ち正道を見、報を獲ること無邊なりと。云何んが業を作して果を得る耶。

法を具せざるが爲か、時節に依らざるが爲か、日を得ざるが爲か、月を得ざるが爲か、星を得ざるが爲か、處所を得ざるが爲か、處所不淨なるが爲か、供養を具足せざるが爲か、同伴を得ざるが爲か、心を專にせざるが爲か、[一一]放逸なるが爲か、坐多きが爲か、[一二]惛沈するが爲か、思想多きが爲か、身不淨なるが爲か、衣不淨なるが爲か、燈を然すこと是ならざるが爲か、食器如法ならざるが爲か、花如法ならざるが爲か、食を安ずること如法ならざるが爲か、酥・酪・乳如法ならざるが爲か、佛・菩薩・[一三]金剛・天等と鬼神等とを請ひ奉ること如法ならざるが爲か、持誦の人、[一四]觸食を犯すが爲か、持誦の人、[一五]五辛を犯食する穢處を經過するが爲か、持誦の人、婦人と共に同床に坐臥するが爲か、持誦の人、佛法僧物を盜むが爲か、持誦の人、一切衆生を劫奪し、幷に孤窮の人を欺くが爲か、六度を行ぜざるが爲か、佛法僧を供養せざるが爲か、一切の善知識及び一切衆生を供養せざるが爲か、一切衆生を輕賤するが爲か、[一六]呼摩如法ならざるが爲か、眞言の字句加減あるが爲か、藥味周備せざるが爲か、器如法ならざるが爲か、香水を下すこと如法ならざるが爲か、尊像を浴せざるが

持戒)・羼提波羅蜜(Kṣānti-pāramitā. 忍辱)・毗梨耶波羅蜜(Vīryapāramitā. 精進)・禪定波羅蜜(Dhyānapāramitā. 禪定或は靜慮)・般若波羅蜜(Prajñāpāramitā. 智慧)これである。布施波羅蜜とは、他のために金銀・衣服等を施す財施と、出世の正法を說き與ふる法施との二を云ふ。持戒波羅蜜とは、身三・口四・意三の諸惡を調伏し防止して、三業悉く如法・如律なるをいふ。忍辱波羅蜜とは、他人の打擲・罵詈等の慚辱を加ふことがあつても、安忍し更に瞋恨せざるをいふ。精進波羅蜜とは、善法を修するに勇悍であつて、急走急作よく勞倦に耐ふるをいふ。禪定波羅蜜とは、心一境性の三昧に住するをいふ。智慧波羅蜜とは、智慧は諸佛の覺母であるから、智慧を習修して諸法の性相を觀照するをいふ。菩薩はこれ等の六法を修し、生死海をこえて涅槃の彼岸に到る。故に波羅蜜を到彼岸とも譯す。

【九】 極等妙。佛位に入るに、五十二段の階級ある中の最後と、及びその次前との二位、即ち等覺位と妙覺位とをいふ。妙覺位は即ち佛果である。等覺位は佛位の次前位で、未だ無明の餘習を存ずるけれ共、

蘇婆呼童子請問經[一]

卷の上

律分品第一[三]

唐天竺三藏[二]輸波迦羅奉　制譯

[四]爾時、[五]執金剛菩薩[六]大藥叉將、威力難思にして、光千の日に超え、心を一にして住し玉ふ。大會の中に於て一りの童子有り、名づけて蘇婆呼と曰ひ、大悲淳厚なり。卽ち座より起ち、虔誠に執金剛の足を頂禮し已つて、躬を曲げ合掌して白して言さく、大威の尊者、我れ今疑を抱くこと日久し、少か問ふところ有らんと欲す、唯聽許せられよ。

爾時、執金剛大藥叉將の言く、汝が疑ふ所の者を、今恣に汝問へ。我れ汝が爲に決して疑情を斷除すべし。蘇婆呼童子の曰く、我れ今恣に問ふべし、尊威聽許せられよ。我が久しき疑は、遍く一切の世間の出家と在家との善男女等を觀るに、生死の海を出離せんと求むるが爲の故に、[七]陀羅尼の速に成就する法を求め覓めて、節食して持誦し、專心に勤苦す。是の如く修行すれども仍ほ成就せず。唯願くは尊者、不成就の因緣及び成就の法を分別し解說せられよ。尊威の悲光は能く衆生の極重の苦源を除き、演る所の眞言は復た能く障を破す。菩薩は因を修し、其の[八]六度を行じて[九]極等妙に至り、行願虛しからず。施す所の言教皆衆生をして菩提に進趣せしめんが爲なり。何に因つてか、衆生眞言を持誦するに復た果を獲ざる、師を尋ねて求むる所の眞言の悉地の上中下の法、日より月に至り、月至つて年を經、年より極めて一形を至して具に苦行を修すること晝夜を闕かざれども、亦効驗無し。若し以て法に依つて作せども成ぜずんば、此の眞言句は依る可

【一】蘇婆呼(Subāhu)。譯して妙手或は妙臂と云ふ。無畏は梵名を題とし、法天は漢名を題とす。中に就て妙臂を釋せば、妙とは能讃の字、臂とは所讃の法體である。此の童子は眞言門の中に於て、自在に能く發問して、修すべき所を辨ぜしむるを、臂の能く自在に諸物を執持して、所用を辨ぜしむるに比して妙臂と名づく。

【二】輸波迦羅(Subhakara)。翻して善無畏、又は單に無畏と云ふ。

【三】律分品。蘇婆呼童子、執金剛手に許可を請ふて、數多の問を擧ぐるに對して、執金剛、先づ眞言持誦の人の身・口・意の三業を律すべき法律を答へ玉ふ、故に律分品と云ふ。

【四】爾時。以下は正宗分である。此の經には序分なし。

【五】執金剛菩薩。卽ち金剛手菩薩(Vajra-pāṇi)である。

【六】大藥叉將(Mahāyakṣa)。祕密主(Guhyakādhipati)に名づく。

【七】陀羅尼(Dhāraṇi.總持)。

【八】六度。波羅蜜(Pāramitā)に六種あるから、六波羅蜜といふ。譯して六度となす。檀波羅蜜(Dānapāramitā.布施)・尸羅波羅蜜 (Sīlapārami-tā.

眞言を念誦する軌則と、行人の心散亂せば、本尊の像、及び手印を觀ずる等の法と、夢の好相七十五種とを明す。換言せば、此の品は、行者修行の精要を擧げ、以て敎の如く修すれば、必ず悉地成就することを說示す。

悉地相分品第七　妙臂童子の請問に對して、斷食・持戒・並に溫氣と烟相と火光との三種悉地の相等を明す。

下鉢私那分品第八　鉢私那を下して人に憑らしめ、以て三世・吉凶・禍福・善惡等を判ずる法を說く。

分別遮難分品第九　業報、その滅業並に重ねて雜類の諸の天神等を拜して、造罪せざることを明す。

下　卷

分別道分品第十　最初に八正道・持戒を辯じ、次に護摩作法を說く。

分別諸部分品第十一　諸明王・諸天・皆數萬の眞言を述ぶることを示す。

分別八法分品　第十二成眞言法・成金水法・成長年法等の八法・澡浴・淨手・等を說き、次に十三蛇毒・鬼魅病苦・療治の作法・滅罪の法の功德等を明す。

之を要するに、此の經は、彼の曼荼羅大會の中に於て、妙臂童子が金剛手に對して、未來の眞言行人の爲に請問をなし、金剛手がそれに答說されたものであるから、純密の所屬と見なければならぬが、然し謂はば雜集的で、時には矛盾撞着せるものすらあつて、何等思想が前後一貫してゐない。加之、此の唐譯は未再治の故か、往往に文義の通じ難い箇所がある。されど、前にも一言した通り、大師の御請來、殊に三學錄の律部に載せて、眞言行者所學の戒本とせられたのであるから、傳授も此の本に據ることになつてゐる。

終りに臨み、本經和譯並に解題の執筆に當り、龜井忠宗君より、多大なる援助を得たることを心から感謝する。

昭和五年十二月廿五日

譯者　神林隆淨識

蘇婆呼童子請問經解題

本經の內容

唐の善無畏三藏（Śubhakarasiṃha 淨師子、善無畏は意譯、637—735A. D.）の譯で、蘇婆呼（Subāhu 妙手或は妙臂）童子の問に對して、修法に關する諸種の事項を示したものである。宋の法天（Dharmadeva. 973 A.D. 汴京に來る）譯の妙臂菩薩所問經三卷は、同本異譯である。卽ち、善無畏は梵名を題とし、法天は漢名を題とす。最澄(767-822A.D.)・空海(774-835A.D.)・圓仁(794-864A.D.)・圓珍(814-891A.D.)の請來する所であつて、空海の三學錄中には、此の經と蘇悉地經とを律部に列す。

蘇婆呼童子卽ち妙臂菩薩は、胎藏界曼茶羅虛空藏院の虛空藏菩薩の左第二に位す。密號は悉地金剛で、虛空藏菩薩の吉祥の德を主る。三昧耶形は蓮華上一股杵、像は肉色、左手未敷蓮華を持し、右手與願にし、蓮上に左膝を立てゝ坐す。

上卷

律分品第一　蘇婆呼童子、執金剛手に許可を請ふて、七十七箇の問を擧ぐるに對して、執金剛、先づ眞言持誦の人の身・口・意の三業を律すべき戒法を答へ玉ふ。

分別處所分品第二　前の發問の中、處所を得ざるが爲か、處所不淨なるが爲か等に對して、眞言行者の所住處並に族姓を擇ぶべきを明す。

除障分品第三　前の結界如法ならざるが爲か、大供養に於て魔の爲に便を得らるゝが爲か等の問に對して、念珠・禮拜・食物等を說いて、廣く除障の法を答へ玉ふ一段である。

分別金剛杵及藥證驗分品第四　上の法を具せざるが爲かの問、又結界如法ならざるが爲か、護身如法ならざるが爲か等の問、又藥味周備せざるが爲か等の問に對して、執金剛菩薩、金剛杵造作の法、及び十七種の相應物の藥分成就の法と其の證驗、並に障礙神の障礙の種類と其の供養法等とを明す。

中卷

分別成就相分品第五　執金剛主、上の眞言の字句に加減あるが爲か、又嗽口不淨なるが爲か、洗淨如法ならざるが爲か、等の問に對して、護摩・成就相應の十種類等を辨說し玉ふ。

念誦眞言軌則觀像印等夢證分品　第六

唵引訖里二合都嚩、薩嚩薩怛嚩二合喋佗悉地捺多二也、佗誐誐曩車馱梵二合三沒馱微灑閣四補那囉誐曩也都五嚩日囉二合薩怛嚩穆六

是の如く一切の曼荼羅に於て三昧耶の勝印を而も解くことを作すべし。

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經（終）

金剛手の說く所の如し。

婆伽梵普賢是の如くの說を作し給ふ。

金剛薩埵等の薩埵は、一切成就して事業を作す、意に隨つて念誦すれば此の中に於て諸の事業に於て速かに成就す。眞言と心切と及び諸の明と、樂ひに隨て諸の理趣を修習す、教の說く所と及び自ら作に於て、皆成就を得ること一切に徧せり。

次に四種の祕密の供養を說くべし、應に作すに此の金剛歌詠の眞言を以てすべし。

【四五】唵引 嚩日囉二合 薩怛嚩二合 僧蘗囉二合 賀一 嚩日囉二合 囉怛曩二合 麼努怛嚂二合 嚩日囉二合 達摩誐耶奈三引 嚩日囉二合 羯磨迦嚕婆嚩四

曼荼羅の中に方て、此の金剛讃詠を以、而も歌ふて金剛舞を以てす、二の手掌と及び供養の華等を以て供養を作すべし、外曼荼羅に於て金剛香等を供養し已て本處に於て安じて、一切力に隨て而も供養し、一切如來に啓白し意に隨ふ香等を供養し、已に曼荼羅に入ては、力に隨て以て大曼荼羅に獻ずれ、一切の滋味の飲食と安樂等の一切の資具とを充ち足らはして受用せしめよ、應に一切如來の成就し給へる金剛の業戒を受け與ふべし。

此れは是れ一切の佛の體性、金剛薩埵の手に於て住す、汝今應に常に當に而も金剛薩埵堅固の業を受持すべし。

唵一引 薩嚩怛佗蘗多悉地二 嚩日囉二合 三摩耶底瑟姹三二合 翳沙怛鑁二合 駄囉夜弭四 嚩日囉二合 薩怛嚩二合 呬呬呬呬吽

卽ち各各に復告げて言く、餘人に於て說くこと得ること勿れと、卽ち誓心の眞言を誦すべし、先きに已に入らすは、一切如來に啓白して、薩埵金剛の印を結び、下從り上に向ひて解て此の眞言を以てすべし。曰く

【四五】四智の讚なり。

我今一切すべての自らの身口心の金剛の中に、金剛の儀軌の如くなさしむることを說かん。もし印をもつて緩慢を加持し、もし意解せんと欲せば、則ち此の心眞言を以て、堅固なることとなさしめよ。眞言に曰く、

唵嚩曰羅二合薩怛嚩三摩耶麼努波引攞耶嚩曰羅薩怛嚩怛尾怒波底瑟姹捏哩濁寐婆嚩蘇都使庾寐婆嚩阿努囉羯都寐婆嚩蘇布使庾寐婆嚩薩嚩悉朕寐鉢囉也車薩嚩羯摩素者寐質多室哩藥矩嚕吽呵呵呵呵斛引婆伽梵薩嚩怛他蘗多嚩曰囉摩弭悶遮嚩曰哩婆嚩摩訶三摩耶薩怛嚩噁引

此の眞言に由て、設ひ無間の罪を作り、一切の如來及び方廣大乘の正法を謗り、一切の惡を作すとも、尙ほ一切如來の印を成就することを得るは、金剛薩埵の堅固の體に由るが故なり。現生に速疾に樂に隨つて一切最勝の成就を得ん、乃至如來の最勝の悉地を獲得すべし、婆伽梵一切如來、金剛薩埵是の如くの說を作し給ふ。[四四]我今都て一切の印の解脫の儀智を說かん、彼彼從り出生する所有一切の印は彼彼に於て當に解くべし、此の心眞言に由る。

縛曰囉二合穆一合

自心從り金剛寶印を起して、灌頂の處に於て安じ、勝指を以て、自ら灌頂せよ、手を分て頭べに纏ひ鬘を繫けしめよ、次に甲冑を結び、此の心眞言を以てすべし。

唵引縛日囉二合囉怛曩二合毘詵者鉿二薩縛母捺囉二合銘捺哩二合釋矩嚕三縛日囉二合迦縛制那鍐四

披甲し已つて以て掌を齊しくし拍ちて歡喜せしむ、此の心眞言を以てす。

縛日囉二合覩使耶斛一引合

此の心眞言に由て、縛を解て歡喜を得、金剛の體を獲得して、金剛薩埵の如し、一徧金剛薩埵を誦し、意の愛樂に隨て安樂に住す、纔に誦するに皆速かに成就することを得、

【四四】撥遣の作法を說く。

則ち一切印の縛は、自らの身に心の金剛に於て、自在を得、即ち金剛遍入三昧耶の印を結び、此の心眞言を誦せ。

唵・

則ち遍く阿尾捨を成すること親友の如し、加持すれば、則ち三昧耶の印もて、大薩埵を想念せよ、此の心眞言を誦すべし。

摩訶三昧耶薩怛無反無毛 哈

此の眞言によりて、一切の印皆成就することを得、此れは是れ一切の印の成就の廣儀則なり。則ち我都廣の儀則を說かん。

初めに自ら印を結ぶ。結び已りて、自ら薩埵を印す。自身を觀ずるに此の心眞言を以てすべし。

三摩庾哈

則ち自印の薩埵は自身なりと觀じ已りて、此の眞言を以て加持す。

三摩耶薩怛嚩二合 地瑟姹二合 薩嚩二合 鋡

則ち然る後まさに成就すべし。此れは是れ成就の儀則なり。次に初めて義利の成就を欲求することを說くに、此の眞言を以てせよ、

遏他悉地

此の眞言によりて、意に隨ひて眞剛成就を得るなり。次に金剛悉地の成就を說くに、此の心眞言を以てせよ。

嚩日囉尾儞耶二合 達囉

此によりて、意に隨ひて、持明成就を得。最最の成就を欲求するには、自らの印眞言を以て、まさに成就を求むべし。

に相鉤し、頭指は上鉤の如くし、索の如くし二は鎖の如くす。手は背にして相逼めよ、〔四二〕我今成就を說かん、金剛業作等なり、まさに羯磨金剛は心に於て、修習すべし。〔四三〕次に羯磨印を說かん、金剛の業は種々なり、智拳を結ぶによるが故に、よく佛智に遍入す。阿閦毘を結ぶによりて、傾動なきを得るなり。寶生印を結ぶに由りて、よく他に攝す。法輪の印を結ぶによりて、則ちよく法輪を轉ず、無畏勝によりて速かに、有情に無畏を施す、堅く金剛髻をなせば金剛薩埵樂む。金剛の鉤召によりて、刹那にして諸佛を集む。金剛箭は染せしむ、尙よく金剛の妻なり、金剛喜は諸佛咸く善哉の聲を施す、大金剛寶を結べば師に從ひて灌頂を受け、遍く金剛日を持す、金剛日の如くなるを得て、金剛の幢幡を竪つれば、則ち寶雨を雨ふらすことを得、遍く金剛笑を持せば速かに佛と平等に笑ふ。遍く金剛花を持せば、則ち金剛法を見るなり。堅く金剛劍を結べばよく一切の苦を斷ず。遍く金剛輪を持せばよく法輪を轉ず、あらゆる諸佛の語は、成するに金剛語を以てす。金剛舞を供養すれば、尙佛をして順伏せしむ。金剛の甲を被るによりて、金剛の堅實を得。遍く金剛牙を持せば尙よく金剛を壞る。金剛拳はよく奪ひて、印の成就を獲得す。金剛喜は悅を得、金剛鬘は妙色なり。金剛歌は妙語なり金剛舞をして順はしむ。香をもつて意を悅澤ばしめ、花を以て一切を奪ふ。燈供は火熾盛なり、金剛香は妙香なり、金剛鉤は能く召し、金剛索はよく引き、金剛鎖をして縛せしめ、金剛磬をして動せしむ。

我今廣く一切印の都結の儀則を說かん。先づまさに金剛縛にして、自心を摧拍して、心眞言を誦して曰く

嚩曰囉滿䭾怛羅吒

〔四二〕三十七尊の悉地成就を說くなり。

〔四三〕羯磨會の印の功德を說く。

已れば、よく一切の苦を受くる語を斷ず。勃駄冐地是を言ひ已りて、曼荼羅に於て主宰となる。鉢羅底擓娜を誦し已り、共に諸佛の談語論に預る。蘇喇始怛鑁二合を誦し已れば、遍く一切を行ずるに自在なり。儞尼逸反婆去也怛鑁二合語り已れば、刹那に則ち畏る所なきを得、拾怛嚕二合薄乞叉を誦せば、よく一切の怨敵の者を啖ふ。薩喇悉地是を誦し已れば、一切の妙なる悉地を獲得す。摩訶囉底は適悅を得。嚕波輸陛亦復然なり。室嚕怛羅燥佉は樂を得。薩婆布誓は供養を得。鉢囉訶羅儞儞は悅なり。頗擺哦弭は果を獲得す。蘇帝煮佗哩は光を得、素巘蕩儗は妙香を得、阿夜啝弱は鉤召を成す、阿啝吽はよく引入す、係薩普吒鑁は大いに得、建吒噁噁は震動せしむ。我れ今法印を說きたり。成就して清淨ならしむ舌に於て[三八]金剛を觀じ、よく諸の事業をなす。次に[三九]羯磨印を說かん、まさに[四〇]金剛拳を結ぶべし、等引して兩分し、二金剛の印を成す。次に則ち縛を結ぶを說かん。持して金剛指をなし、[四一]右手を左に安んず、此の印を覺勝となづく。よく佛の菩提を與ふ、不動佛は觸地なり、寶生は施願の印なり。無量壽は勝定なり。不空は施無畏なり。次に今まさに遍く說くべし、羯磨印の次第なり、金剛薩埵等はよく金剛の業を轉ず、左は慢にして右は抽擲す、鉤を持するの勢に安住し、相應すること射法の如し。善哉の心に於て住す、二金剛を灌頂す、心に於て日形を示し、右の肘を左拳に住す。二掌及び口に於て、左は蓮右は開勢にす。左は心にして劍もて殺害す、旋轉すること火輪の如し。金剛の二を口にて散ず、金剛舞を兩頰に旋轉して頂に於て住す、甲冑にし小指を牙にす。二拳にして相合せ、まさに金剛の慢を以てすべし。頂禮して意戰悚すべし、鬘を繫ぎ口にて下し寫す。旋轉して金剛舞にし、金剛拳の儀を以てまさに、燒香等を獻ずべし、一切の佛の供養なり、供養の印を分別し、小指互ひ

[三八] 五股杵。
[三九] 羯磨會の印を說くなり。
[四〇] 外縛するなり。
[四一] 智拳印なり。

集會するによりて、壇師[三一]は弟子に於て、刹那にして加持をなし、[三二]薩埵金剛を結ぶ。則ち持金剛となる。纔かに金剛鉤を結び、よく一切の佛を召す、金剛の儀を欲するが故なり。尙ほ等覺の者を染せしむ、金剛の歡喜によりて、善哉の聲を以て皆喜ぶ、寶金剛を結ぶによりて、佛に從ひて灌頂を獲、金剛日を結ぶによりて、佛の如く圓光を得、金剛幢を持し已る。則ち一切の願を滿し、金剛笑の儀の故に、諸佛と共に等しく笑ふ、法金剛の印を持す、法金剛に等同なり、遍く金剛劍を持すれば、慧を得て救世者となる、金剛輪を持習すれば、則ちよく法輪を轉ず、金剛語によるが故なり。金剛語を成就し、遍く業金剛を持す。金剛業を等同なり。堅く金剛護をなす。身を成すこと金剛の如し、金剛牙の勝印は、よく諸の惡魔を摧き、堅く金剛拳を結べば、諸の契印を順伏す、[三三]戲によりて喜悅を得、鬘に由りて莊嚴を得、語によりては語威肅なり、供を得ることは、舞によるが故に、焚香は世を滋澤す。花によりて色端嚴なり、燈によりて世清淨なり。香によりては妙香を獲、[三四]金剛鉤は召くことを得、金剛索は入ることを得、金剛鎖はよく縛す、金剛鈴は遍く入る、[三五]我今法印を說かん。囀曰羅惹南は[三六]佛に通ず、よく堅固の金剛界をなす、次に復た我今まさに遍く說くべし、[三七]法印の勝契は本儀の如し。三昧耶薩怛鑁二合を誦し、一切の印契は主宰となる。阿娜耶薩縛を誦し已れば卽ちよく一切の佛を鉤召す。阿斛引蘇佉を稱誦し已れば、一切諸佛等を染愛す。娑度娑度是れを語り已りて、皆善哉を以て歡喜せしむ。蘇摩訶怛鑁二合を誦し已れば、則ち一切佛の灌頂を得。嚕褒彌庾二合多を語り已れば則ち正法の威德の光を獲。遏他鉢羅二合を誦し、波底丁口反よく一切殊勝の願を滿す、呵呵吽緊是の笑をなせば如來の微妙笑を獲得せん。薩嚩迦哩是れを誦し已りて、よく非法を淨めて皆清淨なり。薅佉掣之曳反那を誦持し

【三一】阿闍梨耶は
【三二】已下十六大菩薩を明す。
【三三】已下八供養を明す。
【三四】已下、四攝を明す。
【三五】法曼荼羅卽ち微細會を說く。法印とは眞言なり。
【三六】五佛に通ずるなり。
【三七】本儀とは三昧耶會の印契なり。

〔二五〕次にまさに一切如來の金剛三昧耶の智印を說くべし。〔二六〕堅固に合掌を結び、諸指互に交へて結ぶ、名づけて金剛掌となす、極めて結ぶは金剛縛なり。諸の三昧耶の印は、皆金剛縛を生ず、我今結ぶ儀を說かん、金剛の結は無上なり。〔二七〕堅薩埵金剛は、中指を竪つること牙の如し。大と中とは寶形の如し。中指而かも反り屈するなり。指を移して蓮葉の如くし、中指を交へ合し、頭指を中指に附く、名けて第五佛となす。〔二八〕我今遍く如來族の三昧耶の勝印を說かん。結ぶによりて成就をなす、二手を〔二九〕月形の如くし、中指は金剛の如し。餘指の面は著けず。金剛薩埵の印は、頭を鈎し〔三〇〕勝指を交へ、彈指の勢の如きによりて、金剛薩埵は四なり。此れを衆印等となす。寶金剛は頭指面を合して反り屈し中指と無名と小指とは、舒べ展べて、旋らし心に當つ、無名指は幢の如し。及び小指と合して復た、笑處に於て住す。則ちかの等印と名づく、二大指を竪て齊くし、頭指を屈すること蓮の如し。則ちかの金剛劍なり。中を合して上節を屈す、則ちかの無名に齊し、小指を交へること輪の如く、則ち大指の縛を解き、舒べ展ぶることと口より起る。小大指の面を合して、集會するは業金剛なり。則ちかの頭指に齊し。心に住して、舒べ展べ、頭指を曲ぐること牙の如くす、小指亦然り、大指と小指の間にして、頭指を其上に屈し、心に於て大指に齊しくし、臂を展ぶるを名づけて鬘となす、掌を騰げて、口より散ず、舞をなして頂上に合し、金剛縛を下に施し、掌より而も上げ獻じ、頭指は齊しくして相逼めよ。舒展ること塗る勢の如く、一頭指を屈するによりて、二頭指縛を結ぶ、大頭の端は鎖の如し。金剛拳の如く合す、我今よく成るを說かん。金剛成は最勝なり。自らの印は心に住す、薩埵金剛の定なり、次に事業をなすを說かん。金剛の業は無上なり、金剛界等の印なり。如來を

〔二五〕已上に羯磨曼荼羅を說き次で三昧耶曼荼羅を說くなり。
〔二六〕印母を明す、堅固合掌は金剛合掌のことなり。次で外縛になすなり。
〔二七〕五佛の印を明すなり。堅薩埵金剛は阿閦、大と中と等は寶生、指を移して等は彌陀、中指を交へるは不空成就、頭指を中指に附くるは大日
〔二八〕我今遍く已下は餘の卅二尊の三昧耶會の印契を說く。
〔二九〕外縛なり。
〔三〇〕風指なり。

彼の薩埵の印に隨ひて、修習して自身を觀ぜよ、金剛語を以てなり、よく諸印を成就す。弱吽鑁斛を誦して、身中に諸佛を入る、まさによく思惟をなすべし。大印を成就せしむ。[二〇]我れ今事業を說かん、金剛の業は無上なり。佛が觀ずるによりて成就し、速かに佛の自性を獲ん。薩埵金剛と成り諸佛の主宰となる。寶金剛を結ぶによりて、諸寶の主宰となる。法金剛を成就し、則ちよく佛法を持す、業金剛の印りよりて則ち金剛業となる。[二一]金剛薩埵と成るは、薩埵の印を結ぶによりて、よく持金剛を召して、金剛召と相應す。金剛染の大印はよく一切の佛を染む、一切の佛を喜ばしむるは、金剛の善哉による。佛の灌頂を施し奉るは、寶印の儀則による。速かに金剛光となるは金剛光の儀によるなり。金剛幢を持習すれば、則ち一切の願を滿す、金剛笑の儀によりて共に諸佛と戲れ笑ふ。金剛法を持し已るは、金剛法の儀によるなり。諸佛の勝れたる慧を得るは、金剛利の儀による。金剛輪を持習すれは則ちよく法輪を轉ず。佛の語言を成就するは、金剛語の儀による。速かに金剛業を獲るは、金剛業をなすによる。金剛の甲を擐き服れば、金剛身を獲得す。金剛藥叉をなして、金剛藥叉の如し。一切の印成就するは、金剛拳を結ぶによるなり。[二二]金剛嬉戲を以て、大金剛悅を獲、金剛鬘を結ぶによりて、佛に隨ひて灌頂を獲るなり。金剛歌と相應すれば、金剛歌を獲得し、金剛舞を結ぶによりて、則ち諸佛を供養す。[二三]皆一切を悅懌せしむることは、金剛の燒香による。金剛花と相應すれば諸の群品を敬せしむ。金剛燈の印によりて、供養するが故に眼を獲、よく一切の苦を除くは金剛の香の儀によるなり。[二四]金剛鉤召によりて、よく諸の勝業をなす。よく一切を引入するは、金剛索の儀によるなり。金剛鎖と相應すれば、一切の縛を堪任す。金剛入の儀によりて、よく諸の遍入をなす。

【二〇】已下三十七尊の大曼荼羅を說く
佛を觀じて云云は大日
薩埵金剛は　阿閦
寶　金剛は　寶生
法　金剛は　彌陀
業　金剛は　不空成就佛なり。

【二一】已下十六大菩薩なり金剛薩埵乃至金剛善哉東方四菩薩
佛の灌頂を乃至共に戲れ笑ふは南方の四菩薩金剛法乃至金剛語は西方の四菩薩
速かに金剛業乃至金剛拳は北方の四菩薩なり。

【二二】已下金剛舞は內の四供養。

【二三】已下金剛香は外の四供養。

【二四】已下遍入を成すは四攝なり卽ち已上三十七尊なり。

することを得、佛體すら尙難からず。
此は是れ一切如來の現證菩提の印なり。
次にまさに金剛薩埵の成就の大印を結ぶことを說くべし。
倨傲にして杵を抽擲し、等しく金剛慢を持して、身口心の金剛もて、金剛薩埵となる。
此の遍行の印によりて、諸欲安樂を生じ、通と壽と力と勝色と、金剛薩埵の如し。
一九三金剛の儀を以て、畫の如く順して修習し、幖幟の印と相應して大薩埵を成就す。我れ今諸教の能成と所成とを說くべし。成就する者の大業は我今次第に說かん。每日先づ時により、及び自らの加持等なし已りて成すること初めの如し。然る後まさに意に隨ふべし。
次に當さに廣く大印成就の儀則を說くべし。遍く金剛に入り已りて、大印は儀則の如し。身前に應じてまさに結ぶべし。大薩埵を思惟すべし。かの智薩埵を見てまさに自身を觀ずべし。鈎召し引入して縛し、喜こばしめて成就を作せ。
是の如き等の眞言に曰く、
嚩日囉薩怛嚩二合噁
此れは是金剛遍入の心なり。
嚩日羅薩怛嚩涅哩二合舍野
此れは是れ大薩埵觀念の心なり、
弱吽鍐斛引
此れは是れ大薩埵の鈎召し引入し縛し喜ばしむる心なり。
三昧耶薩埵鍐を誦し、遍く背後にして月輪に入り中に於てまさに薩埵を觀ずべし。我は三昧耶薩埵怛なり。

【一九】身・口・心の三密なり。

次にまさに弟子をして、秘密の堪忍の法を持せしむべし。初めに且らく誓心の眞言を誦して曰く

唵嚩曰囉薩怛嚩二合薩嚩延諦儞耶二合吃唎那曳平 薩摩嚩薩儞汀以反 哆捏尼逸反 避儞也二合 怛乞叉二合

南夜耶儞也二合 儞沒嚕二合 耶儞難去闍

則ち是の如き言を告ぐ、汝此の誓心の眞言を越ゆるべからず。汝をして災禍天壽を招かしめ、此身を以て地獄に墮せしむることなかれ。則ちまさに秘密の印智を敎ふべし。金剛を生じ入り已りて、等引して、手に微細の金剛掌を拍つに、山石も倚敬愛す。

次はこれ金剛の拍印なり。金剛の儀に入り已りて、金剛縛して掌をうつ、微細の掌の法を以てすれば、山石すら倚遍入す。上の如き入の儀を以て、金剛縛を舒べ展げて、勝拍まさに等しく摧くべし、刹那に百族を壞す。微細遍入の儀、諸の指等引を以て、金剛縛して解けば、よく諸の苦を奪ひ勝つなり。

次にまさに祕の成就を說くべし。[一七]婆伽に於て身を入れ、女人或は丈夫一切入り已ると想ひ、彼身をして遍く舒べしむ。是の如き等の心眞言に曰く、

嚩曰囉縛笘嚩曰囉尾捨嚩曰囉訶那嚩曰嚩訶囉

卽ちまさに心眞言を授與し已りて、自らの本尊の四智印を敎ふべし。此の儀則を以て、弟子に告げて言く、汝愼みて餘人に於て、未だ知らざる此印は一切指示すべからず。何を以ての故に、彼の有情大曼荼羅を見ずして、[一八]輒く彼等を結べは、皆成就せず、則ち疑惑を生じて災禍を招き速かに死して、無間大地獄に墮し、惡趣に墮せん。

次にまさに一切如來の薩埵成就の大印智を說くべし。

心智よりまさに發すべし。まさに金剛日を觀ずべし。自ら觀じて佛の形となり、まさに金剛界を誦すべし。此によつて、纔かに成就し、智と壽と力と年とを獲ん。一切遍く行

[一七] 入我、我入觀なり。

[一八] 印を結べばとなり。

至踊り上昇りて則ち虚空を行くことを得たり。

是の如き等の眞言に曰く。

嚩日囉惹攞嚩日囉嚕波嚩日囉迦奢嚩日羅摩軡

次に則ち金剛持明悉地の成辦印の智を教へん。

まさに月の形像を觀ずべし、　虚空に上り昇りて、　手もて金剛に攀れば　金剛持明を得ん。　月輪の上に昇りて、　まさに金剛寶を觀ずべし、　淨身の者は欲するに隨ひて、　刹那にして空に騰ることをなさん。　月輪に昇り已りて、　手に金剛の甚を持し、　まさに金剛眼を觀ずべし。　則ち持明位を得ん。　月輪の中に住して、　まさに業金剛を觀ずべし、　速かに金剛巧を得、　則ち諸の持明を得ん。

是の如き等の心眞言に曰く、

嚩日羅達落囉怛娜達落播娜摩達攞羯摩達落

次に則ち一切如來の最勝悉地の成辦印の智を教へん。

諸の金剛の定に住し、　虚空界に於て思はゞ、　樂ふに隨ひて金剛の身刹那に空に騰るを成ぜん。　諸の淨き等持に住し、　最勝に於て修習すれば、　五神通を獲得し、　速疾に智成ぜん。　金剛薩埵を觀じ、　一切の空に遍すれば、　速かに念堅固なること已りて、　則ち持金剛となる。　一切佛の形となりて、　虚空に於て觀想すれば、　諸佛の等持によりて、　則ち正覺を成ずることを得。

是の如く等の眞言に曰く。

嚩日囉嚩日囉述駄述駄薩怛縛沒駄沒駄

上の如きは是れ一切悉地の智成辦せん。

[一三]阿儞也二合 毘色羯多二合 薩怛嚩二合 麼斯沒代嚩曰囉毘篩羯哆伊雞帝薩嚩勃馱怛鑁二合 吃哩紇拏二合 曰囉蘇悉馱曳吽嚩曰囉地波底怛嚩二合 麼毘詵遮彌底瑟姹二合 嚩曰羅三摩耶薩怛鑁二合

則ち金剛の名を以て、灌ぐに此の心眞言を以てす。

唵嚩曰羅薩怛嚩二合 左摩毘詵遮弭嚩曰囉那摩毘篩羯哆嚩曰羅二合 麼麼金剛某甲。

もし弟子に名號を受くれば、まさに係を用ひ加へて、之を呼ぶべし。已に廣く一切曼荼羅に入るの儀を說けり、則ち弟子に問ふて言はく、汝の愛樂は出生悉地の智なりや、神通の悉地の智なりや。持明悉地の智なりや。乃至一切如來の智の最勝悉地の智なりや。彼の樂ふ所に隨ひて、まさに之を說くべし。則ち義利悉地成辦の印智を敎ふべし。

[一四]金剛の形藏に住せるをまさに、心中に於て觀ずべし。觀じ已りて地に住せば則ちまさに伏藏を見るべし。金剛の形を觀じ已りて、空中に而かも遍く觀せよ。もし隨ひて墮る處を見るは、彼則ち是れ伏藏なり。金剛の形を舌に於て、智者はまさに是を觀ずべし。自ら言此の處に有り、語已りて眞實と成らん。金剛の形は一切にして、まさに自身を觀ずべし、遍く入りて彼に於て落ちなば、其處は是れ伏藏ならん。

彼等の心眞言に、

嚩曰囉儞地囉怛娜儞地達摩儞地羯摩儞地

と。次にまさに金剛悉地の成辦印の智を敎ふべし。

金剛に入り生じ已りて、[一五]水に金剛の形をなす、觀速かに成就するによりて、水上に於て遊行す。復た金剛を生じて入らしむ、身色自の形の如し、是の如く修習すれば、自然と佛の形の如し。自身に遍入し、自身を觀ずること空の如し、樂ふに隨ひて修習し已り、則ち[一六]安達怛を得たり。金剛自らに入り已り、自らを觀ずること金剛の如し。乃

[一三] 阿儞也已下馱曳は文は諸佛金剛灌頂儀、汝已如法灌頂竟、爲成如來體性故、汝應授此金剛杵に當る。

[一四] 五股杵。

[一五] 水上に五股杵を觀ず。

[一六] 隱形なり。

底悉姹二合　嚩曰囉涅哩濁銘婆嚩捨濕嚩二合　都銘婆嚩紇唎娜闍銘地底瑟姹薩嚩悉朕亭淫反上　遮銘鉢囉二合也車吽呵呵呵呵斛引

則ち其の花鬘を以て弟子をして、大曼荼羅に擲げしむ。此心眞言を以てすべし。

鉢囉底車嚩曰囉斛引

花落つる處に隨ひて、則ちかの尊成就し、則ちかの花鬘を取りて弟子の頭上に繋ぎ、此心眞言を以てすべし。

唵鉢囉底佗哩紇拏怛嚩弭䆁摩訶麼攞

此によつて則ち大薩埵攝受して、速かに成就することを得たり。成入し已りて則ち面を解くに此の心眞言を以てすべし。

唵嚩曰囉薩埵薩嚩延帝儞耶二合灼乞芻二合引　娜伽姹曩怛鉢二合　囉烏那伽咤野底丁以反　薩嚩乞喝嚩曰囉二合灼乞喝囉弩多𠻘

則ち見の眞言を誦せよ、

係嚩曰囉波捨

則ち弟子をして次第に大曼荼羅を視しむ。纔かに見已りて、一切如來加持護念す。則ち金剛薩埵かの弟子の心に住し給ふ。則ち種種の光相と遊戲神通を見しむ。曼荼羅を見るにより、如來の加持によるが故に、[○]或ひは婆伽梵大持金剛、本形を示現し給ふを見、或ひは如來を見たり。此より已後一切の義利、一切の意の樂ふ所の事、一切の悉地、乃至持金剛及如來を獲得し、大曼荼羅を示し已りて、則ち[二]金剛を以て、香水の瓶を加持し、弟子の頂に灌ぐに此の心眞言をもつてせよ。

嚩曰囉毘詵遮

則ち隨つて一印を以て鬘を繫ぎ[三]自らの標幟を以て二手の掌中に安んじ、心眞言を誦せよ。

【○】加持世界の海會現前することを説く。

【二】五股杵を以て加持するなり。

【三】五股杵なり。

布那囉惹悉馱薬囉惹那遮怛嚩耶涅哩瑟吒摩訶曼荼羅寫也二合 嚩羯哆二合 尾闍二合 麼提三摩瑜尾也二合 剃儞滯(丁翼反)

金剛阿闍黎、自ら薩埵金剛の印を結ぶ。反つて弟子の頂に安んじ、是の言をなす。此れは是れ三昧耶の金剛なり。汝の頂を摧くとも說くべからずと、誓水を加持すること一遍して、弟子をして誓水を飲ましむべし。眞言に曰く

嚩曰囉薩埵薩嚩延諦儞耶二合 紇㗚那曳娑摩嚩悉體(汀以反) 哆揑(尼逸反) 避儞也二合 薩怛乞叉二合 嚩夜耶儞也二合 儞沒嚕二合 耶儞難那去闍嚩曰嚩娜迦坼

則ち弟子に告ぐ。今より已後汝婆跢我を觀ずること金剛手の如くし、我が言ふべき所を汝まさに是の如くなすべし。汝我に於て輕慢すべからず。汝をして災禍を招かしむることなかれ。死し已りてまさに地獄に墮つべし。是の如く語をなし已りて、唯願くは一切如來加持し給へ、願くは金剛薩埵遍入し給へ。金剛の阿闍梨まさに薩埵金剛の印を結ぶべし。是の言をなすべし。

阿衍怛三摩欲(開口呼) 縛曰嚂二合 嚩曰囉薩怛嚩弭底(丁以反) 薩密哩二合 耽阿尾捨野都諦曳嚩二合 嚂曰囉枳孃那摩拏怛嚂嚩曰囉引吠奢噁

則ち忿怒拳摧薩埵金剛の印を結び、意に隨ひて金剛語をもつて大乘現證の百字眞言を誦す。則ち阿尾捨せよ。[九] 阿尾捨わづかに已りて、則ち微妙の智を發生す。此によりて、他心を知り、他心を悟り、一切の事に於て三世を知る。其心則ち堅固なるを得たり。一切如來の教中に於て、悉く一切の苦惱を除き、一切の諸の惡趣を離れ、一切の有情に於て沮壞するものなし。一切如來加持し給ふ。一切の悉地現前して、未曾有を得て、喜悅と安樂と悅意とを生ず。此の安樂等によりて、或は三摩地を成就し、或は陀羅尼門、或は一切の意願皆滿足することを得たり、乃至一切如來の體性を成就す。則ち、かの印を結び以て弟子の心に於て解き、此の眞言を誦すべし。

【八】 摧印ともいふ、二手金剛拳にして二中指相鉤し誦呪し畢り、擘き開くなり。
【九】 遍入。

彼等金剛界大曼荼羅に入り、纔かに入り已る。一切如來の果すら尙難からず、何かに況んや餘の悉地の類をや。[五]次にまさに且らく先の四禮を以て、一切如來を禮すべし。全身臂を舒べて、金剛合掌し、心臆を以て地に著け東方を禮すべし。眞言に曰く

唵薩嚩怛他蘖多布儒開口角脣呼　跛薩他三合　哪耶怛麼二合　南儞㗚二合耶多夜彌薩嚩怛他蘖多嚩曰羅二合　薩怛嚩二合　地瑟姹二合　薩嚩含

即ち前の金剛合掌を心に住して、額を以て、南方を禮すべし。眞言に曰く

唵薩嚩怛他蘖多布惹引毘曬迦耶怛麼二合　南涅哩二合　夜多夜彌薩蘖怛他蘖多嚩曰羅二合　囉怛那二合毘詵遮含

即ち前の金剛合掌を頭に安んじ、口を以て地につけ、西方を禮すべし。眞言に曰く

唵引薩嚩怛他蘖多布惹鉢羅二合靺㗚二合多那夜怛麼南涅哩夜多夜弭薩嚩怛他嚩多嚩日囉達磨鉢囉靺㗚多二合夜含

即ち前の金剛合掌を心に當て、頂を以て地につけ北方を禮すべし。眞言に曰く

唵薩嚩怛他蘖多布惹羯磨尼輕呼　阿怛麼南涅哩夜多夜弭薩嚩怛他蘖多嚩曰囉羯磨句嚕含

則ち緋の繒を以て、角に絡へに披して、[六]緋の帛をもつて、面を覆ひて、弟子をして[七]薩埵金剛の印を結ばしめ、此の心を以て、

三摩耶薩怛鑁二合

則ち二中指をもつて、花鬘を持せしめ、此の心を以て、眞言をして三摩耶吽に入らしめよ、入れ已りて、是言をなすべし。

阿儞也二合　薩怛鑁二合　薩婆怛他蘖多句犂鉢囉尾瑟吒二合　薩多二合　娜悍諦嚩曰囉枳孃二合　那母怛跛二合　那以使也二合　弭曳那枳孃二合　泥那怛䌫薩婆怛他蘖多悉地囉比避囉二合　鉢旦二合　㫰金吉溪反

【五】曼荼羅に引入するに當りはじめに阿閦等の四佛を五體投地して禮するなり。

【六】袈裟をかくること偏袒右肩の如くにするを指す。

【七】外縛二中指を立合す卽ち針印なり。

百八を稱へ、結集によりて則ち喜び、如來は皆堅固なり。金剛薩自ら成じ、慈友として安住す。諸門の一切の處に、鉤等にて作業せよ。大羯磨の印をもつて、耶三昧耶を安住すべし。印三昧耶と薩埵の金剛等を以て、まさに大薩埵を成すべし。弱吽鑁斛を誦すれば則ち、不等の一切と大薩埵とを召集し、鉤召し引入し已り、縛し已りて調伏せしむ。則ち密供養をもつて、[七]大威德を喜ばしめよ、自らと有情の利に應じて、一切をなさんと願へ。かくの如き諸壇中は、金剛師の事業なり。

卷の下

大曼荼羅廣大儀軌品之三

[一]次にまさに廣く金剛弟子の金剛大曼荼羅に入るの儀軌を說くべし。中に於て我れ先づ有情界を盡して餘ことなく入らしめ、拔濟し利益し安樂せしむる最勝の悉地の因果を說くが故に、此の大曼荼羅に入るに、是の器非器を簡擇すべからず。何を以の故に、[二]世尊或は有情の大罪をなすものあらば彼此の金剛界の大曼荼羅に入り見已り、入り已れば一切の惡趣を離れん。世尊或は有情の諸の利と飮食と貪欲とに染著して、三昧耶を憎惡することを先づ行ふ等のもの有らば、是の如き等の類も、意に隨つて愛樂し、入り已れば則ち一切の意願を滿すことを得む。世尊或は有情ありて、愛樂し歌舞し、嬉戲し飮食し、具を翫び、一切如來の大乘現證法性を曉かに悟らざるによるが故に、餘の天族の曼荼羅に入り一切の意願を滿すことに於て、無上を攝受し、よく愛樂と歡喜とを生ず。一切如來族の曼荼羅の禁戒を怖畏して入らず、彼れ惡趣の壇路門に入るをなす。まさに此の金剛界大曼荼羅に入るべし。一切の適悅せる最勝の悉地と安樂と悅意とを受用せしむるが爲の故に、よく一切の惡趣の現前の道を轉ずるが故に、[三]世尊また正法に住せる有情あり。一切衆生のために、一切如來の戒定慧の最勝の悉地と、方便と佛の菩提とを求るが故に、[四]久しく禪定の解脫地等を修して勞れ倦ん。

【七】諸佛菩薩をいふ。

【一】已上に大日如來は金剛界大曼荼羅を說き、已下に曼荼羅に引入することを說かる。第一に器と否とを擇ばざるは即ち結緣灌頂なり。

【二】結緣の機を明す。慈覺大師の疏第七參照。

【三】從顯入密の正機を明す。

【四】行者が十地に到る迄の間久しく顯敎に在りし時の修行せしことを述ぶ。

となす。教への如く安坐すべし。曼茶羅の中に於て、[五八]大薩埵の大印もて、思惟して、まさに加持すべし。印に住して則ち當さに起ち、諸方を顧視し、倨傲にして按行し、金剛薩埵を誦すべし。

新線を以てよく合せ、量に應して以て端嚴にせよ、[五九]線をもつて智を埒るべし。力に隨ひて曼茶羅をなせ。四方にまさに四門あるべし、[六〇]四刹をもつて而も嚴飾し、四線をもつて交絡し、繒綵と鬘とをもつて莊嚴すべし。隅分の一切處と、門戸合ふ處に於て、金剛寶を鈿飾せよ、まさに外の輪壇を埒るべし。かの中をば輪形の如くし、まさに中宮に入るべし。金剛線をもて遍く埒り、八柱もて莊嚴せよ。金剛の[六一]勝柱に於て、まさに[六二]五輪壇を飾るべし。中の曼茶羅に於て、[六三]佛の形像を安立せよ。[六四]佛の一切を周圍せよ、曼茶羅の中に於て、[六五]四勝の三昧耶、次第に圖畫せよ。金剛進にして歩め、四曼茶羅に於て、阿閦毘の四をもつて、一切の佛を安立せよ。まさに不動の壇を作るべし、金剛持等と齊しくせよ、金剛藏等は寶生の曼茶羅に滿てよ、金剛眼の淨業は、無量壽の輪壇なり、まさに不空成の[六六]金剛巧等の壇を畫くべし。輪隅に安立してまさに[六七]金剛女を畫くべし。外壇は隅角に於て、まさに[六八]佛供養を畫くべし。門中の一切處には、門を守護する四衆あり、外壇に於て安立し、まさに[六九]摩訶薩を畫くべし。卽ち勝れたる三昧耶なり、印を結ぶこと儀則の如し。[七〇]金剛師入り已りて、摧印して遍く入れよ、此諸の遍入の心なり。嘌を請勅すること本教の如し、自身の加持等をなし已りて、自らの名を稱ふるに、まさに金剛を以て、薩埵の金剛鉤を成すべし。金剛師則ち結ぶべし。召集して彈指をなし、まさに一切の佛を請すべし、刹那の頃に諸佛並びに金剛薩埵、まさに一切の壇に滿つべし。曼茶羅を集會して、則ち速疾に大印もて金剛薩埵を觀ぜよ。一遍に

【五八】金剛杵(五股)なり。
【五九】五色線のことなり。
【六〇】寶幢の四柱なり。
【六一】八柱のことなり。
【六二】五佛の曼茶羅なり。
【六三】大日如來の形像。
【六四】四圍の佛は中央の曼茶羅を周れとの意。
【六五】四波羅蜜菩薩なり。
【六六】金剛業等のなり。
【六七】內の四供養なり。
【六八】外の四供養なり。
【六九】賢劫の十六尊なり。
【七〇】大阿闍梨につきて師傳を仰ぐべし。

と能伏と、　魔欲と大金剛と、　我れ金剛弓を禮す。　金剛善と薩埵と、　金剛戲と大適と、　歡喜王と金剛と、　我れ金剛喜を禮す。[五二] 金剛寶と金剛と、　金剛空と大寶と、　寶藏と金剛峯と、　我れ金剛藏を禮す。　金剛威と大炎と、　金剛日と佛光と、　金剛光と大威と、　我れ金剛光を禮す。　金剛幢と善利と、　金剛幡と妙喜と、　寶幢と大金剛と、　我れ金剛刹を禮す。　金剛笑と大笑と、　金剛笑と大奇と、　愛喜と金剛勝と、　我れ金剛愛を禮す。[五三] 金剛法と善利と、　金剛蓮と妙淨と、　世貴と金剛眼と、　我れ金剛眼を禮す。　金剛利と大乘と、　金剛劍と仗器と、　妙吉と金剛染と、　我れ金剛慧を禮す。　金剛因と大場と、　金剛輪と理趣と、　能轉と金剛起と、　我れ金剛場を禮す。　金剛說と妙明と、　金剛誦と妙成と、　無言と金剛成と、　我れ金剛語を禮す。[五四] 金剛業と教令と、　金剛賢と不空と、　業金剛遍行と、　我れ金剛巧を禮す。　金剛護と大勇と、　金剛甲と大堅と、　難敵と妙精進と、　我れ金剛勤を禮す。　金剛盡と方便と、　金剛牙と大怖と、　摧魔と金剛峻と、　我れ金剛忿を禮す。　金剛令と威嚴と、　金剛能と縛解と、　金剛拳を勝誓と、　我れ金剛拳を禮す。

[五五] 若し此の名の百八の寂靜の讃を持して、　金剛名もて灌頂するもの有らば、　彼亦かくの如く獲ん。　もし此の名を以て、[五六] 大持金剛を讃し、　正意もて歌詠するもの有らば、　彼は持金剛の如くならん。　我等此名の一百八の名を以て讃す。　願くは大乘を現證して、　遍く大理趣を流せん。　我等汝尊を讃ふ。　願くは最勝の儀と一切佛の大輪の勝れたる大曼荼羅を說かん。

[五七] この時婆伽梵大持金剛、一切如來の請語を聞き給ひ、一切如來の三昧耶の生ずる所の加持金剛三摩地に入り、金剛界大曼荼羅を說けり。

次に當さに我れ遍く勝れたる大曼荼羅を說かん。　金剛界の如きによりて、　名づけて金剛界

【五二】已下次の如く寶光幢笑の南方の四親近を禮す。

【五三】已下次の如く法利因語の西方の四親近を禮す。

【五四】已下、次の如く業語牙拳の北方の四親近を禮す。

【五五】已下の偈頌に百八名讃を持する功德を演べ、祕密の法を流轉し大曼荼羅を說かれんことを請ふなり。

【五六】大日如來なり。

【五七】已下、諸佛請に依り大日如來金剛の大曼荼羅を說き給ふ。

四六 一切如來の三昧耶の鉤召と、引入と縛と調伏すると、かくの如きは一切如來の教令なり。

四七 この時世尊一切如來を召集せんが爲の故に、金剛彈指の相をなして、此の一切如來の召集加持心を說けり。

嚩日囉二合三摩惹

刹那攞嚩須臾による頃、一切如來の彈指の相もて驚覺し已りて、一切世界の雲海の中に遍す。一切世界の微塵に等しき如來ならびに菩薩曼荼羅に集ひ會す。集ひおはりて、金剛摩尼寶峯樓閣世尊毘盧遮那如來の所に往詣し、至り已りて、一切如來の足心を禮することを說く。

四八 唵薩嚩二合怛他孽多播那滿挪曩迦嚕彌

此の性成就の眞言によりて、隨意に念誦し、一切如來を禮し已りて、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな大普賢、菩薩の敬儀は、是れ如來の輪壇なり。如來に影現せしむ。

時に十方一切世界の集會せる如來、說き已りて、一切如來の加持によりて、一切の菩薩曼荼維に集會して、毘盧遮那佛の心に入り給ふ。かの一切如來の心より、各各自ら菩薩衆曼荼羅を出し已り、世尊毘盧遮那佛の金剛摩尼寶峯樓閣の周圍の作壇によりて、三摩地に住し、此の嗢陀南を說き給ふ。

奇なるかな一切の佛、廣大にして四九無始より生ず一切の塵數によりて、佛の一性を獲得す。

五〇 この時婆伽梵一切の如來、復た集會をなして、金剛界の大曼荼維をして加持せしむるが故に、有情界を盡して餘すことなく、一切の利益と安樂とを得せしむるが故に、乃至一切如來の平等なる智と、神境通と、三菩提との最勝の成就の故に、婆伽梵一切如來の主宰、金剛薩埵の無始無終の大持金剛を請し奉るに、此の一百八の讚をもつて請す。

五一 金剛勇と大心と、金剛の諸如來と、普賢と金剛初と、我金剛手を禮す。金剛王と妙覺と、金剛鉤と如來と、不空王金剛と、我れ金剛召を禮す。金剛染と大樂と、金剛箭

【四六】鉤等の四攝智は大日如來化他の爲に示現して鉤召等次の如く鉤索鎖鈴に配す如來教命の態度にこの四種あることを示すなり。

【四七】已下金剛王を明す。

【四八】普禮の眞言なり、金剛王を以て諸佛を召集して敬禮するなり。

【四九】無始より生ず、本不生の義なり。

【五〇】已下、一百八名讚を說く。

【五一】已下次の如く薩王愛喜の東方四親近を總す。

奇なるかな一切の佛、　我は堅き金剛の索なり、　たとひ諸の微塵に入るとも、　我復此れに引入せん。

[四三] この時世尊復た一切如來の三昧耶に入り給ふ。鎖大薩埵の三昧耶なり。生ずる所を金剛三摩地と名づく。一切如來の三昧耶なり。一切如來の使を縛して自心より、

嚩日囉二合薩普二合吒

を出す。一切如來の心より、わづかに出し已る。則ちかの婆伽梵持金剛一切如來の三昧耶縛を出して、印衆となす。かの一切如來の三昧耶縛の印衆より出し已りて一切世界の微塵に等しき如來の身を出す。復た聚りて一體となり金剛鎖大菩薩の身となる。世尊金剛摩尼寶の峯樓閣[四四]法門の中の月輪によりて住し、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな一切の佛、　大堅の金剛鎖なり、　諸の縛をして脫せしむる者は、　有情の利の故に縛す。

[四五] この時世尊また一切如來の遍入大菩薩三昧耶に入り給ふ。生ずる所を金剛三摩地と名づく。一切如來の一切印の僮僕なり。自心より

嚩日囉二合吠捨

を出す。一切如來の心よりわづかに出し已る。則ちかの婆伽梵持金剛一切如來の印主となりて出し已る。かの一切如來の印主より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出す。復た聚りて一體となり金剛遍入大菩薩の身となる。世尊金剛摩尼寶峯樓閣の羯磨門の中の月輪によりて住し、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな一切の佛、　我れ堅くして金剛入なり、　一切の主宰となり、　亦即ち僮僕ともなる。

【四三】已下第三、金剛鎖を明す。

【四四】曼荼羅の西門なり。

【四五】已下第四、金剛鈴を明す偏入とは振鈴の妙音は偏く一切の身心に入る故に遍入大菩薩といふ。

奇なるかな香の供養、我は微妙の悅意なり、如來の香によるが故に、一切の身に授與するなり。

〔三七〕一切如來の智の遍入すると、大菩提と、支分三昧耶と、一切如來の光明と、戒定慧解脫解脫の智見と塗香と、かくの如きは、一切如來の敎令を受くる女なり。

〔三八〕この時世尊毘盧遮那如來、復た一切如來の三昧耶鉤三昧耶に入り給ふ。生ずる所の薩埵を金剛三摩地と名づく。一切如來の一切印の〔三九〕衆主なり。自心より

縛日囉二合 矩賒

を出す。一切如來の心より、わづかに出し已る。則ちかの婆伽梵持金剛一切如來の一切印衆を出し給ふ。かの一切如來の一切印衆より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出す。復た聚りて一體となる。金剛鉤大菩薩の身となる。世尊金剛摩尼寶峯樓閣の〔四〇〕金剛門の中の月輪によりて住し給ひ、一切如來の三昧耶を鉤招して、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな一切の佛、鉤は我の堅固なるを誓ふ、我遍く鉤召するによりて、諸の曼荼羅を集むるなり。

〔四一〕この時世尊また一切如來の三昧耶に入り、摩訶薩埵の三昧耶に引入し給ふ。生ずる所を金剛の三摩地と名づく。一切如來の印入の承旨なり。自心より

縛日囉二合 播賒

を出す。一切如來の心より、わづかに出し已る。則ちかの婆伽梵持金剛一切如來の三昧耶引入の印衆を出し給ふ。かの一切如來の三昧耶引入の印衆より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出し、復た聚りて一體となり金剛索大菩薩の身となる。世尊金剛摩尼寶の峯樓閣の〔四二〕寶門の間の月輪によりて住す。一切如來を引入して此の呴陀南を說けり。

【三七】已上阿閦如來等の四佛が大日如來を供養し奉る四菩薩たる外の四供養を明す、一切如來の智偏入等次の如く、香華燈塗の四に配す。

【三八】已下、四攝智菩薩を明す、今はその第一金剛鉤を明す。

【三九】四攝智は前に印衆ともいふ如來の智印を以て有情界を印入する衆なるが故に衆と名く、その中に主伴を別つ、その主を衆主といふなり。

【四〇】曼荼羅の東方の門なり。

【四一】已下第二、金剛索を明す。

【四二】曼荼羅の南門なり。

て、一切の虚空界に舒遍す、出し已りてかの一切花供養の嚴飾より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出す。出し已りて復た聚りて一體となり、金剛花天女の形となる。如來金剛摩尼寶峯樓閣の隅の左邊の月輪によりて住し、此の嗢陀南を說き給ふ。

奇なるかな花供養、よく諸の莊嚴をなす、[三四]如來の寶性によりて、速疾に供養を獲るなり。

[三五]この時世尊觀自在王如來、世尊毘盧遮那の供養に答へ奉るが故に、一切如來の光明供養三昧耶に入り給ふ。生ずる所を金剛三摩地と名づく。一切如來の女使なり。自心より

嚩日囉二合路計

を出す。一切如來の心より、わづかに出し已る。即ちかの婆伽梵持金剛、一切光明界の供養の嚴飾を出し、盡く法界に舒遍す。かの一切光明界の莊嚴の具より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出す。出し已りて、復た聚りて一體となりて、金剛光明天女の身となる。世尊金剛摩尼寶峯樓閣隅の左邊の月輪によりて住し、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな我れ廣大なり、燈の端嚴なるを供養す。速かに光明を具するによりて、一切の佛眼を獲るなり。

[三六]この時世尊不空成就如來、毘盧遮那如來の供養に答へ奉るが故に、一切如來の塗香の供養三昧耶に入り給ふ。生ずる所を、金剛三摩地と名づく。一切如來の婢使なり。自心より

嚩日囉二合巘題

を出す。一切如來の心より、わづかに出し已る。則ちかの婆伽梵持金剛一切の塗香供養の嚴飾を出す。一切法界に舒べ遍くす。かの一切塗香供養の嚴飾より一切世界の微塵に等しき如來の身を出す。出し已りて復た聚りて一體となり、金剛塗香天女の身となる。世尊金剛摩尼寶峯樓閣隅の左邊の月輪によりて住し、此の嗢陀南を說き給ふ。

【三四】本有の性德に依りて、疾速に修生修得するなり。
【三五】已下第三、金剛燈明を明す。
【三六】已下第四、金剛塗香を明す。

を出し給ふ。一切如來の心より、わづかに出し已りて、一切如來の舞廣大儀を出す。彼より一切如來の舞供養儀を出す。則ちかの婆伽梵持金剛一切世界の微塵に等しき如來の身となる。復た聚りて一體となり、金剛舞大天女となり、世尊不空成就如來の左邊の月輪によりて住し此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな廣大供養は、諸の供養をなすが故に金剛の舞儀によりて、佛の供養を安立す。

三一 一切如來の無上安樂悅意の三昧耶、一切如來の鬘、一切如來の諷詠、一切如來の無上の供養の業をなす。是の如きは一切如來の祕密供養なり。

三二 この時世尊不動如來、毘盧遮那如來の供養に答へ奉るが故に、一切如來能悅澤三昧耶に入る。生ずる所を金剛三摩地と名づく。一切如來の婢使なり。自心より

嚩日囉二合杜閉

を出す。一切如來の心より、わづかに出し已る。則ち彼の婆伽梵持金剛、種種の儀の燒香供養雲の嚴飾となりて、一切の金剛界に舒遍す。出し已りて、かの燒香供養雲海より一切世界の微塵に等しき如來の身を出す。復た聚りて一體となり、金剛燒香の天女身となりて、世尊金剛摩尼寶峯樓閣隅の左邊の月輪によりて住し、此の嗢陀南を說き給ふ。

奇なるかな大供養、悅び懌しみて端嚴を具す、薩埵の遍入するによりて、速疾に菩提を證す。

三三 この時世尊寶生如來、毘盧遮那如來の供養に答へ奉りて、寶莊嚴供養三昧耶に入る。生ずる所を金剛の三摩地と名づく。一切如來の承旨の大天女なり。自心より

嚩日囉二合補澁閉二合

を出す。一切如來の心より、纔かに出し已る。卽ちかの婆伽梵持金剛、一切の花供養の嚴飾となり

【三一】已上内の四供養、無上安樂等次の如く嬉鬘歌舞に配す、卽ち大日如來が阿閦佛等を供養せんが爲に現ずるなり。

【三二】已下、外の四供養を明す、今は第一金剛燒香を明す。

【三三】已下第二、金剛華を明す。

の供養を轉ず。

二八　この時世尊毘盧遮那また一切如來の寶鬘灌頂三昧耶に入り給ふ。生ずる所を金剛三摩地と名づく。一切如來族の大天女なり。自心より

嚩日囉二合摩犂

を出し給ふ。一切如來の心より、纔に出し已りて大寶印を出す。かの大寶印より則ちかの婆伽梵持金剛一切世界の微塵に等しき如來の身となる。復た聚りて一體となり、金剛鬘大天女となりて、世尊寶生如來の曼荼羅の左邊の月輪によりて住し、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな我は比らびなし、　稱して寶供養となす、　三界に於て王勝たり、　教勅を受けて供養す。

二九　この時世尊毘盧遮那また一切如來の歌詠供養三昧耶に入り給ふ。生ぜる所を金剛三摩地と名づく。一切如來の族の大天女なり。自心より

嚩日囉二合霓帝

を出し給ふ。一切如來の心より、わづかに出し已りて、一切如來の法印を出す。かの一切如來の法印よりかの婆伽梵持金剛一切世界の微塵に等しき如來の身となる。復た聚りて一體となり、金剛歌詠大天女となり、世尊觀自在王如來の左邊の月輪によりて住し、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな歌詠を成す、　我れ諸の見者に供す、　此の供養によるが故に、　諸法は響の應ずるが如し。

三〇　この時世尊毘盧遮那、復た一切如來の舞供養に入り給ふ。生ずる所を金剛三摩地と名づく。一切如來の族の大天女なり。自心より

嚩日羅二合儞哩二合帝曳

【二八】已下第二、金剛鬘を明す。

【二九】已下第三、金剛歌詠を明す。

【三〇】已下第四、金剛舞を明す。

しむ。

〔三三〕此の時世尊不空成就如來・毘盧遮那の一切如來の智を印するが故に、一切波羅蜜三昧耶に入り給ふ。生ずる所の金剛加持を金剛三摩地と名づく。一切の三昧耶なり。これを自印と名づく。自心より、

羯磨嚩日離二合

を出す。一切如來の心より、纔かに出し已りて、一切羯磨光明を出す。かの一切如來の羯磨光明より、即ちかの婆伽梵持金剛、一切世界の微塵に等しき如來の身となる。遍ねく一切如來の智を印す。復た聚りて一體となる。一切世界の量に等し。面を一切の處に向けて、大羯磨金剛の形を生ず。世尊毘盧遮那佛の〔三四〕左月輪によりて住し、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな一切の佛、我を業金剛と名づく、一は一切を成すによりて、佛界によく業をなす。

〔三五〕一切如來の智三昧耶と大灌頂と金剛法性と一切の供養、かくの如きは一切如來の大波羅蜜なり。この時世尊毘盧遮那佛また〔三六〕一切如來の適悅供養の三昧耶に入り給ふ。生ずる所を金剛三摩地となづく。一切如來族の大天女なり。自心より

嚩日囉二合 邏西

を出し給ふ。一切如來の心より纔かに出し已りて金剛印を出す。かの金剛の印門より則ちかの婆伽梵持金剛、一切世界の微塵に等しき如來の身亡なりて、復た聚りて一體となり、金剛嬉戲大天女となる。金剛薩埵の一切の身性種々の形色威儀一切の莊嚴の具の如くにして、一切如來の族の金剛薩埵女を攝す。世尊不動如來の曼荼羅の左邊の月輪によりて住し給ひ、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな比びあることなし、〔三七〕諸佛の中の供養なり。供養を貪染するによりて、よく諸

【三三】已下第四、羯磨波羅蜜を明す。

【三四】毘盧遮那佛の北なり。

【三五】次の如く四波に準じて四波羅蜜天女菩薩を知るべし。即四波は大日如來の四親近なり。

【三六】已下、八供養天女を明す。今はその第一金剛嬉を明す。

【三七】最上の供養。

の婆伽梵持金剛、一切世界の微塵に等しき如來の身となりて、一切如來の智を印し、復た聚りて一體となりて、一切世界の量に等しき大金剛の形を生ず。世尊毘盧遮那佛の[一八]前月輪によりて住し、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな一切の佛の、　薩埵金剛の堅なり、　堅の無身によるが故に、　金剛身を獲得す。

[一九]この時世尊寶生如來、世尊毘盧遮那の一切如來智を印するが故に、寶波羅蜜三昧耶に入り給ふ。生ずる所の寶金剛加持を、金剛三摩地と名づく。金剛三昧耶なり。自印と名づく。自心より

囉怛那嚩日離二合

を出す。一切如來の心より纔かに出し已りて、寶光明を出す、かの寶光明より、即ちかの婆伽梵持金剛一切世界の微塵と等しき如來の身となり一切如來の智を印す。また聚りて一體となり、一切世界の量に等しき大金剛の形を生じ、世尊毘盧遮那佛の[二〇]右月輪によりて住す。此の嗢陀南を說き給ふ。

奇なるかな一切の佛の、　我を寶金剛と名づく、　一切の印衆に於て、　堅灌頂の理趣なり。

[二一]この時世尊觀自在王如來、世尊毘盧遮那の一切如來の智を印するが故に、法波羅蜜三昧耶に入り給ふ。生ずる所の法金剛の加持を金剛三摩地と名づく。法三昧耶なり。自印と名づく。自心より

達摩嚩日離二合

を出す。纔かに出し已りて、蓮花光明を出す。彼の蓮花光明より、即ちかの婆伽梵持金剛、一切世界の微塵に等しき如來の身となりて、一切如來の智を印し、復た聚りて一體となる。一切世界の量に等しし。大金剛蓮花の形を生じ、世尊毘盧遮那佛の[二二]後の月輪によりて住し、此の嗢陀南を說き給ふ。

奇なるかな一切の佛、　法金剛我れ淨なり、　自性清淨なるによりて、　貪染をして無垢なら

【一八】毘盧遮那佛の東なり。

【一九】已下第二、寶波羅蜜を明す。

【二〇】毘盧遮那佛の南なり。

【二一】已下第三、法波羅蜜を明す。

【二二】毘盧遮那佛の西なり。

故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢の故に、聚りて一體となり、一切如來拳大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住し、此の嗢陀南を説けり。

　奇なるかな妙なる堅縛、　我は堅の三昧耶なり、　諸の意樂をなすが故に、　解脱する者を縛となす。

　時に彼の一切如來拳大菩薩の身、世尊の心より下りて、一切如來の[一五]後月輪によりて住し、復た敎令を請ふ。時に世尊一切如來の三昧耶に入り、金剛三摩地と名づく。一切如來の印三昧耶なり。有情界を盡して餘すことなし。一切如來の聖天、一切の悉地をして現驗せしめ、一切の安樂と悅意とを受けしむるが故に、乃至一切如來の一切智智印と、主宰の最勝悉地の果を得せしむるが故に則ちかの金剛縛を、一切如來の金剛拳大菩薩摩訶薩の雙手に授與し給ふ。則ちかの一切如來の金剛名をもつて金剛拳と號す。金剛拳灌頂する時、かの金剛拳菩薩摩訶薩かの金剛縛をもつて、一切如來を縛し、此の嗢陀南を説けり。

　此れは是れ一切の佛の、　印縛は大堅固なり、　速かに諸の印を成ずる故に、　三昧耶を越えず。

[一六]一切如來の供養廣大儀軌の業と、一切如來の大精進堅固の甲冑と、一切如來の大方便と、一切如來の一切印縛の智とかくの如きは、一切如來の大羯磨薩埵なり。

[一七]この時不動如來、世尊毘盧遮那の一切如來智を成就し已りて、一切如來の智を印するが故に、金剛波羅蜜三昧耶に入り、生ずる所の金剛加持を金剛の三摩地と名づく。一切如來の金剛三昧耶なり。一切如來印と名づく。自心より

　薩怛嚩日離

を出す。一切如來の心より、纔かに出し已りて、金剛光明を出し、かの金剛光明門より、即ちか

【一五】不空成就佛の北なり。

【一六】已上、業・護・牙・拳の四親近を次の如く供養廣大等の四に配す。北方不空成就佛の四親近なり。

【一七】已下、四波羅蜜菩薩を明す。今は金剛波羅蜜を明す。

戲をなし、一切の魔をよく摧伏するが故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢の故に、聚つて一體となりて摧一切魔大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな大方便や、　諸佛の慈愍なり、　【一〇】有形の寂靜なるによりて、　示して暴怒の形をなす。

時にかの摧一切魔大菩薩の身世尊の心より下りて、一切如來の【一一】左月輪によりて住しまた敎令を請ふ。時に世尊一切如來の極怒金剛の三摩地に入り給ふ。

一切如來の難調を調伏し、有情界を盡して餘すことなく無畏を施し、一切の安樂と悅意とを受けしむるが故に、乃至一切如來の大方便の智と、神境通と、最勝の悉地との果を得るが故に、則ちかの金剛牙器仗をかの摧一切魔大菩薩の雙手に授與し給ふ。則ち一切如來の金剛の名をもつて、金剛暴怒と號し、金剛暴怒灌頂する時に、かの金剛暴怒菩薩摩訶薩かの金剛牙器仗をもつて、自らの口中に安んじ、一切如來を恐怖せしめて此の嗢陀南を說けり。

これは是れ一切の佛の、　諸の難調を調伏する、　金剛牙の器仗なり、　【一二】方便もて愍慈する者なり。

【一三】この時婆伽梵、また一切如來拳大菩薩摩訶薩の三昧耶に入り羯磨加持を出生し給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來の身口心の金剛縛三昧耶なり。一切如來心となづく。自心より

縛日囉二合散地

を出す。一切如來の心より、纔に出で已る。卽ちかの婆伽梵持金剛一切如來の一切印縛となりて出だし已る。世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となりて【一四】金剛縛の形を生じて、佛の掌の中に住す。かの金剛縛の形より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出す。出し已つて、一切世界に於て、一切如來の印縛智等をもつて、一切の佛の神通遊戲をなし給ふ。一切如來の拳はよく縛するが

【一〇】有形卽無相の寂靜なるを示す。

【一一】不空成就佛の東なり。

【一二】拆伏をいふ。

【一三】已下第十六、金剛拳を明す。

【一四】外縛の印なり。

で已つて世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となり、大金剛の甲冑の形を生じ佛の掌中に住す。かの金剛の甲冑の形より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出だす。一切如來の守護儀軌、廣大事業等は一切の佛の神通遊戲難敵精進をなすが故に、金剛薩埵三摩地は極めて堅牢の故に、聚つて一體となり、難敵精進大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな精進の甲や、　我はまことに堅固の者なり、　堅固の[七]無身によりて、　金剛の勝身をなす。

時に彼の難敵精進大菩薩の身世尊の心より下りて、一切如來の[八]右月輪によりて住しまた教令を請ふ。時に世尊一切如來の堅固に入り給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來の精進波羅蜜三昧耶は、有情界を救護し盡して餘すことなく、一切の安樂と悅意とを受けしむるが故に、乃至一切如來の金剛身の成就の果を得るが故に、則ち金剛の甲冑を難敵精進大菩薩の雙手に授與す。則ち一切如來金剛の名をもつて金剛慈友と號す。金剛慈友灌頂し給ふ時に、かの金剛慈友菩薩摩訶薩金剛の甲冑をもつて一切如來に被らしめて、此の嗢陀南を說けり。

此れはこれ一切の佛の、　最勝の慈の甲冑なり、　堅精進の大護なり、　名づけて大慈友となす。

[九]この時婆伽梵また摧一切魔大菩薩摩訶薩の三昧耶に入り給ひ、羯磨加持を出生す。金剛三摩地と名づく。一切如來の方便三昧耶なり。一切如來の心と名づく。自心より

嚩日囉二合藥乞灑二合

を出す。一切如來の心より纔かに出で已る。則ちかの婆伽梵持金剛衆多の大牙器仗となり出で已る。世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となり、金剛牙の形を生じて佛の掌中に住す。かの金剛牙の形より一切世界の微塵に等しき如來の身を出す。一切の降伏暴怒等をなし、一切佛の神通遊

【七】一切處に徧ねからざるなき身卽ち無相法身の意。

【八】不空成就佛の西なり。

【九】已下、第十五金剛牙を明す。

則ち一切如來の羯磨界の故に、羯磨金剛の形を生じて、佛の掌の中に住す。則ち羯磨金剛の形より一切世界の微塵に等しき如來の身を出し、一切の世界に於て、一切如來の羯磨等一切の佛の神通遊戲をなす。一切如來の無邊の事業をなすが故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢なるが故に、聚て一體となり、一切如來の毘首羯磨大菩薩摩訶薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此の嗢陀南を說き給ふ。

奇なるかな佛の不空や、　我は一切の業多し、　[三]功なくして佛益をなし、　よく金剛の業を轉ず。

この時毘首羯磨大菩薩身、世尊の心より下りて、一切如來の[四]前月輪によりて住し給ふ。復た敎令を請ふ。時に世尊一切如來の不空金剛の三昧耶に入り給ふ。金剛の三摩地と名づく。一切の供養等、無量の不空、一切の業の軌儀、廣大三昧耶を轉ず。有情界をつくして餘すところなし。一切の悉地をなし、一切の安樂と悅意とを受けしむるが故に、乃至一切如來の[五]金剛羯磨の性智と神境通の果を成就するが故に、則ちかの羯磨金剛を、一切如來の金剛羯磨大菩薩に授與して、一切如來の羯磨轉輪王となりて、一切如來の灌頂を以て、雙手に授與し給ふ。則ち一切如來は金剛の名をもつて金剛毘首と號す。金剛毘首灌頂する時かの金剛毘首菩薩摩訶薩則ち羯磨金剛を自心に安立し給ふ。一切如來をして、羯磨の平等處に安ぜしめ此の嗢陀南を說き給ふ。

此はこれ一切の佛、　種々の勝業をなし、　我が掌中に授與し、　業をもつて業に安ず。

[六]この時婆伽梵また難敵精進大菩薩摩訶薩の三昧耶に入り、羯磨加持を出生し給ふ。金剛の三摩地と名づく。一切如來の守護三昧耶なり。一切如來の心となづく。自心より

唵日囉二合路乞沙二合

を出す。一切如來の心より纔に出し已つて、則ち彼の婆伽梵金剛手衆多の堅固なる甲冑となる。出

【二】三股杵を十字に交叉して、事業成辨を表はす。

【三】功力を須ひずして……

【四】北方不空成就佛の南なり。

【五】成所作智のことなり。

【六】已下、第十四金剛護を明す。

離す。

時にかの無言大菩薩の身、世尊の心より下つて、一切如來の[七六]後月輪によりて住して、復た敎令を請ふ。時に世尊一切如來の祕密語に入り給ふ。金剛三摩地一切如來語智の三昧耶と名づく。有情界を盡して餘すところなく語を成就せしめ、一切の安樂悅意を受けしむるが故に、乃至一切如來の語祕密體性の最勝の悉地を得せしむるが故に、則ちかの金剛念誦を、[七七]無言大菩薩摩訶薩の雙手に授與して、則ち一切如來金剛の名をもつて、金剛語と號す。金剛語灌頂し給ふ時に、金剛語菩薩摩訶薩かの金剛の念誦をもつて、一切如來と共に談論して、此の嗢陀南を說き給ふ。

此れはこれ一切の佛の　金剛の念誦と名づく　一切如來に於て、　眞言すみやかに成就す。

[七八]金剛法智の性と、一切如來の智慧と大轉輪智と、一切如來の語と輪轉戲論の智とは、此れは是れ、一切如來の大智の薩埵なり。

卷の中

大曼荼羅廣大儀軌品之二

[一]この時婆伽梵また一切如來の毘首羯磨大菩薩三昧耶に入り、羯磨加持を出生し給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來の羯磨三昧耶なり。一切如來の心と名づく。自心より

嚩日囉二合羯磨

を出す。一切如來の心より、纔かに出で已つて、一切如來の羯磨の平等智は、よく通達するが故に、金剛薩埵の三摩地なり。卽ち婆伽梵持金剛より、一切如來の羯磨の光明となりて出で已りて、かの一切如來の羯磨の光明をもつて、一切の有情界を照耀てて、一切如來の羯磨界となる。それは一切如來の羯磨界を盡し、世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となり、量は一切の虛空界に遍ねし。

【七六】阿彌陀佛の西なり。

【七七】深祕における念誦無相と淺略における四妄言說なき故にとの二無言なり。

【七八】已上の四菩薩を金剛法智等に次の如く(法利因語の)西方阿彌陀佛の四親近に配す。

【一】已下、第十三金剛業を明す。

の身を出す。纔發心轉法輪の故に、金剛薩埵三摩地は極めて堅牢の故に、聚つて一體となり、纔發心轉法輪菩薩摩訶薩の身を生じ、世尊毘盧遮那の心に住して、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな金剛輪や　我は[七一]金剛勝持なり　纔發心によるが故に　よく妙法輪を轉ず。

時にかの纔發心轉法輪大菩薩身、世尊の心より下りて、一切如來の[七二]左月輪によりて住し、また敎令を請ふ。時に世尊一切如來輪に入り給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來の大曼荼羅三昧耶をもつて、有情界を盡して餘すところなく、得不退轉の法輪に入り、一切の安樂悅意を受けしむるが故に、乃至一切如來の正法輪を轉ずる最勝の悉地なるが故に、則ち彼の金剛輪を、纔發心轉法輪大菩薩摩訶薩の雙手に授與し給ふ。則ち一切如來金剛名をもつて、金剛場と號し、金剛場灌頂し給ふ時に、かの金剛場菩薩摩訶薩、かの金剛輪をもつて、一切如來をして不退轉を安立せしめ、此の嗢陀南を說き給ふ。

此れは是れ一切の佛の能く一切の法を淨め給ふ。　是れ則ち不退轉なり亦菩提場と名く。

[七三]爾時婆伽梵、復た無言大菩薩摩訶薩の三昧耶に入り、法加持を出生し給ふ。金剛三摩地と名く。一切如來の念誦の三昧耶を一切如來心と名く。自心より。

縛曰囉二合婆沙

を出す。一切如來の心より、わづかに出で已つて卽ちかの婆伽梵、金剛手一切如來の法文字となつて、出で已つて世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となり、[七四]金剛念誦の形を生じて、佛の掌の中に住す。かの金剛念誦の形より一切世界の微塵に等しき如來の身を出だし、一切如來の法性等をもつて、一切佛の神通遊戲をなし、妙語言の故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢の故に、聚つて一體となり、無言大菩薩の身を生じ世尊毘盧遮那佛の心に住し、此の嗢陀南を說き給ふ。

奇なるかな自然の密　我を[七五]祕密語と名づく　說くところの微妙の法は、　諸の戲論を遠

【七一】最勝の持金剛。
【七二】阿彌陀佛の北。
【七三】已下第十二、金剛語を明す。
【七四】舌根を指していふ。
【七五】眞言、陀羅尼。

を出し給ふ。一切如來の心より、わづかに出で已つて、即ちかの婆伽梵持金剛衆多の慧劍となる。出で已て世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となり、金剛劍の形を生じて、佛の掌の中に住す。則ちかの金剛劍の形より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出し給ふ。一切如來の智慧等をもつて、一切佛の神通遊戲をなす。妙吉祥の故に、金剛薩埵三摩地は極めて堅牢の故に、聚つて一體となり、曼殊室利大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな一切佛　我れを微妙音と名づく、[66]慧は色なきによるが故に、　音聲もて得べし。

時にかの曼殊室利大菩薩身、世尊の心より下りて一切如來の[67]右の月輪によりて住しまた敎令を請へり。時に世尊一切如來智慧の三昧耶に入り給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來の結使を斷ずる三昧耶なり。有情界を盡して餘すことなく、一切の苦を斷じ一切の安樂悅意を受けしむるが故に、乃至一切如來の隨順音聲の慧をして、圓滿成就を得せしむるが故に、則ちかの金剛劍を曼殊室利大菩薩摩訶薩の雙手に授與し給ふ。則ち一切如來金剛名をもつて、金剛慧と號す。金剛慧灌頂する時、金剛慧菩薩摩訶薩金剛劍をもつて、揮ひ斫つて、此の嗢陀南を說けり。

此れは是れ一切の佛の　智慧度の理趣なり。　能く[68]諸の怨敵を斷じ　諸罪を除くこと最勝なり。

[69]此の時婆伽梵、また纔發心轉法輪菩薩摩訶薩の三昧耶に入り、法加持を出生し給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來輪三昧耶なり。一切如來の心と名づく。自心より

縛日囉二合係都

を出し給ふ。一切如來の心より、わづかに出で已つて、即ちかの婆伽梵持金剛、金剛界の大曼荼羅と成り給ふ。一切如來の大曼荼羅となり、出で已つて、世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となり、[70]金剛輪の形を生じ、佛の掌の中に住す。かの金剛輪形より、一切世界の微塵に等しき如來

【六六】文殊の無碍智を指していふ。
【六七】阿彌陀佛の南。
【六八】內の煩惱魔、外の天魔。
【六九】已下第十一、金剛因を明す。
【七〇】八輻の金剛輪。

を出す。一切如來の心より、わづかに出しをはつて、かの婆伽梵持金剛は、自性は清淨に、一切法は平等に、智善く通達するが故に、金剛薩埵の三摩地を正法の光明となす。出で已つて、かの正法の光明をもつて、一切世界を照して法界となす。法界を盡して世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となり、量は虛空法界に遍し。大蓮華の形を生じて佛の掌中に住す。かの[六三]金剛蓮華の形より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出して、一切如來の三摩地智の神境通をもつて、一切の神通遊戲をなせり。一切世界に於て、妙觀自在の故に、金剛薩埵三摩地は極く堅牢の故に、聚つて一體となり、觀自在大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住し、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな我勝義、　本より清淨自然なり　諸法は筏の喩への如し　清淨にして、而も得べし。

時にかの觀自在大菩薩の身、世尊の心より下りて一切如來の[六四]前月輪によりて住し、また教令を請ふ。時に世尊、一切如來三摩地智に入り、三昧耶を出生す。金剛三摩地と名づく。能く一切如來を淨め、有情界を盡して餘すことなし。我は清淨にして一切をして安樂悅意せしむるが故に、乃至一切如來の法智と神境通との果をうるが故に、則ちかの金剛蓮花を觀自在菩薩摩訶薩正法轉輪王に授與し、一切如來の法身灌頂を授與して雙手に灌そぐ。則ち一切如來は金剛のみ名をもつて、金剛眼と號し、金剛眼灌頂する時、金剛眼菩薩摩訶薩則ちかの金剛蓮花の開敷蓮花の勢の如く、貪染清淨にして染著なき自性を觀察せり。觀じ已つて此の嗢陀南を說けり。

此は是れ一切の佛　欲の眞實なることを覺悟す　我が手掌に授與して　法を法に安立す。

[六五]この時婆伽梵、また曼殊室利大菩薩の三昧耶に入り、法加持を出生し給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來大智慧三昧耶なり。一切如來心と名づく。自心より

轉日囉二合底乞灑拏三合

【六三】竪の獨股杵の上に赤色の八葉初割の蓮華を置く。

【六四】西方阿彌陀佛の東なり。

【六五】已下第十金剛利を明す　曼殊室利は妙德の義なり。

く。一切如來の喜悅三昧耶なり。一切如來の心と名づく。自心より

嚩日囉二合賀娑句一

を出す。一切如來の心より、纔にいで已つて、卽ちかの婆伽梵持金剛は、一切如來の微笑となつて出でおはり、世尊毘盧遮那佛の心に入り、あつまつて一體となり、[五九]金剛笑の形を生じて、佛の掌中に住す。かの金剛笑の形より一切世界の微塵に等しき如來の身を出し、一切如來の奇特等をなし、一切佛の神通遊戲をなせり。常喜悅根の故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢の故に、聚りて一體となり、常喜悅根大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住し、此の嗢陀南を說けり。

奇なるかな我れ大笑す　　諸の勝大の奇特なり　　佛の利益を安立し　　常に妙等引に住す。

時にかの常喜悅根大菩薩身は、世尊の心より下りて、一切如來の[六〇]後月輪によりて住し、また敎令を請へり。時に世尊、一切如來の奇特加持に入り給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來出現三昧耶を受け有情界をつくして餘すことなし。一切根をして、無上に安樂せしめ悅意せしむるが故に、乃至一切如來の根は、淸淨智と神境通との果を得るが故に、則ちかの金剛微笑をかの常喜悅根大菩薩摩訶薩の雙手に授け與へ給ふ。則ち一切如來金剛名をもつて、金剛喜と號し、金剛喜灌頂せる時、金剛喜菩薩、摩訶薩金剛微笑をもつて一切如來を悅ばしめ此の嗢陀南を說けり。

此れはこれ一切の佛　　奇なるかな出現を示し　　よく大喜悅をなし給ふ　　他師はよく知ること能はざるなり。

[六一]大灌頂と尋圓光と有情の大利と大笑と、是の如きは一切如來の大灌頂薩埵なり。

[六二]この時に婆伽梵はまた觀自在大菩薩の三昧耶に入り、法加持を出生し給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來の法三昧耶なり。一切如來心と名づく。自らの心より

嚩日囉二合達摩

【五九】二手、金剛拳を仰げ並ぶ。

【六〇】寶生佛の南なり。

【六一】次の如く南方寶生如來の四親近・寶・光・幢・笑の四に配す。

【六二】已下第九、金剛法を明す。

[五五]爾の時に、婆伽梵復た寶幢大菩薩の三昧耶に入り、寶加持を出生するを金剛三摩地と名づく。一切如來の意願を滿す三昧耶なり。一切如來の心と名づく。自心より

嚩日囉二合計都

を出す。一切如來の心より纔かに出で已つて、即ち彼の婆伽梵持金剛、種々の色の幢幡莊嚴の形となり出で已つて、世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となる。[五六]金剛幢の形を生じ、佛の掌の中に住す。彼の金剛幢の形より一切世界の微塵に等しき如來の身を出だして、一切如來の寶幢等を建て、一切の佛の神通遊戲をなし給ふ。大寶幢の故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢なるが故に、聚りと一體となり、寶幢大菩薩の身を生じ世尊毘盧遮那佛の心に住して、此の嗢陀南を說き給ふ。

奇なる哉比びなき幢は、　一切の益を成就し　一切の意を滿たし、　一切の願を滿たしむるものなり。

時に彼の寶幢大菩薩の身、世尊の心より下りて、一切如來の[五七]左月輪に依りて住し、復た敎令を請ふ。時に世尊、一切如來の建立加持に入り給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來の思惟王は、摩尼幢を受けてよく三昧耶を建て、有情界を盡して餘すところなし。一切の意願をして圓滿せしめ、一切をして安樂悅意せしむるが故に、乃至一切如來の大利益の最勝の悉地の果を得るが故に、則ちかの金剛幢を、かの寶幢菩薩摩訶薩の雙手に授け給ふ。則ち一切如來は、金剛名をもつて金剛幢と號し、金剛幢を灌頂し給ふ時に、彼の金剛幢菩薩摩訶薩は、金剛幢をもつて、一切如來を檀波羅蜜に安立して此の嗢陀南を說けり。

此はこれ一切の佛　よく諸の意欲を滿し給ふ。　思惟寶幢となづく。　これ檀徒の理趣なり。

[五八]爾時に婆伽梵は、また常喜悅大菩薩の三昧耶に入り、寶加持を出生し給ふ。金剛三摩地と名づ

【五五】已下第七、金剛幢を明す。

【五六】金剛寶幢。

【五七】寶生佛の西方なり。

【五八】已下第八、金剛笑を明す。

き給ふ。

[五二]爾の時に婆伽梵、復た大威光大菩薩三昧耶に入り給ひ、寶加持を出生するを金剛の三摩地と名づく。一切如來の光三昧耶を一切如來の心と名づく。自心より

嚩日囉二合帝惹

を出す。一切如來の心より、纔かに出で已つて、即ち彼の婆伽梵金剛手、衆多の大日輪となり、出で已つて、世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となり、[五三]大金剛日の形を生ず。佛の掌の中に住して、彼の金剛の日輪より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出し、一切如來の光明等を放つて、一切の佛の神通遊戲をなし給ふ。極大威光の故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢なるが故に、聚つて一體となりて、大威光菩薩摩訶薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住し、此の嗢陀南を說き給ふ。

奇なる哉比びなき光は、　有情界を照耀し　能く淸淨なるものを淨む、　諸佛は救世者なり。

時に彼の無垢大威光菩薩の身、世尊の心より下りて、一切如來の[五四]有月輪に依りて住し、復た教令を請ふ。時に世尊一切如來の圓光加持に入るを金剛の三摩地と名づく。一切如來の光三昧耶を受けて、有情界を盡して餘すところなく、比びなき光は一切をして安樂にし悅意せしむるが故に、乃至一切如來の自らの光明最勝の悉地を得るが故に、金剛日を大威光菩薩摩訶薩の雙手に授與して、則ち一切如來金剛の名を以て、金剛光と號し、金剛光の灌頂する時、金剛光菩薩摩訶薩は、彼の金剛日を以て一切如來を照曜し、此の嗢陀南を說き給ふ。

此は是れ一切の佛の、　能く無智の暗を壞するものなり、　設ひ微塵數の日なりとも、　此の光は彼よりも超えたり。

【五二】已下第六、金剛光を明す。

【五三】日輪の形。

【五四】寶生佛の東方なり。

蘇日囉二合(四九)囉怛那二合を出す。一切如來の心より纔に出で已つて、一切の虚空の平等性智よく通達するが故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢の故に、聚つて一體となる。則ち、彼の婆伽梵持金剛、一切虚空の光明となり、出で已つて、一切虚空の光明をもて、一切の有情界を照耀して、一切の虚空界を成せり。一切如來の加持を以て、一切虚空界は、世尊毘盧遮那佛の心に入る。善く修習するが故に、金剛薩埵の三摩地は、一切虚空界胎藏の成ずる所なり。一切世界に遍く等量に滿ちて、(五〇)大金剛の寶形を出生し、佛の掌中に住す。彼の金剛の寶形より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出す。出生し已つて、一切如來の灌頂等をなし、一切世界に於て一切如來の神通遊戲を作し給ふ。虚空界の胎藏より妙に出生するが故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢なるが故に、聚りて一體となりて、虚空藏大菩薩の身を生じて、世尊毘盧遮那佛の心に住し、此の嗢陀那を說き給ふ。

奇なる哉妙なる灌頂は、　無上の金剛寶なり、　佛は著する所なきによりて、　名けて三界の主となす。

時に彼の虚空藏大菩薩身、世尊の心より下りて、一切如來の(五一)前の月輪に依りて住す、復敎令を請ふ。時に世尊、一切如來の大摩尼寶に入り給ふ。金剛三摩地と名づく。一切如來の圓滿なる意樂三昧耶を受け、有情界を盡して餘す所なく一切の義利を獲、一切の安樂悅意を受くるが故に、乃至一切如來の利益最勝榮盛の悉地を得るが故に、彼の金剛摩尼を受けて、彼の虚空藏大菩薩摩訶薩と金剛寶轉輪王とに、金剛寶形の灌頂を授與して雙手に安んじ給ふ。則ち一切如來は、金剛名を以て、金剛藏と號し、金剛藏の灌頂せし時、金剛藏菩薩摩訶薩、金剛の摩尼を以て、自ら灌頂する所に安きて此の嗢陀南を說き給ふ。

此は是れ一切の佛の　有情界を灌頂し給ふなり。　我が手の掌に授與して、　寶を寶中に安

【四九】囉怛那(アラタンナウ)は寶の義。

【五〇】放光の三辨寶珠。

【五一】南方寶生佛の北方なり。

く、一切如來の極喜三昧耶なり、一切如來の心と名づく。自心より

囀日囉二合娑度

を出す。一切如來の心より纔に出し已つて、則ち彼の婆伽梵持金剛、一切如來の善哉の相となつて、世尊毘盧遮那佛の心に入り、聚つて一體となつて、[四五]大歡喜の形を生じ、佛の掌中に住し給ふ。彼の歡喜の形より、一切世界の微塵に等しき如來の身を出して、一切如來の善哉の相を作し、一切の佛の神通遊戲をなし極喜の故に、金剛薩埵三摩地は極めて堅牢の故に、聚めて一體となりて、歡喜王大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此の嗢陀南を說けり。

奇なる哉我れ、善哉の　諸の一切の勝智なり　分別を離るゝ所の者は、　能く究竟の喜びを生ず。

時に、歡喜王大菩薩身、世尊の心より下りて、一切如來の、[四六]後の月輪に依つて住し、復敎令を請へり。時に世尊一切如來の等喜加持に入り給ふを、金剛三摩地と名づく。已に一切如來の等喜を受けて、一切をして安樂にし、意を悅ばしむるが故に、乃至一切如來の無上喜味の最勝の悉地の果を得るが故に、則ち彼の金剛喜を、彼の歡喜王大菩薩摩訶薩の雙手に授け、則ち一切如來の金剛の名を以て、金剛喜と號し、金剛喜灌頂なせし時に、金剛喜菩薩摩訶薩、金剛喜善哉の相を以て、一切如來を歡悅ばしめて、此の嗢陀南を說けり。

此れは是れ一切の佛の、　能く轉ずる善哉の相なり、　諸の喜をなす金剛にして、　妙喜を增長せしむ。

[四七]大菩提心、一切如來の鉤召三昧耶鉤一切如來の隨染の智、大歡喜、是の如きは一切如來の大三昧耶薩埵なり。[四八]爾の時に婆伽梵、復虛空藏大三昧耶に入り給ふ。生ずる所の寶加持を金剛三摩地と名づく。一切如來の灌頂三昧耶なり。一切如來の心と名づく。自心より

【四五】二手金剛拳にして相並べ二風彌指の勢をなす。

【四六】阿閦佛の東方の月輪。

【四七】大菩提心等の四を阿閦佛の四親近薩、王、愛、喜に配す。

【四八】已下第五、金剛寶を明す。

一切如來を鉤召して、此の嗢陀南を說き給ふ。

此は是れ一切の佛の　無上の金剛智なり　諸佛の利益を成し、　最上にして能く鉤召す。

爾の時に、婆伽梵、復[三八]摩羅大菩薩三昧耶に入り給ふ。薩埵加持を出生するを金剛三摩地と名け、一切如來の隨染の三昧耶を一切如來の心と名づく。自心より

囀日囉二合邏哦

を出し給ふ。一切如來の心より、纔に出し已つて、卽ち彼の婆伽梵持金剛は、一切如來の[三九]花器仗となりて、出で已て世尊毘盧遮那佛の心に入りて、聚つて一體となり、大金剛箭の形を生じて、佛の掌中に住す、彼の金剛箭の形より一切世界の微塵に等しき如來の身を出し、一切如來の隨染等をなし一切の佛の神通遊戲をなし、極めて殺すが故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢なるが故に聚つて一體となり、摩羅大菩薩の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說き給ふ。

奇なる哉自性淨　染欲に隨つて自然なる　欲を離れて淸淨なるが故に、[四〇]染を以て調伏す。

時に彼の摩羅大菩薩身、世尊の心より下りて、一切如來の[四一]左の月輪に住して、復た敎令を請へり。時に世尊、一切如來の隨染加持に入り給ふを、金剛三摩地と名く。一切如來の能殺三昧耶を受け、有情界を盡して餘すことなく、一切に隨つて安樂にし意を悅ばしむるが故に、乃至一切如來の摩羅業の最勝の悉地の果を得るが故に、則ち彼の金剛箭を摩羅大菩薩の雙手に授與して、則ち一切如來の金剛の名を以て、金剛弓と號し、金剛弓灌頂し給ふ時に、金剛弓菩薩摩訶薩、金剛の箭を以て一切如來を殺して此の嗢陀南を說き給ふ。

此は是れ一切の佛の　[四二]染智にして瑕穢れなし　染を以て[四三]厭離を害して　能く諸の安樂を施す。

[四四]爾の時に婆伽梵、復極喜王大菩薩の三昧耶に入り給ふ。生ずる所の薩埵加持を金剛三摩地と名

【三八】已下第三、金剛愛を明す。摩羅は殺、二乘の心を殺すなり。

【三九】弓箭の先に花を附けたるもの。

【四〇】本有の染欲を以て妄想修起の染欲を伏するをいふ。

【四一】行者より曼荼羅に向つて左卽ち南方の月輪なり。

【四二】大貪染にして。

【四三】二乘の厭離衆生界の小心。

【四四】已下第四、金剛喜を明す。

の寶冠繒綵を以て、灌頂し已つて、雙手に授與したり。即ち一切如來、金剛の名を以て、金剛手と號して、金剛手灌頂をなせし時、金剛手菩薩摩訶薩、[34]左は慢し、右は舞し、跋折羅を弄んで、則ち彼の金剛を自心に安じて、增進の勢を持して、此の嗢陀南を說けり。

此は是れ一切の佛の　金剛の無上を成せり、　我が手掌に授與して　[35]金剛もて金剛に加せり。

[36]爾時世尊、復不空王大菩薩の三昧耶に入り給ふ。薩埵の加持を生ずる所を、金剛三摩地と名づけ、一切如來鉤召三昧耶と名づく、一切如來の心なり。自心より。

縛日羅二合邏引惹

を出し給ふ。一切如來の心より纔に出で已つて、則ち彼の婆伽梵金剛手一切如來の大鉤と爲つて、出で已つて世尊毘盧遮那の心に入り、聚つて一體となりて、金剛大鉤の形を生じて、佛の掌中に住す。金剛の大鉤の形より一切世界の微塵に等しき如來の身を出現して、一切如來等を召請し、一切佛の神通遊戲を作す、妙にして空しからざる王なるが故に、金剛薩埵の三摩地は極めて堅牢なるが故に、聚つて一體となり、不空王大菩薩身を生じ、毘盧遮那佛の心に住して、此嗢陀南を說き給ふ。

奇なる哉不空王は　金剛より生ず所の鉤　一切佛の遍きに由りて　鉤召を成就なせり。

時に不空王大菩薩身、佛心より下つて、一切如來の[37]右の月輪に依りて住し、復教令を請へり。時に婆伽梵一切如來鉤召三昧耶に入り給ふ。金剛三摩地と名づく、一切如來の鉤召三昧耶を受けて、有情界を盡して餘すことなく、一切を鉤召し、一切を安樂悅意せしむるが故に、乃至一切如來集會し加持し給ふ最勝悉地の故に、則ち彼の金剛鉤もて不空王大菩薩の雙手に授與して、一切如來の金剛名を以て、金剛鉤召と號し、金剛鉤召灌頂し給ふ時に、金剛鉤召菩薩摩訶薩、金剛鉤を以て、

【三四】左手、金剛拳にして腰に置き、右手を以て五股を投弄し、輪轉するをいふ。增進の勢とは抽擲するをいふ。

【三五】修生の金剛を以て本有の金剛を加持すること。

【三六】已下第二金剛王を明す。

【三七】行者が曼荼羅に向ひて右なれば北方の月輪に當る。

囀日羅合二薩怛嚩合二下同を出す。[二八]纔に一切如來の心を出して、卽ち彼の婆伽普賢、衆多の月輪と爲て普く一切有情の大菩提心を淨め給ふ。諸佛所に於て周圍して住し給ふ。彼の衆多の月輪より、一切如來の智金剛を出して、卽ち婆伽梵毘盧遮那如來の心に入る。普賢の堅牢に由るが故に、金剛薩埵の三摩地より。一切如來の加持に由て、合して一體と爲る。量は虛空を盡くして遍滿して[二九]五峰の光明と成る。一切如來の身口心より金剛の形を出生す、一切如來の心より出でて佛の掌中に住す、復金剛より金剛形の[三〇]種々の色相を出して、遍く一切の世界を舒べ照曜す。彼の金剛の光明門より一切世界の微塵に等しき如來の身を出して、法界に周遍し、一切の虛空を究竟して、一切世界の雲海に遍し、遍く一切如來平等智の神境通を證す。一切如來の大菩提心を發して、智賢の種々の行を成辦し、一切如來に[三一]承事し大菩提場に往詣して、諸の魔軍を摧き、一切如來の平等大菩提を證成し、正法輪を轉じ乃至一切を拔濟し、盡く無餘の有情界を利益し安樂にし、一切如來の智最勝の神境通の悉地等を成就し給ふ。一切如來の神通遊戲の普賢を示現するが故に、金剛薩埵の三摩地は妙堅牢の故に、聚つて一體となり、普賢摩訶菩提薩埵の身を生じ、世尊毘盧遮那佛の心に住して、而かも嗢陀南を說かん。

奇なる哉我普賢よ　賢薩埵は自然なり　堅固の無身より　[三二]薩埵身を獲得す。

時に　普賢大菩提薩埵身、世尊の心より下つて、一切如來のみ前に[三三]月輪に依つて而も住し、復教令を請ふ。時に婆伽梵一切如來の智三昧耶に入り給ふを金剛三摩地と名く。一切如來の戒と定と慧と解脫と解脫智見とを受用し、正法輪を轉じ、有情を利益し、大方便力と精進と、大智と三昧耶とをもて、盡ることとなく、餘すこと無く有情界を拔濟す。一切の主宰として安樂悅意せしむるが故に、乃至一切如來の平等智と、神境通と無上大乘現證の最勝悉地の果を得るが故に、一切如來の成就する金剛もて、彼の普賢摩訶菩提薩埵に授與して、一切如來の轉輪王の灌頂をなせり。一切佛身

【二八】已下、祕密神變の十二相卽ち依因・顯本・應實・顯相・顯力・還源・顯智・示相・明德・顯實・普現と感應となり。この十二神變の相は金剛王已下の諸尊に於ても經說すべきも略したるなり。
【二九】五股より發する五智、五色の光明をいふ。
【三〇】青・黃・赤・黑・白の五色。
【三一】金剛薩埵は大日如來の教勅の承事者なり。
【三二】此身法界に徧くして無相なるが故に。
【三三】東方阿閦佛の方より前方卽ち西に向つてなり。

剛に入る、則ち一切如來は、一切義成就菩薩摩訶薩に於て、金剛の名を以て、金剛界と號し、金剛界の灌頂し給ふ時に、金剛界菩薩摩訶薩彼の一切如來に白して言さく、世尊如來よ我れ一切如來は自身と爲るを見たりと。[二四]一切如來復告げて言はく、是故に、摩訶薩、一切の薩埵金剛は、一切の形を具することを成就し、自身を佛形と觀じて、此の自性成就の眞言を以て、隨意に誦せよ。

唵　也他薩婆怛他誐多薩怛二合他唅

[二五]是の言を作し已て、金剛界の菩薩摩訶薩は、自身の如來たることを現證し、盡く一切如來を禮し已つて、白して言さく、唯願くは、世尊諸の如來よ、我を加持して、此現證菩提を堅固ならしめ給へ。是語を作し已て、一切如來は、金剛界如來の彼の薩埵金剛の中に入り給ふ。時に世尊金剛界の如來彼の刹那の頃に當て、等覺一切如來平等智を現證し、一切如來平等智三昧耶に入り、一切如來法平等智の自性清淨なるを證し、則ち一切如來平等自性光明智藏、如來應供正遍知を成せり。時に一切如來復一切如來薩埵金剛より出で、虛空藏大摩尼寶を以て灌頂し、觀自在法智を發生し、一切如來の[二六]毘首羯磨を安立し給ふ。此に由て須彌盧頂の金剛摩尼寶峯樓閣に往詣し、至り已て、金剛界如來、一切如來の加持を以て、一切如來の師子座に於て、一切の面に安立し給ふ。時に、不動如來と寶生如來と觀自在王如來と不空成就如來との一切如來、以て一切如來の自身を加持し給ふ。婆伽梵釋迦牟尼如來は、一切平等に善く通達し給ふが故に、一切方を平等に觀察して、四方に而も坐し給ふ。[二七]爾時に世尊毘盧遮那如來、久しからずして、等覺一切如來の普賢心を現說し、一切如來虛空發生大摩尼寶灌頂を獲得し、一切如來の觀自在法智彼岸と、一切如來の毘首羯磨不空無礙の教と、圓滿なる事業と、圓滿なる意樂とを得給へり。一切如來の性を自身に於て加持し、卽ち一切如來の普賢摩訶菩提薩埵の三昧耶に入り、薩埵加持の金剛三摩地を出生し給ふ。一切如來の大乘現證三昧耶なり、一切如來心と名づく、自心より。

【二四】已下第五、佛身圓滿なり。

【二五】佛身圓滿したる已成の行者は、諸佛の加持に依るが故に十方の諸佛と入我、我入して一體不二になることを說く。

【二六】善巧の事業。

【二七】已下、十六大菩薩の三昧耶を明す。その第一金剛薩埵。

ずして、諸の苦行を忍ばんや。時に一切義成就菩薩摩訶薩一切如來の驚覺に由りて、卽ち〔一九〕阿娑頗娜伽三摩地より起つて、一切如來を禮して白して言く、世尊如來よ、我に教示し給へ。云何にしてか修行せむや、云何にしてか眞實なるや。是の如く說き已て〔二〇〕一切如來異口同音に彼の菩薩に告げて言はく、善男子當さに自心を觀察し、三摩地に住して自性成就の眞言を以て自ら恣に誦すべし。

唵　質多鉢囉二合底丁以切微騰迦嚕弭

時に菩薩一切如來に白して言く、世尊如來よ、我遍く知り已ぬ、我自心を見るに形月輪の如し。一切如來咸く告て言く、善男子よ、心の自性の光明は、猶し遍く功用を修して作すに隨て、獲る如く、亦素衣の色を染むるに、染るに隨て隨て成るが如し。時に〔二一〕一切如來自性の光明心智をして、豐盛ならしめんが爲の故に、復彼の菩薩に勅して言はく、

唵　菩提質多畝怛波娜夜弭

此の性成就の眞言を以て、菩提心を發さ令む。時に彼の菩薩復一切如來より旨を承けて、菩提心を發し已て是言を作す。彼の月輪の形の如く、我も亦月輪の形の如く見ると。〔二二〕一切如來告げて言はく、汝已に一切如來の普賢心を發して、金剛の堅固なるに齊等しきものを獲得したり、善く此一切如來の普賢發心に住して、自心の月輪に於て金剛の形を思惟するに、此眞言を以てせよ。

唵　底瑟姹二合嚩日囉二合

〔二三〕菩薩白して言く、世尊如來よ、我月輪の中の金剛を見ると。一切如來咸く告げて言はく、一切如來普賢心の金剛を堅固ならしむるに、此眞言を以てせよ。

唵　嚩日囉二合怛麼二合句唅

所有の一切虛空界に遍滿し給ふ一切如來の身口心の金剛界は、一切如來の加持を以て悉く薩埵金

〔一九〕無識身三摩地、卽ち性空觀。

〔二〇〕已下五相成身の觀門を明す。その第一、通達菩提心（本有の菩提心なり）。

〔二一〕已下第二、修菩提心（以下修生の菩提心なり）。

〔二二〕已下第三、成金剛心なり。

〔二三〕已下第四、證金剛心なり。

に、自性清淨の一切法、一切虛空に遍して、能く一切の色智を現じて、盡くして餘すことなく、有情界を調伏し給ふ所の最勝なると、一切如來は空しからず敎令を作し給ふが故に、一切平等なる無上の巧智と、一切如來の五大菩提堅固の薩埵と、一切如來の鉤召三昧耶と、一切如來の隨染智自在と、一切如來の善哉と、一切如來の灌頂寶と、一切如來の日輪圓光と、一切如來の思惟王の摩尼寶幢と、一切如來の大笑と、一切如來の大清淨の法と、一切如來の般若智と、一切如來の輪と、一切如來の祕密語と、一切如來の空しからざる種々の事業と、一切如來の大精進の妙なる堅固の甲冑と、一切如來の遍く守護し給ふ金剛藥叉と、一切如來の身口心の金剛印の智となりき。

六普賢と妙不空と　摩羅と極喜主と　空藏と大妙光と　寶幢と大微笑と　能觀大自在と
曼殊と一切壇と　無言と種々業と　精進と怒と堅持と　七金剛と鉤と箭と　寶と日
と幢幡と　笑と蓮と劍と妙輪と語と　羯磨と甲と怖と持と　八無始無終と寂と　暴怒と
大安忍と　藥叉と　九羅刹勇と　威猛と大富貴と　鄔摩天と世主と　一〇毘紐と勝大寂と
世護と虛空と地と　三世及び三界と　大種と　一一善人と益と　諸の設縛祖父と　流轉と
一二涅槃と常と　正流轉と大覺と　覺清淨大乘と　三有と常恒者と　降三世と食樂と
主宰と諸能調と　堅主と妙地と勝と　智彼岸と理趣と　解脫と覺有情と　行一切如來
と　覺利益佛心と　一三諸の菩提の無上と　遍照する最勝王と　自然と總持念と　大薩
埵大印と　等持と佛作業と　一四一切の佛を身と爲すと　一五薩埵常益覺と　一六大根本の大黑と
大染欲と大樂と　大方便と大勝と　一七諸の勝宮自在となり。

婆伽梵大菩提心普賢大菩薩一切如來の心に住し給ふ。時に一切如來此の佛世界に滿ち給ふこと猶胡麻の如し。爾の時に一切如來雲集し、一八一切義成就菩薩摩訶薩の菩提場に坐せるに於て、往詣して受用身を示現し咸く是言を作し給ふ。善男子云何が無上菩提を證するや、一切如來の眞實を知ら

【五】已下十六大菩薩を明す。
【六】普賢已下堅持に至る迄を羯磨會の十六大士と稱す。
【七】金剛已下怖、持に至る迄を三昧耶會の十六大士と稱す。
【八】無始無終乃至藥叉は大日、阿閦、寶生、彌陀、不空成就佛の五佛を明す。
【九】羅刹勇乃至世主は四波羅蜜菩薩を明す。
【一〇】毘紐乃至大種は八供養を明す。
【一一】善人乃至流轉は四攝を明す。
【一二】涅槃乃至佛心は賢劫の十六尊を明す。
【一三】諸菩提乃至佛作業は諸佛頂を明し。
【一四】「一切の佛を身と爲す」とは執金剛を指す。
【一五】「薩埵常益覺」の一句は聲聞緣覺を指す。
【一六】大根本乃至大勝は不動、三世、軍荼利、大威德等の諸明王を明す。
【一七】諸の勝宮自在とは、世天を合稱せるもの。
【一八】一切義成就菩薩摩訶薩は釋尊の因位なり。

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經

唐特進試鴻臚卿三藏沙門不空詔を奉じて譯す

卷の上[一]

金剛界大曼荼羅廣大儀軌品[二]之一

是の如く我聞けり、一時婆伽梵、一切如來の金剛を以て加持し給ふ殊勝の三昧耶智を成就し、一切如來の寶冠の三界法王の灌頂を得、一切如來の一切智智は瑜伽自在なることを證り、能く一切如來の一切印平等の種種の事業を作して、盡くること無く餘ること無き一切の有情界に於て、一切意願、作業皆悉く成就し給へる、大悲毘盧遮那[三]は、常恒に三世に住し給へる一切の身と口と心の金剛如來、一切如來の遊戲し給ふ處の、阿迦尼吒天[四]王宮の中の大摩尼殿の種々に間錯し、鈴と鐸と繒幡の微風に搖かし激たれ、珠鬘と瓔珞と半滿月等を以て、而も莊嚴を爲せるに住して、九十倶胝の菩薩衆と倶なりき。所謂る金剛手菩薩摩訶薩・聖觀自在菩薩摩訶薩・曼殊室利童眞菩薩摩訶薩・虛空藏菩薩摩訶薩・金剛拳菩薩摩訶薩・纔發心轉法輪菩薩摩訶薩・虛空庫菩薩摩訶薩、摧一切魔菩薩摩訶薩、是の如く等の菩薩を而も上首として、恒河の沙と等しき如來と與にして、猶胡麻の如く示現して閻浮提に滿てり。阿迦尼吒天に於ても亦復是の如し。彼の無量數の如來の身の、一一の身より無量阿僧祇の佛刹を現じ、彼の佛刹に於て、還て此の法の理趣を說き給ふ。時に婆伽梵大毘盧遮那如來、常に一切虛空の一切如來の身口心の金剛に住し、一切如來互に相涉入す。一切金剛界の覺悟智薩埵の、一切虛空界の微塵の金剛加持より生ずる所の智藏と、一切如來無邊の故に、大金剛智の灌頂寶の一切虛空に舒遍せる眞如智の、現に三菩提を證ることを爲すと、一切如來は自身の性淸淨なる故

【一】大日如來が一切如來眞實攝大乘現證の三昧耶に住し給ひて一切敎中の王なる法門を宣說し給ふ（金剛頂部に屬する）經。

【二】廣大な威儀軌則を整へて金剛界の大曼荼羅を修生したまふ品。

【三】Mahā-karuṇa-vairocana. 大日如來の除闇遍明の赫燿たる德は日に比すべきものであるからよく大悲……と用ふる。

【四】Akaniṣṭha. 色界頂の天で、因位の菩薩は六度萬行を修し法雲地に到ると、この天に於て、一切如來によつて虛空菩薩藏大摩尼寶を出して灌頂せられ觀自在法王智を發生せしめられる、受用法身の中の自受用法身（この金剛頂經に說かれる智法身）の自受法樂の處である。

他の一つは金剛頂部に屬する經典に瑜伽の文字の冠せらるゝ事は西曆四五世紀の佛教瑜伽思想の隆昌の地に金剛頂部の經典が直接關聯してゐることを物語るものである。

更に、攝眞實經の成立の地が華嚴經の成立したと想はるゝ南天竺、龍種國にありし事も推察するに難くない。歷史的には大乘莊嚴經論第三等に源泉を有する四智說の存することに徵しても判る。金剛頂經の五部の思想の源泉は矢張り南天竺にあり、その尤なるものは不空羂索經に盛られて居る、この五部思想が明かに金剛頂經の先驅をなすものたるべきは異論のない所である。西曆第八世紀に攝眞實經の釋が憍薩羅國に於て釋迦彌怛羅に依つて作られた事は極めて自然の事である。

昭和六年一月五日

譯者　富田斅純　識

【一】具さには金剛頂經大瑜伽祕密心地法門義訣(一巻不空譯)

【二】南天竺、キストナ(Kistna)河の南岸アマラヴチ(Amaravati)町の南西隅光丘(Dipal-dinne)上にある。G.mackergies' manual of Kistna District P. 165-166 及 Burgess' notes on the Amaravati-stûpa.

四

巳上に略して、平生問題になる點を指摘した。他にもこの金剛頂經に關する幾多の問題があるけれ共、密教徒が自宗内に於て曼荼羅や修法等に關する傳授上の問題、灌頂等の法儀上の問題であるから、もう一歩この經の言外の深義を汲み取る立場に立たねば贅事とも思はるゝであらうから、又斯かる宗教上の儀禮に關する事でもあるので冗長に說示することは控へねばならぬことに屬する。そこで同系統の經軌を密教徒が如何に見做して行くか、即ち居常重要な經軌に對する態度や、經軌に說かれてゐる印相等に就いては、別に、金剛頂蓮華部心念誦儀軌の註解と解題に少しく書いて置いたから其の方を御參考願ひ度いと思ふ。その外の事は一般には公開せぬものであると御承知願ひ度い。又文字で丈は誌してあつても何やらさつぱり判らぬ事も多々存するから更に阿闍梨の教へを受けねばならぬのは勿論である。これは密教の經軌全般に對していへる事柄である。(昭和五年五月末)

【一】金剛頂經の註解を擧げると、義訣の外には

十八會指歸　一巻　不空譯
金剛頂經開題　二巻　弘法大師
金剛頂經略稱　一巻　同上
教王經秘釋　一巻　同上
教王經義記　三巻　同上
教王經解題　五巻　道範
金剛頂大教王疏　七巻　慈覺

等がある。一般には慈覺大師の疏が用ゐられてゐる。

が發達史の見方であるが、人に依つては攝眞實經を三卷の經の根底となれる經と見做し、華嚴經・攝眞實經・金剛頂經の順に成立したのであると推定しやうとする向もあるが、特に敬服する程の定說らしいものも出ては居ない、尤も飜譯年代の後れたるを以て成立が新らしいとすることも出來ず、內容の中の一二の思想が古いからの故を以て成立を古く假定することも許されぬ譯であるから嚮に述べた如く、成立の年代は、依然として不明であるといはねばならぬ。この成立に關する嚴密な問題を離れて一步その立脚點を讓つて單に經の組織、結構を比較して見て華嚴經・攝眞實經・金剛頂經の三者の不離の關係を髣髴せしめて置かう、卽ちこの問題は實に今後にその明快なる解決を俟つものである。

攝眞實經は、佛が一切如來の加持を蒙つて五相觀を修し、菩提道場に正覺を成じたる後忉利天に登り種々の說法をなし、遂に再び菩提道場は還着し方便隨順して轉法輪することを說いてあるが、華嚴經も亦約言すれば、人界より天界に往き更に下降して人界に法を垂示することを示すものである。卽ち、樹下成道の座を立たずして近くの普光明殿に說法し、神通力を顯はして忉利、夜摩の天に法を轉じ最後に離世間品を普光明殿裡に說かるゝ事となつてゐる。

說明の都合上些細な點を二つ三つ指摘すると、第一には華嚴經にルシャナ佛の名義が用ゐられはじめてあり、その名義は攝眞實經、金剛頂經に到つては動かすことの出來ぬ存在となつてゐることである。又、華嚴經は海印三昧に入ることを說き更に文殊・普賢・法慧・金剛幢の如き大日如來の功性を人格化したる點は、攝眞實經にあつては、佛は金剛三摩地に入り自受法樂のために自內證の法門を說き、大日如來の一門の德性たる三十六智三十六尊を出生し印現することを示してゐる點、又圓融思想の顯れとしての一毛孔より無量の佛身佛土を現ずるが如き、又法界悉く佛の德相に外ならず、外道は勿論、惡魔邪神の末まで攝し方便引入の具に資すること、又宇宙の絕大なる淨き活躍の方面に刮目して香華燈塗等の供養が大日と諸佛菩薩との間に相互に交はされつゝあることを意識して說示するあたり同系の思想の展開であることを雄辯に裏書きしてゐる。

密敎徒は、華嚴經は金剛頂經の淺略だとする事が附會であるとしても、思辨の究極に到達したる華嚴經は果分の可說であることを示すべき血路を求めて止まなかつたので、それが遂に事相上にあらはれて曼荼羅となり甚深の義を表徵した印言となつたのが卽ち金剛頂經であり、攝眞實經である。

且つ年代を見ると、金剛智三藏が南天の鐵塔說を傳へたのは、西曆八世紀であつて、支那には未曾有の說であつたのである、これより先已に、眞諦三藏の時代卽ち、西曆六世紀に華嚴經の龍宮相承の三本說云云があつた。玄奘渡天の頃に龍種國に於いてこの兩傳說が流行し密教所傳の南天の鐵塔說を生じたのであらうと察するのは必ずしも迂遠であるまいと思ふ。

次に、實在せし塔としてのアマラヴチが當時已に存してゐて、西域記の傳說も、南天の鐵塔說もそこから生じて來たのであらうと思辯を進めて行く事も一應無理からぬ事であるが、未解決卽ち左うと斷定する確定的資料は無いのである。且つ、金剛界曼荼羅會場としての塔は'Stūpa'(窣都婆)であつて'Caitya'(制底)ではない。分別聖位經には

此れ卽ち毘盧遮那の聖衆なり、使ち現證窣覩婆塔となる云云。

三十七尊出生義には

光明より十六菩薩及び八方等の內外の大護を流出し、展轉し光を出して惡趣を照觸す。以て窣都婆の階級となり、諸佛の窣都婆法界宮殿を衞護す云云。

と阿閦・寶生・等塔內を金剛界曼荼羅會場と想定しての三十七尊の地位を說いてゐる。一方に於ては攝眞實經の所謂佛が須彌頂の金剛摩尼寶峯樓閣は八柱の莊嚴せられたる制底とあるから毘盧遮那佛の三昧耶形として三昧耶曼荼羅に畫いてある八柱に合する、併しこの制底がアマラブチ塔の制底であるとは直ちに斷定する譯には行かない。玆に、制底と窣都婆とを混同せる如く思はるゝも前述の窣都婆と制底とは後世同一視され同義に解せられて居るから、聖位經や、出生義の文字あるに拘はらず、アマラヴチ塔と關聯させるには別に差支へは無いが倉皇かに斷定を下す事はこの場合にも他に有力な證左がある迄保留せねばならぬ。乍併、充分研究に値ひする近似した資料たるは易らない。

斯く考へ來り、攝眞實經を拉して華嚴經との關係に及ばうと思ふ。金剛頂經三卷は、略出經・出生義・蓮華部心念誦儀軌等と俱に攝眞實經と密接な關係がある。然らば攝眞實經は歷史的には如何なる地位に在るかといふと、これ亦不明である。

天寶十二年不空三藏が金剛頂經を譯出してから約三十五年にして般若三藏が四十華嚴等と共にこの諸佛境界攝眞實經三卷を譯してゐる。この經は、金剛頂經の初會初品之異出であるといふが、金剛智三藏や不空三藏の同本の兩譯と考へられるものとは違ひ、二本を綜合し折衷してその上に不空三藏の二卷の經の儀則を加上して洗練せるものと思はれるとするの

もへり、諸佛菩薩の指授を得て、記持して忘れざるに堪へたる所なり。便ち塔を出でしめ、塔門還た閉づること故の如し、爾時に記持する所の法を書寫するに百千頌あり、此の經を「金剛頂經」と名づくるものなり、菩薩大藏塔内の廣本は世に絶えて無き所なり、塔内の燈光明等今に至るまで滅せず。

この文の大德を龍猛菩薩とし、この經の授受せられた鐵塔内がこの經の說かれつゝある「法界宮殿毘盧遮那現證窣都婆」であるとせられ、この法界宮はとりも直ほさず金剛界曼荼羅の會場であるとせられたのが弘法大師の付法傳である。

然るに、「西域記」第十には

城南遠からずして大なる山巖あり婆毘吠伽(Bhaviveka 清辯と譯す) 論師、阿素羅宮に住して慈氏菩薩の成佛を待つ處なり、論師・雅量弘遠・至德深邃にして、外には僧佉の服を示し、内には龍樹の學を弘む……靜にして思ふて曰く、慈氏の成佛に非ざれば誰か我が疑を決せんと、菩薩乃ち、妙色身を現じて、論師に謂て曰く、何の志す所ぞや、對へて曰く、願くは此の身を留めて慈氏を見んことを待たんと、觀自在菩薩の曰く、人命は危脆、世間は浮幻なり、宜しく勝善を修して覩史多天に生ぜんことを願ふべし……論師の曰く、志をば奪ふべからず、心は裁つべからずと、菩薩の曰く、若し然らば、宜しく馱那羯磔迦國の城南の山巖にある執金剛神の所に往いて、至誠に執金剛陀羅尼を誦せば、當に此の願を遂ぐべしと、論師是に於て、往て而して誦じ三歲の後、神乃ち謂て曰く、伊れ何の願ふ所ありて此の如く勤勵するや、論師曰く、願はくは此の身を留めて慈氏を見んことを待たん、觀自在菩薩指し遣はして來り請はしむ。我願を成ぜんものは其れ神ならんかと、神乃ち祕方を授け之に謂て曰く、此巖石の内に阿素洛宮あり、如法に行請せば壁當に開かん、開かば卽ち中に入りて以て見ることを待つべしと、論師の曰く、幽居にして覩ることなし、詎ぞ佛の興り玉ふを知らんと、執金剛の曰く、慈氏の出世をば我當に相報ずべしと、論師命を受けて專精誦持し、後三歲を歷るも初めは異相なし、芥子を呪し以て石巖の壁を擊つ豁として洞開けり、從容として入る、入り已りて石壁還た合す云云。

と、念誦法要を授けたといひ、阿素羅宮の所在を指し示せるといひ、この淸辯說と鐵塔說とは軌を一にしてゐる、二說共に執金剛神等が待衞し(白)芥子を呪し云云といひ、入り已りて石壁復合す等の筆致は寔に南天の鐵塔說が「西域記」の說に基づくかを肯かせられるやの觀がある。

表を上つて五天に遊び梵本瑜伽眞言經論五百餘部を得たと稱せられ、遺書の中にも、遠く天竺に遊び海を渉り危險を冒して遍ねく瑜伽を學び、親り聖跡を禮して、十萬頌法藏印可を得相傳して中國に歸つたと述べられてゐるのでも察せられる。再入竺して不空三藏の受法せられた師の事に就ては、龍智阿闍梨が未だ存命で在はしたとの說（嚴郢）と、寶覺阿闍梨耶の說（千鉢經序に依る發達志に力說せる所）と普賢阿闍梨耶であるとの說（趙遷）がある。若し探求の餘地あるものはといへば寶覺阿闍梨耶の說であり、他の兩說は不空の資が師績のため私情より空想した產物であつて信憑するには足らぬのである。不明であるとして置くより外はない。

眼を轉じて一面信仰上の傳說としての「義訣」にいふ南天鐵塔誦出に關しては矢張り幾多の疑念を想起する。南天の鐵塔なるものは龍猛菩薩の心內の事象であるとの考は今論じないで措くこととする。金剛頂經が誦出せられたる。南天の鐵塔とは如何なるものかに就ては

（一）之と類似した西域記第十の淸辯の阿素羅宮を開いて云云の傳說と較べて見る必要がある。

（二）南天の鐵塔說や西域記の說の起る所以は何れにあるかを檢討してアマラヴチ塔等を考へる。

（三）更に今の經と、華嚴經と攝眞實經等との結構組織の內に立入つて究むる必要を生ずる。

「義訣」は、略出經に屬するが、南天鐵塔說の典據であるから今先づ之を引用して見ると。

その大經の本は阿闍梨の云く、經夾廣長にして床の如し、厚さ四五尺、無量の頌あり、南天竺界鐵塔の中に在りて、佛滅度の後數百年の間、人能く此の塔を開くことなし。鐵扉鐵鎖を以て之を封閉す、其の中天竺の佛法漸く衰ふる時、大德ありて先づ大毘盧舍那の眞言を誦持す、毘盧遮那佛其の身を現じ、及び多身を現ずることを得て、虛空の中に於て此の法門及び文字章句を說き、次第に寫さしめ訖つて卽ち滅す、卽ち「毘盧遮那念誦法要」一卷是也、時にこの大德、持誦成就して此の塔を開かんことを願つて、七日の中に於て遶塔念誦し、白芥子七粒を以つて此の塔を打つに門乃ち開く、塔內の諸神一時に踴怒して入ることを得せしめず、唯塔內に香燈光明一丈二天名花寶蓋中に滿ち、懸列せるを見る、又讚の聲の此の經王を讚するを聞く、時に此の大德、心を至して懺悔し、大誓願を發して後に、此の塔中に入ることを得、入り已つて其塔尋いで閉づ、多日を經て此の經王の廣本一遍を讃す食項の如しとお

十三會　大三昧耶眞言瑜伽は金剛曼荼羅道場にて
十四會　如來三昧耶瑜伽は金剛曼荼羅道場にて
十五會　祕密集會瑜伽は祕密所にて
十六會　無二平等瑜伽は法界宮にて
十七會　如虛空瑜伽は實際宮殿にて
十八會　金剛法冠瑜伽は第四淨處天にて

と稱せられ、今の三卷の金剛頂經は十八會の中第一會と第六會と文を譯出せられたもので、略出念誦經（四卷、金剛智三藏譯）は初會の四大品を略出し、二卷の敎王經は初會四大品中の金剛界品の一部分を譯出し、三十卷の敎王經（施護三藏譯）は初會四大品全部を譯出し、般若理趣經は第六會の大安樂不空三摩耶眞實瑜伽品の一部を譯出したものである。

更に三卷の金剛頂經の內容を科を分てば、

上卷　金剛界大曼荼羅廣大儀軌品之一として

序分　三十七尊、賢劫十六尊諸佛頂諸金剛の德を嘆じ

正宗分　五相成身、十六大菩薩東南西の十二菩薩

中卷

北方四菩薩、四波羅密、八供養、四攝を說き、一百八名讚　大曼荼羅壇を說く。

下卷

灌頂法則諸眞言、羯磨會印の功德、三昧耶會印、羯磨會眞言並に功德、同會の印、終に、諸成就の印明を擧げてある。（已上本文註參照）

この經は、佛そのものの作用、實在の威力靈格たる宇宙の活動を演繹的に、敎示的に明したるもので、大日經が畢竟歸納的筆致を以て實驗的に凡夫より佛位に到る道程を、理由を、方法を開示したるに比較して興ある對立である。又この經は多元的・自然的・差別的に傾き積極的なるに比し、大日經は阿字諸法本不生際不可得の問題に重點を置き、一元的、平等的に消極的卽否定的に論法を進めてゐる點は後に一法界、多法界の問題を起す所以である。

【二】第一會中に四大品あり、その第一金剛界品に

大曼荼羅、陀羅尼曼荼羅、微細會曼荼羅、供養羯磨曼荼羅、一印曼荼羅の六を說き。

第二降三世品に十種の曼荼羅を說く、初の六は第一品の如く、後の四は敎敕大曼荼羅、敎敕三摩耶曼荼羅、敎敕法曼荼羅、敎敕羯磨曼荼羅である。

第三遍調伏品には六種の曼荼羅を說き。

第　一切義成就品にも六種の曼荼羅を說いてある。

三

然らば、金剛頂部の法を大部分傳へて不空三藏に傳授した人は何人であるか、第一には勿論金剛智三藏で、この事は些かも疑念を挾む者はあるまいけれども、金剛智三藏寂後不空三藏は再び渡天して金剛頂部の法を重受せられたとの事で自ら、乾元元年に飜經を請はれた表の中に明白に天竺に入り金剛頂（部）瑜伽經等八十部を得たと稱せられ、又大曆六年更に

とが出來さへすれば他の經も稍、見當を附けられる譯であるがそれさへ出來兼ねるのである。

これは「密敎發達志」等が一面純學究的立場から兎角の誹を受け乍ら、又それを識知し乍ら飜譯流傳の年次に從つて記述せられたる極めて苦しい點である、現在の處ではそれ以上に出ることは出來ずに居る譯である。發達志は飜譯流傳の道程を知る上に於ては貴重なる貢献ではあるが密敎聖典成立の歷史的年代の推定そのものに關しては幾多の難所と缺點の存するは止むを得ぬ所で、金剛頂經の研究にもその僻見を控除して平靜な態度を以て臨まねばならぬ、これは將來への重要なる注意でもあるから特に一言を費して置くこととする。

【一】「密敎發達志」第四卷五八四頁已下參照。

二

學究の立脚地からは餘り問題にはならぬ乍ら、一應はこの經の相承の傳說を紹介せねばならぬ事である。この事は、密敎の血脈上の問題と共に密徒の腦裡を去らぬ信念上の敬虔なる心境に關聯してゐる。次にこの經の傳來に就いての四種不同と稱するものを擧ぐれば(一)に法爾常恒の本、大日智法身が常恒不斷に說法せらるゝ經である。この心象に映ずるものを常恒の本として見做すところに密敎の密敎らしい態度が窺知されやう。(二)に無量頌の廣本といひ金剛薩埵が如來の敎敕を蒙り、常恒の本を諸經の風にし五成就を加へ、無端に端をつけ結集して自ら護持し、南天の鐵塔內に機緣を待たれたもので、經の厚さ五旬に餘り、その廣博は凡眼には見聞受持すること不可能であり、人間界に流布せられなかつたといふ。これ亦前に準じた傳說である。(三)に「金剛頂義訣」にいはゆる龍猛菩薩の誦出せられたる十萬頌の大本である。「義訣」の事は後に別言する。(四)に四千頌の略本といふ、この略本の一部分が譯せられてゐるのである。この經に古來十八會あり各說處があるから之を列記すれば

初　會　攝大乘現證大敎王は阿迦尼吒天にて
二　會　一切敎集瑜伽は法界宮殿にて
三　會　一切如來祕密瑜伽は法界宮殿にて
四　會　降三世金剛瑜伽は須彌盧頂にて
五　會　世出世金剛瑜伽は波羅陀國にて
六　會　大樂不空瑜伽は他化自在天にて
七　會　普賢瑜伽は普賢菩薩宮殿にて
八　會　勝初瑜伽は普賢宮殿にて
九　會　一切佛集會瑜伽は眞言宮殿にて
十　會　大三摩耶瑜伽は法界宮殿にて
十一會　大乘現證瑜伽は阿迦尼吒天にて
十二會　三昧耶最勝瑜伽は法界菩提場にて

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經解題

一

金剛頂部に就いては、學問的推敲を進むるのに相應はしからぬ點が多い爲もあり、其體系を整理したり純學究的には殆んど無爲の儘になつて居ると稱するも過言ではない、又一面止むを得ぬのである。三卷の金剛頂經に關しても同樣の事がいへる。從つて相承の口說等以外にはこれといつて著しい研究も遂げられては居らない。況んや歷史的に該經の位地を闡明されては居らぬ譯で、單に支那に譯出せられたのを中心として二三の想像を加ふるに過ぎぬ。それ以外には見るべきものは無いのである。

【一】 vajraśekhara-sarvatathāgata-satya-saṃgraha-mahāyāna-pratyutpannābhi-sambuddha-mahātantrarāja-sūtra (No. 1020 Nanjyo Catalogue)ヷジラシエーカラ、サルヷタターガタ、サチヤ、サングラハ、マハヤーナ、プラチュトパンナービサムブッダ、マハータントララージヤ、スートラ。

一

金剛界の曼荼羅はこの經に依つて圖示せられたのであるから、密宗の徒に取つては最尊至重の經である。乍併、この經は外見した丈では何が何やらさつぱり判らぬ文字の羅列とさへ思はれる。この事は一般通佛敎の典籍を繙く力のある人でさへ然うであるからまして素人が一寸披讀したのみでは皆目見當さへつき兼ねる有樣である。この一見無味乾燥の聖典は深修久行の阿闍梨が已達した眼底に映してはじめて甚深微妙の義理を汲み無量の不可思議をさへ現ずる樣にもなるであらう。

一

纏說する迄もなく、聖典成立の年代を指摘するには幾多の豫件を具備せねばならぬが、就中、或經の傳譯年次卽ち支那に齎らされた次第を追ふてその經の成立したる歷史的位地を判定せんとするのは一見可なるが如くに見えて而も萬全のものでは無い。もう一步內容に立入つてその相關せる思想背景を深思せねばならぬ。換言すれば成立年代を判定せんが爲に單に飜譯年代のみを留意することは不充分で、その思想內容の單純から複雜へ、茫然たるものから明快なものへの徑路を匡した後でなくては科學的方法とはいひ難い。分析、綜合を無視しては研究の武步を進むるのには役立たぬのであるからである。此の際特に留意し度い。

如上述、從來密敎殊に金剛頂部の聖典は遺憾乍ら、片手落ちの判斷を下されたまゝになつてゐる。そこで、同系統に屬する一經でも歷史的に地位を確定するこ

悉く傷つくること能はず。一切の罪障皆消滅して悪趣に墮せず。持誦する所の眞言皆成就を得べし。久しからずして菩提の果を成ずることを得ん。その阿闍梨は慈悲を以ての故に、當に慇懃に一の弟子に教へて、都法を通解して我が明藏を持せしむべし。

我今已に一切の曼荼羅の都法を説けり。若し曼荼羅を作さん者は、皆この法に依つて作すべし。若しこの法を以て弟子に與へんには、先づ明王の眞言手印及び大手印の諸の曼荼羅を教へて、然る後にこの祕密の法を與ふべし。

蘇悉耶經（終）

果を得べし。及びその灌頂は是の如き等の無量の功德を具し、眞言の族を具し、菩薩の行を行ず。是故に阿闍梨は、應に都法を解し、及び灌頂を得許して傳法を爲すべし。然して後復方に曼荼羅の法を作すべし。若しこの法に達して曼荼羅を作さば、卽ち成就せず、死して地獄に墮せん。それ彼に入る者は利益無けん。ただ益無きのみにあらず、諸の障難起らん。所謂飢饉、疫病・亢旱・諸の賊盜起り、國王相諍はん。その諸の弟子魔に損せられん。その阿闍梨は必定して死を致さん。若し法に依らずして曼荼羅を作さば、是の如き等の種種の難起ることあらん。

若し佛部の曼荼羅の中に於て灌頂を得つれば、卽ち三部の曼荼羅の中に、阿闍梨を得べし。若し觀自在の曼荼羅の中に於て灌頂を得つれば、卽ち二部の曼荼羅の中に於て阿闍梨を得べし。若し執金剛の曼荼羅の中に灌頂を得つれば、卽ち一部及び摩醯利迦神の諸の曼荼羅の中に於て阿闍梨を得ん。大いに曼荼羅を作らん時には、唯一人のために阿闍梨の灌頂を受けしめよ。自餘の灌頂は、或は三、或は五、必ず雙にすべからず。皆各別の供具を以て灌頂を爲せ。その受明灌頂を得るの人は、應に曼荼羅を成就するの法を敎ふべし。その自餘の灌頂を得る者は、所得の眞言の本法と、及び手印の法を敎ふべし。若し愚人あつて、曼荼羅に入らずして眞言を持誦せば、遍數を滿すと雖も終に成就せず。後に邪見を起し、彼の人命終して地獄に墮せん。若し人あつて彼に眞言の法を與へば、彼も亦三摩耶戒を墮し、命終の後[四]嚕羅婆地獄に墮せん。若し失念及び放逸を以ての故に三摩耶に墮せば、卽ち部心の眞言一洛叉遍を持誦すべし。或は[五]阿那羅暮阿尼陀羅尼一千遍を誦せよ。或は息災の護摩をし、或は復更に大曼荼羅に入るべし。若し愚人あつて餘の敎法を解せずして曼荼羅を作らば、[六]五無間の重罪を犯すが如く、所墮の處も彼も是の如し。若し如法に功德を求むるを以て曼荼羅を作ることあらば、彼は大菩薩なり。淨土に生ぜん。それ彼の曼荼羅に入ることあらん者は、鬼魅の所著を被らず、及び諸の蠱毒・[六]毘舍遮・[七]摩呼羅伽・[八]羅刹、種種の揭絲訶幷に諸魔の難も

【四】 Raurava.
【五】 出生無邊門陀羅尼なり。
【六】 五無間。八大地獄の第八阿鼻(Avici)地獄を云ふ。五種の無間あればなり。一、趣無間。二、受無間。三、時無間。四命無間。五、形無間。
【六】 piśāca. 食肉鬼。
【七】 Mahoraga. 八部衆の一。
【八】 Rākṣasa. 惡鬼の總名。

を說かば、ただ此法に依つて分量を作せ。縱ひ本法に違ふとも亦過患無からん。或は若し自餘の諸尊の所に供養を加へんと欲はば、亦妨ぐる所なし。凡て所說の一切の法事に隨つて增せる過を遮するに非ず。若し闕くれば成せじ。或は是の如きの曼荼羅に說くに諸の弟子をして、各香爐及び燈明を執らしめて曼荼羅を遶らしむることを說くことあらん。是の如きの殊異の法は必ず違はざれ。ただ彼に依つて作すべし。或は是の如きの曼荼羅の法あり。說くに是の三摩耶の時、是の如きの言を作さん。汝等今法船に載ることを得たり。生死を出離す、或は誠心を以て散華せよと云はば、必ず彼の說に依れ、彼に違ふことを得ず。是の如きの殊異の法は、各の本法に依つて作せ。若し說かざれば、必ず作すべからず。

凡そ曼荼羅に入るに、必ず四種の灌頂あり。一には除難、二には成就、三には己身を增益す、四には阿闍梨位を得。是の如きの灌頂の法は、前に已に廣く說けり。次に今當に受明灌頂を成ずべし。曼荼羅に入りて得る所の明に隨つて成就せんと欲はば、彼の眞言を以てその瓶を持誦すること三百遍し已つて、彼に灌頂を與へよ。還彼の眞言を用ひて、護摩する所の物を持誦すること七遍せよ。然る後に一遍護摩せよ。是の如く乃至三遍護摩すべし。これを第二の受明灌頂と名づく。若し難の所著を被ることあらんに、難を除かんが爲に、灌頂を作さんには、これを除難灌頂と名づく。安樂及び富貴を求め、幷に男女を求め、不祥を除かんが故に灌頂を作すは、これを增益灌頂と名づく。凡そ灌頂を蒙けなば、諸佛菩薩及び諸尊、幷に持眞言行菩薩等、皆悉く證明し加被護念し給ふ。聖觀自在及び執金剛のあらゆる眞言を悉く皆成就し、一切の天神損害すること能はず。皆悉く恭敬す、生死の中に在れども惡趣に墮せず、貧窮の家及び不具足の人の惡嫌する所に生ぜず、恒に宿命を憶し、多饒なる資財あり、具戒端正にして當に天人に生じ、恒に佛世に遇ふべし。その菩提心を曾て退轉せざるなり。大福德を具し、久しからずして生死の苦海を出離し、當に無上菩提の

【三】四種灌頂を說く。

若し曼荼羅を作さんには、先づ[二]彼の國王に啓して許さしむべし。その王の所に於て、壯士の皆威勢あるものを請取れ、各器杖を執らし、無畏の心を以て曼荼羅を遶つて立たしめよ。或は是の如きの弟子、法器たるに堪へ受持するものあらば、弟子を召請するの時に、若し在らざれば、應に彼の形を作つて召請等の法を作すべし。或は弟子あり、灌頂せんと擬欲せんに、若し在らざれば、當に別の弟子と與に數に充てて灌頂すべし。或は弟子にして其事を欲求して受持を作さんに、若し在らざれば、彼の弟子の爲に充すに別人を以てするを得ず。若し弟子の爲に受持する時、忽ちに若し到らざれば、應に知るべし、その阿闍梨は大重病に著し乃至死を致さん。若し召請の法を作し已らんに、或は是の如きの因緣あつて、第二の日に曼荼羅を作すことを辦せずんば、その日息災の護摩を作すべし。暮間に至つて更に復召請して、第三日に至て曼荼羅を作すべし。若し正しく曼荼羅を起作せん時、忽ち若し小小の具を闕少せば、相待つことを須ひざれ。或は若し時を過たば卽ち諸の難起らん。若し曼荼羅を作さん時難事起ることあらば、當に眞言を以て避除すべし。或は方便を以て災を息めしめよ。若し除くこと能はざれば、所有の供具を水を以て灑淨して、一時に供養し、及び閼伽を奉つて諸尊を發遣せよ。別の日に當に息災護摩を作すべし。後作すことを亦得、七明妃の曼荼羅の如きは、七院に作るべし。彼の本法に依つて安置することを作せ、彼の法この法の相違することを疑ふこと勿れ。その藥叉曼曼荼羅の法も、亦復是の如し。或は曼荼羅あらんに、本法闕くることあらば、應にこの法に依つて曼荼羅を作すべし。或は是の如きの曼荼羅あり、別して餘の法を指さば、還て彼の法に依つて曼荼羅を作せ。或は本法あつて曼荼羅を云ふと雖も、次第を說かざれば、總じて此法の次第に依つて作すべし。持明藏に於て、廣く曼荼羅の法を說くが如し。或は本法に依つて曼荼羅を說け。或は阿闍梨の指受して、曼荼羅を說く是の如き等の所說の次第の如く。乃ち彼の法に依つて曼荼羅を作れ。疑惑を生ずること勿れ。若し本法によつて、瓶の分量の或は大或は小

【二】國王に勅許并に外護を乞ふ。

ならしめ、白土を以て塗りて亦作ることを得べし。或は神廟に於て亦作ることを得べし。或は水上に於て、密に淨板を布き如法に塗治して上に作れ。水中行尊及び皷音尊の曼荼羅の如きものをば、應に水の上の上に作るべきなり。その婆羅門の祭祀の地、及び穢を棄てたる地、前に所作を經たる曼荼羅の地をば、並に之を棄つべし。或は說く、ただ一道の眞言を以て曼荼羅を作さば、則ち彼の法に依つて作れ。卽ち彼の多羅尊の曼荼羅これなり。或は是の如きの曼荼羅あり。具足して自ら眷屬の眞言あらば、還彼の法に依つて作すべし。卽ち[一]忿怒火尊の曼荼羅これなり。或は是の如きの曼荼羅あり。その本法に於て眞言具足せざれば、當に都法の通用の眞言を取りて、曼荼羅を作すべし。夫れその眞言の曼荼羅に用ふべきものは、先づ各の誦の數千遍を滿すべし。然して後用ふべし。凡そ所作の曼荼羅の法に隨ふには、先づ要ず成熟し明らかに了解し已つて、然る後に方に曼荼羅の法を作せ。傍に綖を置き、數數本を檢せよ。失錯あらんと恐るれば何を以てか熟せざらん。凡そ曼荼羅を作る時は、當に助成就者をしてその處を外護せしむべし。毎に外に出づる時は、先づその助人を其所に入れて、守護を作さしめ、必ず空しうせしむること勿れ。若し是の如くの弟子の繩を執るに堪ふる者無くんば、卽ち先づ栓一頭を釘ち、自ら捉へて界道を作れ。若し助成就者無くんば、一切諸の事は皆須く自ら作すべし。その助成者にして若し病患あると、及び戒無く、亦淸淨ならず、諸事に明らかならざれば、縱ひ明藏を解すとも、亦取るべからず。若し曼荼羅を作し畢らば、忽ちに外道の族姓の家に生ることあらん。心行耎善にして有力に、正直にして深信あり、愛慕し自ら來つて曼荼羅に入ることを欣求する者にして、その阿闍梨彼に信ありと知らば、假使曼荼羅を作し畢るとも、彼の人をして正法に入れしめんが故に、時に彼のために召請の法を作して曼荼羅に入れしめよ。その弟子等にして、或は若しその本善の相を具せず、及び法を闕かば、當に息災の護摩を作すべし。

【一】忿怒火尊。烏樞瑟摩明王(Ucchuṣma)なり。

及び眞言所屬の部とを視せしめ、并に彼の本曼荼羅を說け。

次に阿闍梨は、當に自身に灑ぎ、更に諸尊に閼伽を奉つて、次第に一一の諸尊を供養すべし。次に[三五]曼荼羅主の眞言を以て、護摩すること百八遍せよ。復寂靜の眞言を以て、護摩すること百八遍せよ。次に部心の眞言を以て、護摩すること二十一遍せよ。次に一一の諸尊の眞言を以て、牛蘇を用ひて各護摩すること七遍せよ。然る後にその本所持の眞言を以て、意に隨つて護摩せよ。次に[三六]更に如法に身を護し、諸方を祭祀せよ。祭祀し畢つて、手を洗ひ自及び弟子に灑淨し、香華等を以て次第に一切の諸尊を供養し、及び頂禮せよ。置く所の供養を至誠の心を以て、諸尊に奉施し并に歡喜を乞ふべし。復閼伽を執り、各各本眞言を以て如法に發遣せよ。或は本法に依つて發遣を作せ。あらゆる資具は當に大河に泮すべし。飯食をば貧兒に施與せよ。狗及び烏等の下等の鳥に與ふべからず。曼荼羅の所有の財物に於ては、阿闍梨は並に收め取るべし。意に隨つて受用せよ。更に弟子に與ふること勿れ。その弟子若し其物を用ひば三摩耶を墮せん。是の故に其物をば、阿闍梨用ひよ。若し阿闍梨其物を用ひずんば、當に三寶に施すべし。その傘の犛拂等の物は、應に佛に施すべし。その座、塗香燒香等の物は、法に施與すべし。その衣瓶器等の物は僧伽に施すべし。その弟子は乃至少分も之を用ふることを得ず。若し僧伽無くんば、苾芻[三七]、苾芻尼[三八]、及び優婆塞[三九]、優婆夷[四〇]に應ずべし。第二日所闕の法を滿たさんが爲に、并に息災の護摩すること百八遍せよ。

補闕品第十一

次に復更に、如前に說かざる闕少の法の、諸の曼荼羅の法に於て、未だ說かざるものを說かん。その阿闍梨は善く明藏と及び眞言を解し、戒を具すること淸淨にして、及び慈悲あり、妙に曼荼羅を畫くことを解し、直心淸淨ならば應に曼荼羅を作るべし。或は舍上に於て、廣く其處を淨めて平正

【三五】第四の護摩。

【三六】神供。

【三七】苾芻(Bhikṣi)。比丘。

【三八】苾芻尼(Bhikṣiṇi)比丘尼。

【三九】優婆塞(Upāsaka)。近事男。

【四〇】優婆夷(Upāsika)。近事女。

の淨水を用ひて彼が頂上に灑げ。

次に[三〇]當に廣くその曼荼羅を視せしめ、諸尊を解說し、本手印の相を教へ視せしめ、復明王の眞言を教ふべし。次に教へて一處に坐せしめ、所得の眞言を持誦せよ。次に[三一]教へて諸の香華を以て本尊及び諸の諸尊に供養せしめよ。次にその[三二]弟子は、護摩處にて至誠の心を以て阿闍梨を禮拜し、須用ふる所に隨つて當に布施すべし。或は所有の物に隨つて悉く皆施與せよ。所謂自助の眷屬妻子錢財等の物なり。或は阿闍梨の歡喜するものに隨つて、當にその物を施すべし。或は自の愛樂のものを當に施與すべし。若し貧窮の者は、力を以て奉事して尊をして歡喜せしめよ。然も諸の施中に於ては、承事を最と爲す。凡そ布施せんと欲はば、先づ兩疋の衣服を奉れ。然して後に餘物を捨施せよ。成就を求めんとせば應に是の如く施すべし。若し三摩耶を求めば、即ち衣服及び金、牸牛幷に犢を布施すべし。及び身に隨うて有るものを布施すべし。乃至自身をもてせよ。三摩耶を求めん者は、應に是の如く施すべし。

その[三三]阿闍梨は次に、諸の弟子等をして教へて次第に座せしめ、自ら般若經を讀みて、彼等をして聽かしめよ。次に[三四]彼等が爲に都て三摩耶戒を說くべし。汝等今より常に三寶及び諸の菩薩と、諸の眞言尊に恭敬供養せよ。大乘經に於て恒に勝解を生ぜよ。凡そ一切の三寶を見たてまつり、亦三摩耶戒を受けたらん者を見ば、當に愛樂を生ずべし。尊者の所に於て恒に恭敬を生ずべし。諸の天神に於て瞋り嫌ふことを得ずして、須く供養すべし。その外教に於ては信じ學することを得ざれ。凡そ來つて求めん者には、有るに隨つて施與せよ。諸の有情に於て恒に慈悲を起せ。諸の功德に於ては勤求し修習せよ。常に大乘を樂ひ、明藏の行に於て恒に勤め、精進して眞言を持誦せよ。經明藏にある所の祕密の法に於て三摩耶無からしむる者には、皆爲に說くべからず。關言及び印をば具にし、明藏を學して祕密に護持せよ。是の如く三摩耶を說き已つて、各各に彼の所得の本印と、

【三〇】正しく傳法印可の印明を授く。
【三一】弟子供養。
【三二】弟子布施。
【三三】般若經を讀む。
【三四】戒を說く。

四瓶を執りて傍邊に住せしむ。その阿闍梨は與に吉祥の妙伽陀を誦せよ。是の如きの次第を、今且く略して說きぬ。若し廣く作さんと欲はば、當に本法に依るべし。その[二〇]阿闍梨は、普く曼荼羅中の一切の諸尊を頂禮すべし。灌頂の爲の故に至誠に啓請して、卽ち[二一]前に持誦を百遍せし所の瓶を持し奉るべし。徐徐に當に曼荼羅を遶るべし。遶ること三匝し已つて、復三種の眞言を以てその瓶を持誦せよ。その頂上に於て手印を作して幷に根本の眞言を誦し、還この眞言を誦して彼に灌頂を與へよ。若し[二二]傳法の灌頂を作さんには、應に面を西に向けて坐すべし。若し息災の灌頂を作さんには、面を北に向けて坐せよ。若し增益の灌頂を作さんには、面を東に向けて坐せよ。若し降伏の灌頂を作さんには、面を南に向けて坐せよ。

[二三]灌頂し畢つて、次にその阿闍梨は、自ら手にその衣を執りて彼に著せしめ、及び塗香を以て彼が身上に塗り、幷に華等の[二四]供養をなせ、亦[二五]華鬘を以て兩肩に交絡せよ。復[二六]臂釧を與へてその腕に著けしめよ、阿闍梨は自ら手にその[二七]傘を執り、彼の弟子をして曼荼羅を遶り、遶ること三匝し已つて、亦西門の前に至り卽ち數數禮拜せよ、その傘は身に隨つて來去して頭に蓋へ。その阿闍梨は諸尊を啓請して、是の如きの言を作さく、我某甲、某甲がために灌頂し畢んぬ。今諸尊に付屬して明藏を持せしむと。この語を作し已つて應にその傘を放つべし。彼をして起立して曼荼羅の前に對はしめ。爲に三摩耶戒を說け。汝今已に曼荼羅の[二八]阿闍梨持明藏者と成んぬ。諸佛菩薩及び眞言主一切の天神、已に共に汝を知ろしめしぬ。若し人ありて法器となるに堪へたりと見ば、彼を怜愍するがために、曼荼羅を作して敎へて持誦せしめよ。

その[二九]阿闍梨、次に彼がために如前の法に依つて護摩を作すべし。火を燃き、著け已つて曼荼羅主の眞言を用ひ、牛蘇を護摩すること百遍せよ。復寂靜の眞言を以て、蘇と蜜と及び酪と飯とを相和して、護摩すること百遍せよ。復護摩を用ひて護摩すること百遍せよ。是の如く作し已つて、そ

【二〇】啓請。
【二一】瓶行道。
【二二】向方。
【二三】授衣。
【二四】供養受者。
【二五】授華鬘。
【二六】與臂釧。
【二七】傘蓋行道。
【二八】一尊の阿闍梨なり。
【二九】第三の護摩。

上の枝を用ひて護摩を作せ。若し增益の事を作さんには、樹の中の枝を用ひて護摩を作せ。若し降伏の事を作さんには、應に樹根を以て護摩を作すべし。若し[八]息災の事を作さんには、應に茅草の衣を著くべし。若し增益の事を作さんには、蒭麻の衣を著くべし。若し降伏の事を作さんには、青色の衣及び血濕衣を著くべし。或は破穢せる衣或は復裸形にてせよ。若し[九]息災の事を作さんには、應に蘇乳、稻穀の花、大麥蜜、及び乳粥と茅草の牙、幷に[一〇]裙那花、[一一]注多樹の葉、及び[一二]白檀香、[一三]烏曇末羅樹木及び果、[一四]阿輸他木、苦練木、苦彌木及び果、[一五]波羅闍木、及び諸餘の物を以て護摩を作すべし。若し增益の事を作さんには、應に乳粥と、酪飯と、蜜と、乳と及び飯と、酪粥と、胡麻と及び三白衣と、天木迴香と、及び天門多と、龍華と、尾盧婆果と、諸穀と及び柴と、自餘の物等を以て護摩を作すべし。若し降伏の事を作さんには、赤白の芥子と、血と及び芥子の油と、毒藥と、骨と、灰と、髮と、荊棘と、仇毘多羅木と、句叱木と、迦多羅木と、刺あるの木とを以て護摩を作すべし。是の如く三種の護摩の事は、その本法に於て縱ひ說かずとも、この法に依るべし。

次に[一六]阿闍梨はその弟子を觀るに、法を授くる器に堪へて灌頂すべき者をば、卽ち當に如法に彼に灌頂を與ふべし。その弟子は先づ、阿闍梨を頂禮し請じて及び布施すべし。先づ[一七]新淨の座を辦じ、辦事の眞言を以て。其座を持誦して、灌頂の曼荼羅中に置け。又[一八]新淨の白傘を辦じて、上に花鬘を懸け、復白色の綵帛を懸け、曼荼羅主の眞言を以てその華等を持誦せよ。又曼荼羅の中に諸の吉祥の具を置け、その阿闍梨は其弟子のために、如法に護身してその中央に坐せしめよ。その[一九]阿闍梨は當に牛蘇を以て香と相和して、軍荼利の眞言を用ひてその香を持誦してその弟子に薰ずべし。卽ちその傘を將ち當に上を蓋ふべし。復餘人をして淨瓶牛の拂と、及び扇と、香爐とを執り、箱の中に衣を置き、幷に商佉及び筋と諸の吉祥の物を盛り、その箱を執らしむ。復酪椀を執らしむ。是の如き等の物を皆人をして執らしめよ。若し辦ずることを得ば、應に音聲を作すべし。又

【八】所著の衣。
【九】食薪。
【一〇】裙那(Kunda)。
【一一】注多(Cūta)。
【一二】白檀(Candana)。
【一三】烏曇末羅(Udumbara)。
【一四】阿輸他(Aśvattha)。
【一五】波羅闍(Palaśa)。
【一六】以下、正覺壇の法なり。
【一七】布座。
【一八】傘蓋。
【一九】燒香。

せ。復神袋を以て右の髆に繫け、復香を以て手に塗り、その胸の上を按じ意に隨つて持誦して發遣し了れ。自餘の弟子も皆是の如く作して護摩すべし。[三]蘇盧婆の杓を用ひて蘇を護摩することを作せ。復右手を以て諸穀を護摩して茅の座に坐し、その淨水の中に亦茅草を置け。先づ茅環を備へ、爐の四面に復茅草を布け。護摩を作す時は皆應に是の如くすべし。先づ乳汁の乾ける柴を取りて爐の中に置き、蘇を以て上に灑ぎてその火を生じ、後乳汁の濕へる柴を取りて護摩を作せ。蘇を護摩する遍數の多少の如く、胡麻の數量も亦復是の如し。その餘の穀等も意に隨つて護摩せよ。最後には滿たせる蘇を以て護摩せよ。その火神を請し及び發遣するには、彼の眞言を用ひよ。その灑淨等には前の眞言を用ひよ。或は餘の說に隨へ、もし眞言にして護摩に用ゆべきものあらば、意に隨つて用ひよ。

[一]瞿醯壇怛羅二合經分別護摩品第十

次に息災と、增益と、及び降伏の事との三種の護摩の差別の法を說くべし。彼の曼荼羅を作るに依つて、事に隨つて護摩を作せ。若し[二]息災護摩を作さんには、面を北に向けて坐せよ。若し增益護摩を作さんには、面を東に向けて坐せよ。若し降伏護摩を作さんには、面を南に向けて坐せよ。若し[三]息災の曼荼羅及び護摩を作さんには、その爐は圓に作れ。若し增益には方にせよ。若し降伏を作さんには三角にせよ。若し[四]息災の曼荼羅及び護摩を作さんには、白色を用ふべし。增益には黃色、降伏には黑色にせよ。若し[五]息災の事を作さんには、蓮華座に坐し、增益の事を作さんには、茅草座に坐せよ。降伏の事を作さんには、右脚を以て左脚を押へ、蹲踞して地に著くることなくして坐せよ。[六]寂靜の心を以て息災の事を作せ。歡喜の心を以て增益の事を作せ、忿怒の心を以て降伏の事を作せ。或は本法の所說に隨つて、彼に依つて作せ。若し[七]息災の事を作さんには、樹の最

【三】牛蘇なり。

【一】瞿醯壇怛羅(Guhyatantra)譯し 秘密眞言。護摩(Homa)。

【二】行者の座する方向。

【三】爐の形の差別。

【四】所用の色の區別。

【五】座の差別。

【六】用心。

【七】燒木の差別。

を得ん。花若し先には內院の中に墮ち、卽ち却つて超えてその外院の中に出でなば、當に彼の人は信心共せずと知るべし。若し强いて持誦せば、下の成就を得ん。花若し諸の界道の上、及び行道院に墮ちなば、當に彼の人は決定の心無く成就を獲ずと知るべし。花若し二尊の中間に墮ちて、近にあらず遠にあらず、及び界道幷に行道院に墮ちんに、若し復擲げんと欲はば、應に彼の人の爲に護摩の法を作して、然して後に花を擲げしむべし。花若し內院に墮ちなば、たゞ其院に隨つて皆彼の尊に屬す。

凡そ曼荼羅を作さんには、皆三部の諸尊を置け。復本方に於て更に一座に置きて、運心して以て一部の諸尊を表せよ。その內院の中には要ず復須く般若經の夾を安置すべし。內院の門には必ず中門を守る龍王を安置すべし。花若し飮食院の上に墮ちなば、當に增益等の事を成就すと知るべし。花若し部主の尊の上に墮ちなば、當に曼荼羅を作ることを成就すと知るべし。花若し七佛世尊の身上に墮ちなば、決定して三部の眞言を成就す。花若し執蓮華の上に墮ちなば、當に兩部の眞言を成就すと知るべし。花若し執金剛の上に墮ちなば、當に本部の眞言を成就すと知るべし。花若し先に第三院の內に墮ち、却つて超え出て行道院に向はば、應に彼の人を棄つべし。後の時に將ゐて餘の曼荼羅に入れよ。若し强いて將ゐて入れんと欲はば、當に護摩を作して、更に與に花を擲げしむべし。還若し著かざれば更に護摩を作せ。是の如く三たび迴らすも、若し著かざれば、則ち須く擯出すべし。その阿闍梨は、是の如きの法を以て諸の弟子を將ゐて一一に入れしめ、華を散じ畢つて、復閼伽及び香華等を獻ぜよ。その弟子等は各各與に布施すべし。阿闍梨次に、一一の弟子を將ゐ、護摩の處に於て阿闍梨の左邊に坐せしめ、次に阿闍梨は、左手を以てその弟子の右手の大頭を執るべし。曼荼羅主の眞言を用ひ、牛蘇を用ひて護摩すること七遍せよ。復寂靜の眞言を以て牛蘇を護摩すること七遍せよ。復牛蘇を以てその弟子の頭上に於て、右に轉ずること[一]三遍して護摩を作

【一】西藏本は七遍とあり。

を誦し、次に[五]辦事の眞言を以て新帛を持誦して、その面門に繫けよ。復三摩耶の印を作し、その頂上に置き彼の眞言を誦すること三遍せよ。次に曼荼羅主の印を作し、頂上に置き彼の眞言を誦すること三遍せよ。引いて曼荼羅門前に將いて、その阿闍梨應に是の如く言ふべし。我等某甲如法にこの曼荼羅を作りて弟子を將いて入らしむ。その福德及び種姓と幷に成就とに隨ひ、法器に堪ふるに隨つて、この曼荼羅の中に於て、願はくは其相を視せしめんと。[六]次に華を散ぜしむべし。墮つる處に隨つて、卽ち彼の部の族性及び尊に屬す。次に應に面を開きて曼荼羅を視せしむべし。その阿闍梨は歡喜の心を以て、彼の弟子の爲に是の如きの言を作せ。汝今この妙曼荼羅を見て、深く敬信を生ずべし。汝今乃し諸佛の家中に生じ、諸の明眞言已に汝を加被し給ふ。一切の吉祥及び成就皆悉く現前せん。この故に堅く三摩耶戒を持して、眞言の法に於てます／＼念誦せよ。次に弟子をして香華等を以て、普く三部を供養し、及び讃嘆せしめよ。その阿闍梨は曼荼羅の所に於て、弟子に授與するにその所得に隨ひ本眞言に於てせよ。或は弟子をして第二院に坐せしめて、所得の心眞言を持誦せしめよ。[七]具にその散華を看て、墮つる處に隨つて上中下の成就を准知せよ。謂はく諸尊の上下の差別、及び坐位の次第に隨つて上下を准知せよ。花若し[八]佛の頂上に墮ちなば、當に佛頂の眞言、及び佛毫相等の諸尊の眞言を成就すと知るべし。花若し佛の面の上に墮ちなば、佛眼等の尊の諸の明眞言を成就すと知るべし。花若し佛の中身の分に墮ちなば、當に[九]諸心の眞言を成就すべし。花若し佛の下の身分に墮ちなば、當に[一〇]使者の眞言を成就すと知るべし。花の墮つる所の身の上中下分に隨つて、當に成就の上中下品を知るべし。その執蓮華及び執金剛も、花の墮つる所に隨ひ、上に准じて知るべし。應に知るべし、自餘の諸尊には但上中下品の成就を知れ。若し花の墮つる所、彼の尊を去ること遠くば、當に知るべし。方に久遠にして成就すべし。花若し食院の上に墮ちなば、所屬の尊に隨つて彼の眞言を得ん。花若し兩尊の中間に墮ちなば、近き處に隨つて彼の眞言

【五】覆面。
【六】投華。
【七】花の落つる所によつて悉地の相を判ず。
【八】大日尊なり。
【九】八葉尊の眞言なり。
【一〇】辦事明王不動降三世等の眞言なり。

ば、當に[二]金剛母跢迦二合羅の印を用ふべし。及び祕密曼荼羅に於て說きし所の十八の大印は、皆これを用ふべし。若し呼召の法を作さんには、當に金剛鉤の印を用ふべし。若し結縛の法を作さんには、當に金剛鏁の印を用ふべし。若し調伏の法を作さんには、當に金剛棒の印を用ふべし。若し怖魔の法を作さんには、當に喫金剛の印を用ふべし。若し越三摩耶の者あらば、當に受三摩耶忿怒の印を用ひて調伏を作すべし。或は大力金剛棒の印を用ふ。若し諸の障難を碎伏せんと欲はば、當に遜婆明王の眞言手印を用ふべし。この法を作し已んなば、その諸の難等は皆火に燒かれん。この故に當に如上の尊等の諸印等の法を用ひて遶らし用ゆべし。即ち大威力あることを知らん。この故に當に一切の事に於て、皆順じて之を用ふべし。或は彼の說に隨ひ彼に於て用ひよ。

又[三]次に當に護摩の法を作すべし。面を東に向へて、茅草に端坐し、火を燃き著き已んなば、その火を灑淨するに又茅草を用ひてせよ。初めは應に杓に蘇を滿たして護摩すべし。最後も亦然り。次に應に蘇及び柴等の諸物を以て如法に護摩すべし。念誦の法の如く護摩も亦然なり。寂靜の眞言を以て一一の尊の爲に、七遍護摩して心に彼の尊を念ぜよ。その一尊のために護摩し已んなば、即ちその火を灑淨して方に餘尊の爲に護摩すべし。護摩し已つて、都て諸尊を請じて、更に護摩を作すこと百八遍を滿じ、諸尊の所に歡喜を乞へ。

即ち一切の罪障を懺悔し、功德に隨喜し、廣大の願を發し、數數三寶に歸し、及び不退の大菩薩衆、一切の眞言幷に明尊に歸し、數數大菩提心を增發せよ。次に應に三部の尊及び餘の諸尊を讚嘆すべし。次に經を誦すべし。然して後に志誠の心を以て諸尊を啓請して、深く珍重を生ぜよ。所燒の香をして斷絕せしむること勿れ。數々閼伽を奉れ。是の如きの次第を作し已つて、誠心を以て諸尊を頂禮せよ。[四]然して後如法にその弟子を將ゐて一一に入らしめよ。當に一一の弟子を喚び前の如く香水を以て灑淨し、塗香等を以て供養すべし。香を用ひて手に塗り、その心の上を按じその眞言

【二】金剛母跢迦羅（Vajra-mudgara）。譯、金剛槌。

【三】護摩の作法を說く。

【四】以下正しく弟子を引入する作法なり。

等、及び部多、諸の食血噉肉者の種種の類を祀れ。或は地に居する者、或は樹に居する者、或は林に居する者、及び心の念著する者を皆須く祭祀すべし。祭る時に若し忽然として大聲を聞かば、無畏の心を以て更に祭祀すべし。或は野干大叫及び大吼の聲を聞き、或はその身を見、或は樹根を拔き倒すを見、及び樹折るゝを見、或は雷聲を聞き、及び種種の希奇の異相あらば、更に復祭祀して護身を作せ。その阿闍梨は、聞くが如く、解するが如く、見るが如くに、如法に諸の方所に於て祭祀し畢つて、手を洗ふて灑淨し、その門前に於て燒香し供養せよ。

次に內に入りて、閼伽及び燒香を奉獻し、前に置ける所の食を供養せよ。心を以て第二院第三院に運供せよ。あらゆる諸尊に一一に[一〇五]上妙の新淨の衣服を奉施せよ。自餘の諸尊に各一疋を奉れ。或は若し辦ぜざれば、各の三部の主尊に奉るに、兩疋の衣服を用ひよ。或は若しただ兩疋の衣服を以て、箱の中に置きて內院に奉施し、運心して普く一切の諸尊に施せ。然して後各諸尊の眞言を誦すること七遍せよ。その曼荼羅主の眞言は、持誦すること[一〇六]百遍已上せよ。その三部の心眞言を各の百遍を誦せよ。然して後次第に、諸尊の一一の手印を作して、持誦すること三遍すべし。是の如く作し已らば、悉く皆歡喜して其所願を滿ぜん。

卷の下

分別印相品第九

[一]亦は三部三摩耶の印とも名づく、一切の曼荼羅に通じて之の印を用ふ。その護身の印、及び結方の印、驚覺奉迎の印、及び灌頂の印、香華等を奉獻するの印、災難を息むるの印、難を碎伏するの印、難を繫縛するの印、難を解放するの印等、是の如きの印は手印品に於て皆悉く廣說せり。前の如き淨治及び護身の法は、それ皆手印を用ふ。相應して作れ。若し難伏の者を碎伏せんと欲は

【一〇五】佛布施なり。

【一〇六】西藏本は百〇八遍を誦せよとあり。

【一】西藏本には此文の前に、佛部、蓮華部、金剛部各の印契を說く。漢譯は冒頭より「亦は三部三摩耶の印とも名づく云々」とあるは文意通ぜず。藏譯の如く三部の印契の說明ありて後此文あるを至當とす。これ明かに漢譯の脫文なることを知るべし。解題參照。

に酪粥を和するを即ち種種食と名づく。あらゆる臭穢と辛苦澁味と、古き殘宿の不祥の食は、供養すべからず。或は若し種種の羹を辦ぜざれば、ただ小豆の羹を用ひて供養することも亦得。凡そ飯する所の上に、皆酪を點ずべし。若し辦ずることを得ざれば、必ず須く六種の飯食を供養すべし。所謂乳粥と、小豆羹と、[九〇]沙瑟迦二合等の食・粳米飯・酪・枳利婆羅粥なり。たとひ極めて貧くとも、六種の食を闕すべからず。若し一を闕さば供養を成ぜず。凡て乳粥の上に皆蜜を著くべし。凡て酪の上に皆沙糖を致け。その小豆羹の上には牛蘇を著くべし。若し薑あらば亦之を著くべし。

　復應に種種の菓子、及び諸の根食を供養すべし。この二種の食菓は、一切の眞言及び明尊など皆悉く愛樂す。その菓子とは謂く[九一]阿摩羅果・[九二]石榴果・麼路子果・蒲桃果・棗・[九三]柿子・[九四]迦必他果・[九五]毘闍補羅迦果・[九六]欄子[九七]波那娑果・[九八]吒應二合子果・[九九]羅句者果・暮止二合者果・木果・波羅曳迦果・乞瑟利迦果・阿麼羅果・侵止音反部果・勿喋二合跢毘二合迦果・[一〇〇]迦羅末多迦果等の種種の好果を用ひて供養せよ。あらゆる臭穢の果は、奉獻すべからず。謂く穢果とは、尸利頗羅果・椰子・多羅果・波羅跢迦果等なり。是の如きの穢果は奉獻すべからず。亦種種の根藥を供養すべからず。熟煮し了つて皮を去り、如法に供養し奉れ。謂く[一〇一]毘多羅根・芋子根等なり。その諸の穢根は供養すべからず。その穢根とは、謂く輸羅拏根・羅蔔根・迦闞迦乾陀根等なり。是の如きの穢根は供養すべからず。その菓子の中には、石榴を上となす。諸根の中には毘多羅根を上となす。是の故に應に簡び用ひて供養すべし。第三の曼荼羅には、その熟煮の小豆をば和するに牛蘇を以てし、幷に胡麻を著けて之を供養すべし。第三の曼荼羅には、外の四面に於て白花を布散し、亦胡麻と稻花を以て遍く散ぜよ。

　最後に外に出てゝ、諸の方所に於て、[一〇二]部多と諸の非人の類を祭祀せよ。粳米飯を用ひ和するに稻花と、胡麻及び花を以てせよ。小豆を煮て婆耶里迦の飯に牛蘇を塗れ。已上の飯食を總て一處に和して、その阿闍梨は歡喜の心を以て、一一の方に各各に三遍食を下し、以て[一〇三]羅刹及び[一〇四]毘舍闍

【九〇】沙瑟迦(Svastika)。

【九一】阿摩羅(Āmalaka)。
【九二】石榴(Dāḍima)。
【九三】柿子(Piṇḍakharjūra)。
【九四】迦必他(Kapida)。
【九五】毘闍補羅迦(Vijapuraka)。
【九六】欄子(Naradaka)。
【九七】波那娑(Banasa)。
【九八】吒應(Koli)。
【九九】羅句者(Lakucha)。
【一〇〇】迦羅末多(Karamatapiraya)。
【一〇一】毘多羅(Vitara)。

【一〇二】部多(Bhūta)。譯、鬼。
【一〇三】羅刹(Rākṣasa)。譯、惡鬼。
【一〇四】毘舍闍(piśāca)。譯、食血肉鬼。

應に餘の食を以て其闕數に充つべし。或は辦ぜざれば、ただ部主に供養せよ。或はただ内院に置きて、心を表して一切の諸尊に供養せよ。一一の院に凡そ行ずる所の食は、頭より一一に遍く布せよ。行じ行つて更に餘類を取れ。遍く行ずること前の如くせよ。その部主の前は若し供養を加すとも必ず過失無からん。正しく食を行ひし時に、若し錯つて闕少せば、即ち補闕して便ち歡喜を乞ふべし。食を下すべき所には、先づ淨き芭蕉の葉を布け。或は荷葉を布き、或は[七八]波羅沙の葉を布け。先づ[七九]莎悉地二合迦食を下し、次に飲食を行ひ、最後に諸の菓子の類を下すべし。その飲食は、大小の麥の麪を用ひて作れ。及び粳米の粉を用ひて造れ。極めて淨潔ならしめ、及び香美にせよ。謂はく[八〇]羅佉迦食・噃羅噃尼迦食・[八一]脾那迦食・[八二]末度尸羅二合乞那二合食・[八三]阿輸迦伐底食・似菱角形食・餅㗖[八四]鉢波抜吒迦食・鉢知食・似鷺形食・仇阿食・[八五]羯補迦喇迦食・[八六]布尸夜二合鉢多食・盛滿蘇食・盛沙糖食・烹煎餅塗沙糖食・婆羅門餢飳食・盼茶迦食・[八七]渇闍迦食・[八八]薩闍迦食・薄餅食・如鳥形食・胡摩脂餅・糤米揣・如象耳形食・小豆烹煎餅等の小豆を以て作る所の食は、謂く浦波食・輸瑟二合迦食・鉢那波浦迦餓食・豆基食・䒷鍼豆基食・資跢羅二合浦波食・彌烏嚕比迦食・乳浮婆耶利迦食・珍茶浦波食等、是の如き類の食なり。粳米と、小豆と、胡麻とを小分和合して粥を作れ。その小豆と胡麻は搗き篩ふて末と爲し、粳米を以て糜となせ。これを[八九]枳利婆羅粥と名づく。乳粥・淡水粥・酪粳米粥・酪漿水粳米粥・或は赤或は黄等の粥を、皆淨器を以ひ盛りて供養せよ。或は布く所の葉上に置け。粳米の飯、及び六十日の熟稻の粳米の飯を以て廣多に獻ぜよ。小豆羹等の種種の羹を、香味淨潔にして奉り供養せよ。粳米の飯を乳酪に和し、及び沙糖に和して奉り供養せよ。あらゆる種種上妙の飲食を以て奉り供養せよ。復、三白の食・部底迦食・廣多食・種種の食を供ぜよ。粳米の飯を乳と酪と牛蘇とに和す、これを三白食と名づくるなり。乳粥と、枳利婆羅粥と、小豆羹とは、これを部底迦食と名づく。前の如きの三食に粳米の飯を加へ、色色加多きを、これを廣多食と名づく。前の如きの四食に、更

【六九】薫陸香(Kundur)。
【七〇】薩闍羅沙香(Sarjarasa)。譯、白膠香。
【七一】娑羅枳香(Sāluka)。
【七二】烏尸羅香(Uśira)。
【七三】摩勒迦(Maruka)。藤の類、遊子藤といふ。
【七四】香附子香(Musta)。
【七五】甘松香(Jagara)。
【七六】栢木香(Gulma)。
【七七】天木香(Devadāru)。
【七八】波羅沙(Palāśa)。譯、赤花樹。
【七九】莎悉地迦(Svastika)。
【八〇】羅佉迦(Rājika)。譯、芥子。
【八一】脾那迦(Venaka)。
【八二】末度尸羅乞那(Madu-śraga)。
【八三】阿輸迦伐底(Aśovarta)。Śrikadachilaka.
【八四】鉢波抜吒迦(Parvaṭa-ka)。
【八五】羯補迦喇迦(Karpor-karika)。
【八六】布尸鉢多(Puśaparta)。
【八七】渇闍迦(Kharjhuka)。
【八八】薩闍迦(Sarjaka)。
【八九】枳利婆羅(Kṛsara)。譯、雜合飯。

闍維二合沙香・安悉香・[七一]娑羅枳香・[七二]烏戶羅香・[七三]摩勒迦香・[七四]香附子香・[七五]甘松香・闕伽跢哩二合香・[七六]栢木香・[七七]天木香、及鉢地夜二合等の香を沙糖を以て相和すべし。これを普通和香と名づく。次第に諸尊を供養せよ。或は意に隨つて前の如き香を取りて、和して供養せよ。或は復總じて和せよ。或は香美のものを取りて和せよ。是の如く辦ずるに隨つて、塗香及び花、幷に燒香を誠心を以て供養せよ。若し華鬘を置いて供養せば、縱ひ少分の穢臭の花ありとも、供養することを妨げず。若し多くの棄つべき香花等の物の、識らざるものをば、供養すべからず。その有情の身分の香は、觸るゝ所の諸の餘の供養の具、皆悉く穢と成る。この故に用ふること勿れ。その紫礦香は、三部の中には總て用ふることを許さず。是故に行者たる者、當に通じて是の如きの差別を解すべし。その曼荼羅の外の四邊の地は、普く香爐を置き、或は坏、或は瓦石のものに、皆燒香を置きて如法に供養せよ。縱ひ有情の身分の香を用ふるとも、亦用ふることを妨げず。第三院の世間の諸尊には、意に隨つて香花等の物を供養せよ。その部主の尊には倍加して供養せよ。自餘の諸尊には、各の本座に於て應に隨ひ差別して次第に供養せよ。三部の主尊の前に、各の香爐を置け。曼荼羅主の前に一の香を置き、香烟をして斷絕せしむること勿れ。或は一一の院に置くに一香爐を以てし、用ひて供養せよ。若し辦ぜざれは、一の香爐を用ひて諸尊に供養せよ。然も一尊を供養し已らば、卽ち香水を以て灑淨すべし。更に供ぜは前の如くに灑淨すること此に准じて知るべし。是の如く塗香及び花等、幷に燒香を曼荼羅の中の一切の尊に奉獻し已つて、重ねて閼伽を奉り、畢つて次に飯食を供養せよ。極めて淨潔ならしめ、平等の心を生じて、皆眞言を以て飲食を持誦して、次第に差別して應に隨つて供養せよ。三部の主の尊には倍して飲食を加へよ。曼荼羅主には數倍して加へよ。自餘の諸尊は次第に差別すること、此に准じて知るべし。寧ろ食を增加すとも闕少することを得ざれ。是故に淨香美の飲食を以て、種種にして供養して悉く皆歡喜せしめよ。行ひし所の食類にして、若し遍かざれば、

【四一】尸俱嚕(Śigmu)。
【四二】遮娑(Puśapati)。
【四三】阿底目德迦(Atimugtaka)、
【四四】央句羅(Agola)。
【四五】郎迦那(Draṅaka)。
【四六】尼娑(Nira)。
【四七】雞路枳(Ketaka)。
【四八】摩那延底迦(Manayantika)。
【四九】句襴茶迦 (Kurantaka)。
【五〇】那摩迦(Dāmaka)。
【五一】句吒遮(Kutaca)。
【五二】毘羅嚩(Pilava)。
【五三】摩利迦(Mallikā)。
【五四】奔陀利(Puṇḍarika)。白蓮華。
【五五】句勿頭(Kumuda)。晩香玉類。
【五六】乾地迦(Gantika)。
【五七】計娑羅(Kesara)。
【五八】迦尼迦羅(Kraṇikara)。
【五九】摩羅底(Malati)。
【六〇】群多(Kunda)。
【六一】婆句羅(Bakula)。
【六二】迦羅毘羅(Karavira)。
【六三】沈水。沈香(Agaru)。
【六四】尸利袜瑟多迦(Śirivestaka)。
【六五】黑沈水香(Kṛṣṇāgaru)。
【六六】安悉香(Gugguula)。安息香に同じ。
【六七】龍腦香(Karpūra)。
【六八】蘇合香(Turuṣka)。

置く勿れ。穢惡の蟲の食せる香無き等のものをば用ふること勿れ。當に好淨なる者を取るべし。亦水を將ひて其香を研すること勿れ。若し諸佛に塗香を供養せんとせば、當に新好の欝金香或は黑沈香を用ふべし。龍腦を和して塗香を作れ。若し觀自在を供養することを作さんには、當に白檀を用ひ以て塗香を爲すべし。若し執金剛及び眷屬を供養せんとせば、當に紫檀を用ひて塗香と爲すべし。自餘の諸尊は、意に隨つて合し用ひて之を供養せよ。その供養の花は水陸の花を取れ。謂はく[一七]摩里迦花・[一八]魔句花・[一九]群去駄花・[二〇]摩羅底花・[二一]那縛摩里迦花・[二二]苦蔔迦花・[二三]阿輸迦花・[二四]奔駄迦花・[二五]拂利曳應二合舊花・歸夜迦花・舉地迦花・[二六]計娑羅花・[二七]底羅迦花・[二八]娑羅花・[二九]迦尼迦羅花・樹花・[三〇]優波羅花・[三一]多迦羅花・迦羅毘羅花・[三二]迦曇婆花・[三三]阿輸那花・漫闍梨花・[三四]紛茶羅迦花・迦癡迦羅二合花・于遮那羅花・[三五]婆茶羅花・[三六]尸多乾地花・[三七]倶羅婆迦花・[三八]曙拏花・婆茶羅舍花。是の如き等の陸地に生ずる花を以て、次第に供養せよ。惡しきものを用ふること勿れ。[三九]乾多迦花・[四〇]歸夜迦花・[四一]尸倶嚕花・[四二]遮婆花・[四三]阿底目得迦花・[四四]央句羅花・[四五]郎迦那花・[四六]尼婆花・[四七]鷄跢枳花・[四八]摩那延底迦花・[四九]句欄茶迦花・[五〇]那摩迦花・[五一]句吒遮花・[五二]毘羅嚩二合花。[五三]摩利迦花等、是の如きの不祥の陸花は、降伏の事に用ひて供養せよ。[五四]忿陀利花・赤蓮花。諸類の青蓮花など、是の如き諸の水に生ずる花は、通用して供養せよ。その赤[五五]句勿頭花・白蘇[五六]乾地花など、是の如きの不祥の水花を降伏の事に用ひて供養せよ。[五七]計娑羅花・[五八]迦尼迦羅花・[五九]摩羅底花等の諸の白き香美の花を取りて、佛部に供養せよ。蓮華等の諸の水に生ずる花を取りて、蓮華部に供養せよ。阿輸迦花・底羅迦花・[六〇]群多花・那縛摩里迦花・拂利曳應二合舊花・[六一]婆句羅花・赤[六二]迦羅花・毘羅花・優波羅花等、是の如きの花を取りて、金剛部に供養せよ。

其燒香は、白檀を用ひ[六三]沈水を相和して、佛部に供養せよ。[六四]尸利稗瑟多迦等の諸樹の汁香を、蓮華部に供養せよ。[六五]黑沈水香及び[六六]安悉香を用ひて、金剛部に供養せよ。次に普通の和合を說かん。有情の身分に非ざるものなれ。白檀香・沈水香・[六七]龍腦香・[六八]蘇合香・[六九]薰陸香・尸利二合稗瑟吒二合迦香・[七〇]薩

【一七】摩里迦(Mallikā)。蔓花。(素馨花の一種)。
【一八】魔句(Bakula)。醉花。
【一九】群駄(Kunda)。素馨花の一種。
【二〇】摩羅底(Malati)。
【二一】那縛摩里迦(Navamalikā)。素馨花の一種。
【二二】苦蔔迦(Campaka)。金色花。
【二三】阿輸迦(Aśoka)。無憂花。
【二四】奔駄迦(Punnāga)。奔那伽花。
【二五】拂利曳應舊(Priyaṅgu)。凰子。
【二六】計沙羅(Kesara)。花鬚。
【二七】底羅迦(Tilaka)。
【二八】娑羅(Sala)。
【二九】迦尼迦羅(Karṇikāla)。牙皂花。
【三〇】優波羅(Utpala)。青蓮花。
【三一】多迦羅(Tagara)。得藥藍花。
【三二】迦曇婆(Kadambaka)。
【三三】阿輸那(Asana)。
【三四】紛茶羅(Puṇḍalika)。白蓮花。
【三五】婆茶羅(Pāṭala)。
【三六】尸多乾地(Śitaganti)。
【三七】倶羅婆迦(Kurapaka)。
【三八】曙拏(Pana)。
【三九】乾多迦(Gantaka)。
【四〇】歸夜迦(Kuyaka)。

面に各の一門を豎てゝ、上に鈴と傘蓋と及び拂と、幷に華鬘とを懸けよ。亦大麥小麥と稻穀とを以て生蘇と作し、外の四面に置きて供養せよ。復四面に幔幕を以て圍著すべし。前の如く塗る所の四面の地に、諸の名花及び稻穀の花を散じ、幷に諸の穀花を散じ、萬字等の諸の吉祥の印を置け。是の如く廣く諸の供養の具を設けよ。或は復力に隨つて供養を辦じ已れ。然して後方に奉請の法を作せ。前の如く辦ぜし所の閼伽を執持し、各の本眞言を以て諸尊を奉請し上れ。或は復都て曼荼羅主の眞言を用ひて都て諸尊を請ぜよ。或は本法の所說に依り是の如く奉請せよ。佛部の中に於ては、[12]輪王佛頂明王及び部母の眞言を用ひて、本部の諸尊を請ぜよ。蓮華部に於ては、[13]濕縛婆訶明王及び[14]吉祥部母の眞言を用ひて、本部の諸尊を請ぜよ。金剛部に於ては、[15]遜婆明王及び[16]莽麼計部母の眞言を用ひて、本部の諸尊を請ぜよ。或は復、唯曼荼羅主の根本の眞言を以て、或は心眞言を用ひて、一切内外の諸尊を請ぜよ。或は當部主の根本の眞言、或は心眞言を以て、本部の諸尊を奉請せよ。或は各各の本眞言を以て、諸尊を奉請せよ。若しくは先より誦し得たらんものを以て、應に一一に請ずべし。是の如く次第にその閼伽を以て、法に依つて請じ已つて、即ち當に般地夜二合香水を奉獻すべし。又數〻閼伽を奉獻して、問訊の辭を作し、次に即ち禮拜せよ。然して後次第に作法し畢つて、方に供養を作せ。初には塗香を獻じ、次に即ち花、燒香、飯食を供養し、後燈明を獻ぜよ。その塗香は、白檀香・沈水香・迦濕彌嚟香・苾唎二合曳膺舊香・多迦羅香・優婆羅香・苾利二合迦香・甘松香・丁香・桂心香・龍華香・禹車香・宿澁蜜香・石南葉香・蘆根香・瑟蒐二合遲去耶汁香・乾陀羅二合沙汁香・沙陀拂瑟婆香（云迴香）婆沙那羅跢迦香・勢去禮耶香・闍知皤怛羅二合香・（婆羅門云荳蔲葉）香附子香・吉隱二合底香・隱摩豆唎迦香・胡荾香を用ふ。諸樹の汁類の香は、合香の如く如法に相和すべし。合はす所の香に隨つて、皆龍腦を置け。應に雨水の未だ地に墮ちざるものを用ひて、塗香を作るべし。眞言を以て持誦して、次第に内外の諸尊に供養せよ。その塗香の中に、有情の身分と及び紫礦とを

【一二】 輪王佛頂、最勝佛頂(Vijayagpiga)なり。轉法輪の德を司るが故に斯くいふ。
【一三】 濕縛婆訶(Sivāvaba)。寂留明王。
【一四】 吉祥部母。大吉祥明菩薩(Mahāśrividyā)。
【一五】 遜婆明王(Śumbta-vidyājā)。降三世明王。
【一六】 莽麼計(Māmaki)。

れ。闕損せしむることなく如法に作れ。中に香水を盛り及び名花を置け。眞言を以て垢を瀉ぎ乃至清淨にせよ。後曼荼羅主の眞言を以て、持誦すること七遍し、內院に安置して以て供養を爲せ。餘處は但灑ぎて卽ち供養を成ず。その置くべき瓶は、黑及び赤色を以てすること勿れ。端正にして新たに作り、闕損せしむる勿れ。輕く及び端圓にせよ。香水を盛り滿たして、及び五穀・五寶・五藥を置け。繒綵を以て頸に纏ひ、及び華鬘を纏へ。幷に花菓枝葉を著け、亦柑欄散花を著けよ。持誦すること七遍し、四方及び四角の諸門に安置して以て吉祥と爲せ。或は若し是の如き等の瓶を辦ぜずして灌頂を爲さんには、中に一瓶を置き、及び四門と四角に各の一瓶を置け。その出入の三重の門に於て、各の當邊に一一に瓶を置け。外には門に當つて要ず一瓶を置け。使衆多の瓶を辦ぜざれば、一瓶を安置し、或は四瓶を安ぜよ。その門外の瓶は、必定して闕かすこと勿れ。

その五穀とは、謂く胡麻と、小豆と、大麥と、小麥と、稻穀となり。餘に一切の穀と言はば、應に五穀なりと知るべし。[一〇]五藥と言ふは、謂はく僧祇と、毘夜と、乞羅二合提婆と、婆訶提婆と、枳哩羯上尼となり。餘に一切の藥と言はば、應に知るべし五藥なり。その[一一]五寶とは、謂く瑚と、頗と、金と、銀と、商佉なり。或は珠、或は寶なり。餘に一切の寶と言はば、應に知るべし五寶なり。その幡竿は端直にして長くせよ。各の八方に處を去ること遠からずして、如法に安置せよ。東には白き幡を著け、東南には紅の幡、正南には黑き幡、西南には烟色の幡、西方には赤色の幡、西北方には青色の幡、正北には黃色の幡、東北には赤白の幡なり。是の如く八色を方に隨つて置け。竿頭の上に鵁鶄鵐の尾を結び絓けて極めて端正ならしめよ。或は若し辦ぜざれは、たゞ四門に置け。或はただ東方に一の白幡を置け。その燒香の爐は、たゞ瓦坏を用ひよ。火を以て燒かしむること勿れ。數は一十に至り、四方四角に各の一枚を置け。門及び外に各の一枚を置け。或は若し是の如きの坏爐を辦ぜざれば、瓦器も亦得、若し多を辦ずることを得ざれば、その門前にただ一爐を置け。復四

【三】金剛橛(Vajraśapku)。
【四】金剛墻(Vajrabhitti)。
【五】金剛鉤(Vajrāṅkuśa)。
【六】娑頗底迦(Sphaṭika)。譯、水晶。
【七】瑠璃(Vaidūrya)。
【八】商佉(Śaṅkha)。譯、螺貝。
【九】西藏譯によれば Śukti
【一〇】西藏本の梵語の音譯によれば五藥は(一)Siṃghr(二)Vyāghr(三)Karṇika(四)Haṃsa(五)Haṃsdeva)なり。
【一一】五寶。珊瑚(Pravāḍa)、頗璃(Śilā)、金(Suvarṇa)、銀(Rajata)、商佉(Śaṅkha)、卽ち螺貝。西藏譯所出の五寶は珊瑚・金・螺貝・眞珠・寶珠なり。

淨を爲せ。若し山上にして作らば、平かならざるの過を見ること勿れ。若し平地に作らば、右の過あらしむること勿れ。諸尊を安置せんに、本位及び方差はば、應に息災の法を作して其過を除くべし。然も第二院は錯ることを得ざれ。是故に位を畫くことを畢つて、心を安んじて普く視よ。若し錯る處あらば、卽ち當に復改むべし。その自の念誦の尊及び弟子の念誦の尊とを、その本位に隨つて意に任せて安置せよ。若し弟子あつて灌頂に堪らば、應に方階を作るべし。灌頂の處には、その白色を以てその道を階せよ。又五色を以て一の蓮華を作り、甚だ圓滿ならしめよ。萬字[一一五]等の諸の吉祥の印を以てその花を圍遶せよ。或はその形を作りて之を安置せよ。その食を作す處は、白色を以て道を界へよ。あらゆる飲食は皆一處に置け。あらゆる幢幡、瓶等の諸の供養の具は、亦白色を以て道を界ちて、其處に安置せよ。

奉請供養品第八

次に奉請と及び供養の法を說かん。曼荼羅を作り畢り、及び觀視し已らば、外に出て灑淨せよ。面を東に向け一切の諸尊を禮して好相を取れ。曼荼羅主の眞言を念誦し、或は部心の眞言を誦して、心をして散亂せしむること勿れ。乃至當に吉祥の相を見るべし。好相を得已つて心に歡喜を生じ、然して後方に護身等の法を作し、辦事の眞言を用ひよ。或は先より持誦して功ある眞言を以てせよ。要ず五尊の眞言を用ひて護身を作せ。所謂 [一]枳利枳利尊・[二]軍荼利尊・[三]金剛橛尊・[四]金剛墻尊・[五]金眞鉤欄尊なり。普く諸部に通ず。護身を作し諸難を降伏せよ。或は曼荼山羅主の根本の眞言を用ひて、或は心眞言を以て護身を作せ。その諸の弟子は前に說きし所の如くにし、及び心に護を作せ。護法を作し已つて曼荼羅に入れ。閼伽器を執り眞言を以て持誦せよ。その器は金を用ひて作れ、或は銀、熟銅、寶及び[六] 婆頗底迦、或は白 瑠璃、或は木・石・商佉・樹葉、螺及び新しき瓦を用ひて其器を作

服白衣。白衣觀音のことなり。

【一〇二】 馬頭(Hayagriva)。馬頭觀音なり。

【一〇三】 一髻(Ekajata)。

【一〇四】 多羅(Tālā)。譯、眼妙目精。救度。

【一〇五】 大吉祥(Mahāśri)。

【一〇六】 觀自在(Avalokiteśvara)。

【一〇七】 金剛鉤(Vajrāṇkuśa)。

【一〇八】 金剛拳(Vajramuṣṭi)。

【一〇九】 遜婆(Sumbha)。

【一一〇】 不淨忿怒。烏樞沙摩(Ucchuṣma)明王なり。或は穢跡金剛とも稱す。

【一一一】 執金剛(Vajra-dhara)。

【一一二】 三部。佛部・蓮華部・金剛部。

【一一三】 閼伽(Argha)。譯、功德水、香花水。

【一一四】 三事。息災・增益・降伏。

【一一五】 萬字。卍の形なり。吉祥の標相にして梵に Srivatsasvastika といふ。

【一】 枳利枳利(Kelikila)。降三世明王の異名。

【二】 軍荼利(Kuṇḍali)。軍荼利明王に三種あり。一、金剛軍荼利。二、蓮華軍荼利。三、甘露軍荼利なり。西藏譯によれば今は甘露軍荼利(Amṛtakuṇḍali)なり。

されば、卽ち當に自餘の說かざる[一二二]三部の諸尊を安置すべし。復意に樂う所の諸尊を意に隨つて安置せよ。その第三院も亦復是の如し。

曼荼羅の外に於て、東方及び南北の方に各一座を置き、以を以て三部の諸尊を觀察して、各のその方に隨つて都て請じて供養せよ。及び[一二三]閼伽を用ひて之を奉獻せよ。各の彼の部の部主の眞言を誦せよ。その東方の座には、佛部を安置せよ。その北方の座には、蓮華部を安置せよ。その南方の座には、金剛部を安置せよ。是の如く三部の一切の諸尊と、幷に諸の使者とを都て奉請し、如法に供養して皆歡喜を生ぜしめよ。その西方に亦一座を置き、一切の天神を奉請して、前の如く供養せよ。若し息災の曼荼羅を作らんには、當に三寶及び諸の菩薩、淨居天等を置くべし。若し增益の曼荼羅を作らんには、當に明尊及び眞言尊、諸の大威德等の敬信の藥叉を置くべし。若し降伏の曼荼羅を作らんには、應に忿怒の諸尊及び使者等の諸の猛害の尊を置くべし。凡そ曼荼羅は、皆須く[一二四]三事の法を作すべし。是故に當に三種の尊を置くべし。その最內院は、若し主無くんば當に般若の印像を置くべし。內院の門の右邊には、一の淨篋を置きて、上に般若經の甲を置け。外門の左邊には、護摩の火爐を置き、淨好の木を用ひて燒柴を爲せ。或は東南の方にその火爐を置け。或は事の相應に隨ひ火爐を置け。諸尊を安置することも、これに准じて知るべし。若し佛堂に、或は窟內に、及び室內に、或は近き處に作らん所の曼荼羅は、意に隨つて安置せよ。若し成就の曼荼羅を成さんには、窟內及び近き處に作るべからず。强いて作さば卽ち損ぜん。

凡そ曼荼羅を作るには、露地を上と爲す。若しくは神廟及び大室に於ては通じて許して作れ。その處に若し短樹及び根、大石及び樹あらば、要ず須く除却すべし。除くことを得ざれば、當に息災の法を作してその過を除くべし。又その樹、瓦、石等の物、若し第二第三院にあらば、作法して除くことを許す。若し內院にあらば、應にその處を棄つべし。凡そ曼荼羅の地は、香水を以て灑いで

【八三】火天(Agni)。
【八四】藥叉(Yakṣa)。能噉鬼捷疾鬼等と譯す。
【八五】檀茶(Daṇḍa)。譯、棒、杖。
【八六】餓鬼(Preta)。
【八七】羅刹(Rākṣasa)。惡鬼の通名。
【八八】風神(Vāyu)。
【八九】伽馱。前記の檀茶に同じ、杖なり。此の處西藏譯には杖印或は矩吠羅天(Kubera)、或は藥叉とあり。
【九〇】輸羅(Śūla)。勇猛の義、卽ち戟なり。西藏譯には三鈷杵とあり。
【九一】部哆(Bhūta)。鬼類の一種。
【九二】阿修羅(Asura)。譯、非天。西藏譯には、地神妃と阿修羅とあり。
【九三】如來毫相(Tathāgata-tūla)。
【九四】舍惡底(Śakti)。譯、槍。
【九五】輪王佛頂(Uṣṇīṣa-cakravarti)。
【九六】超勝佛頂(Jayoṣṇīṣa)。
【九七】如來眼(Tathāgata-cakṣus)。
【九八】如意寶幢(Cintāmaṇi-ratnaketu)。
【九九】無能勝(Aparājita)。
【一〇〇】耶輸末底(Yaśomati)。譯、名稱慧。
【一〇一】盤坦羅嚩悉泥(Pāṇḍuravāsini)。譯、白處、白住處、

[六五]無垢行菩薩・[六六]彌勒菩薩等の[六七]賢劫の千菩薩を置け。是の如きの大菩薩は縱使說かずとも亦須く安置すべし。その院の南面に[六八]金剛將菩薩、及び[六九]蘇磨呼菩薩・[七〇]頂行菩薩・[七一]摩醯首羅・及び妃・[七二]梵王・及び軍闍羅持明仙王・質怛羅二合迦陀持明仙王・枳利知持明仙王・皤摩尊梟梨持明仙王・蘇盧者那持明仙王・只怛羅二合婆努持明仙王・成就義持明仙王を置け。是の如くの七仙は、縱使說かずとも亦須く安置すべし。その院の西面に、諸の[七三]摩怛羅神・[七四]佉那鉢底神、諸の[七五]羯羅訶神・[七六]羅睺阿修羅王・婆致皤羅二合那陀、及び[七七]遍照阿修羅・[七八]婆素枳等の龍王を置け。是の如き等の諸神は、たとひ說かずとも亦須く安置すべし。その院の東面に、その[七九]帝釋の爲めに[八〇]拔折羅印、及び諸天眷屬并に[八一]淨居天を置け。その[八二]日月天は東西の二面にその印相を安置せよ。圓の曼荼羅を作れ。其色は日は赤く、月は白くせよ。東南方に[八三]火天神の印及び諸仙[八四]藥叉を置け。その南方に[八五]檀荼の印を置け。諸の[八六]餓鬼と與に圍遶せよ。西南方に大刀の印を置け。諸の[八七]羅刹と與に圍遶せよ。その西方に於て羂索の印を置け。諸龍等と與に圍遶せよ。西北方に旗幡の印を置け。諸の[八八]風神と與に圍遶せよ。その北方に[八九]伽馱の印を置き、諸の藥叉と與に圍遶せよ。東北方に[九〇]輸羅の印を置け。諸の[九一]部哆眷屬と與に圍遶せよ。西門の北邊にその下方の瓶の印を置け。[九二]阿修羅と與に圍遶せよ。是の如く護方神并に眷屬を安置せよ。已つて如法に供養すべし。

第二院に於ては、[九三]如來毫相尊。如來[九四]舍惡二合底・[九五]輪王佛頂・[九六]超勝佛頂・[九七]如來眼等を置け。及び[九八]如意寶幢の印并に諸の使者、及び[九九]無能勝を置け。是の如き等の尊を皆悉く佛の左右に安置せよ。[一〇〇]耶輸末底尊・大白尊・[一〇一]槃坦羅二合槃絲泥尊・[一〇二]馬頭尊・[一〇三]一髻尊・[一〇四]多羅尊・徹聲㗚尊・[一〇五]大吉祥尊・圓滿尊等、是の如きの尊を[一〇六]觀自在の左右に置け。[一〇七]金剛鉤尊・[一〇八]金剛拳尊・[一〇九]遜婆明王・軍荼利忿怒尊・般坦尼訖涅二合婆尊・金剛鉾鉢尊・金剛棒尊・[一一〇]不淨忿怒尊、是の如き等の尊を[一一一]執金剛の左右の邊に置け。凡そ一切の曼荼羅を作るには、皆須く是の如き等の尊を安置すべし。その處若し滿た

【六五】無垢行(Vimala-gaṇa)。
【六六】彌勒(Maitreya)。
【六七】賢劫(Bhadrakalpa)。
【六八】金剛將(Vajrasenā)。
【六九】蘇磨呼(Subāhu)。妙臂。
【七〇】頂行(Murdhaṭaka)。
【七一】摩醯首羅(Maheśvara)。譯、大自在。
【七二】梵王(Brahmā)。
【七三】摩怛羅(Mātṛ)。母と譯す、鬼女なり。
【七四】佉那鉢底(Gaṇapati)。歡喜天。
【七五】羯羅訶(Graha)。執と譯す、祟りを作す神。
【七六】羅睺阿修羅(Rāhu-asura)。羅睺。覆障と譯す
【七七】遍照阿修羅(Vairocana-asura)。
【七八】婆素枳龍王(Vāsukir-nagarāja)。譯、廣財子龍王。
【七九】帝釋(Śakra devānām indra)。忉利天の主。
【八〇】拔折羅印(Vajramudrā)。譯、金剛印。
【八一】淨居天。色界の第四禪に不還果を證せる聖者の生ずべき處五地あり。(1)無煩天(Avṛhāḥ)、(2)無熱天(Atapāḥ)、(3)善現天(Sudṛśāḥ)、(4)善見天(Sudarśanaḥ)、(5)色究竟天(Akaniṣṭhaḥ)。
【八二】日天(Āditya)。月天(Candra)。

すべし。これを契印の法と名づく。

ただ[四六]座を置くには、その三部の尊の座は皆圓形に作れ。院と相應せよ。其眞言を誦して中に[四七]一點を置け。自餘の諸尊には、或は圓及び方にせよ各の彼等の眞言を誦して、中に一點を置け。その外院の尊は、但名號を呼び唯一點を置け。亦方圓なし。是の如く畢つて方に奉請を作せ。これを第三の安座の法と名づく。若し急速の事を作さんに、力及ばずんば應に座の曼茶羅を作るべし。或は[四八]一及び二三の曼茶羅の法を作れ。その三部の主には其形像を畫け。餘の諸尊等には但契印を置け。外院の諸尊は唯その座を置け。これに准じて一二三の法を知るべし。これを殊勝の廣略の曼茶羅の法と名づく。その先の所說の形像の法にして、若し具足せざれば卽ち起し難きことあり。最後の第三の處、總て空なれば亦吉と爲さず。中間の契印は過にあらず、空にあらず、最もこれ微妙なり。如法に供養すれば皆靈驗あり。亦復、能くその尊を表することを作し易し。是故に慇懃に應に契印を用ひて曼茶羅を作るべし。

佛の座の下に[四九]無能勝を置き、右に本部の母を置け。假使彼の曼茶羅に於て說かずとも必ず安ぜよ。中に於て若し空處にして尊位無きことあらば、應に一瓶を置くべし。瓶の上に般若經の甲を置き、及び彼の經を讀め、[五〇]觀自在の下に[五一]馬頭菩薩を置け。右邊に本部の母を置け。縱ひ彼に說かずとも亦須く安置すべし。[五二]執金剛の下に於て[五三]軍茶利を置き、右邊に[五四]莽摩計母を置け。その西門の邊に[五五]難陀[五六]跋難陀龍王を置け。曼茶羅の外の西面の一處に、門廂に對して當に[五七]訶利羝母を置くべし。一切の門に於て跋折羅を置き、及び金剛羂索等を置け。隨方の契印は極めて可畏ならしめよ。曼茶羅の第三院の北面には、[五八]摩尼跋多羅將等、及び諸の敬信の[五九]藥叉を安置せよ。曼茶羅の外の東面の一處には、別に佛法僧寶を置いて如法に供養せよ。縱使ひ彼に說かずとも、亦須く安置すべし。曼茶羅の第三院の東面には、[六〇]文殊師利菩薩・[六一]大勢至菩薩・[六二]佛長子菩薩・[六三]虛空藏菩薩・[六四]成就義菩薩・

【四五】吉祥。西藏譯によればSvastika卽ち卍なり。これ卽ち諸尊に通ずる三摩形なればなり。

【四六】第三、座の曼茶羅の法。

【四七】大空點なり。

【四八】一とは形像、二とは契印、三とは座のみなり。

【四九】無能勝(Aparājita)。

【五〇】觀自在(Avalokiteśvara)。

【五一】馬頭(Hayagrīva)。

【五二】執金剛(Vajradhara)。

【五三】軍茶利(Kuṇḍalī)。

【五四】莽摩計母(Māmakī)。

【五五】難陀龍王(Nanda-nāgarāja)。

【五六】跋難陀龍王(Upananda-nāgarāja)。

【五七】訶利羝母(Hārītī)。

【五八】摩尼跋多羅(Maṇibhadra)。

【五九】藥叉(Yakṣa)。

【六〇】文殊室利(Mañjuśrī)。

【六一】大勢至(Mahāsthāmaprāpta)。

【六二】佛長子。普賢菩薩を指すか。西藏譯は佛長子得大勢至とあり。

【六三】虛空藏(Ākāśagarbha)。

【六四】成就義(Siddhārtha)。

畫かば、阿闍梨極めて須く好く能くその形像を畫すべし。一一如法に身分支節必ず應じ、相稱ふて分明に顯現し、院と相稱ふべし。その本法に隨つて形像を說く、瞋と喜と坐と立など一一に相應し具足して作せ。闕少せしむることなくして、その諸の聖尊の像貌を安置せよ。これを形像を畫する法と名づく。若し絕妙に畫せずんば、[二五]應に契印を置くべし。假使能く一切の諸相を畫するも、一一に具足することに成を得べきこと難し。縱作さんと欲ふ者、時分を淹滯して多く形像を作ると、亦復不善にして相貌具せざれば、卽ち靈驗無く、及び成就せじ。是故に當にその契印を置くべし。或は當に唯三部の主の尊の形像を畫いて置くべし。[二五]餘は契印を作せ。[二六]本尊の契印は卽ちこれ佛頂なり。心を以て彼の眞言を持誦せよ。白色を以て觀世音自在の契印を畫け。卽ちこれ蓮華なり。その執金剛の契印は、卽ちこれ[二七]五股跋折羅二合なり。その諸餘の尊は、各の本法に契印を說くに依れ。或は若し彼の本印を獲ざれば、應に部主の契印を置くべし。悉く皆通用す。その諸尊等の所持の器杖に隨ふ、卽ちこれ彼の印なり。是の如く略して諸尊の契印を說かん。疑を懷くことを須ふる勿れ。決定して是の如し。その[二八]嚕怛羅二合の契印は卽ちこれ利き[二九]三股叉なり。その妃の契印は、卽ちこれ鉢置娑鍘なり。その[三〇]那羅延の契印は、卽ちこれ輪印なり。その[三一]摩訶斯那の契印は、卽ちこれ[三二]娑惡二合底なり。その[三三]梵天の契印は、卽ちこれ蓮華なり。その[三四]帝釋の契印は、卽ちこれ[三五]跋折羅二合なり。その[三六]火天の契印は、卽ちこれ火爐なり。その[三七]閻摩の契印は、卽ちこれ[三八]單馱棒なり。その[三九]泥利羝の契印は、卽ちこれ横大刀なり。その[四〇]龍王の契印は、卽ちこれ羂索なり。その[四一]風神の王の契印は、これ幢幡なり。その[四二]多聞天の契印は、卽ちこれ[四三]伽馱棒なり。[四四]摩醯首羅の契印は、卽ちこれ三股叉なり。その地神の契印は、卽ちこれ滿瓶なり。日月の契印は、卽ちこれ圓滿の相なり。諸尊の契印は、卽ち[四五]吉祥等これなり。その印ある所に隨つて、一一に而も作れ。若し形像を畫かば、契印と及び座との三種を具すべし。諸の曼荼羅に、縱使說かずともこれに准じて作

【二五】 二、契印の曼荼羅の畫法を說く。

【二六】 本尊。經には「天尊」とあり。淨嚴師は「天は本歟」と註せり。西藏譯を檢するに、「佛世尊」とあれば師の說當れり。

【二七】 跋折羅二合(Vajra)。金剛杵。今五股杵とあれど西藏譯は三股杵とあり。

【二八】 嚕怛羅二合(Raudra)。忿怒と譯す。

【二九】 三鈷杵なり。

【三〇】 那羅延(Nārāyaṇa)。毗紐天(Viṣṇu)に同じ。

【三一】 摩訶斯那(Mahāsena)。大軍。

【三二】 娑惡底(Śakti)。槍、鋒。

【三三】 梵天(Brahmā)。

【三四】 帝釋(Indra)。

【三五】 跋折羅(Vajra)。金剛。

【三六】 火天(Agni)。

【三七】 閻摩(Yama)。

【三八】 單馱(Daṇḍa)。棍棒。

【三九】 泥利羝(Nirti)。西南方なり。以て西南方に配せる羅刹天を指す。

【四〇】 龍王(Nāgarāja)。今は水天を指す。

【四一】 風神(Vāyu)。

【四二】 多聞天(Vaiśravaṇa)。卽ち毘沙門天王なり。

【四三】 寶棒。

【四四】 摩醯首羅(Maheśvara)。大自在天。

と爲し、炭を黑色と爲し、大小麥の末を以て餘の色と作すべし。若し急速に作す時、及び鬼魅を碎伏し、幷に降伏の法を作すには、應に灰を用ひて曼荼羅を作るべし。諸の彩色には、五鐵と、五寶と、粳米粉との三色を所用の處に隨つて各自ら上と爲す。若し三摩耶曼荼羅を作さんには、應に五鐵を用ふべし。若し灌頂の曼荼羅を作さんには、應に五寶を用ふべし。若し息災を作さんには、應に粳米を用ふべし。若し增益を作さんには、當に石末の色を用ふべし。若し降伏を作さんには、當に其灰を用ふべし。これを彩色の差別等の相と名づく。

東北の角より彩色を下せ。極めて端直ならしめよ。右に遶つて布け。隔斷せしむること勿れ。その色界の道、若し麁細あり、或は復斷絕し、及び齊正ならざれば、種種の難起らん。是故に當に慇懃に色を布すべし。

凡そ諸方の門は要ず中に當つて開け、謂はく量は九分なり。その八分は各の四分を取つて兩邊と爲し、中の一分を取つて開いて門と爲す。その出入の門は、稍闊く作すべし。自餘の諸門は白色の末を以て畫閉を作せ。閉づる所のものは、稍外に向けて曲げよ。或は門印を置いてその門を閉ぢよ。或は護方の契印を置く。[20]中台と及び內院とは、應に五色を用ひて界道を作すべし。その第二院は應に三色を用ふべし。第三の外院は、唯白色を用ひて界道を作せ。その食を著くる院と、行道の院とは、但白色を用ひて界道を作せ。餘の灰を用ひて曼荼羅を作ることあらば、皆これ一道なり。その三重の院は一一に各分けて三道を作せ。縱廣の分量は極めて平正ならしめよ。三部の中の諸の曼荼羅の法に於ては、皆當に是の如くすべし。或は本法所有の分量に依り當に彼に准じて作るべし。應に[21]諸尊等の院を置くべし。更に牛糞を塗り、及び[22]五淨を灑ぎ、明王の眞言を以て香水を持誦し、亦復灑淨して方に尊を畫くべし。[23]その尊を畫くの法は、總じて三種と爲す。一處を取るに隨つて曼荼羅を作れ。一は尊の形像を畫き、二は畫いてその印を作る。三は但その座を置け。[24]若し像を

【二〇】界道の色の差別を說く。內院。第一重なり。

【二一】以下曼荼羅を畫くの法を明す。

【二二】五淨。黃牛の尿と糞の未だ地に墮ちざるものと乳と酪と酥の五なり。

【二三】以下曼荼羅を畫くに、形像と印契と其座との三種の別あることを明す。

【二四】形像の曼荼羅を畫するの法。

供具を置き、持誦して護し、及び灑淨して自ら護身を作し、及び四方を護すべし。正しく日沒の時にその繩を頂戴せよ。若し好相を得ば、歡喜の心を以て起首して法を作せ。或は若し善惡の相を得ずとも、無疑の心を以て三部の諸尊を歸命し、徐徐に法を作せ。或は若數數不善の相現ぜば、必ず成就せじ。起首を須ゆること勿れ。若し强いて作さんには、難を除かんがための故に、當に息災護摩の法を作すべし。蘇及び柴を以て各の[一一]百遍を以て護摩を作せ。佛部の中に於ては、[一二]佛眼の眞言を用ひ。蓮華部に於ては、[一三]耶輸末底の眞言を用ひ、金剛部に於ては、[一四]莽摩計の眞言を用ひて、皆息災の護摩を作せ。然もその莽摩計は、三部の母に通ず。この故に三部に用ふること通ず。

護摩し畢つて卽ち閼伽を獻ずべし。その器をば金を以て作れ、或は銀と、熟銅と、[一五]寶と、木と、石と、瓦とを以て如法に作れ。香水及び白花を以て盛り滿たし。眞言を持誦し、手に閼伽を執つて燒香を以て薰じ、右の膝を地に著け、心に當てて執れ。深き恭敬を以て根本の眞言を誦して、これを奉獻せよ。次に白花と美好の香とを獻ぜよ。諸の曼荼羅の所用の塗香燒香に依れ。[一六]有情の身分及び[一七]紫鑛を用ふること勿れ。但美香を用ひよ。凡そ用ふる所の水は、皆須く淨く漉し及び淸淨なるべし。その塗る所の香及び燒香には、一色の香を用ふるを將に最勝と爲す。その獻する所の花は、水と及び陸との白色と及び香あるを用ふるを將に最勝と爲す。

次に應に弟子を呼び、彼がために護を作し、及び香水を灑ぎ、皆一處に次第に坐せしむべし。その阿闍梨先づ般若を轉讀して、至誠に一切の諸尊に歸命し、及び心に觀じて後、方に起ちて之を畫くことを作せ。その[一八]五鐵を用ひて以て彩色するを最も勝上と爲す。或は[一九]五寶を用ひよ。若し五鐵及び五寶なくんば、卽ち粳米の粉末を用ふ。色の數は前の如し。極めて須く微細なるべし。或は石末を用ひよ。所用の彩色に總じて四種あり。謂く鐵と、及び寶と、粳米と、及び石末となり。凡そ諸の曼荼羅には當にこの色を用ふべし。或は此等の色を辨ぜざれば、應に燒土を用ひて以て赤色

【一一】藏譯によれば百八遍なり。(ナルタン、密部、Tsha帙、八三葉表四行)。

【一二】佛眼(Buddha-locanī)。佛眼佛母。

【一三】耶輸末底(Yaśomati)。名稱慧と譯す。

【一四】莽摩計(Māmaki)。

【一五】藏譯によれば商佉(´an-ka)卽ち螺貝なり。

【一六】有情の身分とは麝香、甲香等なり。

【一七】紫鑛。騏普竭なり。血竭樹の中に蟲あり、唾沫を吐きて固りたる膠なり。

【一八】五鐵。金・銀・銅・鐵・錫なり、之等を極めて細末にして彩色に用ふ。

【一九】五寶。珊瑚・頗梨・金・銀・螺貝、

多分は唯一門を開く。然もその中の院には定んで四門を開く。凡そ出入はその西門を用へよ。或は本法に隨つて出入を說くに依れ。縱ひ是の如く四門を開くものありとも、要ず白色を以てその三門を圍むべし。是の如き三重の院は、一切の曼荼羅に應に是の如く作すべし。餘の圍遶の院も此に准じて知るべし。一切の本尊を內院に置き、その次の諸尊を第二院に置く、その諸の護世天は當に外院に置くべし。これを見都て曼荼羅の法を說くと爲す。或は本法の如く彼に依つて安置せよ。その界道の[九]繩は童女をして搓らしめ、圓く牢く淨潔に、及び堅密ならしめよ。其繩は五色にして白氎及び麻等を用ひて作れ。乳ある木を取りて橛子を作れ。頭は金剛の如くせよ。眞言を以て持誦して、上に向けて小しく頭を出し、打ちて地に入れよ。曼荼羅に於て方に隨つて應に釘つべきこと次第に知んぬべし。繩を放ん時、若し惡相現ぜは成就せじ。その繩若し斷たば尊者必ず死なん。その繩麁細にして圓はずんは卽ち病患あらん。忽ち若し方に迷ふて作法せん時は、弟子皆狂せん。是故に當に善く方所を知りて如法に界道すべし。安宅法の所說の次第の如く彼に依つて法を作せ。その阿闍梨は、先づ僧衆を請じて力に隨つて供養せよ。又復分に處して諸の弟子をして、衆僧を供養せしめよ。或は僧次を請じて供養を作せ。或は如來を供じ、大衆に施すべし。然して後午を過ぎなば、[一〇]菴摩勒等を用ひて尊者及び弟子軍荼利の眞言を持誦して如法に澡浴せよ。澡浴し畢つて新淨の衣を著し、心に軍荼利尊を念じ、諸の供養の具を將ち、大慈心を以て曼荼羅に往け。その辦ずる所の供を如法に具足せよ。諸要ず見るべし。

其阿闍梨は、緣曼荼羅に爲すべき法事に須く純熟すべし。牛糞及び尿を以て曼荼羅を塗り、次に香水を以て四面の地に灑げ。亦牛糞を塗り及び水を灑ち、極めて欣悅ならしめ、諸の名花を散ぜよ。次にその帳幕を以てその所を圍遶し、幢幡を建て遍く圍つて幔を作せ。及び種種の吉祥の資具を以て其處を莊嚴せよ。曼荼羅の北面の一處にして、先づ軍荼利の眞言を以て諸難を辟除し、諸の

【九】金剛線なり。その搓り方は初の縒は右縒りにして、この初縒の三筋を合して一搓となし左に之を縒る。此三合の絲往來九遍を以つて右に縒りて一縷と爲す。これ一色なり。次に是の如く五色を合して大一筋と爲して左に之を縒るなり。

【一〇】菴摩勒(Amlaka)。

摩訶曼荼羅品第七[一]

次に晨朝の時に於て、自ら應に念誦すべし。新淨の衣を著けよ。曼荼羅所用の[二]眞言に於て、先づ須く熟誦すべし。彼の處に詣り、先づ辦事の眞言を以て、香水を持誦して散じ灑げ。還この眞言を以て[三]五色の縄を持誦せよ。好き瑞相を得て方に縄を合はすべし。その五色とは謂ゆる白・赤・黄・青・黒なり。その縄の色の如く[四]綵色も亦然なり。先づ應に三寶と、一切諸尊とに歸命し、及び供養すべし。然して後縄を絣うちせよ。東より起首す。その[五]阿闍梨は東南の角に於て、手に其縄の面を執り北に向つて住す。その縄を執る者は東北の角に於て、面を南に向へて分量を記取せよ。復、彼の人をして右に遶つて西南の角に住き、面を東に向へて住せしむ。その阿闍梨は、本處を移さずして、たゞ右に身を廻はし面を西に向けて住して亦分量を取る。その阿闍梨は自ら亦右に遶つて、西北の角に往き面を南に向けて住せよ。その弟子は本處を移さずして、ただ右に身を廻らし面を北に向へ住して亦分量を取れ。又その弟子も亦應に右に遶つて、東北の角に往き面を西に向へ住すべし。その阿闍梨は本處を移らず、ただ右に身を廻らし面を東に向ひ住して亦分量を取れ。その阿闍梨は東南の角と、及び西北の角に住して二方を量れ。その東北の角と、及び西南の角はこれ彼の弟子の所住の處なり。四方を定め已つて又[六]角絡して量れ。等しく量り。正し已つて、中心に復て量せよ。その中心の上に一橛子を打ち、外の四角も各の一橛を置け。その第二院及び最內の院には、各の四角に於て一橛を置け。內院の量より外院に至つて、[七]半半にして減ぜよ。その院を遶らすには、ただ白色を用ひて一道を界ふべし。夫の曼荼羅に又其三重あり。亦四重あり。亦多重あり。その最外の院には廣く一門を開く。亦是の如く四門を開くものあり。並に[八]門の曲あり。凡そ曼荼羅は、

【一】以下四品所説のは第七日の法なり。
【二】護身。結界等の眞言なり。
【三】五色の金剛線なり。
【四】綵色。綵は綵帛なり。彩畫の色にあらず、五瓶の綵帛の色なり。
【五】阿闍梨と弟子が縄を取つて曼荼羅を作るべき所を測量して四角の位置を定むるなり。
【六】角絡。隅と隅すぢちがへ、卽ち對角線に測量して中心を定むるなり。
【七】若し內院一丈なれば次の院は五尺、第三院は二尺五寸といふが如く次第に二分の一宛減ず。
【八】門曲。亞字の形の如し、その角々に橛を立て、鬼目の所に帛を引くやうに橛を打ち入る。

見、或は僧の所に於て法を聞き、或は餘人の所にて法を聞き、或は法義を決擇することを聞き、或は經典を轉讀することを見、或は衆僧を見、或は一僧を見、或は共に住し、及び語り、或は自ら出家すと見、或は僧伽藍を見、或は尼僧を見、或は菩薩衆を見、或は父母と及び諸の兄弟とを見、或は尊者を見、或は眞言を誦するを見、及び眞言を見、或は明を受得し、或は成就を見、或は律儀を受け、或は樹林と江河と及び海と大山と、及び島とを見、或は國王と仙人と及び婆羅門とを敬信すと見、或は豪富、宰相を見、或は牛馬と犢子と師子と、及び鹿と[二〇]吉祥鳥とを見、或は金及び諸の珍寶を得と見、或は[二一]地藏の種種の財物と、及び淨衣服とを見、或は諸の穀と、器杖と、花果と、諸の嚴身の具とを見、或は乳粥を食し、或は童男と童女と端正の婦人を見、或は友に交はるを見、或は與に共に語すると見、或は灌頂を蒙け、或は[二二]軍持を得、或は陣に於て勝つことを得、怨敵を殺害し、或は親情の眷屬が一處に集會すと見、諸の天神と山に登り、象と車輅とに乘りて高樓閣に上るを見、諸の奇異の相を見、或は護摩及び諸の善事を作すを見、或は河を渡り及び大坑を超ゆるを見、亦惡賊を決し、相撲し、叫喚し、種種に遊戲し、諸の縱事を作し、及び諸の吉祥の善夢あらん。或は眞言の法則を聞き、或は節日を見、又善人を見、或は讚嘆を蒙り、又向に起首して成就の法を作すを見、亦他をして作さすと見ん。是の如き等の夢あらば、應に吉祥なり成就せんと知るべし。若しこの相に反せば、卽ち棄捨すべし。若し善夢を見ば、准じて成就を知れ。若し惡相を見ば、成就せずと知るべし。この故に應に不善の夢相を棄つべし。見る所の夢の上中下品に隨つて、成就を獲得することも、此に准じて知るべきなり。[二三]是の惡を見ると雖も、將いて入れんと欲はば、應に寂靜の眞言を以て牛蘇を護摩すべし。經ること百遍を以てせよ。卽ち災障を除いて便ち淸淨を成ぜん。憐愍するを以ての故に意に隨つて將い入れよ。

【二〇】吉祥鳥。鳳凰なり。

【二一】地藏。地藏尊にあらず、埋藏なり。

【二二】軍持(Kuṇḍi)。澡瓶。

【二三】惡夢を見たる者を引入する場合を明す。

を持誦せよ。應に彼の瓶を用ひ持誦して灌頂すべし。その弟子等をば面を北に向けて坐せしむ、次に弟子に前に辦せし[一四]齒木を授與して、還面を東に向け坐して齒木を嚼ましむべし。嚼み已つて碎くこと勿れ。左右の側邊に擲ぐること莫れ。直く前に向つて擲ぐるべし。その嚼みし所の頭、或は身に對向し、及び上に向いて竪たば、應に上の成就を得ると知るべし。若し嚼める頭、身に背きて東に向はば、應に中の成就を知るべし。若し北に向はんもの、及び餘の方に横に墮ちなば、應に世間及び出世間の成就を得ると知るべし。若し嚼める頭、地に著きて直く竪たば、應に修羅宮に入ることを成就すと知るべし。その相を知り已んなば、その諸の弟子還つて前の如く坐せよ。その阿闍梨、辦事の眞言を用ひ、前に辦ぜし所の[一五]水を持誦して、各の三たび掬ひ取りて、與へて之を飲ましめよ。飲み已つて然して後、外に出でて口を漱がしめよ。次に卽ち、更に復供養せよ。手に香爐を執り、至誠の心を以て[一六]諸尊を召請せよ。初に曼荼羅主の眞言を持誦すべし。應に是くの如くの眞言を以て召請すべし。某甲の明王大尊に歸命したてまつる。我今、明日大慈悲を以て曼荼羅を作らん。弟子を愍まんが爲の故に、及び諸大尊を供養せんが爲の故に。唯願はくは諸尊、我が心を照知して降つて加被し給へ。一切如來の諸佛大悲を具し給へる者と、羅漢と、菩薩と、諸の眞言主と、諸天善神と、及び護世神と、大威の補多と、及び佛に歸依す天眼ある者よ、悉く皆憶念し給へ。我某甲、明日某甲の曼荼羅を作つて、力に隨つて供養したてまつらん。唯願はくは諸尊等、弟子及び我を憐愍せんがための故に、皆この曼荼羅の處に降つて、加被を作し給へ。是の如く三請して、至誠に禮拜し、妙[一七]伽陀を以て諸尊を讃嘆して、然して後發遣せよ。

[一八]吉祥と不吉祥の相を分別して、次に卽ち諸の弟子のために、願欲に相應する正法を說くべし。然して後に、敎へて頭面を東に向はしめ、茅草を敷きて臥せしめよ。天明けて起き已らば、阿闍梨は應に彼等に善と不善の夢を問ふべし。[一九]所謂夢に如來の具功德海の制底と、尊容とを見、及び供養を

[一四] 印度にては客を請じて饗應せんとする時は先づ齒木卽ち香花を以て莊飾したる揚子を出す、客之を噛むことによりて口中及び腹中の邪氣を拂ふ。今弟子を入壇せしむるに先立ち齒木を與ふるは此世俗に順ずるものなれど、これ弟子の心中を淸むるが爲なり。卽ち之を噛ましむるは煩惱を嚼み碎くことを表するものなり。後投げて落つる所によつて弟子の悉地の成就を占ふ。

[一五] 金剛誓水といふ。之を飲むは菩提心堅固にして退轉せざることを誓ふなり。

[一六] 諸尊壇上に降臨せられんことを召請す。

[一七] 伽陀(Gāthā)。頌と譯す。

[一八] 正しく灌頂を授けんとする前夜弟子に說法し、臥床せしめ、翌朝彼等の見し夢を聞き、それによつて弟子の悉地の成と不成、或は上中下何れの悉地を得るかと夢を判ずるなり。

[一九] 以下好夢の相七十八種を說く。

凡そ曼荼羅に入る者に、總じて三種の所求あり。一には謂はく、眞言を成就せんが故に、二には謂はく、罪を滅し福を獲るが故に、三には謂はく、來生に果を求めんが故なり。若し來生に果を求めんがための故に、以て信心を起し曼荼羅に入る者は、但に來世の果法を成就するのみならず。亦現在に於て安樂を獲得せん。若し現在に安樂を求むるが爲にする者は、彼の人の未來の果を求むるに如かず。是故に知者は未來の果の爲に曼荼羅に入らば、卽ち二世の安樂の果報を獲得すべし。應に[三]受持する所の弟子の數は、或は一、或は三、或は七、乃至二十五隻なるべし。雙に取ることを得ず、更に已上をも得ざれ。その諸の弟子にして、互相に諍ふことあると、及び怨心を懷くをば攝受すべからず。彼等皆悉く、互相に歡喜し、調伏し、寂靜にして、尊者の所に於て敬心の心あり、善因を生ぜん者、是の如き弟子をば方に攝受すべし。

[四]其召請の日、弟子等をして乳粥を喫せしめよ。皆一食を爲せ。及び律儀を受け、新しき淨衣を著し、皆面を東に向けて坐せしめ、弟子等がために召請の法を作せ。先づ護身を作し、次に[五]三歸を受け、菩提心を發さしめよ。若し已に發さば重ねて更に憶念せしめ、[六]忿怒の眞言を以て香水を持誦し、各のその頂に灑げ、復手を以て其頂上を按して、各の誦すること七遍せよ。香を以て手に塗り、復心の上に安し、各の明王の眞言七遍を持誦せよ。[七]輪王佛頂の一字の眞言は、これ其佛部の明王なり。[八]馬頭大尊の十字の眞言は、これ蓮華部の明王なり。[九]嚩婆忿怒の眞言に[一〇]吽發の字あらば、これ金剛部の明王なり。その[一一]軍荼利尊は、通じてこれ三部の明王なり。諸難を碎くが故にと密迹主の說なり。

次に復、手を頂上に按じ辦事の眞言を持誦して、還つて復水を灑ぎ燒香を以て薰ぜよ。その[一二]灌頂せんと欲する瓶に、五穀等の物を置き、及び花の枝を著し少し許りの水を入れ、明王の眞言を以てその瓶を持誦せよ。[一三]閼伽を奉獻し香を薰じて召請せよ。正しく曼荼羅を作す日に、三時にその瓶

【三】入壇せしむべき弟子の數を明す。
【四】弟子を攝持する法を明す。
【五】三寶に歸依する三歸戒なり。
【六】軍荼利忿怒の眞言。Oṃ kili-kili vajra hūṃ phaṭ.
【七】輪王佛頂(Vijayoṣṇīṣa)の一字眞言Bhrūṃ。
【八】馬頭大尊(Hayagrīva)。大力持明王馬頭觀音なり。
【九】嚩婆(Sumbha)。降三世明王の異名。
【一〇】吽發(Hūṃ phaṭ)。魔障を摧破する力用あるものにして降伏法の眞言の終りに此句を附加す。
【一一】軍荼利(Kuṇḍali)。忿怒明王。
【一二】瓶の中に五寶等を入るゝなり。
【一三】閼伽(Argha)。佛に奉る水、香花を入れたる香水なり。

に供ずる薪、蘇油、五穀等は行者内心の煩惱を表したるものにして、之を如來の智火によつて梵燒する義なり。本經に護摩を説く所五箇所あり。今は其の第一なり。

揀擇弟子品第六

※初に弟子を揀擇すべし。然して後方に受持すべし。謂ゆる族性の家に生れ、清淨無畏にして深く正法を樂ひ、信を具し能く忍び、勇猛精進にして心に大乘を求め、我慢を懷かず、顏貌に相あり、盛年端正にして、具さに諸論を解し、智慧具足し、正直にして調伏し、能く歸する者を攝し善言を以て德に懷けん。その弟子等にして此相を具せば方に攝受すべし。法則を具せざれば、諂曲し猛害し、恒に麁惡の語をなし、因果を撥無し、常に不善を樂ひ、愚癡我慢にして智無く、多言し、下賤の家に生れ、諸相具はらず、或は支分を加し、極めて長く、極めて短く、極めて肥え、極めて瘦せ、心に具を破せんことを懷き、眼目常に赤く、面貌畏るべく、分に超えたる形色あつて、支分不祥ならん。復善相なく、外相順ならず、内に德行無く、穢族に生れ、惡業の事を作し、疥を病み、信ずること無く、男を婬し女を婬し、酒に耽り、博戲し、極惡の性と行とあらん。その諸の弟子にして、若しこの相あらば、必ず遠離すべし。深く三寶を信じ、律儀戒を具し、深く大乘を信ずるをば、應に攝受すべし。身に過患無く、内に諸德を懷き、病無き族性にして、信を大乘に具し、堅く大願を持せん。是の如きの相を具足せるは、甚だ得べきこと難し。この故にただ三寶に敬信の心あつて、深く大乘を願ひ、復福德を求めん、當に是の如きの弟子を攝受すべし。若し此法を渇仰して、常に勤めて[一]善逝の眞言を念誦するを見ば、假使身に善相無く、及び内に福德無しと見るも亦攝受すべし。但[二]四部の衆若し本戒を具し、及び大乘を信ぜば、亦應に攝受すべし。

※本品は攝受すべき弟子の好相と、遠離すべき弟子の惡相を説く。

【一】善逝(Sugata)。諸佛十號の一。

【二】四部衆。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷をいふ。

[一]召請品第五

次に應に[二]召請の法を作すべし。[三]一日已前に晨朝に於て日出を看、方に衣を著し、記するに心を以てして[四]諸尊の座位を布置せよ。その本法所說の飲食に依つて、如法に淨潔にして意に愛樂する所を、自と及び弟子その食を喫すべし。日沒の時に澡浴し淸淨にして、淨き白衣を著け、弟子と與に諸の供具を持して、前に淨めし曼荼羅の所に詣れ。次に中央に[五]白檀の塗香を以て、圓の曼荼羅を作す。量は[六]十二指にして曼荼羅の主の座と爲るが故に、即ち手を以て上を按じて、彼の眞言一遍を誦せよ。一たび誦して一たび按じ乃至七遍せよ。[七]次に復、心に念じ及び名號を稱へよ。諸大尊にも亦前の如きの香曼荼羅を作れ。各の部心の眞言を以て奉請して、諸の香華乃至飯食を加持して供養し、部心の眞言を用ひて召請を作せ。復淨水を取りて共塗香に和し、亦名花を散じ、香を以て薰じて持誦せよ。[八]先づ須く[九]優曇婆羅木或は[一〇]阿修他木を備具すべし。病無くして蟲の食すること無きものを取つて齒木を作れ。量は十二指にして麁からず細からざれ。香水を以て洗ひ已つて其木の根頭に白線を以て花を纒へ。復香を以て塗り及び香を燒きて薰じ、手を以て木を按じて部心の眞言を持誦せよ。誦すること數多遍し或は七遍せよ。弟子の數に隨つて木の數も亦然なり。皆須く一向に根頭を齊しく置くべし。[一一]其小さき頭を嚙み、須く如法に護身し、及び弟子幷にその處を護し、次第に供養せよ。然して後諸の薪木を用ひ、兩頭を[一二]蘇に揾し及び胡麻を蘇に和して[一三]護摩せよ。次に中ごろは但蘇を用ひて護摩を作せ。最後には酪飯を護摩とせよ。初に難を碎伏せんが爲の故に、應に降伏の護摩を作すべし。次には自の增益の爲の故に、部心の眞言を以て增益の護摩を作せ。然して後寂靜の眞言を以て息災の護摩を作すべし。

【一】本品及び次の揀擇弟子品は第六日の法なり、本尊並に諸尊を召請し、弟子を護持するための齒木の法、並に降伏、增益、息災の護摩を爲すことを說く。
【二】本尊を壇上に勸請する作法なり。
【三】白檀曼荼羅を作りて。正しく灌頂をする第七日の前日なり、
【四】心の中に壇に畫くべき諸尊の位置の見當をつく。
【五】本曼荼羅を畫く前方便たる試費、白檀曼荼羅なり。
【六】十二指。尺度の量にして、俱舍十二によれば七麥が一指節、三節が一指、二十四指が一肘なり。頌疏に一肘は約一尺八寸とあるより推せば、一指は約七分、故に十二指は約八寸五分なり。
【七】本尊を奉請する法。
【八】齒木法。
【九】優曇婆羅(Udumvara)合歡木の類なり。
【一〇】阿修他(Aśvattha)。白楊樹なり。
【一一】齒木の作り方は、木の根の方を細く削り木の末を太くす。今小さき頭とは末太き方なり。
【一二】蘇油(Ghṛta)。
【一三】護摩(Homa)。燒と譯す。不淨を燒く義なり。護摩

べし。是故に慇懃に其徴相を觀じて、方に作法すべし。

淨地品第四

次に淨地の法を說くべし。曼荼羅を作らん時には、[一]七日已前にその地に往いて、[二]如法に身を護り、及び弟子を護り、[三]地神と及びその地とに供養し、已つて方に起つて[四]地を掘れ。地の過を除去せよ。若し過を去らずして法を作さば、必ず成就せじ、是の故に當にその地の骨・石・炭灰・樹根・蟲窠及び瓦礫等を除き、盡く去つて淨らかたらしむべし。次に當に細かにその掘りし所の上を擣ち、還其の處に塡めて、打ちて堅實ならしめよ。[五]復牛尿を以て散し灑ぎて潤ふし、灑ぎ已つて還打ち、搥つて平正ならしむること猶し手掌の如くなるべし。次に[六]牛糞を以て水に和して、東北の角より右に旋つて泥れ。[七]復中心に穿つに小坑を以てして、[八]五穀及び[九]五種の寶、[一〇]五種の藥草を持誦して、坑の中に安じ、還平正ならしめよ。是の如く寶を置き及び淨地し已つて、[一一]次に當にこの地を受持するの法を作すべし。又三日以前に各の[一二]本部の辦事の眞言を用ひて香水を持誦せよ。[一三]日沒の時に於て用ひて其の處に灑げ。[一四]次に右手を以て其地の上を按じ、曼荼羅主の眞言を持誦して、心を以て受持せよ。これを地を受持する法と名く。[一五]次に復、辦事の眞言を以て弟子を受持すべし。[一六]童女を用ひて線を合はせしめ、辦事の眞言を以て各の持誦すること七遍して、心を以て一一の弟子を觀念し、及び名號を稱して更に受持し、誦すること七遍す。一誦一結し乃至七結せよ。是の如く弟子を受持せば諸の障難無からん。

【一】凡そ曼荼羅を建立して弟子に灌頂を授くるに七日間を要す。これを七日作壇の法といふ。以下之を明すものにして、今は第一日の作法なり。
【二】(1)阿闍梨自身を加持して清淨ならしむる自身加持の作法を指す。
【三】(2)曼荼羅を築くために地神より其地を貰ひ受くる驚發地神の作法を指す。
【四】(3)地を掘りて瓦石、骨、毛髮等の地の過を除く。
【五】(4)塗壇。壇を堅實ならしむるために牛尿と牛糞とを塗る。
【六】印度にては古來牛は神聖なる動物とす、從つて彼の尿及び糞も清淨なりとし、之等の未だ地に落ちざるものを用ふるなり。
【七】第二日の埋寶。
【八】五穀。油麻、大麥、小豆、小麥、粳米。
【九】五寶。金、銀、玻璃、商佉、珊瑚。
【一〇】五藥。石菖蒲、天門豆赤箭、仁參、茯苓。
【一一】第三日。
【一二】佛部は最勝佛頂。蓮華部は大吉祥明。金剛部は軍荼利明王なり。
【一三】第四日、壇上を洒淨す。
【一四】第五日、眞言を以て其地を結界加持する持地の作法。
【一五】第六日、弟子加持。
【一六】金剛線を作る絲縷の作法なり。

これを都て一切の曼荼羅を作す法と名づく。或は本尊の進止を用ひ、或は本法に於て作し訖り、或は事の相應と及び日月蝕、并に異相現ずるには悉く皆通じて作せ。若し此時に違して曼荼羅を作さば必ず成就せじ。たゞ是の一切の大曼荼羅は、晝日に起首して作すこと勿れ。若し晝日に作さば大苦惱を獲ん。日沒の時に作すべき事は、中夜に作すこと勿れ。本時に違するが故に種種の難起らん。自餘の諸持はこれに准じて知んぬべし。夜分の時に於ては、諸事寂靜にして作法するに驗あり。是故に夜に於て三摩耶等の大曼荼羅を作すべし。又日沒の時に於ては、諸天集會し作法の處を觀視して威を彼の人に加ふ。是故に夜に於て曼荼羅を作すべし。日沒の時に如法に起首して、諸尊を奉請せよ。即ち來降し赴きて彼の人を益せん。其本時を取り、教に依つて作せ。好宿日を用ひ誠心に奉請すれば、諸尊來降し赴いて所求の願を成ぜん。その月宿に於て[40]、太白星[41]、勿離訶娑婆羝に直らば、預め直に吉祥及び增益の事の曼荼羅の法を作すべし。若し猛害と及び降伏の事の曼荼羅を作さんには、還自餘の猛害の曜直とを取りて、彼の事法を作せ。[42]鬼宿直に於て是の如き等の吉祥の宿直を取つて、還吉祥增益の曼荼羅の法を作せ。若し猛害と及び降伏との事を作さんには、還取つて彼の損害の宿直に依り、その婆尾跢利[43]須庾。微誓夜須庾上。補瑟二合拏須庾。相跛二合娑跢須庾。皤嚕醯儞須庾。婆跛須庾。蘇波怛羅二合須庾。皤嚕拏須庾。皤羅二合訶摩須庾。蘇迷藥二合須庾。忙揭羅須庾。楞比計沙拏須庾。鉢羅二合闍鉢底須庾。阿反濕二合尼須庾。味跢喇二合須庾。輸羅須庾。阿摩羅須庾等、是の如きの吉祥の須庾を取り、還吉祥增益の事を作せ。若し惡宿のものを取らば、必ず成就せず。是の故に當に吉祥の時日・宿曜・須庾を取り、及び徵祥を觀ずべし。若し善相現ぜば方に起首すべし。若し不善ならば即ち作すべからず。假使その猛畏及び降伏の事を作すとも、還好相を取つて方に起首すべし。何に況んや吉祥の事に、相ゝ看さらんや。その先相に隨つて即ち成就と不成就とを知る

【三九】發遣。修法終ると同時に本尊を本土に歸還を請ふなり。

【四〇】太白星。七曜の中の金星(Śukra)。

【四一】勿離訶娑婆羝(Bṛhaspati)。七曜中の木星。

【四二】鬼宿(Tiṣya)。二十八宿中の南方七宿の一。

【四三】須臾。牟呼栗多(Muhūrta)の譯にして時の名、一晝夜を三十須臾に分つ、今擧ぐるは其等なり。

つて【三三】七箇月の內に法事を作すべし。或は其國及び時節を觀るに、幷に利益あらん、或は其時を觀るに諸の障難無く、種種の德を具し、及び弟子渴仰の心あらば、縱ひ雨時に於て亦通じて曼荼羅の法を作すことを許す。作法の時に塗香・花鬘及び燒香・飯食・燈明・護摩との是の如き六種は、縱ひ自餘等の物を辦ずることを獲ずとも、必ずこの六種の物をば闕かすべからず。若し闕かさば却つて損せん。上の日に違し、及び惡日幷に惡國を以ひ、其法に依らざれば必ず曼荼羅の法を作すべからず。若し強いて作さば、當に損すべきこと疑無し。如上の所說の七箇月の中には、當に【三四】黑白の十五日と及び十三日と、或は白月の十一日と、十日と、一日と、五日と、七日と、三日とに於てすべし。この十種の吉祥の日に於て、應に勝上の曼荼羅を作すべし。縱ひ黑月に於ても十五日と、及び十三日とには亦通じて勝上の曼荼羅を作せ。若し佛部の曼荼羅を作さんは、應に白月の十五日を用ふべし。若し蓮華部の曼荼羅を作さんには、白月の五日と、十日と及び十五日を用ふべし。若し金剛部の中の阿修羅宮に入ると、及び猛利の事法と、幷に諸の忿怒曼荼羅とを作さんには、當に前に說ける黑月の吉日を用ふべし。【三五】誓哆羅月と、及び毘舍迦月とのこの二月に於ては應に摩訶曼荼羅を作るべし。或は供養すべき等の具を辦ずるに闕少すること無く、或は大信を發すの時、或は成就を作し、及び上事を作さんと欲はば、卽ち當に摩訶曼荼羅を作すべし。或は其時を觀るに諸の障難無く、諸の華及び供養に豐足ならば、亦應に摩訶曼荼羅を作すべし。或は阿闍梨その弟子を見るに、法器と爲するに堪へ、或は久しく承仕して【三六】尊者の意に稱はば、應に摩訶曼荼羅を作すべし。或は日月の蝕の時、或は希奇の異相現ずる時、或は【三七】神通月の內に於ける等、是の如きの時には皆悉く通じて大曼荼羅を作れ。

【三八】若し息災の曼荼羅を作さんには、日沒の時に起首して作法せよ。若し增益の曼荼羅を作さんには、日出の時に起首して作法せよ。若し降伏の曼荼羅を作さんには、日午の時に起首して作法せよ。然

名とせるなり。由來は比丘が安居竟りし翌日より三十日間他より供養をうけたる迦絺那衣(Kaṭhina)を受くべき時なれば之を以て月に名けしものなり。

【三二】毘舍迦(Vaiśākha)。二月十六日より三月十五日までをいふ。

【三三】七箇月。九月十五日より三月十五日なり。

【三四】黑白。黑月、白月なり。印度の曆法は月の盈缺を以て一ケ月を白黑と分つ。卽ち白月(Śuklapakṣa)は月の盈より滿に至る一日より十五日までを言ひ、黑月(Kṛṣṇapakṣa)は十六日より晦日までをいふ。

【三五】誓哆羅(Caitra)。星の名なり。此星正月に現ずるを以て正月を誓哆羅月といふ。

【三六】尊者。傳法の阿闍梨を指す。

【三七】神通月。正月と五月と九月をいふ。

【三八】以下三法起首の時、卽ち曼荼羅を建立 るに用ふる時刻を明す。

故にたゞ平正潤澤にして、東北に賖に側近に水の饒きと、及び樹林あらん、意の所樂ふ處にして、その地の過を離れて亦障難無からん、是の如きの處にして曼荼羅を作るべし。皆成就することを得ん。[二二]若し聖跡と牛の所居の處と、巖窟の中及び山の頂上と、先に淨めし所の地、亦は窟の上と幷に石の上と、或は制底の邊及び壇墠の上、諸の江河の邊等、是の如きの處に於て曼荼羅を作らば、地を堀ると及び治打することを須ひず。高下等の過を疑ふ勿れ。その地勢に隨つて掃治して、水を灑ち手を以て[二三]其地を按じ、及び眞言を誦せよ。卽ち清淨ならん。或は曼荼羅を作る處に於て、その地の過あつて除くことを得ざれば、たゞ眞言を以て清淨に作せ。亦成就を得ん。若し急速の事を作さんと曼荼羅を作り、鬼魅の所著を避除し、幷に自身灌頂の曼荼羅を作るには、細に其地を揀ぶことを須ふる勿れ。宜しきに隨つて作せ。都て[二四]枳利枳利忿怒の眞言を以て、香水を持誦して其地を洗灑し、及び灑ぎ亦淨め以て淨地と爲せ。

[二五]若し佛部の中の無能勝等の曼荼羅を作らんには、應に[二六]最勝佛頂の眞言を以て淨地の法を作せ。若し蓮華部の曼荼羅を作らんには、應に[二七]吉祥明を以てし、或は悉く[二八]濕嚩引縛上訶明を以て淨地の法を作せ。其最勝佛頂と、濕縛去縛上訶と、及び[二九]軍荼利との此等の三尊は、各の本部の呪と爲す。是その能く諸事を辨ず。この故に一切の事に於て此眞言を用ふべし。一切の事とは謂はく淨地の法と、及び護身と、弟子を加被すると、諸難を辟除すると、香等を清淨にするとなり。此等の事に於て悉く皆通用す。或は本法の所說に依つて、當に之を用ふべし。

[三〇]迦喇提迦の月より[三一]毘舍迦滿月まで、その中間に於て如法に曼荼羅を作せ。若し鬼魅を辟除し、及び毘那夜迦を避くることを作し、或は本尊の進止を得、成就を作さしめんと欲はば、是の如き等の事、假使雨時なりとも應に此等の曼荼羅を作すべし。若し弟子に灌頂する曼荼羅と、及び許すに傳法と幷に三摩耶と、及び增益最勝成就と、是の如き等の曼荼羅を作さんには、卽ち彼の時に依

【一六】下等。降伏法卽ち金剛部の曼荼羅を指す。

【一七】金剛鉤(Vajrāṅkuśa)。

【一八】執金剛(Vajradhara)。

【一九】毘那夜迦(Vināyaka)。常隨魔、障礙神と譯す。人身にして象鼻あり、常に人に隨侍して障難を爲す惡鬼神なり。

【二〇】軍荼利(Kuṇḍali)。

【二一】避縛。辟除結縛の義にしてさきの除避明王なり。

【二二】以下は第一日水壇の法を明す。

【二三】地神を驚發するなり。

【二四】枳利枳利(Kili kili)。軍荼利忿怒明王なり。

【二五】以下三部各の辨事の尊を明す。

【二六】最勝佛頂(Vijayoṣṇīṣa)。胎藏界曼荼羅釋迦院の釋尊左第三位に居す。轉法輪の德を司る。

【二七】吉祥明。大吉祥明(Mahā-śrī-vidyā)、胎藏界曼荼羅の蓮華部院に在り。

【二八】濕嚩嚩訶明(Śivāvaha-vidyā)。寂留明と譯す。同じく胎藏曼荼羅蓮華院に居す。

【二九】軍荼利(Kuṇḍali)。

【三〇】以下曼荼羅を起作する時分を明す。

【三一】迦喇提迦(Kārttika)。九月なり。唐には昴星と云ふ。每年九月十五日に月は昴宿に臨む故にこの星を取りて月の

吉ならず。或は處所あらんに、前の過無くして周邊に樹あり、花果豐足に枝葉欝茂し、乳ある樹に足らんには、曼荼羅を作れ。亦吉祥と爲す。地に諸德を具し、周邊に樹あり、近くに流水あらば、この地最勝なり。若し[四]息災を作さんには、當に白色の地に曼荼羅を作れ。若し[五]增益を作さんには、赤黃の地に曼荼羅を作れ。若し[六]降伏を作さんには、黑色の地に曼荼羅を作れ。山の頂上に或は牛の居せし處に、或は[七]制底に於てか、或は佛堂あるか或は舍利あらんには、是の如き等の處に卽ち息災曼荼羅の法を作せ。[八]恒河の邊に、或は蓮池に、或は[九]壇墠の上に、或は海邊に於ては、應に增益の曼荼羅の事を作すべし。その[一〇]塚間に、或は諸の[一一]魔跢羅天の祠に、或は空閑の處に、或は空室に、或は荒穢の處に於ては、應に降伏曼荼羅の事を作すべし。

[一二]八大塔及び聖迹、或は意樂の處、或は淸淨の處、或は山頂等、是の如きの處には應に[一三]上成就の曼荼羅を作るべし。或は開敷せる蓮華の池の中に、鵝雁遊戲する側近の處には、應に[一四]求財及び餘の富貴、諸の吉祥成就の曼荼羅を作るべし。山の側、或は山谷、或は山峰、或は巖窟等に於ける、是の如きの處には、[一五]修羅宮に入ることを成ぜんが爲の故に、應に[一六]下等の金剛曼荼羅を作るべし。龍池の邊、或は山峰、或は神廟等、是の如き處に於ては、著する所の鬼魅を碎伏せんが爲に、應に[一七]金剛鉤の曼荼羅を作るべし。大道の衢上、或は制底、或は[一八]執金剛の前等、是の如き處に於ては、[一九]毘那夜迦に著せられたる者を辟除せんが爲の故に、應に[二〇]軍荼利の忿怒曼荼羅を作るべし。八大塔と及び大聖跡等に於ては、應に佛部の中の無能勝等の諸の勝上の曼荼羅を作るべし。蓮華池の邊に於ては、應に蓮華部中の善住等の諸の勝上の曼荼羅を作るべし。山の頂上に於ては、應に金剛部の[二一]避縛等の諸の勝上の曼荼羅を作るべし。

已に廣く是の如き等の處を分別せり。亦須く三種の差別を分別すべし。或は若し是の如きの勝れたる處を獲ざれば、卽ち得るに隨ふ處にて曼荼羅を作るべし。具足せる勝上の處を得難し、是の

【四】息災(Śāntika)。佛部の修法にして苦難を止息するために修す。下に說く上成就の法なり。

【五】增益(Puṣṭika)。蓮華部の修法。物を增長せしむる、卽ち福德繁榮を祈る法にして中成就の法。

【六】降伏(Abhicāra)。或は調伏ともいふ。金剛部の修法。惡鬼、惡人を折伏するために修す。下成就の法なり。

【七】制底(Caitya)。譯、塔。

【八】恒河(Gaṅgā)。河の名。

【九】壇墠。河或は湖のほとりの低き平らかなる場所。

【一〇】塚間。墓場。

【一一】魔跢羅(Mātala)。

【一二】八大塔。佛陀の聖跡なり。一、佛生處(迦毘羅城龍彌儞園)。二、成道處(摩迦陀國泥連河)。三、轉法輪處(迦尸國波羅奈城鹿野園)。四、現神通處(舍衞國祇陀園)。五、從忉利天下處(桑伽尸國曲女城)。六、化度分別僧處(王舍城)。七、思念壽量處(毘耶離城)。八、入涅槃處(拘尸那城)。

【一三】上成就。息災法卽ち佛部の曼荼羅なり。

【一四】求財富貴。增益法卽ち蓮華部なり。

【一五】修羅宮。阿修羅(Asura)法を修して得る悉地。此宮に入れば非常なる長壽を得。

のものに惠施し、明かに大[九]手印等の一切の諸印を解し、及び曼荼羅を畫くの法をば解し、又念誦及び供養法に明らかなり。是の如き等の一切の法事を具し、[一〇]內外の明を學し已つて曼荼羅を作るべし。

【六】受明の阿闍梨亦は隨行の阿闍梨とも名づく。一印一明を授くる受明灌頂。
【七】傳法灌頂都法の師位にして、諸尊の覺位に登りて嫡々相承の秘法を弟子に附屬する最上の灌頂なり。
【八】灌頂(Abhiṣeka)。諸佛大悲の甘露の法水を弟子の頂に灌ぎて佛果を證せしめ、諸佛嫡々相承の秘璽を授くる秘法なり。
【九】手印(Mudrā)。諸佛の內證三摩耶を具體的に五指によつて表象せるもの。

揀擇地相品第三[一]

我今次に、[二]地相の善惡と、曼荼羅を作るべきと作るべからざるの處を說かん。謂はく高下の所、荊棘と碎けたる髑髏の片あると、崖・坑坎・枯井・枯池とに近きと、饒く樹根あると、及び蟲窠あると、鹹鹵なると、炭灰あると、石と瓦礫饒きと、自然に乾きたる土と、幷に髮と蟲饒からん、是の如き等の地に於ては、應に一切の事を遠離すべし。諸の曼荼羅は平正の地に於てすべし。清淨潤澤にして前の如きの過を離れて、東北の方に於て其地少しく下らん。是の如き等の處に曼荼羅を作れ。又吉祥なりと爲す。先づ其地を掘り、深さの量は一肘にして、還その土を以て其處を塡めよ。土若し餘りあらば當に好き處なりと知るべし。必ず成就することを得ん。若し此に反せんもの及び前の過あらんには、卽ち作るべからず。若し強いて作さば、たゞ成ぜざるのみならず亦己身を損せん。

[三]復その地あらんに、前の如きの過あること無く、周邊に水あらば速かに成就を得ん。水無くんば

座位等なり。
【四】眞言(Mantra)。佛菩薩の內證本誓を如實に說きたる梵語。
【五】佛部・蓮華部・金剛部一切の諸尊法。
【一〇】明(Vidyā)。因明・聲明・醫明等の內道外道の學問。

【一】本品は曼荼羅を建立するには如何なる土地を撰擇すべきか、且又其中に就て修する法によつて差別あり、又曼荼羅を起首するには月と宿曜と時間の吉祥なるものを擇ぶべきことを明す。
【二】先づ場所の善惡、地質、地勢を擇び、且つ土地を掘りて適不適を撿することに就て說く。
【三】以下適所の土地の內更に周圍の狀態の吉祥なるものを述ぶ。且つ三種法造壇の場所を擇ぶ。

蕤[一]呬耶經　亦名玉呬耶經

大唐大興善寺開府儀同三司試鴻臚卿三藏和尚奉　詔譯

卷の上

序[二]品第一

我今、當に通じて一切を攝して、[三]曼荼羅を作る祕密の次第を説くべし。廣略大小は總てこの經にあり。諸の[四]佛部の曼荼羅の中に於ては、[五]無能勝明王の曼荼羅を上首と爲す。蓮華部の曼荼羅の中に於ては、[六]善住明王の曼荼羅を上首と爲す。金剛部の曼荼羅の中に於ては、[七]除避明王の曼荼羅を上首と爲す。我今、都て彼等の三千五百の曼荼羅の中の次第の法を説かん。この故に當にこの經法によつて、一切諸の曼荼羅門を作るべし。

[一]阿闍梨相品第二

我今、當に[二]阿闍梨の相を説くべし。廣く諸法を解し、具戒正直にして慈悲あり、能忍にして淨信あり。正念にして加々威德ありて非人を懼れず、辯才無礙にして衆に處するに畏なく、聰明なる智惠あつて善く方法を解し、諸根を調伏して能く歸する者を覆み、復善巧あつて深く大乘を信じ、經典を愛慕し普く祕密眞言門を學び、並に一切の曼荼羅の法に明らかにして、善く[三]分量を知り及び弟子の好惡の相をば知り、普く[四]眞言を誦し及び[五]都法を持し、先づ[六]阿闍梨と及び[七]傳法との二種の灌頂を蒙け、少欲知足にして常に念誦を行じ、普く一切の阿闍梨の所に於て皆請じて學問し、諸の曼荼羅の法に於て決擇して疑なく、恒に一切の諸尊及び師僧を供養し、一切の貧窮困苦

【一】 蕤呬耶(Guhya)。祕密と譯す。具には經名を蕤呬耶壇荼羅(Guhyatantra)即ち密呪經或は祕密眞言經。

【二】 三部曼荼羅の上首明王の名を擧げ、曼荼羅の種類無數なりと雖も皆本經の所説を出でざることを述ぶ。

【三】 曼荼羅(Maṇḍala)。意義の上より輪圓具足と翻す。諸佛の萬德莊嚴具して缺くることなく、一切諸法を該羅して盡きざるなきの意、土壇の上に諸佛菩薩の像を畫きたるものを曼荼羅と云ひ、之に弟子を引入して灌頂する秘密作法にして本經之を說くなり。

【四】 曼荼羅中の諸尊は佛部、蓮華部、金剛部の何れかに攝せらる。これを三部と云ひ胎藏部に屬する分類なり。

【五】 無能勝(Aparājita)。

【六】 善住(Pratiṣṭhā)。

【七】 除避(Tib. rNam-par-gnon-pa)。

【一】 本品は曼荼羅を建立して弟子に灌頂を與ふるに堪能なる阿闍梨たるもの丶資格を明す。

【二】 阿闍梨(Ācārya)。譯、軌範師。教授、師匠の尊稱にして、以下それの三十四德を擧ぐ。

【三】 曼荼羅の大さ、諸尊の

請し供養するの法を細説してゐる。即ち奉請作法、供養物、瓶法、八色幡、香薬花食菓の種類、神供佛布施等を説く。

第九分別印相品。本品は諸尊の印契を明し、次に正しく弟子を曼荼羅に引入し投花得佛せしむる作法を明してゐる。

第十分別護摩品。息災と増益と降伏の三種護摩相應の爐、坐、色、薪、衣、正覺壇の作法、説戒、神供並に第三第四の正しき灌頂護摩を明してゐる。

第十一補闕品。本品は他法との關係、四種灌頂等前品に説かざりし曼荼羅作法の總てに關して補説してゐるのである。

要するに七日作壇の法を廣説すること本經の右に出づるものないのであるから、苟も密教を研究し灌頂の作法を知らんとせば、先づ第一に本經を研究しなければならないのである。

昭和五年十二月三十一日

譯者　田島隆純識

第一序品。一切の諸尊は佛部、蓮華部、金剛部の何れかに攝せられ、其等曼荼羅の數は三千五百に及ぶが、一切曼荼羅の作法は悉く本經に說くとし、且らく佛、蓮、金三部の上首たる明王の名を擧げてゐる。

第二阿闍梨相品。曼荼羅を建立し弟子に灌頂を授くる阿闍梨たるものは如何なる資格を具せざるべきか、具戒端正であり、衆藝に堪能であり、勇健の菩提心あり、諸作法に熟達してゐねばならぬ等苟も阿闍梨たり得る者の德相三十四を說いてゐる。

第三揀擇地相品。品名に示すが如く曼荼羅を建立するに當つて適當の場所を選ぶべきこと、曼荼羅を起作する日を選ぶべきこと、更に息災、增益、降伏の法に從つて起首作法の時を區別すべきこと等を說いて居る。

第四淨地品。曼荼羅を建立して弟子に授法するに壇を築くに七日を要する。之を七日作壇の法といふ。本品はその第一日より第六日に至る作法を說いてゐる。

- 第一日
  - (1)自身加持　阿闍梨自身を加持して清淨ならしめ、且弟子の身を護る。
  - (2)警發地神　壇を築く爲に、其土地を請ふ爲に地神を警發し供養す。
  - (3)堀地除過　地を堀りて骨、炭灰、毛髮、瓦石等を除き地の過を淨む。
  - (4)打地　堀りたる土を細かにし打ちて堅實にし牛尿を散し打ち搥つて平正にならしむ。
  - (5)塗壇　土壇の上を牛糞に水を和したるものを東北の隅より塗る。
- 第二日　埋寶等　壇上に小坑を堀りて五穀、五寶、五藥等を埋む
- 第三日
  - (1)受地作法　地を受持する作法を爲す。
  - (2)香水持誦　辨事の眞言を以て香水を持誦す。
- 第四日　灑淨　日沒時香水を以て壇上を淨む。
- 第五日　持地結界　右手を以て壇上を按し曼荼羅の眞言を誦して地を受持す。
- 第六日　受持弟子
  - (1)辨事の眞言を以て弟子を加持し
  - (2)障難を除くための金剛線を童女をして縒しむ

第五召請品。本品は前品に次ぎて第六日の作用である。召請、齒木、護摩の法を說く。

第六揀擇弟子品。本品も第六日の作法である。入壇せしむべき弟子の好相、遠離すべき弟子の相、入壇求法の動機、受持すべき弟子の數、弟子攝持作法としての護身、五瓶加持、嚼齒子、金剛誓水及び弟子好夢の相七十八種を說いてゐる。

第七摩訶曼荼羅品。本品は正しく第七日の本曼荼羅を作つて灌頂を授くる作法を說くのであつて、五色線、三重曼荼羅の建立、圍幕、供物、彩色、五色界道、三種曼荼羅諸尊の三形、諸佛菩薩の配置、護摩爐等に就いて說いて居る。

第八奉請供養品。諸尊を曼荼羅上に奉

切ノ曼荼羅ニ通シテ用ニ之印ヲ」と書き出してある。品初が是の如き文より初まることは、何人も意の通ぜざることに氣づく所であつて淨嚴師校訂の加筆本にも「此文前恐有脫文」と記されてある。然るに藏譯に於ける此の箇所を見るに次の如くなつて居る。「合掌し二頭指を少しく鉤す、これ如來部の三摩耶印なりと知るべし。よく合掌したるものより、中の(各の)三指を開き散ず。これ蓮華(部)の印にして、蓮華の開きたる相なり。二手脊をあざへ、二小指二大指を捲く。これ金剛の印にして金剛部として說かれたり。一切諸の曼荼羅に於て、三三摩耶三部等と說かれ、一般に通ずるものと稱せらる」とある。この藏譯所說の如來部の印は佛頂の印、蓮華部の印は八葉の印、金剛部の印は三貼金剛杵の印であつてこれ吾人の今日用ひて居る佛蓮金三部の印と何等異らないのである。卽ちこの三種の印の說明を漢譯は落脫してゐること明かであつて、之等の文あつてこそ「亦名三部三摩耶印」云々の文意初めて通ずるのである。

(5) 或漢譯は後品の文、前品に竄入す 大正藏經に校合せられた本經四本(一)底本なる縮藏、(二)石山寺古寫本、(三)高山寺寫本、(四)黃蘗版本の中(一)と(二)は分別護摩品第十の後半に(三)と(四)の補闕品第十一の大半の文が竄入してゐるが、藏譯と對照することによつて(三)と(四)の本が正しいことを發見されるのである。卽ち(一)と(二)の分別護摩品を見るにその竄入の箇所の文は護摩とは全く關係なく當然補闕品に記さるべき雜多のことが說かれて居り文の接續も不自然を極めてゐることは實地讀む人の領かるゝことであるから、今は煩を避けてその場所のみを示すことゝする。卽ち正藏一八卷七七一頁中段一五行「以至誠心奉施」は七七二頁上段二二行「諸尊井乞歡喜」に續くべきである。[蘗本祕密儀軌乾十四、本經卷下九丁表五行及び藏譯一〇四葉表三行參照]。從つて「以至誠心奉施然」の次なる「後應用凡隨所作曼荼羅法」より以下七七二上段二二行の於其菩提心曾不退轉」までの千〇九十二字は次の補闕品の文であつて、之等の文は七七二頁中段二二行「先須各誦數滿千遍」の次に來るべきものである。[蘗本一〇丁表一〇行以下一三丁表四行及び藏譯一〇五葉表二行以下一〇七葉表四行參照]。

これによつて蘗本は藏譯と一致し不自然でないのであるが淨嚴師の校訂本は却つて縮藏の如くに加筆訂正されてゐる。思ふに前記(一)(二)の漢譯も蘗本の如くであつたものが何時しか斯くなつたものなることは、竄入の文の結合に苦心して居ることによつても明瞭である。

三、各品の內容

程度の多少の意義の相違や字句の出沒はあるが、內容全體の上より見れば全く一致してゐるのである。然し下に述ぶるが如く漢譯は藏譯に比すれば、闕文があり或は前品中に後品の大部分の文が竄入してゐる所などあつて、正藏所載のものなどよりも概して藏譯の方が正確である。以下漢藏兩譯に於ける主なる相違點を擧げやう。

(1)卷數分別の有無　漢譯は序品第一より揀擇弟子品第六までを卷上とし、摩訶曼荼羅品第七及び奉請供養品第八を卷中とし、分別印相品第九以下最後の補闕品第十一までを卷下とし全三卷となつてゐるが、藏譯に於ては何等卷數を分つてゐないのである。

(2)品名分別の有無　漢譯は全卷を十一品に分ち各品名を附してゐるが、藏譯は何等品數を分別することなく、從つて品名を附することはないのである。今藏譯の如何なる部分が漢譯の何品に相當するかを明示するため、一は後に言はんとする所の便宜のために、前記ナルタン版藏經祕密部 Tsha 帙に於ける漢譯各品相當の所在を表示しやう。(初の數字は丁數、a bは表裏、線の次の數字は行數を示す)

(卷上)

序品第一……Leaf 71b—l. 2
阿闍梨相品第二……71b—6
揀擇地相品第三……72a—3
淨地品第四……76b—2
召請品第五……77a—3
揀擇弟子品第六……77b—6

(卷中)

摩訶曼荼羅品第七……81a—5
奉請供養品第八……90a—1

(卷下)

分別印相品第九……97b—2
分別護摩品第十……101a—5
補闕品第十一……104b—3

思ふに漢譯の原典に於ても藏譯の如く品の分別無かつたものを、譯者が便宜のために分つたものであらう。その一例を示せば、阿闍梨相品第二の品初に相當する藏譯を見れば「教師は諸の論書を知り、戒律を具し」とあるが、之を漢譯には「我今當說阿闍梨相、廣解諸法具戒正直」とある。卽ち藏譯には「我今當說阿闍梨相」に當る句の無いことは。これ漢譯の譯者が下文の意を得て附加し、且つ阿闍梨相品の名を附したものであらうと思ふ。

(3)譯文形式の相違　漢譯は卷首より卷尾まで悉く長行卽ち散文で譯されてゐるが、藏譯は全卷頌文になつて居る。恐らくはこれ又漢譯の譯者が卷品等を分つて經全體の體裁を整へた如くに、原典が偈文であつたものを便宜上長行に譯出したものであらう。何となれば漢藏兩譯の原典は同一のものであつたことは內容比較の上から想像に難くないことであり、且つ藏譯は常に原典に忠實であつて、故意に品名を削り文體を改めるやうのことはしないからである。

(4)漢譯の脫文藏譯に完全す　漢譯の分別印相品第九は「亦名三部三摩耶印於一

蕤呬耶經解題

一、概　説

本經は不空三藏（唐、天寶五——大曆九、A. D.746—774)の所譯であつて、弘法、傳教、慈覺、宗叡、惠運の請來にかかるものである。通例瞿醯經と呼ばれて居り、或は玉呬耶經と稱せられ、或は今の題號の如く蕤嘔耶經若しくは蕤呬耶經と書かれて種々の讀方をされてゐるが、元來此等の漢字は梵語 Guhya（祕密）の音譯である。又具さに瞿醯壇跢羅經といふが、これ即ち梵語 Guhyatantra の音譯であることは明かである。

本經は西藏譯存し、ナルタン版に於ては祕經部 Tsha 帙七十一葉の裏より百〇八葉裏にあり、西藏題名を dkyil-ḥkhor Thams-cad-kyi Spyiḥi Cho-ga gsaṅ-baḥi Rgyud といふのである。且つこの藏典の卷首に掲げてある梵題によつて、本經の原名は Sarvamaṇḍalasāmānya-vidhāna-guhyatantra なることを知るのである。これ「一切曼荼羅通儀軌祕密經」とも譯すべきものであつて、即ち本經の內容とする所は題名の示す如く、曼荼羅を建立して灌頂の大法を行ふ一般共通の作法を說いて居るのであつて、彼の大日經疏に所々に本經を引用して居ることによつて知らるゝ如く、曼荼羅作法に就ての最も重要の地位を占むるものである。

蓋し灌頂は密教に於ける最極祕法であり、密教の生命はこれによつて相續されるのであるからして、大日經、金剛頂經、略出經等何れも此の作法を說いて居るのである。又本經の如く諸法の通則を說いてゐるものに蘇悉地羯羅經（Susiddhi-karamahātantra-sādhanopāyika-paṭala)があり、これは大日經、金剛頂經と共に眞言三部祕經として重視され、今の瞿醯經は雜部の經とされ來つて居るが、研究上の價値に至つては本經は決して蘇悉地羯羅經に劣るものでない。

二、藏譯との比較

本經の藏譯は譯者名を失してゐる。從つて何時代のものかを知る由もないが、卷末に下の如く記されてある。「大曼荼羅建立の次第廣說、金剛手大自在の教示よりの一切曼荼羅の祕密通作法なる一般祕經終はれり」即ちこれによつても、亦その內容によつても知らるゝ如く本經は經とは稱するもの﹅實は儀軌である。今漢譯と藏譯との間に如何なる相違あるかの大體を述べんに、例すれば眞言の誦數を漢譯は百遍とあるを藏譯は百八遍とある

八方、其の帝王を護持する營從の兵法あり。五天竺國には深く佛法を敬信す。帝王に傳ふべし。[二〇]蘇婆呼童子經。此の經の中には成就を求むる人の護摩の杵金銀銅鐵石水精佉羅木等、無量種各々不同なることを辨(一本は辯)ず。杵は五股三股一股なり。長十六指を上と爲す。十二指を中となす。八指を以て下となす。乃至一指節を下となす。此の經の中に說かく、[二一]金剛杵を持せざれば、念誦するに成就を得る由なし。金剛鈴とは是れ般若波羅蜜の義なり。金剛杵とは是れ菩提心の義なり。能く斷常二邊を斷じて中道に契合す。中に十六菩薩の位あり。亦十六空を表して中道となす。兩邊に各五股あり。五佛五智の義なり。亦十波羅蜜を表す。能く十種の煩惱を摧きて十種の眞如を成じ、便ち十地を證して金剛の三業を證し金剛智を獲、金剛座に坐す。亦是れ一切智智なり。亦如來の自覺聖智と名づく。若し此の三摩地智を修せずして成佛することを得といはば、是の處あることなけん。文の繁を恐れて廣く述ぶること能はず。若し廣く釋せば劫を窮むとも說き盡すべからず。[二二]怛唎三昧耶經は毘盧遮那集會に同じ。所有の聖衆修行の教法自性成就せり。此の教の中に修行する者は、但だ菩提心に住して大悲の志願を以て無盡の衆生界を捨てず、違事(一本に爭)せざるべき所なり。設ひ之に違すとも食啗すべからず、若し食することあらば成せず、[二三]三昧耶戒を破す。此の經の中には、大輪金剛眞言を誦すれば諸の愆過に染せず、以て方便と爲して現生に一切眞言速疾成就すと說けり。此の經の中の不動尊等四十二(一本に地あり)の如來僮僕使者、若し修眞言行菩薩堅く菩提心を持せば我等承事供養擁護す。彼の修行者殘食を食うて、彼等無上菩提に至り、諸有の障者[二四]毘那夜迦其の便を得ず速に無上菩提を證すべし。

都部陀羅尼目(終)

【二〇】蘇婆呼童子經は善無畏三藏の譯にして三卷あり。

【二一】金剛杵(Vajra)は如來の智慧の金剛堅固なることを表したる密教の法具にて、之に五股金剛・三股金剛・獨股金剛等あり各々密教の教理を象徵す。今出す所は五股金剛杵なり。

【二二】怛唎三昧耶經は不空三藏譯にして一卷あり。

【二三】三昧耶戒(Samaya śila)とは、佛と凡夫と本來同體なりと觀ずること。

【二四】毘那夜迦(Vinayaka)は歡喜天なり、障礙神と譯す、善法を破壞する神なり。

は金剛薩埵等なり。變化すること無量なり。三種の三昧耶あり。佛部蓮花部金剛部なり。三部心眞言あり。

爾那爾迦　阿嚧力迦　嚩日羅地叻迦

部主に三種あり。金剛輪王佛頂は佛部の主、蓮花部の主は馬頭觀自在、金剛部の主は三世勝金剛なり。三種部母といふは、佛部には佛眼を以て部母とす。蓮華部には白衣觀自在を以て部母とす。金剛部には忙麼雞菩薩を以て部母とす。

三種の明妃といふは、佛部には無能勝菩薩を以て明妃とす。蓮花部には多羅菩薩を以て明妃とす。金剛部には金剛孫那利菩薩を以て明妃とす。

三種の忿怒といふは、不動尊は佛部の忿怒、分怒鉤は蓮花部の忿怒、軍荼利は金剛部の忿怒なり。

四種の界あり。[13]金剛橛は地界、[14]金剛牆は八方界、[15]金剛網は上方界。[16]密縫は阿三莽儗儞界なり。

又四種の界あり。曼荼羅を結護す。金剛索は東方を護る。金剛幢幡は西方を護る。金剛迦利は南方を護る。金剛峯は北方を護る。又大界を商羯羅と名づく。設ひ佛頂護輪王等隣近すれども障礙を被むらず。此の經の中には、修眞言者世間の悉地を成就するに、時に依り處に依る。時とは謂く三時なり。處は謂く本尊の像の前なり。供養に五種あり。[17]閼伽を除く。一には塗香、二には花鬘、三には燒香、四には飯食、五には燈明なり。白(北)黃(東)黑(南)赤(西)息災增益降伏敬愛に隨つて所求應に知るべし。成就とは十八種の物、身に隨ふべし。廣くは經に說くが如し。三時に澡浴し三時に衣を換(一本には浣となる。)へよ。一月分つて四時とす。月生の一日より八日に至つては應に息災を作すべし。九日より十五日に至るまでは應に增益を作すべし。十六日より二十三日に至るまでは、應に降伏を作すべし。二十四日より月盡の日に至るまで敬愛の法を爲す。[18]蘇哩耶經も亦蘇悉地に同じ。曼荼羅を分布し及び地に緋つ法、[19]此の經の中に極めて微細なり。具さに錄すべからず。又(一本には及び)

【一三】金剛橛は地界又は地結ともいひ、大地に橛を打ち込むことで修法の壇の上の四方の柱なり。卽ち道場の四方を堅固にし如何なる惡魔も道場地下を動搖することなき意味を表す。

【一四】金剛牆は四方結ともいひ、地下道場を結したる後更に其の量に應じて四方に金剛牆を周らすこと。

【一五】金剛網は虛空網ともいひ、更に上下虛空に網を張つて結界するなり。

【一六】密縫とは、火界又は金剛炎とも稱し、金剛墻の外に火炎充滿し惡魔の障害を離るゝ意なり此等は密教に於て結界法と稱し、之に各印と眞言とあり、修法の度每に印眞言觀想を行ふものなり。結界とは一定の場所を限つて淸淨地とし惡鬼惡魔の侵入を防ぐの意なり。

【一七】閼伽(Argha)は水と譯す。

【一八】蘇呬耶經は不空譯の蘇醯經のこと。

【一九】此經の中とは、此の經上卷揀擇地相品第三等に詳しく說けり。

の中に一百二十種の護摩あり。二十五種の爐に依る。護摩の爐の中の契印、標幟各異にして所求迅速に成辦す。世間出世間に於て果報を成就す。諸會浩汗文義稍多し。繁文を恐れ、且く略して方隅を指す。毘盧遮那成道經に依らば、大本は十萬偈なり。三百巻の經あるべし。唐國の所譯は略本七巻なり。此の經の中には[八]一百六十心、[九]十縁生句を說く。及び五輪とは地輪・水輪・火輪・風輪・空輪なり。此の經の中には二種修行あり。[一〇]菩提心を以て因とし、大悲を以て根とし、方便を以て究竟と爲す。勝義と世俗とに依る。若し勝義に依つて修行せば、法身曼荼羅を建立す。是の故に此の經の中に說かく、先づ虛空の中の曼荼羅を稱（緋てとなる。）せ、是の故に本尊の法身を觀ずるに形色を遠離して猶し虛空の如く是の如くの三摩地に住すべしと。若し世俗諦に依つて修行せば四輪に依つて以て曼荼羅を爲（一本に作）れ。本尊聖者、若し黃色ならば地輪の曼荼羅に任せしめよ。（其の形方なるを金剛と名づく）聖者若し白色ならば、水輪の曼荼羅に任せしめよ。（其の形圓なるを水輪と名づく。）聖者若し赤色ならば火輪の曼荼羅に任せしめよ。（其の形三角なり。）聖者若し青（色）若し黑（色）ならば風輪の曼荼羅に任せしめよ。（其形半月の如し。）大曼荼羅には八葉の蓮華臺を安け。五佛四菩薩を臺葉に安んぜよ。中曼荼羅の外に又三種の曼荼羅あり。一は一切如來の曼荼羅、二は釋迦牟尼の曼荼羅、三は文殊師利の曼荼羅なり。此の曼荼羅を名づけて大悲胎藏曼荼羅と爲す。若し弟子灌頂を受くる法、小曼荼羅にして極て微妙委曲なり。餘部の代らざる所なり。此の中の修行供養は、兼て二種の法を存す。謂く[一一]事と理とを二となす。此の經の中に、護摩の火天に四十種あり。就中、一十二種の火を最勝となす。爐の形、及び木乳あり、果類苦練、所用各不同なり。東西南北祈願各殊なり。內外護摩も亦五輪に依る。四種の事を求むるに速疾に成就す。息災・增益・降伏・敬愛に於て、請ずる所の火天各各不同なり。寂靜・煕怡・忿怒・喜怒、次第に應に知るべし。

若し[一二]蘇悉地經には、教の中に三部に依る。所謂佛部は（五佛頂等。）蓮花部は種類甚だ多し。金剛部

【七】毘盧遮那成道經とは、大日經にして法爾常恒本と十萬頌廣本と分流略本あり、唐善無畏譯は七巻の略本なり。

【八】百六十心とは、貪瞋痴慢疑の五根本煩惱を十、二十、四十、八十、百六十と五度倍加して生ず。

【九】十縁生句とは、又は十喩ともいふ、大日經に說く所にして、十種の喩を以て一切諸法の無自性の理を觀ずるなり、一幻、二陽焰、三夢、四影、五乾闥婆城、六響、七水月、八泡、九空華、十旋火輪。

【一〇】菩提心を以て等とは、大日經の根本思想とする三句の法門にして卽ち菩提心を以て因とし大悲を根本とし方便を究竟と爲すこと。

【一一】事と理とは、事供養と理供養、事供養とは、閼伽、塗香、花鬘燒香、飯食、燈明等の六種の物を本尊に供養すること、理供養とは、實際の供養をせずして唯だ觀念を以てするなり。

【一二】蘇悉地經は善無畏三藏の餘譯にして三巻あり。佛部、蓮花部、金剛部の三部の建立なり。

都部陀羅尼目

開府儀同三司特進試鴻臚卿肅國公食邑三千戸賜紫贈司空謚
大鑒正號大廣智大興善寺三藏沙門不空　詔を奉じて譯す

[一]瑜伽本經は都て十萬偈にして十八會あり、初會の經をば一切如來眞實攝と名づく。其の經に五部を説く[二]佛部(毘盧遮那佛を以て部主とす。)、金剛部(阿閦佛を以て部主とす。)、寶部(寶生佛を以て部主とす。)、蓮花部(阿彌陀佛を以て部主とす。)、羯磨部(不空成就佛を以て部主とす。)、彼の五部の主に各(各)四菩薩ありて以て眷屬となる。前右左背にして安列す。四の内の供養は各四部に屬す。次第に應に知るべし。四の外供養も亦四部に屬す。四門には鉤・索・鎖・鈴なり。四部の次第應に知るべし。

又四方に賢劫の中の十六大菩薩あり。賢劫の中の一千菩薩を表す。又外に五類の天あり、一一の類に四天あり、總じて二十天あり。幷に妃后に復五類有つて二十と成る。五類とは上界の四天と、[三]住虛空の四天と、遊虛空の四天と、地居に四天有り、地天に居る四天となり。

瑜伽部の曼荼羅に四あり。一には金剛界、二には降三世、三には遍調伏、四には一切義成就なり。此の四の曼荼羅は毘盧遮那佛の内の四菩薩(一本には提となるは誤)を表す。又一一の曼荼羅六曼荼羅を建立す。所謂大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅、四印曼荼羅、一印曼陀羅なり。唯だ降三世曼荼羅に十曼荼羅を具せり。餘は皆六を具せり。一切の印契、一切の法要、四智印を以て攝し盡す。[四]大智印は五相を以て本尊瑜伽を成ずるなり。三昧耶(一本に智を加ふ。)印、(二手を以て和合して金剛縛より發生して印を成ずるなり。)法智印(本尊種子と法身三摩地一切契經の文義とに名づく。)、羯磨智印(二手金剛拳を以て器仗幖幟を執持するが如く身の威儀形の如し)、又瑜伽中に[五]四種の眼あり。法眼(敬愛法)、熾盛眼(鉤召)、忿怒眼(降伏の心煩惱を殺害す)、慈眼(毒を除いて怨敵を息むなり。)、又[六]一切如來教集瑜伽

【一】瑜伽本經とは、金剛頂經十八會十萬頌の廣本をいふ。(十八會指歸正藏十八)。

【二】佛部とは、又は如來部(Tathāgatânubhāva)、金剛部(Vajrânubhāva)、寶部(Ratnânubhāva)、羯磨部(Karmānubhāva)之を五部といふ。

【三】此の四句は頌文にあらず今之を頌の如く分けて書くは誤れりといふ。(諸儀軌稟承錄)。

【四】大智印(Mahājña-mudrā)とは、五相成身の佛、三昧耶智印(Samaya-jñamudrā)とは、諸尊の持する三昧耶形(五股・三股・刀・蓮花等)の類、及び諸尊の手に結ぶ印又行者が手に結ぶ印なり。法智印とは(Dharma-jñana-mudrā)とは、本尊の種子及び一切の經文陀羅尼のこと、羯磨智印(Karmajñana-mudrā)諸尊の身の威儀作法をいふ。

【五】四種の眼とは、四種の護摩法のこと、忿怒眼は降伏法・慈眼は又慈悲眼といひ息災(除災)法なり。

【六】一切如來教集瑜伽とは、金剛頂經十八會の中の第三會なり。此中に一百二十五種護摩爐を説くと(十八會指歸)。

14、如來三昧耶眞實瑜伽
15、祕密集會瑜伽　　祕密處ニテ說ク
16、無二平等瑜伽　　法界宮ニテ說ク
17、如虛空瑜伽　　實際宮殿ニテ說ク
18、金剛寶冠瑜伽　　第四靜慮天ニテ說ク

十八會の第一會一切如來眞實攝敎王は

1、金剛界
- 1、金剛界大曼荼羅—五相成身を說く
- 2、陀羅尼曼荼羅
- 3、微細金剛曼荼羅—四種眼を說く
- 4、一切如來廣大供養羯磨大曼荼羅
- 5、四印曼荼法
- 6、一印曼荼羅

2、降三世—十曼荼羅あり、五類諸天等の外金剛部を說く
3、遍調伏
4、一切義成就
（3・4）各六曼荼羅を說く

大日經

次に大日經は大毘盧遮那成佛神變加持經といひ、之に一、法爾常恒本、二、分流廣本、三、分流略本との三種ありと稱せられ、分流の廣本とは、十萬頌の經で、分流の略本とは三千頌の經巻である。此の三千頌の經は七軸にして、善無畏三藏の譯する所、此の中、住心品と具縁品との二に大別され、住心品は專ら敎義の敎理を說いたもの、具縁品以下は敎義の實踐法を說いたものである。今本書に出づる所の百六十心・十緣生句・三句等の法門は、住心品に說いてあり、曼荼羅、灌頂、護摩等のことは具縁品以下に說いてある。

蘇悉地經

次に蘇悉地經は、また善無畏三藏の譯する所で、蘇悉地羯羅經と稱し三卷あり、此の經は佛部、蓮花部、金剛部の三部を建立して眞言密敎の種々の法則儀軌を說いたもの、弘法大師は三學錄の中には、律部に入れて居るのも此のわけである。

蘇呬耶經

蘇呬耶經は又は瞿醯經と稱し、不空三藏の譯する所にして三卷あり、專ら曼荼羅、灌頂等につき詳說する。今本書に引く所の文義は本經上卷揀擇地相品第三等に出づるのである。

蘇婆呼童子經

蘇婆呼童子經は蘇婆呼童子請問經といひ、三卷ある。今の引く所は、上卷の分別金剛杵及藥證驗分品第四等の文の意を出したのである。又怛唎三昧耶經は底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法と稱し、不空三藏の譯する所である。

昭和六年一月五日

譯者　岡田契昌　識

都部陀羅尼目解題

都部陀羅尼目は、一本には、陀羅尼門諸部要目となつて居る。卽ち本書は、都部といひ、諸部といふが如く、一貫した經典ではなくして、主として金剛頂經、大日經、瞿醯經、蘇悉地經、底哩三昧經、蘇婆呼童子經等の諸部の中より文を採つて略出したものである。而して本書は不空三藏が唐の乾元元年より大曆六年に至る間に於て譯出し、空海、慈覺、智證等の請來する所となつて居る。今本書に出づる所の文を了解せしむるため此等の經典について一言する。

金剛頂經

金剛頂經の廣本は十萬頌あり、十八會に說かれたもので、其の中より要文を譯出したものに、普通三卷の敎王經と稱するものに、金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經（不空譯・空海・慈覺・智證・圓行・宗叡の請來）がある。是は十八會の中の初會に六曼荼羅を說く中の第一の大曼荼羅品を別に譯したものである。又宋代に至つて施護三藏の譯した三十卷の大敎王經は初會の全部を譯したことになつて居る。又同じく廣本十萬頌の中より譯したものに金剛頂瑜伽中略出念誦經（四卷）なるものあり、是は金剛智三藏の譯する所にして、空海、智證等の請來である。又十八會指歸一卷あり、不空三藏が十萬頌の大本の中より十八會の梗概を略述したものである。今煩を厭はず十八會の名を列ねることにする。

十八會の事

1、一切如來眞實攝敎王　阿迦尼吒天宮ニテ說ク
2、一切如來祕密王瑜伽　色究竟天ニテ說ク
3、一切敎集瑜伽（百二十五種の護摩此に說く）　法界宮殿ニテ說ク
4、降三世金剛瑜伽　須彌盧頂ニテ說ク
5、世間出世間金剛瑜伽　波羅奈國空界ニテ說ク
6、大安樂不空三昧眞實瑜伽　他化自在天宮ニテ說ク
7、普賢瑜伽　普賢菩薩宮殿ニテ說ク
8、勝初瑜伽　普賢宮殿ニテ說ク
9、一切佛集會拏吉尼戒網瑜伽　眞言宮殿ニテ說ク
10、大三摩耶瑜伽　法界宮殿ニテ說ク
11、大乘現證瑜伽　阿伽尼吒天ニテ說ク
12、三昧耶寂勝瑜伽　空界菩提場ニテ說ク
13、大三昧眞實瑜伽　金剛界曼荼羅道場ニテ說ク

に結護する所を解け。還つて本尊の契を呈して、頂上に之を散じ開け。心に[三四]聖天を送つて、五輪を地に投げて禮せよ。然して起つて衆善に隨へ。[三五]後の會も復初の如くせよ。一時と二三と、或は四も皆此の如くせよ。餘分には塔を旋遶し、像を浴し大乘を轉じ、曼荼羅を塗飾(一本には拭)し、花を布きて佛德を讃じ、或は復雜念無くして、等引に專注せよ。此を以て三業を淨むれば、悉地速に現前す。聖の力に加持せられて、行願相應するが故に、諸そ有ゆる修習せんと樂はんものは、師に隨つて受學せよ。明を持し[三六]本教を傳へ、[三七]三昧耶を越ゆることなく、勤策して無間に修し、[三八]蓋及び[三九]熏醉を離れ、諸の學處に順ひ行ずれば、悉地力に隨つて成ず。[四〇]我今大日經に依つて、略して[四一]瑜祇の行を示す。殊勝の福を修證して、普く諸の有情を潤すべし。

大毘盧遮那成佛神變加持經畧示七支念誦隨行法(終)

【三〇】一圓明の像とは、以下所願の本尊を月輪の中に觀ずることを説く。
【三一】紗縠は薄き絹なり。
【三二】寂然にして等とは、佛菩薩は多く入定の相なれば寂然の相なり。然るに明王等は忿怒等の相なり。
【三三】復た普通の印とは、修法のとき本尊加持の後に再び六種の供養をなすこと。
【三四】聖天とは、佛菩薩のことなり。
【三五】後の會とは、開白以後の時なり。
【三六】本教を傳へとは、其の本尊の儀軌聖教等を師より傳授すること。
【三七】三摩耶を越ゆとは、越三昧耶の罪とて、未だ師に傳授を受けずして濫りに聖教を繙きなどすることを禁ず。
【三八】蓋とは、煩惱のことにて五蓋なり。一、貪欲蓋、二、瞋恚蓋、三、睡眠蓋、四、掉悔蓋、五、疑法。
【三九】熏は五の辛味ある蔬采にて大蒜(オーニンニク)茖葱(オーニラ)慈葱(ヒトモジ)蘭葱(ニンニク)興渠(コウク)。
【四〇】我今以下は流通分に相當す。
【四一】瑜祇(Yōgi)。相應と譯す。佛と行者と一致融卽する法なり。

[二三]普通眞言に曰く、

娜莫三滿多母馱喃　薩嚩他　欠嗢娜糵帝颯頗囉呬　䫂識識曩劒　莎嚩賀

定慧の手齊しく合して、右を以て上の節を交へ、運心して普く周遍せよ、念ずる所の如く皆現前す。即(一本に既に)ち供養を施し已んなば、修して常に持誦を作すべし。先づ[二四]金剛の鎧を擐て、結護し事と相應すべし。

金剛甲冑の眞言に曰く、

娜莫三滿多嚩日囉喃　嚩日囉　迦嚩左吽

先づ虛心合を作して、風輪を以て火を糺持せよ。大空は火本(一本布)に依れ、[二五]遍く觸れて後に心に居け、次に方隅界を結するには、前の不動尊を用て、左轉して辟除を成し、右に旋らし及び上下し、備に身の支分に觸れよ。結護して悉く堅牢ならしめよ。眞語と[二六]母陀羅とは前に已に分別せるが如し。既に嚴備を爲し訖つて、當に根本の契を示して還つて五處を加し、[二七]七轉或は再三し、印を散じて頂上に開くべし。半跏(一本には加となるは誤)[二九]面を正しくにして[二八]身意を正うし、或は相應の坐に作れ。方に隨つて教の說の如くせよ。[二九]面を正しくして身の前に住して、[二六]一圓明の像を觀よ。清淨にして瑕玷なきこと、猶滿月輪の如し。中に本尊の形有す。妙色三界を超えたり、紗縠嚴身の服あり。寶冠あつて紺髮垂れたり。[三二]寂然として三摩地にいます。輝焰衆の電に過ぎたり。猶し淨鏡の內に幽邃に眞容を現ずるが如し。喜怒形色(一本に貌になる)に顯れ、與願等を操持せり。正受と相應せる身、明了にして心に亂なし。無相の淨法體、願に應じて群生を濟ひたまふ。專注して念持せよ(一本に持念)。限數既に終畢なば、懈極して後に方に息むべし。[三三]復普通の印を結び、虔誠に願等を啓し、殷重に聖(一本に世)尊を禮せよ。左に無動の力(一本に刀)を轉じて、前[二九]

對して種々供養物を捧げて念誦すること、次の有表なり。

【二二】當に普通の印とは、專ら觀念を以て念誦作法することで即ち無表なり。

普通の印とは、金剛合掌にして即ち雙手の十指の頭を交へ合せるなり。

【二三】普通眞言とは、七支の中第六虛空藏轉明妃を說く。

【二四】金剛の鎧とは、七支の中第七擐金剛甲冑を說く、擐金剛甲冑とは、甲冑を擐ること、凡そ結界せんには、先づ自身を護りて諸の障魔を辟除すべきが故に先づ金剛甲冑の印明を以て加持して自身を護持するなり。

【二五】遍く觸れてとは、此の擐金剛甲の印を以て眞言を誦しながら身體の五處即ち額右肩左肩心及び喉の五處を加持すること。

【二六】母陀羅(Mudrā)とは、印契なり。

【二七】七轉等とは、眞言七遍若は三遍唱へること。

【二八】身意を正すとは、正しく坐して身直きときは意も隨て正しく成ることをいふ。

【二九】面を正しく等とは、面を正しくし行者は心外の月輪中に本尊を觀ずること。本尊は行者の意志によつて何尊なりとも觀ずべし。

〔一三〕と名づく。

金剛薩埵の眞言に曰く、

娜莫三滿多嚩日囉 喃 嚩日囉 怛麼句憾

正に此の密言を誦して、當に〔一四〕等引に住すべし。諦に自身の像を觀ぜよ、卽ち是れ執金剛なり。無量の衆の大魔、諸そ覩見することある者は、金剛薩埵の如くす。疑惑の心を生ずること勿れ。次に〔一五〕無動聖(一本に尊となる)を以て〔一六〕障を辟け、及び垢を除き、而も能く衆事を淨め、結護し隨つて相應すべし。

不動尊の眞言に曰く、

娜莫三滿多嚩日囉 喃 戰拏摩賀嚧灑拏颯頗吒耶吽怛囉吒憾𤚥

〔一七〕定の空を地水に加へ、風火を心に竪てよ。慧の劍も亦是の如くして、鞘より出して能く成辦す。次に如來鉤を以て、尊及び聖衆を請ぜよ。〔一九〕密の方便相應すれば、本誓に依つて降したまふ。

〔一八〕如來鉤眞言に曰く、

娜莫三滿多母馱喃惡 薩嚩怛囉 鉢囉底賀帝怛他蘖黨矩捨冐地拶哩耶 跛哩布囉迦娑嚩賀

止觀内に相ひ叉へて、竪(一本に竪く)合せて智の風を竪て、纔に初分を屈せよ。餘輪をば狀環の若くせよ。聖者悲願力を以て、請に隨つて咸く來り降したまふ。〔二〇〕示三昧耶を奉れ。〔二一〕次に明契は前に說くが如し。既に本誓を呈し已んぬれば、*決定して相應するが故に、次に當に力分に隨つて供養して誠心を表すべし。閼伽と香と食と燈と、下も一華水に至るまでにせよ。或は但し心想を運べ。殊勝にして最も量り難し、〔二二〕當に普通の印と、觀行と及び眞言とを以てすべし。有表と無表と倶に、一切皆成就す。

【一二】止觀とは、左(止)と右(觀)の手。

【一三】金剛薩埵眞言とは、七支の中の第三轉法輪を明す。

【一四】等引(Samāhita)とは、心を統一して散亂せしめざること。

【一五】無動聖とは、七支の中第四の不動を明す。

【一六】障を辟く等とは、卽ち毘那夜迦といふ大惡鬼神ありて、眞言行者に常に隨ひて種々の障害を與へるを以て今不動尊の印明を加持して毘那夜迦の障害を碎除すること。

【一七】定の空とは、不動の劍印を結ぶことにて、卽ち左右の大指(空)を以て小指(地)無名指(水)の甲を壓すことなり。右手(慧)は劍身左手は劍鞘の形と觀ず。心に竪つとは左の乳の上に當ること。

【一八】次に如來鉤とは、七支の中第五大鉤召を說く、是佛の平等智を以て聖衆惡魔等悉く鉤召する義なり。

【一九】密の方便とは、三密相應すること。

【二〇】示三昧耶等とは、最初の入佛三昧耶の言印を再び用ゆるなり。

※決定相應すとは、諸佛菩薩の本誓空しからず決定して行者の願望に相應ずることをいふ。

【二一】次に當にとは、本尊に

大毘盧遮那成佛神變加持經略示七支念誦隨行法

開府儀同三司特進試鴻臚卿肅國公食邑三千戶賜紫贈司空謚
大鑒正號大廣智大興善寺三藏沙門不空　詔を奉じて譯す

[一]無礙智と、密教と意生子とに稽首したてまつる。彼の[二]蘇多羅に依つて、此の隨行法を攝す、眞言行の菩薩、先づ無等の誓に住して、語密と身密と倶にして、後に[三]相應の行を作すべし。

[四]三昧耶の眞言に曰く、

娜莫三滿多母駄南唵阿銘底哩三銘三麼曳娑嚩賀

[五]契は謂く[六]諸輪に齊うして、密合して二空を建てよ。五處なり、頂と肩と心と。最後に咽位を加へよ。次に法界生の、密慧の幖幟を結べ、身口意を淨めて、遍く其の身に轉ぜよ。

[七]法界生の眞言に曰く、

娜莫三滿多母駄南達麼　駄覩娑嚩婆嚩句憾

[八]般若と三昧との手を、倶に金剛拳に作せ、相逼めて風幢を建てゝ、端直にして相ひ合せしめよ。是を名づけて法界　清淨の密印と爲す。[九]法界の自性の如く己身を觀ぜよ、無垢なること[一〇]虛空に同じ、眞言と印との威力を以てなり。次に轉法輪の、金剛薩埵の印を結べ、[一一]此の殊勝の加持を以て、彼をして堅固なることを獲しむ。止觀の手相ひ背けて、地水火風輪、左右互相に持し、二空各旋轉して、慧の掌の內に合せよ、最勝法輪と

[一] 無礙智とは、佛、密教は法、意生子は僧にして卽ち佛・法・僧の三寶に歸命することを表す。卽ち序分なり。

[二] 蘇多羅(Sûtra)とは、大日經を指す。無等の誓とは、衆生と佛と平等一體なりとの理念に住すること。

[三] 相應の行とは、行者に因緣ある佛を本尊として三密を行ふこと。

[四] 三昧耶の眞言とは、七支の第一入佛三昧耶なり。

[五] 契とは、手に結ぶ印契(Mudrā)なり。

[六] 諸輪とは、十指にして指の頭、圓くして輪に似たるを以て輪といひ今は十指の頭をよく間なきやう合するなり。

[七] 法界生とは、七支の第二法界生なり。

[八] 般若とは、右手、三昧とは左手なり。

[九] 法界の自性等とは、法界の體性と己身と同體なりと觀ずること。

[一〇] 虛空に遍一切處と畢竟淨と無分別の三義大日經疏に出づる中の畢竟淨を今は無垢に用ゆ。

[一一] 此の殊勝の加持等とは、轉法輪の殊勝の印明の加持を以て行者をして金剛薩埵の本有常住の智身を得しむること。

と成ることを表したものである。

擐金剛甲冑

擐とは著るといふ意味で即ち金剛不壊の甲冑を身に著ることである。甲冑は如來の大悲の深重にして退轉することなき義を示すのである。身に甲冑をつけるときは如何なる惡魔も障害を爲す力なくして自然に降伏する如く、此の擐金剛甲冑の印明を結誦すれば一切の煩惱妄見を打破することが出來るの意を表すのである。

昭和六年一月五日

譯者　岡田契昌識

ヤウンタラタカンマン）を誦することをいふ。劍印とは左右の小指無名指の甲を大指を以て壓し中指頭指を立て、左手を膝の上に置き(劍鞘)右手を(劍身)膝の上の左手の劍の鞘の中に入れ又出して乳の上の處にて眞言を誦へ乍ら加持することをいふのである、一體此不動尊の印明を結誦することは、佛道修行の途上に於ては種々の惡鬼魔神が行者の身邊に出沒して邪魔をして正道に妨難を加へんとする。故に今不動明王の印明を結誦してかゝる惡鬼毘那夜迦の障害を除滅退治せんとするのである。

如來鉤

如來鉤とは、又は大鉤召の印ともいふのである。鉤召とは鉤を以て縛して引き入れるの義である。既に前に述べた如く、不動尊の印明を結誦して一切魔神を退治し盡したから、更に一切衆生は勿論惡魔畜生の類をも皆悉く之を鉤召して佛の會處に引入して正道に住せしむるのである。

示三昧耶

七支念誦法には、如來鉤と次の虛空藏轉明妃との間に、再び入佛三昧耶の印明を出し、而して其の次に事供養・理供養の事を出してをる。事供養とは、佛に對して閼伽(水)花塗香・飮食・燈明等いろ／＼の供養物を獻じて供養することで、理供養とはかゝる品物を供養せずして、唯だ心に內觀することをいふのである。本文の中に「有表」とあるは事供養を意味し「無表」といふは理供養を言ふたのである

入佛三昧耶のことを、玆では示三昧耶といふて居る。卽ち經の本文に「奉示三摩耶」とあるは是である。今は三摩耶に四種の意義ある中、本誓の意に解釋するのである。卽ち願くは諸佛本誓悲願を垂れ給うて我等を哀愍し、求むる所の悉地(しつち)を成就せしめ給へと本尊に祈誓し其の指示を仰ぐからである。本文に「決定相應故」といふは佛の本誓空しからず決定して相應加持するの意である。眞言宗では佛に獻ずる供養物は閼伽（水）塗香・花鬘・飯食・燈明・燒香の六種類に定つて居るので之を六種供養といふて居る。而も此の六種の供養物は菩薩の修行すべき六波羅蜜の法門を標示したものであると說くのが密教の見方である。卽ち閼伽は檀波羅蜜、塗香は戒波羅蜜、花鬘は忍辱波羅蜜、燒香は精進波羅蜜、飯食は禪那波羅蜜、燈明は般若波羅蜜に該當することになつて居る。

虛空藏轉明妃

虛空藏轉明妃とは、既に佛に對して六種の供養物を奉献したから、その供養物が普く十方虛空に遍滿して、無邊の功德

歸命供養する法を修するので、是を常に供養念誦法などゝいふ。密敎の供養法には廣略多樣にあるが就中金剛界胎藏界兩部の大法の如きは最も廣義のものであり、彼の十八種の印明を以て組織する所謂十八道の如きは略義のものである。今此に出す所の七支念誦隨行法は大日經供養次第法を更に簡略にしたものである。而して又彼の大日經略攝念誦隨行法は一名五支念誦法とも稱するが七支念誦法を更に一層簡單にした法である。七支念誦法とは言ふまでもなく、印明が七種あり、五種とは七支の中、法界生と轉法輪の二印明を略したものである。支とは支分の意で、草木に枝がある如く印や眞言が種ゝ差別して居る故に名づけたのである。「隨行法」とは行者の欲するまゝに有緣の佛を本尊と定めて之を召請し(おまねき)其尊の印明を結誦して供養法を修するのである。五支念誦法とは卽ち、一入佛三昧耶、二不動尊、三如來鉤、四虛空藏轉明妃、五擐金剛甲冑で、七支念誦法とは、一入佛三昧耶、二法界生、三轉法輪、四不動尊、五如來鉤、六虛空藏轉明妃、七擐金剛甲冑である。以下少しく是等について說明する。

入佛三昧耶

入佛三昧耶とは凡夫の身を以て聖胎に入るといふ義である。梵語の三昧耶には、平等・本誓・除障・驚覺の四義ある中に於て、今は最初の「平等」の意を取つて解釋するのである。卽ち密敎に於ては、佛と衆生とは本來一體平等なるものであると說くが、元來此の入佛三昧耶の印明を結誦すれば、無始以來造れる所の諸の惡業は皆悉く消滅して佛の聖胎に入ることが出來ると說くのである。

法界生

旣に入佛三昧耶の印明の功德によつて衆生と佛と一體なることを悟つて佛の胎內に入つたのであるが、更に新しく佛家に出生するの理を法界生である。佛家とは十方法界の本源六大一實の本處である。

轉法輪

轉法輪とは金剛薩埵の印明をいふのである。金剛薩埵は大日如來の大智の作用をあらはしたので、法輪を轉ずることは如來の大智の作用なれば轉法輪を金剛薩埵の印といふのである。今金剛薩埵の印明を結誦することによつて、一切衆生の迷を斷破して悉く正道に誘引することを表したのである。

不動尊

不動尊とは又は無動尊ともいふ。是は不動の劍印を結び眞言(ナウマクサマンダバザラダンセンダマカロシヤダソワタ

大毘盧遮那成佛神變加持經略示七支念誦隨行法解題

本書の譯出

不空三藏は金剛智三藏の法資にして、三藏が師の金剛智に隨て支那へ來たのは、唐の開元八年、玄宗皇帝の時で十六歳である。而して三藏は支那に來つて後、師の金剛智三藏と倶に、數多の經軌を翻譯して密教の恢弘につとめられたのである。開元二十九年師金剛智入滅の後遺命に依て師子國に到り、普賢阿闍梨に從て兩部の大法を傳へ、天寶五年再び長安に還り、爾後、一方には金剛頂部に類屬する經軌等數多譯出すると共に、更に他方には胎藏法部に類屬する經軌等も亦譯出して所謂兩部密教の宣揚につとめられたのである。今本卷に出す所の大毘盧遮那成佛神變加持經七支略示念誦法一卷を始め、大日經略攝念誦隨行法一卷(又は五支略念誦法)や、毘盧遮那五字眞言修習儀軌一卷等は、彼の師金剛智三藏の翻譯した要略念誦法など〻共に等しく胎藏法に系統付く儀軌にして、專ら胎藏法の觀行や、念誦の次第を略示したものである。本書は不空三藏天寶五年より大曆六年に至るの間に譯したものである。

十指異名

密教の經典や儀軌を繙くときは、大抵の場合に眞言や印契のことが說いてある。印契とは、手でいろ〳〵の形を結ぶことでこれに密教特有の義理を表示して居る。密教では兩手や十指に各〻異名を附けて居るが是は經典儀軌を讀むに際して豫め知つて置く必要がある。

右手＝金剛界　佛界　慧　觀　般若　智　日
左手＝胎藏界　衆生界　定　止　三昧　福　月

			(不空傳)		(善無畏、金剛輪傳)		
右手	大指	空	禪	慧	輪	智	識
	頭指	風	進	定	益	力	行
	中指	火	忍	念	光	願	想
	無名指	水	戒	進	高	方	受
	小指	地	檀	信	勝	慧	色
左手	小指	地	慧	信	勝	檀	色
	無名指	水	方	進	高	戒	受
	中指	火	願	念	光	忍	想
	頭指	風	力	定	益	進	行
	大指	空	智	慧	輪	禪	識

七支念誦隨行法

眞言密教に於ては、口に眞言を誦し、手に印契を結び、意に本尊の本誓を觀念することを必要とするので、是を常に三密の觀行といふ。かくして有緣の本尊に

通及び福智、　現世に遍照尊に同なり。

行者念誦分限畢已つて、珠を頂上に捧げ、　勤に大願を發し、然る後三摩地の印を結びて　法[七三]界體性三昧に入り、五字旋陀羅尼を修習せよ。

諸法は本より不生なり。　自性は言説を離れたり。　清淨にして垢染なし、　因業なり、　虚空に等し、　旋つて復諦に思惟せよ、　字字に眞實を悟れ、　初後差別すと雖、　所證は皆一に歸す。　是の三昧を捨てず、　兼て無緣の悲に住し、　普く願くは諸の有情、　我の如くにして異有ることなし。

行者三昧より出で已つて、即ち根本印を結べ。本明を誦すること七遍せよ。[七四]復八大供養を以て、諸佛を供養し、　妙音詞を以て稱揚讃歎して閼伽水を獻じ、　降三世の印を以て左に旋らして　解界[七五]し、即ち金剛解脱の印を結び、諸聖を奉送して各本土に還したまふ。印とは前の三昧耶の印を結び忍願華を承けて頂上に至つて散ぜよ。

眞言に曰く、

唵　訖里炻嚩薩　嚩薩怛嚩　喋託　悉地苛多曳他努識蘖　瑳特鍐　沒駄尾灑焆補娜識麼壓那也　都唵麼折囉　薩怛嚩　穆

是の法を作し已つて、　重ねて三昧耶印を以て、　加持の明を誦し以て四處を印し、然る後灌頂せよ、金剛の甲冑を被、前の四禮に依つて四方の佛を禮し、懺悔發願等をなし、然る後、閑靜處に依つて、嚴るに香華を以てし、本尊三摩地に住し、方廣大乘經典を讀誦し、意に隨つて經行せよ。　若し衆生有つて、[七六]此の教に遇うて、　晝夜四時に精進して修すれば、　現世に　[七七]歡喜地を證得し、　後の十六生に正覺を成ず。

金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法（終）

るが故に縛（バ）字自性言説不可得なるが故に羅字塵垢不可得なるが故に羅字塵垢不可得なり。羅字塵垢不可得なるが故に賀字因業不可得なり。賀字因業不可得なるが故に佉（キヤ）字等虚空不可得なりと順次に觀ずるをいひ、之と反對に逆觀とは佉字等虚空不可得なるが故に賀字因業不可得なり。賀字因業不可得なるが故に羅字塵垢不可得なり乃至阿字諸法事不生不可得なりと逆次に觀ずるなり。字に不可得の原理を觀ずるを「眞實を悟れ」といふ。

【七四】　復八大供養とは、後供養なり。

【七五】　解界とは、結界を解くことにて、即ち修法のために道場を結びたるものを修法終つて後解界法を行ふ、かくて本尊も亦本土に送り返す之を撥遣法といふ。

【七六】　此教とは、眞言密教なり。

【七七】　歡喜地とは、菩薩の修行位たる十地の中の初位であるが、密教では金剛薩埵の内證たる本初の心地を初歡喜地といふ、顯教の説に同じからず、從つて十六生とは、生とは隔生の生にあらずして功德生なりといふ。即ち、凡夫此身此儘にて十六大菩薩の功德を生ぜしむるの意なり。

以用て諸佛の會を供養せよ。金剛縛を散ずること香を埀るが如く、香氣十方界に周流す。

眞言に曰く、

唵　蘇蹴鑁儗

金剛塗香印を以て、[六五]五分法身智を具することを得。是の如く廣く佛事を作し已つて、次に[六六]應に諦に心に念誦すべし。先づ當に一緣に本尊を觀ずべし。四明を以て已體に引入し、身と尊と二あることなく、色相威儀皆與に等しく、衆會眷屬自ら圍遶して[六七]圓寂大鏡智に住すと知れ、定・慧の二羽金剛縛にして、忍・願刀の如く進・力を附けよ。先づ金剛百字明を誦せよ、加持して傾動せざらしめんがために。

眞言に曰く、

唵　麼折囉　薩怛嚩　三麼耶麼努播攞耶　麼折囉怛嚩　底尾　努播底瑟姹　涅里住弭婆嚩　素都使喩　弭婆嚩　阿努囉訖都　弭婆嚩　素補使喩弭婆嚩　薩婆悉地彌鉢囉也瑳薩婆羯麼素遮弭　止多室利藥句嚧　吽呵呵呵呵斛　薄伽梵薄伽梵薩婆怛他蘗多麼麼折囉寐悶遮　麼折唎婆嚩摩訶三麼耶薩怛嚩惡

摩訶衍百字眞言を以て加持するに由るが故に、設ひ[六八]五無間罪を犯し、一切諸佛及び[六九]方廣經を謗ずるも、修眞言者本尊已身に堅住するを以ての故に、現世の所求一切[七〇]悉地す。所謂最勝悉地金剛薩埵悉地乃至如來最勝の悉地なり。[七一]金剛界の大印を改めず便ち本尊の根本明を誦せ。

眞言に曰く、

[七二]定・慧二羽に珠鬘を捧げ、本眞言七遍を加へ已つて、捧げて頂上に至り復心に當てゝ、堅く等引に住して念誦せよ。舌端微動して唇齒合せ、逆順に身を循（一本に修となる）らして相好を觀ぜよ。四時勤修して間あらしめず、千と百と限として復た是に過ぎてもせよ、一切神

四明とは、鉤・索・鏁・鈴の四菩薩の眞言(明)を誦すること。

【六七】圓寂大鏡智とは、中央大圓鏡智の意にして中央と邊と互に融通すと說くを以て卽ち中央大日如來の位に住する義なり。

【六八】五無間罪とは、五逆罪のことで父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、佛身より血を出し、和合僧を破す五の重大罪なり。

【六九】方廣經とは、諸大乘の經典のこと。

【七〇】悉地とは、Siddhi にして願望の成就することをいふ。

【七一】金剛界の大印とは、大日劍印なり、此の印明を結誦して行者を加持することをいふ。是れ本尊加持なり。

【七二】定慧二羽等とは、以下正念誦を說く。是は三密の中口密を明す。

【七三】是より三密の中意密たる字輪觀を說く法界體性三昧とは、中央法界體性大毘盧遮那如來の三昧に住してアバラカキヤの五字陀羅尼門を觀ずるなり。かく文字を月輪の上に觀ずるを字輪觀といふ。是は本尊の意密と行者の意密と本來融會して一體不二なりと觀じ之によりて凡位より聖位に至ることを得とす。之に順逆の觀じ樣あり。順觀とは阿(ア)字諸法本不生不可得な

金剛歌を以て供養するに由つて、久しからずして當に如來の辯を具すべし。次に金剛舞の妙印を結び妙妓（一本に奴）雲を以て普く供養すと觀ぜよ。定慧心に當て各旋舞して、金剛合掌を頂上に置け。

眞言に曰く、

唵　薩婆補而曳

妙舞を以て供養するに由るが故に、當に如來意生身を得べし。次に焚香を結ぶ外供養なり。此を以て普く佛海會を熏ず。和合金剛にして下に掌を散ぜよ。妙香雲法界に周ねしと想へ、

眞言に曰く、

唵　鉢囉訶羅𠲜儞

焚香を以て供養するに由るが故に、即ち如來無礙智(にょらいむげち)を得。次に金剛散華(こんがうさんげ)の印(いん)を結べ。此を以て諸の世界を莊嚴せよ。縛印を上に散ずること華を獻ずるが如く、芬馥たる華雲法界に遍ねし。

眞言に曰く、

唵　頗攞誐弭

金剛華を結ぶ供養に由て、速に如來[六三]四八相を證す。次に金剛燈明印を以て、普く佛會を照して光顯ならしめよ。禪智前に逼めて金剛縛にして、摩尼の燈光法界を照す。

眞言に曰く、

唵　蘇底惹仡哩

此の金剛燈を以て供養すれば、速に如來の[六四]淨五眼を具す。次に金剛塗香(こんがうづかう)の印を結び、

【六三】四八相とは、三十二相にして佛は三十二の相好を有したりといふ。

【六四】淨五眼とは、佛眼・法眼・慧眼・天眼・肉眼なり。

【六五】五分法身智とは、戒・定・慧・解脫・解脫法身智にて、密教にては戒とは衆生と佛と本來不二なりと知ることにて即ち三世無障礙智戒といふ。定とは生佛一體なりとの心に自心を安住せしむること、慧とは、生佛一體の理を明了に覺る智慧なり、解脫とは此の道理を明に悟りて自ら生佛相異るとの妄見を解脫することなり。解脫知見とはかゝる眞理を明了に知見する位にして密教の菩薩は修行によつてかゝる五種の法身智を具足し得らるゝものにして大日如來は正しく五分法身智を圓かに具へたる法身なり。

【六六】次に應に諦にとは、以下本尊と行者との一體不二なる義を觀ずる入我我入觀を說く。三密の中身密なり。

唵　麼折略　娜識吽

次に金剛法歌詠を以て、如來の諸の福智を讃揚したてまつれ、諦に相好を觀じて清音を運んで、以て如如眞性の理に契ふべし。

眞言に曰く、

唵　麼折囉　薩怛嚩　僧葉囉訶　麼折囉　囉怛那　麼努怛嚂　麼折囉達摩識也奈　麼折囉羯麼羯略婆嚩

次に金剛嬉戲印を結び、如來の內眷屬を成就せよ。定・慧和合して金剛縛にして、禪智二度心に當てゝ豎てよ。

眞言に曰く、

略　摩訶囉底

嬉戲を以て供養するに由るが故に、久しからず當に金剛定を證すべし。

次に金剛華鬘の印を結べ、妙鬘雲法界に普ねしと觀ぜよ。前印を改めずして捧げて前めよ、寶鬘を奉じて用て首を嚴ると想へ、

眞言に曰く、

唵　略波戍鞞

金剛鬘を結ぶ供養に由つて、當に灌頂法王の位を受(一本に授)くべし。

次に金剛歌詠の印を結び、妙音聲を以て佛智を讃ぜよ。前印臍より口に至て散じ、妙樂音を演べて聖會を娛しめよ。

眞言に曰く、

唵　秫嚧怛囉燥谿

唵　麼折囉　三麼惑　弱

次に[六一]金剛鉤大印を結べ、　一切如來鉤召の智なり、　定・慧和合して外に相叉へ進・度鉤の如く、獨り三たび屈せよ。

眞言に曰く、

唵　阿夜係弱

次に金剛索の大印を結べ、[六二]尊の身を智體に引入せよ。　前印の禪度定掌に入れ、　力・智相捻して、環勢の如くにせよ。

眞言に曰く、

唵　阿係吽吽

次に金剛鉤鎖の印を結べ、　能く本尊をして堅固に住せしめよ。　禪・智進・力相ひ鉤結す。

是を金剛能止印と名づく。

眞言に曰く。

唵　係薩怖吒犃

次に金剛妙磬の印を結べ、　能く諸聖をして皆歡喜せしめ、　禪智屈して金剛縛に入れよ、是を金剛歡喜印と名づく。

眞言に曰く、

唵　健吒　惡惡

次に平等性智の定に入れ、　閼伽の衆香水を捧げ持ちて、　諸聖無垢の身を浴すと想へ、　當に灌頂法雲地を得べし。

眞言に曰く、

【六一】金剛鉤大印とは、是より金剛鉤菩薩、金剛索菩薩、金剛鎖菩薩、金剛鈴菩薩の四菩薩を擧ぐ。

【六二】尊の身とは、道場觀の空中の大日如來を引入すること。

度を相ひ縈ひ繞らせ。縁（又は緣となる）光を絶たざること甲を繫るが如し。心・背・臍・腰・兩膝の上、喉・頂・額の前及び頂（頸となる）の後、悉く進・力を以て三たび旋り繞らせ。掌を散じて前に下りて天衣を垂る。即ち能く普く諸の衆生を護り、一切天魔壞すること能はず。

眞言に曰く、

唵麼折囉　迦轉制　麼折囉　句嚧　麼折嚕　麼折囉（哩）　娜含

次に彼の歡喜の印を結ぶべし、定・慧二羽三たび相ひ拍て、[五八]拍印を以て加持するに由るが故に、一切聖衆皆歡喜す。

眞言に曰く、

唵　麼折囉　都使斛

[五九]行者次に應に成所作智の三摩地を以て想ふべし。己身の前に於て無盡乳海を觀じ、大蓮華王を出生す。金剛を莖と爲し法界に周ねく、上七寶珍妙樓閣を想へ、天の如意寶を以て莊飾と爲し、華雲香海妓樂歌讃あり。寶樓中師子座上淨滿月の中より妙白蓮花を現ず。[六〇]鍐字門を觀ぜよ、大光明を放つて普く法界を照し、毘盧遮那如來となる。身色滿月の如く首に五如來の冠を戴き、妙紗縠天衣を垂れ、瓔珞を以て身を嚴り光明普ねく照せり。無量無數の大菩薩衆前後に圍遶し以て眷屬と爲る。行者一切如來をして咸く集會せしめんと欲せんがための故に。次に金剛王菩薩の三摩地を以て諸聖を召請したてまつる。

定・慧二羽金剛拳にして、臂を交へ胸を抱て進力を屈し、彈指して聲を發して世界に遍ぜしめ、諦に佛海普ねく雲集したまふと觀ぜよ。

眞言に曰く、

【五八】拍印とは、拍掌の印にして、拍掌とは掌を拍て聲を出すこと、即ち聖衆を歡喜せしむること、印は兩掌を三たび拍つなり。

【五九】行者次に以下は道場觀を説く。

【六〇】鍐（Vaṃ）は、大日如來の種子なり。

唵　薩婆怛他蘖多　三菩提涅里荼　麼折囉底瑟姹

諸佛大名稱、纔に是の明を說き已つて、等しく金剛界を覺りぬ。便ち眞實智を證す。時に彼の諸の如來、加持して堅固ならしめ已つて、還つて金剛より出でゝ、普く虛空に住したまふ。行者是の念を作さく、已に金剛定を證し、便ち薩婆若を具す。我れ正等(又は等正)覺を成ず、佛地に證入せしめんが爲の故に、當に[五三]金剛三昧耶を結ぶべし。[五四]十度圓滿して外に相ひ叉へ、忍願幢の如くして皆正直にせよ。心及び額と喉と頂とを印し各誦すること一遍して以て加持せよ。

眞言に曰く、

唵　麼折囉　薩怛嚩　地瑟姹　薩嚩　𤚥

[五五]即ち想へ、虛空の諸の如來、虛空寶を持して我が頂に灌ぎたまふと、定・慧和合して、金剛縛にして、進・力・禪・智・寶形の如し。以て額の上を印して加持し已つて、五佛の智冠を其の頂に在け、便ち[五六]智拳を分けて頂後に繞らせ、當に已に離垢の繒を繋けたりと知るべし。

眞言に曰く、

唵　麼折囉羅怛娜　阿避詵者𤚥　薩婆畝捺囉迷涅里傾句嚧嚩囉迦制那𤚥

[五七]行者復應に是の思惟を作すべし。我今已に正覺を成ぜり。當に一切衆生に大慈心を興し、無盡生死の中に於て恒に大誓莊嚴の甲冑を被、佛國土を淨め、衆生を成就して一切諸如來等に歷事して悉く一切衆生をして、菩提樹に坐して、天魔を降伏し最正覺を成ぜしめんと欲せんがための故に。應に三世如來慈悲の甲冑を被るべし。

智拳を以て鬘(一本に鬘となる)頂後に繫け已つて、便ち復、前に垂れて進力を舒べよ、唵砧二

【五三】金剛三昧耶等とは、即ち四佛加持を說きしものにて行者五相成身觀によりて大日如來と一體となるときは阿閦・寶生・彌陀・釋迦の四佛行者を加持して成佛を決定せしむることを說く。心は阿閦、額は寶生、喉は彌陀、頂は不空にして眞言七誦して印するなり。

【五四】十度とは、左右の十指なり。十波羅蜜の法門を象徵す。

【五五】想へ虛空の諸の如來とは五佛灌頂と稱して、五佛が行者に灌頂を授くる印明なり、大日如來は頂、阿閦は額、寶生は右頂彌陀は頂後不空は左頂に配當し、行者には五佛の寶冠を冠らしめ金剛界大日如來の智拳印を結ばしめて身を莊嚴するなり。

【五六】智拳とは、智拳印にして金剛界大日如來の結ぶ印なり。

【五七】行者復とは、行者已に正覺を成ぜしを以て更に大慈心を起して諸魔を降伏せんがために金剛の甲冑を身に着く印と明とを說く、甲冑は大悲を象徵し生死大海に入つて惡魔を降伏し衆生を利することを表す前の五佛灌頂までは自ら悟を開くことを述べ、是より後は佛國土を莊嚴し衆生を化益することを說く。

清淨にして瑕穢なし。長時に福智を積むこと、喩へば淨滿月の如し。體も無く、亦事も無し、卽ち說く亦月に非ず。福智を具するに由るが故に、自心滿月の如し。踊躍し心に歡喜して、復諸の世尊に白さく、我れ已に自心を見るに、清淨なること滿月の如し。諸の煩惱の垢、能執所執等を離れたり。諸佛皆告げて言さく、汝が心は本より是の如くなれども、客塵の爲に翳れたり。菩提心をば淨とす。汝淨月輪を觀じて、菩提心を得證せよ。此の心眞言を授く、密かに誦して觀照せよと。

唵　菩提質多　母怛跛娜夜彌

[四七]能く心月輪をして、圓滿して益よ明顯ならしめよ。諸佛復告げて曰く、菩提をば堅固なりとす。善く住して堅固(又は堅牢)なるが故に、復心眞言を授く、

唵　底瑟姹　縛折囉

[四八]汝淨月輪に於て、五智金剛を觀じて、法界に普周せしめよ。唯一の大金剛なり。應當に自身を知るべし。卽ち[四九]金剛界と爲る。

唵　縛折羅　怛麼句含

自身金剛と爲んぬれば、堅實にして傾壞なし。復た諸佛に白して言さく、[五〇]我れ金剛身と爲りぬ。時に彼の諸の如來、便ち行者に勅して言さく、身を觀じて佛形(又は佛體)と爲すべし、復此の眞言を授く、

唵　曳他薩婆怛他蘖多　薩怛　他含

心の清淨を證するを以て、自ら身を見れば佛と爲りぬ。衆相皆圓備せり。卽ち[五一]薩婆若を證す。定中にして遍く佛を禮したてまつる。願くは加持して堅固ならしめたまへ、一切諸佛[五二]金剛界の言を聞き已つて、盡く金剛の中に入つて、便ち金剛心を說きたまふ。

【四七】能く心月輪以下は第三成金剛心を說く。

【四八】汝淨月輪以下は第四證金剛心を說く。

【四九】金剛界とは、金剛身にして卽ち五智圓滿具足の佛身なり。

【五〇】我れ金剛身と爲りぬ以下は第五佛身圓滿を說く。

【五一】薩婆若(Sarva-jñāna)。一切智と譯す。佛果を證得した時にあらはれる智なり。

【五二】金剛界とは、行者のことにして、卽ち本有法身の佛と修生始覺の行者と加持感應して一體無二となるの義を說けり。又之を諸佛加持ともいふ。

唵　麼折囉鉢娜麼三昧耶　薩怛梵

行者、金剛定に入らんと欲せば、先づ妙觀察智の印に住せよ、[四〇]定慧二羽仰いで相叉ひ、進禪力智各相ひ拄へ、此の妙印を以て等引を修せば、卽ち如來不動智を得ん。

行者、次に應に[四一]阿娑頗那伽三昧を修すべし、端身正坐して、身動搖すること勿れ。舌上腭を拄へて出入の息を止め、其をして、微細ならしめ、諦に諸法を觀ずるに皆自心に由る。一切の煩惱及び隨煩惱、蘊・界入等は、幻と焰と健闥婆城との如く、旋火輪の如く、空谷の響の如しと。是の如く觀じ已つて、身心を見ず寂滅無相平等に住して、究竟眞實の智なりと以爲へり。爾の時に、卽ち空中を觀ずるに無數の諸佛、猶ほ大地の中に滿つる胡麻の如し、皆金色の臂を舒べ彈指して警めて是の言を作して言さく、善男子汝が所證の處は一道清淨なり。未だ[四二]金剛喩三昧薩婆若智を證せず、知足を爲す勿れ。應に普賢を滿足して最正覺を成ずべしと。

行者警を聞き已つて、定中に普く足を禮し、唯(又は惟)願くは諸の如來、我に所行の處を示したまへと。諸佛同音に言さく、汝應に自心を觀ずべしと。既に是の說を聞き已つて、敎の如く自心を觀じ、久しく住して諦に觀察するに、自心の相を見ず。復佛足を禮せんと想ひ、白して言さく、最勝尊、我れ自心を見ず、此の心をば、何なる相とやせん。諸佛咸く告げて曰く、[四三]心相は測量し難し、心眞言を授與す、理の如く諦に心を觀ぜよ。

唵　質多鉢囉底　微鄧伽嚕彌

[四四]念(又は食)頃に便ち心を見るに、圓滿なること淨月の如し。復是の思惟を作さく、是の心何物とやせん。煩惱と[四五]習と種子と、善と惡と皆心に由る。心を阿賴耶と爲す。淨を修して以て因と爲す。六度重習するが故に。彼の心を大心とす。[四六]藏識は本と染に非ず、

【四〇】定慧二羽等とは、彌陀定印のことなり。

【四一】阿娑婆那伽三昧(Āśvā-sa-upānaka)とは、無識身三昧とも譯す、數息觀なり。五相成身觀の前方便として修するを常規となせども、眞言宗で阿字觀等を修する際も亦之を修す、端身正坐して支節を動せず、舌を上腭に拄へて出入の息を一より十まで數へて行くなり。

【四二】金剛喩三昧とは、金剛喩定、金剛心とも稱す、金剛の如く堅固摧破の作用ある禪定にして此禪定起るときは一切の煩惱を斷盡せらる。

【四三】心相は測量し難しとは、五相成身觀の中の第一通達菩提心を說く。

【四四】念頃とは、一念の頃の義にして是より以下は第二修菩提心を說く。

【四五】習とは、習氣のことにして、卽ち煩惱の種子を斷ずるも猶ほ其煩惱の氣分殘存せり之を習氣といふ。

【四六】藏識とは、第八阿賴耶識(Ālaya-vijñāna)にして一切萬法の根源にして有情輪廻轉生する主體なり。

せよ。

眞言に曰く、

唵　麼折羅滿駄怛囉吒

八葉白蓮一肘の間　阿字素光の色を炳現す、　禪智倶に金剛縛に入れて、　如來寂靜智を召入す。

眞言に曰く、

唵　麼折囉微舍惡

次に如來堅固拳を結べ、　進力屈して禪・智の背を柱へ、　此の妙印相應するを以ての故に、即ち諸佛智を堅持することを得。

眞言に曰く、

唵　麼折囉母瑟知　ム

次に[三九]威怒降三世を以て、　內外所生の障を淨除す。　二羽臂を交へて金剛拳にし、　檀・慧相鉤して進・力を竪て、　行者想へ、身に威焰を發し、八臂四面利牙を竪て、　震吼せる吽字は雷音の如しと。　頂上右に旋つて結界を成せ。

眞言に曰く、

唵遜婆儞遜婆吽　仡里畳拏仡里畳拏吽　仡里畳拏　阿播那吽　阿難耶斛　薄伽梵　麼折囉吽發吒

次に蓮華三昧耶を結べ、　三摩地を成就せしめんが爲に、　定・慧二羽金剛縛にして　檀・慧・禪・智和合して竪てよ。　此の眞言密印に由るが故に、　三昧を修行して速に現前す。

眞言に曰く、

にて(華嚴經第四十、普賢行願品)。

【三五】正受とは、禪定に入つて散亂の心を統制すること。

【三六】普賢三昧耶とは、普賢菩薩の三昧耶なり。三昧耶は本誓の義なり。普賢菩薩は金剛薩埵と同體なりとす。

【三七】極喜三昧耶とは、我身と佛と平等一體なりとの妙觀に入ること。

【三八】金剛縛とは、兩手を外に相縛するを外縛といひ、內に相縛するを內縛といふ、今は外縛なり。

【三九】威怒降三世とは、降三世明王なり。

妙法輪を轉じたまへと勸請したてまつる。又、皆諸の世尊、[二八]般涅槃せずして恒に世に住したまへと勸請したてまつる。所有如來三界の主の、般無餘涅槃に臨みたまふ者をば、我皆恒に久しく住して、悲願を捨てず世間を救ひたまへと勸請したてまつる。[二九]懺悔し隨喜し勸請したてまつる福を以て、願くは我れ菩提心を失せず、諸佛と菩薩との妙衆の中にあつて、常に善友の爲に厭捨せられず、[三〇]八難を離れて、無難に生じ、[三一]宿命住智あつて、身を莊嚴し、愚迷を遠離して悲智を具し、悉く能く波羅蜜を滿足し、富樂豐饒にして、勝族に生じ、眷屬廣多にして恒に熾盛ならん、四無礙と[三二]十自在と、六通と諸禪とを悉く圓滿せん、[三三]金剛幢と及び[三四]普賢との如く、願讃し迴向することも亦是の如し、

行者次に三摩地を修して、跏坐し端身にして、[三五]正受に入り、四無量心を以て法界を盡し、修習運用すること法教の如し、即ち[三六]普賢三昧耶に入れ、體薩埵金剛に同なるが故に、定・慧和合して金剛縛にして、忍願の二度建てゝ幢の如くせよ、纔に本誓の印眞言を誦すれば、身月輪に處して、薩埵に同ぜん。

眞言に曰く、

唵　三磨耶薩怛梵

次に[三七]極喜三昧の印を結べ、此の悅樂を以て諸聖に契せよ。忍・願滿月掌に入れ、禪智・檀慧倶に申べ立てよ。

眞言に曰く、

唵　三摩耶斛蘇囉多薩怛梵

此の妙印及び眞言に由て、一切聖衆皆歡喜す、次に當に心を開いて佛智に入るべし。怛囉吒の字を乳の上に想へ、[三八]金剛縛を掣して心の前に當て、二字樞を轉じて扇を啓くが如く

波羅蜜等の法門をいふ。

【二六】道樹とは、菩提樹にして佛は此樹の下にて悟を開けり。

【二七】一切世燈とは、五悔の中勸請を說く、一切世間の迷暗を照破する照明燈と稱すべき法身大日如來が瑜伽の道場に端坐して清淨の覺眼を開いて三界を照破して居ることをいふ。

【二八】般涅槃と訓ず、圓寂と譯し(Parinirvāṇa)生死の因果を斷じて悟を證すること。

【二九】懺悔しとは、五悔の中至心回向を說く。

【三〇】八難とは、佛道修行に障難ある八ヶ處なり。一に地獄、二、餓鬼、三、畜生、四、北倶盧州、五、悲想天、六、盲聾瘖瘂、七、世智辯聰、八、佛前佛後。

【三一】宿命住智とは、六神通の一にして宿世の事情を洞察する神通なり。

【三二】十自在とは、壽命自在・心自在・莊嚴自在・業自在・受生自在・解脫自在・願自在・神力自在・法自在・智自在。

【三三】金剛幢とは、金剛幢菩薩が十回向の法門を說て稱歎されて居ることをいふ。（華嚴經第十四十回向品）

【三四】普賢とは、普賢菩薩が回向の行願を垂れて居ること

唵　薩婆怛他蘗多　布惑　毘囉迦耶　怛麼南　涅哩夜多夜弭　薩婆怛他蘗多　麼折囉囉怛那毘詵遮薩縛鋡、

此の身を獻じて妙に請ずるに由るが故に、久しからずして當に三界主と爲るべし、轉法輪を供養し求めんが爲めに、次に應に[一八]無量壽を敬禮すべし。金剛合掌して頂上に置き、口を以て地に著けて其の身を奉れ、

眞言に曰く、

唵　薩婆怛他蘗多　布惑鉢囉　靺嘌多、那夜怛麼南　涅哩夜多夜弭　薩婆怛他蘗多、麼折囉達摩　鉢囉靺嘌多夜　鋡、

此の身を獻じて誠請するに由るが故に、當に救世轉法輪に同ずべし。復た當に[一九]不空尊を敬禮すべし。羯磨を供養し求めんが爲の故に、金剛合掌して心の上に當て、頂を用て地に著けて奉獻せよ。

眞言に曰く、

唵　薩婆婆他蘗多　布惹羯麼抳阿怛麼南涅哩夜多弭、薩婆怛他蘗多　麼折囉羯麼枳句嚕鋡、

是の獻身の方便に由るが故に、便ち能く種種の身を示現す。[二〇]次に己身を以て[二一]佛海の前にして、合掌胡跪して諸の咎を懺せよ。[二二]無始より[二三]諸有の中に輪廻して、身口意業より生ぜる所の罪を佛菩薩の懺悔する所の如く、我れ今陳懺することも亦是の如し。[二四]又深く歡喜の心を發して、一切の[二五]福智聚を隨喜すべし。諸佛と菩薩との行願の中の、金剛の三業より生ずる所の福と、緣覺と聲聞と及び有情との、集むる所の善根を盡く隨喜す。復諸佛の[二六]道樹に坐したまへるを觀じて、己身各法輪を轉じたまへと請じたてまつる。[二七]一切世燈の道場に坐して、覺眼開敷して三有を照したまふをば、我れ皆胡跪して先づ、無上

に於て初め阿閦如來（A'kṣo-bhya）を說く、阿閦如來は東方に位し、一切如來の菩提心を總括する佛身なり。

【一七】寶生尊（Ratna sam-bhava）は南方に位し一切如來の福德を主宰する尊なり。

【一八】無量壽（Amitāyus）とは、西方に位する阿彌陀佛にして妙觀察智を以て衆生を說法敎化する佛なり。

【一九】不空尊（Amogha-siddhi）は北方の釋迦如來にして成所作智を以て衆生を救濟する佛なり。

【二〇】次に己身を以てとは、以下歸命・懺悔・隨喜・勸請・迴向の五悔の文を出す。中に於て、初の歸命の文を出さゞるは先に四佛禮の印眞言あるが故なり。

【二一】佛海とは、諸佛の集つて居る所をいふ。

【二二】無始よりとは、五悔の中、至心懺悔を說く、

【二三】有とは、生死の果報にして、人類が、欲界色界無色界等の三界に在りて生死の果報を受けて迷うて居る有樣をいふ。

【二四】又深くとは、五悔の中隨喜を說く。

【二五】福智聚とは、菩薩の修行すべき檀戒忍進禪慧等の六

次に應に[一四]運心して法界に遍じ、塵刹佛海虛空に滿ぜしむべし。吽字の種子を以て三業に加へ、[一五]金剛起を結びて遍く警覺し、壇慧鈎結して金剛拳にして、進・力二度合して三たび擧げよ。

眞言に曰く、

唵　麼折囉　底瑟姹、

此の眞言（一本に語）と印との加持に由つて、諸佛寂靜の樂を貪らんとしたまはず、悉く定より起つて集會に赴き、行人を觀察して同じく攝受す。次に金剛持大印を結びて、一一如來足を禮すと思へ。禪・慧檀・智相叉ひ、右の膝地に著けて頂上に置け。

眞言に曰く、

唵　麼折囉勿、

纔かに金剛持印を結び已んぬれば、一切の正覺皆隨順したまふ。即ち[一六]十方諸佛の前に於て、禮事供養すること皆圓滿す。諸の如來に承事したてまつらんと欲ふが爲に、身を捨て、阿閦佛に奉獻したてまつる。全身を地に委けて心を以て禮し、金剛合掌を頂上に舒べよ。

眞言に曰く、

唵薩婆怛佗蘖多　布儒波薩他娜野阿怛麼南涅哩夜多夜弭、薩婆怛他蘖多麼折囉薩怛嚩阿地瑟姹、

薩嚩　唅、

此の眞言身印に由るが故に、即ち菩提心を圓滿することを得。

次に[一七]寶生尊を敬禮すべし、灌頂供養を奉けんが爲の故に、金剛合掌して下心に當て、額を以て地に著けて奉獻を爲せ、

語の四菩薩に歸命することを説く。

【八】使とは、煩惱のこと、驅役の義にして煩惱はよく人を驅使するが故に名づく。

【九】四無碍辯又は四無碍智といふ。諸佛諸菩薩の説法の智辯なり。一法無碍二義無碍智、三辭無碍智、四樂説無碍智。

【一〇】諸佛衆生とは、不空成就佛の四親近たる語・業・牙・拳の四菩薩に歸命することを説く。

【一一】魔羅とは、又は單に魔といふ。能奪命、障碍、擾亂と譯す。即ち人を擾亂せしむる煩惱なり。

【一二】印可とは、又は許可といふ師より傳授を許可せらること。

【一三】輪壇とは、曼荼羅を造ること、今土壇を築き諸尊を布列して灌頂を行ふことを説く。

【一四】運心と讀む。修法をするとき專ら觀念のみを以てして一々の所作をなさゞること。

【一五】金剛起とは、法界の諸佛を定中より驚覺して起たしむる法にして、吽字の種子は驚覺の意味を表す。驚覺とは覺醒せしむることなり。

【一六】即ち十方諸佛前とは、此より阿閦如來・寶生如來・無量壽如來・不空成就如來の四佛を禮拜することを説く、中

金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法

大唐贈開府儀同三司謚大弘教三藏沙門　金剛智　詔を奉じて譯す

[一]毘盧遮那佛　身口意業の虚空に遍ずると、如來三密門を演說せる、[二]金剛一乘甚深教とに歸命したてまつる。我れ[三]瑜伽最勝法に依つて、如實修行の處を開示せん、衆生をして眞實を顯し、頓に無上正等覺を證せしめんが爲なり。弟子菩提心を堅固にし、師に隨つて已に[四]灌頂の位を受け、妙に定慧を修して恒に觀察し、深く業用善巧門に入る。

[五]諸の有情を勝菩提に導き、四攝の法を以て攝取せよ、無厭の大悲未だ嘗て捨てず、小善を行ずるを見て便ち稱美す。[六]無住の檀施虚空に等しく、能く慧光を以て愚暝を破す。樂求する所あらば恒に逆はず、言を發して先づ笑うて心喜ばしむ、[七]能く妙法無染の中に於て、善く般若を用て諸使を斷ず、無上の法輪恒に退せず、[九]四辯を以て演說するに畏るる所なし。[一〇]諸佛は、衆生事業の中に於て、恒に大誓慈の甲冑を被、[一一]魔羅の勝軍衆を摧敗して、堅く諸佛の祕する所の門を持す。斯の如く衆德を具する者は、方に[一二]印可し傳授なすに堪へたり。先佛聖仙の所遊の處、種種の勝地と或は山間と、精室を建立して[一三]輪壇を布き、香泥を以て塗拭して尊位を爲り、燈明閼伽皆布列し、妙華を地に散じて以て莊嚴し、衆生と器世間とをして、純一淨妙にして佛土と爲さしめんとす。此の自他清淨の句を以て、理に應じて思惟して密かに稱誦せよ。

眞言に曰く、

唵　薩嚩婆嚩戍陀　薩婆達摩　薩嚩婆嚩戍度含、

【一】梵に大毘盧遮那如來(Mahāvairocanatathāgata)といひ大日如來と譯す。眞言密教の根本教主にして、一切の萬德を總括す故に普門萬德の尊といひ、自餘の諸尊は普門萬德の大日如來の身より分化したる一門別德の尊なりといふ。

【二】金剛(Vajra)とは、金剛杵にして、自體堅固と利用摧破との二義あり。眞言密教の法門は恰も金剛杵の如き內容を有する甚深難思の教なれば眞言密教の法門を金剛一乘甚深教といふ。

【三】瑜伽最勝法とは、瑜伽とは梵語の(Yoga)にして相應と譯す。卽ち本尊と行者との一體無二なる理を實證する密教觀法なり、今は十萬頌の廣本をいふ。

※弟子とは、金剛界の四佛を歸命する文なり。

【四】灌頂(Abhiseka)とは、密教の法脈を繼承する最高の儀禮なり。

【五】諸の有情とは、阿閦如來の眷屬たる薩・王・愛・喜の四親近に歸命すること。

【六】無住のとは、寶生如來の四親近たる法・光・幢・笑に歸命することを說く。

【七】能く妙法とは、無量壽如來の四親近たる寶・利・因・

先づ順に觀ずるとは、阿字諸法本不生不可得なるが故に縛字自性言說不可得なり。縛字自性言說不可得なるが故に羅字塵垢不可得なり。羅字塵垢不可得なるが故に賀字因業不可得なり、賀字因業不可得なるが故に、佉字等虛空不可得なりと觀ずるのである。次に逆觀とは之と反對に觀ずるので、則ち佉字等虛空不可得なるが故に、賀字因業不可得なり。賀字因業不可得なるが故に羅字塵垢不可得なり。羅字塵垢不可得なるが故に、縛字自性言說不可得なり。縛字自性言說不可得なるが故に、阿字諸法本不生不可得なりと觀ずるのである。密教に於ては、阿・縛・羅・賀・佉の五字は、五佛、五智を意味するものとして居るから、五字を觀ずることは、取りもなほさず、法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の五智を圓滿に具足する大日如來、阿閦如來、寶生如來、阿彌陀如來、釋迦如來の五佛を凡夫の一身の上に體得することとなるのである。

昭和六年一月五日

譯者　岡田契昌　識

ふ）觀ずるので、是等のものが次第に擴大して宇宙法界に遍滿すると觀ずるのであり、斂金剛觀とは斯く宇宙に擴大したものが次第に斂り來つて我が方寸の中に入つて來ると觀ずるのである。第四證金剛身とは前の位に於て觀じた五鈷杵や蓮花等が直ちに自身なりと觀ずるのである。第五佛身圓滿とは、蓮花又は五鈷杵等の三摩耶身が一轉して本尊身と成ると觀ずるので「我金剛身と爲りぬ」とあるは是である。五相成身觀を説いた經軌は

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經三卷（正藏第十八卷）　不空譯
金剛頂經瑜伽十八會指歸一卷（正藏十八卷）　不空譯
金剛頂瑜伽中略出念誦經四卷（正藏第十八卷）　金剛智譯
金剛頂蓮化部心念誦儀軌（正藏第十八卷）　不空譯
金剛頂經觀自在王如來修行法（正藏第十九）　金剛智譯
金剛頂經觀自在王如來修行法（　同　）　不空譯
金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論（正藏三十二卷）　不空譯
成就妙法蓮花經王瑜伽觀智儀軌一（正藏第十九卷）　不空譯
金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌經（正藏十九）　不空譯
金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩供養儀軌（正藏二十）　不空譯
金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀（正藏十九）
大樂金剛薩埵修行成就儀軌（正藏十九）

次に道場觀であるが、密教の修法の際は必ず出て來る所である。本書にも、金剛界の大日如來の種子たるバン（鑁）字を出し、此鑁字變じて大日如來となると觀ずるのである。即ち文に「鑁字門を觀じて大光明を放ち法界を照して大毘盧遮那如來と爲る。身色、月の如く、首に如の來冠（五智の寶冠といふ）を戴き、妙紗穀天衣を垂れ、瓔珞身を嚴り、光明普く照せり。無量無數の大菩薩衆前後に圍遶し、以て眷屬となる」とある。次に正念誦を説いて居る。正念誦は修法の上では極めて大切の作法で、念珠を兩手に持ち、胸の邊に捧げつゝ本尊の眞言を唱へるので、斯くすることによつて本尊の語密と行者の語密と互に感應して凡夫の口業此まゝにて佛の語密を成ずることが出來ることになる。本書に「次に應に諦に心に念誦すべし」といひ、又「身と尊と二あることなし、色相威儀皆與に等し」などゝあるのは此の理を説いたものである。

字輪觀

本書に「行者念誦分限畢んなば、珠を頂上に捧げ、勤に大願を發せ、然る後三摩地印を結び、法界體性三昧に入つて、五字旋陀羅尼を修習せよ」とあるのは是である。則ち行者は先づ法界定印又は彌陀定印を結んで膝の上に置き、心月輪の上に阿尾羅吽欠の五字を觀じて之を順と逆とに旋轉して觀ずるのである。此の順逆旋轉は字義に就て之を修するのである。

智や不空三藏の譯した金剛界に屬する經軌に見える所である。また本書には初に五悔の文が出て居る。五悔の文は眞言宗に於て懺悔禮佛の爲に唱へる文で、胎藏界では九方便の文を唱へることになつて居る。九方便の文とは、一、作禮方便、二、出罪方便、三、歸依方便、四、施身方便、五、發菩提心方便、六、隨喜方便、七、勸請方便、八、奉請法身方便、九、回向方便(大日經七增益守護清淨品正藏十八)である。是に對し金剛界行法では多く五悔の文を唱へる。五悔とは、第一至心歸命、第二至心懺悔、第三至心隨喜、第四至心勸請、第五至心回向で、五悔の文の出て居る經軌としては

金剛頂蓮花部心念誦儀軌 (正藏第十八) 不空譯
金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經 (卷二の上正藏十八) 不空譯
如意輪觀自在菩薩念誦儀軌一卷 (正藏第二十卷) 不空譯
藥師如來觀行儀軌一卷 (正藏第十九) 金剛智譯

等で、是等には五悔の文が皆悉く出してある。然るに金剛頂經金剛界大道場毘盧遮那如來自受用身内證智眷屬法身異名佛最上乘祕密三摩地禮懺文一卷(正藏第十八)や今出す所の三摩地法などには第一至心歸命の文が特にない。之にに就て初めに四佛を禮する文があるからだといふ説もある。(稟承錄)

五悔	
至心歸依	十方正等覺……歸命す等
至心懺悔文	無始より諸有の中に輪迴して等
至心隨喜文	又深く歡喜の心を發して等
至心勸請文	一切世燈の道場に坐して等
至心回向文	懺悔し隨喜し等

五相成身觀に就て

五相成身觀は既に述べた如く眞言瑜伽行者が金剛界立(ダテ)の修法によつて五種の階位を經て如來の五智を修得し自身に於て毘盧遮那法身の大果を修習する所の觀法で、密敎に於ては極めて重要なものである。儀軌に示す規定によれば此の觀に入るには前以て調心觀とも稱すべき無識身三昧觀十緣生句觀等に入ることを說いて居る。而して五相成身の名目に就ては種々あるが、十八會指歸(正藏十八)によれば一、通達菩提心、二、修菩提心、三、成金剛心、四、證金剛身、五、佛身圓滿となつて居る。通達菩提心とは此位に於ては衆生の身中に滿月圓明なる淨菩提心を觀ずるのである、而も猶ほ此の位に於ては月輪は輕い霧に蔽はれて其光を圓かに發揮しないやうに淨菩提心は完全にあらはれないのである。第二修菩提心とは月輪が輕霧を完全に拂つたやうに正しく淨菩提心の滿月を認識する位である。第三成金剛心には廣金剛觀と歛金剛觀との二作用がある。廣金剛觀とは、月輪の上に蓮花又は五鈷金剛杵を(密敎では三摩耶身とい

金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法解題

金剛智三藏の譯經

金剛智三藏（670—741 A. D）の飜譯した經典儀軌は、金胎兩部並に雜部密教等に亘つて可成多くあるが、今特に金剛界に關するものだけでも少くない。例へば、

金剛頂瑜伽中略出念誦經四卷　（正藏十八）
金剛頂瑜伽理趣般若經　（但し支那僞經我觀密教發達志）
金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌　（正藏二十）
金剛頂經瑜伽觀自在王如來修行法一卷　（正藏十九）
觀自在如意輪瑜伽法要一卷　（正藏二十）
金剛頂經曼　室利菩薩五字心陀羅尼品　（正藏二十）
佛說無量壽化身大忿迅倶摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法一卷　（正藏二十一卷）

等あり、猶ほ今出す所の

金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法一卷

等も三藏の譯する所である。元來弘法大師の金剛頂經開題（全集第一）にもある通り、金剛頂經の原本は十萬頌あつたといふので、今揭げた所の諸書は大體に於て十萬頌の廣本の中より抄譯したものであらうことは、諸書の初に「今於二百千頌中金剛頂大瑜伽教王中一爲下瑜伽者成二就瑜伽法一者上略說二一切如來所攝眞實最勝祕密之法一」等とか「我依瑜伽金剛頂經」等の文のしばしば出て居るのを見ても自ら首肯される所である。

本書の飜譯

金剛智三藏が略出經を飜譯したのは、唐の開元十一年であつた。而して本書は實に開元十九年より二十四年（731—736 A. D）の飜譯となつて居る。有人は本書に就て

「金剛智、既に略出經を譯すと雖、直ちに以て金剛界法を行すべきに非ず。故に別に儀軌を撰し以て行法に便す。金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法是なり。猶ほ善無畏三藏供養法の大日經に於けるが如し
（密教發達志五。八）

と述べて居る。本書は空海、慈覺、智證、宗叡等の請來する所で殊に弘法大師は立教開宗に際し卽身成佛義を撰述するや、本書卷末の文たる「若し衆生あつて此の教に遇うて」、の數句を證文として引用されて居るのを見ても本書の價値は大なるものがある。

本書の內容

概して金剛界の經軌の特徵は本尊と瑜伽行者との關係を差別的に觀じ、五智の功德を修證顯得するに在るのである。而して本書には五相成身觀や道場觀正念誦字輪觀等を說いて居る、是等は常に金剛

次に杓相儀軌を說かん。

我れ今次に、注杓瀉杓の相を說くべし。此に於て成就を住(作)せば、持誦者速に獲べし、注杓は[69]一肘量なり。法(一本に佉となる)木堅密ならしめ、孔穴なきを作るべし。口は妙端嚴なるべし、橫は四指量なるべし。深の量は一指を用ゐよ。形は吉祥の字(一本に子となる)の如くして、中に於て三股杵ををけ、極めて端嚴ならしむべし。柄の圍は人の把るに足りぬ。口と柄の末とに近くして、蓮華の文を作るべし。寫杓の長及び圓さ、幷及び刻鏤の文は、皆注杓相の如くせよ。木も亦前の說の如し。或は[70]佉陀羅を用ゐよ。口は禪の上節を用て、旋匝して其の量とせよ。橫は一寸餘なるべし。深さの量は當に之に半にすべし、中に於て蓮花を作れ、亦或は金剛杵とせよ。

我今已に略して、注瀉二杓の相を說く、是れ[71]大仙の所說なり。[72]悉地を求めんものは、應に作るべし。持誦修行人(一本に護摩速に成就すとあり)

【六九】一肘とは、杓の柄の長をいふ。一肘の量を一尺五寸又は一尺八寸等とす。

【七〇】佉陀羅(Khadira)。又佉提羅迦とも稱し、植木の一種なり。

【七一】大仙とは、佛世尊のこと。

【七二】悉地(Siddhi)。前に出づ。

南莫三曼多沒駄南　吠室囉嚩拏野娑嚩訶

東北方伊舍耶天眞言に曰く、

南莫三曼多沒駄南　伊舍那耶娑嚩訶

上方梵天の眞言に曰く、

南莫三曼多沒駄南　沒囉啥銘寧娑嚩訶

下方地天の眞言に曰く、

南莫三曼多沒駄南　畢哩體微曳娑嚩訶

七曜の眞言に曰く、

南莫三曼多沒駄南　蘗囉醯濕嚩哩耶鉢囉跛多而溈底摩耶娑嚩訶

二十八宿の眞言に曰く、

南莫三曼多沒駄南　諾乞灑囉怛湼那佉曳娑嚩訶是の如く東方より此に至る歸命並に同じ

八方の中に於て兩位を加へて。上下の天と對せよ。曜は東、宿は西にせよ。諸獻並に同じ。若し須く別に祀るべし。獨り用ゆることも亦得。若し護摩壇の中には各本方に依つて心を標して住せしめよ、亦位を設けざれ。次に[六八]三摩波多の護摩の法を說かん。

成就する所の物を酥器の前に安んぜよ。或は物大ならば、卽ち右邊或は左邊に安んぜよ。行人の自身と酥の器と及び物と幷に爐と壍衆と、是の如きを五集とす。循環して次第に安立すべし。小杓を取つて杓に酥を滿て、所成(盛)の物の上に加へて眞言を誦して薩嚩の字に至つて卽ち杓を擧げて火に投じて訶の聲とともに倶に下せ。便ち長く訶の聲を引いて杓をして却つて物の上に至らしめて、訶の聲方に絕せよ。遍別に此の如くせよ。若し人を加持せば、卽ち杓を頭上に安んぜよ。若し本尊の眞言を用ゆるに薩嚩訶の字なくんば、當に之を加へて誦すべし。餘は上の所說の如し。

【六八】三摩波多法(Samāpatta)とは、究竟成就の法といふ、護摩の目的を達せんとする人の身體や物を加持して求むる所の目的を完全に成就せしむる法である。

卽ち少しく香水を葉の上に灑ぎて以て獻ぜよ。次に右の手の中無名の二指を以て少しく塗香を彈じて以て獻ぜよ。次に一花を獻じて之を座に置け。次に燒香を獻ぜよ。爐を以て香を座の前に焚け。次諸の座に獻ずるに同じく此の一爐を以てせよ。次に一杓の粥を挹みて、葉の上に置いて獻ぜよ。次に小蠟燭或は紙燭を用いて以て獻ぜよ。便ち粥の上に挿して香水より燭に至るまで各本眞言を以て加持すること三遍せよ。位毎に水より燭に至るまで獻じ畢れ。然も其の次に向つて、其燭作意して獻ぜよ。諸位に未だ遍ぜざるより已來は、用て滅せしめざれ。[六七]助伴或は驅使を須ひよ。數人各一物を執つて以て供事せよ。若し一一に自ら取らば卽ち燭必ず事を終へじ。位毎に薩嚩訶の上に於て求願する所の語を加へよ。東方天帝釋の眞言に曰く、

南莫三曼多沒馱南　印捺囉耶娑嚩訶

東南方火天眞言に曰く、

南莫三滿多沒馱南　阿誐那曳娑嚩訶

南方焰摩天眞言に曰く、

南莫三曼多沒馱南焰摩耶娑嚩訶

西南方羅刹主天眞言に曰く、

南莫三曼多沒馱南　乃哩底曳娑阿訶

西方水天眞言に曰く、

南莫三曼多沒馱南　嚩嚕拏野娑嚩訶

西北方風天眞言に曰く、

南莫三曼多沒馱南　嚩耶吠娑嚩訶

北方毘沙門天王眞言に曰く、

【六七】助伴等とは承仕とて手傳人に手傳はすこと。

吽嚩日囉　勿捨野弱

弱の上に於て、彼の名號を加へよ。即ち本尊の身中より（一本に本尊の心より外身に遍ず）花箭[六二]を流出して無量の世界に遍じて一切の佛賢聖に供養し、及び聲聞・緣覺・厭離の心及び六道四生の互に憎恚する心を射る即ち此の衆の箭を以て彼の人の五處を射よ。所謂頂・兩乳・心及び下分なり。（一本に謂く隱密の處）凡そ諸の爐若し酥なくんば乳を用ゆることも亦得、若し[六三]遙に人を加持せば或は名を抄し或は前の人の衣を取つて心を標して加持せよ。聖衆を供養し已んなば、大杓を用て三たび杓に滿ちて聖衆に獻じ、幷に三たび灑ぎ三たび漱いで即ち小杓を取つて滅三惡趣の眞言を以て、一切有情のために護摩すること七遍或は二七遍或は三七遍せよ。眞言に曰く、

唵　嚩日囉波尼尾薩普　吒耶薩嚩跛耶、滿陀娜儞鉢囉、謀訖灑耶薩嚩跛耶誐帝毘藥、薩嚩薩怛挽、薩嚩怛他誐多嚩日囉、三麼耶吽怛囉吒

即ち心に聖衆を奉送して本座に還らしめたてまつり、即ち四字[六四]の明を以て十方の世天を引いて爐の中に入れ、前に依つて三たび灑ぎ漱げ。即ち殘れる所の香・花・五穀・酥・蜜等を以て火に投ぜよ。各本眞言一遍或は三遍を誦して各薩嚩訶の上に於て所求の事を加へよ。即ち聖衆の羯磨及び三昧耶の契を結び、讚歎を誦し、發願し降三世の印を結んで、左に旋らして解界し、即ち奉送すること念誦法の如くせよ。即ち[六五]道場を出でゝ道場の外の八方に於て茅草或は蓮葉或は諸餘の青草を敷け。或は[六六]圓壇を塗つて十位を爲れ。帝釋の右左（又は左右）に於て、梵天地天の位を置け。八方に與んじて十なり。若し道場の外に位を置く處なくんば即ち道場の前の閑靜の處に於て、別に（一本にあり）方界を爲つて中に於て八方を布き、中央に於て兩位を布きて梵天地天を置け。以（次の字か）て十方の天に施せ。食は雜粥を用ゆべし。所謂粳米・油・麻・菉豆相ひ和して煮て極めて清淨香美ならしめて、一器の中に盛れ、座毎に先づ一の淨葉を置て循環して葉の上に鋪み置け。先づ淨瓶を以て香水を盛り

【六二】　花箭とは、弓の矢の根に蓮花を著けたもの。

【六三】　遙に人を加持とは、本來は護摩を修する所に人を入れるのであるが若し遠方か又は婦女等の場合は其の人の名をうつすか又其人の衣を行者の右の方に置き眞言を唱へて「ソワカ」の句に至つて長く引て杓を衣に當てゝ加持するなり。

【六四】　四字の明とは、以下世天段を說く即ち十方の世天を召し招きて供養する法なり。

【六五】　即ち道場を出でてとは以下神供法といふ。護摩の修法が終つて後更に道場以外の處で諸天に供養する一種の修法なり。

【六六】　圓壇（Mandala）。土を以て造つた壇のこと。

中より供養雲海を流出して、無邊の世界に至つて一切の佛菩薩を供養し及び、光明一切有情六道四生を照觸して皆榮盛富貴及び壽命を延ばしむることを獲せしむ。即ち此の光明を以て、想へ、自の宅中に、七寶及び資用する所の物を雨すと。又想へ、天の甘露自身に灌注して毛孔に周遍すと。[五三]若し降伏の法を作さんには、前の如く火天を迎請せよ。或は[五四]蔓菁を用ゐ、或は芥子等の油を以てし、或は水牛の酥を以てし、或は[五五]嚕地囉を用ゐよ。先づ聖衆に三たび大杓をもて獻じ已つて香なき花及び臭き花・安悉香・[五六]鹽・毒藥等を用ゐ、或は唯鐵末を用ゐ或は（芥子蠟鹽毒藥等を以て作れ）火天に投ずる時は即ち想へ。火天の心より、外、身中に遍じて、器仗（又は杖）を流出して彼の身上に投ぐと。上、火天及び本尊を想うて皆忿怒の形に作れ、[五七]彼（一本には前人とあり）の形を作つて段段に截て之を投ぜよ。眞言に曰く、

吽𮭐曰囉薩怛𮭐耶發吒

[五八]發吒の上に於て彼の名號を加へよ。或は本尊法を用てし、或は不動尊の眞言、或は降三世の眞言或は文殊師利、[五九]六足尊（一本に等を加ふ）の眞言を用ゐよ。想へ、忿怒尊の身中より器仗雲海を流出して盡虛空一切の忿怒尊を供養す。即ち此の器仗彼の上及び家（一本に怨家及び身上となる）に落つと。[六〇]若し鉤召の法を作さんには、火天を迎請し、及び所用の木花等の物皆增益の如くせよ。唯だ花は刺ある木の赤花を用ゐよ。或は本尊法の中の所燒の物を用ゐよ。眞言に曰く、

唵　𮭐曰囉羯哩灑耶弱

弱の上に於て彼の人の名を加へよ。即ち想へ、本尊の心より、外、身に遍じて無量の金剛鉤を流出して盡虛空の一切の佛菩薩賢聖に供食すと。即ち此の衆の鉤を想へ、三惡趣の有情を鉤召して人天の善處に安置せしむと。即ち此の衆の鉤を以て彼の人の心に入れて召き來らしむと。

[六一]若し敬愛の法を作さんには、迎請及び所用の物並に上に同じ。唯だ花は赤色の花を用ゐよ。或は本尊（尊の字一本になし）法の中に用ゆる所の物を用ゐよ。眞言に曰く、

【五三】若し降伏の法とは、降伏法を說く。
【五四】蔓菁とは、ナタネなり。
【五五】嚕地囉とは、血液なり。
【五六】鹽とは、潮にして即ち沖へ引く所を汲みたるものにして降伏の護摩に用ゆ、潮の沖へ退散するとき汲み取るは怨敵退散する意味なりといふ。
【五七】彼の形とは、自己に怨のある人の形なり。
【五八】發吒（Phaṭ）は破壞の義なれば降伏の（護摩）法には必ず眞言の終に用ゆ。
【五九】六足尊とは、大威德明王（Yamāntaka）なり。六面六臂なれば六足尊と名づく。
【六〇】若し鉤召とは、鉤召法を明す。
【六一】若し敬愛とは、敬愛法を說く。

投つて心に至ると。[四六]若し息災法を作さんには、五穀の中に須らく十倍して沖麻を加ふべし。[四七]木は一百八枚、或は五十四或は二十一を用ゐよ。

唵　薩嚩播波娜訶那、縛日囉、耶娑嚩訶

或はある教の中に說く、本部母の眞言を用て息災を爲せと、或は本尊の眞言にまれ、或は毘盧遮那の眞言にまれ皆[四八]娑嚩訶の上に所爲、自他、願くは一切の災を除かんとの語を加へよ。心を爐中の聖衆に專注せよ。想へ、聖衆皆心より外遍身の毛孔より供養雲海を流出して無邊の世界に至つて一切の佛を供養したてまつり、及び一切の三惡趣の苦惱を除くと。護摩已んなば三たび大杓に滿つる酥を以て聖衆に獻ぜよ。[四九]殘る所の五穀・香・花等は一器の中に聚めて十方の世天に獻ぜよ。餘の爐に並に同じ。

[五〇]若し增益を作さば、先づ(一本に)前の如く火天を迎(請)し、卽ち聖衆に三たび大杓にて木及び香花等を獻ぜよ。並に前の如く粳米を燒け。或は延命を欲はゞ、[五一]屈蔞草を燒け。其の延命の爐は前の增益の爐の如くして、外は甲冑の形に作り餘の香花等は並に前の如くせよ。唯し(一本に其と)粳米・屈蔞草は餘物に加ること十倍せよ。增益の眞言に曰く、

唵　嚩日囉　補瑟吒曳娑嚩訶

[五二]延命の契は、二羽、各金剛拳にして進力を舒べて相鉤して頂上に置け、想へ、身、降三世となると、印の上に於て毘盧遮那佛を想へ、身中より天の甘露を流出して行人の身に灌注すと。延命の眞言に曰く、

唵　嚩日囉、喩曬、娑嚩訶

娑嚩訶の上に於て自他の爲に增益或は延命を願ふ語を加へよ。或は當時の心(一本に中を加ふ)の所願なり。是の如くの語を安ぜよ。心を爐中の聖衆に專注せよ。想へ、聖衆の心より外、遍身の毛孔の

【四六】若しとは、息災法を說く。

【四七】木とは、護摩の爐中に投ずる木にして是は供養する毎に乳酥蜜等を其の一端につけて爐中に投ずる故に常に乳木といふ。

【四八】娑嚩訶(Svāhā)。諸尊の眞言の終に附してある語で、如來の本誓空しからず決定して所願成就せしむるの意なり。

【四九】殘る所とは、護摩を修するとき、本尊等に供養した加持物にして未だ殘る所の五穀等あるを以て之を一器に聚めることで、之を混沌供(小野流)又は雜和供(廣澤流)と稱す、火天部主、本尊は何れも本尊なれば純味を供養し、諸尊世天は伴類なれば雜和の味を供養するなり。

【五〇】若し增益とは、增益法に延命法を合せて說く。

【五一】屈蔞草とは、烏瓜に似たる一種。これは蔓長ければ命根の長く連續することを意味して延命法の護摩に使用す。

【五二】延命の契とは、普賢延命菩薩の印契なり。

[三九]賢坐にせよ。(物に跛けて脚を垂れて坐するなり。)即ち三昧耶より迎請に至るまで皆本法に依れ。或は五種の護摩に隨つて部部の主に隨つて五相成身し、迎請し已つて讃歎を誦し、四攝を以て聖衆を安立して爐壇を圍遶せしめ然る後に閼伽を獻ぜよ。各々本[四〇]羯磨の印を結んで安立して本三昧耶を示し、護摩の眞言を誦すること一百八遍せよ。[四一]然して後に一華を取つて火天の眞言を以て加持すること三遍或は七遍して火中に擲げよ。然して後に[四二]火天の印を結べ。左の羽を以て右の羽の腕を握れ。右の羽は掌を舒べて外に向け禪度を屈して掌中に横へ在け。進度を鉤の如くして來去せよ。招いで以て迎請し、獻じ已んなば、禪を以て進度(或は戒)を捻ぜよ。即ち[四三]發遣を成せ。眞言に曰く、

唵　翳呬翳呬摩訶部多泥、嚩哩使儞尼、惹薩哆摩蘗哩、呬怛嚩　虎帝摩訶囉麼悉泯、珊儞呬都娑嚩

阿誐那、曳訶微也迦微也嚩訶娜耶娑嚩訶

迎へ已つて香水を以て三たび灑ぎ三たび口を漱げ、然る後、本眞言を用て大杓を以て三たび滿て酥を酌んで火に投れよ。想へ、火天の口の中に投つて心蓮華に至ると、眞言に曰く、(花を加持するにも亦之を用ゐよ。)

唵　阿誐那曳、娑嚩訶

即ち此眞言を以て小杓を以て三たび蜜・酪・乳を投れよ、及び木乃至香花等をもせよ。想へ、火天は四臂なり。右(一本に左)手は無畏、第二の手には珠を持てり。左(一本に右)手には仙杖。第二の手には軍持を執れりと。想へ、心より身中に遍じて無量の塗香雲・華雲・燒香雲・飯食・燈明、種種供養を流出して一切佛菩薩緣覺聲聞及び一切の世天を供養すと。火天の眞言の娑嚩訶の上に於て、[四四]所求の事を稱して之を投れよ。然して後、大杓を以て三たび滿て、投げ供養せよ。一花を加持して本方の坐處に置いて爐より請し出して本座に還らしめよ。[四五]然る後に三たび火を淨めて四字の明を以て佛・菩薩を迎請して各本座に坐せしめ、三たび漱口を獻じ以て三たび大杓に酥を滿てゝ獻ぜよ。然る後に復小杓を以て三たび蜜・酪・乳・乳糜飯を酌み、及び木・五穀・華・香等各三たび投れよ。想へ、聖尊の口中に

右足を左の髀上にあげるを半跏坐といふ。

【三九】賢座とは、物に跛けて脚を垂れて坐すること。

【四〇】羯磨(Karma)を事業と翻譯す、羯磨印とは其尊の事業作用を結び顯はすを羯磨印とする。此の印を結んで本誓を憶念して速に悉地(Siddhi)(成就)を賜へと祈願するなり。

【四一】然して後とは、火天段を明す。

【四二】火天の印は左手を以て右の腕を握るなり。

【四三】發遣とは、一度召攝(めしまねく)した火天を再び本の處に還へらしむる作法なり。

【四四】所求の事とは、息災法のときは息災延命、當病平癒等と稱し、增益法のときは富貴豐饒、如意滿足等といふが如し。

【四五】然る後とは、此れより本尊段を說く。

竪てゝ進力を去けて口形の如くならしめよ。眞言すること二十一遍せよ。眞言に曰く、

唵　阿蜜哩　都納婆嚩吽發吒薩嚩訶

五色の粉を加持する印及び眞言は並に瑜伽經の所説の如し。酥・蜜・酪・乳及び木・五穀・香・華等を加持するには、並に[三三]金剛羯磨菩薩の眞言を以て加持すること各七遍せよ。印は二羽各の禪智を以て檀慧の甲を捻じて餘の三度は磔り開き、竪てゝ金剛杵の形の如くして即ち相叉へて右、左を押(厭)せ、眞言に曰く、

唵　嚩日囉羯磨檢

[三四]燒く所の護摩の支は皆右邊に安んぜよ。酥は蓮葉の臺の上に於け、蜜・酪・乳・乳の粟飯等をば爐に近づけて右邊に安んぜよ。左邊に二器を置きて香水を盛れ(器は金銀熟銅白銃商佉等を用ゐよ、並に通用すべし、香は白檀鬱金龍腦等を用ゆ)

[三五]二器とは、一は用て火及び供物等に灑淨し、一は聖衆ゝ火天との漱口に用ゐよ。灑淨の印は禪を以て檀の甲を捻じて餘の三度は磔り開き竪てゝ三股杵の形の如くして以て水を灑げ、眞言に曰く、

唵　阿蜜哩諦吽發吒

漱口の印は右の羽[三六]金剛拳にして進度を舒べ、水を攪いて加持すること七遍し、訖つて便ち四度を屈して掬に作して水を抄つて臂を垂れ、掌をして身に向はしめて、右に旋らして火に灑げ、眞言に曰く、

唵　嚩囉娜娜嚩日囉　曇

[三七]息災には本尊火天及び爐・衣服・飯食・香・花皆白を用ゐよ。吉祥坐に作して慈心と相應せよ。(兩脚を交へて膝を竪て右左を壓す)

增益には皆黃を用ゐよ。[三八]全跏坐にせよ、降伏には皆黑を用ゐよ。蹲踞坐にせよ。(一本に左右の大指を以て右足の大指の甲の上を履め)鉤召には皆赤を用ゐよ。半跏坐にせよ。敬愛は色は鉤召に同じ。

外へ出して相ひ縛することを、外縛といふ、(指を內へ入れて縛するを內縛といふ)。

【三二】瞿摩夷(Gomayī)とは、牛屎にして印度に於て尤も神聖なものとす。密敎に於て修法のとき土壇を造るに之を使用して塗る。又護摩をたくとき加持供物として爐中に投ず。

【三三】金剛羯磨菩薩(Vajra-karma)。金剛業菩薩のこと。

【三四】燒く所とは、總じて護摩を修する方法等を說く中初めに主として護摩に使用する種々の供養物(支具といふ)を說く。

【三五】二器とは、灑淨器と漱口器なり。灑淨器は火天供物爐內等を淨むるに用ふ。漱口器は供養を受くる聖衆や火天の口を漱ぐに用ふ。灑淨は三股の印漱口は獨股の印なり。

【三六】金剛拳とは大指を掌の中に入れて四指を以て握ること、四度とは余の四指なり。

【三七】息災にはとは、五種の護摩法を修するに、相應する色と其の坐ヶを說く。

【三八】全跏坐とは、結跏趺坐ともいふ、左足を以て右の䏶上を壓し次に右足を以て左䏶を壓して結ぶ坐法なり。單に

羅の如く、利は劍形に爲るべし。語は舌相を畫くべし。因は日輪の形に作つて、中に獨股羯磨をおけ、延命は增益の如くして、爐の外に甲冑を畫け、人の甲を被たる形の如くして、雙袖をして垂れしめよ。袖は三の獨股の如く、下は熏籠を覆ふが如し。上には三峯の形に作れ、三の獨股杵の如くせよ。內外の八供養、及與び[二四]四護等、諸爐皆一の如くせよ。一一畫く所の契は、皆蓮華の上に坐よ。而も火焰光あらしめよ。

[二五]八方天の眷屬は、亦諸の契等の如く、皆行人の座に隨つて、東方より起めよ。帝釋には獨股杵をなして、繒を左右に繫けて飛ぶが如くせよ。火天には[二六]軍持を畫け、蓮座の上にして火焰んぜよ。繒をあらしめよ。焰摩には兩股の叉をおけ、其の中に人頭を安飛ばすこと帝釋の如くならしめよ。羅刹主には刀を畫け。座の焰は火天の如く、水天には羂索を畫け、兩頭には獨股の頭をつくれ、風天には旛旗を作つて、蓮華の中に坐け、毘沙門には棒を作つて、繒を繫ること亦上の如くせよ。舍那には半の三股をつくれ。蓮座にして火焰の光あらしめよ。智者善く知るべし。審諦にして錯謬することなかれ。

[二七]其の爐の緣は高さ兩指なり。闊さ四指なり。緣の內の爐口の本地は闊さ兩指にせよ。中に於ける契印は高さ兩指にせよ。其爐に[二八]身に近づけて竪項を開け、闊さは四指長さは兩指にせよ。次に橫の長さは十指、竪の闊さは四指にせよ。次は蓮華葉の形に作つて大小相稱はしめよ。竪項より葉の末に至るまで都て十二指なり。高下並に緣と齊うせよ。五種の爐並に同じ。其の地を治する法は大曼荼羅の法の如くにせよ。[二九]地を掘るに用ゆる所の鍬等を加持する印は二羽[三〇][三一]金剛縛にして禪智進力各々相ひ並べ竪て、眞言すること二十一遍せよ。眞言に曰く、

唵　儞佉那嚩蘇提薩嚩訶

泥及び[三二]瞿摩夷・塗香等を加持する印は二羽合掌して進力戒方の二節を屈して相合せ、禪智並べ

戯菩薩、鬘は金剛鬘菩薩、歌は金剛歌菩薩、舞は金剛舞菩薩の內四供養佛なり。

【二〇】二鉤を並ぶとは、鉤鏁せる三股を並ぶこと。

【二一】善哉とは、金剛喜菩薩なり。

【二二】彈指は右手の大指を外に出して頭指を彈ぬて聲を出さしめる相で之は諸佛を驚覺すると普通言ふが今は歡喜の意をあらはす。

【二三】弓箭とは、弓の箭のこと。

【二四】四護とは、四攝の菩薩なり。四門に在りて衆生を誘引攝護するを以て四護といふ。

【二五】八方天とは、第三院の八方天眷屬を說く。

【二六】軍持(Kuṇḍikī)とは、水瓶にして卽ち二ノ口あり、上ノ大口より水を入れ脇の小口より水を出す。

【二七】其爐の緣とは、五種の爐の製法を說く。兩指は二寸、四指は二寸薪を積む所なり。

【二八】身とは、火天にして卽ち爐を火天の身となし、竪項は火天の項を表す。

【二九】地を掘るにとは、次に地を掘るに用ゆる鍬等を加持する印と眞言を說く。

【三〇】二羽とは、左右の兩手のこと。

【三一】金剛縛。左右兩手指を

四隅には三股杵ををけ、第二院には無量壽の眷屬を畫くべし。四種の尊を畫くべし。第二院の四隅と、八方と及び四門とは、所說亦前の如くせよ。此れ是の五の護摩は、瑜伽經の所說なり。修行者應に知るべし。四契及び四攝と、內外の八供養とを、布列して壇位に在くこと、阿闍梨今說かん、行人南方に坐せば、金剛をば南に在くべし。寶部をば西に在け、法の契をば當に北面にすべし。羯磨をば東方に在け、嬉戲は西南の隅にせよ、鬘は西北の角にすべし。歌の契は東北に處け、舞の印は東南に在け。燒香は嬉戲の如く、花供は鬘の方に准ぜよ。燈は歌詠の如くすべし。塗香は舞の位の如く、鉤は金剛の後に在け。索は寶部と對せよ。鎖は法の契に隨ふべし。鈴は羯磨の如く知れ。行人に隨つて右に旋れ。諸の壇は當に是の如くすべし。循環して安立せよ。[一八]息災の第二院の、四波羅蜜の契をいはゞ、[一九]金剛には三股杵をせよ。寶の契は寶形の如く、法は獨股杵の如くして、上に開敷蓮を戴かしめよ。羯磨には羯磨杵をかけ、嬉戲には三股杵、鬘は寶冠の形の如く、歌は箜篌を畫くべし。舞は獨股の羯磨をせよ。鉤は金剛鉤を爲せ。索は盤れる索の勢の如くして、一の頭は半の獨股にして、中心に在け。鎖は兩の環を並べたるが如くせよ。其中連環の如くせよ。鈴は金剛鈴を作れ。燈は蠟燭の相に作れ。塗香には香器を畫け。燒香には香爐を作れ。散華は華盤を爲れ。增益の第二院の、寶生尊の眷屬をいはゞ、(寶には如意寶を畫け、)光の相は日の形の如く、笑は橫の三股の如くして、其中間に齒を安んぜよ、幢は寶幢を豎つるが如くせよ。降伏の四忿怒をいはゞ、薩埵には三股杵、[二〇]王は二鈎(又は鈷)を並べたるが如くせよ。[二一]善哉は雙手を並べて、[二二]以て彈指の相に作れ。愛は[二三]弓箭を豎てたるが如くせよ。鉤召の第二院は、亦降伏の壇の如くして、增減あることなし。敬愛の第二院の・無量壽の眷屬をいはゞ、法は法波

寶生如來、彌陀如來、
釋迦如來

慧門十六尊
- 東
  - 金剛薩埵
  - 金剛王菩薩
  - 金剛愛菩薩
  - 金剛喜菩薩
- 南
  - 金剛寶菩薩
  - 金剛光菩薩
  - 金剛幢菩薩
  - 金剛笑菩薩
- 西
  - 金剛法菩薩
  - 金剛利菩薩
  - 金剛因菩薩
  - 金剛語菩薩
- 北
  - 金剛護菩薩
  - 金剛業菩薩
  - 金剛牙菩薩
  - 金剛拳菩薩

定門十六尊
- 四波羅蜜(四契)
  - 金剛波羅蜜菩薩
  - 金剛寶波羅蜜菩薩
  - 金剛法波羅蜜菩薩
  - 金剛羯磨波羅蜜菩薩
- 八供養
  - 內四供養
    - 金剛嬉菩薩
    - 金剛鬘菩薩
    - 金剛歌菩薩
    - 金剛舞菩薩
  - 外四供養
    - 金剛香菩薩
    - 金剛華菩薩
    - 金剛燈菩薩
    - 金剛塗菩薩
- 十二供養(四攝)
  - 金剛鉤菩薩
  - 金剛索菩薩
  - 金剛鎖菩薩
  - 金剛鈴菩薩

【一八】息災の第二院とは、第二院の三摩耶形を明す。

【一九】金剛とは、金剛波羅蜜菩薩なり。寶は金剛寶菩薩、法は金剛法菩薩、羯磨は金剛羯磨(業)菩薩卽ち四波羅蜜菩薩なり。又次は嬉戲は金剛嬉

鈎召なり。大（一本には火となるは誤）に召して相應せよ。敬愛には蓮花部なり。是の如くの五の瑜伽を以て、應に護摩の事を作すべし。[一四]息災には甘き木を燒け。增益には果ある木を用ゐよ。苦き木は降伏の業（一本には葉となるは誤）なり。刺ある木を以て鈎召を爲せ。華ある木をば敬愛と說く、是の如く五種の木を、瑜伽者用ゆべし。息災の爐には輪を作れ。增益には三股杵なり。降伏には一股を作れ、鈎召には鈎を作るべし。敬愛には蓮花を作れ、[一五]息災の爐の應量は、横は[一六]全（一本に金となるは誤）に、竪は半肘にせよ。增益には兩肘の量にせよ。竪（一本に深となる）の量は、應に半を用ゆべし、降伏の軍荼の相は、三角にせよ各の一肘なり。竪（一本に深となる）の量は之を半にすべし。鈎召には長さ一肘にせよ。横と竪とは（深となる）各々半を減ずべし。敬愛にも亦一肘にせよ。横と竪（深となる）とは鈎召の如くせよ。[一七]五種の軍荼の壇は、畫て三重を作るべし。中院には羯磨杵ををけ。四隅に蓮花を畫け。第二院には四契ををけ。謂く四波羅蜜なり。四隅には內の供養ををけ。第三院には、八方天の眷屬を畫くべし。四隅と四門とには、外の供養と四攝とををけ。中には遍照尊を安んぜよ。此れ息災の軍荼なり。餘の四の軍荼の相も、三院あり皆是の如し。增益には中院に於て、羯磨寶を畫くべし。（四隅には蓮葉を畫け。）第二の院には、寶生佛の眷屬を畫くべし。第三院及び門には、亦前の所說の如くせよ。降伏には中院に於て、獨股羯磨杵ををけ、（四隅には蓮花を畫け。）第二院には、降三世の眷屬の、四種の忿怒の相を畫くべし。第三院と及び門とには、亦前の所說の如くせよ。而も皆忿怒の相なり。鈎召には中院に於て、金剛鈎を畫くべし。四隅には蓮花を畫け。第二院には、不動佛の眷屬を畫くべし。第三院の四隅と、八方と及び四門とには、初の軍荼の如く知れ。敬愛には中院に於て、蓮花羯磨を畫け。

【一二】敬愛（Vaśīkaraṇa）は西方蓮花部の大悲を表す赤色なり。

【一三】以下五種の護摩を修する時の時分を說く。息災は初夜に始む。初夜は今の午後六時頃にして正しく寂靜に入る時なれば息災と相應す。次に中日とは日中にして、日中は猛利の時なれば降伏の義と相應し、後の後夜は今の午前四時頃正に陰氣極りて陽氣の發せんとする時なれば敬愛と相應す。

【一三】以下は五種法の印を說く。佛印とは五股杵の印なり。寶珠の印なり。※忿杵（三股の屈曲せざるもの）のこと。

【一四】息災にはとは、五種護摩をたく時に燒く木を說く。

【一五】息災の爐應量とは、以下護摩の爐の量を說く、

【一六】全とは、一肘量にして、一肘とは、諸說あれど肘の關節から中指の先までをいふ。

【一七】五種の軍荼壇とは、五種の護摩の爐壇各々に中院、第二院第三院の三重の曼荼羅（Maṇḍala）を造ることを說く、而して此の三重の其各處に佛の尊形を畫くので、佛の尊形とは金剛界の三十七尊並に諸天なり。三十七尊とは五佛—大日如來、阿閦如來、

金剛頂瑜伽護摩儀軌

開府儀同三司特進試鴻臚卿肅國公食邑三千戸賜紫贈司空謚
大鑒正號大廣智大興善寺三藏沙門不空　詔を奉じて譯す

[一]我れ今、護摩を說かん、此に由つて速に成就す。護摩の[二]業儀、相應して間斷せざるに由る。是の如くの一切の事、明に隨つて當に作すべし。類に隨つて護摩を作せ、無上成就の業なり。[三]護摩は說くに多種あり。略して說くに[四]五類(種)あり、廣く大瑜伽を說くことは、祕密教に於て說けり。我れ今則ち略して、持明の遊戲を說くべし。護摩の儀軌に由つて、[五]族壇を成就す。護摩に五種の事あり。一一に多種あり。息災と及び增益と、第三をば降伏とす。鉤召をば第四とす。第五は是れ敬愛なり。是の如くの五の護摩には、敬愛を最勝とす。我れ今[六]軍荼の瑜伽に依つて相應することを說かん。[七]息災の爐は正圓なり。應當に是の如く作すべし。[八]增益は正方なるべし。三角に作るは[九]降伏なり。金剛形の軍荼は、[一〇]鉤召なり最勝とす。長く蓮花(又は葉)形に作れ。[一一]敬愛を相應とす。已に五種の類を說けり。軍荼の業は無上なり。[一二]息災は初夜に起めよ。增益は初日の分にせよ。中日の分には、降伏猛利の法を作すべし。鉤召は一切の時にせよ。後夜には敬愛を作せ。是の如くの五の瑜伽、作業して等引を爲せ、北に面つては息災を作せ。增益は東方に向へ、南に面して降伏を作せ、西に面して坐(一本には住と)すべし。仰ぎ視て諸方に遍ぜよ。是を鉤召の儀と爲す。若し敬愛と相應せんには、應に住して面を西に向ふべし。[一三]息災には佛印を結べ。增益には寶の幖幟なり。金剛怒は降伏なり。金剛鉤は

【一】我れ今以下の八句は序分にして卽ち本論に至る序說なり。
【二】業儀とは、事業儀則の意、護摩の支具は衆因緣の義にして此の因緣の事業を以て無上の佛果を成就するものなり。
【三】是より正宗分にして正しく本論なり。
【四】息災・增益・敬愛・降伏・鉤召の五種類なり。
【五】族壇とは、卽ち息災部族壇・增益部族壇・敬愛部族壇等のこと。
【六】軍荼(Kuṇḍa)。護摩をたく爐のこと。
【七】息災(Śāntika)とは、災厄を止息することを祈る法にて、災息むときは自ら寂靜となるを以て寂災ともいふ。北は圓寂の義あるを以て北に向ふ。
【八】增益(Pauṣṭika)は東方阿字の形にして春にあたる、春は陽氣發生して萬物生長すること、祝福を增益する增益法と相應する義あり。
【九】降伏は南方火大赤色にして、能く諸物を焚滅する義あり。
【一〇】鉤召は獨股又は三股なり。鉤召は三惡の衆生を召すを以て十方に向て之を行ひ敢て方所なくまた一切時に修す。

法には「ハッタ」の前に降伏すべき人の名を加へる。鈎召も敬愛も共に弱の上に人の名を加へるのである。

十、神供法

護摩を修法し了らば、更に道場の外で餓鬼や諸天に供養する作法を說く、之を神供法といふ。餓鬼・畜生等は極めて低級下賤のものであるから道場內に入ることが出來ないで道場外で供養を渇望する。故に道場外に茅草蓮花等を敷き叉圓壇を塗つて諸天七曜廿八宿等を招き粳米油麻荳豆等を雜へ混和して煮て清淨甘味にして一器に盛り一一淨き葉上に分配して眞言を唱へつゝ一一に叮嚀に供養を施して與へるのである。其功德は甚大である。

十一、三摩波多護摩法

猶ほ本軌には、三摩波多の法が說いてある。之は究竟成就の法と譯するので、護摩の目的を圓滿に成就せしむるために特に供養物や人の身體を加持する法である。此法は供養物を酥器の前に置き若し物が大なれば左右に置いて小杓に蘇油を入れて其の供養物の上に持つてゆき眞言を唱へる。眞言も二分して「ソワ」と唱へる時に杓をあげて火を投じ、「カ」の聲とともに下すのである。そして「カ」の聲を永く引いて杓を更に物の上に至らしめて止めるのである。

若し人を加持する際は人の頭の上に杓を置いて前と同じ方法で眞言を唱へる。若し本尊の眞言に「ソワカ」がなければ別に新に加へてやるのである。

昭和六年一月五日

譯者　岡田契昌識

地羅（血）香もなく、又息味ある花・安悉香・鹽・毒藥・鐵末、怨のある人の形を造つて之を截斷して爐中へ投げ入れることなど說いてある。

七、座　法

五種護摩に依て座法が各々異る。

息災法　吉祥坐（兩脚を交へて膝を立て右左を押す）
增益法　全跏坐（左足を以て右髀の上を厭し、右足を以て左髀の上を壓して互に結ぶ）
降伏法　蹲踞坐（右脚を以て左脚を踏み臀を地に附けず居る）
鉤召法　半跏坐（右足を左の髀の上に置く）
敬愛法　坐物に跛けて脚を垂れる形

八、修法の方法

本軌に依て護摩修法の方法を大略記すと、先づ金剛羯磨菩薩の印や眞言（オンバザラキャラマケン）を以て酥蜜酪乳五穀香華等を加持し、乳木は行者の右邊に置き酥油は蓮花臺上に置き、蜜酪乳飯等は爐に近く左邊に置き又爐の左邊には灑淨器と漱口器を置く。灑淨器は火及び供養物等を灑淨し、漱口器は聖衆や火天の口を漱ぐに用ゆる（各印眞言あり）次に各異る印や眞言を以て灑淨器と漱口器の水を攪いて加持すること七遍、かくて水を掬して火爐に灑ぐ。而して護摩のときは、五種法に隨て各異る本尊をお迎へし四攝の印眞言を以て本尊を爐壇に住せしめて後閼伽（水のこと）を獻じ、各本尊の印を結び護摩の眞言を一百八遍誦し後一花を取つて火天の眞言を三遍又は七遍誦し加持して火中に擲げ入れる。更に火天の印を結び火天を奉迎して灑淨漱口し、火天の眞言を誦しつゝ大杓にて酥油を三たび酌み火天に投するので、此の時、火天の口の中に入つて心蓮花に至ると觀想するのである。次に眞言を誦しつゝ小杓蜜・酪・香華等を爐中に投じ火天の相形（四臂右の第一手施無畏、第二手珠を持つ左の第一手仙杖、第二手軍持）を觀じたり、また心より遍身に無量の塗香雲・華雲・燒香雲等を流出して一切の菩薩・緣覺・聲聞及び一切世天を供養すと觀想し、また大杓を以て三たび供養し了つて一花を加持して壇上に投げ之を火天の本座と觀じて火天を還送せしめるのである。

九、五種法の眞言

息災法　唵薩嚩播波娜訶那嚩日囉耶娑嚩訶
增益法　唵嚩日囉補瑟吒曳娑嚩訶
降伏法　唵嚩日囉薩怛嚩耶發吒
鉤召法　嚩囉日囉羯哩灑耶弱
敬愛法　吽嚩日囉囉勿捨野弱

而して各眞言の句に祈願の句を加入するのである。卽ち息災の眞言は「ソワカ」の上に例へば自他一切の災厄を除かんとの意の文を入れ、增益の眞言も「ソワカ」の前に富貴豐饒如意滿足等の文を加へる。增益法に附して延命法を說く、降伏

二、増益爐壇
- 中院　羯磨寶　四隅に蓮花を畫く
- 第二院　寶生如來の眷屬
- 第三院と門　息災壇に同じ

三、降伏爐壇
- 中院　獨股羯磨杵　四隅に蓮花を畫く
- 第二院　降三世眷屬　四種の忿怒相
- 第三院と門　息災壇と同じ

四、鉤召爐壇
- 中院　金剛鉤　四隅に蓮花を畫く
- 第二院　不動眷屬
- 第三院　四隅八方天及四門　息災壇に同じ

五、敬愛爐壇
- 中院　蓮花羯磨　四隅に三股杵を畫く
- 第二院　無量壽眷屬　四種尊を畫く
- 第三院　四隅八方天及四門　息災壇に同じ

猶ほ第二院に畫くべきものを參考に記せば左の如し。

息災爐壇（四波羅蜜　四隅に内四供養）

四波羅蜜菩薩
- 金剛波羅蜜菩薩　三股杵
- 金剛寶波羅蜜菩薩　寶珠形
- 金剛法波羅蜜菩薩　獨股杵の上開敷蓮花を畫く
- 金剛業波羅蜜菩薩　獨股杵

四隅内四供養
- 金剛嬉菩薩　三股杵
- 金剛鬘菩薩　寶冠形
- 金剛歌菩薩　箜篌
- 金剛舞菩薩　獨股羯磨

増益第二院

寶生尊眷屬
- 金剛寶菩薩　寶形
- 金剛光菩薩　日輪の形の如し
- 金剛幢菩薩　横の三股の如く中間に幽を安んず
- 金剛笑菩薩　寶幢を竪つる如し

降伏第二院

四種忿怒相
- 金剛薩埵　三股杵
- 金剛王薩埵　二鉤を並ぶ如し
- 金剛愛菩薩　雙手を並べて彈指の相を作れ
- 金剛喜菩薩　弓箭を竪つる如し

敬愛第二院

無量壽眷屬
- 金剛法菩薩　法波羅蜜菩薩の如し
- 金剛利菩薩　鉤形
- 金剛因菩薩　舌相
- 金剛語菩薩　日輪形

鉤召第二院　降伏壇の如し

第三院八方天
- 帝釋天　獨股杵
- 火天　軍持（瓶）
- 焔摩天　兩股の叉
- 羅刹天　刀
- 水天　羂索
- 風天　旛旗
- 毘沙門天　棒
- 伊舍那天　半の三股杵

六、支分の事

一般に護摩に使用する供物（加持物）には、酥油・酪・乳木・五穀・乳糜・香華・飯食・閼伽等を出して居るが、乳木は爐中に投げて供養する毎に乳酥油等を其の一端につけて投ずるから乳木と名づけたので、之は五種によつて各異る。息災には甘い味ある木、敬愛には華のある木、鉤召には刺ある木などを用ゆるのが本儀であるが、猶ほ増益法には、粳米や屈葽草などを用ひ、降伏には蕓薹芥子水牛の酥、嚕

法の意義と相應する。又行者は北方に向て修するので北方も亦夜に入つて靜寂になつたことを表すからである。色はすべて白色を用ゐる。

二増益法は一國一身の福利を増長せんために修する法で、爐の形は正方形である。又開白は晨朝で行者の方向は東方である。是は東方は春に配當されるので、春陽來復して萬物潤生することが増益法と相應するのである。色は黃色を用ゐる。本軌では増益法の下に延命法を合せて說いてある。

三に降伏法は、一切の怨敵を降伏せんがために行ふ法で、火大の三昧耶にして爐は三角形を用ゐる。開白は日中で南方に向て修する。是も日中は太陽の反射作用の烈しき時であるから降伏と相應する。色は總て黑色である。

四鈎召法は地獄餓鬼畜生の三惡道の衆生を鈎召して已に歸順せしめんために修する法である。爐は金剛形で、開白は一切時、方向も一切方で別に制限はない。色は赤色を用ゐる。

五敬愛法は和合愛敬を求めんがために修する法で爐は蓮花の形を用ゐ開白は初夜で行者は西方に向て修する。色は赤色を用ゐる。

四、爐の製法等

爐を製する寸法や、爐の底に畫く物を記すと、

息災爐　横　全(肘)　竪半肘　輪
増益爐　兩　肘　量　竪半肘　三股杵
降伏爐　三角各一肘　竪半肘　獨股杵
鈎召爐　長一肘横竪半ヲ減ズ　鈎
敬愛爐　一肘横竪　鈎召ノ如シ　蓮花

猶ほ本軌には爐を造るに際して、地を掘るに使用する鍬などを加持する印契や眞言を說き、又爐を造る泥や、爐の上に塗る瞿摩夷や塗香なども之を一々加持する印契や眞言を出す。瞿摩夷とは牛の尿で印度では牛を神聖視した結果、其の尿を極めて清淨なものとし、之が密敎に入つて造壇造爐等の際には必ず之を塗つたものである。

五、曼荼羅

本軌には、五種護摩の火壇の曼荼羅を三院に分けて居る。即ち中院と第二院と第三院である、而して五種護摩に從つて三重各々に佛形三摩耶形(印杵)などを畫くことになつて居る。佛形としては、金剛界の三十七尊等を畫く。今簡單に圖示する。

一、息災爐壇
- 中院　羯磨杵　四隅に蓮花を畫く
- 第二院　四波羅蜜(四契のこと)四隅に内の四供養
- 第三院　八方天の眷屬　四隅に外四供養、四門に四攝、中に遍照尊を安ず

金剛頂瑜伽護摩儀軌解題

一、譯者と年代

本軌は不空三藏の翻譯したものである。三藏は諱を智藏ともいひ、支那に於ける四大翻譯家の一人にして、密教の聖典儀軌を翻譯した數は極めて廣汎大部で、密教隆盛の基因をなしたのである。本儀軌は三藏が唐の天寶五年（AD 746–771）より大曆六年に至る間に翻譯したもので實に西曆紀元八世紀である。

二、護摩種類

祕密儀軌稟承錄に「護摩の本軌に凡そ三本あり、一には瑜伽護摩軌二には火吽供養軌三には建立護摩軌なり。就中東寺一家は專ら瑜伽の軌を用ゆ、此軌は行法護摩合壇の作法なり、但し一向別壇の護摩を用ひざるには非ず。禁裏の御修法の大法並に灌頂の護摩は皆別壇に由て之を修す。其外、諸尊の護摩は多分行法壇に於て直に修するが故に卽壇護摩といふ。又他門には建立の軌に依て離壇を本旨とするなり。東寺一家は瑜伽軌に依ると雖も餘の二軌を兼用して之を修すること文に臨んで知るべし」

とある。卽ち、眞言宗の寺院で護摩供を修するに、大壇の中へ護摩爐を造つて此處で修法するのは、瑜伽護摩儀軌に依つたので、東寺一流の仕方である。然るに台密では、大壇の外に別に護摩壇を造つて修法するので、之は建立曼荼羅護摩儀軌に「鑪は曼荼羅に對して外に相望めて別に作れ」とある文に依て居るのである。さて眞言祕密の法を修する壇であるが、大壇は七日作壇と稱して七日の間、一定の儀式に從て造るので本來は土壇である。從て護摩壇も亦護摩爐も土で造るのが原始の意義であつたが、現今眞言宗では大概木製の壇を使用する關係上護摩の鑪なども金物で製したものを使用する。

三、五種護摩

護摩の種類も建立儀軌の方では四種類であるが本軌は五種類あるので、常に五種法ともいふ。卽ち一息災法、二增益法、三降伏法、四鈎召法、五敬愛法是である。今五種法に就て爐形、開白、(護摩をたき始める時）護摩をたく行者の方向等を一應記すことにする。

一息災法は又は寂災法ともいふ。此の法は一國一身の災厄を止息し消滅せんがために行ふ法である。爐は圓形のを用ひ、開白は日沒(初夜といふ)からである。日沒は太陽既に沒して寂靜になるから息災

眞言に曰く、

唵一摩日羅羅且娜二合 阿避詵者輪三 薩婆畝捺羅二合 迷四 涅里二合但 响嚧五 嚩日羅迦嚩制六 娜輪。

行者は復應に是の思惟を作すべし。我れ今已に正覺を成ず、當に一切衆生に於て大悲心を興し、無盡の生死の中に於て恒に大誓莊嚴の甲冑を被るべし。佛國土を淨め、衆生を成就し、一切の諸の如來等に歷事し、悉く一切衆生をして菩提樹に坐し天魔を降伏し最正覺を成ぜしめんと欲するが爲の故に應に三世の如來の慈悲の甲冑を被るべし。

此の密語を誦し已り進力を互に相旋らす、三遍環く之を遶らし便ち唵砧字を言ふ。力支に唵字を想ひ、進支に砧字を想ふ。各青色の索を想ひ鎧を被て之を帶ぶ如くす。初め胸、背、臍、腰に亦三たび相旋らして之を繋け、脇從り漸く上に至り後に向ひ復喉を廻り、還て頂後の間を旋り、三迴額を去來す、既に頂の後に至り已り壇慧を等しく前に垂る、是れ則ち金剛甲なり、

唵跛折羅迦縛者跋日羅拘盧跋折羅跋日里引那吽引

次に應に歡喜の印を結ぶべし、定慧の二羽三たび相拍つ、喜印を以て加持するに由るが故に　一切の聖衆は皆歡喜したまふ。

眞言に曰く、

唵一嚩日羅覩使斛二 [八九]

念誦結護法普通諸部（終）

【八九】本文には觧とあれど斛の誤ならん。

し斷除せざるも自然に起らず性常に清淨なり。此れ眞實の法門なり。是れ一切衆生の自性清淨心なり。名づけて大圓鏡智と爲す。上は諸佛より下は衆生に至るまで悉く皆同等にして增減なし。但し無明忘想の爲に覆はれ其の法體をして顯現するを得ざらしむ。是の觀を作す者は便ち解脫一切智三昧を證す。名づけて[八六]地前三賢位と爲す。所有る動作は任運に相應す。自然に[八七]初地に進入し大歡喜を生ず。然る所以は、月を觀じて方便と爲すを以てなり。具には三義あり。一には自性清淨の義なり、貪欲の垢を離るゝが故に。二には清涼の義なり、瞋の熱惱を離るゝが故に。三には光明の義なり、愚癡の闇を離るゝが故に。月を取て喩と爲し亦月解を作すこと莫き所以は、世間の月は[八八]四大所成にして畢竟破壞す、衆生の自性清淨心は生滅なきが故なり。此れ是の諸佛菩薩の內證にして二乘聲聞外道の所知の境界にあらず。是の觀を作す者は一切佛法の恒沙の功德は他悟に由らず。此の一法は無量の法を攝し、刹那刹那に諸法中に悟入して自在無礙なり。地從り地に至り漸次に昇進す。此の觀を學する者は專ら無念を守り以て究竟と爲すを得ず、當に須く正念して進んで方便に趣き然る後に究竟清淨法海に證入すべし。

唵一薩婆怛他蘖多引二鼻三菩提三涅里荼麼折羅底瑟姹四

佛地に證入せしめんが爲の故に、當に金剛三摩耶を結ぶべし、十度圓滿に外に相叉へ、忍願は幢の如く皆正直なり、心及び額と喉頂を印し、各誦すること一遍以て加持す。

眞言に曰く。

唵一麼折羅二薩怛嚩二合引二地瑟姹薩嚩給三

卽ち想へ、一切の諸の如來は、寶麼尼を持して我頂に灌ぐと。定慧和合して金剛縛とし、進力禪智は寶形の如くす。以て額の上を印し加持し已り、五佛の智冠は其の頂に在り、便ち智拳を分け頂の後に遶らし、當に遶らし已つて繫くべし。

【八六】菩薩初發心より一大阿僧祇劫の間を地前とし、此の中に十住、十行、十廻向の三十位の修行あり、之を三賢位と云ふ。

【八七】菩薩一大阿僧祇劫の修行を終れば初めて一分の惑を斷じ一分の理を證す。之を初地と云ひ歡喜地と名づく。

【八八】四大は地水火風なり。

此れを內證の無漏にして淸淨なる究竟の至極と名づく。一切智海に悟入して諸佛に同じ。此の法は祕密にして輒く聞かしめず。觀に入らんと欲する時、此の明を誦して曰く。

唵三摩焰薩怛鑁

密語を誦し已て卽ち能く一切諸佛菩薩の淸淨なる律儀の諸の大功德を具足す。復鑁字を圓淨無相と觀ぜよ。心に此の字を安じて一切有相を像る莫れ。自心は凝淨明朗、內外明徹にして體に自他無し。觀に入らんと欲する時、眞言を誦して曰く。

唵底瑟吒麼日羅。

眞言を誦し已て能く觀ずる所の心月をして漸く廣大ならしめ法界に周遍せしむ。前後際の劫を盡して一一の塵毛には等しく皆諸佛有り道場に衆會すること八五因陀羅網の重重無盡なるが如し。是の觀を作す者は便ち菩薩の甚深の智を證す。故に眞言に曰く。

唵質多鉢羅底微能迦路弭。

能く行者をして速に無上菩提を證せしむ。一切諸佛の第一義を具し、眞如智中より流出す。是れ作法の顯現にあらず。巧色摩尼の能く諸願を滿ずるが如し。一切の諸佛は聲を同じくして共に說きたまふ。之を思惟する時、唯是れ明朗にして身の心と與なるを見ず。況や一物も無く亦空解を作すことも莫し。無念に等しきを以ての故に虛空の如しと說く、法は空に非らざるが故に。若し久しく純熟せば當に自ら證知すべし。是の觀を作す時、密語を誦して曰く。

唵嚩日羅二合滿吒上藍鉢囉二合避捨迷。

此の明を念ずる者は卽ち能く一切灌頂曼荼羅の位に證入し諸の菩薩の祕密法門に於て隨意にして無礙なり。是の觀を作す時須く延促すべからず。務めて證入にあり。若し能く一一の心と相應すれば方に大に成就す。一切の時處に作意し、任運に相應して罣礙する所なし。一切の妄想貪瞋等は假

【八五】因陀羅(Indra)。卽帝釋天の事なり。帝釋天にある寶網を云ふ。その網の線と珠玉が交絡する狀を以て事物の重重無盡に交絡涉入するに例ふ。

眞言に曰く。

唵麼折羅母瑟知二合唅。 次に威怒降三世を以て、 內外所生の障を淨除す。 二羽臂を交へて金剛拳とし、 檀慧は相鉤し進力を竪つ。 行者身より威焰を發すと觀ぜよ、 八臂四面にして利牙を竪て、 吽字を震吼すること雷音の如し。 頂の上にて右に旋らして結界を成す。

眞言

唵一遜婆儞遜婆吽二紇哩釁拏紇哩釁拏吽三紇哩釁拏阿播耶吽四阿奈耶護引薄伽梵五麼折羅吽發吒六

次に蓮花部。 三摩地を成就せしめんが爲に、 定慧の二羽金剛縛とし、 檀慧禪智は和合して竪つ、 此の眞言と密印に由るが故に、 三昧を修行して速に現前す。

言眞に曰く。

唵一麼折羅鉢娜麼二合二三昧耶薩怛梵三

行者金剛定に入らんと欲せば、 先づ妙觀察智の印に住せよ。 定慧の二羽を仰けて相叉へ、 進禪力智各相拄ふ。 此の妙印を以て〔八四〕等引を修す、 卽ち如來の不動の智を得。

行者次に應に心を澄し宴坐して月輪觀を修すべし。先づ須く一月中に於て身心を調伏し、 心をして澄淨ならしめ然る後に外儀を習ふべし。 又是の觀を作せ。 一切の諸法は本來不生なり、 一切は皆能執所執を離れ、 畢竟清淨にして染著する所無しと。 是を思惟し已て想へ、 彼の空中の一切の諸佛は相好具足し、 數微塵の如く、 法界に周遍し、 金色の手を舒べて彈指し、 驚告して言はく、 善男子應に三摩地を以て自心の本性を觀察し成就せよと。 當に自心を觀じ、 一一諸佛の前に於て五體を地に投げて一心に歸命すべし。 眞言を誦して曰く。

唵一質多鉢羅底二吠鄧加嚕弭三

【八四】 等引(Samāhita)。三摩呬多なり。 定心にあつて專注する性を等引と云ふ。 等とは身心の安靜平和なるを云ふ。 此入定を修する時定力により此の等を引生するが故に等引と云ふ。

す、金剛一乘の甚深の敎なり。我れは瑜伽の最勝法に依り、如實に眞言門を開示し、卽ち普賢三昧耶に入る、體は薩埵[三]に同じ、金剛なるが故に。定慧和合して金剛縛とし、忍願の二度は建てゝ幢の如くす、身は月輪に處して薩埵に同じ。

眞言に曰く。

唵一三摩耶二薩怛梵三合下同

當に觀ずべし、此の身は淨月中に坐すこと猶し明鏡を敷いて坐するが如し。

安樂悅意の三摩耶印。此の妙喜を以て如來を印し、忍願の雙峯を掌中に入れ、禪智と檀慧は倶に申べて直くす。

眞言に曰く。

唵一三摩耶護引薩羅多二薩怛梵三

此の妙印及び眞言に由り、一切の聖衆は皆歡喜したまふ。次に當に心を開いて佛智に入り、乳上に於て怛羅吒を觀ずべし。金剛縛を散じて心門を拍つ、二字樞を轉ずること扇を啓く如し。

眞言に曰く。

唵一嚩日羅滿駄二怛羅二合吒

八葉の白蓮一肘の間に、阿字の素光色を炳現す。禪智は倶に金剛縛に入れ、如來の寂靜の智を召入す。

眞言に曰く。

唵一麼日羅二微舍惡三　次に如來の堅固の拳を結べ、進力屈して禪智の背を拄ふ、此の妙印と相應するが故に、卽ち諸の佛智を堅持するを得。

【△三】金剛薩埵なり。

ば鬼神咸伏す。若し事業を成就せば羯磨金剛を示現し能く行人をして速に圓滿を得しむ。五方如來を頂上に置安して滿月輪中に大蓮花に坐し、大圓鏡の內外明徹にして體に自他無きが如し。此れ是の行人の第一義諦にして不空智中の念誦義訣なり。

〔八一〕八大菩薩の布字及び本尊の色を想へ。普賢菩薩は白月色にして頭上に五佛あり吽を觀ぜよ。曼殊師利菩薩は金色身の五佛にして輪を觀ぜよ。虛空藏菩薩は紫金色の五佛なり怛羅を觀ぜよ。觀世音菩薩は紅肉色にして開敷蓮花の如き五佛なり囉哩を觀ぜよ。金剛藏菩薩は青色の五佛なり吽を觀ぜよ。彌勒菩薩は黃色の五佛なり昧を觀ぜよ。除一切蓋障菩薩は蓮花色の五佛なり敢を觀ぜよ。地藏菩薩は金色の五佛なり乞使を觀ぜよ。

〔八二〕毘盧遮那三摩地瑜伽供養次第法。

毘盧遮那佛に歸命したてまつる、妙覺の目を開きたまふこと蓮葉の如し、我れ今此の相應法を甄にし、其の念誦次第の要に隨ふ、願はくは此に依憑して速に成就せしめたまへ、自利利他にして塵垢を遠ざからんことを。是の初心の發趣する所に由り、悉く方便して菩提に向はんことを念ず。諸の進趣門は無量と雖も、能く此に過ぐる者有ること無けん。

爾の時、行人は阿闍梨の灌頂を得已り、閑靜處に於て道場を莊嚴し、香泥を地に塗り種種供養し、極めて清淨ならしめ、常に三業をして寂然とし亂るること無からしめ、慈悲心を起して諸の有情に於て總じて解脫せしめ、五曼荼羅を以て一心に禮を作し、諸の聖衆目前に在るが如く想へ。所有る衆罪は誠心に懺悔し已り、卽ち諸法の自性は皆空なりと觀じ、諸法は空にして本來清淨にして染著する所なしと觀ぜよ。是を思惟し已り密言を誦して曰く。

唵薩嚩婆嚩秫陀薩嚩達摩薩嚩婆嚩秫塗唅重呼

法界觀を作す。行者次に三摩地を修し、身口意の業は虛空に遍じ、如來の三業門を思惟

【八一】八大菩薩曼荼羅經參照。（正藏二〇、六七五a）。

【八二】毘盧遮那三摩地法參照。（正藏、一八、三二七）。

る。身肉紅色にして種種莊嚴す。冠上に觀自在王如來あり、左に青蓮を執り心上に當て、右は施無畏にして諸願を滿足す。聖者は中に於て寶蓮花に乘り白色の光を放ち能く諸願を滿す。名づけて隨心と曰ふ。眞言に曰く。

唵多利咄多利咄利娑婆訶

爾の時、世尊は普光明多羅三昧に入り三昧力を以て其の面輪の右の目瞳中より大光明を放ち、光より殊妙の女形を流出す。殊勝の妙色三昧に住し無價の雜寶にて身を嚴に爲す。無量の諸天は前後に圍遶せり。先づ頂上に於て唵字有りと想へ。次に額の上に於て多字有りと想へ。二の目瞳中に咄字を置き、復喉上に安じて多字有りと想へ、次に二肩を以て利字を布安し、心上に在つて復咄字を安ずと想へ、若しは臍中に在つて利字有りと想へ、兩髀中に於て莎縛字を想へ、叉脛上に於て訶字有りと想へ。是の如く布字すること身に周遍して方に本身の法體を成就せんことを請ふ。是の義に由るが故に先に觀じて後に請ふたり。

金剛三昧耶觀。行人觀じて心月輪中に吽字有りと想へ。其の吽字變じて五古拔折羅と爲る。純金なること眞金聚を融すが如し。赤色の光を放つこと由し火聚の如し、光明赫奕として身に週遍す。身口意の金剛輪を以て生死界に遍し、滿月の暈中に現に神變を作す。其の金剛輪は大小不定にして滿月輪と稱す。或は[七八]五股を觀じ、或は[七九]三古を觀じ、或は[八〇]獨古を觀じ、隨意無礙なり。自身の毛孔支節の間より微塵數の拔折羅を出現し、一一の拔折羅中に復能く種種の異類の身を出し、能く行人をして隨意に調伏せしめ、皆能く陀羅尼門、三摩地門を成就す。諸の器仗、契印を雨ふらし分付す。其の一一の印は皆如來大丈夫相の莊嚴せる支節より生ずる所なり。是れ作れる法にあらず。何を以ての故に。金剛體中に本來具足すればなり。性は自ら堅固にして分別を離れ、衆生を成就し能く諸願を滿ず。若し金剛を現ぜば怖畏調伏し、若し菩薩を現ぜば大悲を具足し、若し天身を現ぜ

【七八】五股。五股杵なり。
【七九】三古。三古杵。
【八〇】獨古。獨股杵。

梵篋を執り月輪中に座し、金剛杵は四面に圍遶せり、聖者は中に於て雜色の寶花に乘り赤色の光明を放つ。心地の眞言を說いて曰く。

唵跋折羅底乞瑟拏淡娑婆訶

若し虛空藏菩薩を念ぜば蓮花臺中に於て怛羅字を觀ぜよ。變じて[七三]紅頗梨寶と爲る。火焰周遍して變じて虛空藏菩薩と成る。身は紫金色の如く頂に五佛を戴す。左は[七四]施無畏、右は青蓮花を持す。花中に紅頗梨寶あり、菩薩中に於て靑蓮花に乘り月輪中に坐す。眞言を誦して曰く。

那麽阿迦捨蘖婆耶怛姪他唵阿唎迦麽哩母利娑婆訶

若し普賢菩薩を念ずる者は蓮花臺中に於て蘇嚩字を觀ぜよ。變じて金刀と爲り普賢菩薩と成る。身白月色にして頂に五佛あり威光赫奕たること由し日輪の如し。菩薩中に於て千葉の蓮花に乘り、雜色光を放ち月輪中に坐し、三鈷の跋折羅周遍し、圍遶せり。眞言を誦して曰く。

那麽三曼多拔折羅吽

若し金剛藏菩薩を念ずれば蓮花臺中に一吽字を觀ぜよ。變じて跋折羅と爲り金剛藏菩薩と成る。身は淺碧玉色の如く頂に五佛を戴す。禪は金剛拳と爲して心上に安置す。智は拔折羅を執り火焰の光を放つ、聖者は中に於て寶蓮花に乘り、三鈷金剛杵圍遶する月輪觀なり。眞言を誦して曰く。

跋折羅薩埵阿娑婆訶

若し如意輪菩薩の念誦なれば蓮花臺中に嚩哩字を觀ぜよ。變じて[七五]眞多摩尼寶と爲る。間錯して殊妙なること由し日輪の如く大光明を放ち、變じて眞多菩薩と爲る。色は壇金の如く、頂に無量壽佛を戴す。六臂を具足して六神通を成ず。菩薩應に六道を化し能く有情をして六度を滿足せしむ。[七六]補怛羅迦山に在て思惟三昧す云云。

若し[七七]多羅菩薩の念誦なれば蓮花中に於て覩弄字を觀ぜよ。變じて青蓮花と成り、多羅菩薩と成

【七三】頗梨(Sphaṭika)。水精なり。

【七四】施無畏印。佛が無畏を衆生に施す印。臂を擧げて五指を伸べ掌を外にし物を與ふるが如き形なり。

【七五】眞多摩尼(Cintā-maṇi)如意珠なり。

【七六】補怛羅迦山(Potalaka)。山の名、光明山、又は海島山と云ふ。印度の南海岸にあり觀音の住處とさる。

【七七】多羅(Tārā)。觀音院の一尊、多羅觀音に同じ。觀音の定慧の二德の內定の德を主る。多羅とは眼の義あり。

字窣都波と成り變じて本尊毘盧遮那身を成ずと觀ぜよ。金色なること〔七二〕閻浮壇の如く、項に光焰を佩び輕き天衣を掛け五佛の冠を戴く。光明殊妙にして人天の三界を照曜し、十地の菩薩摩訶薩を召集し灌頂するが故に色身を現じ寶冠瓔珞其の身を莊嚴し、勝妙色三昧に住在す。諸天の色相を超過せんと欲するが爲めに光明輪中に住す。密言を誦して曰く、阿尾羅吽欠。

一には行人は自らの身心中に毘盧遮那如來有りと觀じ、一阿字は由し滿月の白色光を放つが如しと想へ。如來は中に於て白蓮花に坐し、身は赤金色を作し、便ち本三摩耶契を結ぶ。二羽金剛拳を作り已り進度を竪て觀羽を以て之を執る。此の契に由るが故に能く諸佛は三菩提の記を授與するを得。復毘盧遮那曼多羅中に在まして結跏趺坐したまふと想へ。相好圓滿にして大威德を具し、色相鮮白にして淨滿月の如し。一切の明光を以て其の身と爲し、寶冠にて莊嚴し髮辮肩を拂ひ天衣を被服し、輕妙なる繒綵あり、身口意の三業の祕密輪を以て現に神變を作す。行者是の思惟を爲せ。密言に曰く。

唵跋折羅馱都鑁

若し觀自在菩薩の三摩地念誦を作す者は蓮花中に於て纈哩字を想へ。其の字の光明は由し蓮花の如し。種種の光を放ち變じて觀自在菩薩と成る。身の輝焰は紅蓮花の色の如し。頂上の髻中に觀自在王如來あり、寶冠瓔珞其の身を莊嚴す。左に靑蓮花を持して心上に當て、右手は蓮花の葉を擗が如し。又三昧門を觀ずること猶し蓮花の塵水に著せざるが如く愛染の爲に汚累されず。當に是の如く觀じ訖るべし。本尊觀自在の三摩地を說く眞言に曰く。

唵跋折羅達摩纈哩

若し文殊師利菩薩の念誦を作さば蓮花中に於て一梒字を觀ぜよ。變じて猛利の金刀と爲る。其の刀變じて文殊師利菩薩と爲る。身色黃金の如し。頂に五髻あり。禪にて靑蓮を執り、智にて般若の

【七二】閻浮壇は閻浮檀金(Jambunadasvarṇa)にして其色赤黃にて紫焰氣を帶べる金の名なり。

かば、日未だ出でざる時に地を穿つこと深さ三尺、當に其の物を見るべし。若し人の如き者ならば能く山を摧き海を覆すべし。若し獸の如き者ならば亦吉なり。若し玉を見れば其の人卽ち初會の人なり。若し金を得れば其の人は明に因て大富貴を得ん。若し刀杖弓箭の類を得れば壇內に呪神を見ん。若し藥を得る者は善く能く病を除かん。若し鐵石を得れば其の人堅固ならず。若し骨を得れば卽ち不吉の相なり。卽ち須く懺悔受戒して別に淨地を取るべし。穿つこと深さ三尺內の惡土を去り別に淨土を取り飾持して香末に和し之を築け。

[六八]次に大法を成就せんと欲する時節の法を說かん。先づ正月の作法は決定して障礙なし。二月の作法は決定して種々の障礙の現はるゝこと有り。三月中の作法は決定して風雲あり。五月十五日起首の作法は決定して雨あり。九月の作法は決定して雷電の現るゝことあり。凡そ作法は此等の現はるゝことある時に決定して成ずるを得。持者應に知るべし。或は七日或は十三日、二十三日にして如し鬼星日を得る者は更に甚だ吉なり。或は日月蝕の時亦第一と爲す。若し安穩法を成就せんと欲する者は二月三月を用ひ、富饒法を作さんには、十月十一月、降怨法を作さんには、四月五月なり。

[六九]我れ今略示せん。大名山の聖の居る所の處、或は神仙窟、或は空新室獨處林泉に於て斯等の處を以てし、山頂の空寂幽閉の勝處に於て、又は寂靜處に於て、山頂に於て、或は阿練若中に於て、或は山窟中に於て、或は寺中、林中、或は河岸の邊り、或は先に聖人有つて住する處は速に卽ち成就す。

[七〇]除災、滅罪の壇は應に圓に作るべし（中心は輪に作るべし）。求願の壇は應に方に作るべし（中心は蓮に作る）。逐法の壇は應に三角に作れ（中心は三股叉に作る）。敬愛を求むる壇は蓮葉の如く作れ（中心は吽字に作る）。[七一]瑜岐行者は三摩地を修し、佛に隨つて念誦要記せよ。若し毘盧遮那如來を念ぜば先づ八葉の蓮花を觀じ、阿字有り變じて師子の座と爲り、座の上に白蓮花ありと想へ。復鑁

【六八】成就の時節。蘇悉地經卷下參照。（正藏一八、六二五c）。

【六九】蘇悉地經卷上、參照。（正藏一八、六〇五c）。

【七〇】四種の作壇法。

【七一】瑜岐（Yogin）。瑜伽の修行者。

の難起る。自餘の諸時は此に準じて應に知るべし。初夜分の時は諸事寂靜にして作法驗あり。諸天集會して作法を觀視し彼の人を加被す。諸尊を請し奉るに卽ち來降して赴き求願する所を成し、應に吉祥增益等の事を作すべし。智者は應に知るべし。然るに諸曼荼羅は皆日沒の時に於て作法を起首し、明相未だ動かざるに要らず須く撥遣すべし。

〔六五〕我れ今略して三種の悉地成就の處及び成就の相と其の不成就とを說かん。一には惡國王の處、二には多賊の處、三には惡友同伴し飢饉等の處は皆中に住して同じく行法を修せず。復三時あり作法す可からず。謂く極寒時、暴雨時、極熱時なり。是の如き等の時は作法に堪へず。又三時有り堪へて修法す可し、善く分別して知れ。〔六六〕五更從り辰の時に至り、午の時より、未の時に至り、酉の時より、亥の時に至る、是の如き時の中には大に念誦を作せ、皆其の曼荼羅所觀の行を圓滿するを得ん。發願して云く。一切釋迦如來は淨居宮に在したまふ。諸の菩薩集會の位と與なり。我れ今身を捨てゝ僕隸と爲り供養したてまつる。一切諸佛唯願はくは攝受したまへ、我等最上の成就を作さんと哀愍を乞ふが故に(三稱せよ)。唯願はくは諸佛、菩薩、一切の聖者、我に悉地を與へ、我をして速に生死の淤泥を出でしめ悉地を圓滿增上せんことを至求せしめたまへ(三稱せよ)。

凡そ道場を施設するには先づ香花を以てし、諸の飲食を以てし及び繒幡を以てせよ。皆須く法の如くし穢觸を使ふこと勿れ。若し觸有るを使はゞ念誦の人をして數魔に便を得られ念誦驗無からん。發願して云く。

唯願はくは聖衆よ、　各神力を以て、　住つて供養を受け、　乃ち周畢を待ちたまへ。

我れ今當に一切の曼荼羅を作る祕密の次第の廣略大小を說くべし。彼等の三千萬の曼荼羅中に都說く次第の法は總じて此の經に在り。是の故に應に知るべし。我れに密意有り諸の法相を具足す。是れ汝等の所知の境界にあらず。是の故に稱して祕密藏大曼多羅敎と云ふ。〔六七〕略して擇地等の相を說

【六五】蘇悉地經卷上參照。(正藏十八、六〇五c)。

【六六】五更は寅の剋、午前四時なり。

【六七】擇地法。

臺蘂圓滿具足せり。是れ諸の如來は此の座に坐し已り未だ久しからざるの間に等正覺を成じたまひ悉く一切如來普賢の心を得たまはん。復一切如來は虛空所成の大[六一]摩尼寶を用ひて以て其の頂に灌ぎ一切如來觀自在の法智を獲得し波羅蜜を究竟し、功用已に畢り所求圓滿す。一切如來の無礙事業の功用を獲、方便智成就せん。行者是の如く[六二]瑜伽を觀ずるが故に卽ち[六三]金剛智を發生するを得。此の智に由るが故に能く過去未來現在の所作の事業を了し悉く皆解悟す。未だ曾て見聞せざる百千の摩訶衍の文字句義は皆自ら悟了す。

求願觀想法

[六四]若し無分別を求むる者は當に無分別、無記念を觀ずべし。若し無相、無色を求むる者は當に無文字の念を觀ずべし。若し不二の法門を求むる者は當に兩臂を觀ずべし。若し四無量を求むる者は當に四臂を觀ずべし。若し六神通を求むる者は當に六臂を觀ずべし。若し八聖道を求むる者は當に八臂を觀ずべし。若し十波羅蜜を求め十地を圓滿せんとせば、應に十臂を觀ずべし。若し如來普遍應地を求むる者は應に十二臂を觀ずべし。若し三十二相を求むる者は當に三十二臂を觀ずべし。若し八萬四千の法門を求むる者は八十四臂を觀ずべし。上の如く觀念して當に一切如來三摩地門の甚深方廣の不思議地に入るべし。是れ正念處、是れ正眞如、是れ正解脫なり。

初めて念誦を起首する日に道場に入る時は、若し息災曼荼羅を作さば日沒時に於て作法を起首し、若し增益曼荼羅を作さば日出時に於て作法を起首し、若し逐法曼荼羅を作さば日午時に於て作法を起首し、若し降怨を作さば夜半に作法を起首せよ。然し諸曼荼羅は皆日沒の時に於て作法を起首す。念誦門中此の法最勝なり。若し此の時に違はゞ必らず成就せず。但し是の一切の曼荼羅は晝日に於て起首すること勿れ、大苦惱を獲ん。中夜に於て作法する勿れ、本時に違するが故に、種々

【六一】 摩尼(Maṇi)。珠の總名。

【六二】 瑜伽(Yoga)。物と相應する義なり。相應に五義あり。密教にては行相應の義を用ふ。

【六三】 智の堅利なること金剛の如きもの、佛智に名づく。

【六四】 この一節は佛說七俱胝佛母准提大明陀羅尼經(正藏二〇、一七七c)と殆ど等し。但し准提陀羅尼經には十二臂の次に『若求十八不共法者應觀十八臂卽如畫像法觀也』の二十字あり。

形と爲り、甲金色の如し、其の身廣大なること無量[五八]由旬なり。龜の脊上に復纈哩字を想へ、其の字變じて黃色殊妙の蓮花と爲り鮮好なり。其の花三層にして八葉の臺蘂あつて具足す。又花臺の上に於て般羅、吽、吭ありと想へ、此の三梵字須彌山となる。衆寶より成つて八面あり。其の山頂に於て五の梵字あつて便ち大殿と爲ると想へ。其の殿の四方に四門を具足す。左右に吉祥幢あり、軒楯周還して四重の階道あり。其の殿上に五峯樓閣あり。雜繒綵、珠網、花鬘絞絡して懸けて莊嚴せり。又殿外の四方の角の上及び諸門の角に於て金剛寶を以て間錯莊嚴す。殿外の軒階は復種種の寶鈴、磬鐸、鐶珮を以て交映し、微風搖拂して淸響和鳴す。寶幡瓔珞空中に彌漫し、微妙の香花は種種に嚴飾す。復其の外に於て無量の劫波樹有り綺錯行列せり。諸天の妙樂は競て歌詠を奏し、諸の[五九]阿修羅摩呼羅伽等は主とて妙歌舞を奏す。彼の殿の中に曼荼羅あり、八金剛柱を以て莊飾と爲す。如來部勝妙輪中に於て三種の梵字あり。中に羅字を想ひ、左右に阿字を想へ。卽ち此の三字變じて師子の座と成る。四面莊嚴にして微妙第一なり。金剛部中に於て三種の梵字あり、中央に伽字有り、左右に皆吽字有りと想へ。此の三字變じて象座と爲る。四面莊嚴にして微妙第一なり。寶部中に於て並びに三の梵字あり。中央に婆字有り、左右に怛羅字有りと想へ。此の字を以て變じて馬座と成す、四面は七寶にて莊嚴し微妙第一なり。蓮花部中に於て並に三の梵字あり、中央に摩含字あり、左右に皆纈里字有り、此の三字を以て變じて孔雀座と爲す。四面皆金剛蓮花寶を以て莊嚴し、微妙第一なり。羯摩部中に於て並に三梵字あり。中央に劍字あり、左右に皆阿短字あり。此の三梵字を以て變じて[六〇]迦樓羅座と爲す、四面は純ら雜寶を以て莊嚴し微妙第一なり。

爾の時、如來は五種の座に坐し已り、及び十六大菩薩並に四波羅蜜、四種の內供養、四種の外供養及び四攝四菩薩等は皆本三摩地を以て各各彼の差別の契記を想ひ、此等の事相は皆毘盧遮那如來の身心中從り出現すと。又五部の座の上に各月輪有りと觀ぜよ。月輪の中に於て殊妙の蓮花有り、

【五八】由旬(Yojana)。里程を計る稱名、帝王の一日行程を由旬と云ふ。或は四十里又は三十里なり。但し六町を以て一里とす。

【五九】阿修羅(Asura)。容貌醜陋の義、非天と譯す。大腹摩呼羅伽(Mahoraga)。大蟒神と譯す。八部衆の一、大蟒神なり。胎藏界第三院の一尊にして釋迦如來の眷屬なり。

【六〇】迦樓羅座(Garuda)。舊譯は金翅鳥新譯は妙翅鳥なり、八部衆の一。

謁利二合訶鉢得花引沒哩耶（觀世音菩薩）、唵迷訶哩儞（彌勒菩薩）、阿迦舍揭婆耶（虛空藏菩薩）、而嚩起哩惹耶（普賢菩薩）、嗚鑁摩維（金剛藏菩薩）、室哩闍阿羅伽（文殊師利菩薩）、娑阿羅嚩・（除一切蓋障菩薩）、訖哩阿羅茄（地藏菩薩）、吽摩訶尾囉（毘盧遮那佛）。

梵名十方佛

娜慕婆誐嚩帝阿屈閦鞞（東方）、娜慕婆誐嚩帝阿輸伽失里（東南方無憂勝）、娜慕婆誐嚩帝囉怛曩三婆頞（南方寶生）、娜慕婆誐嚩帝瑟野胝（西南方寶施）、娜慕誐嚩帝阿彌陀婆（西方阿彌陀）娜慕婆誐嚩帝蘇姑蘇密多失里曳（西北方善開敷）、娜慕婆誐嚩帝帝儒失里耶（上方光勝）、娜慕婆誐嚩帝吠盧遮那怛他誐多三藐三母馱耶（下方毘盧遮那）。

梵名十號

怛他、誐妬羅斡（如來應供）、三藐三母馱（正遍智）、尾儞耶（明）、者羅（行）、拏慘半那（足）、素誐妬（善逝）、路迦尾（世間解無上）、娜弩怛囉補嚕灑（丈夫）、娜弭耶（調）、些羅底（丁以反御）、捨些跢（師）、遲嚕難（天）、摩拏史耶南者（人）、母度（佛）、薄誐鑁（世尊）。

[五七]自在天眞言。　唵伊舍那耶。　天帝釋眞言。　唵因達羅耶。　火天神眞言。　唵阿祇那曳。　琰魔王眞言。　唵琰摩耶。　羅叉娑眞言。　唵羅叉娑地婆多曳。　諸龍及び水神眞言。　唵婆盧拏耶。　諸風神眞言。　唵婆耶毘。　諸藥叉衆眞言。　唵藥叉苾地耶陀里。　又此方に於ける諸鬼神眞言。　唵比止比止毘舍遮南蚻蚻部多南娑婆訶。

爾の時、薄伽梵、金剛輪より世界を建立したまふ。金剛刹より琰字有て世界輪を成ずと想へ。所謂る地輪風輪空輪なり。彼の輪界は盡く皆黑色なり。復劍字は金剛圍山を成ずと想へ、純ら雜寶を以て用ひて莊嚴す。復虛空に於て唵字有り毘盧遮那佛と爲り、毘盧遮那佛の臍中より大悲甘露乳を普く注ぎ流出し、甘露海は虛空法界輪に滿つと想へ。海中に於て復波羅字を想へ、其の字變じて龜

【五七】略出經參照（正藏十八卷、二四八頁c）。

に。總じて三種の所求あり、一には成就眞言の爲の故に、二には滅罪獲福の爲の故に、三には未來の果の爲の故なり。

[五五] 三十七漫茶羅主名號密語

跋折羅馱覩、阿閦鞞、阿羅怛娜三婆頗、嚧計攝伐羅阿羅闍、阿目伽悉地、跋折羅薩埵(普賢菩薩)、跋折羅阿羅伽(摩訶大愛菩薩)、跋折羅闍(不空王菩薩)、跋折羅娑度(歡喜王菩薩)、已上四菩薩は東方阿閦鞞金剛部なり。跋折羅阿羅怛那(虛空藏菩薩)、跋折羅帝闍(大威光菩薩)跋折羅計都(寶幢大菩薩)、跋折羅訶娑(常歡喜咲菩薩)、已上四菩薩は南方寶生如來部なり。跋折羅達羅摩(觀自在菩薩)、跋折羅底乞瑟那(文殊師利菩薩)、跋折羅計覩(纔發心菩薩)、跋折羅婆娑(無言大菩薩)、已上四菩薩は西方蓮花部、阿彌陀如來部なり。跋折羅羯磨(毘首羯磨大菩薩)、跋折羅阿羅乞叉(鬪戰勝精進大菩薩)、跋折羅藥叉(摧伏一切魔大菩薩)、跋折羅散地(如來拳大菩薩)、已上四菩薩は北方不空如來羯磨部なり。薩埵跋折哩(一切如來金剛波羅蜜三摩地灌頂智)、阿羅怛那跋折哩(一切如來金剛寶灌頂智)、達磨跋折哩(一切如來金剛法波羅蜜三摩地灌頂智)、羯磨跋折哩(一切如來羯磨波羅蜜作佛事業灌頂智)、已上四部波羅蜜なり。跋折羅囉斯(喜戲)、跋折羅摩嚟(鬘)、跋折羅祇帝(歌詠頌)、跋折羅涅里底(舞羯磨智)、已上は四種の內供養なり。跋折羅杜鞞(香)、跋折羅補瑟篦(花)、跋折羅嚧計(燈)、跋折羅健提(塗香)、已上は四種の外供養なり。跋折羅俱舍闍(鉤召集)、跋折羅跛賖吽(羂索引入)、跋折羅薩普吒梵(鈎鏁縛)、跋折羅毘賖吽(攝入召一切如來部事者)、

[五六] 八曼茶羅道場主名號

【五五】金剛界根本成身會の三十七尊の密語即ち眞言なり。最初に五佛即ち、大日・阿閦・寶生・阿彌陀・不空成就の眞言をあげ、次で四方四佛の四親近、中央大日の四波羅蜜、內外の八供養、四攝菩薩の眞言なり。

【五六】佛說大乘八大曼拏羅經參照(正藏二〇、六七六a)。

ず。亦佛床、法床、僧床、和上阿闍梨父母等の床に坐せず、坐臥食せず乃至語を得て食し人と共に器を傳へて食せず。毘那耶教中の如く我以て廣く分別し竟りぬ。是の如き等の法は略說せば少なるのみ。若し我廣劫に住し演說せんと欲するも窮盡す可からず。其の食する所の器は純赤白銅の[四七]椀等を用ひて食し亦手にて齒を揩はず。呪者應に知るべし。正跏端坐して法の如く默食し、死喪の家、初產生の家、不淨人の家、[四八]旃茶羅の家に往くを得ず。亦殘臭宿食の供養を持ち及び自ら食噉せず。每日三時に自ら誓て佛、法、大菩薩、僧に歸依し、菩提心を發して三業を淨治し、[四九]六念を思惟す。所謂る三寶、戒、施、天等なり。梵行に一心にして淸淨なれ、外道の如くあること莫れ。髮長く、甲銛ければ則ち[五〇]潔淨ならず。若し髮長ければ則ち蟣虱の生ずる所となり隨て障咎を生ず。梳洗の功多く念誦の數小し、若し髮長く甲銛く裏に垢穢を停むれば香を拈じ香を燒くも便ち汚觸なり。隨て障咎を生ず。日月蝕する時觀論する勿れ。亦和尙阿闍梨を譏謗する勿れ。國土有て主無く交亂するを見れば特に中に住し修法念誦する勿れ。神龍の護れる地、[五一]藥叉[五二]羅刹の常に集り住せる地に住する勿れ。[五三]屍陀林、無佛法の地、虎狼の住する地、蚊虻多き地、無雨方の地、饒風多き地、多賊の住する地、屠刹の住する地、沽酒の住する地、經像を賣る地、凶具を賣る地、淫女の地、衆の住する地、皆中に住し法を營み念誦する勿れ。悉く成就せず、善く分別して知れ。一切念誦品中に此の法を最にして成ずること廣しと爲す。小功なれば成ずることも小なり。若しくは請召法の時、若しくは念誦の時、若しくは一切求願法を作す時は應に一切の善不善の語を斷ち念誦の處に於て結跏趺坐すべし。諸の妙法は香水の河と成り身沒して澡浴すと想ひ、印を呪して身を印し當に自身は佛菩薩等と爲ると觀じ香を遍身に塗るべし。一切の念誦は應に搖動し漫に觀し聽察すべからず。若し坐を破り動搖謦欬等有らば[五四]輪を重ね浴印を結び身を印す。持するに淨水を以てし、手を洗ひ口を漱ぎ法の如く念誦せば成ずること廣し、小功なれば成ずること小なり、上中下に隨て定んで成就するが故

【四七】昔時使用せる四本足の俎。

【四八】旃茶羅(Caṇḍāla)。屠者、下姓。

【四九】六念。即ち念佛・念法・念僧・念戒・念施・念天なり。

【五〇】本文は髮長甲銛則潔淨とあれど此處には則不潔淨とし不を入れて譯す。

【五一】藥叉(Yakṣa)。能啖鬼と譯す。

【五二】羅刹(Rākṣasa)。惡鬼の總名なり。

【五三】屍陀林(Sīta-vana)。寒林と譯す。死屍を棄つる林。

【五四】輪とは、五輪。

塗香の眞言に曰く、

唵跋折羅嚩提伽

塗香及び花、燒香、飯食、燈明、護摩[四四]なり。縱ひ餘物を辨ぜざるも是の六種の物を以て應に闕少すべからず。次に當に想を運ぶべし。此の香烟は五色光明の雲臺と作り十方三世の一切の諸の佛國土に流布し遍滿し、種種の伎樂を作し、妙音聲の歌唄を出し、種種の梅檀沈水の上妙の諸の香を作り、種種の餚膳湯藥の上妙の衆味を作り、種種の衣服瓔珞流泉浴池の上妙の諸の觸を作り、種種の禪定、智慧、淸淨實相の無量の法門を作り、悉く法界に充滿し以て佛事を爲し、十方三世の諸佛、一切三寶を供養し、攝受して亦一切衆生を熏ず。一一の佛前に於て悉く此の身の如しと見て供養すること等しくして異あることなし。又願て云く、一切衆生は悉く我法界海中に入り、是の如き供養は心想より生じて自性有ることなしと了知し心に取著せざれと。此の念を成し已り便ち五體[四五]を地に投げ口自ら唱言せよ。卽ち當に身口意業法界に充滿すと了知すべし。

三摩地供養次第儀式

凡そ念誦を欲せば先づ三昧耶契を結び自らの頂上に安ぜよ。此等一一の印は先に一切如來の大丈夫の相の莊嚴せる身分支節より生ぜる所なり。一一の如來は無量俱胝[四六]百千の印有り。一一の印は各無量の僕從有り。我今略說せんに、一印は差別の印を生じ、衆法の用に隨ひ一眞言は一切眞言を生ず。若し是の如く流布せる敎行を廣說せば則ち無量に有り、假りて廣說せず。何を以ての故に、我餘部に於て以て廣く分別し竟れり。諸の三部に於 說く所の律、法及び、成就の印呪は皆任に取り用ひよ。行者は一切の臭穢を食すべからず。餘殘の宿食は皆食すべからず。若し食する者は悉地を證せず。乃至佛菩薩を供養せる食も亦應に之を食すべからず。亦應に靑黑等の物を食すべから

【四四】 護摩(Homa)。燒くと譯す。

【四五】 五體とは、右膝・左膝・右手・左手・頭首なり。

【四六】 俱胝(Koti)。億と譯す。

尊の三昧地に住し方廣大乘經典を讀誦し、意に隨て經行す。

若し衆生あつて此の教に遇ひ、晝夜四時に精進して修せば　現世に[39]歡喜地を證得し、後十六生にして正覺を成ぜん。

[40]普通諸部淨數珠契

二羽蓮花合掌、

餘の度は盡く相著け、微に開敷の勢に似す。

唵嚩蘇唵底室哩曳莎波訶

是の印を結び已り當に數珠を取るべし。左契中に捧げて念誦すること七遍せよ、即ち清淨通[41]五部執數珠契と名づく。[42]之を念誦する時、若し佛部を持せば進力を以て珠を捻ぜよ。若し金剛部を持せば忍願を以て珠を捻ぜよ。若し蓮花部を持せば戒方度を以て珠を捻ぜよ。三部の念誦法の要を略明しぬ。寶部及び羯磨部は後を待つて別釋せん。

凡そ念珠の法は二羽心に當て相去ること一寸、珠を以て相捻じ即ち念誦を成す。此の法は瑜伽中に於て廣説す。又阿闍梨より此の法を授け得たり。前と稍殊る。[43]唯慧の掌を以て横に仰け、定羽を上に覆ひ、以て珠を捻じ、相捻じて近づく、即ち十波羅密を成ず。念誦の時、燒香、散花、獻燈、塗香の供養等あり。

燒香の眞言に曰く、

唵跋折羅杜魄阿

散花の眞言に曰く、

跋唵折羅補瑟魄唵

獻燈の眞言に曰く、

唵、跋折羅盧計儞

【三九】大乘菩薩十地の内の初地なり。

【四〇】以下普通諸部。

【四一】金剛界の佛部、金剛部寶部、蓮華部、羯磨部の五部なり。

【四二】三部念誦印。

【四三】眞承錄第一に云く、此の印相は常と異れり。通途は右は上左は下なり、今は之に反す。强て寫誤とも脱落とも見えず。更に善本に校すべしと。

薩埵悉地、乃至如來最勝悉地なり。

金剛界大印を改めず、便ち本尊の根本明を誦せよ。

唵一摩折羅駄都二合

[三五]定慧二羽珠鬘を捧げ、本の如く眞言七遍已り、捧げて頂上に至り復心に當て、堅住し等引して念誦す、舌端微動し脣齒合す、逆順身を循らして相好を觀ず、四時勤修して間てしめず、千百を限りと爲し復是れを過ぐ、一切神通及び福智は、現世にて[三六]遍照尊に同じ。

行者は念誦の分限を畢り、珠を頂上に捧げ大願を勲發す。然して後三摩地印を結び[三七]法界體性三昧に入り[三八]五字の旋陀羅尼を修習す。

諸法は本より生ぜず、自性は言説を離る、清淨にして垢染なし、因業は虚空に等し、旋らして復諦に思惟せよ、字字眞實を語る、初後差別すと雖も、所生は皆一に歸す、是の三昧を捨てず、兼ねて無緣の悲に住す、普く願はくは諸の有情、我と異あること無きが如くならんと。

行者三昧より出で已り、即ち根本印を結び、本明を誦すること七遍、復八大供養を以て諸佛を供養し、妙音の詞を以て稱揚讃歎し閼伽水を献ず。降三世の印を以て左に旋らして解界す。即ち金剛解脫の印を結び諸聖を奉送し各本土に還したてまつる、印は前の三昧耶印を結ぶ。忍願花を承け頂上に至りて散ず。眞言に曰く、

唵一訖哩二合 娑縛入聲呼 薩怛縛喋託二合二 悉地捺多曳他努識引三 糵瑳特鑁四 沒駄尾灑焰補那羅引識麼那引也都五 唵六 麼折羅薩怛縛二合 穆七

此の法を作し已り、重ねて三昧耶印を以て明を誦し加持し以て四處を印す。然して後灌頂し金剛甲冑を被、前の四禮を以て四方佛を禮し、懺悔發願す。然る後閑靜處に依り香花を以て嚴にし、本

【三五】正念誦なり。

【三六】大日如來。

【三七】字輪觀なり。

【三八】阿囉跛左曩。

一切如來花外供養契

禪智外に相叉へ、　面を仰けて之を散ず、　微妙の花雲を以て、　普く心に持して供養す。

密言に曰く、

唵顛羅迦迷

一切如來燈外供養契

即ち金剛縛を以て、　禪智竪て之に逼る　如來の惠燈を持ち、　普く衆事業を照す。

密言に曰く、

唵素底惹擬哩二合

一切如來塗香外供養契

金剛縛を心の上に、　散開して塗香に似す、　此の妙栴檀を持し、　等しく海雲に供養す。

密言に曰く、

唵素犍蕩引覽

是の如く供養し讃歎し竟り、本尊三昧觀を以て心をして散せざらしむ。瑜伽行者は一切如來の身口意の金剛差別の契を以て己身を加持す。又一切の隨形好は盡く其の身を莊嚴すと想へ。即ち應に摩訶三摩耶印、百字の言を誦し身をして堅固ならしむべし。便ち本尊の三昧耶契を結べ。

〔三三〕毘盧遮那法身三昧耶契

禪智外に相叉へ、　忍願の端竪てゝ屈す、　進力は背の上に於て、　三節直く之を竪つ。

眞言に曰く、〔三四〕(百字の明なり。)

摩訶衍百字の眞言を以て加持するに由るが故に、設ひ無間罪を犯し、一切諸佛及び方廣經を謗るも、眞言を修する者は本尊己身に堅住するを以ての故に、現世の所求悉地す。謂く最勝悉地、金剛

【三三】本尊加持なり。

【三四】唵渇誐薩怛縛二合一 三麼耶麼努播引攞耶二合二 渇誐薩怛嚩二合三 底伏二合怒跛底瑟姹二合四 涅哩二合住茶護反 銘婆去嚩五 素覩使喩二合 銘婆去嚩六 阿上拏囉訖覩二合 銘婆去嚩七 素布使喩二合引 銘婆去嚩八 薩嚩悉睇捉飲反 銘鉢羅二合 也瑳九 薩嚩羯磨素者 銘十 質多失唎二合 藥句嚕十一 吽引 訶訶訶訶斛引 婆誐鑁十二 薩嚩怛他蘗多十三 渇誐 麼銘門上者十四 渇倪倪以反 婆嚩十五 摩訶三摩耶薩怛嚩二合 噁引十六

唵摩訶囉底丁以反

一切如來菩提鬘内供養契

此の喜戲の印を以て、前に向ひ直く之を申ぶ、即ち菩提鬘を成じ、如來覺を證せんことを願ふ。

密言に曰く、

唵嚧播戍鞞

一切如來金剛詠歌内供養契

前印を縮めて臍に對し、漸く上上げ口に當てゝ散ず、金剛歌詠を奉り、微妙の音に契んことを願ふ。

密言に曰く、

唵室嚧二合多羅燥歌輕

一切如來金剛舞内供養契

各金剛拳を作り、禪支は心に對して智を仰ぎ、檀慧を迴し散ず、同じく頂上に施して舒ぶ。

密言に曰く、

唵薩嚩布際輕

〔三二〕一切如來焚香外供養契

金剛縛下に散じ、香を捻ずる如くし之を焚く、如來の香雲を以て、遍く法界に供養す。

密言に曰く、

唵鉢羅曷羅尼上儞

【三二】外四供養。

り、次第に之を結べ。然して本尊の眞言を持し、全跏又は半跏意に隨て坐す。二羽を心に當て相去ること一寸、珠を以て相捻じ卽ち念誦を成す。乃し滿一萬、若しくは一千、八百、二百に至り[28]限り、下は一百八に至る。

一一の時の中に於て散動及び他人と語言するを得ず。是れを[29]怛哩三昧耶念誦法と名づく。念誦畢り以て復懺悔を陳べ、重ねて[30]八供養を結び心の發願に隨て成辦せざること無し。復三昧耶契を結び次第に之を解き頂の上に至り散ず。次に結界及び火院界を作し左に旋らして之を解く。又略車、召集の契を以てす。禪智二度を以て外に向け之を撥す、卽ち撥遣を成す。卽ち部母護身を結び方に起去すべし。一切の諸天皆此の人身を見るに皆聖者に同じ、諸の惡鬼神敢て害を爲さず、怨家債主は心を奉じて敬禮し、一切の有情は日夜利益す。是の故に智者は心を此の門に安じ、祕密を行と爲し、常に惠施を行し、苦惱せる有情を悲念し、應に瞋嫌の心を起すべからず。是れを三昧耶念誦法と名づく。

常に食上に於て囉字あつて以て食を淨むと想ひ然る後方に食すべし。復自身は三鈷金剛なりと想へ。當に十力の眞言八遍誦し、然る後方に食すべし。眞言に曰く、

那莫薩嚩勃陀菩地薩多嚩二合 南唵嚕烟提帝孺磨利儞沙嚩訶

軍荼利の眞言に曰く、

唵呼嚕呼嚕底瑟吒底瑟吒盤陀盤陀何那阿那阿蜜哩帝吽泮吒莎訶

[31]一切如來喜戲內供養契

止觀外に相叉へ、禪智並べ端を竪て、心に當て供養に住す、一切諸如來、供養菩薩印尊び奉る所の者に隨ひ、願くは速に之に加持したまへ、

密言に曰く、

【二八】分限を定める。

【二九】怛哩三昧耶(Trisamaya)。佛部、金剛部、蓮華部の三種の三昧耶の念誦法なり。

【三〇】內外の八供養なり。內四供養は嬉戲・鬘・歌・舞、外四供養は香・華・燈・塗香なり。

【三一】內四供養。

十方天界を結ぶ三魔耶契

定慧内に相叉へ、忍願の頭相捻じ、進力屈して背に附す、猶し三鈷形の如し、禪は進の側の文を捻ず、智度も亦是の如し。

唵商羯𠼝摩訶三莾焰莎訶

念誦し已り右に揮ふこと三遍、普く八方四維上下に轉ぜよ。大浄天の更に垢穢無きが如し、密會の中は廣博嚴淨なり。是れを三昧耶法と名づけ、是の如く結び已る。經に云く、假ひ輪王佛頂及び諸の相違せる餘の眞言を使ふ者も皆其の便を得ず。即ち種々の香花飲食を以て本尊及び諸の聖衆に獻じ奉り、即ち發願し迴向す。

[二二]部母護尊及自身契

定慧二相合し、進力屈して鉤の如くし、忍願の背を捻ず、猶し佛眼形の如し、禪智並べ堅て開き、忍願の側に附す、是れを部母契と名づく。

曩莫三曼多母馱喃怛姪他唵嚕嚕薩普二合嚕入伐羅底瑟他悉馱路者儞娑羅囉羅他沙達儞莎訶

念誦すること三遍、已て契を以て本尊聖者を圍遶せよ、是れ護尊法と名づく。復眞言祕契を用ひて自身の[二三]四所を加持せよ。是れ部母三昧耶法と名づく。是の如く結び已り[二四]毎日四時に法の如く念誦せよ。所謂る晨朝、午時、黄昏、夜半是れなり。四種の念珠を持して四種の念誦をなせ。一には音聲念誦、二には金剛念誦なり、口を合して舌を動かして默誦すること是れなり。三には三摩地念誦、心念誦是れなり。四には眞實念誦なり、字義の如く修行すること是れなり。誦を欲する毎に先づ須く洗浴し法に依て結護し、軍荼利[二五]の小心眞言を誦して水を呪し衣服の上に灑ぎ散ぜよ。浴所より出でて跪脚すべからず。八葉の蓮華を以て其の足を承くと想へ[二六]。次に自身の相好は本尊に同じと想へ。戸を開かんと欲する時は一たび吽の聲を作し、然して道場に入り[二七]三業を禮懺し、初三昧耶よ

【二二】部母とは、金剛界の五部胎藏界の三部の各部に能生の德を主る尊あり、これを部母と云ふ。

【二三】胸・額・喉・頂。

【二四】略出經參照（正藏十八卷二四八頁ｂ）。

【二五】阿密㗚帝吽發吒。

【二六】道場に入る時の觀想なり。自身本尊と爲ると觀ず。

【二七】身口意の三業。

し、三迴し彈指して聲あらしむ、是を召集と名づく。

唵跋日羅三摩闍惹

爾の時、召集せる菩薩は虛空中に住し、手に[一七]揵椎及び跋折羅を執り之を擊ちて聲を出したまふ。其の聲遠く十方の無量の世界に至り、一切の諸佛の數恒沙の如く、一切の菩薩の數微塵の如し、皆來り集會して行者の前に住したまふ。已に決定して心至誠にして無疑なり。聖者歡喜して本願に來赴するが故に[一八]遏迦を持し以て諸佛及び諸菩薩緣覺聲聞に上る。佛部三昧耶契を結び遏迦器を捧じ前の[一九]普淨法界の明三遍誦す。閼伽を上る所以は今淨妙の水を以て諸尊の處を淨む、淸淨の義を以ての故なり。

聖者に花座を設くる契

前の蓮花契の如くし、微に屈し開敷せるに似す、心に妙蓮花を想ひ、[二〇]位に隨て座を敷く、

曩麼三曼多母多南唵鉢頭麼微羅也莎訶

念誦し已り心に祕印より妙蓮花を出すと想へ、色香鮮潔にして位に隨て座を敷置し諸の聖者に白して言く。聖者は本願力に由て大悲を捨てたまはず、此の卑弊の處に降りたまひ[二一]無間の等思を開きたまひ、願はくは斯の微供、願はくは加持を垂れ有情の願ひを滿したまへ。

八方火院を結ぶ契

二羽平にし掌を舒べ、慧を定羽の上に加へ、禪智は直く竪て開く、名づけて金剛火と曰く、

唵阿三麼祇儞吽

念誦し已り印を以て右に遶らすこと三遍せよ、心に隨て遠近大火城の如し、一切の魔障は退散し馳走す。

[一七] 揵椎(Ghaṇṭā)。鈴、鼓を云ふ。

[一八] 遏迦(Argha)。水と譯す。閼伽とも書す。

[一九] 淨三業の明なり。

[二〇] 曼荼維中の佛菩薩の座位なり。

[二一] 無間の等思とは、理趣經開題に云く、無間と不空とは其の義一なり。義を以て之に名づく。是れ佛の大悲無間に起て平等に思性する卽ち無緣の大悲恒に起ることなり。

前の契の如くして改めず、禪智竪て峯を開く、身を遶らすこと三たび之を辟く、名づけて金剛界と曰ふ、

心想の至る處に隨ひ、便ち成じて界方と爲る、此の密言を誦して曰く、

唵沙羅跋日羅波羅引迦羅吽泮吒莎訶

念誦し已り契を以て右に旋らすこと三遍にして之を揮ふ。心に隨て遠近に牆界を成ず。無量の金剛は世界を護持し、能く非類をして是の猛焰を見るに、大火城の如く、四散し馳走せしむ。

[一五]金剛上方三昧耶契

前の契の如くにして移さず、禪を以て進を捻じ　智と力も亦之如し。

唵尾悉普羅捺邏乞叉跋日羅半惹羅吽泮吒莎訶

念誦し已り印を頂の上に擧げ旋遶すること三遍。能く上方の一切の惡魔鬼神種々異類の屬をして惶怖し遠く走り敢て障を爲すこと無からしむ。

一切聖者を請ひたてまつる寶輅の契

定慧内に和合し、進力建つること峯の如し、禪は願文の側を捻じ、智忍も亦是の如し、諸の賢聖を召集するに、禪智を内に三たび招く、是を迎請契と名づく。

唵都嚕都嚕莎婆訶。

念誦し已て、是の寶輅は聖者の所へ往き、是の輅の上に寶室あり道場を莊嚴すと想へ。其の室の中に寶蓮花師子の座あり、座の上に無量の衆寶あつて用ひて莊嚴して諸の聖者坐したまひ、聖者歡喜して一念の頃間にして一時に來至す。

[一六]一切賢聖を召集したてまつる契

止觀の五指交へ、禪を以て智の上に在らしむ、肩に對して定慧を仰け、進力狀鉤の如く

【一五】 虛空網なり。

【一六】 稟承錄第一、押紙に云く、常謂く、此の口傳甚だ錯亂す。今の文禪を以て智の上に在りとは、二手左を禪と名づけ右を智と名づく。左を内にし右を外にし二手を肩に對して仰け、進力鉤して三たび彈指す。只左右と内外との違のみにして自餘は更に違なし。安流等は此に據る。醍醐は左を内にし右を外にす。醍醐は左を下にし右を上にするに據る。只左右の上(右)下(左)と內(左)外(右)と異るのみ。

妙香處々に垂布し、無量の寶花行列開敷して香氣氛馥たり、一一の佛會の中に於て佛の爲に供養すと。此の想を作す時、此の明を誦して曰く、重ねて偈を說いて言く、

願くは此の香雲十方に遍じ　歌音の妙響は空中に滿じて　微塵に等しき諸佛並に諸菩薩及び聲聞を供養せんことを。　唯願くは三界の大慈尊　三昧自在力を垂れ賜へ。

曩莫三曼多母駄喃薩嚩他欠郞蘗帝薩頗羅呬輪俄俄那鉤莎嚩訶

三遍誦し已て諸の三昧に入り、心の觀ずる所に隨ひ悉く成就す。是の觀を作す者は行人をして煩惱障を除き內外身を淸淨ならしめんと欲するが故に復此の陀羅尼心の印呪にて之を加持せよ。

唵薩嚩婆嚩輸駄薩嚩達磨薩嚩婆嚩輸度唅

是の念を作し已り口に阿字を稱へよ、卽ち阿字は是れ無生の義、法は本より生ぜざるを以て唯獨り此の門のみ能く塵垢を遠ざく。塵垢は旣に淨なれば則ち因緣無し、因緣旣に無なれば則ち諸法は寂靜なり、諸法寂靜なるを以ての故に卽ち亦眞如の法淸淨なり。初門の中從り一切義を具す、乃し〔二〕四十二賢聖に至るも皆亦この如し。

〔三〕金剛下方三昧耶契

戒忍並べ端を竪て、願方の背に叉入す、　卽ち、戒忍度を以て、觀羽の中に交入す、　餘の度各相捻じ、由し三角形の如くす。

此の密言を誦して、曰く、

唵枳里枳里跋日囉跋日哩部羅畔駄畔駄吽泮吒半音莎訶

念誦し已り獨股金剛杵を成ずと想へ。火焰徹して下金剛際に至る。是法は能く下方の一切の大力の惡魔の屬をして皆悉く退散せしむ。

〔四〕金剛四方三昧耶契

【二】菩薩乘の位階なり。三賢十聖に等覺、妙覺の二聖を加へたるものなり。

【三】地結なり。

【四】四方結なり。

顯力並べ端を竪て、方慧は鉤契の如し　智度捻じて環の如くす。定手も亦是の如し。
卽ち忍進度を以て、慧の掌中に穿入せよ。是れを無動劍と名づく、用ひて方隅界を結び
　刀を拔いて右に之を遶らし、一切の魔を辟除す。

曩慕三曼多嚩日羅二合 𧹞吠羅二合 戰拏尼皆及 摩訶路沙拏娑破吒耶吽怛羅二合 吒訶莽

三遍誦し已り或は七遍、印を以て右轉すること三遍せば卽ち結護を成ず。左に三遍轉ずるを名けて辟除と曰ふ。是の呪の威力能く大に十方の大界を擁護す、及び以て護身並に處所を淨除し乃し三界に至るまで猶ほ能く防護す況や一方所をや。是の法を作し行者の心念に隨て呪印の及ぶ所の處、能く種々の異類及び難調の魍魎の屬をして皆熾然せる金剛威怒の大火聚の如く其の處に周遍せるを見せしむ。此の法の功德甚大にして說き難し。多劫中に於て功能を廣說するも盡す可らず。是れを無動金剛法と名づく。此の法も亦五部の結護に通ず。(毘盧遮那經に出づ)。

　一切如來擐甲頭鉾契

先づ密言を誦し已り、進力互に相旋し、三遍之を旋遶し、便ち唵砧字を言ふ、進支に唵字を想ひ、力支に砧字を想へ、各青色の索を想ひ、鎧を被るが如く之を帶す、一切支節の間、並に須く旋遶して繫くべし、漸く頂後に至り、先づ檀慧より垂る。
是れを金剛甲と名づく、此の密言を誦せよ、曰く、

　唵跋日囉迦嚩者跋日羅㧞盧拔折羅嚩日哩那咁引

是の如く結び已れ、一初の天龍夜叉人非人等皆行者を見るに、是の金剛身金剛甲を被り、金剛杵を執り金剛界に住すと。諸魔鬼神退散し馳走して害を爲す能はず。是れを擐甲頭鉾契と名づく(金剛頂經に出づ)。是の法を作し已り卽ち復三業を虔誠す。想ふて十方の一切諸佛及び諸の菩薩緣覺聲聞を禮し一心に䠒跪し、手に香爐を執り法界を淨めしむと想へ。復想へ此香雲右に旋すに臺と爲り、花雲

蓮華部三昧耶契

檀慧の二俱に合せ、禪智の頭相柱へ、十度は敷蓮の如くし、當に觀自在の如くすべし

　之を想ひ頂の右に居き應に是の如きの觀を作し　此の密語を誦すべし。

曰く、

唵鉢頭暮嗢婆嚩耶莎嚩訶

念誦し已て頂の右に安き、卽ち心眼をして觀自在菩薩を想見せしめよ、身相圓滿にして紅赤色を作し、天冠花鬘、衆寶瓔珞具足し莊嚴せり。冠中に化佛あり寶蓮華に坐して說法の相を作す。又佛の側に侍するが如く同じく如來に侍すと想へ。

金剛部三昧耶契

[七]止を觀の背に相加へ、智檀と禪慧とは、翻覆して互に相鉤す、是を金剛持と名づく

結び已て頂の左に居く、彼の執金剛に同じ。

此の密言を誦せよ、曰く、

唵嚩日路都婆嚩耶莎嚩訶

念誦し已て頂の左に安け、心眼をして分明に想見せしめよ、執金剛菩薩の身色は淺碧玉の色の如し、手に[八]跋折羅を持ち[九]半跏にて坐すと。又想見せよ、無量の金剛種族同じく如來に侍すと。三昧耶を結び已て卽ち自身全く吽字と成ると想へ。此の字の想成ずること猶し火色の如し、字より發生せる熾然たる焰は身中の[一〇]三毒の煩惱及び隨煩惱を憤燒して一時に頓盡する時に火も亦隨て滅し、唯吽字を存し融けて[一一]皎月と成つて心中に在り是の想を作す時宜く遲住すべからず速に慧心を轉じて其をして成就せしめよ。

無動金剛辟除難契

【七】左手を止、右手を觀とす。

【八】跋折羅(Vajra)。金剛又は金剛杵と譯す。

【九】兩足を兩胜に加するを結伽趺座と云ひ又全跏座と云ふ。一足を一胜に加するを半跏趺座又は半跏座と云ふ。半跏とは半跏趺座のことなり。

【一〇】貪瞋痴の三　。

【一一】皎は白く光る義、

念誦結護法普通諸部[一]

三藏金剛智灌頂の弟子に授與す。

凡そ念誦を欲せば先づ須く護身[二]結界し想を澄すべし。本尊聖者を觀察し、慈悲心を起し有情を愍念し、大誓願を起し菩提を迴向し、方に念誦すべし。(縱に說く所の如く初後皆用ゆ。)

若し初めて道場に入らば先づ　[三]三昧耶を結び　自身の頂上に安じ　遍く十方佛と三世の大慈尊を禮し　集むる所の諸の善根を合掌し盡く隨喜す。

唵縛日羅鉢娜麼徵入

是の如く法に依て結護し已り、若し闕くること有らば三昧耶を犯さん、[四]蘇摩金剛の言を密持し四時に諸の過咎を懺悔す。

曩莫悉咥哩也地尾迦南薩縛怛他俄多南阿引含去尾羅耳尾羅耳摩訶斫羯羅縛日哩薩哆薩哆莎羅帝

唵羅帝怛羅曳怛羅曳尾駄麼儞三畔惹儞怛羅麼底悉駄阿訖哩曳窒哩焰莎縛賀

佛部三昧耶契

[五]二羽側めて相合し、　[六]忍戒檀相柱ふ　進力を忍願に附け、　禪智は屈申して附け、　當に釋迦尊分明に其の所に在すと想ふべし、　結び已て頂に開き散ぜよ、　此の密言を誦して曰く、

唵怛他蘗都嗢婆縛耶莎縛訶

念誦し已て頂に安じて想へ、此の印成ずる時卽ち是れ如來なり、應正等覺なり、三十二相八十種好具足し莊嚴し、寶蓮花の師子の座に處ると。自らの心眼をして分明に想見せしめよ、一切如來は頂に在て會すと。

【一】　普通諸部は普く諸部に通ずと讀むべく、普く諸部に通ずる修法の義なり。念誦は眞言を誦すること、結護は印明を結誦して行者を守護することを云ふ。

【二】　區域境界を定め遮惡持善すること。

【三】　三昧耶(Samaya)。三昧耶印のことなり。三昧耶は本誓と譯す。以下環甲頭鉾契に至るまでは禮拜以前の所作なり。

【四】　慮承錄第一には大輪金剛供養法(正藏廿一卷、一六八〇)及底里三昧耶不動尊聖者念誦祕密法卷中(正藏廿一卷、一八〇)をあげ蘇摩(Soma)は月の義なり故に蘇摩金剛とは大輪金剛の義なりとす。

【五】　二羽とは、二手、兩手の義、二手は鳥の兩翼の如しと、此の義により手を羽と云ふ。

【六】　結印の法に於ては普通に十波羅密を以て十指にあつ。卽ち左の小指より始め右の大指に終り、各指に順次一波羅密の名を附す。又一法として右の小指より始まり左の大指に終るものもあれど一般には用ひず、

念誦結護法普通諸部解題

念誦結護法普通諸部一卷は之を支那撰述諸經錄に見るに其の何れにも本儀軌の名は見えず。而して最澄、空海の兩入唐僧の請來目錄にも見えぬ。唯承和六年十二月上表の靈巖寺和尚請來法門道具等目錄に初めて之をかゝげて居る。本儀軌を擧げて居る經錄は諸阿闍梨眞言密教部類總錄、諸儀軌傳授目錄、祕密儀軌目錄等があり、唯念誦結護としてかゝぐるものには諸論師製作目錄、釋教諸師製作目錄がある。此の儀軌の作者は金剛智三藏（開元二十年寂）灌頂の弟子に授くとなつて居るが、靈巖寺和尚の請來目錄には作者に關して何等記す所なく、又高僧傳にもこれに付いての記事を見ぬ。

本儀軌の内容は念誦結護法と普通諸部から成つて居り、念誦結護法には佛、部蓮華部、金剛部の三昧耶契、無動金剛辟除難契、一切如來擐甲頭鉾契、金剛下方三昧耶契、金剛四方三昧耶契、金剛上方三昧耶契、請一切聖者寶輅契、召集一切賢聖契、設聖者花座契、八方火院契、十方天界三摩耶契、部母護尊及自身契、念誦時、四種念珠、發願、解結界を說き、次で食事念誦、八供養、四時所修本尊三昧耶契を說く。普通諸部中淨數珠契に於ては佛、蓮、金の三部につき明し、三摩地供養次第儀式に於ては食法、座法、修法處を明す。次で三十七尊密語、八曼荼羅道場主名號、梵名十方佛、梵名佛十號、諸天直言、道場觀を說き、求願觀想法に於ては、求願と觀想の關係、初起首念誦日、三種の悉地成就の處と相、擇地、大成就の時節を說く。次に八大菩薩の布字及び本尊色、毘盧遮那三摩地瑜伽供養次第法を說く。

是の如く本儀軌は種々の念誦法を列擧せるもので一卷終始統一のある儀軌ではない。奧書に『安然金剛界對受記七に云く、金剛智念誦結護法普通諸部は是れ蘇悉地、金剛頂の二法合せ行へり。正しくは三部を出し亦五部にも通ず』（正藏十八卷、九〇九頁）と云へる如く蘇悉地經と相通ずる處は數箇あり、又諸天眞言が略出經と一致し、八大菩薩の布字及び本尊色が八大菩薩曼荼羅經に說けると同じく、或は毘盧遮那三摩地瑜伽供養次第法が、毘盧遮那三摩地法と殆んど一致するが如きは本儀軌がその根據を此等諸經、儀軌に置けるものなることを示すものにして要するに本儀軌は簡單なる儀軌綱要書とも云ふべきものなり。

昭和六年一月五日

譯者　坪井德光　識

此等の三昧耶は、諸佛汝の爲に說く、守持し善く愛護すること、當に身命を保つが如くすべし。

弟子師の教を受け已り師の足を頂禮して白して言く、師の敎誨の如く我誓て修行せんと。迴向發願して、弟子某甲等、向者已來大悲胎藏の大曼荼羅の前に於て正法を聽聞し淨信心を生じ、聖賢海會の聖衆を稽請し、三寶に歸依し罪垢を懺除し佛の淨戒を受け、華を投じ緣有て聖の攝受を蒙り、已に灌頂し金剛の職號を得。賢聖の位に隨へば功德無邊にして塵砂の如く算へ叵し。總じて將に法界の衆生に迴施せんとす。願はくは皆苦を離れて安穩の樂を得、邪を捨てゝ正に歸り菩提心を發して菩薩道を行じ永く退轉せず、當來世に於て一時に成佛せんことを。

金剛界大乘現證甚深祕密瑜伽大曼荼羅大悲無礙大灌頂戒儀

無明の妄三業を消除し、現に薩埵の心月輪を得たり、決定して三密の行を退せず、自他圓滿して悉地を成ず。

阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌（終）

るに六七商佉を以てし之に告げて言ふべし。今より已後諸佛の法輪汝應に之を轉ずべし。當に無上の法螺を吹き大法の聲をして一切處に遍ねからしむべし。應に此の法の中に於て疑怖を生ぜしむべからず。諸の密語に於て究竟し清淨にして理趣を修行すべし。汝應に廣く衆生の爲に方便開示すべし。善男子よ諦聽せよ、若し能く是の如く修する者は一切如來は皆悉く知りたまひ、汝能く佛恩に報ぜん。是の故に一切時處に於て一切持金剛者衞護し汝をして安樂ならしむる所なり。次に應に引起して大壇の前に至り爲に三昧耶を說き其を堅固ならしめ告げて言ふべし。善男子よ、汝應に正法を堅守せよ。設し逼迫苦惱に遭ひ乃し斷命に至るも應に菩提心を修し捨離すべからず。求法の人及び財物に於て慳悋すべからず。諸の衆生に於て少しも利益ならざる事は亦作すべからず。此れ是れ最上の句義にして聖の所行の處なり。我今具足して說き竟りぬ。汝應に隨順して說の如く修行すべし。弟子應に自ら慶幸し合掌頂禮し、又五股金剛杵を執て之に授與せよ。告げて言く此は是れ諸佛の體性なり、金剛薩埵の手づから執る所の者なり、汝應に禁戒を堅護して常に之を受持すべしと。弟子受け已り、此の決定要誓の密語を授け其をして之の密語を誦せしめよ、曰く、

六八唵一引薩囉怛他引蘖多悉地嚩日囉二合三摩耶底瑟侘二合二翳娑怛嚩二合引三馱囉耶彌四嚩日囉二合薩怛嚩二合五　呬呬呬呬吽

是の如く作法し已り所有る一切曼拏囉祕密三昧耶の智を師は應に教授すべし。若し弟子三昧耶に於て退失する者は師應に遮制し毀壞せしむること勿れ。弟子は師に於て應に恭敬尊重すべく師の短を見ること莫れ。同學の所に於て嫌恨を生ずること莫れ、應に之に告げて言ふべし、汝は一切衆生に於て常に慈愍を生じ哀矜示誨し厭離を生ずること莫れ。爲に偈を說いて曰く、

三界の極重罪は、　厭離するに過ぎず、　汝は貪欲處に於て、　厭離心を生ずること勿れ。

次に弟子をして堅持し歡喜せしめんと欲するが故に、復偈を說いて曰く、

【六七】商佉(Śaṅkha)。貝なり。

【六八】Oṃ sarva-tathāgata siddhi vajra samaya tiṣṭha eṣa tvāṃ dhārayāmi vajra sattva he he he he huṃ.

次に師は[六三]觀羽を以て五股跋折羅を執り其の雙手に授け應に種々の方便言詞た以て開誘安慰すべし。爲に頌を說いて曰く、

諸佛の金剛灌頂の儀、汝已に法の如く灌頂し竟ぬ、如來の體性を成ぜんが爲の故に、汝應に此の[六四]金剛杵を受くべし。

此の偈を誦し已り、眞言に曰く、

[六五]唵引一 韈日囉引二合 地鉢底二 微怛嚩引二合 避詵去者彌三 底瑟侘二合 韈日囉二合 三摩耶薩怛鑁

復金剛杵を收取せよ。若し是れ寶部ならば又跋折羅の上に寶珠ありと想へ、餘部は此に倣へ。前の眞言を誦する時に應に初句の金剛の字を改めて寶珠と爲せ、餘部は此に準ず。

次に弟子の本名の上に金剛の字を加へ名に依て之を呼び應に此の眞言を誦せよ。

[六六]唵一 韈日囉二合 薩怛嚩引二合 避詵去 者引 彌二 韈日囉二合 曩麼引入 避瞰訖帝三 系韈日囉 曩引麼引四

又香華種種の供具を以て灌頂する所の者に供養し、師は應に小金剛杵子を執り治眼の法の如く其の兩目を拭ひ之に告げて言ふべし。

善男子よ、世間の醫王は能く眼翳を除く、今日諸佛如來は汝の爲に無明の翳を開くこと復是の如し。汝をして金剛智慧眼を得て法の實相を見せしめんが爲の故なり。

次に復鏡を執り其を觀照せしめよ、諸法の性相の空寂を顯さんが爲なり。伽陀を說いて曰く、

一切の諸法の性は、垢と淨とは得可からず、實に非ず亦虛にあらず、皆因緣より現はる、應に當に知るべし、諸法の自性は所依なしと。汝は今眞の佛子なり、廣く諸の衆生を利せん。

師は弟子に於て當に恭敬を生ずべし、此の人能く諸佛の種性を紹ぐを以ての故なり。師應に授く

歸命花部灌頂
歸命業部灌頂

【六〇】Oṃ vajra sattvā 'bhisiṃca hūṃ oṃ vajra ratnā 'bhisiṃca trāḥ oṃ vajra padmā 'bhisiṃca hrīḥ oṃ vajra karmā 'bhisiṃca aḥ.

【六一】大日印は自界の大日印なり、卽ち金剛界ならば智拳印胎藏界ならば法界定印なり。

【六二】鑠は略出經の大正藏註には線と同じとあり。

【六三】觀羽は右手なり。

【六四】金剛杵(Vajra)。印度の兵器なり、密敎にては之を煩惱を破る武器とす、獨股・三股・五股・九股等あり。

【六五】Oṃ vajrādhipati vetvābhiṣiñcami tiṣṭha vajra samaya sattvaṃ.

【六六】Oṃ vajrasattva abhiṣiñcami vajra-nāma abhiṣekata he vajra-nāma.

(五五)五仙人の爲に妙法を開きたまひ、無量の吉祥事を成就したまふ、願くは汝も今時盡く獲得せんことを、諸佛の大悲の方便の海は、普く法界の衆生海を利し、未來際を盡すも疲倦することなし、(五六)四無礙智を汝は當に得べし、若し更に餘の讃頌あらば意に隨て之を作し、勝心を勸發して利と喜を生ぜしめよ。

次に應に其に灌頂を與ふべし。先づ弟子の頂上に闍字有て大光焰を放ち熾然赫奕たりと想へ。又弟子の心中に月輪あり、月輪の內に八葉の蓮華あり、華臺の上に阿字ありと想へ。若し(五七)金剛部を得れば、阿字の內に於て五股金剛ありと想へ。餘部は知るべし。若し大日を得れば卽ち窣堵波を想ひ、應に己身毘盧遮那の像の如しと想ふべし。弟子の所得の部の瓶を執り各其の部の物體瓶水の內に在りと想へ。(五八)金剛蓮等の如し。各其の所得の部の契を結ばしめ頂上に置き(五九)本部の密語を七遍誦して灌頂を用ふ。眞言に曰く、(金剛部の灌頂なり。)

(六〇)唵引一 嚩日囉 薩怛嚩引二合 避詵去者吽 唵引嚩日囉 喇怛曩引二合 避詵者怛嚂二合 唵引嚩日囉二合 鉢納磨引二合 避詵者訖哩引二合 唵引嚩日囉二合 羯磨引避詵者惡

彼の額の上に於て攞字有り色は眞金の如し、兩目の上に各羅字あり其の色は火上に光焰あるが如しと想へ。其の兩足の間に種々の色を想へ、法輪の相を爲して八輻莊嚴す。

次に金剛薩埵の心眞言を誦して塗香を加持して彼の胸前に塗れ、作法加持する所以の者は弟子をして金剛薩埵の如くせしめんが爲の故なり。

次に(六一)大日の印を結び本眞言を念じ契を彼の心上、次に額、次に喉、次に頂上に置け、卽ち應に諦に一切如來の祕密勝上の頭冠を彼の頭上に加ふと想ふべし、卽ち上の如く四種の鬘印を結び各其の部の法に隨て以て其の額に繫けよ。若し阿闍梨灌頂の法を作すものは應に次第に上の法の如くに遍く五瓶を用ひ、四種の(六二)鬘鏻を以て其の額の上に繫け已るべし。

【五二】佛成等正覺の時の座處を云ふ。Vjra-āsana.
【五三】夜明け方。
【五三】正覺は阿耨多羅三藐三菩提卽ち無上正徧知なり。
【五四】波羅奈は波羅奈斯(Vārāṇasī)の舊譯にして鹿野苑のある所の名なり。佛こゝに於て始めて四諦を說き五仙人を度し給ふ。
【五五】五仙人は憍陳如・摩訶男・婆沙波・阿說示・跋提なり。
【五六】四無礙智は又四無礙解又四無礙辯と云ふ。一、法無礙、二、義無礙、三、辭無礙、四、樂說無礙なり。
【五七】金剛部。胎藏界の三部の一、金剛界五部の一、金剛杵を持して如來の智德を標識する諸尊を云ふ。金剛界五部は一、蓮華部、二、金剛部、三、佛部、四、寶部、五、羯磨部、胎藏界の三部は一、佛部、二、蓮華部、三、金剛部なり。然し此處の文の所依と思はる略出經第四には金剛界の五部をあぐ。
【五八】金剛蓮等とは、金剛部ならば金剛杵、蓮華部ならば蓮華が、瓶の中にありと思ふ意なり。
【五九】本部は各所得の部を云ふ。
歸命金剛部灌頂
歸命寶部灌頂

[四三]唵引底瑟陀二合 嚩日囉二合 儞哩二合 住引宅及 迷引婆去嚩二合 舍引濕嚩二合 姤引迷婆去嚩三 紇哩二合
捺琰引迷引遏地瑟侘二合四 薩嚩悉地及土草 攝迷一鉢囉二合 拽車五吽引賀賀賀賀穀引六

[四四]次に此の密語を誦し眼を掩ふ所のものを解け。密語に曰く、(擲げたる所の花を頂上に安じ、薩埵攝受す、汝疾に諸の悉地を成ず。)

[四五]唵引一 嚩日囉二合 薩怛嚩二合 娑嚩二合 延帝引 儞曳二合 斫乞芻半呼上二合、彈舌引 娜伽去吒曩三 答播二合
嚧嗢半引 伽去引 吒野底四 薩嚩惡乞芻二合 嚩日囉二合 斫乞芻二合 遏努怛𡅏引六 係引 嚩日囉二合 鉢
者七(金剛薩埵は親しく自ら專ら汝の爲に[四六]五眼に於て無上金剛眼を開く。)

次に弟子を呼び壇中の諸部の事相を遍く示せ、此法に由るが故に一切如來の攝受し護念する所となり、金剛薩埵は常に其心中に住し、彼の求むる所に隨ひ乃金剛身に至るまで獲得せざるなし。漸く一切如來の體性の法の中に入るを得べし。(若し此曼荼羅を見れば無量[四七]倶胝劫より積衆する所の罪業は是に由て悉く除滅す。)

次に灌頂さるゝ者を引いて左足に華門を踏み、右足に華心を踏ましめ、天帝の方の門に入り華臺の上に坐せしめ種々の華・塗香・燒香・燈明・幡蓋・清妙の音樂を以て供養を爲すべし。如し辨ぜざる者は力に隨て之を作せ。爾る所以は謂く此人は佛位に坐するが故なり。復種々の[四八]讃を以て詠歌し歎じ共をして殷重に歡喜心を生ぜしめよ。此の頌を說いて曰く、

諸佛の[四九]覩史より下生したまふ時、釋・梵・龍神は隨て侍衞したてまつり、種々の勝妙吉祥の事あり、願くば汝今時盡く能く得んことを、[五〇]迦毘羅衞の釋宮に誕れたまふや、龍王は甘露水を霔ぎ沐し、諸天は吉祥の事を供養したてまつる、願くは汝の灌頂も亦是の如くなれ、[五一]金剛座上において群生の爲に、[五二]後夜に魔を降して[五三]正覺を成じ、諸の希有の吉祥事を現じたまふ、願くは汝が此の座も悉く能く成ぜんことを、[五四]波羅奈苑河は莊嚴にして、

【四三】 Oṃ tiṣṭa vajra dṛḍho me bhava śaśva to me bhava hṛdaya mo adhitiṣṭa sarva siddhim me ca pariya ca tu aham ha ha ha ha hoḥ.

【四四】 以下曼荼羅を見せしむ。

【四五】 Oṃ vajra sattva svayaṃ te dye cakṣu udghaṭana tatpara udghaṭayte sarva-cakṣu vajracakṣu anuttaraṃ he vajra veśa.

【四六】 五眼とは、一、肉眼、肉身所有の眼、二、天眼、色界の天人所有の眼、三、慧眼、二乘の人眞空無相の理を照見する智慧、四、法眼、菩薩衆生を度する爲に一切の法門を照見する智慧を云ふ、五、佛眼、佛陀の身中前の四眼を具するものなり。

【四七】 倶胝(Koṭi)。倶致、拘致ともす、億と譯す。劫(Kalpa)長時と譯す。

【四八】 讃(Stotra)。佛德を讃嘆する偈頌。

【四九】 都史(Tuṣita)。兜率天なり。菩薩の最後身の住處なり。釋迦如來も菩薩身の最後の住處としてこゝに住し給へり。

【五〇】 迦毗羅衞は迦毗羅婆蘇都(Kapilavastu)に同じ。釋宮は釋氏の宮殿にして淨飯王の宮殿なり。

滅するを知るべし。若し彼の罪極めて重ければ好相を見ず。師は應に爲に眞實の[36]伽陀を說き其をして覺悟せしめよ。頌に曰く、

普賢の眞身は一切に遍く、　能く世間の自在王となる、　始め無く終り無く生滅無く、　性相常住にして虛空に等し、　一切衆生の所有の心の、　堅固なる菩提を薩埵と名づく、　心不動にして[37]三摩地に住し、　精勤し決定せるを金剛と名づく、　我今此の誠實の言を說く、　唯願はくは世尊本願を扶け玉へ、　衆生の諸の悉地を利せんが爲に、　慈悲哀愍して加持し玉はんことを願ふ。

是の語を說き已り、金剛入の契を結び嚩字の密語を一百八遍誦し、金剛縛を結べ。[38]禪智度を以て檀慧度の本の間を捻じ進力度を以て少し屈して是を相拄ふるなり。是の如く作法し已り、若し好相を見ざるものは但應に引入して[39]三摩耶を授け、共に灌頂を與ふべからず。次に與に當に此の密語を三遍[40]授くべし。三摩耶の明に娑嚩賀を加ふる莫れ、便ち鉢囉底車を誦し入佛三摩耶の明に加ふ。

[41]唵鉢囉二合引底車韈日囉二合穀

[42]誦し已り其の華を擲けしめよ。華の著する處、便ち彼部の尊の密語を受け當に速に成就すべし。（花佛の面、佛の眼等に墮つれば尊成就し、佛の中分に墮つれば心眞言を成就し、花佛の下分に墮つれば使者の眞言を成就す。）

次に此の密語を念ずること三遍、弟子をして結ぶ所の三昧耶印を其の心上に於て之を解かしめよ。密語に曰く（願はくは金剛薩埵、常住堅固に我心を加持したまへ、願はくは我に一切悉地を授與し玉へ。）

金剛解脫の眞言、

【三六】伽陀(Gāthā)、頌なり。

【三七】三摩地(Samādhi)。定、又は等持と譯す。

【三八】禪智度は兩母指、檀慧度は兩小指、進力度は兩ひとさし指なり。

【三九】三摩耶は三摩耶戒なり、灌頂以前に授くる作法なり。

【四〇】本文は受とす。

【四一】Oṃ pratīca vajra hoḥ.

【四二】以下投華得佛を說く。

若し輒ち未だ灌頂を受けざる人に向て說かば汝が頭をして破裂せしめん。汝我所に於て輕慢を生ずるこれ莫れ。應に深く敬信を生ずべし。汝は我身に於て當に金剛薩埵の想の如くすべし。我が教誨する所は當に盡く奉行すべし。若し爾らずんば自ら殃禍を招き、或は中にして夭死して地獄に墮せしめん。汝應に之を愼むべし。師は金剛薩埵を弟子の身心に入らしめんと欲せば即ち金剛薩埵の契を結んで告げて曰く、此は是れ金剛薩埵の三昧耶なり願はくは汝の身心に入り無上の金剛智を成ぜよと。此の密語を誦せよ、曰く、

[三四] 唵引 襪日囉二合 吠引 奢引 噁

次に忿怒の金剛拳を結べ。忍願二度を以て相鉤せよ。上の大乘三昧耶の百字の密語を誦し唱へ已りその契を擘き開け、此の密語の功能の力に由るが故に能く弟子をして金剛智に入らしめて殊勝の慧を證す。此の智に由るが故に悉く能く獲得し一切衆生の若干の種心を知り、能く世間の三種の事業を知る。能く菩提を堅固にし、能く一切の苦惱を滅し一切の怖畏を離れ、一切の衆惡は害を爲す能はず、一切の如來は同じく共に加持し、一切悉地皆な悉く現前す。諸の未曾有の安樂、勝事は求めずして自ら得ん。汝當に深く自ら慶幸すべし。我今汝の爲に略して功德の勝事を說かん。一切の地位に於て諸の解脫門・神通門・三摩地門・陀羅尼門・波羅蜜門・十力無畏不共法等は此法に由るが故に悉く當に獲得すべし。所有る未だ曾て見聞せざる百千の契經の甚深の義理は自然に能く解せん。汝は當に久しからずして自ら諸佛の眞實の智慧を證得すべし、何んぞ況や不劣の諸の餘の悉地をや。是の語を作し已り次に當に問言すべし。汝は何等の境界を見るや。(此下に摧罪の明等有て之を記す。)次第に諸の罪を摧破し已る。復想へ、諸佛の光明を以て彼の身心を淨め、四方の[三五]阿閦鞞等、上方の大日如來等皆清淨の光明を放ち、下方に金剛雄(上呼)吽字を想へ、忿怒の光明を放て之を摧破す。是の法を作す時に能く彼等をして必定して善相を見ることを得しめば當に彼の罪障消

その次の如く右手の小指より母指左手の小指より母指にあつ、而して各指を波羅密として度と呼ぶ、故に忍願二度は右手の中指と左手の中指のことなり。

【三二】 金剛智は智の堅利なる金剛の如きもの即ち佛智に名づく。

【三三】 三昧耶(Samaya)。本誓なり。

【三四】 Oṃ vajroveśa aḥ.

【三五】 阿閦鞞(Akṣobhya)。無動と譯す。東方阿比羅提國に出現せし大日如來のもとに發願し修行し、成佛して今現にその國土に於て說法す。金剛界五智如來の中東方に住し玉ふ。

便ち是れ彼方なりと。聖人是の如きの偈を告げて曰く、

汝は無等の利を得たり、　位は大我に同じ、　一切の諸の如來は、　此を諸の菩薩に敎ゆ、

皆以て汝を攝受し、　大事を成辦せん、　汝等明日に於て、　當に大乘の生を得べし、　之を擲て其の相を驗す。（蹲踞座をし東或は北に面して嚼ましむ。外を向くは成就せず、內を向くは成就す。若し遠く却り來れば久し成就せず[二七]。東方は上、西は中、南は下なり。四方は多く是れ彼の部なり。）

[二八]修多羅を三び結びて當に臂に繫け等持すべし。（五色の線なり。五佛加持して萬行を貫攝し臂に等持して住せしめ、[二九]僧祇を歷經して失壞せさらしむるが故に金剛と名づく。）

次に夜行いて赤衣を以て其の首を覆ひ（眞言及び不動尊の眞言を以て加持すること一百八遍なり）一切の諸の悪趣の門を掩閉し、能く淸淨の[三〇]五眼を開き成就すべし。

三昧耶契を結び口に此の密言を授けよ。

三昧耶薩怛鑁三合

ムに卽ち[三一]忍願二度を竪てしめて針と爲し、壇門の中に引入し三遍此の密語を授けよ、曰く、（金剛鉤の眞言にて引入す。）

三昧耶吽引

應に告げて言ふべし。汝今已に如來の眷屬の部の中に入れり、我今汝をして[三二]金剛智を生ぜしめん。汝此の智に由るが故に、當に一切如來最勝を成就し、及び諸の世間出世間の一切悉地事業皆悉く成就するを得べし。汝は又應に未だ壇場に入て灌頂を受けざる人の前に此の法事を說くべからず。汝若し說かば但に汝が[三三]三昧耶に違失するのみにあらず、亦自ら殃咎を招く耳と。師は應に金剛薩埵の慧契を竪て結び弟子の頂上に置き告げて言ふべし。此は是れ金剛薩埵の三昧耶契なり、汝

ṛaḥ.

【一八】Oṃ vajra puṣpe oṃ.

【一九】Oṃ vajra dhupe aḥ.

【二〇】Oṃ vajra loke dī.

【二一】牛の五味。牛の身體より取れる五の妙味あるもの。糞尿をあぐるは奇異なれども印度の風俗牛糞を以て最も淸淨なるものとす。密敎の作壇に際し之を淸むるに牛糞を塗る例より推して知るべし。

【二二】Oṃ vajro daka ṭha.

【二三】Oṃ mahājivala hūṃ.

【二四】部心は曼荼曼の各部に相應する心眞言なり。

【二五】烏曇(Udumbala)。花の名、阿說他(Aśvatha)。木の名、無罪樹と云ふ。齒木(Danta-kāṣṭha)。齒を刷する小木なり。

【二六】不動の明は不動明王の眞言なり、重要なるものに三あり。一、火界呪、二、慈求呪、三、心呪なり。

【二七】本文には不の字なし。

【二八】修多羅(Sūtra)。線又は紐なり。

【二九】僧祇は阿僧祇（Asaṃkhyeya）の略。無量、無數の義なり。こゝには時間につき云ふ。

【三〇】五眼は一、肉眼、二、天眼、三、慧眼、四、法眼、五、佛眼なり。

【三一】忍願二度。十波羅密を

次に塗香を加持して諸の弟子の掌中に塗る。眞言に曰く、

[一七] 唵引襪日囉二合巘弟虐

香を塗る時告げて曰く、願くは汝等悉く一切如來の戒・定・慧・解脱・解脫知見の香を具せよと。

次に白華を加持して弟子に授與せよ。眞言に曰く、

[一八] 唵引襪日囉二合補瑟閉二合吽。

告げて言く、願くは汝等、一切如來の無盡相海を得よ。

次に香鑪を加持し弟子の雙手を熏ず。眞言に曰く、

[一九] 唵襪日囉二合杜引閉惡

告げて曰く、願くは汝等、一切如來の無盡の大悲を得て妙色を滋潤せよ。

次に燈を加持して弟子をして視せしむ。眞言に曰く、

[二〇] 唵襪日囉二合路引計引儞翼二合引

告げて言く、願くは汝等、一切如來の虛空界に等しき智慧の光明を獲得せよ。金剛劍の眞言に[二一]て牛の五味を加持せよ。(乳・酪・蘇・糞・尿を相和し澄し濾漉して之を服す。)

[二二] 唵嚩日囉二合嗢那羯吒

欲ましむる眞言にいはく、

[二三] 唵摩訶入嚩攞吽

次に一切の煩惱、隨煩惱を摧破する諸佛の甚深なる智慧の金剛劍の眞言或は[二四]部心眞言を以て[二五]烏曇、阿說陀、齒木の十指量なるを加持し、香水にて洗ひ、熏香を塗り華の根を纏り一を以て一切諸佛に奉獻し、餘は行者に與へ、[二六]不動の明を以て加持すること一百八、如來の牙にて加持す。

次に齒木を授け却て授戒の處に至り小頭を嚼ましむ。告げて齒木を擲て何れの方を得るやを問ふ。

【一二】 Oṃ mahāvajra kavacavajri kuruvajra vajro 'haṃ.

【一三】 毘盧遮那(Vairocana)、阿閦(Akṣobhya)、寶生(Ratna-sambhava)、觀自在(Avalokiteśvara)、密教にては觀自在王如來を以阿彌陀佛の本名とし、阿彌陀を以てその德稱とす。不空成就(Amogha-siddhi)、以上五如來は金剛界の五智如來なり。

【一三】 普賢金剛薩埵は顯教に云ふ普賢(Samantabhadra)なり。密教に於ては二義あり。一は大日内眷屬中の上首金剛薩埵なり、二は大日眷屬中の上首なり、これ顯教に云ふ普賢なり。金剛界に於ては賢劫十六尊中の第十六にして釋迦本有の智を主る菩薩なり。今の場合は之なり。

【一四】 帝綱は因陀羅網のこと。

【一五】 菩薩摩訶薩。具には菩提薩埵摩訶薩埵(Bodhisattva mahāsattva)なり、菩提薩埵は道果を求むる衆生なり、然るにこれには聲聞緣覺をも含む故これを簡はんが爲に摩訶薩埵即ち大衆生と云ふ。

【一六】 Oṃ mahā vajra kavacavajri kuruvajra vajro 'haṃ.

【一七】 Oṃ vajra gandhi

一阿闍梨二大曼荼羅三灌頂四儀軌

爾の時、五金剛手、六佛に白して言く。世尊よ、若し諸の善男子善女人有て此の七大悲藏の生ぜる大曼荼羅の王三昧耶に入る者は彼は幾の所に福德の聚を獲るやと是の如く說き已る。佛、金剛手に告げて言く。祕密主よ初發心より乃し如來を成ずるに至るまで福德の聚を有する所なり。是の善男子善女人の福德の聚は彼と正に等し。祕密主よ、此の法門を以て當に是の如く知るべし。彼の善男子善女人は如來の口より生ぜる佛心の子なり。若し是の善男子善女人の所在の方所は卽ち爲に佛施有り佛事を作すとす。是の故に祕密主よ、若し佛を供養せんと樂欲する者は當に此の善男子善女人を供養すべし。若し佛を見んと樂欲せば卽ち當に彼を觀ずべし。能く魔軍を摧破し一切を利樂す。是の故に汝等、一切如來の眞實の智慧を得んと欲する者は、應に當に一心に此の法を修行すべし。能く速に一切智を成就せんが故なり。(法華に云く、淨心は佛を信敬す。淨は名づけて無量の功德の智慧より生ずと云ふ。)

八五色の線索を九加持して其の左臂に繫けよ。一〇眞言に曰く、

一一唵摩訶引嚩日囉迦嚩遮嚩日哩俱嚕嚩日囉嚩日囉憾。

一二南無金剛界大聖毘盧遮那如來。南無東方阿閦如來。南無南方寶生如來。南無西方觀自在王如來。南無北方不空成就如來。

一三南無普賢金剛薩埵等盡虛空遍法界微塵刹土中一四帝網重重三際一切一五菩薩摩訶薩。

次に復此の密語を念じて諸弟子を護持せよ。密語に曰く、

一六唵引一 摩訶引韈日囉二合 迦去韈遮嚩日哩二合 矩嚧韈日囉二合 韈日囉二合 菡引

【一】阿闍梨(Ācārya)。師範なり。
【二】大曼荼羅(Mahā-maṇḍala)。五大の色卽ち青・黃・赤・白・黑の五色で畫いたる諸佛諸尊の集會を意味す。
【三】灌頂(Abhiṣeka)。水を頂に灌ぐこと、印度の國王の王位繼承の儀式に出づ。密敎に於ては祕法を傳受し相續せしめんが爲の儀式なり。
【四】儀軌は密部の本經に說ける佛菩薩諸天神等を念誦供養する儀式軌則なり。
【五】金剛手(Vajrasattva)。祕密主、又は普賢、執金剛、勇猛の大士とも云ふ。
【六】佛。こゝに於ては大日如來なり。
【七】大悲藏は大日經に依れは大悲胎藏の事なり。卽ち大悲の胎藏より生じたる大曼荼羅なり。王三昧は三昧中の最勝のものを云ふ。
【八】五色の糸。五色は青・黃・赤・白・黑にして五智を表はす。
【九】加持(Adhiṣṭhāna)。佛力を衆生に任持すること。こゝにては佛力を線索に任持すること、
【一〇】眞言(Mantra)。如來の語密卽ち如來の眞實言なり、故に諸法の實相を如實に言ひ表はせる語なり。

れて居る。先づ五色線索を加持してこれを繋け四方四佛及び一切の菩薩摩訶薩を禮拜し、次に塗香・白華・香爐・燈明を加持し以て弟子に塗り、與へ、熏じ、視せ、次で齒木を嚼ましめ之を投げ以て所願成就について吉凶の相を驗す。こゝに壇前の作法は終り愈ょ入壇となるのである。

入壇に當り先づ赤衣を以て入壇者の首を覆ひ三昧耶契を結び以て壇門中に引き入れ三昧耶戒を授け、華を擲げしめ以て弟子所屬の部を決定するのである、即ち投花得佛である。次て首の覆を解き曼荼羅を示す。此處に於て引入されたる弟子は一切如來の攝受し給ふ處となり、その心中には常に金剛薩埵が住し給ふのである、卽ち生佛不二の境に到つたのであり、既に諸佛に攝受されざるによりこゝに佛位に坐し灌頂を受くるのである。

次に灌頂、佛位に坐したる弟子は各部相應の觀法をなし、又五瓶の中已が得たる部の瓶の中にその部相應の相を觀じ、阿闍梨はその瓶をとり瓶中の水を弟子の頂に灌ぐのである。灌ぎ已り阿闍梨は弟子の胸前に塗香を塗り弟子は是れ金剛薩埵なりとの觀想をなし、弟子の頂上に王冠を載せ、各部相應の鬘をかけ、右手を以て弟子の兩手の上に五股を授く、此處に於て諸佛金剛灌頂の儀は弟子によつて圓滿に成就され生佛不二の理を成就せんが爲に五股を授かつたのである。投花得佛し不二の理を成じたるにより金剛名を授かり、既に位如來と同じきを以て無明滅す故に良醫の眼翳を拭ひ去る如く金篦を以て無明の膜を去り金剛智慧現はれて諸法の實相を見る、諸法の性相の空寂なることを顯はさんが爲に寶鏡を觀照し以て諸法の因緣所生なることと、垢淨不二、自性無所依の理を感得するのである。この

理を悟れる者は如來の法を得たるものなり故に諸佛の法輪を轉ずべきものなり、これ無上の法螺を吹きてその聲を一切處に遍ねからしむる者なり、故にこゝに於て弟子は商佉卽ち螺貝を與へらる。一度諸法の實相に通達したる者は不退轉の勇猛心こそ必要である、故に弟子は三昧耶卽ち本誓を破らざることを諭され次で決定要誓の眞言を授かると共に迴向發願をなすのである。

以上內容の概要を略述したのであるが、然らばこの儀軌は金剛界、胎藏界のいづれのものであるかを見るに、壇前作法の塗香・白華・燒香・燈明の加持の眞言はいづれも金剛界のものであるが然し灌頂の授五股の眞言は胎藏界のそれである。既に稟承錄にも云へる如く本儀軌は兩界に渡れるものであつて一般的法軌を示したものと云ふべきである。

昭和六年一月五日

譯者　坪井德光　識

阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌解題

一、傳譯について

諸經錄に就いて見るに支那經錄中にはこの儀軌の名は記されて居らぬ又諸師請來目錄にも見えぬ。此の題名を載するものに一卷の祕密儀軌目錄、諸儀軌傳授目錄(元祿十一年戊寅　妙極老僧作)あり、作者名を並記するものに釋教諸師製作目錄(寬文七年九月前川茂右衞門作)と諸師製作目錄(元祿十六年玄海書寫)のみである、而し作者は二つ共に惠果阿闍梨としてゐる。この樣に本儀軌を擧ぐるは日本の目錄のみであり、又諸軌稟承錄第十二卷(寬政八年眞常作)に次の如く記してゐる。

此の軌は八家の祕錄には之無し、然れども傳法灌頂は皆此の軌によりて執り行ふ。少しは持明の事もあり。始は金剛頂終は胎藏にして兩部灌頂の軌則なり。此の軌の作者は古來惠果の作となす。智證も亦靑龍の作と云ふて未詳となす。若しは法全の作か。又智證の記にも之を載す。然れば請來は宗叡、宗叡の記に灌頂儀軌一卷云云とあり。又智證の兩師か。或師云く、廣澤六帖重書の中に之を出す。祕して傳へず。然るに文言を見るに恐くは和人の述作か。諸經軌の文を拔出す。傳授せざれども傳授せるに同じと云ふ。之を擱く云云。評して曰く今已に請來の師あり、之を以て之を見れば則ち唐祖の作也乎云云。

とある。これによると稟承錄は請來者を宗叡智證のいづれかとし作者を唐祖作と爲さんとするのであるが、然し智證大師請來目錄には本名は記されてない。本儀軌と他の經との關係を見るに『爾の時金剛手佛に白して言く……若し佛を見んと樂欲せば卽ち彼を見るべし』は全文大日經入曼荼羅具緣眞言品第二之餘の中にその同一文あり、又『汝無等の利を獲たり……當に大乘の生を得べし』に至る頌文は大日經同品第二之一の文と唯一字『已に』を『以て』とするのみで余は全然同一である。その外諸佛禮拜と最後の迴向の文を除く餘の文は金剛頂瑜伽中略出念誦經卷第四の文と殆んど同一である。是の樣に本儀軌は其の骨子は此の二經より拔出せるものであつて稟承錄に『或師云く』として揭ぐる說も一考するの必要あるを思はしむるものである。要するに本儀軌の作者並に請來者は未だ詳かならざるものである。

二、內容の概要

大別して壇前、入壇、灌頂の三にすることが出來る。最初に壇前につき見るに、初めに佛と金剛手との對話の形により大悲藏生大曼荼羅王三昧耶に入る者の功德を說き、次に其處に入る者の準備作法が說かれてゐる。然しこゝより以下は對話の形式ではなく阿闍梨と弟子とに關しての行事作法の次第列記の形式により說か

中の瞖陀唎那南杜底の手に火炬を執るを畫け。北門に摩訶跋折羅施法羅那南那を畫け。此に大金剛峯侍者と云ふ。宜しく畫き訖已らば其の力分に隨て以て諸具を辦し、此に依り奉行したてまつる。

佛說毘奈耶經（終）

【四一】唵 囉菴 二合 盤陀沙訶 引

此の呪は多く誦することを最も第一とす。其の毘那夜迦當に遠離すべし。復毘那夜迦あり、金剛杜と名づく。人をして失心せしめ本性を迷亂せしむ。或は人をして抜等の中に入らしめ、念ずべきものには異念を生ぜしめ、曾往作す所の相を前に現じ、狀鬼魅の執持する所に似て識性なく、呪多少を誦すれば則ち異想を起し、爾の時に當り呪神夢に惡徵を見るを遠離す。若し是の如きの障難を淨除せんと欲せば須く大願を發して菩薩心を起し弘く物を救はんと誓ふべし。一日一夜法の如く空腹持齋し幷に淨戒を受け、前の佛頂の呪を誦せ遍數を限らず、五色の縷を以て其の呪索を結び、更に呪すること七遍にして用ひて臂に繫けよ。若し此の法を作さば方に能く惡毘那夜迦等を除き得。

復次に壇法を說かん。呪師先づ須く懺悔清淨にして菩提心を起すべし。簡んで好地を覓め一日一夜不食持戒し、五色の畫を以て其の壇內を作り、香汁を以て佛の結跏趺座するを畫き、右邊に觀音菩薩を畫き、腰髁に虎皮を襯著し、右手に寶仗を執り、左手に澡罐を執る。左邊に執金剛菩薩の兩手に拂を執り、次に下に瞋怒熾焰藏を畫く、卽ち是れ阿密栗多軍荼利是れなり。下に三焰戟叉を畫き、次に斧・鉤・鎚・杵・棒・羂索・螺貝等諸地の印の具を畫き、周匝莊嚴す、觀世音菩薩の下に於て、應に【四二】訶利多菩薩摩訶薩・瞿唎跛拏跋跢儞・摩訶稅吠儞等を畫くべし。各〻髮を成ぜしめ、天冠・衣服・軍【四三】持・花拂各一本法に依り獨髻羅刹女の形を畫き、口中の牙齒鉤出して鬼を恐れしむ、人の髑髏を以て其の頭冠となし、坐して石上に在り蛇を以て絞絡して其の四手に有り、右の一手は鉞斧を執り、次の手は金剛杵を執り、左の一手は新しき斬首を持し血泣流汗す。次の手は一器を執持し內に血を盛滿す、狀を阿修羅毘那夜迦等となす。次に下に藍毘儞神を畫き、身に新く剝げる象皮を服る。壇の四角に各一金剛杵を作り、壇の東門に大怖畏神を畫き著け、幷に一杵及び暮陀羅闍吒を畫き、南門には大金剛手の鉞斧を執り震吼する毘那夜迦を畫け、此れ卽ち是れ金剛將神なり。西門には蓮華

【四一】Oṃ raṃ vandha svā-hā.

【四二】訶利多(Hāriti)。鬼子母なり。

【四三】軍持(Kuṇḍi)。千手觀音の軍持手にもてる瓶。

復次に地神よ、毘那夜迦あり、勤勇者頂と名づく、若し呪師の意、精進して呪法を成就せんと欲するを見ば、遂に進退の心を發生せしめて、時日を延度して身をして不安ならしめ、意に其の山を望み其處に法を作さんこと好しと。此に因て惱まされて卽ち懶にして勤めず。復餘人に向ひ某の處所を問ふに、他或は答へて言く、彼は是れ好處なるも少しく難事ありと。更に疑慮を增して兩心定まらず、本心を退失す、何ぞ此の障難あることを相ひ知らん。若し呪師等呪法を誦すと雖も眠寐の中に其の夢中に於て、若し男子等の身手割損し、罪愆の語を談說するを見、或は塔廟の神彫落毀壞するを見、或は嚴好の者入ることを得ざるを見ば、當に知るべし、卽ち是れ毘那夜迦に其の障難を作さると。忽ちに若し此の語の惡相を見る時、意に退を發して身心を縱逸にせざれ。若し遺除を欲せば、壇を塗り供養するに好香花菓味飲食を以て壇內に置け。復一新瓶を取り水を滿盛し、中心に著け、前の洗浴の呪を用ひて香水瓶を一千八遍呪し、此の水を用ひて身體を沐浴せば、卽ち護身を成じ、方に能く毘那夜迦等を除散す。復次に、地神よ、毘那夜迦あり、亦金剛奮迅と名づく、其の呪師の氣力をして衰弱せしめ、其の呪聲をきかば則ち厭患を生じ、頭痛し、恒に疑慮を懷き、常に本性に隨はん。設ひ他有て勸むるも反て瞋怒を起し、貢高我慢して縱逸自在なり。尊卑を存せず、一切を輕毀するも、若し此の障難の相を知らば、當に須く大金剛輪の印を受持し已るべし、壇を造て應に入るべし。復如來佛頂陀羅尼呪を用ひよ。呪は下に說くが如し。香水を百八遍呪し、用ひて身を沐浴し、當に毘那夜迦を除滅するを得べし。如來佛頂の呪に曰く、

四〇 那謨菩陀引耶一 呵唎引二合 烏沙尼引二合 沙二 馱羅三 跋折羅二合 闍跋引二合 利儞四 婆跋耶五引 羅迦輕二合 闍跋引二合 利儞六引 羅長 抜羅二合 哆知七 娑怖二合 囉呵囉八 僧呵囉呵囉九 儞迦唎二合 那哆輕二合 未曇十 吽泮

幷に六字心呪を誦す。曰く、

【四〇】 Namo buddhīya brih uṣṇiṣa-dhara-vajra-jvariṇi bhavayeka-jvariṇi rāvrata-ṭi sphara hara suhara hara-nikrinta madhaṃ hūṃ pha-ṭā.

若し此の呪を誦せば、一切の惡夢皆悉く消滅し、善神衞護して早く法驗を得ん。是の如きの淨行は時節の軌儀なり。爾の時、地神、復佛に白し言さく、世尊、呪師の法敎を誦持するの時、夢想にして云何か法驗の善惡の事を知るを得んや。佛、地神に告げて言はく、若し呪師等愛樂して呪法を受持し誦念せば、日夜精進して懈退心なく、其の人若し眠寐せんに其の夢中に於て、若しは童男童女の裝飾の嚴好なるを見、或は父母兄弟姉妹の形容を見ば、當に知るべし呪神我れを廻視すと。若し前の男女等の香花・飮食・菓味等の物を執持するを見ば、當に呪神の我に親附するを知るべし。若し己身莊飾して白淨の衣服なるを見ば、當に是念を作すべし、呪神我れを慈護すと、卽ち須く勤めて精進を加ふべし。若し前の男女等の高幢・幡蓋・瓔珞・頭冠・螺貝・刀等を執持するを見ば、當に知るべし、呪法の驗を成ずること近きに在りと。若し沙門、前の男女等の三寶を供養し壇を行ずるを見、或は花林の伽藍中に在るを見ば、當に是の念を作すべし、我れ今已に呪神の攝受を蒙ると。若し山に登り高樓閣、師子の座に昇り虛空に踊らんと欲するを見ば、當に是の念を作すべし、我れ今法驗極めて近しと。若し坐して山峯に在り、或は師子座上に在り、師子、白象等に乘騎し、頭に天冠を帶びて中に處して尊となり、諸人の欽敬するを見、此の相を見已らば大に法驗あらん。地神、當に知るべし、呪師等の輩の善く名相を知ること是の如し。若し夢に於て屠兒・魁膾旃陀羅・裸形外道尼犍子・狂子髮を被り、己身に衣無く、驚恐走怖して手に不淨を取り、熟肉魚等を握持して喫し、胡麻の滓を食ひ、深坑に墮落し、象馬の武を成ずる所となると見ば、當に知るべし、毘那夜迦等あり、金剛瞋怒と名づけ其の障難をなすと。若し遣除を欲せば、如上所說の壇法、印等之を作せ。復此の呪を誦すること一百八遍せば卽ち護身を成じ、障難を除くを得て自然に夢に衆善の相を見ん。呪に曰く、

[二九] 唵 跋折羅二合 那羅訶那麼他盤闍囉拏吽泮吒半音

【梵】Oṃ vajra dhāra(?) hana-matha bhañja raṇa hūṃ phaṭā.

淨となす。外淨行は、若し呪師身を浴して水に入る時、先づ浴衣を著して此の呪を思念し身體を揩摩せよ、曰く、

三四 唵一度卑度卑二迦引耶　度卑三鉢囉二合闍跋二合　利儞沙訶四

然して身首を洗ひ、三五甎石を以て脚足を揩ひ、即ち土を取り分ちて三分と作し、左手を以て一分を握取し、此の呪を誦して曰く、

三六 唵　部闍跋二合羅吽

心に呪を誦して身分を洗下し、次に第二分を取り心に呪を誦し、用ひて脚を洗ひ手を洗ひ淨め已り、次に第三分を取り呪を誦し用ひて頭を洗ひ已て前の呪を誦し、水を以て身上に灑ぎ、更に兩掌に淨水を滿し盛り、復前の呪を誦し本心を表して言く、是の水を本呪神に奉り、新淨衣を著、其の力分に隨つて以て香花を取り、諸佛如來一切の賢聖に供養したてまつり、發露懺悔す。我れ今此の身を三寶に施し奉る。如上の說に依り眞信を以て心に作法し呪を誦し、端座して一心に疲倦せざるに至らん。若し困る時は任意に起て行道し、食飮を乞ひ求め、食飮を得已らば用ふるに此の呪を誦し、食を呪して然る後分ち喫す。呪に曰く、

三七 那麼薩婆菩陀菩提　薩埵南　唵婆覽陀帝　底誓摩引利儞　莎訶

呪を誦し已て先づ稔じ、少し許り本呪神に献じ、然して自ら足食し、鉢を洗ひ口を淨め已り、前に准じて洗浴し還て道場に入り、供養し懺悔し經典を讀誦し、然して坐して呪を誦し疲困せざるに至る。身倦まば任に起て行道し暮に至るも亦然り。呪を誦するに若し困せば行道して諸佛菩薩を供養し、禮拜讃歎せよ。若し眠を欲すれば右脇にして臥せ、身の無常無我にして終に是れ苦空にし不淨の皮骨假りに合し成就すと觀じて、此の呪を誦念して睡眠に入れ。呪に曰く。

三八 唵　跋折羅二合　賒儞吽長呼

【三四】 Oṃ dhpi dhpi kāya dhrapi prajva lini svāhā.
【三五】 甎　しきかはらなり。
【三六】 Oṃ bhuḥ jvala hūṃ.
【三七】 Namaḥ sarva buddhā bodhi sattva nāṃ oṃ ba-ṃdade tejemārini svāhā.
【三八】 Oṃ vajra śani hūṃ.

に入らず、未だ阿闍梨を供養せず、未だ印法を受けずして轉た更に他に此の秘密の法を教へて是の如きの言を作す、其の呪は是の如きの神力あり、是の如きの鬼神は此の法を用ひて縛治・呼喚・發遣すべく、及び[三一]造壇の諸地を造らしめ、印等を以て其を禁問せしむ。汝若し是の如くして即ち笑ひ即ち哭すれば、呪神は復是の如きの使者あり。大梵、此の輩の諸人は無知を以ての故に、其の教師となると雖も文字を讀むに義理、深妙の法門、軌儀を解せずして發趣して餘人を教說して此の法を作す。是の如きの人は復毘那夜迦あり、名つけて利陀橫羅の所執持と曰ふ。多く災難を生じて心暫くも定まらず。大梵、若し是の如きの障難あれば應に復蓮華法壇會中に入て阿闍梨所受の灌頂法を須ゆべし。能く是の如くんば毘那夜迦は方に除遣することを得。大梵、我が法中に於て復沙門の輩あり、未だ呪法の軌範を知らず、世尊の所、清淨[三二]尸羅に於て心に輕慢を懷き互に相非斥し寺に在ては尊を求め自ら貢高となり、或は佛教を嫌ひ正法を誹謗す。大梵、當に知るべし、是の如きの人等は、浪に我が淨法を輕慢するが故に即ち毘那夜迦あり、名けて能障と曰ふ、之が執持る所は廣く諸惡を造て厭患なし。若し遺除せんと欲せば須く俱胝の像を造り、尊師に於て𨄔跪して重ねて禁約要期を受くべし。亦須く蓮花壇內に入り灌頂を得べく、其の執する所の者は方に除滅すべきを以て所求の學問、誦持の法、成就し易し。爾の時、[三三]堅牢地神、地より涌出して佛足を頂禮して佛に白して言さく、世尊、呪師は云何か身心を護淨するや、云何か經行せん、何を以て應行、不行を知るを得ん。世尊よ、呪師は何の時節を以て須く其の呪を誦すべけんや。云何か正に呪を誦する時を知らんや。唯願はくは如來の慈悲ために說きたまへ。爾の時、佛、地神に告げたまはく、汝今善く聽け、呪師の應に行ずべき法は則ち一切呪法を受持せんと欲せば、かならず心に深く敬信にして慇重を生じ、邪心、不善の法乃至掉笑を捨離し、諦に思ふて念を作し、應に四種の淨行を行ずべし。何等を四となすや。一に謂く身淨行、二に口淨行、三に意淨行、四に水食淨行なり。身口意行は是れ內

【三一】造壇は曼荼羅壇を作ること。

【三二】尸羅(Śīla)。戒は三業の罪より生ずる熱を滅し清涼にす故に尸羅即ち清涼と云ふ。

【三三】大地神女の名なり。

知事となり、我見により惡業を思念し、應に行ずべからざることを强ひて自作し、應に食すべからざる者を而も復之を食す。世尊よ、是れ一切の衆聖の良緣、人天の路を開く導師は正業を示すによつて妙果を得しめん。唯願はくは人天を憐愍饒益して我が爲に之を說け。爾の時に世尊、梵天に告げて言はく、諦に聽け、諦に聽け、善く之を思念せよ。大梵天當に知るべし、若し人學を求め呪を持せんと欲して未だ能く深心に大菩提を發す能はず、大乘中に於て猶ほ疑惑を懷き、呪法を受くるも本より師に從て受けず、文字句雜亂し常に微妙祕密なる者を見聞讀誦して而も知る所無く、時節に依らずして呪を誦し作法するも其の呪法、壇法元より未だ明解せず、此の人は何等ぞ。喩へば母より胎生して兩目無く、轉た執して暗に非法を行ひ呪中の方法は一も知解せず。無明に著し我を顚倒するを以ての故に愚癡の言を發し、其の智を稱して明に諸法を解すと謂ふ。大梵よ、若しこの呪師此の呪法を作し是の念を作す時に毘那夜迦有り金剛奮迅と名づく、卽ち此の人に隨て爲に留難をなし、身をして安かならしめず、呪法は成ぜず。大梵、若し其の呪師身を洗浴する時、法に依らず、則ち印を結び呪を誦するも本神を念ぜず水を灑散ぜずんば毘那夜迦有り、名同じくして便を須ひて卽ち損害を被らしむ。若し呪師の毘那夜迦の障りを被り損害する者は氣力衰弱して眠睡多饒く、作法するも想あつて疑惑心を起し、懈怠にして勤めず病苦に惱まさる。何を以ての故に、但呪師專心ならざるに由り、求むること多くして厭くことなく修行せざるが故なり。大梵、若し是の如きの者は何等の法を作してか應に能く除滅すべけんや。呪を誦持する者は方に明解を求め、呪法の阿闍梨は壇法を建立して須く其の中に入り[二八]四印法中の一印を與受すべし。其の阿闍梨灌頂を與へ已り然る後或は經像の前に[二九]烏麻及び蘇を以て呪を誦すること一百八遍、用ひて火中に燒かば卽ち毘那夜迦皆悉く除散す。大梵入壇受法は大勢力あり。若し呪所持の法猶ほ未だ其に解せず、菩提心無くして[三〇]福田に敬せず、毘那夜迦を知らず、輙ち大法を作し呪を誦して供養す。復諸人有て自ら未だ壇

【二八】四印法とは、四種曼か、四種法か、四印合掌か、四印會なるかは詳ならず。

【二九】烏摩は胡麻か。蘇は蘇油(Ghrita)。

【三〇】福田。應に供養すべき者に供養せば福報を得ること猶ほ農夫と田畑との關係の如し故に應供者を福田と云ふ。

よ、此の人は常に毘那夜迦に身に隨て便を覓めらる、若し法に依らずんば卽ち障難をなさん、法に依て順行せば能く便を得ることとなし。我等執金剛は[二六]神杵を執持して常に衞護を爲し早く法驗を成ぜん。非法は順ぜず、我等は捨離す、諸魔、毘那夜迦神等の所持なり。或は風身に入り、多く瞋心を懷き、慳貪癡を起す。若し治せずんば乃し死を致すに至らん。若し後に悔を生じ法に依て順行せば亦能く諸魔・惡鬼・毘那夜迦等を降伏せん。佛告げたまはく、是の如し、是の如し、汝の所言、虛說有ることとなし、此の如く應に呪法に順じて成就すべし。爾の時、觀自在菩薩、座より起て是の如きの言を作す、若し人有て身命を愛護し法驗に證入することを成ぜんと欲する者は、其の呪師は皆應に諸の惡事業を斷除すべし。女色の身首の相を觀、若しくは露形を見ざれ、亦先の惡緣の處を顧視せず、應に一緣を思念し繫念すべからず。常に三寶の大威神力は常に實相に住し、世間有爲の法は皆是れ無常・苦・空・無我と念じ、一心に安住して本呪法を誦し卽ち散亂せしめず、正觀質直にして妄想を攀づること勿れ、及び大乘甚深微妙の經典を轉讀し、勤心に佛法衆僧を供養し、及び[二七]俱胝の塔像の形を造り、空過すること無からしめよ。若し能く是の如く順行せは、此の善男子は久しからずして卽ち大驗を成じ、鬼神は能く其の障難を作すことあることなしと。爾の時、大梵天王、佛の威神を承けて佛に白して言く。世尊よ、我れ常に法門を誦持して成就を求むる者を觀見するに、何すれぞ氣力衰弱し眠睡を多饒にし、飲食を喫せず身肯劣弱にして懈怠懶惰にして病に惱まされ、多く瞋恚を生じて色欲に耽著し、自らの觀處に於て非法の想を生じ、貪にして厭足なく常に疑心を懷き、已に微妙祕密の法を獲て順行せず、廣く餘呪を求めて互に相ひ是非を談說問答す。復是の言を作す、何人等の輩か持呪して驗を得、何の呪か能く成じ、誰か復願滿じ、何れの方、何れの地に誦持して驗を成ずるや。世尊よ、何すれぞ是の如きの人は時節を空度するや。次に復人有て苦しみて是の如きの呪法を學行せんことを求むるに暫時は精進して後退心を生じ、佛の淨戒を毀ちて僧の

【二六】五股杵なり。

【二七】俱胝(Koti)。億と譯す、無量を意味す。

を得ず。卽ち[一九]五體を地に投げて頂禮して大信心を發せ。我が所求の法は皆大神の威力の加被を承けん。其の呪を讀誦して心をして想を起さしめ、[二〇]南を向いて金剛羂索の印、或は佛頂の印を結び、卽ち大瞋怒心にて以て大金剛羂索の呪を默誦せよ。

[二一]唵一跋　折羅二跛引熱三訶唎二合引四

若し佛頂の印を結べば此の呪を誦せよ。

[二二]唵一揭揭那引二　麼羅三件尼呼四

向南して法事を想ひ已り、次に復西に想し、心に念じて金剛幡の印を結び瞋怒を以て呪を默誦し念言す。我れ今西方界の呪を結んで曰く、

[二三]唵一多楞央祇爾二合　羅　吒半音呼

次に北方を想し、金剛摧碎の印を結び、呪を誦し前に准じて念ず、

[二四]唵一呵唎二合跋折羅　迦引利　麼吒半音呼

次に東方を想ひ、金剛峯の印を結び、前に准じて之を誦して念言す。東方界の呪を結んで曰く、

[二五]唵一跋折囉二合　施佉唎　嚧麼吒半音呼

此の法を作し已り、卽ち四方界を成す、然も須く起坐して本呪を思念し呪神を延請すべし。手に香爐を執り燒香供養して想へ、我今、呼んで大威神の德に住せしむるに依て身を以て地に投じ禮拜して本呪を思念し、淨水を取て灑で身上に散じ、安坐して手を胸間に著け、默誦して珠を搯り、未困の間に疲倦せば任起して以て香花を取て供養せよ。門を出でんと欲する時は一心に呪を誦せ、若し散亂あらば其の時一切の毘那夜迦、鬼神等念を作して計を設け、其の呪師をして心を亂さしめ法を成ぜざらしめん、卽ち化作せる異色の花と異香を以て其の呪師をして心動かし愛樂せしめ、應に歡愛すべからず、呵して捨去し、心常に本呪神等を誦念し、行住坐臥廢忘することを得ざれ。世尊

【一九】五體。又五輪に作る。一、右膝、二、左膝、三、右手、四、左手、五、頭首なり。

【二〇】南に向ふは降伏の方なり。

【二一】Oṃ vajra paśe hriḥ.

【二二】Oṃ gaganāmara hūṃ.

【二三】Oṃ tallāṃ gni ratā..

【二四】Oṃ hri vajra kāli maṭā.

【二五】Oṃ vajra śikhari ru maṭa.

く遠離して方に勝處を求むべし。沙石・流泉・澗池の滋茂なるは方に停居して誦持するに可なり。外既に清淨にして內も亦貞明なり、貪欲を思ふ意は深く須く捨離すべく、諸の瞋恚に翻じて慈忍を習ひ、一切の煩惱は皆降伏せしめ、每日三時塔中に入り、或は空野の作法の處に於て、發露懺悔し、諸の功德に於て隨喜を發生し、無上正等菩提に廻向し、成佛を願ふ心は常に口を離れず、前夜後夜精進思惟して大乘微妙の經典を讀誦し、呪壇の法則を受持して廢忘せざらしめ、大忿金剛王等を念じて呪を誦し大歡躍を發して尊の形像を觀ずること目前に對ふが如く、心に修學を樂ひ至心に觀照して呪の文字を誦し、心眼をして無常・苦・空・無有堅實を見せしめ、[一七]五欲の境界に隨はず、氣息調柔にして傾側ならしむる勿れ、審に儀軌を作せ。若し行起を欲せば定を詳にして足を擧げ、誦呪の文・句・字・音・體相は皆分明ならしめよ。若し正に呪を誦する時[一八]謦欬ある者は忍ぶ可し、頭に到り半に到り、或は多或は少、若し其れ謦欬せば須く頭より複誦すべし。世尊よ、若し呪師等、能く是法に依て修行せば久しからずして大威の靈驗を得ん。所有る一切の毘那夜迦等は障を作す事能はず、皆悉く遠避す。若し呪師等誦呪の時、言音不正にして字體遺漏し、口乾きて澁を生じ常に謦欬を足し其の中間に呪音を斷續せしめ、身不清潔なれば當に爾の時卽ち毘那耶迦に便を得らるべく、諸の天の善神衞護をなさず。或は復大患疾災難に遇ひ、法は驗を成ぜず、是の如き非法は其の呪師等應に之を作さざるべし。唯一心を以て茅草上に結跏趺坐して至誠に誦呪し、內に慈悲を懷き志心に想念せよ、我れ一切衆生の爲に此の法事を作すと。一坐誦して身疲困せざるに至り、住し起ち行道し供養し讀經して世尊を讚禮し奉る。上の如く所說の一切の時中、皆悉く是の如くなるべし。爾の時、世尊、讚言したまはく、善い哉、善い哉、汝執金剛能く說くこと是の如し、呪を護持し讀誦せん者に其の所要の微妙の呪律を示せ。時に執金剛復是の言を作さく、我れ今本呪神王等に供ふる法を說かんと欲す。其の呪を持する人は先づ須く法に依て身を浴すべし。散亂にして本呪神等を思念する

【一七】色聲香味觸の五境に對する欲。

【一八】せきばらひ。

を自らの手に執持するを見、或は[九]師子の高座、自餘の座等に昇り、或は身首より出血するを見、若し此の如きの事相等の事を見ば當に我れ今能く此の法を成ずと知るべし。[一〇]或は夢中に於て若しは彩畫せる尊容、諸神の形像の凋落毀壞せるを見、或は父母の憂愁悲泣せるを見、或は[一一]裸形外道を見、或は自身衣なきを見、或は惡業の人[一二]旃陀羅等い索挽するを見、或は汚穢の處に行くを見、或は大水の涸竭するを見、或は食時度を失するを見、或は身分手足の垢穢にして臭氣あるを見、或は驚怖して惶走するを見、或は自ら頭髮を拔くを見、或は蛇蠍鼠狼等を見、或は坑に落ちて傷損するを見、若し是の如きの事相を見ば、當に彼の人此の呪法に於て大障難有て成ずることを得可きこと難きを知るべし。此の善男子等必らず愛樂受持して驗を成ぜんことを欲せば、勤めて精進を加へて散亂を得ざれ、疲怠の心を生ずる莫れ、一一時中誦持して廢闕することを得ざれ、常に慈心を懷いて[一三]色欲を遠離し淨行を修習し、洗浴し清潔にし調和柔軟にして、善く方法を學び須く呪壇に入り大果を求めんが爲に邪言と一切の戲論等の語を斷ずべし。孤弱貧窮老少を憐愍し、資助愛念すること猶ほ赤子の如く、衣食量を知り同行知識互に相勸發し、三寶の處に於て深く敬信を生じて正法を聽聞すること、渴して漿を思ふが如く、恒に智慧を求めて善友を聽察せよ。其の所誦の壇法は則ち皆須く[一四]毘那夜迦の障難を起す相と辟除の方法を明解すべく、亦須く善く學するに火の供養法及び非人に食を獻ずる法と迎喚、發遣の諸の手印呪法等を以てすべし。又復須く居住の地を知るべし、或は山間にして水の壇岸、或は好花の園林の本より枯乾せざる處、或は一獨大樹の下、或は佛舍利塔の中、或は清淨なる僧伽藍の內、皆悉く住すること を得。若しは賊難・婬女・寡婦・旃陀羅・惡獸・毒蛇を有する處、及び[一五]皮鞾を作る家、屠兒魁膾の家、駝・驢・猪・狗・雞・鷹を養ひ遊獵する家、亦[一六]塚間・醫師・外道の家に近からず、是の如き等の處は呪を誦持する者は悉く住すべからず。復應に所住の處、水に蟲蟻無きを觀ずべし。飄落せる屍、糞穢の物、青崖惡鬼はまた住するに堪へず。須

【九】師子は獅子に同じ。
【一〇】以下十七の惡相を說く。
【一一】裸行を以て正行となすもの。
【一二】旃陀羅(Candāla)。四姓の外にあつて屠剎を業とするもの。
【一三】色欲は青黃赤白等の顯色又は男女の形式等に愛著する欲情なり。
【一四】毘那夜迦(Vināyaka)。常隨魔、障礙神と譯す。人身象鼻にして常に人に追隨し障難をなす惡鬼神なり。大日經にはこの障は皆忘想心より生ずと說く。
【一五】鞾は靴なり。こゝに革細工をする家を云ふ。
【一六】塚間は墓地なり。

佛說毘奈耶經

爾の時、佛〔一〕王舍城鷲峯山に在ましたまひ無量の菩薩及び持呪仙〔二〕大賢梵王、地神等と倶に〔三〕呪法を說きたまふ。時に〔四〕執金剛座より起ちて佛足を頂禮して是の言を作さく。我れ今持呪の律法を樂說す。復願はくは世尊諸の大賢等各其の要を說き、一切の呪を誦持する輩に示現したまへと。復是の言を作さく、唯願はくは我が所說を聽きたまへと。佛、執金剛に告げて曰はく、汝大威德あり內に慈悲を蘊みて能く此の言を發し妙法を樂說す、必らず大利益あらん。汝の所說を聽いて我等衆會は皆汝が所說の法に隨はん。時に執金剛の言く、世尊よ、若し善男女人有て呪法を誦して驗を成ぜんと樂欲せば、此の人は第一に必らず須く受持する所の呪を精進すべし、須く佛塔、尊像及び〔五〕本呪神を供養するを知るべし。然も其の力分に隨て恒に供養をなし〔六〕隔斷の心なく、三寶の前に於て發露懺悔し期を要して願を乞ひ、此の功德を以て一切有情に迴向して願くは苦を離れしめむと。此の語を發し已て手を洗ひ合掌し、尊像の前に於て茅草の上に踋跪して坐し口言すらく、唯願くは十方の諸佛、菩薩、持呪神等哀愍して我を念へ、某甲、今欲樂す、其の呪法神其の靈驗を成ずる所を。若し我れ此に於て能く法を成ずれば、願はくば成相を見、若し成ずる能はずんば、復不成の相を見せしめ給へと。此の願を作し已て所成法の中、或は根本呪、或は〔七〕心等を百八遍念誦し、〔八〕卽ち座上に於て便ち眠寐を取れ、夢中に若しは佛法僧善友父母を供養し、或は身に淨白衣を著けて身首を莊飾するを見、或は河海・大山・樓閣・殿堂を見、或は諸人に繒綵を與へ又象馬牛等に乘るを見、或は刀鉾・鉞斧・弓箭・銅輪・鉤索を得、或は他に白淨衣服花鬘瓔珞を授與するを見、或は國王・大臣・長者と共に善言を談說するを見、或は端嚴の女人手に幢蓋花瓶を持するを見、或は戟叉

〔一〕王舍城(Rājagṛha)。鷲峯山は靈鷲山とも云ふ。
〔二〕大賢の二字は或は持呪仙に屬し、或は下の句に屬せしむるの二義あり。古來未だ決せざれども持呪仙は持明仙の事にして世間の仙にあらざるを以て、大賢は菩薩及び持呪仙に懸くるが可なり。
〔三〕呪(Dhāraṇī)。陀羅尼なり、持、總持と譯す。善法を持して散ぜざらしめず。惡法を持して起らざらしむる力用に名づく。呪陀羅尼は陀羅尼の中の特に佛菩薩の禪定より發する密語を云ふ。
〔四〕執金剛(Vajrapāṇi)。執金剛神又は金剛手とも云ふ金剛薩埵のことなり。
〔五〕本尊なり。
〔六〕隔斷の心とは、退菩提心の義なり。こゝに於ては供養、承事、誦呪、法則日々增減斷絕することなく修すべき事なり。
〔七〕心は心呪なり。
〔八〕以下三十三の好相を說く。

不行の法、誦時等を佛に問ふ。佛時に身口意及水食の四淨行を說き次で四淨行を修する次第を示し以て本尊供養の次第を說き給ふ。尙ほ地神夢想による法驗善惡判斷の相を問ふに佛は善惡の種々相を示し進んでその治法を示し最後に作壇の法を說き給ふ。

以上本經の概要であるが、要するに佛を中心として執金剛、觀自在菩薩、梵天、堅牢地神の對話の形式により一般祕密修法の要件及び作法を示せるものなり。

昭和六年一月五日

譯者　坪井德光　識

佛說毘奈耶經解題

本經は唐代失譯、請來は傳教大師將來越州錄及弘法大師御請來目錄に各毘那耶經一卷とあり、天台宗圓仁の入唐新求聖教目錄には毘那耶律藏經一卷とある。傳教大師の目錄に毘那耶を毘奈耶とするが三者いづれも同本異名であつて別譯ではないらしい。內容類似の經典は蘇悉地羯囉經三卷、唐輸波迦羅譯、蘇悉地羯羅供養法三卷、唐善無畏譯、蘇婆呼童子請問經三卷、唐輸波迦羅譯、瞿醯經三卷、唐不空譯等があり、いづれも密教修法成就の作法を說けるものである。

毘奈耶の意味は諸儀軌禀承錄第一には六根を調伏して惡を作さしめず、行事を謹んで放逸ならず之を毘奈耶と云ふとある。然る時に毘奈耶は律で顯教に云ふ律と異ることとなし、然し本經は中に祕密の印明あり祕密修法上の律なるが故に顯教に云ふ毘奈耶とは內容に於て同一にあらず。

本經は王舍城鷲峯山に於て佛と執金剛との對話の形により始まつてゐる。先づ執金剛呪法を誦してその功德を得んと欲する者は精進、發露懺悔し發願すべきを說き、次で功德獲得成否の夢相判斷を示し、成就を願ふ者の應行の法及び應住の地、日々の勤行、觀法、眞言の誦法を說き、佛は此等に關し各認許を與へられてゐる。又執金剛本尊供養の次第を說く、即ち垢身を洗浴し、心を散亂せしめず、五體投地以て本尊を頂禮し、四方結界をなし、本尊勸請、燒香供養、灑水、散念珠以て本尊を供養思念し、たとひ座を立つと雖も一心に呪を誦して心を散亂せしめず、かくせば惡魔障礙することなく所願成就するを得んと。

時に觀自在菩薩身命を愛護し法驗を成就せんと欲する者の應行の諸法を說き、三寶の常住實相であり、有爲の無常、苦空無我なるを念じ、大乘妙典の轉讀、塔像造立供養等を示してゐる。

次に梵天出で微妙祕密の法に順行せず餘行を修して苦惱せる人の相を說き、此等の濟度を佛に乞ふ。佛爲に說き給ふ。かゝる人は微妙祕密の法、呪法、壇法を明解せざるによる者である、故に金剛奮迅、利吒横羅等の毘那夜迦即ち惡魔ありこれにより種々の障難をなし、種々の苦惱を現前するのである。此等は凡て祕法に對して明解なく、時節を知らず、修法如法ならず、又福田を敬し供養せず、輕慢にして正法を誹謗する等によるものとし、各此等に就いて治法を說き給ふ。

時に堅牢地神出で身心護淨、經行、行

目次

密教部 二

坪井德光
岡田契昌
富田斅純
神林隆淨
譯

國譯一切經

大東出版社藏版